
どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語

マーボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語

【Nコード】

N60110

【作者名】

マーボー

【あらすじ】

目が覚めたら目の前に神がいた。「あなたには転生してもらいます。場所は選ばせてあげる」死んだ宣言を受けたオレ……。
転生先は大好きな作品の「リリカルなのは」だ。チートな能力を沢山もらい、いざ第二の人せ「死んだ後は、某死後の世界に行つて戦線に入るかと思つていたけど、違ったなあ。」
いざ第二の人生へ!! (汗)

プロローグ（前書き）

駄文ですが、それでも大丈夫だという心が広い方だけお願いします。

それでは『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』
始まります！！

プロローグ

何も無い空間……気がついたらそこで寝ていた。

「あれ？なんでこんなところに？？」

もう一度、周りを見渡してみる。

「たしか、なのはのマンガを買って家に向かっていたはずなんだけど……。」

オレの記憶はそこで途絶えていた。

「あなたは男の子を助けたんですよ。」

「うわっ！」

思案していて気づかなかったのか、いつのまにか目の前に一人の女性立っていた。

「あの〜、あなたは？それに助けたって？」

「ショックで記憶がとんだのね。これを見なさい。」

パチン！

女の人が指をならすと、何も無い空間からディスプレイが表れた。そしてその中には、なのはのマンガを買ってダッシュしているオレ

がいた。

~~~~~

「早く帰って読みてえな。『なのは』神すぎるだろ！」

一秒でも早く読みたくてダッシュしているオレ。立ち読み?!あんなの邪道だろ!!作者に失礼だ!!

やっぱり、買って読まないとね。

ダッシュしていると一人の男の子が道路の真ん中で転んでいるのが見えた。

危ないな。でも、大抵こういう時って……。

道路の先を見てみると一台のトラックが男の子に向かって走ってきていた。

「危ない!!!」

オレはマンガを捨て、転んでいた男の子をかかえ投げ飛ばした。

~~~~~

「あゝ思い出した！！え？ってことは何？？オレ死んだ……？」

「はい。あなたは男の子を助けてあのような状態になりました。」

女の人が指をさした先にはトラックにひかれ、ぐちゃぐちゃになっているオレがいた……

「そっかぁ……それで？助けたってことは、男の子は無事なんだな？」

「ええ、あなたのおかげだね。あの子は助かったわ。」

「それなら満足かな。最後に、イイコトができたみたいだし。」

「そのことなんだけど、あなたはイイコトをしたわ。なので、あなたには第二の人生をプレゼントする

ことが決定しました！」

「はい？」

何この急展開……オレが呆気にとられている間も女の人の話は続く。

つか、「あのさ」

「てなわけで……ってなにかしら？」

「あなたの名前を聞いてないんですけど……」

「私？私はアテネよ。天道劉ちゃん。」

「劉ちゃんって……なんでオレの名前を知ってるの？」

「それは、私が神様だからよ！」

「やっぱりそうなのか。じゃあ、俺が死んだっていうことは、この空間は死後の世界？」

「ん〜。まあ、だいたい合っているかなあ。」

「だいたい？」

「ここは死後の世界っていうより、神界って言ったほうが正解かな。」

「神界……神の世界か。」

「そう。それがどうしたの？」

「いや〜。死後の世界だったら戦線に入らされて、どこかの生徒会会長とかと戦うはめになるかと。」

「コラコラ。そんなことはないから。それに、転生させるって言うたでしょ。」（汗）

「そっか。そうだったね。」

「で、転生についてなんだけど特典がつくわ。」

「特典？」

特典ってなんだ？

プロローグ（後書き）

マ「どうも、作者のマーボーです。」

劉「主人公の天道劉です。」

マ「とうとう、やってしまったな」

劉「ホントだよな。こんな駄文をよく載せる気になったよ。ある意味、勇者だね！」

マ「そこまで言わなくても…」（汗）

劉「だって、ホントの事じゃん。だいたいさあ…」

マ「まったく、うるさいな。そんなに文句言うなら本編でどうなっても知らないからな！」

劉「え、！？」

マ「ハイ！もう決定！」

劉「いや、ちょっとまって！！」

マ「待つ気ありません！さして、どうしようかな」

劉「くそ〜！読者の皆様、こんなグダグダの駄文ですが、どうか最後まで読んでやってください！お願いします！！！」

マ「次回にはプロローグも終わりますので、そしたら本編です！」

劉「オレの紹介もあるんでしょ？」

マ「ああ、そうだった。忘れてたよ。」（笑

劉「ふう、まったく」

マ「ではでは、」

マ・劉「これからヨロシクお願いします…！」

プロローグ2(前書き)

ではプロローグ2はじまります！

プロローグ2

「そうよ。転生先……つまり、あなたの第二の人生先を選ぶわ。」

「え？そうなの？」

「しかも、アニメやゲームの世界もありよ。ほとんどの人がその世界を選ぶわね。」

「マジかよ！？じゃあ……」

「あなたの好きな『なのは』の世界にも行けるわよ！」

「キター……！！……」

「さらに、希少能力 レアスキル や魔力ランクもいじってあげられるし。」

「チートもキター……！！……！！」

「で、どうするの？」

「もちろん！『なのは』の世界を選ぶよ……」

「能力とかは？」

「ん〜とね〜……」

オレはしばらく考えた。どうせなら、チートな内容にしたいからね。

「よし！決まったよ！自分にマイナスになること以外は全部EXラックってことで、それと魔力変換もほしいな。変換内容は使う時に決めれるように。」

「さっそくチート内容が多いわね。」

「まだあるぞ。全てのマンガ、ラノベ、アニメ、ゲームに出てくる知識や魔法、武器に技を使えるようにしてくれる？」

「うん。全然できるよ！」

「あとは、因果を操れるようにしたいんだけど。」

「因果ね……。……じゃあ、魔法解析能力をあげるから自分でほしいと思った魔法を創ってみたら？」

「いいなそれ！ありがとう！！」

「でも、かなりな内容になったけど……。アカシックレコードを使えばいいんじゃないの？」

「オレもそれは考えたんだけど、あれってたしか脳に負担をかけるだろう？」

「ああ、確かにそうね。デバイスや容姿は考えた？」

「容姿はアテネにまかせる。デバイスはインテリジェント二つに、ユニゾン一つね。」

「わかったわ。デバイスの形態とかは？」

「一つがグローブ型。こいつは主にバリアジャケットの展開に魔力変換の補助。もう一つは、三段階の形態でファーストが剣、セカンドがツインガン、サードが槍の武器特化型。両方ともAIはしっかりとつけてほしいな。ユニゾンは魔力運用の特化を中心にさせて、詠唱速度や術式発動を効率よくするために。以上かな。」

「りよ〜か〜い！それでは！」

アテネがオレの頭を手をかざすとぶつぶつと小さな声で呪文のような物をつぶやき始める。

「はい、完了！」

「はやっ!?!？」

「これで転生の準備はできたけど、どうする?。」

「そついえば記憶は?。」

「そのまま引き継ぐこともできるけど……、なくした方がいい?。」

「いや、消さなくて大丈夫」

「ああ。あと原作ブレイクもアリだから。」

「ま、オレはするなって言われても最初から介入するつもりだったけどね。」

プロローグ2（後書き）

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

マ「いや〜、やっと終わった〜。」

劉「なんで、態々二つに分けたの？」

マ「それがさあ、家には二台のPCがあるんだよ。一つはオレの部屋に。もう一つは、家族共有だからリビングに。」

劉「なるほど。自分の部屋にあるPCの方はネット接続してないから、投稿できないと。」

マ「オレのセリフとるなよ……」（汗）

劉「で、結局なんで二つに分けたの？」

マ「妹にPCを代わるように言われた……。」

劉「妹より立場低いのかよ!？」

マ「しょうがないだろ!？あいつが卑怯なんだから!すぐに親に言いつけるし!！」

劉「お前の家族内の立場って……」（哀）

マ「これだからリアル妹は……」

劉「よく妹がいる人は妹キャラが嫌いな人がいるけど、おまえはそれだな。」

マ「バカか！？妹がいるから、理想の妹を求めるんだろ！！お前は何にも分かってないな！！」

劉「いや、分かりたくないんだが……」

マ「ちなみに、一番好きな妹キャラは『あかね色に染まる坂』の湊だ！……」

劉「この前塾の先生に湊はないって言われて口論になっていたな。」

マ「男には戦わなければならぬ時があるんだよ。」

劉「はあ。こんな哀れな作者の作品でよければ今後も読んでやってください。」

マ「お願いします！！」

劉「今回はオレの説明かあ。容姿はアテネにまかせたからな。」

マ「さして、どうなっているんだろうね」「ニヤニヤ

劉「何笑っているんだよ！？」

マ「さしてね」。では！」「ダッシュ

第1話：笑顔が一番！！（前書き）

先に1話を投稿しようと思います！

プロフィールは次回！

第1話：笑顔が一番！！

「先生！赤ちゃんが泣きません！！」

「なに？！早く背中を叩くんだ！」

ん……誰の声だ？？せっかく気持ちよく寝ていたのに

パン！

パン！

「おぎゃ〜！！」(いたっ！誰だよ急に背中を叩くのは……っつて、あれ？言葉が発せない？！)

「先生！赤ちゃんが泣き始めました！」

「ああ！もう安心だ。」

(え？赤ちゃん？？マジで……？オレ……赤ちゃん??！)

「おぎやあああああ……!」 (嘘だあああああ……!)

~~~~~

どうも！天道劉です。名前はアテネに頼んだので変わっていません。  
早いな……。あれから、もう三年がたった。え？とばすな？いや、  
意識がある中での赤ちゃん生活って……恥ずかしすぎて軽く死ねる  
よ？なので、その辺は察してください！！  
いや、しかし赤ちゃんの間はヒマだったな。アテネと念話して

たけど、ずっとしてたわけじゃないし。そうそう、デバイスはおれが五歳くらいになったら届けに来てくれるとのことだ。

「なぜ五歳？」

そう聞いたらアテネが一瞬、間をあけて「……っ、今はまだその時じゃないわ」と言っていた。

まあ、アテネが言うんだから間違いはないだろう。デバイス達がなくても小さい魔法ぐらいなら使えるらしい。これは助かる。そして喫茶翠屋とはなんと五分も歩けば着くという距離。いわゆる近所なんだが、その事を知ったときは驚いた。

まさか、こんなに近いとは……。ご都合主義というやつか。で、今家には父さん、母さん、オレの三人暮らしだ。父さんと土郎さんは小学校からの幼馴染らしく、仲がいい。母さんは翠屋で働かせてもらっている。もちろん、こちらも桃子さんと仲がいい。

それと、この物語の主人公、なのはとも会った。何、あの笑顔可愛すぎ！もうね、あの笑顔は説明できないよ。癒されるわ。

でも……………

そんな笑顔を持っているのはだが、最近笑わなくなった……。理由はわかっている。土郎さんが入院してしまったからだ。なのはは皆に迷惑をかけまいと、何でも溜め込むようになっていた。

「どうにかしなきゃな。アテネには魔法許可が下りてるから、早く治しにいきたいんだけど……。タイミングが難しい。」

いきなり治ったら怪しまれるだろうしな。オレがそんな事考えながら歩いていると、公園の方から泣き声が聞こえた。

「1」の声……なののか?!」

オレはいそいで泣き声が聞こえる公園に向かった。

劉 side out

なのはside

はじめまして、高町なのはです。

私は今一人で公園にいます。なんで一人かというと、お父さんがケガをして入院していて家の中がギスギスしているからです。お母さんとお兄ちゃんはずっとお店に行っていて、お姉ちゃんはお父さんの所に行っていて、皆忙しそうにしているから……私は皆に迷惑をかけないようにしなくちゃいけません。

それでも、少し話しかけただけで「なのはは向こうに行つてなさい」って……。

ブランコに乗りながら皆のことを考えていると、涙が出てきました。

「皆、なのはの事が嫌いになったのかな?。」

なのはside out

劉side

公園に着くと、

「やっぱりか。」

そこには、いつもの笑顔ではなく、顔をくちやくちやし泣いているのがいた。

「うう〜、グスッ、劉……ちゃん……？」

「いや、劉【ちゃん】じゃなくて、劉【君】だろ？なのは」

オレはため息つきながら言うと、

「そんな事いうと、劉ちゃんのお母さんに言っちゃダメ？」



そうなのだ。母さんは自分の事を【オレ】とは言わずに【ボク】、  
又は【私】、さらに皆には【ちゃん】付けで呼ぶように言っている。  
なぜか……………。

それは…………オレの見た目が、まんま女の子だからだ。黒、というよ  
り紺っぽいストレートな髪は今は背中まで伸びている。切りたいと  
言ったら即却下された…………。さらに身長もなのはより少し小さく、  
服装も女の子用の服ばかり着せられている…………。母さん…オレ  
は男の娘…………じゃない男の子だよ？

父さんかというと、無理やりスカートを履かされ、さすがにシヨッ  
クで泣きながら助けを求めた時に、

「ハアハア、かわいいよ！今日から息子じゃなくて娘だ！！」と言  
いながら抱きついてきた。

父さん…………。最後の髻が落ちた今、オレに味方はいない…………。だか  
ら、心の中では【オレ】と言っているにも、皆には【ボク】を通して  
いる。【ボク】ならまだいいけど、【ちゃん】付けはな〜。

「…………ちゃん…、劉ちゃん！」

「え!？」

「もう、急に黙ってどうしたの？」と首を傾けながら聞いてくるな  
のは。

かわいいなあ。つと今はそうではなく、

「なのはこそなんで、こんな所で泣いているんだよ？」

「ふえ！？な…泣いてないもん。」

「いや……さすがにそれは…きついと思うよ…？」

「うう〜」

泣いている理由は分かっているからな。

「なのは！」

「ふえ？」

オレはなのはを優しく抱きながら

「誰も、なのはの事は嫌いじゃないよ。今はただ、皆少しだけ忙しいだけだから。だから、そんなに溜め込まずに、素直に自分の気持ちを言っごらん？」と問いかける。

すると、

「劉ちゃん…うう〜グスツ…う…うえ〜ん！私…寂しかったよ〜！！！」

と泣き崩れてしまった。

しばらくして泣き止み、

「グスツ、もう大丈夫なの。ありがとう、劉ちゃん。それでね……  
あの、少し恥ずかしいかな……?」

「あ!ごめん!」

いそいでなのはから離れて謝ると、

「べ、別に嫌じゃなかったんだよ? / / / / むしろ、うれしいとい  
うか? …… その…… / / / / 」

なんか顔を赤くしながらごにょごにょ言っているのは。

大丈夫か?

マ「劉は鈍感です!」

今、変な声が聞こえたけど……空耳だろ。

「なのは、明日士郎さんの所にいつか?」

「ふえ? ……でも」

もう、タイミングとか言ってもらえない。このままじゃ、なのはが壊  
れてしまう。

「母さんが言ってたよ？皆でお見舞いに行けば、ケガも早く治るって。」

「ホント？」

「うん。だから行く？」

「うん！」

やっと笑ってくれた。

やっぱり、笑顔のほづが可愛いよ。

「さ、帰ろっか？」

「うん！帰ろうなの……！」

オレはなのはと手をつなぎながら、翠屋に向かった。

「「劉ちゃん……！！！！」」

翠屋に着くと、母さんと桃子さんに見つかって抱きかかえられ頬擦

りされた／＼／＼／

「ちよっ！母さんと桃子さん！恥ずかしいからやめてよ／＼／＼／  
」

顔を赤くしながら言ったのが逆効果だったのか、

「「かわいいわ〜！！」「と余計に頬擦りされた……。」

横ではなのはが「私もしたいの！」と機嫌を悪くしていた。

第1話：笑顔が一番！！（後書き）

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

マ「男の娘」（笑）

劉「おまえがそうしたんだろ！？」

マ「ちがうもん！アテネがやったんだもん！オレじゃないもん！！！」

劉「クウウウウ！！！！！」

マ「ほらほら、機嫌直して？…劉ちゃん？」（笑）

劉「うがああああ！！！！！！！」

マ「と、劉も壊れたので今日はこの辺で！次回は今度こそ、プロフ  
イールを！」

劉「納得できねええ！！！」

マ「では、今後もヨロシクお願いします！！ではでは！！！！！！！」

**主人公紹介でっす！（前書き）**

劉のプロフィールです。

デバイスたちの説明は登場してから載せます。

## 主人公紹介でっす！

名前：天道・劉てんとう・りゅう

性別：男の娘

身長：なのは達より小さい（s t s 時までには大きくなる予定。）

体重：なのは達より軽い（こちらは変わらず、なのは達より軽いまま。）

容姿：髪は紺つばいストレート。今は背中まで伸びている。顔は童顔で恥ずかしい事があるとすぐ赤くなる。そのため女の子と間違われることが多い。

好き：家族、友達（アテネを含む）、魔法開発、家事全般（特に料理が一番得意）

嫌い：家族や友達が傷つく事、告白してくる男子

特技：料理、フラグメーカー（無自覚）

能力：1、全てのマンガ、ラノベ、アニメ、ゲームの知識保有、武器所持、魔法・技の発動。

2、無限魔力変換資質（使う時に決められる）

3、自分にマイナスになる事以外はEX。（EXと言っても計測不能なだけであって限界がある）



4、解析&創造（あらゆるものを解析し、自分オリジナルに構築できる。構築したものは解析元より強化される。劉はこの解析&創造で因果を操れる魔法を創ろうとしている。）

性格：普段はやさしく、おとなしい。人に頼まれた事はあまり断れない。（限度はあるが）

怒ると周りが見えなくなり手がつけられない…が、怒る事は滅多にない。

主人公紹介でっす！（後書き）

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「……主人公の劉です。」

マ「今回は劉の紹介と言う事で容姿を決めた張本人！アテネに来てもらいました〜！！」

ア「どうも〜！劉ちゃんを自分好みにしてみたアテネです〜！！」

マ「アテネはテンション高いね〜！！……それに比べ、劉！お前のテンションはなんだ！？主人公だろ！？もっと、テンション上げるや、ごらあぁ〜！！」

劉「いやだってさ……なぜ、見た目女の子……？」

ア「だ〜か〜ら〜！私好みにしたって言ったじゃん！」

マ「しかも。女の子ではない！男の娘だ！」

劉「そもそもおかしいよね？！性別の所！男でいいじゃん！」

マ「いや、それじゃあ」

ア「ね〜？」

劉「何なんだ、お前ら二人は！ハア〜もうやだ……。あと、嫌いの覧……」。告白してくる男って?！」

マ「ま、後々出てくるかもしれん…という話。本気にすんなって。」

劉「……ならいいよ…」

ア「だいたい、そんなに嫌だったら自分で決めればよかつたじゃん。」

マ「アテネにまかせた分際でさあ。文句言いきだよなあ」

劉「アテネだったら普通の男にするとお思ったんだよ…。わかつた！もう、文句は言わないよ…。」

ア「それでこそ、劉ちゃん！可愛いわ！！」

劉「帰らせてもらいます」

マ「ありやりや、拗ねて帰ったよ…。子供だな。」

ア「じゃ、そろそろお開きね。これからも『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』ヨロシクお願いします！！！」

マ「誤字脱字等があつた場合は感想ください！」

ア「この作者は才能皆無の高3お先真つ暗のダメ人間なんで、アドバース等してくれるとすごくうれしいです」

マ「そ…そこまで…。」（泣

ア「ホントのことでしょう？では、次回もヨロシク〜！」



**第2話：オレは男、…男です！ 大事な事なんで二度（ry）（前書き）**

二話目更新です！

あと、二・三話で無印に入れるかもです！

（スピード遅いなあ）

なので、もっしばらくお付き合いください！

第2話：オレは男、…男です！ 大事な事なんで二度（ry

あの後、なのはは桃子さん、恭也さん、美由希さんに自分の気持ち  
を素直に話し、皆と和解した。

原作だと恭也さんは荒れているはずなのにな。これって、原作が  
変わってきているのか？

…翌日…

今日はなのはと一緒に病院に行く日……だが、今オレはスカートを  
履いて翠屋へ向かっている。なぜって？理由は簡単。母さんと父さ  
んの前で自分の事を【オレ】と言ってしまった……。

（こんな罰は聞いた事ないよ…）

道行く人にオレが男だってバレないか怯えながら翠屋に着くと、そ  
こにはすでに母さんから連絡が来ていたのか、カメラを持っていた  
桃子さんに出迎えられた。

「いらっしやい！劉ちゃん！」（ニコッ）

今は桃子さんの笑顔が怖いです……。

「なのはは今お着替えしているから、シュークリーム食べて待つて  
ね〜！」

「わあ！ありがとうございます！」

訂正、桃子さんはやっぱり怖くない。いつも優しい人だ。  
高町家のリビングに通されると高町家の長男・女コンビの恭也さんと美由希さんがいた。

「いらしゃい、劉ちゃん！」

「よく来たな、劉。」

「恭也さん、美由希さんお邪魔します。」

オレは二人に挨拶してイスに座る。しばらくすると、桃子さんがシユークリームを運んできてくれた。

「はいどうぞ！」

「いただきます！」

オレは早速シユークリームを頬張った。

（うん！やっぱり翠屋の看板メニューなだけのことはある。うまい！）

「おいし〜い〜。」

オレが食べ終わってテーブルに垂れていると、桃子さんが鼻血を出して奥の方に行ってしまった。

どうしたんだろ？

そんなことを考えていると、恭也さんが変な事を聞いてきた。

「そついえば劉、この前公園で一緒にいた男の子は彼氏か？だった  
ら、劉にはまだ早いぞー!!」

「何言っちゃってんの!? あの子は近所の友達だから! あと、オレ  
は男だから! 彼氏なんて作らないからね?! ……って……」

言った瞬間、しまったあと思ったが遅かったようだ。

「劉ちゃん?」(ニコッ)

笑顔の桃子さんと片手に電話。

無言で電話を渡され、受話器に耳を傾けると、

「劉ちゃん? 今日自分のことは【私】と言うのよ?」

母さんからだった……。今日一日オレ……。じゃなくて私で過ごす事  
になった。

やばい、なんか目から汗が……。

「じゃ、俺のことはお兄ちゃんと呼ぶように。」

「あたしはお姉ちゃんで!」

恭也さんと美由希さんがのってきた。

私は涙目の状態で「お兄ちゃん……。お姉ちゃん……。」と言った。

(これで満足してくれるかな?)

なんて考えてたが間違이었다……。

「劉! 可愛すぎるぞー!! うおおおおおお! ……!!」  
お兄ちゃんが壊れた。



「お母さん！カメラ！……もう遅いなあ！お母さんに足りないもの、それは！情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！そして何よりも！速さが足りない！」  
お姉ちゃんも壊れた。

この騒動は、なのはが来るまで続いた。

なのはが来てくれるまで私はずっと写真やら動画やら撮られていた……。

「うう〜ひどい目にあつたよ……」

「にははは。で、でも劉ちゃん可愛いの／＼／」

「あのね、なのは。私は男の子だよ？可愛いって言われてもうれしくないよ。」

「でも、そのしゃべり方だと女の子みたいだよ？」

「じゅう。」

何も言い返せないよう。

話しながら歩いていくと、すぐに病院に着いた。

土郎さんの病室まで行き、一応ノックして入る。

中では、土郎さんはまだ寝ている状態だった。

なのははその状態の土郎さんを見ると泣きそうになっていた。

「ほら、なのは。」

「でも、なんて言ったらいいかわからないなの……」

「なのはが今、土郎さんに伝えたいことを言えばいいと思うよ?」

「うん……。お父さん、早くよくなってね?」

なのはは涙目になりながら、土郎さんに自分の思いを伝えた。

「この言葉しか言いたいことが見つからないなの……」

「充分だよ、なのは。さ、あまり居すぎるともアレだから。今日はそろそろ帰ろっ?」

「うん。」

オレはなのはと一緒に病室をあとにした。

「劉ちゃん、今日はありがとうなの!」

「これでよくなると思うよ!」

「うん!」

今日はこれでなのはと別れ、私……いや、オレは病室に戻る。

ノックをして入り、土郎さんの前でどの回復魔法を使うか悩んでいる。

ケガ……だから、サイフォジオとかヒール、リザレクションでもいいのかな?

「よし! かのものをいやす彼の者を癒せリザレクション!」

室内に青い光が広がり、その光が土郎さんの体の中に入っていく。

「……ん……?ここは?……劉ちゃん?」

土郎さんが目を覚まし、オレに気づく。

「こんにちわ、お体は大丈夫ですか?」

「ああ。私はだいぶ眠っていたみたいだが……これは、劉ちゃんか?」

「えっと…その…、話せる時があったら話すので…その」

「ハハ、大丈夫だよ。むしろ、ありがとね。劉ちゃん。あとスカート姿可愛いよ?」

「うう。私は男ですから…。／／／／」

「それじゃ、説得力ないよ」

「なのはにも言われました…。」

オレは少し士郎さんと話をして家に帰った。

夜、父さんに見つかり抱きつかれ、スカート姿のまま寝る事になった。



ア「そ、そんな… p s pを…なくした？」

劉「おい！なんでおまえ、生きていられるんだよ！？ましてや、執筆なんてできる状態じゃないだろ！！？」

マ「現実逃避しようと思ってさ。でも、ムリみたいだ…。DC？がPSPで出たから後でやろうと思ってとっといたのに…。一回もプレイすることなく…俺の手元から消えるなんて…。しかも、なのはUMDまでも一緒に…。」

ア「ありゃ〜。それはショックね〜」

劉「たしかにね。」

マ「こうなりや、『STEINS ; GATE』の true end  
3周目してくるよ。俺の中では神ゲーなんだ。じゃあな！」

劉「行っちゃった。まあ、今回ぐらいはそっとしておこつよ。」

ア「そうね、では次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』もお楽しみにね！」

劉「感想をくれると作者も回復すると思います！」

ア「お願いします！ではでは〜」

第3話・ついにキタ！オレの誕生日！！この意味がわかるかな？（前書き）

今回はとても短いです！

ホントにすいません！！



### 第3話：ついにキタ！オレの誕生日！！この意味がわかるかな？

こんにちわ。天道劉です。朝、目が覚めるとアテネから念話が届きました。内容はデバイスについて。

そう、オレは今日で五歳になった。五歳になったらデバイスたちを渡すとアテネに言われてからこの日が来るのが待ち遠しかったな。一人で魔法の修行をしていたけど、デバイスたちが来れば修行内容は大幅に広がるだろう。

そうそう、オレの誕生日という事で母さんと父さん + 高町家で誕生日パーティーを開いてくれるとのことだ。場所はオレの家。だから、今は母さんと桃子さんがすごい勢いで料理を作っているらしい。らしいとは、家を追い出され中だからだ。オレはこの間にデバイスを受け取るためにアテネに念話で確認をとり、公園に向かっていた。

「まだ来ていないな」

しばらく、ブランコをこいで待っているとアテネが姿を現した。

「久しぶり」

「ええ、久しぶりね。あ、誕生日おめでとう！」

「うん。ありがとう！」

人に祝ってもらえるってことはうれしい事だと思っ。

「これ、約束のデバイスたちね。」

そういつて渡されたデバイスたち。インテリジェントが二体にユニゾンが一体。

「名前は決めてあるかしら？」

「うん。もう二年前からね〜！」

オレは三体のデバイスたちそれぞれに名前と呼んだ。

「グローブ型はインフィニティ・ゼロね。」

『わかった』

「剣型はクリスティーナ。」

『いい名前ね！』

「最後にユニゾンのお前はフィオネだ」

「フィオネ…うん！気に入ったわ！！ありがとうマスター！！」

うん。気に入ってもらえたようだ。でも、

「え〜と、みんなオレのことはマスターじゃなくて、劉でいいよ。」

『劉でいいのね。』

『劉か、わかった。これからはそう呼ばせてもらおう。』

ゼロ（インフィニティ・ゼロの愛称）とクリス（クリスティーナの

愛称)は了解してくれたけど、フィオネの言葉でオレの時間が止まった……。

「じゃあ、劉ちゃんって呼ぶわね！」

ああ、わかってたよ……。最近、近所の男の子にも告白されたし、自分でもそう見えるんじゃないかって思ってたけど、まさか……。まさかデバイスにも間違われるなんて……。泣いていいかな？orz  
オレがひざを抱えて泣いているとアテネが、

「みんな、劉ちゃんは男の娘よ？」

と説明していた。つか、アテネさん？あなたいつのまに【ちゃん】付けで呼ぶようになったんだ？たしか、転生する時は【君】付けだったような気がするんだが……。それと、男の子の子の字がちがうから……。

そんな事を思っていると、フィオネがアウトフレームになり、抱きつきながら

「ええ！？男の娘？？こんなに可愛いのに!？」

と、驚いていた。だから、漢字がちがう！

それとアウトフレームで抱きつかないで！その、あたっているから！  
！  
！  
！

皆に必死で説明中

『ほう、劉は男だったか』

『そうね、普通に女の子だと思ってたわ。でも、可愛いから私も劉ちゃんって呼ぶわね。』

クリスたちもオレを女の子だと思っていたか……。

オレたちはしばらく、その場で話していた。

「……………」

ん？アテネが元気なさそうだな、どうしたんだろ？

「アテネ？」

「っ！！え？なに！？」

「いや、なんか元気なさそうだったから」

「大丈夫よ。じゃ、私はもう行かなくちゃ！」

「そうなの？今日はありがとね！」

「どういたしまして。じゃあね。」

アテネはそう言つとすぐにその場から転移した。

「なんかアテネの様子変じゃなかった？」

「そうかな？でも、朝からあんな感じたよ」

『たしかにな。』

『そうよね。特に何も。劉ちゃんの思い過ごしではなくて？』

ううん。ならいいんだけど……。なんかいやな予感がするんだよな。

日も傾き始めたのでオレたちは家に帰った。

第3話：ついにキター！オレの誕生日！！この意味がわかるかな？（後書き）

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

フィ「ユニゾンデバイスのフィオネです！」

マ「ハイ！今回はフィオネが来てくれました〜！！」

フィ「どうも、どうも〜！！」

劉「あれ？作者はPSPを無くして死んでいたんじゃ…？」

マ「ふっふっふ。PSPはまた手に入れたから問題ない。だがな、それ以上にイイコトがあった。」

フィ「イイコト？」

劉「期待するなよ、フィオネ。こいつの事だから大したことないよ」

マ「初の感想がきたんだよー！！！」

劉・フィ「な、なんだってー！！！！！！」

マ「どうだ？これがたいしたことじゃないって？」

劉「ごめんなさい。」

フィ「へえ。よかったじゃん!」

マ「うれしかったよ!」

劉「でも、なんで今回の話はこんなに短いんだ?」

マ「…え……?」

フィ「たしかに、普通ならテンション上がってキターー!!!って  
もっと長く書いたりするよね。」

マ「じ…実は……。またPCを使う時間が…。」

劉「ふう。またか。」

フィ「よわいわね〜。でも、そんな中よくがんばったと思うわ!」

劉「だな。読者の皆様、今回はこの駄作者を許してください!」

マ「お…おまえら。」

劉「では、次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪  
廻物語』もヨロシクお願いします!」

フィ「感想もどんどん送ってきてください!」

マ「では、また次回でお会いしましょう!」

デバイス紹介だぞ〜！ ただし、ネタバレあり（前書き）

え〜、デバイスが登場したので紹介を載せたいと思います。



デバイス紹介だぞ〜！ ただし、ネタバレあり

ユニゾンデバイス

名前：フィオネ

好き：劉、仲間達、寝る事、食べる事

嫌い：劉や仲間を傷つける事、ピーマン

性格：明るい感じ。劉の事が大好きで、劉の前では少し甘えた面を見せる…、反面、つねに劉の支えになりたいとも思っている。

ユニゾン機能：劉とユニゾンする事で、魔力運用の特化が中心で、詠唱速度や術式発動を効率よくすることができる。また、魔力の温存もできるため、長期戦が可能に。ユニゾンすると、劉の髪は銀髪に、目は赤く変色する。

ちなみに、顔のモデルはpspで出た『エクシズ・フォルス』のヒロイン、セシリア・アーマクライトで、服装は【祝福のカンパネラ】のガーネットがモデルです。

インテリジェントデバイス

名前：インフィニティ・ゼロ（愛称はゼロ）

形態：グローブ型

待機モード：指輪

性格：インテリジェントデバイスにしてはめずらしく、基本は無口だが、ノリはいい。

性能：主にバリアジャケットの展開に魔力変換の補助。劉の能力、【無限魔力変換資質】はゼロがいて初めて成り立っていると言っても過言ではない。いかに劉といえど、まだ自由には変換能力が使えないためにゼロは絶対に必要不可欠な存在。

インテリジェントデバイス

名前：クリスティーナ（愛称はクリス）

形態：三段階で、ファーストモードが剣、セカンドモードが双銃、ツインガンサードモードが槍

待機モード：腕輪

性格：明るい先輩的な性格。劉をいじるのが好き。フィオネやゼロとはいいトリオ。

性能：武器特化型。クリスを媒体にして投影する事も可能。トレースだが、威力は投影しないで普通に使うだけでもかなりあるため、普段の戦闘ではあまり使わない。使ったとしても威力はリミッターで抑えられている。

劉がクリスを使うときは、負けられない時や自分で考えた奥義を使うときなどの重要な場面の事が多い……多いだけで、普段からの戦闘でも出していききたいです。by 作者

デバイス紹介だぞ〜！ ただし、ネタバレあり（後書き）

マ「どうも〜作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

フィ「ユニゾンデバイスのフィオネです。」

マ「今回はデバイスの紹介ということで。」

フィ「私の劉ちゃんに対する思いが暴露されちゃっているですけど！／／／／」

マ「まあ、別にいいじゃん。そのうちバレるんだからさあ。」

フィ「うう〜／／／／」

劉「まあまあ、オレもフィオネのことは好きだよ。」（ニッコッ）

フィ「っ！！／／／／／／」

マ「あらあら、劉のフラグメーカー発動しちゃってるよ…。」

劉「そうだよ！それ！オレの能力紹介の所にあったフラグメーカーってなんだよ！」

マ「いや、あつた方が面白いかと〜」

劉「いらないからね?!今すぐ消してよ!!--」

マ「それは△リです。いまさら消すとか」(笑)

劉「この〳、トレスオン 投影開始………」

マ「おいおい！本編でもまだなのに何やっているんだ！？」

劉「関係ないね！来い！エクスカ………」

マ「ああああ！フィオネのことほっつておいてもいいのかな？」

劉「は？フィオネがどうした………って！」

フィ「きゅ〳、劉ちゃんが…好きって……しかも…笑顔で…／／／  
／／／」

劉「おい！フィオネしかりしろー！！」

フィ「きゅ〳〳」

マ「あらら、これはもうダメだな。では今日はこの辺で。誤字脱字等の報告やアドバイスをくれるという心優しき読者の方々、感想どしどしください！お待ちしています！ではまた次回お会いしましょうー！！」

劉「しっかりしろー！！」

フイ「えへへ、もう……ダメえ…… / / / /」

第4話：大切なものは失ってはじめて気づくっていうけど、考えたら残酷だよわ

今回は少し暗くなるかも…

では、第4話始まりま〜す！

第4話：大切なものは失ってはじめて気づくっていうけど、考えたら残酷だよわ

家に帰ると置手紙があった。母さんと父さんはオレの誕生日プレゼントをとりにお店に、桃子さんは一度家に帰って皆で来るみたいだ。オレの胸ポケットからフィオネが出てきて料理に目を輝かせた。

「今日って何かのパーティーなの？」

「オレの誕生日なんだ。」

「そうだったの？おめでと〜！」

『『おめでと〜！劉ちゅう！』』

「ありがとな。」

ちなみに、周りがデバイス達の時だけは【オレ】で通すことにした。

さて、誰もいないなら魔法の練習でもしようかな。

「フィオネ、魔法の練習したいんだけど」

「いいよ。まずは結界つと。それと、セットアップしてみて」

「よし、ゼロいくぞ〜！」

『「ごつちも準備はOKだ！」』

「ゼロセットアップ！」



『set up!』

瞬間、バリアジャケットが展開された。色は漆黒。上から下まで黒。クロノの少し似ているかな？でも、あいつのより色が深いな。

「劉ちゃんかつこいいよ〜!!!／／／／／／／／」

『た、たしかに！かつこいいわね／／／』

フィオネとクリスが何か騒いでいるな。

『劉、バリアジャケットのサイズは平気か？』

「うん。ぴったりだ！」

『そうか、ではこれで登録しておく。』

「さんきゅ〜！で……お〜い！フィオネ〜？？」

「はううう／／／／……っは!!!な、なに??？」

「いや、この先はどうしたらいい？」

「リンカーコアを感じることはできる？」

「一応ね、一人でも修行やってたから。」

「なるほど。では一回、魔力を放出してみて。」

「放出ね〜。……ふっ!!」

力を入れた瞬間、オレの周りに灰色……いや、銀かな？銀色の魔力が放出される。

「うわ！こんなにはっきり見えたの初めてだ。」

一人でやってた時はこんなにはっきり見えなかったからな〜。

「これが、魔力か…。」

「うん。まあ、劉ちゃんの場合は元々の魔力量が大きいからね〜。普通はこんなに放出されないよ」

「そうなん…だ…?」

フラッ

急に力が抜けて倒れそうになる。

「劉ちゃん！大丈夫??」

フィオネがアウトフレームになってオレを支えてくれた。

「あれ?どうして……」

「きつと、魔力を多く放出しすぎたのね。いいわ、お母さんたちが帰ってきたら起こしてあげる。」

「うん、お願いする……」

オレはベッドの上にダイブして眠りについた。

s i d e o u t

なのはs i d e

えっと、お久しぶりです。高町なのはです！やっと私の出番なの！作者さん、今まで出番がないってどういうことかな、かな？今日は可愛い私の劉ちゃんの誕生日だから、一度帰ってきたお母さん、お姉ちゃんと一緒にお料理を作ってます。お母さんは劉ちゃんの家でもいっぱい作っていたみたいだけど、まだまだ作るみたいです。

ブルブル

「あら、電話ね。出てくるから、美由希、なのはお料理お願いね。」

「まかせて(なの)!!」

そう言ってお母さんは電話をとりにいきました。

「じゃあ、なのははこの料理の盛り付けお願いね。」

「うん!!」

劉ちゃん、私が手伝ったって言ったら喜んでくれるかな？私が劉ちゃんのことを考えていると、お母さんがお父さんの所に走っていきましました。なんだか慌ただしいけど、どうしたんだろ？

「美由希、しばらく頼む。」

お父さんとお母さんはそのまま家をとび出しました。

「お姉ちゃん？」

「うん。ま、先に料理を完成させちゃおつか。」

「わかったなの!!」

今日のパーティーは絶対に成功させるの！

s i d e o u t

劉 s i d e

「……………て、……………きて」「ユサユサ

うっん、誰かが体を揺さぶってる。

「起きて、劉ちゃん。誰か来たわよ?」

「うっん、わかった」

時計を見ると、オレが寝て結構たっていた。母さんと父さんはまだ帰っていないみたいだ。遅いな。

まだ眠い目をこすりながらドアを開けると、泣いている桃子さんと

士郎さんがいて、桃子さんはオレに抱きついてきた。

「え？桃子さん??」

聞いても桃子さんは何も言っていない。

「士郎さん？」

今度は士郎さんに聞く。すると、士郎さんの口から信じられない言葉聞いた。

「劉、落ち着いて聞いてほしい……………君のお父さんとお母さんが…

……………

.....  
.....  
亡くなった  
.....  
.....  
「

「 .....  
 ㄨ  
 .....  
 ？」



すぐには土郎さんの言葉が理解できなかった。

「父さんと母さんが死んだ？だって、朝だって普通にしゃべって、料理を作っていたのに……」「交通事故だそうだ……」「……うそだよ。そんなの……うそだよ」

オレは桃子さんから離れ、自分の部屋に閉じこもった。

「「<sup>ちゃん</sup>劉……！」

ドアの向こうから桃子さんと土郎さんが呼んでくるが答えることができなかった。

「劉ちゃん？どうしたの??」

部屋の中でアウトフレーム状態のフィオネが聞いてきた。

「グスツ…フィオネ」

「わ!どうしたの劉ちゃん!?泣かないで!」

「父さんと…母さんがあ………」

オレはフィオネに抱きつきながら泣いた。

side out

士郎 side

「「<sup>ちゃん</sup>劉！！！」」

劉が部屋に閉じこもってしまった。やはり、ショックが大きかったか…。

「桃子、しばらくそっとしておこう。ここは私が残るから、家に帰って皆に説明してほしい。」

私は桃子を帰して、リビングのイスに座る。

（ここで、私が折れてはダメだ…。私が折れたら誰が今の劉を……。

)

私は劉が出てくるのを静かに待った。

s i d e o u t

劉 s i d e

どれだけ泣いただろう。気がついたら朝になっていた。フィオネはオレが泣いている間、ずっと頭を撫でてくれていた。

「ありがとね、フィオネ」

「うん。もう落ち着いた？」

「少しはね…」

オレがフィオネと一緒に部屋を出てリビングに向かうと土郎さんがいた。

「劉、大丈夫か？」

「うん。もう平気だよ」

土郎さんはオレの返事を聞いたあと、フィオネを見て

「あなたは？」

と聞いていた。

ごまかしてもいいと思ったけど、ここは正直に話そうとフィオネたちと決めていた。

「土郎さん、ボクが土郎さんのケガを治したのを覚えていますか？」

「ああ、覚えているよ。」

「今から言うことは別に信じてくれなくても構いませんが聞いてください。」

士郎さんはただ頷いた。

「ボクは魔導士…魔法を使えるんです。そして、こちらはボクのユニゾンデバイスのフィオネです。」

「はじめまして、劉ちゃんのユニゾンデバイスのフィオネです。」

「ユニゾンデバイス？」

「はい。ほかに、デバイスが二つあります。指輪の形のデバイスがゼロ、腕輪の形のデバイスがクリスといいます。」

『『はじめまして。』』

説明し終わると、士郎さんは少し目を瞑って考えていた。まあ。普通通信じゃないよな。オレはそう思っていると、

「劉のことを信じよう。」

と、言ってきた。

「え？信じてくれるのですか？」

「ああ、実際に魔法を使って私を治してくれたんだ。それが何よりの証拠だ。」

「ありがとうございます。」

「さ、今から一回家に朝ごはんを食べに来ないか？」

「うん…」

きゅ〜

ごはんの事を考えたら、急にお腹がなった。そういえば、昨日の昼から何も食べてないや。

「はい。お腹すきました。」

「では、行こうか。」

「フィオネ、胸ポケットに入りなよ。」

「うん！」

フィオネは小さくなると土郎さんは驚いていたが、

「なんでもありだな」

と笑い出す。

オレは笑っている土郎さんと手をつないで高町家へ向かった。

第4話：大切なものは失ってはじめて気づくっていうけど、考えたら残酷だよ

マ「どうも。作者のマーボーです。」

フィ「フィオネです」

マ「今回はこの二人でやっていこうかと思えます。」

フィ「作者さん、ゼロとクリスの待機モード。なんで載せなかったの？」

マ「素で忘れてた。」

フィ「ダメじゃん。しかも、今回の話…。これ、どういこと？劉ちゃんが泣いているんだけど。」

マ「まあまあ。今回の話は結構これからの話で重要になっていくからさあ。」

フィ「ま、まさか、実は犯人が!？」

マ「いや、いないから。」

フィ「じゃあ、なんなのよ!」

マ「それは、次回のお楽しみって事で!では、この辺で!」

フィ「誤字脱字等ありましたら、感想などで報告してくれるとありがたいです。」

ママ」なくても感想をくれると、とてもうれしいです！」

フィ「次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』もヨロシクお願いします!! ではありません!!」



第5話…これからオレにできること…。(前書き)

PV:12 / 417アクセス、ユニーク:2 / 603人

い、一万突破……

こんな、駄文を読んでくださり、本当にありがとうございます！  
では、第5話始まります！！

第5話…これからオレにできること…。

「おじやまします」

オレたちが高町家へ入るといきなり、なのはに抱きつかれた。

「劉ちゃん大丈夫!？」

「うん。もう、だいぶ落ち着いたから」(ニコッ)

なのはに笑い返すと、

「そ、それならよかったの／＼／＼」

と、顔を赤くしていた。風邪かな？

「た〜す〜け〜て〜!」

なのはに抱きつかれていると、胸ポケットから声が聞こえてきた…  
……やっべ!忘れてた!!  
いそいで、なのはを離しポケットからフィオネを出してあげる。

「し…死ぬかと思った〜」

「ごめんな。」

「えへへ〜／＼／＼」

小さい為、指で頭を撫でると気持ちよさそうに目を細めるフィオネ。

すると、

「よ、妖精なの〜!!!」

と、なのはが騒ぎ始めた。

「なのは、落ち着いて。今から説明するから。」

オレは皆をリビングに集めて魔法のことや、フィオネたちのことを説明した。

この魔法を使って土郎さんのケガを治したことを言ったら、皆信じてくれた。

「ねえ、そのユニゾンってなんなの？」

「ユニゾンっていうのはね……………」

美由希さんが質問してきたので、ユニゾンについて説明した。

「実際に試してみるか。フィオネいける？」

「いいよ〜。」

「ユニゾン・イン!!!」

フィオネとユニゾンすると、オレの髪の色が紺から銀色に、目の色も赤に変わっていた。

それに、魔力の運用がスムーズになった気がする。

「へえ、すごいね〜」

「ふえ〜、劉ちゃんかっこいいの!」

「劉ちゃんが……不良に……」

「劉の銀髪……アリだ!」

「なるほど、ユニゾンとはこういうことか。」

上から、美由希さん、なのは、桃子さん、恭也さん、士郎さんの順  
番でそれぞれ感想をもらった。

っていうか、下から二番目は完全にスルーの方向で……。

「フィオネ、ユニゾン解くぞ?」

「了解。」

「「ユニゾン・アウト!」」

ユニゾンを解いた瞬間、

きゅ〜

「あ……//」

お腹がなった。

「そつだ。桃子、朝ごはんはできているかな?」

「できているわよ。」

「では、皆で朝食にしようか。」

高町家＋オレとフィオネで朝食をとった。

朝食をとったあと、オレは土郎さんと一緒に病院に来た。父さんと母さんに会うためだ。

「劉…大丈夫か？今が無理なら、また明日にでも……。」

オレは母さんたちが眠っている部屋の前で三十分以上立っていた。

「ん……、もういけるよ……。」

最初は目を閉じてドアを開ける。

その目を徐々に開けていくと、台の上にもつ目を覚ますことのない、二人の大切な人がいた。

オレは、その光景を見て母さんたちがもう帰ってこないことを実感

した。

「士郎さん、少し一人にしてもらえます?」

「わかった。待合室にいるからな。」

士郎さんがいなくなったあとにフィオネがアウトフレームになり、後ろからオレを包み込んでくれた。

「もう…母さんたちは目を覚まさないんだよな……」

「うん。」

フィオネはオレのつぶやきにひとつひとつ答えてくれた。

それは、オレが一人になっていないことを感じさせるには充分だった。

「もう…女装させられて、抱きついてきたりしないんだよな……」

「うん。」

「もう…ボクに笑ってくれないんだよな……」

「うん。」

だんだんと、涙声になっていくのがわかる。

それと同時にオレの中である決心が生まれくる。

「フィオネ。ボクには魔法が……、守れる力が……あるのに……母さんたちを救えなかった……。もう…誰かを失いたくない……失いた

くないよ…。」

「だいじょうぶ、劉ちゃんには私がいる、皆がいる。」

「フィオネ…。」

フィオネが抱きしめる力を少し強くする。

「これから、ボクはこの手の魔法を…この力で…すべての人を守っていく。そのために強くなるよ。」

「私たちも手伝うよ。ね？クリス、ゼロ？」

『『もちろん！』』

「みんな、ありがとう」（ニコッ）

「つつ！！／／／／／」（涙目で笑顔は反則だよ！／／／）

「おい、どうした？」

「なんでもないわ。／／／／それより、お母さんたちには？」

「うん。母さん、父さん、今の話聞いてくれていたと思うけど…オレ頑張るから。実際何をどう頑張るか、まだわからないけど、とにかく頑張るから。皆を守るくらい強くなって見せるから。だから母さんたちは安心してゆっくり休んでいてくれよ。」

オレは目を閉じ、今までのことを思い出した。

「ふふつ。今思えば、女装ばつかな…。」

目を開けて最後に母さんたちを見る。

「じゃ、オレはもういくね。」

オレは母さんたちに別れを告げ病室を後にした。

帰り道、土郎さんに剣術の稽古をお願いしたら快く承諾してくれた。

高町家に着き、夜ご飯を一緒にご馳走になっている時に土郎さんや



桃子さんに「一緒に住まないか？」  
って聞かれた。そこまで迷惑を掛けられないと断ったが、高町家の皆さんに怒られてしまった。  
こうして高町家に住むことになったが、姓は天道のままにしてある。桃子さんたちもそれは納得してくれた。

高町家の一員になった次の日の夕方、オレはアテネに呼び出された。呼び出された公園に着くとそこには、いつもの元気がないアテネがいた。ちなみに、フィオネたちは家においてきた。

「わるいわね。急に呼び出して……」

「いや、今ちょうどヒマだったから。それで、どうしたの？」

アテネに用件を聞く。すると、アテネがいきなり謝ってきた。

「ごめんなさい！あの時……あなたを転生させた後、転生先を見たの……。そしたら、あなたの両親は……あなたの五歳の誕生日に死ぬ運命になっていて……。魔法で助けるように言おうと思っただけど、運命っていうのは覆せないものなの。必ず、世界は収束してしまう。形は変わるけど、結果は同じになるようになってるから……。それを、劉ちゃんが魔法を使ってどうにかしようとして、ムリをして体や心を壊してほしくなかったから！……本当にごめんなさい！！」

と、また謝ってきた。

「どうして謝るの？オレはアテネに感謝しているんだよ？」

「え？どうして？」

「オレが母さんと父さんに会えたのはアテネのおかげだもん！そりゃ、いなくなつたのは悲しいけど、でも、オレは出会えてよかったと思つている。だから、会わせてくれたアテネにありがとう！」

感謝の言葉を言つたら、アテネは泣き出してしまった。

「ツグス！…ヒック……もう平気よ……」

どれくらい泣いたのかわからなかったが、アテネが泣き止んだのは空も暗くなつてきたころだ。

「オレ、これから皆を守るくらい強くなるんだ！だから、見ててくれよ。」

「うん。私にできることがあつたら、いつでも言つてね？」

泣き止んだアテネの顔は笑顔だった。

「やっぱり、アテネには笑顔が一番似合うよ。」

思つたことを伝えると、

「っえ！？い、いきなり、なによ／＼／＼／」

と赤くなりだした。

「もう！じゃあ行くわね！！／＼／／」

とその場を逃げるように姿を消した。

なにかほかに用事でもあったのかな？

辺りも暗くなっていたので、オレもいそいで帰った。

第5話…これからオレにできること…。(後書き)

マ「どうも、作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

マ「今回はすまなかったな。」

劉「気にスンナよ。おまえだってしょうがなくやったことだろ？」

マ「劉…おまえってやつは……」(泣)

劉「でもその前に、この駄文をどうにかしろ!!」

マ「ええ!!?」

劉「何を驚いている？」

マ「さっきまでやさしかったのに……」

劉「内容はどうであれ、文章はダメダメだからな！」

マ「クツ！何も言えない……。」「

劉「大体、進むスピードが遅いんだよ。おまえは！」

マ「お、俺だって…一生懸命に……」

劉「一生懸命にやったって、駄文じゃ意味がないだろ!？」

マ「すいませんっした!!!」

劉「土下座したよ。なんか、やりすぎたかな？」

マ「うう〜」(泣

劉「しかも、泣いているし…惨めだ……。」

マ「皆さん、こんな駄文でもよければお読みください。」

劉「そくだ！感想コーナーやってないじゃん！」

マ「そうだったな。天宮翔様いつも感想ありがとうございます！」

劉「全然感想来ないよね〜。ホント、天宮翔様には感謝しないと。」

マ「そうだね。これからも『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』をよろしく願いますね？」

劉「ほかの読者の方々も感想をよろしく願います！」

マ「では、また次回で！」

第6話・時間跳躍って便利だね。決して、手抜きではないよー！（汗）（前書

では、第6話はじまります！

第6話・時間跳躍って便利だね。決して、手抜きではないよ！！（汗）

「朝か…」

あれから二年、オレは自分で魔法を開発したり、土郎さんに剣の稽古をつけてもらっていた。

修行は身体能力EXのオレがバテるまでやり続けた。だが、ここ最近剣術の稽古はあまりやらない。土郎さん曰く、「劉はもう基礎ができているから、剣術の稽古は大丈夫だな！あとは、実践あるのみ！」らしい。それから、土郎さんや恭也さんと試合をしたりしてすごしていた。土郎さんと恭也さんの強さは原作で知っていたけど、あそこまで強いとは…。

（…よく生きてこれたな）

そんなことを思いながらベッドから降りよつとすると、

「むにゅ」

なのはが隣にいた。

「はあ、またか」

なぜか知らんが二年前、高町家に住み始めた時からいつも潜りこんで来るのだ。最初は恭也さんに殺されるんじゃないかと思っていたが、

「劉は女の子だから別にいいんじゃないか。」

と真面目な顔で言われた。…じよ、冗談だよな……。 (汗)  
なのはを起こさないようにそっとベッドから出る。

「あれ？たしか昨日フィオネも一緒に寝たはずんだけど…」

そう、フィオネもオレと寝るのが普通になっていた。フィオネを探すと、なのはにつぶされていた。

「おい。大丈夫か？」

「うん。毎回なんだけど、目覚め最悪」

どうやら、つぶされた状態で寝ていたらしい。

「だったら、アウトフレームになって、用意されているベッドを広々と、それはいやなの〜！劉ちゃんと一緒じゃなきゃ眠れないもん！」「……さいですか……。」

とまあ、毎朝恒例？のやりとりもやってリビングに行くと、すでに桃子さんが朝食の準備をしていた。

「おはよう。桃子さん」

「おはよう。劉ちゃん、フィオネちゃん。」

冷蔵庫から牛乳をコップ一杯だし一気に飲む。



これは背を伸ばすために毎朝やっている習慣だ。これのおかげで、もう少しでなのはに追いつけそうな所まできている。

顔を洗い庭に出る。

「よし！フィオネ。クリス、ゼロなしの魔法の訓練始めるぞ！結果を。」

「了解！」

フィオネに結界を張ってもらい修行内容をチェックする。

「じゃあ、少し魔力運用のチェックをしてから投影魔術、その後に私と組み手って流れてOK？」

「そうだな。」

最近は主にこんな感じの修行だ。

目を閉じ集中する。魔力を自在に操る感覚。人差し指の先に小さい魔力球を生成する。

「では、劉ちゃん。準備はいい？」

「うん。」

「カウントスタート！！！」

おれは、フィオネの合図とともに、魔力球を飛ばし、その先に木の枝を投げつける。

「1、2、3、4……」

なのはがAsの時にやっていた修行と同じだが、缶ではなく、木の枝でやっている。

缶より脆い分、木の枝でやるのはかなり難しい。

「88、89、90、91、92……」

「くう……結構きついな……」

「97、98、99、100！ハイ、ストップ！」

「ふう〜。終わったか……」

「お疲れ〜。だいぶ安定してたね。」

「そうだな。最初は魔力球すら生成できなかったからな〜」

「進歩しているんだよ！次いく？」

「そうだね。ふう〜っ」

また目を閉じ集中する。

「トレース・オン  
投影開始！千将・莫耶！」

オレの両手に双剣が握られた。

「うん。最初の頃よりスムーズになっているね。」

「だいたい、実践でも使えるようになってきたな。」

そのあと、オレは双剣を戻し、フィオネと組み手を30分くらいやる。

「ハアハア。フィオネそろそろ終わるづ。」

「ふう。そうね。」

シャワーを浴び、なのはを起こす。

「なのは！起きろ！」

「むにゅ、まだまだなの。」

「んなこと言わないで、はやくしろ！」

「うう〜、眠くて、起き上がれない〜。劉ちゃんだっ〜」

「いいから、さっさと起きろー！……！」

ポコッ！

「あう……い、いたいなの」

「目さめたか？」

「でも、痛いのはイヤなの！もっと、やさしく……そう、劉ちゃんのおはよりのキスとか……／＼／＼／」

「なるほど、もう一発か。」

「さ、劉ちゃん早く行かないとお母さんに怒られちゃうー！」

なのははそう言つと、普段は見せないほどの速さでリビングに走つていった。

~~~~~  
数時間後~~~~~

「明日から、学校ね。」

「うん。楽しみなのー！」

昼食をとり、桃子さんとなのはがそんな会話をしているのを聞きながら考える。

（原作開始まであと三年……。オレはアリシアやプレシアを救える力を手に入れることができるのだろうか……。）

そんな不安が胸をよぎる。

（でも、母さんたちと約束したんだ。皆を守るために強くなるって。）

「桃子さん、なのは少し出かけてくる。」

「あまり、遅くならないようにね?」

「うん。いってらっしゃいな!」

オレはフィオネとクリスとゼロをつれて散歩に出た。

『どうしたのよ、劉ちゃん。』

「なにか、考え事?」

「うーん。まあ少しね」

クリスとフィオネに聞かれるが、ほとんど上の空で返事をしてしまっ

『もう、なにか悩みがあるんだったら相談にのるわよ?』

クリスにそう言われ、今悩んでいることを話してみる。

『馬鹿ねえ、劉ちゃんは。』

「え？」

『そんなのできるか、できないかじゃないわ。やるしかないの！』

「……………」

「そうよ。劉ちゃんは毎日修行をして、それに進歩だっっているんだから！」

クリスに続いてフィオネも励ましてくれる。

「ありがとう、二人とも。そうだよな！やるしかないんだよな！」

「『うん！…！』」

そこで会話は途切れる。

じぼはく歩いてくるよ、

「きゅ〜〜〜〜〜〜〜！…！…！…！」

「ちょっと、なにをするのよ！…！」

二人の女の子が無理やり車に乗せられて連れ去られていた。

「生の誘拐なんて初めてみたよ……」

しかも連れてかれたのって、アリサとすずかだったし。あの二人って入学前から友達だったっけ？ たしか、なのはとアリサがケンカしてすずかが止めて、友達になるんじゃない……。

「劉ちゃん！」

フィオネに呼ばれて我に返る。

「ああ！ わかっている。ゼロ！ 魔力装備、両足な。」

『了解！』

s i d e o u t

アリサ side

ハア〜ついてないわ……。せっかく、明日は入学式だったのに。その前日に誘拐なんて……。

「ア、アリサちゃん……」

さすがが怯えた様子で私の名前を呼んでくる。

「大丈夫よ！もし、すずかに手をだしたら私が許さないから！！」

といっても、今はどこかもわからない倉庫の中にいる。この状況で助けになんて……。

少し、ネガティブになっていると。

ドゴン！！！！！！

いきなり大きな音がしたと思ったら、倉庫の扉が破壊されていた。

「だれだてめえは！？」

私たちを誘拐した犯人。犯人Aが扉を壊した人に大声で怒鳴りつける。

「ボク？ボクは……。」

それに答えたのは、私たちより少し背が低い女の子だった。

「通りすがりの正義の味方さ。」

s i d e o u t

劉 s i d e

「ここか」

オレは今、倉庫の前にいた。中に何人いるかは関係ない。全員ぶつとばす！

「ゼロ、セットアップ！」

『 s e t u p 』

「フィオネは周りに被害が出ないように、結界お願いできるっ？」

「それぐらい楽勝！」

ポケットから一枚のコインを取り出し指にのせる。

「さあ。いくぞ！！超電磁砲^{レールガン}！！」

指に電気がたまりコインが発射され、目の前にあった扉が吹き飛んだ。中には五人の男。

「だれだてめえは！？」

犯人Aでいいかな？犯人Aが怒鳴ってきたが関係ない。

「ガードスキル・ハンドソニック！」

「ぐはあっ！」

オレは瞬歩で犯人Aに近づくと、ハンドソニックで斬り捨てた。

「この野郎！！何しやがる！！」

銃を乱射してきた。

「では、お披露目しますか。ゼロ！コード！」

『了解！ 発動！！』

この技は二十秒間、時を止めることができる。ちびっ

「瞬歩！」

高速移動で残りの四人も斬り捨てる。

「ちょうど、二十秒。」

パチン！と指を鳴らすと同時に、止まっていた時が動き出す。

「くくくくほあああ！」「くくく」

斬った四人も血しぶきをあげながら倒れていった。

誘拐された二人を見る。

(やっぱり、アリサとすずかかあ。)

二人は呆然としていた。そりゃそうだろう。いきなり男の子が入ってきて、犯人Aを斬ったと思ったたらほかの四人も血を噴いていたんだから。オレはアリサ達に近づいた。

「大丈夫か？」

「アンタ何したの？」

「いやなにも。それより、二人ともケガはないか？」

「あ、うん。平気だよ。助けてくれてありがとう！ほら、アリサちゃんも。」

「一応、お礼を言っておくわ。その、ありがとう。」

「どういたしまして。」（ニッコリ）

「……っ／＼／＼／＼」

笑いかけると二人とも赤くなった。

「顔赤いけど、ホントに大丈夫？」

「べ、別になんでもないわよ／＼／＼それより、アンタ名前は？」

「ボク？ボクの名前は天道劉。えっと……」

「私はアリサ・バニングス。アリサでいいわ。で、こっちが」

「月村すずかです。すずかでいいよ。」

「アリサにすずかね。じゃあ、ボクの事は劉でいいよ。」

二人の縄を解きながら、自己紹介をする。

「劉ちゃんって女の子なのにこんなに強くてすごいね！」

オレの時間が止まった……あれ？

「ど、どうしたのよ劉？」

アリサが聞いてくるが耳に入っていない。

「劉ちゃん??？」

「またね！」

「ああ、じゃあな！」

オレはフィオネに頼んで高町家の庭に転移してもらった。家に入ろうとすると、ちょうど翠屋から帰ってきた土郎さんに止められた。

「劉、その血の跡はどうした？」

聞かれて、はじめて自分の服が汚れていることに気がついた。

「これは……」

今日あったことを説明した。

「ふむ。イイことをするのは止めないが、あまり周りに心配掛けないでくれよ。」

と、言われた。

血のついた服は捨ててもらって、少し早い風呂に入り着替えた。部屋に戻ると、なのはとフィオネがベッドで寝ていた。

「はあ。オレも寝たかったけど、そろそろ夕食だし起こしたほうがいいかな。」

なのはを揺すり起こすと、寝ぼけているのか抱きついてきた。

「ん〜。今日は劉ちゃんと一緒に居られなかったから、劉ちゃんエネルギー補充なの〜」

「なに、そのエネルギー!？」

結局、目を覚ましたフィオネにも抱きつかれ夕食まで解放されなかった。

つか、フィオネさん……。あなたはオレと一緒に居たから、エネルギー補充……いらなくね……？

それから、三年の月日が流れる……。

第6話：時間跳躍って便利だね。決して、手抜きではないよ！！（汗）（後書

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

マ「やっと、終わったよ。」

劉「今回は結構かったよな。しかも、また時間跳躍かよ！」

マ「うん。集中力が途中で切れてさあ。正直、今までで最悪なコンデイションだったよ。それに跳躍しないと、無印にはいれないからさあ。」

劉「まあ、跳躍は仕方ないけど。コンデイション関係なく駄文を繰り広げている分際で、よく一丁前のこといえるよね。」

マ「おまえ、段々口が悪くなってきたな…。」

劉「んなことないよ。では、感謝コーナーです！」

マ「天宮翔様、メガネ様、紹介されたファン様、スペード様ありがとうございました。」

劉「四人の方も感想をくれたのか。」

マ「しかも、メガネ様の作品、『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界』の主人公のトキガワコダイ君からは自作のシヨートケーキ…」

劉「おおおー!!」

マ「と、コダイ君が翠屋に初来店した時に桃子さんが見せた白コス
がおくられてきましたあー!!!!」

劉「…どうしろと?」

マ「もちろん!コスチュームチェンジ!!!」

少々お待ちください。。。。

マ「ハイ!では、どうぞ!!劉ちゃん(白コスver)です!!
!!」

劉「う、ううう／／／／／」

桃「あらあら、可愛い!」

劉「!!!!???」

マ「せっかくだから、呼んでみた。【アレ】を試すときだぞ!さあ
!!」

劉「えっ！？【アレ】をやるのか……／／／／／」

マ「そうだ！さあいけー！！！！」

桃「とうとう劉ちゃんもこの趣味に目覚めたのね」

劉「あ、あのっ！……」

桃「あら、何かしらっ？？」

劉「お、お……おねーちゃん／／／／／」（上目遣い＋涙目）

桃「……………」

マ「あれれ？効果がないぞ？」

劉「なんにも起きないじゃんか／／／／／」

桃「……………ブシャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「！」

マ「うおおおー！！ビックリしたあ。」

劉「桃子さんが幸せな顔をして、遙か彼方へ吹っ飛んでいったよ……
鼻血で…………」（汗）

マ「これは、いい技をもらったな！では、劉にはがんばったご褒美
にコダイ君自作ケーキだ。」

劉「はむ。もぐもぐ……。うつまああああ！！！！／／／／／」
マ「よかったな。メガネ様ありがとうございました！お礼といっ
は何ですが、三枚の写真を送らせていただきます。」

劉「そろそろかな。」

マ「おう！誤字脱字やアドバイス等がありましたら、感想で報告し
てもらえるとありがたいです。」

劉「それ以外でも感想はどしどし送ってきてください！」

マ「次回の『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』
もヨロシクお願いします！！」

劉「ではでは！」

第7話・すべてが始まる瞬間……。ここまで長かったな……。(前書き)

今回はあとがきに初のゲストが！

そして、本編はついに……。。

では第七話はじまります！！

第7話：すべてが始まる瞬間……。ここまで長かったな……。

3年がたった。あれ？いきなり跳びすぎ？知りません！オレは一切知りません。この三年は特に事件などはなく修行に専念していた。入学式の日にはアリサ達と再会して、なのはに生まれ、その後、なのはとアリサ、すずかの間でこたごたがあつたのはまたの機会に。まあ、今では仲良しだ。

そして今日、とうとう原作の始まりの日……。なのはが朝に変な夢を見たって言うていたから間違いない。

(絶対に皆を守り通してみせる。)

昼休み、原作どおり三人仲良し組み+オレで昼食をとっている。

「劉はどうするのよ？」

「なにが？」

「アンタ、またラブレター貰ってたじゃない。」

はあ。その話か……。原作では将来の夢の話とかじゃなかったっけ。

「そ、それはホントなの!？」

なのは、目が怖いよ……。

「で、誰から貰ったのかな??」

すずかも恐くなっている……。

「いや……男子三人に、女子が四人だけ」

「ちょー！！女子のほうが多いじゃない！」

「なんでだよ！！そもそも、男子から貰うほうが間違っているんだよ！！なぜ誰も男子から貰っていることに対して突っ込まない！？」

「…その、四人の女子には O H A N A S H I が必要な……。」

となのはが横で何やら物騒なことをつぶやいていた。

「いいよ別に。全員断るし。」

「アンタって一年の頃からそうよね」

「ま、今のオレはそんなつもりはないからな」

ちなみに、一人称が【オレ】になったのは自分が男だと強調するため。昨日、あまりにも男子からの手紙が多いから桃子さんが寝る前に聞いてみたら、なんと答えは

「いいわよ」

だった。それでも、手紙を貰うって事は……、この学校の男子の将来が心配だ。

放課後になると、なのはとアリサとすずかの三人は塾に向かった。え？オレは行かないのかって？ふっふっふ。オレにはとても大事な事がある。それは！！！！

……翠屋……

「劉ちゃん。おかえり。」

「劉ちゃん会いたかったよー！！！」（泣）

「桃子さん、今日もよろしくお願いします。フィオネは朝普通にあってるだろ！？」

そう。放課後、オレは桃子さんに料理を教わっている。

「あ！劉ちゃん、今日も来たんだ」

「美由希さん、ただいま。」

オレはエプロンをつけて台所に立つ。

「うーん。劉ちゃんにはもう、教えること何にもないわよ？」

「え、！？それって、料理の才能がないからですか！？」

「ちがうくて。もう、その辺のお店には負けない腕になっているって事よ。」

「そうですか？」

「うん！劉ちゃんの料理はとてもおいしいよ。」

オレは疑問に思い聞いてみると、フィオネが答えてくれた。教えてもらい始めたのが一年の時だから、たった二年ぐらいでか。

「劉ちゃんは呑み込みが早いから。」

桃子さんがオレの心を読んでか、答えてくれた。

「じゃあ、【オレ】はもう免許皆伝ですか？」

「…………劉ちゃん？」

「へ？」

なんか、桃子さんの周りが急に歪みだした。

「ちょっと、劉ちゃん！なに自殺しようとしてんの！？」

「そつだよー！！」

美由希さんとフィオネが驚いてオレに小声で聞いてきた。何を驚いているのかな？

「オレは昨日桃子さんに一人称を【オレ】にするって言ったら、OKがでたんだ！何も恐がる必要はない。」

「あら？いつ私がそんなことを？」

「え？いや…昨日寝る前に……。」

ん…？なにやら嫌な予感が………（汗）

「…私は何にも聞いていないわよ？」

「いやいや、だって確かに昨日は……」

そこで、美由希さんからフォローがはいる。

「ああ、お母さん。寝ぼけてたんじゃ。」

フォローになっていないよ……美由希さん……。

「あらあら。それじゃあ、そのOKは取り消しね」（ニッコリ）

「はい……。そうです……今から【ボク】です。」

一日も【オレ】がもたなかった。おい！その読者！！オレは弱くない！桃子さんのオーラを受けてみる！抵抗する気が失せるから……。オレは今日料理を一度も作ることなく、高町家へ帰った。帰っている途中、フィオネ（アウトフレームver）がずっと慰めてくれていた。

家に帰って夕食のとき、なのはからフェレットを飼っていいかという話題があがった。

「ねえ、お父さん。いいかな？」

「ああ私はいいと思うぞ。なあ桃子？」

「ええ。私も反対しないわ」

二人ともすぐに了承していた。

「フィオネちゃんと劉ちゃんもいいよね？」

ここでオレが反対したらユーノ終了フラグになるかな？つか、下手したら『魔法少女リリカルなのは』が終わるかも…。反対って言うてみようかな。

「ボクもいいよ。フェレット大好き！！」

「わたしも〜！」

ダメだ。興味本意でなんて言えない。

「よかったの！じゃあ、明日にも連れてくるの！」

なのはは笑顔でメールを打ち込む。アリサやすずかに報告するのだろっ。

「……あ。」

そこで、なのはが打つのをやめた。何か思い出したのかな？

「そういえば、今日のラブレターの人たちはちゃんと断ったんだよね？」

なのはが唐突に聞いてくる。

（バカ！今この場で言わなくたっていいじゃん！今言ったら……）

「なに！？男子からラブレターだと！！！？？劉もなのはも、まだ早いぞ！！！！！！」

恭也さんがこの話題にかみついてきた。もうね、この人のシスコン具合はすごいよ。オレは男だけど……。

「ええええええええ！！劉ちゃんまた、ラブレター貰ったの！！！？？」

フィオネもオレに顔を近づけて聞いてくる。

「断っちゃったの？」

美由希さんが聞いてきた。んなもん決まっている！

「七人中三人が男子なんですよ！そりゃ、断りますよ！！！！」

「でも、後の四人は女子だったんだ〜」ニヤニヤ

美由希さんがニヤニヤしながら聞いてくる。

「それはまあ。／＼／＼／」

少し照れて顔が赤くなっていくのがわかる。

「じゃ、じゃあもう部屋に戻るから／＼／＼／」

部屋に戻るとフィオネも一緒に戻ってきた。

「フィオネ、今日の話は。」

「うん。把握しているよ。とうとうこの日がきたんだね。」

フィオネはアテネに原作を教えてもらっていた。

「ゼロとクリスも?」

「ああ。」

「把握しているわよ!」

ゼロとクリスもらしい。

「そうか。フィオネ、オレは少し寝るから。ユーノから念話があったら起こしてくれない?」

「わかった。」

フィオネはオレの部屋にある漫画を読みながら返事をする。オレはベッドに横になると、すぐに眠気に襲われ意識を手放した。

s i d e o u t

なのはs i d e

今日は朝に変な夢を見たの。男の子が何かに襲われている夢。劉ちやんに話したら、

「気にしないでいいんじゃないか。」

って言うてくれたけど……………、気になっちゃうの〜!!それに、フェレットを拾う時も変な声が聞こえたし…。はぁ、今日は疲れち

やった。早めに寝ようとした時に頭に誰かの声が響いた。

『助けて！誰か僕の声が聞こえますか？』

「助けて？………って！この声フェレットを拾った時の……！」

私は居てもたつても居られずに部屋から飛び出しました。

s i d e o u t

劉 s i d e

「劉ちゃん！起きて〜！」ユサユサ

「ん〜。なんだよ〜。」

「なのはちゃんが飛び出して行ったよ!」

「っ!!そうか、これから始まるんだな。行くぞ!フィオネ、クリス、ゼロ!」

「『了解!』」

オレは家を出ようと玄関に向かうと、そこには士郎さんがいた。

「なのはの所に行くのか?」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

士郎さんにはバレてるな。正直に話すか。

「はい。」

「そうか。劉、なのはを頼む。」

士郎さんはオレにそう言うと頭を下げてきた。

「わかってますよ。なのははボクが守ります。だから、頭を上げてください。」

「そうそう。劉ちゃんに任せておけば全て解決よ！」

オレとフィオネがそう言っていると土郎さんは頭を上げた。

「ゼロ、セットアップ！」

『set up』

「では、行って来ます！」

バリアジャケットを展開させた後にオレは土郎さんにそう言い残し、
なのはの所に向かった。

第7話：すべてが始まる瞬間……。ここまで長かったな……。(後書き)

マ「やっと無印に入った！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。やっとだな。」

マ「悪かったよ。さ、感謝コーナーだ。」

劉「バラランシヤ様ありがとうございます！さらに、エリクサー×
100と破魔の紅薔薇ゲイ・シャルクと必滅の黄薔薇ゲイ・ボウをいただきました。」

マ「さて、今日はゲストが来ています。」

劉「ああ。あの人だろ？」

マ「そう。先ほど紹介させていただいた、バラランシヤ様の作品『
魔法少女リリカルなのは』神に何度も殺された青年』の主人公の
！……！」

春「柊 春人だ。」

マ「俺のセリフが……」(泣)

劉「今日は、こんな所までお疲れ様です。」

春「ああ。それより、その駄作者！」

マ「……！な、なんだ？」ガクガク

劉「思いつきり、足震えているじゃん……。」「（哀）

春「感想では好き勝手に言ってくれたな。俺を倒す？やれるものならやってみるよ。」「

マ「へっ、へっ！いつまでもビビっていられるか。俺はこの作品の作者。いいだろう！やってやる！うおおおおお！……！！」

春「ふん。」「

マ「ぐはぁー！」

劉「よわっ！え？一発でもう終了？」

マ「な…なぜだ？俺の作者パワーで春人を弱くするはずだったのに……。」

劉「はぁ。それで、あんな自信があつたのか。」「

春「なるほどな。だが、そんなことはできないぞ？なぜなら、」

春・劉「俺は（春人さん）はお前の作品のキャラじゃないからだ！……」

マ「……？？？……しまった……そうだったのか……」orz

劉「やっぱり、わかってなかったのか。」「

春「さて、抹消してやるか。」「

マ「だけど、俺には破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルゲと必滅の黄薔薇ゲイ・ボウがあるんだ！これでええええ！……！」

春「こんなものっ……！」

マ「どおっはあ……！」

劉「おいおい……今はやばいぞ……！そ、そっだエリクサーを！」

マ「ふう。復活したぜ〜。」

劉「まったく。無茶するからだよ。」

春「まあ、まだ終わってないんだけどな。」

マ「え……!!??」

春「では続きだ！」

マ「ちよっ……!!う、うわああああああああ……!!……！」

マ「…はあ…」

劉「ありがとうございます。今後は調子に乗らせないようにするんです。」

春「また、調子に乗っていたら殺しにくるぞ。」

劉「あ！そつだ。これ、オレが作ったクッキーなんですけど。よかったら…。」

春「劉の手作りか。貰ったところ。アリシア達も食べたがるだろうしな。」

劉「では、今日はありがとうございます！」

春「ああ。おまえもがんばれよ。じゃあな。」

マ「……………春人、帰った？」コソコソ

劉「帰ったから、コソコソすんな。」

マ「そうか。ふう、死ぬかと思った。」

劉「いや、実際に死んでたからな。貰ったアイテムを全部お前が使うとは思わなかったよ。」

マ「俺だって……………。さて、そろそろかな。読者の方々、誤字脱字やアドバース等がありましたら感想で報告してくれるとありがたいです！」

劉「それ以外でも感想は募集中なので、どんどん送ってください！」

マ「では、次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』もヨロシクお願いします!!!」

第8話…いきなりこんな場面に出くわしたら無理だよな。…その点、なのはは

八話です！

今回、感想で失敗してしまいました。

バラランシヤ様本当にすいませんでした！！

第8話：いきなりこんな場面に出くわしたら無理だよな。…その点、なのはは

なのはside

変な声を元に動物病院に向かうと、黒いお化けが夕方助けたフェレットを襲っていました。

その襲われているフェレットは私に気づくと、あの黒いお化けから逃げてこちらにやってきました。

「あ！来てくれたんですね？」

「ふえ！？フェレットさんがしゃべったの〜！！」

なんと、助けたフェレットさんがしゃべりました。

「あの、助けてください！お礼は何でもしますから！！」

そう、フェレットさんが言うてきました。

助ける？私が？

「お礼とかそんなこと言っている場合じゃないでしょ！そ、それに、無理だよ〜！」

だいたい、助けるって言うてもどうすればいいの〜！

「これを使って！」

フェレットさんはそう言うつと首にぶら下げていた『赤い宝石』を私に渡してきました。

「これは、『レイジングハート』と言って魔法の杖なんだ。起動のためのパスワードを教えるから復唱して！」

私に出来るかどうかわからないけど、今はやるしかない。

「う、うん。わかったの！」

「ありがとう。我、使命を受けし者なり。」

「我、使命を受けし者なり。」

「契約のもと、その力を解き放て。」

「契約のもと、その力を解き放て。」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。」

「この手に魔法を。」

「この手に魔法を。レイジングハート、セツトアップ！」

私が言い終わると、いきなりレイジングハートが光りだしました。

「イメージして！君の魔法を制御する魔法の杖を！そして、君の身を守る強い衣服の姿を！」

「イ、イキナリそんな事いわれても〜」

（よかったの〜。）

私が少し安心していると……

ピシピシ

「つつ！……！」

段々と、レイジングハートが張ってくれたバリアにヒビが入り始めました。

s i d e o u t

劉 side

オレとフィオネが着くと、すでになのははバリアジャケットを着けてジュエルシードの化け物と対峙していた。
今日は静観しようと思っていたが、

『 protection 』

なのはが化け物の攻撃を防ぐ……が、様子がおかしい。レイジングハートが張っているプロテクションにヒビが入り始めていた。

「まずい！ゼロ、ソニックムーブ！」

『了解！ソニックムーブ！！』

オレは化け物の後ろに回りこみ、

トレース・オン
「投影開始デュランダール！！」

デュランダールを投影し、化け物を叩き斬った。

「ぐおおおお！！」

クツ！こいつ、原作より強くなっていないか？

「なのは大丈夫？」

「ふえ？劉ちゃん？」

なのはがオレを見て驚いていた。

「だ、大丈夫なの。」

「あの！あなたもジュエルシードを？アレは危険なものなんd」
「ん
なことは知っている！少し黙っててよ！！」……ハイ……。」

「フィオネ、なのはに封印の仕方を教えてあげて。」

「わかったわ。なのはちゃんこっちに。」

「うん。わかったの。」

なのははフィオネの元に向かった。

「ぐおおおおおがあああ！」

なのはが教えてもらっている間は時間を稼がなきゃな。

「おらあああー！！」

オレは化け物の懐に潜り込んで斬りつける。

「グオオー！！」

「まだまだ！！」

さらにオレは、斬って斬って斬りつける！

「があああ……。」

「オラあ！」

最後に蹴りつける。

ドゴオオンー！

化け物は壁の方に吹っ飛んでいった。

「劉ちゃん！」

なのはがこちらに来た。

「フィオネ、もう教えたのか？」

「うん。ばっちりよ！」

フィオネもこちらにやってくる。

「じゃ、トドメをさしてくるか。ゼロ！魔力変換【氷結】！」

『魔力変換【氷結】！』

デュランダルの剣先に青色の魔力が纏わりつく。

「なのはは準備してて！」

「うん。レイジングハート！」

『sealing mode setup』

オレは化け物に向かって跳んだ。

「があああ」

化け物も弱りながらも立ってくる。

「これで、終わりだ！！セルシウスキャリバー！！！！！！！！」

思いつきり、斬りつけた。すると、斬った所から氷始め、最終的には氷漬けになり砕け散った。

「今だ、なのは！」

「うん！リリカルマジカル……」

オレは封印をなのはに任せて、先に道路などの壊れた箇所を修復をした。

「ふえ〜、劉ちゃんありがとうなの〜。」

なのはがバリアジャケットを解除して、その場に座る。

「なのは、疲れている所悪いが、今すぐに逃げよう。」

「ふえ？なんで？」

その時、ちょうどパトカーのサイレンが聞こえてくる。

「一応この辺りは修復したんだけど、たぶん、この場に居たら捕まると思っからな。」

「……………」

「……………」

なのはの顔が段々青ざめてくる。

「じめんなさーい！……！」

改めて現状を知ったのはと一緒に近くの公園に逃げた。

「じゃ、改めて自己紹介。ボクの名前は天道劉。最初に言っておくけど【男】です。高町家でお世話になっています。こっちが、オレの相棒のフィオネとクリスとゼロだ。」

「『』よろしく(ね)『』」

「私はなのは、高町なのは。よろしくなの！」

「僕はユーノ。ユーノスクライアです。ちなみに、僕は……。」

ユーノは人間に戻る。

「いいか、なのは。ロストロギアっていうのはな……」

オレはなのはにロストロギアの説明をする。

一通り説明を終えると、ユーノが話を再開する。

「アレは…ジュエルシードは僕が発掘してしまったんだ…。」

ユーノが暗い表情で話す。

「時空船で運んでもらって居る時に事故が起きて、ここ管理外世界の地球に落ちたんだ。それを知った僕は、あんな危険なものを放置できないと思って。それに…発掘した僕の責任だし……。で、回収しようと思ったんだけど……。」

「上手くいわずに、ケガした所をなのはに拾われたと。」

「うん…」

「ま、一人じゃ無理だわな」「でも!」だから!【オレ】が協力してやる。」

「…え?」

オレはユーノの目を見ながら言つと、

「私も手伝うの!ユーノ君一人じゃ危ないの!」

と、なのはも手伝つて言ってきた。

「で、でも、二人を巻き込むわけには……。」「

「あのな。今更何言ってるんだよ。もう、すでに巻き込んでおくせに。それに、この事も知っちゃったしな。これで何かあったら寝覚めが悪い。」「

「私も！私も…ユーノ君を助きたいの！」「

「二人とも……お願いします！」「

ユーノが頭を下げてきた。

「ああ、よろしくな」

「よろしくなの！」「

オレはユーノ（フェレット形態）を肩に乗せ、フィオネを胸ポケットに入れ、なのはと手を繋いで高町家に歩いて帰った。なのはとフィオネは終始ごきげんだったが、

（はあ）。帰ったら士郎さん達に何て説明しようか。（

オレの心の中は不安で一杯だった。

「あー劉ちゃん、さっき自分のこと【オレ】って言ったの。」

「え……………?」

ホント、この先何が起こるんだろう……………（涙

第8話…いきなりこんな場面に出くわしたら無理だよな。…その点、なのはは

マ「はい。第八話目でした！作者のマーボーです！」

劉「…主人公の劉です。……おも…い……。」

マ「今、劉はバラランシャ様からいただいた十二単じふにひとへ（魔法により1着100kg 計1200kg+着用中能力使用不可）を着用中です。」

劉「…バラランシャ様にはほかにも、メイド服（超ミニ）+イヌミミ（着用中、語尾に「ワン」が付く）

聖祥大附属小の制服（もちろん女子制服）+ネコミミ・ネコの手型手袋（着用中、語尾に「にゃん」が付く）を頂きました。」

マ「これで、少しミスがあったんだよな…。」

劉「…うん。感想でこの二着を着ただけど、語尾を付け忘れてしまつて……。」

マ「この件に関しては、完璧にオレのミスだ……。」

劉「いや、オレの責任でもあるよ……春人さんが次に来た時に罰だつて。」

マ「今回はちゃんと受けよう……。」

劉「だな…つて、これも罰じゃないか？……かなり、重いぞ！？」

マ「1200kgだからな。これは前回の罰だからな。」

劉「くそ〜。そうだ。感謝コーナーだ。」

マ「そうだな。天宮翔様、メガネ様、バラランシヤ様ありがとうございます！」

劉「今回はメガネ様にもアイテムを頂きました。」

マ「え〜と。劉には犬耳と尻尾に首輪を劉の髪の色に合わせた犬セツトとメイド服一式。

フィオネには劉とおそろいのメイド服とフィオネの髪の色に合わせたネコセツトを、そして、コダイ君の写真（Yシャツにエプロンでケーキを作っていて、手を滑らせてクリームが顔に掛かかり、それを舐め取っている写真）も貰いました。」

劉「この写真…エロいな……。」

マ「だな…。かなり、きわどいぞ。」

劉「では、メガネ様から貰った服を着てみようか。」ポイ

マ「ああ。十二単じふにひもとえが……。」

劉「おお！軽いな〜！！では、着替えてくる。」

少々お待ちください。。。。

劉「メイド服から着てきました／＼／＼／＼」

マ「似合うなあ！あと、フィオネも呼んだぞ。」

フィ「どうも〜！フィオネです。どうぞ劉ちゃんとお揃いだよ？」

マ「うん！フィオネも似合っているよ！」

劉「うん。可愛いよ。」

フィ「やった〜！／＼／＼／＼」（劉ちゃんに可愛いって言われた〜！〜！）

マ「次は劉には犬セット、フィオネにはネコセットね。」

劉「わ、わかったよ／＼／＼／＼」

フィ「じゃ、行こうかあ！」

少々お待ちください。。。

劉「着替えたぞ〜／／／／／」

フィ「たぞ〜!!」

マ「おおお!!劉は自分の髪の色と一緒に紺色の毛並みの犬スタイルで、フィオネも自分の髪の色と一緒に朱色の毛並みのネコスタイルだな。」

フィ「にゃ〜!」(上目遣い)

マ「かわいいな／／／／」

劉「あ、ああ。／／／／／」

マ「劉も可愛いぞ〜?」

劉「死ねえええええ!!!!」

マ「がふっ!!」

劉「恥ずかしい…／／／／／さ、早く十二単に着替えよう／／／／／」

フィ「え?もう着替えちゃうの〜???」

マ「くふっ。だが、写真は撮らせてもらった!メガネ様、どうぞ見

てやっってください!!」

劉「お…重くなった……。」

フィ「当たり前だよ。」

マ「さ、メガネ様今回はありがとうございました!!」

劉「そして、バラランシヤ様。語尾のつけ忘れ、ホントにすいませんでしたあ!!!!」

フィ「したああ!!!!」

マ「というわけで、劉にはバラランシヤ様に直接謝りに行ってもらいます!!」

劉「おう!そのつもりだ!そのために、お詫びの品(自作ケーキ)も作ってきた。じゃあな!」(スタスタ)

フィ「あ!私も行く!!!!」

マ「あらあら、フィオネも行っちゃったよ……。バラランシヤ様、二人のことヨロシクお願いします!!では、また次回!」

第8 / 5話：ちょっと、休憩。オレの日常だよ（前書き）

短いですが、番外編です。

意味なんてありません！！

一度やってみたかっただけです！（キリッ

ちなみに、デバイス達の会話を『』にしました。

フィオネやユニゾンデバイスは「」で通します。

第8 / 5話：ちょっと、休憩。オレの日常だよ

なのはが魔法と出合い次の日の朝。

オレは今、なのはとユーノと一緒に高町家の庭で特訓をしている。

もちろん、フィオネとクリス、ゼロも一緒だ。といっても、なのははユーノに魔法の基礎を。オレはフィオネと組み手だ。

「にしても、デバイスを三つっていうのも中々ないけど、劉がこの前使っていた魔法って何式なの？ミッド式じゃないし、見たことないから。」

ユーノがオレに聞いてくる。

「あれは、ボクの稀少^{レアスキル}能力みたいなものだよ。」

ユーノに説明しながら内心では、ため息をついていた。理由はもちろん昨日のことだ。

(昨日はどうなることかと思ったよ…。)

そう。あのあと家に帰ると高町家全員のお出迎えがあった。オレは死んだなと思いつながら皆さんに説明した。ロストロギア・ジュエルシードの事、その危険性や、ユーノのこと。そして、ユーノの手伝いをしたいという事を。あ、ユーノは人型で話をしてたよ。恭也さんが、

「なのはと劉に手を出したら殺す！」

とユーノに脅しをかけていた。男のオレが手を出されることを前提

に話をしていたのは気にしたら負けだ。ジュエルシードの件は反対されかと思っていたが、土郎さんの

「なのはと劉が決めたことならやりなさい。」

この一言で終わった。

ユーノは基本フェレット形態で住むことになった。まだ、無理をしていたみたいで完治するまではこの形態の方が何かといいらしい。もう、皆には人間だってバレているから淫獣フラグは回避できたらう。ただ、桃子さんと美由希さんはフェレット形態のユーノを頬擦りしていたが……。人間でも可愛ければ関係ないらしい。それと【オレ】と言った事はなのはが

「今回は助けてくれたから内緒にしてあげるの！／／／／／／／／／／」
と言ってくれた。本当に助かったよ。

「劉ちゃん！そろそろ朝ごはんの時間だよ？」

「ん？そだな。じゃ、終わりにして順番に入るか。先なのはが入ってきたな。」

「うん。わかったの！……その……劉ちゃんならのぞいても……いいからね？／／／／／／／／／／」

「バカ言っていないで早く入ってきたな。」

「わかったの。(ホントのことなのに……) ボソッ」

なのは何かボソッと言って風呂に向かった。

「ユーノはボクと一緒にいいよな？」

「え!?! 僕、劉と入るの!?! / / / /」

「……………」

何を顔を赤くしながら言っているんだ? この腐れフェレットは?

『まあ。ユーノの気持ちも分かるわね。』

「は?」

クリスがなにやらユーノの肩を持ち始めた。

『だって、最近。劉ちゃん私のことを構ってくれないんだモノ!』

なに言ってるんだ?

「そ、それは…ちょっと / / / /」

ユーノはユーノで、まだ何やらモジモジしていた。

「…それは…なんだよ?」

「劉はおん!」ボクは男だと言っているだろう!?!?! 吹っ飛ばす

ぞ！！？？」：あ、うん入ります。」

一回ユーノとはO H A N A S H Iが必要かな？クリスは確定
だけどね。

「フィオネ、クリス、ゼロ行くぞ〜」

「あ！まっつて〜！」

フィオネが慌てて追いかけてきた。

『ちよつと！劉ちゃん！！あなたが私達を連れてつてくれなきゃダ
メじゃない！ねえ？劉ちゃ〜ん！』

「おつと。そうだった。フィオネ〜ゼロを連れてきてくれ〜」

「わかつた〜」

『え？ちよつ！劉ちゃん！？なに、ホントに放置なの？ねえ！！』

いつから、クリスはあるな性格に……。AIの検査するか。オレはク
リスを軽く無視して家に入った。

朝食を食べて学校に向かう。え？クリス？ちゃんと今はオレの腕に
つけているぞ。スリープモード不貞寝だけど。教室に着くとアリサとすず
かがこちらに来る。

「なのは。フェレットOKなんだって？」

「うん！実はもう昨日ね……」

アリスはなのはと一緒にお話を始める。

「ねえ、劉ちゃん。」

「ん？なんだ？」

すずかはオレのほうに来る。

「特に何も無いけど。二人で居たかったから。」

すずかが急にオレに抱きつきながら、そんなことを言い始める。

「劉ちゃんのおいだ〜／／／／／」

「ちょ！すずか！？においをかがないでよ／／／／」

すずかがにおいをかいできた。なんか、顔が赤くなっていくのがわかる。それに、こんな所を発見されたら……………。

「ああああ！ちょっと、すずか！！何やっているのよー！！」

「すずかちゃん、ちょっとO H A N A S H Iがあるのー！」

こうなることは分かっているだろうに……………。

「えへへ、朝から劉ちゃんエネルギー補充だね／／／／」

なんてこった…。劉ちゃんエネルギーはこんな所まで知れ渡っていたのか！？まさか、そのうちにビタミン剤みたいにならないだろうな……………（汗）

オレがそんなことを考えていると、

「は〜い！朝のHRはじめるわよ〜！」

担任の先生がやってきた。そこで、オレは席に着くと周りの女子からおいをかがれた。

「わぁ。たしかにいいにおいがするわぁ！／＼／＼／＼」

「りゅ、劉ちゃん…いいわぁ〜。ハアハア」

「劉ちゃん！今日、私の家に来ない？そして、抱き枕になって！！／＼／＼／＼／＼」

こいつらは頭がおかしいんじゃないのか？特に二番目！

「なんだよ！俺たちにも嗅がせろよ〜！！」

「『『『そつだ！そつだ〜！！』『』『』」

どうやら、女子が男子には嗅がせないようにしているらしい。

「うっさい！男子！あんたらみたいな変態に劉ちゃんは渡せないわ〜！」

（いや、男子もおまえらだけには変態扱いされたくないって…）

オレは心の中で突っ込みを入れ、周りを見る。

「すずか！抜け駆けよ〜！！」

「そうなの〜！」

「え？先手必勝っていうんだよ〜。」

名の二十歳…じゃない。なのは達はまだ言い合いをしている。どうでもイイが、『なのはたち』を一発変換すると、『名の二十歳』になるよね〜。え？オレだけ？

「みんな、席につきなっさ〜い！！！」

先生も必死に皆に呼びかけている。

（ハアア。なんだ、このカオス空間は……）

オレは心の中でため息をついた。

『言わないでいてやね。』

オレの知らない所でクリスとゼロがこんな会話をしていた。

第8 / 5話：ちよつと、休憩。オレの日常だよ（後書き）

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

フィ「フィオネです！」

マ「ハイ！今回は番外編でした。最初に言いましたが、特に意味はありません！！」（キリッ

劉「はあ。何言ってるんだ？」

フィ「現実を見たくないのよ……。」

マ「ハッハッハー！！何のことやらー！さて、感想コーナーだ！！」

劉「ブラックサレナ様、メガネ様、アリア様、天宮翔様感想ありがとうございます……！」

フィ「それと、バラランシヤ様にはエリクサーを200個と約束エウされた勝利の剣と遠き果ての理想郷をもらいました！ありがとうございます……！」

劉「なあ、作者よ。なんで、これを貰ったのか。考える？」

マ「……………。分かってるよ……今日はゲストがいます。『神に何度も殺された青年』の主人公の春人です。」

春「やっと、出番か。おい！そのー！！」

マ「はい！なんでしょうか？」

春「まあ、言いたい事は？」

マ「前はホントにすいませんでしたあー！！！！」ズザアアアア！！

劉「うわ…ジャンピング土下座だよ。」

フィ「前回というのはバラランシャ様に頂いた聖祥大附属小の制服
+ネコミミ・ネコの手型手袋ver・メイド服(超ミニ)+イヌミ
ミ(着用中、語尾に「ワン」が付く)を着用したさいに、語尾を付
け忘れるという失敗をおかしたことだよ。」

春「俺は言ったよな？やらなかった場合は覚悟しろって？」

マ「はい。なので、今回はしっかり罰を受けます！」

春「いい覚悟だ」(ニヤリ)

劉(うわ)。春人さん楽しそう……)

フィ「劉ちゃんはしっかり受けたんだから、作者も受けなきゃ不公
平だもんね。」

春「まずは、軽くシバクか。」

マ「しゃーすー！！！！」

少々お待ちを。。。。

春「ふん。気絶しないか。ま、されても叩き起こすが。」

マ「…あ、あ、り、が、ど、う、…、じ、げ、ん、し、…、だ、あ。」

劉「え！？これで軽く！！？？」

フィ「エリクサーあげなきゃ！！」（汗）

。。。。

マ「ふう。まだまだあ！」

春「言われなくてもやってやるよ！」シャキーン！

劉「ちよっ！春人さん！？それって貰ったエクスカリバーですよ！？」

春「だからなんだ？元は俺の方の作者の物だ。俺が使おうと問題ない。ではいくぞー！！」

マ「こおおおおおい！！！！」

フィ「さ、作者ー！！！！！！」

春「では、遠慮なく。真名開放！【約束された勝利の剣】！！！！」

マ・劉・フィ「……え……?」「」

春「おらああああ!?!」

ヒュン！（剣が空を斬る音）

マ「うわあああ!」

フィ「本気で殺すきだよ!?!」

劉「クツ!さすがに死なれるのはまずい!投影開始トレスオンデュランダル!作者これを使え!?!」

マ「さんきゆう!今回はおとなしく罰を受けると言ったが、死ぬわけにはいかない!?!てやああああ!?!」

春「ふん!遠き果ての理想郷アヴァロン!?!」

マ「うわあ!俺の攻撃が!?!」

劉「アヴァロンまで……。」

フィ「終わったわね……」

春「約束された（エクス）！！！！」

マ「……」

春「ああ、そうだな。」（ニヤニヤ）

マ「ふつ、今回はおまえの勝ち」勝利の剣^{カリバー}!!!」「…ぎゃああやあ
ああ!!!!!!!!!!!!!!」

劉「今、作者が黄金の光に呑み込まれました…。」

フィ「セリフ最後まで言わせてもらえなかったわね」（哀）

春「では、俺は帰る。早く帰ってアリシア達とモンブラン（劉の自作）を食わなきゃだからな。」（スタスタ）

劉「あ、ありがとうございます〜って、もう行っちゃった…。」

フィ「さて、私はあそこでのびている作者にエリクサーを」

劉「頼む。では、次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』もヨロシクお願いします!」

第9話・可愛いものには牙があるって言うよね……え！？言わない？（前書き）

総合 PV29 / 779 アクセス ユニーク5 / 246人

5000突破しました。

これも皆様のおかげです！

ありがとうございます！！

では、短いですが第九話始まりま〜す！！

第9話・可愛いものには牙があるって言うよね……え！？言わない？

「うう。中々見つからないなの」

「ま、地道に探すしかないよ。」

オレとなのはは今、アウトフレームverファイオネとユーノと合流してジュエルシードを探している。

が、

「劉ちゃ〜ん、疲れたの〜。おんぶ〜。」

なのはの集中力が切れていた。まあ、なのはだって小学三年生なんだ。それに比べて、ファイオネはしっかりと普段見せない真面目な態度。「劉ちゃ〜ん！私も疲れた！！」はあ。褒めようとしたらこれだ。

「ごめん。なのは、ファイオネ。」

ユーノが少し落ち込んだ様子で二人に謝った。

「そ、そんなつもりで言ったんじゃないよ？ユーノ君！」

「う、うん！私もそうだよ！！」

ユーノの言葉に二人は慌てる。

（今日は二つ目のジュエルシードが神社で発動するはず……。そろ

そろだと思っただよな〜。(

と考えていると…

「…っ！？これは！」

『劉ちゃん！！』

『マスター！』

オレが感知すると同時に、クリスとレイジングハートが魔力の反応を示した。

「場所は神社方向だな。行くぞ！みんな！」

「…うん！（なの）」「…」

オレ達が神社に着くと、すでにジュエルシードを取り込んだ犬？がいた。ただ、犬は大きくなっていて、牙がかなりはえていた。目も赤くなっており、凶暴なのは一目でわかる。

「あ…あれは？」

「たぶん、犬…なのかな？」

なのはとユーノが話していると、その犬はなのはに向かって突撃してきた。

「チツ！ゼロ、セットアップ！！」

『set up』

オレはすぐさま、バリアジャケットを展開して投影する。

「トレスオン投影開始ブリユーナク！！」

『ブリユーナク set！！』

「らああああ！！」

「があああああ！！」

オレはブリユーナクで犬の突進を受け止め、はじき返す。

「なのは！ユーノ！しゃべっている暇ないぞ！！」

「ごめん！今から結界を張るよ！フィオネ〜！」

「うん！！」

「私も…。いくよ？レイジングハート！セットアップ！！」

『Standby ready setup』

どうやら、なのはも変身したようだ。

「なのは、今回はサポートに徹してくれるか？」

「まかせてなの！夫を支えるのは妻の役目なの！！」

（それは少し…いや、かなりちがうぞ！？）

「ぐがあああ！！」

「ふん！」

ヒュン！

オレは犬に思いっきり突きを繰り出すが、簡単にかわされる。

（思ったより速いな…。だが！）

「オレがその上をいけばいい！！ゼロ！」

『わかっている！ソニックムーブ！』

オレは犬に高速で近づき、突く！

「ハアア！」

「があああ！」

(よし！隙ができたぞ。)

「ゼロ！魔力変換【炎】！！！」

『魔力変換【炎】！！』

「いくぞ！火龍連撃！！！」

オレは炎で覆われた槍で連続突きを炸裂する。

「ぐが！があああ！ぐぎゃああああ！！！」

犬は突かれていく度に段々と体が炎で焦げていく。

「トドメだあ！！！」

最後に犬の腹にブリューナクを刺す。すると、犬の体が光り始めて中から青い宝石が出てくる。
ジユエルシードだ。

「なのは！！！」

「まかせてなの！レイジングハート！！！」

『All right my master sealing』

なのはがレイジングハートをシーリングモードにして封印した。

「ゼロ、もういいよ。」

『わかった。バリアジャケット解除。』

バリアジャケットを解除したオレは、火傷をおった犬に近づく。

「劉ちゃん！その子は大丈夫!？」

「ああ、みてな。火傷ぐらいならこれでいいだろう……。」

オレは犬に手をつけヒールを使う。すると、犬の火傷はみるみる治っていく。

「ふえ〜、すごいの!!!ユーノ君もできる?」

「え?む、むりだよ。たぶん、回復魔法のエキスパートでもきつーと思うよ。」

「やっぱり、劉ちゃんはすごいの!!!」

なのはとユーノがヒールで驚いていたが、ほかの大規模な回復魔法を使ったとき時の反応が楽しみだ。

「劉ちゃ〜ん、もうムリ……。眠いよ。」

フィオネがオレの前で小さくなって肩に座る。

「そつだな。胸ポケットに入るか？」

「うん。おやすみ〜ZZZZ」

フィオネはすぐに眠りについてしまった。

『ねえ、劉ちゃん。私の出番はいつなの？私…まだ一回も……はっ！もう私に飽きたのね！？そうなんでしょ！？ねえ！そうなんですよ！…！』

なんか、クリスは一人？で暴走し始めた。

「落ち着いて。クリス。おまえはボクの切り札なんだからさあ。」

オレがクリスに言つと…

『あ、あら。嬉しい事を言ってくれるじゃない／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／そんな劉ちゃんが好・き・だ・ぞ』

結果、暴走は止まりませんでした…。(汗)

「さて、帰るか。行こう。なのは、ユーノ」

「うん！」

「そつだね。」

『もう！劉ちゃんったらあん／＼／＼／』

オレは家に帰りながら考え事をしていた。

（さて、そろそろ因果を操る魔法を創り始めるか。これがあればこの先でたくさんの人を守っていけるからな！）

あっ！ちなみに、犬は近くで気絶していた飼い主の隣で寝かせといてあげたよ。

第9話：可愛いものには牙があるって言うよね……え！？言わない？（後書き）

マ「はい！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

フィ「フィオネです！」

マ「今回は短めです。すいません。」

劉「はあ。どうせ理由はまたPCの時間制限だろ？」

マ「ああ。妹に代わって……」

フィ「しょうがないわね。じゃ、感謝コーナーです！」

マ「そうだな。天宮翔様、バラランシヤ様、メガネ様、まあ様感想ありがとうございます！」

劉「今回、バラランシヤ様とメガネ様からお土産をもらいました。」

フィ「メガネ様からはイチゴのタルトです！」

マ「そして、バラランシヤ様からはキャンディ×1000を貰いました！」（男の娘限定の性転換の）ボソッ

フィ「そして、もうひとつ！この前、劉ちゃんが貰った、

メイド服（超ミニ）＋イヌミニ（着用中、語尾に「ワン」が付く）

マ「あああ。泣かないで！そ、そうだ！これ、メガネ様から頂いたいちごタルト！！はい、お食べ？」

劉（女）「ふええ？は、はい。いただきます。はむ…もぐもぐ。わあおいしいです！／／／」

マ「そつかそつか。ほら、メガネ様にあいさつは？」（すぐ、顔が赤くなるのは劉と一緒にだな。）

劉（女）「メガネ様ありがとうございます！／／／」

フィ「は〜い！メイド服（超ミニ）+イヌミニに着替えてきたワン！」

マ「うおおお！こっちも可愛い！〜！」

フィ「わあ。劉ちゃんが女の子になっているワン！」

マ「ああ。あのキャンディをあげたんだ。でも、名前を決めなきゃ。」

フィ「名前ねえ。読者の皆様に募集をすればいいんじゃないかワン？」

マ「その手があったか。それでいいかな？」

劉（女）「はむはむ…もぐもぐ…っ！はひ！な、なでひょう！
？／／／／／」

フィ「ありやりや、噛んじやったワンね。」

マ「じゃーそういうことで！読者の皆様、劉（女の子）の名前をきめてあげてください。女の子的な名前なら何でもいいです！モデルとしては、PCゲームの『星空へ架かる橋』の神本（こづもと） 円佳（まどか）を小さくした感じですよ。あれ？まどかがいいじゃん。ってな事は無しの方で…！」

フィ「そして、お土産をもらったメガネ様とバラランシヤ様には劉（女）の写真を差し上げちゃワン。」

劉（女）「もぐもぐ……はむ！もぐもぐ。うっま〜〜／／／／／」

マ「ホントにおいしそうに食べるな。」

フィ「では、皆様お願いしますワン…！」

マ「フィオネもたまらん！！では、次回の『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』もよろしくお願いします…！」

第10話：苦い経験を通じて得たものは今後の宝になる。前編

どうも、劉です。

（ん〜。段々と因果を操る魔法のイメージがつかめてきたぞ。）

オレは今、夕食を食べながらそんなことを考えていた。

「劉〜？聞いているかい？」

「ほえ？な、なんですか？」

「やっぱり聞いていなかったか。」

「あう。ごめんなさい。」

「明日、私が監督しているサッカーチームが試合をするんだが見に来ないか？」

「私とアリサちゃんとすずかちゃんも行くから、劉ちゃんも行くかなのー！」

話とは、土郎さんが監督をしているチーム、翠屋JFCの試合の件についてだった。

（たしか、今回はなのにとって大事な場面だったな。だったら…
…）

「うん。【オレ】も「劉ちゃん？」…【ボク】も行くよ。」

はあ。桃子さん…いつになったら許してくれるのだろうか……。

「やったーなの！劉ちゃんと一緒にお出かけなの！！」

「お出かけって…試合の見学だろ？」

「それでもお出かけなの！」

「劉ちゃんが行くなら私も行く〜！」

フィオネも試合見学にのってきた。

「では、明日は応援頼むぞ。」

士郎さんは今日は寝ると言って部屋に戻っていった。

「じゃ、ボクは風呂に入るよ。行こう、ユーノ。」

「あ、う…うん／＼」

こいつ、また赤くなっていやがる……。

「おい。ボクは…」わ、わかってるよ。劉は男だよ！「…ならいい……。」

「私も一緒に入るの〜。」

と、なのはが下着やパジャマを持ってオレ達の後をついてくる。

「なのは、先に入ってきたよ。オレたちは後で入るからさ。」

「ふえ？ひ、一人じゃ寂しいな〜なんて。」

「そうか……」

「ええ？劉、なのはも一緒に入るの？／＼／＼」

「わ〜い！やったなの〜！！」

「では、フィオネ〜！」

「は〜い！なに？」

「なのはが一人じゃ寂しくて風呂に入れられないらしい。だから、おまえと一緒に入ってやってくれないか？」

「うん。ほら、なのはちゃん行こう！」

フィオネがなのはの手を握って、風呂に向かった。

「うう。私は劉ちゃんと〜！」

「ムリに決まってるじゃんか。」

オレは引きずられているのはに向かって言ったあと、ユーノに言う。

「残念だね。ユーノ。」

「な、なにが？」

「なのはと一緒に入りたかったんだろ？」

「い、いや…別に／＼／＼」

顔を赤くしながら言っても意味ないぞ？

オレ達はなのは達が入った後に風呂に入った。で、今は桃子さんにドライヤーで髪を乾かしてもらっている。自分でも出来るんだけど、なるべく桃子さんがやりたいらしい。部屋に戻って、ベッドに横になる。

「フィオネ、明日もジュエルシードの件ヨロシクな。」

「うん。」

「ゼロとクリスもな。」

『ああ。』

『まかせなさい。』

「ありがt……………zzz」

オレは眠気に負けて意識を手放した。

s i d e o u t

なのはs i d e

みなさん、おはようございます。高町なのはです。今日はお父さんのチームの試合の見学です。

ピンポーン

アリスちゃんとすずかちゃんかな？

「はい。」

ドアを開けると、

「やつほー、なのはー！」

「おはよう。なのはちゃん。」

やっぱり、二人がいました。

「おはようなの。上がって上がってー！」

二人をリビングに連れて行くと、お母さんが紅茶を出してくれました。

「いらっしやい。アリサちゃん、すすかちゃん。」

「「お邪魔します。」」

あれ、そういえば……

「お母さん、劉ちゃんは？」

「あら、まだ起きていないかしら？」

「劉ちゃんならまだ寝ているわよ。」

まだ、パジャマ姿のフィオネさんが起きて来ました。一応、アウトフレームで。

「「おはようございます。」」

「おはよう、ふわぁ」

あくびをしているフィオネさん。まだ眠そう。ちなみに、フィオネさんと二人は何度か翠屋で会っています。

「劉のヤツ、まだ寝ているのね。はぁ。まったく私たちを待たせるなんて。」

「まあまあ、アリサちゃん。」

「まだ、時間あるからしばらく待つ。」

フィオネさんを含めて四人でテレビを見始め、お母さんは劉ちゃんの朝ごはんを作り始めました。

「あ！ユーノ！」

「きゅう！」

いつのまにか、ユーノ君が来ていてアリサちゃんが気がつきました。

「久しぶりね！」

「きゅ、きゅつううう！！」

アリサちゃんがユーノ君に思いっきり頬擦りしました。

「なのは、朝ごはんが出来たから、そろそろ劉ちゃんを起こしてきてちょうだい。」

「わかったの」

私が劉ちゃんの部屋に行こうとすると、ほかの三人も立った。

「私たちもいくわ！」

アリサちゃんとフィオネさんが言った後に

「うん。（それに、劉ちゃんの寝顔／＼／＼）」

すずかちゃんもそう言って一緒に部屋に向かいました。

「そっとなの。」

四人で劉ちゃんの部屋に入ると、布団にくるまり、まだおやすみ中の劉ちゃんがいきました。

「くくくか、かわいい／＼／＼！！！！／＼／＼／＼／＼／＼／」

「でも、フィオネさんは毎日劉ちゃんと寝ているから、いつも見ているんじゃない？」

「え？そうなんですか！？」

私が聞くとアリサちゃんとすずかちゃんが驚いていた。

「うん。だけど、なのはちゃんだって夜になると布団に潜り込んでくるじゃない。」

「「なのはも!!?」「」

「う〜ん」

「「「「…?!?!?」「」「」

二人が驚いた声を出すと、劉ちゃんが寝返りをうちました。

「二人とも落ち着いてなの!はら、劉ちゃんが起きちゃうの。」

「いや、起こしにきたんじゃ…」

フィオネさんが何か言っているけど関係ないの。

「よし!写メ撮るわよ。」

「うん。これはチャンスだもんね。」

アリスちゃんとすずかちゃんが携帯をとりだしました。

「あ!私もなの!」

私たちは劉ちゃんの寝顔を撮りました。

side out

劉 side

ピロロロリン

うゝ。今の音なに？ゆつくりと目を開けるとフィオネとなのはとアリサとすずかの四人がいた。

「あれ？四人ともどうしたの…？ふわあゝ」

ねむゝ。オレは四人をおいて部屋から出た。

「三人ともいいものが見れるわよ！」

フィオネが何か言っているけど……どうでもいいやゝ。オレは毛布を持ったままリビングに向かった。

side out

フィオネ side

「フィオネさん、今の劉ちゃんって？」

すずかちゃんが聞いてきた。

「まあね。普段、劉ちゃんは朝がすごく弱い魔法の。だから朝、特訓の稽古がない時は、あんな感じ。しかも、普段より甘えん坊なのよ。」

「たしかに。劉ちゃん、小さい子みたいだね。」

「うん。たしかに。」

アリスちゃんとすずかちゃんが話していた。

「でも、稽古がない時でもあの状態の劉ちゃんは見ただことないの。」

「それは、なのはちゃんが起こされる立場だからでしょ？」

「あっ！そうか！」

「さ、早くリビングに向かうわよ！」

私たちはいそいでリビングに向かった。

side out

剛 side

「桃子さんおはよう」

「あら、剛ちゃんおはよう。まだおねむっ」

「うん。ねむい」

「でも、今日は試合を見に行くんだから、ごはん食べましょうね」

「ふあ〜い」

返事と一緒にあくびをしてみました。テーブルにはパンとスクランブルエッグ、スープにサラダ、牛乳がある。まず、牛乳を一気に飲む。その後にスクランブルエッグを食べる。甘くておいしい。

「ほら、お口のまわりについているわよ。」

桃子さんが拭いてくれる。

「ありがとう。」

しばらく食べていると四人がリビングに戻ってきた。

「ん？おはよう。四人とも」

「ああ。目を覚ましちゃったの。」

四人がorz状態になっていた。

「何言ってるの？ボクはさっきから起きてたよ？」

「そういうことじゃないの〜!!」

なのはが叫んでいたが、オレはその間に食べ終わり仕度をして、みんなでグラウンドに向かった。

グラウンドに着くと、士郎さんの周りに子供たちが集まっていた。

（たしか、キャプテンがマネージャーにジュエルシードを渡すんだよね。）

今回は回避しようと思えばできるけど、なのはが改めて決意を固める場面なんだよね。なのはには悪いけど、回避はしないで原作どおりにいこうと思う。

「あれ？サッカーって十一人だったわよね？」

「うん。そうだけど…十人しかないね。」

士郎さんがこちらに気づいて近づいてきた。

「劉、悪いが一人足りないんだ。試合に出てくないか？」

「え？ボクが??？」

「ああ。あと一人の子が熱を出してしまったらしくて、来れないらしいんだ。だから頼む。」

士郎さんが頭を下げてきた。

「頭を上げてください。いいですよ、ボクでよければ。」

「そうか。ありがとう！あそこにいるマネージャーの子からユニホームを貰ってくれ。」

そういうと、土郎さんは相手の監督の所に走っていった。たぶん、オレのことを話すのだろう。

「あ〜」

マネージャーの子が話しかけてきた。

「あ、君がマネージャーの……」

「はい。川島まなみです。あの、女の子なのに試合に出て大丈夫ですか？」

またか……。

「あの、川島さん？」

「はい？あ、まなみでいいですよ。」

「じゃ、まなみ。ボクは男なんですけど……。」

「え？そうなんですか！？ごめんなさいね。」

「あ〜いいですよ。慣れましたから。」

「ホントにごめんね。あと、私の方が一年上だけど、敬語じゃなくていいですから。」

「うん、わかった。ユニホームってある?」

「はい。こちらですね。」

オレは渡されたユニホームに着替えてまなみに見せた。

「どづ?まなみ!」

「はい。似合ってますよ!」

「ありがとうございます!」(ニコッ)

「……っ!あ、あちらの方々が見てますけど?／＼／＼」(可愛いわい!／＼／＼)

「え?あ、なのは達か。ちょっと行ってくるね。」

なのは達の所に行くと、すごい睨んできた。

「劉ちゃん、マネージャーの子と仲いいの!」

「まなみのこと?友達になっただけだよ?」

「名前で呼んでいるの?」

フィオネが睨みながら聞いてくる。

「うん。一年上だけど、敬語じゃなくていいって。いい人だよ！」

「劉って自覚ないのね。」

「しょうがないよ、劉ちゃんだもん。」

こっちは二人で何か話していた。

「劉！そろそろ集まってくれ！！」

「はい！じゃ、行ってくるよ。」

オレが士郎さんの所に行くときャプテンの人もいた。

「今日はありがとう！劉君のおかげで助かったよ！俺の名前は小林健吾だ。よろしく頼むよ！」

「よろしくお願いします！」

「もうすぐ始まるぞ！みんな、がんばって来い！」

「」「」「はい……」「」

試合が開始され、さっそくボールがまわってきた。

（いきなりかよ。）

一応、筋力もEXなんだよな。

「ボールをとれえ!!」

相手がボールをとろうとこっちにやってくる。

「いけ〜! 劉〜!!」

「劉ちゃんががんばってなの〜!」

「がんばって〜!!」

「きゅうっ!!」

みんなが応援してくれてる。つか、ユーノいたんだ。

オレは相手を三人一気に抜かす。

「あ、あれ!？」

相手はいきなりの事態に驚いている。

「もういつか。」

オレはその場でボールをゴールに向かって思いっきり蹴った。

オレの足から放たれたボールは音を立てながらゴールに吸い込まれていった。

「よし！まずは一点だね！！」

「」「」「うおおおおお！」「」「」

観客席から声援がさらに上がった。

.....

「おい！あのロン毛をつぶせ〜！」

オレがまたボールを貰うと相手がやってくる。

(つぶせて…)

相手の一人がスライディングをしてきた。

「よっどー！」

オレはそれを難なくかわすと、相手は三人一気にタックルしてきた。

(これは、少しやりすぎだろ……ゼロ。)

『いいのか?』

(ああ。ガードスキル・デイレイ!)

オレの体が高速で動き相手のタックルをかわしていく。

「な、なんだ?」

「いきなり動きが…」

「はやく……?」

そのまま、ほかのも抜き去っていきまたゴールを決めた。

.....

今、ボールは相手が持っている。オレが三点目を決めようかどうか考えていると、やけくそになった相手が思いつきりオレにボールを蹴ってきた……が、蹴りそこなったのか、ボールはベンチにいるまなみに向かっていった。

「川島!」

小林先輩が叫んでいる。あれ?二人って付き合っているんじゃないの!?今、川島って…。ま、それどころじゃないか。

「ゼロ！ コード発動！！」

『了解！ コード発動！』

オレは二十秒時を止め、その間にまなみの所に行き、ぶつかる寸前のボールを蹴り飛ばす。時が戻った瞬間、ボールは蹴ったヤツの顔面に飛んでいった。

「大丈夫か？まなみ。」

オレの後ろで目を瞑っているまなみに言った。

「え？…劉君？」

「ケガはないか？」

「え！？あつはい。劉君のおかげで／＼／＼」

まなみはそう言つと顔を赤くしてポーツとしている。ホントに大丈夫かな？

「じゃ、試合に戻るよ。」

オレがグラウンドに戻り試合が再開した。

結果、あの後もう一点決め、3・0で勝った。

「やったー！劉ちゃんかつこいいのー！！」

「うん。かつこよかったねー！」

「ま、まあまあね。／／／」

「アリサちゃん照れちゃって。」

「な！？／／／べ、別に／／／／／」

なのは達も喜んでいた。

「あ、あの、劉君さつきはありがとう！／／／／／」

まなみがタオルとスポーツドリンクを渡してきた。

「ありがとう。そんな大したことはしてないよ。」

汗を拭きながら、ドリンクを飲む。

「そ、それとね。劉君、格好良かったよ！／／／／／」

まなみはそれだけ言うと言っていると走って行ってしまった。

現在チームの皆は翠屋でごちそうになっている。オレはなのは、フイオネ、アリサ、すずかの四人と一緒に席に座っていた。クリスとゼロはスリープモードだ。

「劉ちゃんってサッカーやってたの？」

「いや、やってないよ。」

「アンタ、やってないのに三点も決めるってどうよ？」

「そんなこと言われても。」

アリサとすずかと話していると、

「劉ちゃん？さっきのまなみっていう人とはどんな関係になったのかな？かな？」

目のハイライトが消えたのが聞いてきた。

「さっきも言ったけど友達だよ。」

「ホントなのかな？かな？」

なのはさん……怖いよ…。

「私もそこんとこ聞きたいな。」

「フィオネもかよ!？」

オレがため息ついてシュークリームを食べているとまなみがこつちに来た。

「あの、お隣いいですか？」

「うん。いいよ。」

まなみがオレの隣にイスを持ってきて座ると四人から殺気がとどいた。

「四人ともどうしたんだよ？」

「……別にい!」「……」

いや、四人とも怒ってるよね？

「あの……」

「ふえ？」

急に呼ばれて変な声を出してしまった//////

「私迷惑でしょうか？」（涙目+上目遣い）

そんなんで聞かれて断れるはずがない。可愛すぎるよ！

「そ、そんなことないよ／＼／＼」

やばっ。顔が赤くなっているかも……。四人の殺気を受けながしながら、まなみと話していると今度は小林先輩がこっちに来た。

「今日は来てくれてありがとな！」

「こちらこそ。ボクも楽しかったですよ。」

ん？小林先輩の手に青い石みたいなのが握られていた。たぶん、ジュエルシードだろう。なのはも一瞬見るが、すぐに目をそらした。

「川島、渡したいものがあるんだ。ちょっと来てくれるか？」

まなみは頷いて、小林先輩の後についていった。

(さて、これからが本番かな)

第10話：苦い経験を通じて得たものは今後の宝になる。前編（後書き）

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です！」

フィ「フィオネです!!！」

マ「今回は前・後編に分けました。」

劉「ま、見れば分かるよ。」

フィ「そして、皆様に前回のアンケート結果を発表しようと思えます！」

劉「アンケート？なんだそれ??」

マ「まあ、いいから。これ食べるか？」

劉「それって、バラランシヤ様から頂いたキャンディじゃん。これおいしかったんだよね〜!!あむ!……「□□□□」

ピカーカーッ!!

マ「名前は……………」

フィ「ゴクリ」

マ「『瑠璃』に決定しましたあ！！！」

フィ「おおお！可愛い名前じゃん！」

瑠「ふえ？私の名前ですか？」

マ「おう！こちらはA r i s h i a様がつけてくださった名前だぞ。」

フィ「よかったね。瑠璃ちゃん！」

瑠「う、うん／＼／ありがとうございますう／＼／／」

マ「ほかの読者の方々からもたくさん可愛い名前がいっぱい来て、正直本編を書き終わるまで悩んでいました。」

瑠「えっと、アンケートに答えてくれた読者の皆様ありがとうございました。」

マ「いや、よかった。無事決まって!」

フィ「ちなみに、アンタはなんてつける気だったの？」

マ「え?うん。………劉子?」(笑)

フィ「………感想コーナーです。ほら、瑠璃ちゃん。」

瑠「は、はい。アリア様、メガネ様、天宮翔様、A r i s h i a 様
感想ありがとうございます。」

マ「今後も、よろしくお願いします!あと、無視はやめてください。
フィオネさん!」

フィ「では、次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の
輪廻物語』もヨロシクお願いします!」

瑠「お願いします!」

フィ「ではでは!」

マ「だから、無視すんなあああああ!……!」

第11話：苦い経験を通じて得たものは今後の宝になる。後編（前書き）

では、後編始まります！

ちなみに、念話や通信は《》にします。

第11話：苦い経験を通じて得たものは今後の宝になる。後編

あれから一時間くらいして解散したので、オレとなのはは士郎さんと一緒に家に帰っていた。

（そろそろかな〜。）

読書しながら考えていると、

《なのは、劉！ジュエルシードだ！！》

ユーノから念話が届いた。すぐに隣からドアが開く音がある。

「ゼロ！セットアップ！！」

『set up』

「フィオネ！転移をした後にすぐに結界を！」

「わかった！じゃ、行くよ！」

オレもバリアジャケットを展開して、いそいで反応があった場所に行く。

すると……、

「な、なんだ……これ……？」

オレが目にした光景……それは、原作とは比べ物にならないほどの大きな木があり、さらに今も伸び続けている枝や、根は町を破壊していた。

「結界は張ったから、これ以上の被害はないと思う。」

フィオネが隣に来て言うが耳に入らない。

「劉ちゃん……！」

なのはが顔を青くしながら近づいてきた。

「ど、どうしよう。私さっきキャプテンの人がジュエルシードを持っているのを見かけたのに……勝手に見間違いだと決め付けて……町が取り返しつかない事に……。」

涙を溜めながら言うなのはを、そっと抱き寄せた。

「大丈夫、心配しないで。誰にだってミスはある。ただ、その後にどうやってそのミスを取り消すかが問題なんだ。今、なのはがやることはここで泣くことか？」

「グスツ！ちがう！私は一刻も早くジュエルシードを封印する！そして、もうこんな過ちを犯さない様にする……！」

なのはは涙を拭い、オレから離れる。

「よし！じゃ、なのはがジュエルシールドの場所を特定、ボクがダメージを与えるから、その間に封印の準備を。」

「わかったなのー！！」

なのはは、レイジングハートを構えなおし、空に上がる。

《ユーノ！》

《なに、劉？》

《今からあいつに、どでかいダメージを与えるからフィオネを借りる。だからユーノ一人で結界の強化を頼める？》

《まかせて！僕だって今回のことは責任感じているんだ！そのくらいなら！！》

ユーノに連絡しオレも空に上がる。

（今回のことはすべてオレの責任だ。原作を知っているからって、こういった状況を考えていなかった……。実際に、ジュエルシールドを取り込んだバケモノは強くなっていったのに…オレはそれを頭に入れておかなかつた…。なにが、全ての人をまもるだ…。オレは何一つ守れていないじゃないか！！）

「劉ちゃん！！」

フィオネがこっちに来た。

「フィオネ、今からどでかい魔法を使う。だから、力を貸してくれ

「！」

「まかせて!!！」

「「ユニゾン・イン!!！」」

オレはフィオネとユニゾンして今も大きくなっている木を見据える。

『劉ちゃん!!』

「ああ。今回はおまえの力も借りるよ。クリス！セットアップ!!！」

『やっとね！set up』

オレの右手にクリスのファーストモードの剣が握られる。

(これからは、回避できることは回避していく。妥協しない。これからは……絶対に!!！)

《劉ちゃん!!！見つけたの!!》

なのはから念話がかかる。

どうやら、ジュエルシードは木の最深部にあるらしい。

「わかった。今からそこに向かう!!！」

オレは、なのはの元へ向かう。

途中、枝や根が邪魔してくるが、クリスで斬っていく……だが、

「クツ！枝や根が邪魔だな。」

何度斬っても、すぐに斬った箇所から復活してキリがない。そして、意思があるのか。今も枝や根はオレの方に向かって高速で伸びてくる。

「面倒くさい！！ゼロ！魔力変換【炎】！！」

『おう！魔力変換【炎】！』

クリスの剣先に全てを燃やし尽くす炎が纏わりつき、オレの足元に赤色の魔方陣がでる。

「全てを燃やし尽くせ！ブレイジング……」

クリスをこっちに向かってくる枝や根に向けて振り切る。

「……ボルケーノ……！！」

瞬間、オレの目の前にあった枝や根がすべて燃え尽くされ、灰になり、消える。

「ハア。早く向かうぞ！フィオネ、スピード上げれる？」

「全然いけるよ！」

「よしーじゃ、とばすぞー！！」

オレはまた、なのはの元に向かった。

「劉ちゃん！こっち！！」

なのはの所に着くと、まなみと小林先輩が木に守られる形となっていた。

「ここなんだな？」

「うん。私は封印の準備に入るの！」

なのはは、レイジングハートをシーリングモードにした。

「クリス、カートリッジ・ロード！」

『Load Cartridge』

オレは三発カートリッジをロードして詠唱を開始する。

「万象を成しえる根源たる力よ、太古に刻まれしその記憶。わが呼び声に答え、今ここに蘇れ！！」

クリスから赤、青、緑、黄の球体が出てきて木を困う。

「いくぞ！エンシエントカタストロフィー！！！！」

瞬間、四つの球体は光りながら、木の周りを高速で回転し始め、最深部にあるであろうジュエルシードに向かって衝突し、木を呑み込む。

その時に、すさまじい光と衝撃が襲う。

「クッ！……なのはだけでも！」

オレはなのはの前に立ち、

「^{トレスオン}投影開始！アイギスの盾！！」

アイギスを出現させ、衝撃が終わるのをまつ。

「ふう。やっと、収まった……。」

「助かったなの〜」

オレは衝撃が収まったのを確信し、アイギスを消す。辺りを見ると、本体が消えたからであろうか、枝や根はすべてなくなっていた。

《ユーノ、よく耐えたよ。》

《少しは加減してほしいよ……》

ユーノはさっきの衝撃を漏らさないように結界を維持しきっていた。

「ホントたいしたもんだよ、あいつは……」

本体のあった場所を見ると、まなみと小林先輩とジュエルシードが残っていた。

「なのは、封印お願いね。」

「うん。リリカルマジカル……」

封印をなのはに任せてオレはまなみに近づく。

(町の人はユーノの結界のおかげで記憶には残っていないだろうけど……この二人にはあるだろうな……しょうがないか……)

「劉ちゃん、封印が終わったの!」

なのはとユーノが封印を終え、オレの所に来た。

「マネージャーさん達は大丈夫なの?」

なのはは二人のことを心配していた。

「ああ、ケガはないよ。……ただ、今日の記憶は消させてもらおう。」

「「え!?!」」

なのはとユーノが驚いていた。

「町の人々はユーノの結界のおかげでこの事は記憶に残っていないけど、この二人は、この出来事を中心にいたんだ。絶対に今日の出来事を覚えているんだよ……だから……。」

「そんな……。」

なのはが泣きそうになっている。オレはなのはの頭に手をのせ撫でてやった。

「なにも、今までの記憶を消すんじゃない。今日だけを消すんだ。そりゃ、記憶を消すこと自体ダメなことなんだが……。」

「じゃ、この出来事だけを消すことは？」

ユーノが聞いてきたが、

「ダメだ。今日の何かがきっかけで思い出すか、わからないだろう?」

「それは……。」

ユーノも顔を俯かせる。オレは二人に背を向け、まなみと小林先輩の額に手をのせる。

「二人とも……ごめんなさい……」

オレの手が光り、その光りは二人の頭の中に消えていった。

「これで、今日のことは何も覚えていない。さ、二人をどこか別の場所に移そう。」

オレは近くに公園があったことを思い出し、そこに転移した。オレ達はその場からいなくなると同時に結界は解けて、町も元に戻っていた。

二人を公園の寝かせると、ちょうど目をさました。オレたちは慌ててすぐ近くの遊具に身を隠した。

目を覚ました二人は、辺りを見回し公園と認識したのか、普通に帰って行った。

「「ユニゾン・アウト」」

ずっと、ユニゾンしっぱなしだったから、解除するとフィオネがオレの胸ポケットに入り、爆睡をきめこんだ。

「まあ。今回が初のユニゾンしての戦いだったからな。」

オレがフィオネに向かって微笑んでいると

「今回のことは私のせいだ。」

なのはが今回の事は自分のせいだと言ってきた。

「なのは、自分を責めないでくれ。それに今回のことはオレのせいでもある……」

「ううん。私、今回の事で魔法の恐さを改めて知った。今までは劉ちゃんやユーノ君のお手伝いって気持ちでこの魔法を使ってきたけど、これからは自分でこの町を守るために使っって決めたの！」

「…そっか……。」

オレはなのはの頭を撫でながら、心の中でエールを贈った。

翌日、いつもの四人組で昼食をとっていると、普段は誰も来ないはずの屋上に二人の男女がやってきた。

まなみと小林先輩だ。

まなみはオレに気がつくど、小林先輩と少し話をして小林先輩を校舎に帰し、こっちにやってきた。
オレの前まで来ると、

「また、助けてもらっちゃったね／＼／＼／＼／＼ありがとう、劉君／／／」

と耳元で囁き、

「ん
ん
!!?
」

「……っ
ん
/
/
/
/
/
」

オレの唇にキスをしてきた。

「 「 「 …… つ ! ! ? ? ? 「 「 「 「

ほかの三人は固まっていた。

「……んん、ぷはぁ。い、一応ファーストキスなんだからね!!！／
／／／／／／／／／／／／／／／」

唇を離れたまなみはそう言うと、走って校舎に戻っていった。

「……………え……………？……………なぜ……………??」

オレはやっとの思いで言葉を発せたが、これ以上は出てこなかった。

その後、オレ達四人はそのまま、昼休みが終わるまで動くことができなかった。

マ「わあ！劉がキレたああ！！」

フィ「あたりまえよ！ハイ劉ちゃん、これ食べて！！」

ポイ（フィオネが劉の口に性転換キャンディを投げ入れる音）

劉「あむ！コロコロ…」

ピカーーーー

瑠「ふえ………？」

マ「ふう。よくやった……。フィオネ……」

フィ「さすがに、ヤバかったわね。」

ゼ「フラインプレーだな。』

瑠「ふえ？な、なにがですか？」

マ「なんでもないぞ。」ナデナデ

瑠「ん……／／／／／／／」

フィ「さて、感謝コーナーです。」

マ「紅様、ブラックサレナ様、メガネ様、A r i s h i a様、月光閃火様、天宮翔様、感想ありがとうございます!!!!」

瑠「だんだんと感想が増えてきているね!」

マ「そうだね。読んでくださっている皆様には感謝しても仕切れないよ!」

フィ「そして、メガネ様からはバースデーケーキとデバイスに組み込むと性格、言動が『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界』の主人公のコダイ君のデバイスのレイになるチップ。そして、本編でコダイ君が来ていたチアガールの衣装とそれを着ている写真（太もも、ヘソチラでツインテール）を頂きました。ありがとうございます!」

マ「うひょ〜!!コダイ君のヘソチラツインテだ〜!!!!!!」

フィ「…完璧に女の子よね……。」

マ「そして性格が変わるチップはすでにクリスにはめ込みました。」

フィ「なんか最近クリスがレイに嫉妬して口が悪くなってきたので、【しょうがなく】この様な処置をとらせていただきました。」

ク「ん?なんのコト??」

ゼ「もう、おまえ誰だ…?」

マ「そして、バースデーケーキですが、こちらは、瑠璃の名前が決

まった際に、コダイ君が瑠璃の誕生日ということでした。さっそく食べてみよう!!」

瑠「やったあ!いただきます!はむ…もぐもぐ。」

フィ「いただきます!…もぐもぐ。」

マ「もぐもぐ…これはまた、うまいな!二人はどうだ?」

瑠・フィ「おいし〜〜い!~!~!」

マ「よかったなあ、二人とも。コダイ君、大変好評でした!」

ク「イイナ、イイナ〜!」

ゼ「……………(汗)」

マ「あとは、このチアコスを瑠璃に着てもらおう!!」

瑠「!!ええ!?わ、わたしがですかあ!?!」

フィ「いいね〜!似合うよきつと!~!」

瑠「でも〜〜。」

マ「いいから。ほら、コスチュームチェンジ!~!」

少々お待ちください。。。。。

「マ、はい。おわりましたーほら、じつちじつよ。」

瑠「~~~~／／／／／／／／／／／／／／／／」

フィ「わあ！かわいいよ〜瑠璃ちゃん！〜」

ゼ『ふむ。なかなか。』

ク『かわいいよ〜！』

瑠「ありがとうございます／／／／／／／／／／／／／／／／（ボンッ）

マ「いいね〜。そして、ほっぺふにふに。」

瑠「ひゃ！や、やめてください〜／／／／／／／／／／／／／／／／」

フィ「アンタはやりすぎよ〜！〜」

ガスッ

マ「どうはあ！〜！？？？」

フィ「さて、メガネ様。素敵なお土産ありがとうございます！〜」

ク『こんごもヨロシクおねがいます！〜！』

瑠「おねがいます！／／／／／」

フィ「では、駄作者も伸びてしまったので、今回はこの辺で〜！〜」

瑠「次回もまた、あいましようね？／／／／／」(にっ)

第12話：初対面の人には第一印象は大事だぞ！…オレは終わったけど…。

今回は短めです。

では、第12話はじまります！

第12話：初対面の人には第一印象は大事だぞ！…オレは終わったけど……。

今オレはバスに乗っている。恭也さんとなのはに挟まれて。ユーノはバックの中で、フィオネはオレの胸ポケットで寝ている。ポケットからフィオネの頭が見えていると思うが、人形だと思われると思う。

で、なんで、バスに乗っているかというと、すずかの家に呼ばれたからだ。お茶会をやるらしい。そして、すずかの家は何気に始めた。

（お茶会か。今日はフェイトとの初会合の日でもあるんだよね。
あいつは絶対に救ってやらなきゃな。）

フェイトのことを考えていたら段々と眠気が襲ってきた。

（ふわぁ。最近ジュエルシード探して寝不足だったからなあ。少し眠るか……）

s i d e o u t

なのは s i d e

今日はすずかちゃんにお茶会に呼ばれました。なので、私は今お兄ちゃんと劉ちゃん、フィオネさんとユーノ君と一緒にバスに乗っています。

ふと隣を見てみると、さっきまで考え事をしていた劉ちゃんが眠っていました。

(はう。とつてもかわいいの／＼／＼)

私は劉ちゃんの寝顔を見ながらこの前のことを考えていました。

(いつもはこんなに可愛いくて…でも魔法を使うときはとつてもカッコよくて、頼りになる劉ちゃん。そんな劉ちゃんがこの前、マネージャーさんとキスしたんだ……。その後、マネージャーさん達に聞いてみたら、キャプテンの人と付き合っているって言うし、劉ちゃんとキスした事自体忘れてるし……。記憶は消したはずなんだから、劉ちゃんの事は忘れてるはずなのに。なんで劉ちゃんとキスするのぉ!!……もっ、もしかして劉ちゃんのことば恋の力で思い出したということなの!?!……そんな……恋の力はおそろし

いの…。)

と、私が色々考えて頭を抱えていると、お兄ちゃんが

「なのは、着いたぞ?」

と着いたことを教えてくれました。

「お兄ちゃん、劉ちゃんはどつするの?」

私が劉ちゃんを起こそうとすると

「いや、気持ちよさそうに眠っているし、劉は俺が連れて行くよ。」

お兄ちゃんはそう言うと、劉ちゃんをお姫様抱っこしました。

お姫様抱っこされている劉ちゃんは、とっても似合っていました。

s i d e o u t

劉 side

(あれ？まだ着かないのかな？)

目を開けると、目の前に恭也さんの顔がありました。

(え？バスに乗っていたはずじゃ……)

そして、横を見てみると、すずかの家がありました。

(ああ。バスで寝ていて起きなかったオレを恭也さんが連れてきてくれたのか。……OK、よく分かったよ。けどさ……)

「なんで、お姫様抱っこなんだよー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「お？劉起きたのか？」

「劉ちゃん、おはようなのー！ー！」

と、呑気に言ってくる高町兄弟。そういうことじゃなくて……

「は、はやくおろしてよー！」

こんな所、すずか達に見られたら

ガチャ（ドアが開く音）

おわった……

すずかと忍さん、ノエルさんとファリンさんが出てきて、四人とも目を丸くしていた。

「きよ、恭也さん、早くおろして……！！／／／／／／」

オレは恭也さんにおろしてもらい、恭也さんの後ろに隠れた。

「あう……／／／／」

やばい。今のオレは顔が真っ赤だ……は、恥ずかしい……。

「あの、君は？」

と忍さんが聞いてきた。

「ボクは天道劉です。よろしくお願ひします／／／／」

「私は月村忍、すずかの姉よ。よろしくね。」

オレは忍さんと軽い握手をする。

「劉つてことは……君が入学式の前日にすずかとアリサちゃんを助けてくれたって言うっ?」

「あ、はい。たぶんボクです。」

オレはあの時の事を思い出す。つか結局、忍さんにはバラしちゃったのか…(汗)

「でも、助けてくれたのは男の子だって聞いたんだけど……」

「私もそのように聞いております。」

ノエルさんも話しに参加してくる。

「あのね、お姉ちゃん、ノエルさん。劉ちゃんは男の子なんだよ。」

「「「えっ!?!」」」

二人とさっきまで話を聞いていたファリンさんまで驚いている。オレはもう慣れたよ……。

「君、男の子なの?」

「はい、男です。あと、劉でいいですよ。」

と、答えると同時に抱きかかえられた。

「お姉ちゃんと楽しいことしょつか!?!いや、するのよ!?!」

「ふえ?ちよっ!?!」

オレはそのまま、忍さんに抱きかかえられたまま拉致されてしまった。

残されたのはとすずかは啞然として、ノエルさんとファリンさんは苦笑。恭也さんはため息をついていた。

部屋に連れてかれたオレは……

バカが一人逝きました。

「なに言ってるの！？さつきは止めてくれたじゃん！！」

「いや！おまえのウエディング姿を見たいんだあああああああああ
あ……………！」

「ウエディングじゃないし、裏切られたああああ……………！！」

オレは泣きながら忍さんの部屋を出て行った……女装姿のままです……。しばらく走っていると月村家の庭？というより、森みたいな所になりました。

「…グズツ！……ここ……どこ……？」

オレは、迷子になったのかな？と思いながら歩いていると……

「あの、そこの子……大丈夫ですか？」

金髪の少女が話しかけてきた。

第12話：初対面の人には第一印象は大事だぞ！…オレは終わったけど…。

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

フィ「フィオネです！」

劉「ねえ。作者。春…」

マ「さっそくですが、感謝コーナー！！！」

劉・フィ「……………」

マ「月光閃火様、ばつど様、メガネ様、Arishia様、天宮翔様、バラランシャ様、感想ありがとうございます！！！」

フィ「今回は、メガネ様、Arishia様、バラランシャ様からお土産を頂きました！！！」

劉「ありがとうございます！！！」

マ「メガネ様からは、一つ目、右腕のレイを押すと起動ボイスが出る、コダイのバリアジャケット姿の可動フィギュア（かなりリアルに作られてる）をもらいました！」

劉「おお！！かっこいい！！！」（目キツラキラ）

フィ「すごいわね〜！レイちゃんも起動ボイスが出るみたいよ！」

劉「どれどれ…」

ポチ

レイ ナウローディング・・・コンプリート

劉「レイはかわいいな〜／＼／＼／」

マ「ここまでの完成度とは…」

フィ「そして二つ目！これが最後ね。コヨリの写真詰め合わせパート？です…！」

マ「キターーー！！！！！」

劉「…なんだよ？」ビクッ

フィ「一枚目、「折角待ってたのに〜」と言った感じで腰に手を当ててほっぺを膨らましてる

二枚目、「ココ、間違ってるよ？」といった感じでこっちに勉強を教えている。（メガネ着用）

三枚目、「良くできました〜」と満面の笑顔でこっちの頭を撫でて

四枚目、まるでこっちが押し倒したような感じの「ヨリ
この、四枚だね!!」

マ「おい!なんだこれ?誰だ!!一枚目の「ヨリちゃんを待たせた
のは!!」

フィ「二枚目はメガネ着用だね!かわいい!!」

マ「三枚目は…ま、満面の笑み…だと?…ハアハア」

劉「ん…//たしかに…かわいい//////」

フィ「ラスト!まるでこっちが押し倒したような感じの「ヨリちゃ
ん」

マ「ハアハアハアハア!!」

劉「うっ!こ、これは…//////」

マ「か、かわいすぎる~~~~!!!!!!」

劉「メガネ様、コダイ君、コヨリちゃん、ありがとうございます!
!!////////」

マ「ハアハア、次は、A r i s h i a様からです。」

フィ「劉ちゃん、あ〜ん!//////」

劉「ん？あ〜ん。」

ぱくっ！

劉「コロコロ。あーおいしいキャンディだー！」

ピカーー！

瑠「ほえ？」

マ「Arishia様からのお土産は『魔法少女リリカル……なんとか！』の主人公、暁優から瑠璃にメッセージです！」

瑠「え！？優お兄ちゃんから！？／／／／／／／」

マ「そっだよ！ではー！」

優『瑠璃ちゃん、可愛いね』

フィ「では、私も!」

瑠「もぐもぐ。おいしいわね〜!」

フィ「うん!おいしいわね〜!」

瑠「私、春お兄ちゃんも好きだな〜／＼／＼／＼」

フィ「ふふつ。その言葉、春人君も喜ぶわよ!」

マ「へへっ!じゃ、俺はこの余っているのを…」

フィ「え!?!ちよつとまて」

マ「あむ!もぐもぐ……う!?!?!ばあ!」

フィ「あくだから、待ってって言おうと思ったのに」

瑠「えつとね〜。作者が食べると、毒に変わるみたいだよ?」

マ「くつそ〜!…春…人……め」

フィ「そこで、弱っている作者に残念なお知らせです!」

マ「なんだよ…?」

フィ「作者には春人君から特別に、核弾頭投下×100(マーボ―
様限定)

天地乖離す開闢の星真名解放×100(マーボ―様限定)が送られ

輝「大丈夫だ。そこまで、柔じゃないからな。」

フィ「そう？ならいいわ。」

瑠「輝刃お兄ちゃんは優しいね〜！」スリスリ（瑠璃が抱きついたまま輝刃に頬擦りしている。）

輝「そんなことはないぞ。／＼／＼／＼」（照）

フィ「ふっふ〜！照れちゃって〜〜！」

輝「うるさい！でも、瑠璃は可愛いなあ。／＼／＼／＼」

瑠「そうだ！これ、私が作ったクッキーなんだけど…」

輝「瑠璃の手作りか！どれどれ…もぐっ」

瑠「…どうかな？」

輝「……」

瑠「輝刃お兄ちゃん？」

輝「うん！うまいな！」（いったい、どんな味かと思ったが普通にうまいぞ！）

瑠「ホント！？やった〜〜！！」

フィ「よかったね〜！！瑠璃ちゃん！」

瑠「うん!!」

輝「ところで、気になっていたんだが……あそこに転がっているのは……?」

瑠「??作者だけど?」

輝「作者!? いったい何があつたんだ!??」

フィ「う〜んとね〜。とりあえず、核100個落とされて、天地乖離す開闢の星を100ほどくらつてたよ。」

輝「俺が来るまでにいったい何したんだ……」(汗)

フィ「ま、気にしたら負けよ!!」

輝「おっと、短い今日はもう帰らなくちゃ……」

瑠「ふえ? もう帰っちゃうの?」ウルウル(涙目)

輝「ああ。だが、また来るよ! / / / /」(今日は十分愛でたからな)

瑠「じゃ、じゃあ、これ。お土産に私のクッキーをどうぞ!」

フィ「月光閃火様に持って行ってあげて。」

輝「ありがとう!! 大事に持ち帰らせてもらつよ。」(瑠璃の頭をナデナデ)

瑠「…ん／／／／／／／」

輝（可愛い！！）「じゃあな！」

瑠「いちゃったね。」

フィ「だね。月光閃火様ありがとうございました！ほかの読者の方々も感想どしどし募集中です！では、次回の『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』もよろしく願います！！！」

第13話：フェイトとの会話…デバイス陣との会話 戦闘はナシ！！（前書き）

更新おくれました。

すいません。

しかも、今回も短いです……。

では、13話はじまります！

第13話：フェイトとの会話：デバイス陣との会話。戦闘はナシ！！

フェイトside

私は今、母さんに頼まれたジュエルシードというロストロギアを私の使い魔、アルフと一緒に探していた。

（この近くで反応があつただけだな。）

アルフと二手に別れて探していると、一人の泣いている女の子がいました。

「あの、その子……大丈夫ですか？」

私は女の子に話しかけると、女の子は驚いたようにこっちを見ってきました。

（びっくりさせちゃったかな？）

「あの…あなたは？」

女の子が突然私に聞いてきた。

（そうだよね。名前もわからない人が急に話しかけて来たらびっくりするよね。）

「私の名前はフェイトテストロッサ。フェイトでいいよ。」

「ボクの名前は天道劉。ボクも劉でいいよ。」

私が自己紹介をすると、おんん…劉も自己紹介をしてくれました。

(ん？なんで女の子なのに【ボク】なんだろう？)

「劉？なんで女の子なのに【ボク】なの？」

私は気になったので劉に聞いてみた。すると……

「ボクは男だ!!」

と叫んできた。

s i d e o u t

劉side

(驚いた。フェイトとこんな出会いをするなんて……。しかも女の子とまちがわれるし…orz)

オレがorz状態でいると、

「じゃあ、なんで女の子の服を着ているの？」

とフェイトが聞いてきた。

(え？あ！そうか。女装のまんまだからまちがわれたのか！)

「これは無理やり着せられたんだよ。」

「そうだったんだ。でも、似合っているよ？」

(いや、似合っていてうれしくないから!!)

オレは心の中で突っ込みをいれながらも疑問に思ったことを伝える。

「フェイトこそなんでここに？ここは、ボクの友達の家なんだけど

…」

「え？そうなの？ずいぶん広い家だね。」

「うん。そこは同感だよ。」

フェイトは驚きながら周りを見渡し再びオレの方をみて、さっきの質問に答えてくれた。

「ここには探し物があるんだ。」

「探し物？」

ジュエルシードのことなんだろうが、オレはフェイトに聞き返す。

「うん。母さんに頼まれたもので、とても大事なものらしいんだ。」

「じゃあ、ボクもその探し物を手伝うよ。」

「だ、ダメだよ！この探し物は危険だから。劉を巻き込んだら……ダメだ……っつ！！？？」

と、そこでフェイトが急に振り返った。ジュエルシードの反応だ。

「ごめん、劉。探し物が見つかったみたい！」

フェイトはそう言うと、反応があった方に走り出した。

「フィオネ？」

オレが呼ぶと、ご機嫌斜めのフィオネが転移してきた。

「もう、今まで出番がないってどういうことなの！？それに、劉ちゃんはそのことを置いていくし……」

「ごめん、ごめん。でも、忍さんから逃げるにはさあ……。」

オレがため息をつきながらフィオネに言うと、

「ま、まあ、劉ちゃんの可愛い姿が見れたから今回はいいや／＼／＼／＼／＼／」

と、一人でうんうん頷いて納得していた。

「ゼロとクリスも準備はいい？」

『ああ、俺はいつでも。』

『私も平気よー！で、今回はどうするの？私と劉ちゃんのおの魔法で封印しちゃう？？』

ゼロの準備はいいらしいが、クリスはフルメンテが必要なほどバグがおきているらしい。

「残念だな。今回はクリスの出番はないよ。」

第13話：フェイトとの会話：デバイス陣との会話 戦闘はナシ！！（後書き）

マ「どうもー作者のマーボーです！」

瑠「どどどど、どうもおゝる、りゆりです！／／／／／」

マ「はあ。また噛んだよ…これで、何テイク目だ？」

瑠「ふにゅううう／／／／／」

マ「ほら、慌てずに。」

瑠「う、うん。瑠璃です／／／／／」

マ「はい。今回はゲストが来ています！Arishia様の作品、『魔法少女リリカル……なんとか！』の主人公、暁優です！」

優「暁優だ。よろしく。」

マ「いやゝ、いつもはすまないねゝ。瑠璃が迷惑を掛けてゝ」

瑠「むむむう！な、何言っているの！？／／／／／」

優「別に迷惑なんかじゃないよ。むしろ、こっちも瑠璃ちゃんには癒されているからな。」

瑠「ほえ？…私で癒される…？」

マ「あ…まずい…」

優「????」

瑠「////////////////////」ボン！（顔が真っ赤になつた）

優「えええ！？ちょ！どうしたの！？」

マ「いや、優のせいだよ？」

優「俺は何もやってないぞ？」

マ「はあ。これだから、ハーレム王は……」

優「そんなことより、瑠璃ちゃんの事が先だろう！？」

マ「安心しろ。優が瑠璃をそっと抱きしめて『大丈夫。俺は君にしかこんな事は言わないから……だから、少し落ち着いて？』って言えば直るから」

優「はあ！？言える訳がないだろう！？」

マ「あれれ？瑠璃が治らないぞ？？」

優「……しょうがないな。瑠璃ちゃん？」

瑠「ほ、ほえ……？////////////////」

優「大丈夫。俺は君にしかこんな事は言わないから……だから、少し落ち着いて？」

少々お待ち（ry

「ばい。瑠璃がべを……さばび……ばじ……だ」

訳（はい。瑠璃が目を覚めました）

瑠「優お兄ちゃん。ごめんなさい！」

優「瑠璃ちゃんは気にしないでいいんだよ。悪は成敗したからね？」（なでなで）

瑠「えへへ。ありがとう／＼／＼／＼」

優「ところで、瑠璃ちゃんは俺にしてほしい事とかある？」

瑠「ええ？なんで？」

優「ん？いや、瑠璃ちゃんも甘えたいお年頃だと思ってさあ。」

瑠「…ホントに…：優お兄ちゃんに…あ、甘えていいの…：？／／／／」(上目遣い)

優「／／／／あ、ああ。いいぞ？何でも言ってみな？」

瑠「じゃ、じゃあ、優お兄ちゃんに抱きつきたい…なあ…：／／／／」

優「え？「優お兄ちゃん…！／／／／」…：ってうわあ！？」

ドサッ

優「いてて…：って大丈夫？」

瑠「お兄ちゃん…！／／／／」スリスリ(優の胸に頬擦り)

優「大丈夫そうだな／／／／」(はあ。やっぱり可愛いなあ。)

瑠「優お兄ちゃん？／／／／」

優「は、はへ？な、なに！？」(っと。少しボーっとしてた。)

瑠「ふふっ。よ・ん・だ・だ・け！／／／／／／／／／／」

優「／／／／／／／／／／／／／／／／さあ、そろそろ起きよつか？」

瑠「むう……。うん、そうだね／／／／」

瑠璃が優の胸に手をつく

ズルツ！

瑠璃が手をすべらせる

瑠璃のバランスが崩れて優の方に倒れる

二人の唇がくつつく

……………チュッ

「

優「え……!!??」

マ「はやくとりかえさなきやなあ」

優「くう！今日はこれで帰る！次に会った時は………」ダッシュ！

マ「ふう。これで、ボコられた仕返しはできたぞ！おっと、感謝コーナーを、畏無様、天宮翔様、ばっど様、Arishia様、バラランシヤ様、高橋ひさ子様、ありがとうございます！次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』もよろしくお願ひします……!!」

第14話：ついに対面！なのはvsフェイト！……向かったら終わった……

今回も短くなってしまいました……。

すみません！

あとがきには、またまたあの人が……。 (汗

第14話：ついに対面！なのはvsフェイト！！……向かったら終わってた……

オレがなのはとフェイトの元に向かうと、すでになのはが負ける寸前だった。

「はあ。少し向こうで話しすぎたな……。フィオネ、結界を頼むよ。」

「

「わかったわ！」

オレがフィオネに結界を頼むと、

「いめんね」

フェイトがなのはにフotonランサーを放った。

「トレスオン 投影開始！デュランダール！！」

オレはデュランダルを投影して瞬歩でなのはの前に立つ。

「ふえ？劉ちゃん!？」

「劉!?!どうしてここに!？」

なのはとフェイトが驚いているが、オレは無視してフォトンランサーを斬って、なのはを守った。

「ふう。危なかったな」

「あ、ありがとうなの。」

「劉も魔導師だったんだ……」

オレがなのはに向かって話していると、フェイトがオレに言った。

「そうだよ。フェイトこそ……魔導師だったんだね。」

「え？あ、うん。……ごめんね、劉。隠していて……」

フェイトが謝ってきた。

(フェイトって結構律儀だよな。)

「いや、あの時は言う暇がなかったし……。それにボクも言わなかった訳だし……、ボクもごめんね。」

「私も全然いいよ。」

「ジーーーー」

オレがフェイトと話しているとなのはの視線を感じた。

「なに？なのは？？」

「劉ちゃん、あの子と仲がよさそうなの」

「あ、ああ。うん。さっき会ったんだ…。で、では、フェイト。ここからは本題だ…(汗)」

オレは慌てて話を戻す。

「フェイトの探しものって……ジュエルシードの事？」

「うん、そうだよ。…劉も知ってたんだ……ジュエルシードのこと…。」

「まあね。それで、ボク」これだけは、劉にも譲れない!!」「…おっとー!」

ボクも手伝うよ、と言おうとしたらフェイトがいきなりバルディッシュで斬りかかって来た。

(まずいな。戦う気はないんだけど。)

それでもフェイトは斬りかかって来るから、オレはその一閃、一閃をデュランダルで受け止めていく。

「劉って強いんだね。」

「それは、どうも！フェイトも強いじゃん！」

「ふふつ。ありがとう」

なんとか、フェイトとは会話する余裕がある。

「なあ、フェイト。ボクはたて「ソニックムーブ！」……って話を聞いてくれない！？（泣）」

フェイトはさつきよりもさらに速くなり、オレに斬りかかって来る。

「だったら、こっちも！ゼロ！」

『ソニックムーブ！！』

オレもソニックムーブを使い、フェイトの速さに対抗していく。

「劉も使えたんだ……っね！」

「まあね、つと！」

さらに速くなっても会話はやめない。

「あのさ、フェイト。ボクはたて「劉！今から大きい魔法を使うよ！絶対によけてね！」……………」

(なんで普通の会話はできるのに……しかも、さっきと同じ所で区切られた……)

「いくよ？バルディッシュ！」

フェイトが上空に上がり、大きな魔方陣を形成する。

「ハアアア！サンダーレイジ！！！」

瞬間、その魔法陣からでかい雷が落ちてきた……って、

「よりもよって、サンダーレイジ！？」

オレが面食らっている間も雷は唸りをあげながら落ちてくる。

(よけてねって、後ろにはなのはがいるし……。こいつで抵抗するしかないか。)

「ゼロ、魔力変換【雷】！」

『了解！魔力変換【雷】！！』

「天光満つるところ、我は在り。黄泉の門、開くところに汝在り。出でよ、神の雷！！！」

オレの腕には青色の魔法陣がいくつも形成されていき、向かってくる雷に手の平をむける。

「インディグネーション!!!」

瞬間。オレの手の平からは、神の雷が放出される。

「くっ!!!」

フェイトが対抗しようと魔力をこめたらしいが、神の雷はサンダーレィジを簡単にのみこんだ。

「フェイト!よける!!!」

「……うん!」

フェイトにあたる前に忠告をして避けさせた。

「ふう。劉、また今度……ね。」

フェイトは自分の魔法が破られた事に驚いていたものの、すぐに飛んでいってしまった。
ちやっかり、ジュエルシードを持って……。

「なのは、大丈夫か？」

オレはバリアジャケットを解除し、なのはに近づきながら聞く。

「劉ちゃん、ありがとうなの！あと、その服似合っているの！..！」

「え？あ〜〜」

そういえば、女装のままだったな.....。

「とりあえず、すずか達の元に向かうぞ。フィオネはアウトフレームになって、あとから来た事にしよう。」

「やったあ！私も遊べるぞ〜〜！..！」

ハイテンション気味のフィオネとなのは、あと.....

(そういえば、ユーノもいたんだ.....)

ユーノも連れて、すずかの元に向かった。

戻ると、女装姿のオレを見てアリサとすすかが鼻血を出したのは…
まあ、また今度……？

第14話：ついに対面！なのはvsフェイト！……向かったら終わってた……

マ「はい！短いですが、14話を投稿しました！作者のマーボーでつす！」

瑠「瑠璃です／＼／＼／＼／＼」

フィ「フィオネです！」

マ「感謝コーナーです！メガネ様、天宮翔様、月光閃火様、ばつど様、感想ありがとうございました！」

フィ「なんで、瑠璃ちゃんは、顔が赤いの？」

マ「え？それはな、………という事があったんだよ。」

フィ「へえ〜！なるほどね〜」

春「なるほどな〜〜！」

マ・フィ「！！！！？？？」

春「楽しそうな話だったな………実際、話自体は不愉快だったかな……」

マ「こ、今回は『神に何度も殺された青年』の主人公、春人さんがおこしになりました……」ガクガク

フィ「これ、前回撮った瑠璃がたれている写真です。」

春「おう。一応貰っておく…／＼／＼／＼」

マ「こいつ、赤くなってい」「死ぬ～～～！！！！」「…ガッブ!?」

ドガアア!

フィ「…ドンマイね!」

春「おまえ、前回瑠璃に何をした!?あゝあ!?!」

マ「し、知らない!オレじゃない!」

春「いい度胸だなあ!おい!」

瑠「は、春お兄ちゃん!喧嘩はダメだよ!」

(瑠璃が春人に抱きつく)

マ(勝った!)

春「／＼／＼／瑠璃、これは喧嘩じゃない。制裁だ!」(こっつ)

瑠「ふえ?じゃ、じゃあ、いいよ／＼／＼／／」

マ「よくな～～い!」

春「では、いくぞ?おらああああ!?!」

マ「……ふっ。後悔はしない……ぜ！」キラッ
(

／／／／／／／／／／／／／／

春「じゃ、じゃあな！！／／／／／／／／／／／／／／」ダッシュ！

フィ「私、空気ね。では次回もヨロシクです（泣）」

マ「今のキス写真、バラランシヤ様に送るぜ！」

フィ「生きてたのね……」

第15話：女湯！そこは桃源郷だとオレは思う！！……まあ、入りませんが…。

では、第15話ハジマリマ〜ス！！

第15話：女湯！そこは桃源郷だとオレは思う！！……まあ、入りませんが…。

フェイトとの初会合が終わって、しばらくたった日。オレ達は高町家＋月村家＋アリサで温泉に行くことになった。

（温泉かぁ。フェイトとの会合、ユーノの淫獣フラグ……。）

ユーノはもう、人だつて分かっているから淫獣フラグは……ないかな…。

高町家に月村家とアリサが合流して車に乗ることになったが、席が一人分足りない事に気がついた。

「どうしようか…?」

オレがフィオネに言うと、

「劉ちゃんが私のヒザの上に座るといいよ／＼／＼／＼／＼／＼」

と顔を赤くしながら提案してきた。

（そんなに顔を赤くしながら言ってきて…。どうしたんだ？）

そして、オレが考えている横ではなのはとアリサ、すずかがじゃんけんをしていた。

「おい。どうしたの？急にじゃんけんなんか始めて？」

「『劉^{なの}ちゃんはだまって！』」「『』」

「…はい……。」

《ねえ、フィオネ。どうしてこんなに怒っているの?》

《さあ。ホントに劉ちゃんは鈍いよね?。》

結局、オレの両隣はアリサとすずかになった。その時のなのはの顔は………思い出すのはよそじ……。

こうして無事？温泉宿に着いたオレ達は、さっそく温泉に向かった。
男湯、女湯の暖簾がかかっている前まで来ると、

「ユーノ！一緒に入るわよ！！」

「きゅ、きゅうう！？」

やはり、アリサがユーノを掴みながら女湯に入ろうとした。ユーノ
はさつきから、念話で

《助けて！》

とか言ってくるが、顔は満更でもなさそうだ……。

(やっぱり、こいつは淫獣なんだな……。まあ、今回は助けるけど…
…)

「アリサ、ユーノも一応オスなんだからボク達と一緒に男湯に入れ
るよ。」

オレはアリサからユーノを受け取ろうと手を伸ばすと……

ガシッ！

「何言ってるのよ？」

「はい？」

オレはアリサが何を言っているのか解らずに聞きなおす。

「だって私たち、劉ちゃんと一緒に入りたいし……／／／／／／／／／／／／／／／／」

「それに、十一歳以下は男の子が女湯に入っても平気なの……！」
「すずかとなのはが言ってくる。」

「いや、フィオネや桃子さん、美由希さんは？」

「私は劉ちゃんの母親よ？」

「あたしはお姉ちゃんだし！」

「私が夫である劉ちゃんを拒むとでも？そんなことないよー！！」
くっそ！ここには味方はいない。そして、フィオネはフルメンテ行き決定かな

「で、でも、忍さんとノエルさんとファリンさんもいるんだよ！？」

「あら？私は劉ちゃんなら別にいいけど？ねえ、ノエル、ファリン？」

「「はい。」」

(そうだった……。この人たちはそういう人達だったよ……)

「ああもう！つべこべ言わずに来なさーい！！！」

アリサがオレを引っ張って連れて行くこととする。

「いーやーだー！！！」

オレも男湯の方に行くこととする。引っ張り合いになったが、力ではオレのほうが上だ。アリサの腕から逃れ、その時にユーノも救出し、男湯に逃げ込んだ。

「危なかったね、ユーノ。」

「うん、ありがとう。劉」

ユーノは人型になってタオル一丁でオレを待っていた。オレもいそいで服を脱いで、タオルを巻き、ユーノの方を向くと顔を赤くしていた。

「……ユーノ？」

「な、なんでもないよ。（劉だったら女の子だって言っても誰も気がつかないんじゃないかな？）」

風呂場に入るとすでに、土郎さんと恭也さんが湯につかっていた。

土郎さんが、

「劉、ユーノ君。遅かったじゃないか。」

「いや、なのは達に捕まっついていて……」

と言ってきた後に、

「お疲れ様だな……」

「あ、あはは」

恭也さんが言ってきて、ユーノが苦笑をする。

(つか、ユーノは苦笑しているけど、元はといえばおまえを助けた
事が始まりだぞ?)

オレとユーノが体を洗っていると、土郎さん達も体を洗うために一
回あがってきた。

(そうだ!)

「土郎さん、恭也さん。背中流してあげるよ。」

オレが提案すると。

「おーじゃあ、お願いしようかな。」

と、喜んで背中を向けてくる。

じじじじ

「はーい、かゆい所はありませんかあ?」

「ははっ。それは頭を洗っている時に言うセリフじゃないかい?」

「むう、体でもいいの!//」

「そうか。…ん、大丈夫だよ。」

オレが士郎さんの、ユーノが恭也さんの背中を流す。

流し終わった後は四人で湯船につかっていた。

「にしても、僕達の貸しきり状態ですね。」

「まあ、温泉に入るには少し早いかもな。」

「ボクは広いほうが好きだからいいなあ。／＼／＼／」

「私もだ。ところで劉、顔が赤いがのぼせたか？」

「風呂に入るといつもこんな感じですよ。顔が赤くなりやすいんで…
／＼／＼／＼／」

「なるほどな。」

四人で話しながらのんびりしていると、何人かのお客さんが入ってきた。オレくらいの男の子と女の子もいる。

その人達も体を洗い湯船に入ってきた。

「いや〜気持ちいいですな〜」

「そうですね〜」

一人の男の人が士郎さんに話しかけている。そこに、恭也さんも入っていった。

(ん？あの兄妹……なのかな？こっちを見てきている…。)

しばらく、見ているとこっちにやってきた。

「こんにちは。／＼／＼／」

「どうも。君たちは兄妹？／＼／」

オレはいきなりだと思ったが、聞いてみた。

「うん。こいつは俺の一つ下の妹、香奈だ。ちなみに、俺の名前は涼。」

「ボクは劉。【男】です！こいつはユーノだ／＼／」

「香奈ちゃん、よろしく」

「うう／＼／／」

ユーノが握手しようとするが、香奈ちゃんはオレの方にやってきた。

「…あ、あの。／／／／／／」

「ん？どうしたんだい？／／／」

香奈ちゃんはオレの前まで来るともじもじし始めた。オレは困って、涼の方を見ると……

「男かよ……。せっかく可愛い子がいると思ったのに……」

と、湯船の中でorz状態になっていた。器用なヤツ……。

「なあ、涼。香奈ちゃんはどうしたんだ？／／／」

「え？って香奈がほかのヤツと話している！？」

涼がなんだか驚いていた。

「どうしたんだよ／／／」

「こいつは人見知りかMAXなんだよ。劉は気に入られたようだな。」

「ふん。／／／」

オレは香奈ちゃんを改めて見る。

「はう。劉さんってカツ」いいですね／／／／

「そ、そう？／／／」

「はい。私はカッコいいと思います／＼」

オレは香奈ちゃんのことを聞いて、

（可愛いとは言われるけど、カッコいいはあんまり言われないからなあ）

「ありがとね。香奈ちゃん！／＼」

嬉しくなって、つい抱きしめてしまった。

「ふえ！？あうあう／＼／＼／＼／＼」

香奈ちゃんが顔を赤くして丸くなった。

「劉。そろそろあがるぞ〜」

「は〜い！じゃあね、涼、香奈ちゃん。」

オレは二人と分かれて、土郎さんと恭也さんのあとを追った。

………ちなみに、ユーノは笑顔で手を差し伸べた状態で固まっていた。
た……。汗

男組みは先に部屋に戻っていた。しばらくすると、なのは達も戻ってきた。が、なのはは何やら落ち込んだ顔をしていて、アリサが怒っていた。それをフィオネとすずかが必死に宥めていた。

「どうしたんだ？四人とも？」

「今そこで、酔っ払いに絡まれたのよ！！」

酔っ払いに絡まれる……？……………ああ！アルフのことか！！すっかり忘れていたよ！

（少し会つとくか。）

なのはに念話で

《気にすんな。》

と励まし、オレはフェイトの魔力を探し、フィオネを連れて転移した。

第15話：女湯！そこは桃源郷だとオレは思う！！……まあ、入りませんが…。

マ「どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

フィ「フィオネです！」

マ「はい。第十五話でした。今回は劉がまたフラグを…」

劉「オレは好きでそんな事をしたんじゃない！」

フィ「二人はほつといて、感想コーナー！天宮翔様、月光閃火様、ばつど様、メガネ様、紅様、A r i s h i a様、バラランシヤ様、畏無様、感想ありがとうございます！！」

マ「メガネ様、バラランシヤ様、畏無様からはお土産をもらいました！」

劉「メガネ様からは、レイの応援ボイス。バラランシヤ様からはスリーベリータルト。畏無様からは『魔法少女リリカルなのは』偽リノ騎士』の主人公、安藤響介君が番外編で着ていた女性物の服（なのはのバリアジャケット風な感じの見た目）と、それでポーズをしている（涙目で訴えてるようなポーズ）写真。

更に、響介特製のシュークリームを頂きました！」

フィ「レイちゃんの応援ボイスだね〜！きいてみよ〜！」

劉「ん…可愛い」「んなことない!…!俺はレイちゃんがいればあ
ああ!…!」「…復活したよ…(汗)」

ファイ「…最後だね。」

四個目、「リュウくん…。。。。だあいすき」

劉「／／／／／／／／／／」

ク「何言っちゃってんの!?!この娘はあ!?!?!」

ファイ「ホントよ!?!劉ちゃんは私のよ!?!?!」

マ「つか、クリスいたのか…!」

ゼ「…俺もいる」

劉「レイちゃんは可愛いな／／／／」

ク「ちょっと、あなた!目を覚まさない!?!」

ファイ「そつよ!?!」

ギヤーギヤー

マ「大変お見苦しい所を…。はい、次は響介君の写真だね。」

劉「うん。いいな。これは宝物にしなきゃ／＼／＼」

フィ「劉ちゃんよかったね！あとはこれを」

ポイ！（劉の口に性転換キャンディを入れる音）

ピカーーー

瑠「皆さん、お久しぶり？です。瑠璃です。／＼／＼」

マ「ほい。瑠璃。これは畏無様からなのはバリアジャケット風の服と

響介特製のシュークリームだ。まず着替えなさい。」

瑠「うん。ちょっと待ってて！／＼／＼」

少々お待ち（ry

瑠「どう？／＼／＼／」

マ「おう！似合うな」

フィ「可愛いわあ！」

瑠「えへへ、ありがとう！／＼／＼／」

マ「そして、春人からはスリーベリータルトだと。俺が食うと致死量の毒になるタルトって……。」

瑠「いただきます！」

フィ「ま〜す〜！」

はむはむ……もぐもぐ〜！

瑠・フィ「おいし〜い!!!」

瑠「響君のシュークリームも春お兄ちゃんのタルトもおいしいよ!!!」

フィ「ホント、ホント!!!」

マ「よかったな。バラランシャ様、畏無様、ありがとうございます!!!」

フィ「そして、今回もゲストが登場!」

マ「天宮翔様の作品、『忘却の魔法使い』の銀灰さん(女装ver)です!」

銀「やっと、出番ね!銀灰よ」

瑠「ほええ!きれいなだね〜!!!」(目をキラキラ)

マ「銀灰さん、すみません。劉は今…」

銀「まあ、しょうがないわね。では、瑠璃ちゃんとどっちがイケている女か勝負よ!」

瑠「わ、私とですか!?!」

フィ「フツ!では、簡単にお料理対決よ!!!」

マ「ルールは簡単!俺の口に合う料理を持ってきた方が勝ちだ!!!」

「！」

銀「いいわ。」

瑠「が、がんばります！／＼／＼／」

フィ「では、よい！」

銀「……………」

瑠「……………」

フィ「……………」

瑠・銀「「できました・できたわ!!」」

フィ「瑠璃ちゃんは、オムライスね。」

瑠「と、得意だから／＼／＼」

フィ「で、銀灰さんは……」

銀「海の幸をふんだんに使った海鮮フルコースよ。」

瑠「ふええええええ!!??」

マ「これはまた……」

フィ「よく、この短時間で……」

マ「まずは銀灰さんから……。もぐもぐ」

フィ「どう?」

マ「う、うつつめええええええ!!!!」

銀「たいした事ないわ」

フィ「いやいや、どんだけ超人なんですか!?!」

マ「やばい!箸がとまらねえ!」

フィ「次は瑠璃ちゃんね!」

瑠「は、はい！！／／／／」

マ「フム。…ぱく、もぐもぐ……」

瑠「ドキドキ」

フィ「こっちはどう？」

マ「うん！瑠璃もおいしいぞー！なんつーか、やさしい味だな。」

瑠「本当！？やったあ！！／／／／」

フィ「で、結果は？」

マ「結果は……」

マ「引き分け!!」

フィ「こんだけのばしてこれなのかあ!!??」

ドカツ!

マ「だつてええええええええ!!!!」

キラ

銀「作者もログアウトしたし、私も帰るわ。」

瑠「あの！銀灰お姉ちゃん！」

銀「なにかしら？」

瑠「これを！！」

銀「ん？これは？？」

瑠「さつき、天宮翔様にもオムライスを作ったのでお土産に／／／
／」

フィ「瑠璃ちゃんの愛情入りね〜」ニヤニヤ

瑠「フィオネ！？／／／／」

銀「わたしとくわ。じゃ、また今度も来るわね！」

フィ「では、ゲストも帰ったところで、感想どしどしお待ちしていますー!!」

瑠「次回もよろしくお願いします………ねっ? / / / / /」(にっこり)

第16話：協力関係……………（注：裏切りではありません！（前書き）

今回は短いです…。

すみません（汗

では、十六話始まります！！

第16話：協力関係……………（注：裏切りではありません！）

フェイトside

今私たちは休憩中で、アルフは温泉に、私は森にある少し大きな石に腰掛けていた。しばらく休んでいると、アルフからあの白い子と出会ったと念話があった。

（あの子がいるんだったら劉もいるのかな？）

私は劉のことを考える。

（私は劉と戦いたくないんだけど……………。）

そんな事を考えていると、急に私の目の前に魔法陣が現れた。

「…っ！敵!？」

私はすぐさまバルディッシュを手を持ち、構える。

……………が、

その魔法陣から現れたのは……………

「よう！フェイト!！」

「はじめましてえ！劉ちゃんのユニゾンデバイスのフィオネです！」
劉と知らない女の子が劉の肩に腰掛けていた。

「は、はじめまして。フェイトテストロッサです。劉も久しぶり…
だね。／／／／／」

私はいそいで立って二人に挨拶した。

「やっぱりフェイトも此処に来てたんだね。なのはからフェイトの
仲間らしき人と会ったって聞いたからさ……。あたりだったかな？」

（なのは？あの白い娘のことかな？劉がほかの女の人といたり、話
したりしていると…モヤモヤしてくる……）

「フェイト？」

劉が私の顔を覗き込んでくる。

「…っ！！え？あ、うん。アルフは私の使い魔で、大事な家族だよ。
／／／／／」

私は劉の顔が近いことに驚いて顔を赤くしながら答えた。

「家族…ね……。」

すると、劉は少し顔を俯かせながら私に微笑みかけてきた。劉の目
は寂しそうだったが、その事について聞いて聞いてくる事を拒んでいるよ
うに見えた。

(やだ！私は劉のそんな顔見たくない！)

「そ、そういえば！劉はどうして此処に来たの？」

私は少し強引だったけど話題を変えることにした。

「え？温泉に入りだけに？」

「じゃなくて、どうして私のところに？」

「フェイトに会いたかった…じゃ、ダメかな？」(ニコッ)

「わ、私に！？／／／／」

「うん。ボク、フェイトとは仲良くしたいんだけどな」

「私もだよ、フェイトちゃん！」

劉の後にフィオネもそう言ってくれた。

「私も劉ちゃん達とは仲良くしたい／／／／……でも……私は母さんの為にジュエルシードを……」

「じゃあ、ボクとフィオネが協力してあげるよ。いいよね？フィオネ。」

「私は劉ちゃんが決めた事なら、何でも従うよ。」

「え？協力って…？」

私は劉が何を言っているのかわからなかった。

「そうすればボク達と仲良くなれるし、ジュエルシールドもお母さんの為に集められる。」

「でも、あの白い子はいいの？」

私は気になったので劉に聞いてみた。

「なのはの事も放っておけないけど、【オレ】はフェイトの事も放っておけないよ！」

「私の…ことが…？／／／／／／／／／／」

劉の言葉を聞いた時、私は嬉しかった。あの、なのはっていう子よ
り、私の事を優先してくれたことを。

そして実感した。私は劉の事が好きなんだということ。

s i d e o u t

ああは言ったけど、これって原作ブレイクしたのかな？ま、オレがいる時点で原作ブレイクしているか。

「じゃあ、アルフにも紹介しなきゃね！」

そうだ、なのはにはなんて説明しよう……。なのはとフェイトが戦わなきゃ物語りは進まないだろうし……。なにより、クロノも現れないよな。

「フェイト、どうかしたのかい？」

「うん。この前アルフに話した劉とフィオネが手伝ってくれてるって。」

「こいつらがか〜？」

なんか、すげ〜警戒されているな。

「ボクの名前は天道劉。こいつはユニゾンデバイスのフィオネ。」

「よろしく〜！」

一応アルフに自己紹介する。

「私はフェイトの使い魔のアルフだ。ところで、あんた達からあの白い魔導士の娘の匂いがするんだげど？」

「そりゃそうだ。オレ達はなのとはと一緒に住んでいるからな。」

「なのはって？」

アルフが頭に？マークを浮かべながら聞いてくる。

「あの白い魔導士の娘の名前だつて。」

フェイトが補足してくれる。

「へえ、あの娘と住んでいるのかい。」

アルフの目にさらに警戒の色がうかがふ。

「って、劉となのはって一緒に住んでいるの！！？？」

アルフと一触即発の横でフェイトが驚いていた。

「フェイト…反応が遅いよ？」

「だ、だつてえ。なんで一緒に住んでいるの？…はっ！まさか……同棲しているっていう事！？」

フェイトの妄想が爆発してたので、何で住んでいるのか話してあげた。

「そうだったのかい…」

「その、ごめんね。劉。さっきも家族の事話して」

二人が俯きながら言うてくる。

「別にいいよ。さっきは少し思い出しちゃっただけで、もう気にしてないし。それに、さっきフェイトには言ったんだけど、手伝うのはフェイトの事が放っておけないから。だから、手伝わせてくれな
いか？」

「ま、また放っておけないって／＼／＼／＼」

オレの言葉を聞いたフェイトが笑いながら体をうねうねし始めた。
……どうしたんだ？（汗）

アルфомフェイトの様子を見て、目を丸くしていたけどフェイトの
笑顔を見て、

「わかった。あんたらの事は信じるよ！これからはよろしく！」

アルфомも了承してくれて、お互いに握手する。

「じゃ、そろそろボク達は宿に帰るね。」

「うん。高町家の皆に迷惑掛けちゃダメだもんね…」

フェイトが寂しそうにオレに微笑みながら言う。

（はあ。しょうがないなあ。）

「え？／＼／＼／＼／＼」

オレはフェイトの頭に手をのせ、やさしく撫でてやる。

「…ん／＼／＼」

「今回はこれで勘弁してくれ。じゃな！」

オレはフィオネを連れて部屋に戻った。

部屋に戻ると、なのは達と一緒に寝るはめになった…。

……なぜ…？

第16話：協力関係……………（注：裏切りではありません！（後書き））

マ「どうも！作者のマーボーです！」

瑠「瑠璃です。」

フィ「フィオネです。」

ク「私の真名はクリス！女王様とお呼び！！ケーキがなければパンを食べればいいじゃない！！」

ゼ「…おまえは誰だよ……。ゼロだ…（汗）」

マ「厨くさいと思ったら、次は女王様なんだな。そこは統一しろよ。そして、『パンがなければケーキを食べればいいじゃない』だからな。」

瑠「クリスは面白いね〜！」

フィ「いや〜、面白いつていうより……ねえ？」

ゼ「いや、俺に振るな…」

ク「なんなの！？まるで私がバカみたいな言い方じゃない！！」

マ・フィ・ゼ「『そうだよ！！！！！！』」

ク「うう…もう知らない！不貞寝してやる〜！！！！！！」

マ「何のために出てきたんだよ……」

フィ「出したのは作者じゃない。」

マ「……………ここで感謝コーナー!!!!」

フィ「ジーーーーー!!」

マ「畏無様、バラランシヤ様、天宮翔様、メガネ様、A r i s h i a様、ばつど様、感想ありがとうございます!!!!」

ゼ「たくさん感想がキタな。」

フィ「そうね。こんな駄文を読んでくださり、ありがとうございますます!」

マ「そして、お土産コーナー!

畏無様からは、響介特製のパンケーキ(瑠璃に)と黒猫エリカさんとのコラボで誕生した《京華》の照れた写真(劉に)。

メガネ様からは、フィオネにコダイに作らせたメイド服を着た劉のデフォルメのぬいぐるみ(サイズ大きめ)と、重箱五段の手作り弁当(お茶付き)、黒ゴスのコダイ&白ゴスのコヨリの百合百合写真(お互いに顔に着いたクリームを舐め合ってる(もはやヤバイ写真)、髪を後ろでお団子にして、顔は殆ど見えてるコダイの浴衣姿。

バラランシヤ様からは、

1/1春人抱き枕(表:パジャマ姿・裏:パジャマが少しはだけてる)

春人への絶対命令権（使用期限・使用回数共に無限）

春人の音声入り瑠璃ちゃん専用目覚まし時計（音声は3種類＋プログラム発生機能付き）

まず1つ目。

『瑠璃、起きろ。起きないと……な？』
瑠璃の隣に来て、
耳元で囁く

2つ目。

『早く起きろ、瑠璃。じゃないと……一緒に寝てしまっぞ？』
そう言いながら、瑠璃の頭を優しく撫でる

3つ目。

『はあ、仕方ないな。早く起きないから悪いんだぞ？ チュッ／／』
瑠璃のほっぺにキスをする

写真『傷を負いながらも約束された勝利の剣エクスカリバーを構えて駆け出して
いる春人』

写真『パジャマ姿で寝ている時の春人』

チョコレートケーキ（低カロリー仕様）

春人特製果汁100%リンゴジュースを頂きました！！ありがとうございます！
うございます！」

『ファイ、劉ちゃんのぬいぐるみかあ。早く抱いて寝たいよ〜！／／／／』

瑠璃「ケーキやジュースもたくさんだね！」

マ「……太るぞ？」（ボソッ

瑠「ふ、太らないもん！！それに、低カロリーだもん！！！！／／／／／」

マ「はいはい。春人グッズを両手いっぱい持ってご苦労様ですな
〜。」「

瑠「こ、これは…宝物BOXにいれるの／／／／／」

フィ「わぁ。この重箱五段の手作り弁当おいしい！」

マ「あ！てめっ！何食ってやがる！！！」

瑠「この響君特製のパンケーキもおいしいよ〜！」

マ「瑠璃までいつのまに！？」

フィ・瑠「ふう。ご馳走様でした！」

マ「…俺…一つも…orz」

瑠「お土産を頂いたバラランシヤ様、メガネ様、畏無様には私特性のシュークリームを差し上げます！！！！／／／／／」

フィ「そして、今回もゲストが来ています！」

マ「ちょ！俺を無視しないで〜！」

瑠「月光閃火様の作品、『WOLFRANG - ウルフアング - 』狼

男は不良青年』の主人公の輝刃お兄ちゃんとその作者、月光閃火様です！」

月「やっと出番だ！月光閃火です」

輝「月臣輝刃だ。」（照）

マ「ようこそ！」

フィ「さっそくだけどうなんで輝刃君は顔が赤いの？」

瑠「ホントだね。」

月「それはね。マーボーちょっと」（そう言って耳打ちをする）

マ「ん？……うんうん……。なる〜！」

月「どう？」

マ「いいな。」ニヤリ

フィ「二人で何しているのよ？」

マ・月「べっつに〜！」

ゼ』ところで、瑠璃は何してるんだ？』

瑠「う〜ん。何かないかな〜って。でも、何も無いからおもてなし出来ないよ〜」（泣）

月「俺のほっぺにキスしてくれ!!!」

瑠「ほえ!?!?!?!?!」

輝「あゝ!?!?!」

マ・ファイ・ゼ「『はい!?!?!』」

月「た、たのむ!」

瑠「う、うん。「(ふえ〜、いきなりはやだよ〜)」

輝「おい！閃火！」

月「な、なんだ！？今はおまえにかまってい」「し〜〜ね〜〜！…！…！どぶっ！？」

瑠「ふえ、ふえ〜ん！！」

マ「すまんな、瑠璃。実は…「じよ「じよ」

瑠「…：う、うん。そうだったんだあ／／／／」

月「ごめん、瑠璃。こいつは連れて帰るからな。「(そう言って帰ろうとする輝刃)

瑠「ま、まって！…：ください／／／／」

輝「…ん？」

瑠「ちょっと、しゃがんで／／／／」

輝「あ、ああ。「(そう言ってしゃがむ)

瑠「…んっ／／／／」

チュツ！（ほっぺに）

輝「……っ！！／／／／／」

瑠「…また…来てね？／／／／／」

輝「う、うづうづん！ま、ままた、来るよ！／／／／／」（そう
言いながら動揺している）

輝「じゃあな！！／／／／／」

マ「瑠璃…やるなあ。」

フィ「ほんとよね〜」

ゼ『瑠璃はやれば出来る子だな』

瑠「で、では次回もよろしくお願いします！／＼／＼／＼／＼／

フィ「感想もどしどしくださいね〜！！！！」

第17話：迫り来る恐怖…まずい！勝てる気がしない……。 (前書き)

PV：71 / 677アクセス ユニーク10 / 189人突破！！

いまだに信じられません… (汗)
では、17話ハジマリマ〜ス！

第17話：迫り来る恐怖…まずい！勝てる気がしない……。

「むにゃ〜ZZZ」

「はあ。やっと、寝てくれたか…」

夜になるとオレはフィオネ、クリス、ゼロを連れて部屋を抜け出した。

「フィオネ、ジュエルシードの反応は？」

「そうね〜…眠いからわからないわ〜」

フィオネはそう言つと小さくなり、オレの胸ポケットに入って寝始めた。

「おまえな〜（汗）」

『劉。ちょうど、この道をまっすぐに行った先に魔力反応があるぞ』

「ホントか？さんきゅう、ゼロ。」

オレがそこに向かうと、ジュエルシードを見つけたばっかのフェイトとアルフがいた。

「あ、劉！来てくれたんだ！」

「手伝うって言ったからな。よう、アルフ。」

「おお！来てくれて、ありがとな！」

アルフの態度もだいぶ柔らかくなってきたようだ。

「ねえ、劉。フィオネは？」

「ここだよ。」

オレはフェイトに胸ポケットの中を見せた。

「ふふつ。寝ているね」

「まったく。魔力反応を辿って来ようとしたら「眠いからわからない」とか言ってるさあ」

「ん？じゃあ、どうやって此処まで来たんだい？」

アルフがオレに聞いてくる。

「そういえば、紹介していなかったな。こいつらもボクのデバイスのゼロとクリス。」

『はじめましてだな。ゼロだ。』

『私はクリス。劉ちゃんに手を出したら許さないわよ！このっ泥棒ネコめが！！』

「おい。クリス！おまえは何を言っている！？」

ホント最近、こいつの様子がおかしい……（汗

「……っ！！泥棒ネコ……。でも、私も劉は渡しませんから！」

フェイトも相手にしなくていいのに、クリスに言い返していた。

「へえ。劉は三つもデバイスを持ってんのかい！」

「うん。まあ、昔にある人に貰ったんだよ。」

オレがアルフに説明をしていると、フェイトがポケットから三角型のデバイスを取り出した。

「この子は私にデバイスのバルディッシュだよ。」

『はじめまして。』

「ああ。これからよろしく！」

バルディッシュと軽い挨拶をすませると、

「で、ジュエルシードはどうするのよ？」

クリスがどうするか聞いてきた。

「そうだったね。封印しよっか。」

「いくよ？バルディッシュ！」

『Yes sir』

フェイトとセットアップしようとする、急にジュエルシードが光りだした。

「え？なんで!?!」

フェイトがびつくりしながらオレに聞いてくる。

「たぶん、ボク達の魔力に反応したんだ!」

「ど、どうするんだい!?!」

「決まっている、封印するぞ！フィオネ！起きろ!!!」

「ふえ？な、なに!?!」

フィオネを掴まんでポケットからだすと、フィオネは寝ぼけているのか、慌てていた。

「いいから！結界を頼む!」

「う、うん！わかった!」

「アルフもお願い。」

「わかった、フェイト!」

二人に結界を頼み、オレ達は暴走しかけているジュエルシードのほうを見る。

「いけるか、フェイト？」

「私は平気だよ。」

フェイトはオレに微笑みながら言う。

「そっか。ゼロー!!」

「バルディッシュー!!」

「セーットアープー!!」

『set up!!』

オレとフェイトがバリアジャケットに変身する。

「フェイトは封印を頼める？」

「劉は？」

「ボクはあのジュエルシードを黙らせる！トレスオン投影開始!!デユランダ
ル！」

オレは投影するとジュエルシードに向かって跳ぶ。

（まだ、完全に暴走したわけじゃない……。これなら!!）

ジュエルシードに近づき、オレは一閃あびせる。

すると、ジュエルシードは簡単に静まりかえった。

「あれ？たしかにいけると思ったけど、あっけないな……」

とりあえず、フェイトに封印をしてもらい、封印を終えたフェイトはこっちにやってくる。

「すごいね、劉！暴走しかけたジュエルシードを一発で沈めるなんて……！」

「ああ。ま、これで一件落着かな。」

「うう、眠いし疲れたよ……」

フィオネがオレの頭にのってくる。

「フィオネお疲れ様。」

オレがフィオネの頭を撫でると、

「うにゃ／＼／＼／＼」

気持ちよさそうな声をだした。

（そんなに気持ちいいかな？）

「ジュー……」

オレが考えていると、フェイトから視線を感じた。

「…どうした？フェイト？」

(なんか、すっごいこっちを見ているんだけど……汗)

「りゅ、劉、私も…封印頑張った…よ？／／／／／／／」

フェイトの返事を待っていたらフェイトの口からこんな言葉が出てきた。

(ああ、そういうことか…)

「フェイトもお疲れ様」

「…ん／／／／／」

オレがフェイトの頭も撫でて和んでいると、アルフも帰ってきた。

……が、

「フェイト！劉！なのはって言う子と、その使い魔がこっちに向かっているよー！」

帰ってきたアルフは慌てながらオレ達に言ってきた。

(使い魔？…あ、ユーノのことか……)

「劉どっするん？」

フェイトが不安そうにオレに聞いてくる。

「そうだな。今回はなのはに付き合ってくれるか？あいつはフェイト達と仲良くしたいだけなんだ」

「うん。劉がそう言うなら……わかった。」

「アルフはユーノを頼める？」

「おう！まかせときな！」

これで、フェイトはなのはに集中できる。あ、あと……

「ちなみに、ユーノは使い魔じゃないからな。」

「え！？そうなのかい！？」

まあ、たしかに使い魔だと思うよな……

「そして、今回ボクは皆を見守る役だから。」

「じゃ〜がんばってね〜」

「あ！まって！……」

フィオネが転移魔法を使おうとすると、フェイトが声をかけてきて、

「もう一度……もう一度だけ……頭を撫でてほしいなあ……なんて／＼／＼／＼／＼／」

と、顔を赤くしながらフェイトが言ってきた。可愛いなあ！！！！

「いいよ。」

オレがもう一度フェイトの頭を撫でていると……

後方から、ものっそい殺気がとんできた。

オレはすぐに殺気がとんできた方向に向くと…

そこには……

目からハイライトが消えた魔王と……

その殺気にひるんでガタガタ震えているフェレットがいた……。。

オレ……何かした……？
(汗)

第17話：迫り来る恐怖：まずい！勝てる気がしない……。 (後書き)

マ「はい！作者のマーボーです！」

瑠「瑠璃です。」

フィ「フィオネです！」

ク「みんなあ！クリスマスだよ」

ゼ「…もう何も言わん……ゼロだ」

マ「いや〜今回は劉のヤツやっちゃったな〜」

フィ「ホントよ！」

ク「そうよ！何ライバル増やしてんのよ！この駄作者が！！」

マ「うるさ〜い！では、感謝コーナー！！」

フィ「月光閃火様、バラランシヤ様、畏無様、A r i s h i a様、
メガネ様、ユタ様、A I R S様、感想ありがとうございます！！」

マ「さらに、お土産もたくさんもらいました！」

フィ「月光閃様からは、輝刃特製ミートパイ。

畏無様からは、響介の相棒であるデバイス【スカイ】型で響介の音
声入時計（劉用と瑠璃用）と

フィオネに響介特製のヘアピン（星型）を。
瑠璃とフィオネと俺に、響介特製のモンブランを。

音声は劉が2つ、瑠璃が3つずつです

《劉ver》

？『いつか勝負しような！…絶対負けねえけどな』

？『頑張れ！フラグ王（笑）』

《瑠璃ver》

？『瑠璃ちゃん、ホントに可愛いよ』

？『だから…いつか遊ぼうな』

？『瑠璃ちゃんのこと…こ、これ以上は無理！／＼／＼自分でも恥ずかしいから絶対無理！！』

むう…瑠璃ちゃん、頑張ってるね 俺、応援してるから！／＼／＼』

ユタ様からは、

優特製ショートケーキと優が神になる前女装に馴れてなかった頃の
写真（涙目&上目使い）を頂きました！」

マ「うま！このモンブランうまっ！」

瑠「ショートケーキとミートパイもおいしいよ！」

フィ「響介君特製のヘアピン（星型）も気に入ったわ〜！」

ゼ「ん？作者よ、そろそろじゃないか？」

マ「ん、だな。」

瑠「もぐもぐ……ふえ？」

マ「おお！キタキタ！」

ヒューー

すどん！（見事に着地）

コ「…たく。よう！瑠璃！」

レ「はじめましてカナ？」

瑠「わぁ！コダイ君〜！」（コダイに抱きつく瑠璃）

コ「おっと！元気か？」

瑠「うん！／＼／＼／」

ク『ぶつぶつぶ』

マ「どうした？クリス？」

ク「クツクツク！やっと……やっと……会えたわね！レイ……！！！」
レ「ふえ？」

マ・フィ・ゼ「……ああ。始まったよ……」

ク「よくも、私の劉ちゃんに色目使ってくれたわね……！」

レ「ふええ！？ワタシそんなつもりじゃ……」（泣）

フィ「まちなさい……！！！」

ク・レ「……え！？……」

マ「おお！フィオネ……！！！」

フィ「劉ちゃんは私のものよ……！！！」

マ・ゼ「……いや、そっちかよ……！！！」

ク「へえ。いうじゃない。フィオネさんとやら……」

ゼ「……いや、フィオネって知っているだろ……！？……」

フィ「ふん。だからなにかしら？クリスさんとやら……」

マ「……いやだから……」

ク『なら勝負しましょうか？』

フィ『負ける気がしないわね！ではっ！』

ク『かかってきなさい！遊んであげっ！』

ガシツ！

ク『えゝ！？』

フィ『バイバイ！』

ク『ちよ！まっ！』

フイ「うおりゃあああああ……！」（クリスを思いっ
きり投げた）

ク『私は何度でも蘇るっっっっっっっっっっ……！』

キラーン

マ「……さて、コダイよ。」

コ「ん？なんだ？」

瑠「私からプレゼントがあるの！／／／／」

マ「瑠璃の手作りマカロンだ。」

コ「ほう。マカロンか。よく作ったな！」（なでなで）

レ『コダイよかったネ！』

瑠「えへへ／／／／／」

マ「ちなみに今回のあとがきはテイク2です」(ボソッ

瑠「つかれたね〜」

第18話：原作より早く降臨した魔王！…とガタガタ震えているフェレット。…

今回は大変遅くなってしまって、申し訳ございませんでした！！

短いですが、18話ハジマリマ〜ス！！

第18話：原作より早く降臨した魔王！…とガタガタ震えているフェレット。…

なのはside

私はユーノ君の念話で目を覚ましました。

「あれ……?」

一緒に寝たはずの劉ちゃんはもういませんでした。私は、

(もう、行っちゃったのかな?)

と思い、ユーノ君と一緒に反応があった場所に向かいました。

「それにしても、劉ちゃん。私のことを起こしてくれないなんて、
どういふことなの!？」

「まあまあ。劉も急いでたんだよ(汗)」

「少し、OHANA SHIが必要なの!」

「あ、あはは。お手柔らかに…」

私たちが急いで反応があった場所に向かうと、劉ちゃんとフィオネ
さん、それにあの黒い魔導士の子がいました。

「あの子もいたんだ。今日こそ、お名前を聞くの!」

改めて気合を入れて二人に近づこうとすると、急に劉ちゃんがあの子の頭を撫で始めました。

劉ちゃんも、撫でられている子も顔を赤くして満更でもない様子…。

「これは……本当にO H A N A S H I Iが必要な…」

「ひい！…！」

横でフレットがガタガタ震えているけど、関係ない…。劉ちゃんに手を出す子は…許さないの…！

s i d e o u t

劉 side

「おゝい、なのは？」

とりあえず、現れた魔王……ゴホン！……なのはに声を掛けてみるが……反応がない。

「あ、あの。私の名前はフェイトテスタロッサです。この子の名前はバルディッシュと使い魔のアルフです。」

「『よ、よろしく』(汗)」

フェイトがなるべく明るい声で自己紹介を始めた。

(おお！この子は偉いよ！あんなに怯えているのに、明るく自己紹介をするなんて……)

「フェイトちゃんか……やっと……名前が聞いたの……。」

よし！やはり、フェイト絡みだと反応あったぞ！

「私は高町なのは……なのはで……いいよ。」

「ぼ、僕はユーノ。ユーノ・スクライアとなのはのデバイスのレイジングハートです」ガタガタ

『よ、よろしくお願いします。』

うわ〜。ユーノとレイジングハートも震えているな〜（汗

「それで、フエイトちゃん？」

「な、なにかな？なのは」

「劉ちゃんに頭を撫でてもらっていたけど、なんでかな？かな？」

（こっえ〜〜！！！！なんで！？なんで、こんな事になってんの！！！？？）

「それは、劉ちゃんのせいだよ。」

『だな…』

『まったく、劉ちゃんは誰にでもそういうことをするから、こうなるのよ！これからは、この私だけにしなさい！！』

デバイス陣に突っ込まれた…。まあ、例によって発言がおかしいヤツがいるけど…。つか、なんで心読めんの！？？

「『『禁則事項です!』』」

…おかしいだろ……。

「えっと…私が封印するのを手伝ったからだよ。」

フェイトがなのはに説明していた。

「そうなんだ。…まあ理由はどうであれ、劉ちゃんに手を出す子は許さないの!」

なのはがレイジングハートを構えると、フェイトもなのはが言った言葉に反応した。

「それは、こっちのセリフ!劉は…渡さない!」

フェイトもバルディッシュを構える。

「え?なんでバトルが始まるの?」

「劉ちやんは黙まってて!」

「はい」

オレに出来ることは…ただ返事をする事だけ……。

「劉ちゃん…よわいよ。」

フィオネが言ってくるが、関係ない。

「男は弱いよ……。なあ……。ゼロ？」

『そうだな……。弱いよ……。男は……。』

「フェイトの邪魔はさせないよ！！」

「それは、僕もだ！」

ユ一ノはアルフと一緒に転移した。

(はあ。しょうがないか…)

こうして、なのはVSフェイトが始まった。

「フィオネ。もう一回、結界頼める？」

「うん。」

「プラズマランサー！ファイア！！」

「はあ…はあ…。アクセルシューター！シユート！！」

フィオネに結界を張ってもらい、二人のバトルを見守る事になったが、やはりまだ差がある。

段々となのはが押され始めた。空も明るくなってきている。

《フェイト。そろそろ、ボク達は高町家の皆が心配するから帰るよ。

》

《わかった。一緒に住みたいけど……しょうがないよね…。またね！》

フェイトとの念話を切ると、すぐに転移魔法を発動して、フェイトは離脱した。

「す、少し危なかったの〜。」

「まってる。今、回復魔法をかけてやる。ヒール！！」

なのはのケガを治して、バリアジャケットを解除する。

「ありがとうなの〜〜!」

「どづいたしまして。」

なのはもバリアジャケットを解除して、オレの隣に立つ。

「それで、なんで劉ちゃんはフェイトちゃんと一緒にいたの?」

なのはがオレの顔を覗き込んでくる。

「ボクもなのはと一緒にフェイトのことを放っておけなかったんだよ。それで、ボクもフェイトの事を助けようと思って…。」

「じゃ、じゃあ、私も「それは、ダメだよ」「…なんで?」

「なのははユーノを手伝ってあげなきゃ。」

「うう〜でも〜」

「それに、敵同士にはならないと思うよ?フェイトもなのはとは仲良くなりたいって思っているはずだし。」

「ホント!?!」

今までオレの言葉に顔を俯かせていたなのはが、フェイトの事を聞いて一気に顔を明るくした。

「うん。だから少しの間、ボクの事を信じて、フェイトのことはま

かせてくれないか？」（ニコッ）

「……っ！！わ、わかったの／＼／＼／＼／＼」（その笑顔で言われたら、何でも言う事を聞いちゃうの／＼／＼／＼／＼／＼）

なのはが顔を赤くしながら、体をくねくねさせていた。

（フェイトと一緒に。この動きの意味はなんなんだろう？）

「じゃ、帰ろう！早くしなきゃ、みんな起きちゃう！」（アリサ達になのはと二人でいる事がバレたら……。）

「うん／＼／＼」

オレ達は明るくなった空の下で手を繋ぎながら、宿に帰った。（もち、ユーノもあの後すぐに帰ってきたよ。）

「ああああ！……ちょっと！なのは！何、劉と手を繋いでんのよ！
「！」

「ねえ、なのはちゃん。どうして」と？（ゴッゴッ）

「うえ〜ん！ごめんなさいなの〜！！」

「……………（汗）」

（宿に戻ると二人はもう起きていました。）

第18話：原作より早く降臨した魔王！…とガタガタ震えているフェレット。…

マ「大変申し訳ございませんでしたあ！！！！」ズザアアアア！！

フィ「うわ！ジャンピング土下座！？」

ゼ「で、どうしたんだ？」

マ「本当は火曜日に更新するって活動報告に書いたが…この有様だ。」

フィ「なるほどね。」

ゼ「ま、終わってしまった事はしょうがない。」

マ「そうだな！では、感想コーナーです！！！！」

フィ「え〜つと、メガネ様、Arishia様、畏無様、月光閃火様、バラランシャ様、ばつど様、RAIN様、ユタ様、天宮翔様、感想ありがとうございます！！！！」

ゼ「今回もたくさん、きたなあ。」

マ「本当にありがたいよ（泣）」

フィ「メガネ様、畏無様、バラランシャ様、ユタ様からお土産も貰いました！！！！」

マ「え〜、なにになに？メガネ様からは、装着者の意思に反応して動

くネコミミ（フィオネ用）と犬耳（劉&瑠璃用）

畏無様からは、響介特製のチャーハン（できたてホカホカ）を劉とマーボーさんに。

響介特製のシヨコラケーキを瑠璃ちゃんとフィオネに。

それと、なんとなくマーボーさんに、スターライトブレイカー級の砲撃（響介ver）x100

バラランシャ様からは、

劉

ユーノの人間の時の私服

春人特製チキンカレー（テラ辛：辛口の1兆倍）

瑠璃

春人特製サンドイッチ

ユタ様からは、虹色の宝石が埋め込まれたペンダントを向こうの人全員分

ケーキを頂きました！」

フィ「ありがとうございます！」

ゼ「途中なにかおかしい物があったぞ！？いいのか！？」

マ「し〜らな〜い！」

フィ「ん？なにか降ってきた？」

「。ちぢぢぢぢぢぢ」

チュドゥゥン！！！！！！！

マ「ふふっ！なにか、でかい砲撃が無数に降ってきたぞ〜」

ドガアアアアン！！！！

ガッシャアアアアアン！！！！！！

ドゴオオオオオオン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

マ「ふっ！全部避けきってみせる！！ふっふっ！！！！」

ファイ「すごい！作者が進化している！！！！」

ゼ「これは、すごいな」

「.....」

ガッ！（足が小石に引っかかった）

「フイ・ゼン、ええ！？」

「マ、うん。ノリで避けていたけど……俺が一体何したって言うんだ？」

「フィ」かわいいそうに。

ゼ『…見なかったことにしよう!』

フィ『では、今回もゲストの方が来ています!』

光『どうも!この世で一番かっこいいと言っても過言ではない、世界の紳士!飛鳥光です!』(キリッ)

ア『そんな光を支えられるのは、世界で唯一人!そう、この私!アルよ!…!』

フィ『…登場が派手ね……』

ゼ『だな。』

光『なんだよ!せっかく瑠璃を持ち帰ってきたのに!』

ア『ついでにクリスマスもね!』

ク『ええ!!私、ついでですか!?!』

光・ア『ああ!…!』(キツパリ)

ク『今日はもう寝ます。』

フィ『す、すごい。あの、最近暴走気味のクリスマスをこんなにも簡単に無力化するなんて……』

ゼ『なんてヤツらだ……』

光「ほらほら。瑠璃を……って、劉になってる!？」

ファイ「ああ。性転換キャンデイの効果が切れたのね。」

光「ふん。まあいいか。ほら、起きろ?」ペチペチ

ア「さっきまではおんぶだったのに、男の娘になった途端起こしにかかるなんて……さすがね!光。あなたはどれだけ鬼畜なの!！」

光「何言つてやがる!!俺は、男の娘もアリだ!！」

ゼ「え!?!？」

ファイ「うそ……」

ア「光!あなたって人は!もう、こんな変態を支えられるのは私だけのようね!!!しょうがないわ。私がアンタを貰ってあげる!！」

光「なんでそうなる!?普通に冗談だつてわかるだろ!？」

ファイ「いや……だつて……ねえ?」

ゼ「なあ?」

ア「ま、光だしね。変態の中の変態だし。」

光「こんの!糞デバイスがああ!!!この読者の方が勘違いするだろうがあああ!!!!!」

ア『あん!…いきなりなによ!もしかして、私の魅惑のボイスで発情しちゃったかしら?』

光『うがぁあぁあ!!!!!』

ギヤーギヤー

劉「ん？ここは？」

フィ「あ、劉ちゃん起きた？」

劉「ああ……って光さんとアルじゃないか！」

ゼ「だな。二人で愛を語り始めたが……」

光「どこがだあ！！！？？」

ア「あら！ゼロはわかっているじゃない！」

光「おまえは黙れえ！！！」

劉「……で、紹介はすんだの？」

フィ「あ！そうだった！！今回のゲストは、ばっど様の作品、『魔法少女リリカルなのはStrikerS』道化師の在り方』の主人

キラーン

劉「うわ〜…って、いいんですか!？」

光「ん? ああ、アルのことが。いいんだよ。これぐらいいしなきゃあ
いつは…ダメなんだ。」

フィ「へえ。光って大変なのね」

光「そうなんだよ……たく、あいつはさあ……」

アルの愚痴

劉（なあ。長くないか？）

フィ（そうね。かなり溜まっていたみたいね…）

ゼ『…ZZZZ』

光「でさあ。あいつつたらよお……」

劉（でも、なんだかうれしそうだね！）

フィ（そうね！なんだかんだ言っても、付き合い長いし、仲がいのよ！）

光「…ふう。っと、すまん。なんだか、長くてよ。」

劉「全然いいですよ。」

フィ「これからのクリスマス対策に役立てていきますね！」

光「まあ、使える事があつたら、使ってくれ。俺はそろそろ帰るよ。」

「

劉「あ！待ってください！これを…」

光「お？なんだ？」

フィ「それは、劉ちゃん特製マカロンセットよ。」

劉「なのはお姉ちゃん達と食べてください。」

光「ありがとな！」ナデナデ

劉「いえいえ／＼／＼／＼／」

光「…っ！じゃ、じゃあ俺は帰るわ！」（なんだ？一瞬男なのに可愛く？いやいや、たぶん瑠璃と重なったんだろっ。）

ア『忘れた頃に蘇る~~~~~!!!!!!!!!!』

ヒュ—————

光「へ？」

劉・フィ「あ!!!!!!!!!!」

ゴン！！

光「いったああ！おまえ！何しやがる！？」

ア『私という物がありながら、アンタが男相手にときめいているからよ！！！』

光「ばっ！んな訳あるかあ！！帰るぞ！！帰ったら、じっくりお仕置きしてやる！！」

ア『もう、好きよね。やさしくお・ね・が・い』

光「もう、しゃべるな〜！！！！！！！！」

ギヤーギヤー

フィ「最後まで、こんな感じだったわね…」

劉「つか最後の、アルが落ちてきたのって、光さんが上に投げたからじゃ……」（汗）

フィ「言わないでいてあげましょう。では、誤字脱字等は感想などで報告してくれるとありがたいです！」

劉「ほかにも、感想は【どんどん】募集中なので【どしどし】送ってきてくださいー!!」

フィ「では、次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』も…」

マ「俺……生きてるよ……（涙）」

第19話：哀れ…フェレットの末路とやる気が出ないオレ。……そして、ついに

やっと、テストがおわりましたぁ！（たぶん結果も……）

いや、赤点？なにそれおいしいの？

今日、テストが終わってテンションがハイです！

ではでは約一週間ぶりですが、第19話始まりま〜す！！

温泉から帰って数日がたった。え？宿に帰ってからの話をしろ？バカだな、何もなかったよ。ハツハツハ……うん、何もなかったよ。ま、まあ、その話はもう未来永劫いいとして。

今オレはフィオネと部屋でのんびりしている。なのははユーノとジユエルシード探した。オレはフェイトから連絡がないので、一応なのはと一緒に探そうかと聞いてみたが、なのはは

「大丈夫なの！だから、劉ちゃんはフェイトちゃんと友達になれるようにお願いなの！…でもね、もし変な事したら…わかってるね？」
(ニツコリ)

こ、こわかった…。なんで、笑顔なのにあんなに怖いんだよ。オレはもう一度あの笑顔を思い出し震えながら、今後の事を考える。

(もうすぐ、KYさんがやってくるんだよね。)

オレは別にあいつの事が嫌いじゃなくはない。根はイイ奴っぽいし、なにより将来必要な人材だ。ただ…

(あのKYっぷりと自分の意見は全て正しいっていう考えは治さな
いとな。)

なんにしても、やる事が山済みだ…。【あの魔法】もまだ完成して
いないし。

「はあ。まだまだ先は長いな」

「ん？？どしたの？劉ちゃん」

フィオネがオレの顔を覗き込んでくる。

「いや、ちょっとね」

「ええ、何よ。教えてよ」

「お、おい。こらっ／＼／＼」

フィオネが後ろから抱きつきながら、オレに聞いてくる。

『アンタ！何やってんのよ！！私の劉ちゃんに！！』

「いや、オレはお前の所有物じゃないし（汗）」

クリスがいつも通りぶっ壊れていたのでオレはやさしく訂正してやる。介護をしている人はこういう気持ちなんだろうか？

「そうよ！劉ちゃんは私のものよ！！」

と、フィオネ。

「だから！ちがうっていつているだろ！？つか、もう離してよ！」

オレはフィオネから離れようとするが、

「ええ。久々に劉ちゃんを独り占めできるのに。もったいないよ」

と言ってさらに力を込める。

「ちょ！は、離せつてえ／＼／／」

オレもさらに力を込めようしたとき、

「そんなに、私といるのが…イヤ…?」

「え?」

急にフィオネが力をぬいてオレに聞いてくる。

「だって劉ちゃん最近、私に構ってくれないじゃない…」

「そ、そうだったけ?」

「そうよ…!」

フィオネの目に涙が溜まりはじめる。

(何この展開…。いったいどうしてこうなった?!)

オレは一人悩んでいると、

「うう…：やっぱりイヤだったんだあ」

とうとうフィオネが泣き始めてしまった。

「ちょ、ちょっとまで。たしかに最近構ってやれなかったかもしれないが、」

オレはフィオネに言うが、まだ泣き止んでくれない。

《ど、どうしよう…。》

《大変だな。》

オレはゼロに念話で聞いてみる。

《俺に提案があるが…聞くか?》

おお！さっすがゼロだ。頼りになるなあ。

《もちろん！で、その案っていろいろは?》

《劉もフィオネを抱きしめて慰める！これで一発OKだ!！》

《……………》

なんだろう。今、ゼロのどや顔が見えた気がする。顔ないけど…………。

《ではな!》

ゼロはそれだけ言うと、スリープモードになってしまった。

(ゼロはまともだと思ったのにな…。やっぱり、オレのデバイス陣
たちはおかしいのかな…)。

オレは泣いているフィオネの顔を見る。

(けど、このままで言い訳…ないよな。)

オレはゼロに言われたとおりに、フィオネをそっと抱きしめてやる。

「…グスツ……つええ!？」

「ごめんね。中々構ってあげなくてさ。あとフィオネと一緒にいるの、イヤな訳じゃないから。むしろ安心するし…。ただ、あんまり抱きついたりするのとかは恥ずかしいから／＼／＼／＼／」

「劉ちゃん…／＼／」

フィオネはオレの顔を見る。

「…っは、はい!もうお終いね!」

「あ…」

オレが離れるとフィオネが名残惜しそうにする。

「いや、かなり恥ずかしいし／＼／」

「でも、もう少しだけ…お願い」(涙目+上目遣い)

「うっ／＼／」

フィオネにそんな事されたら断れるはずもなく……

「じゃ、じゃあ、もう少しね……／＼／＼」

オレは再びフィオネに抱きつこうとする

するが……

キーン

「「…あ」「」

魔力反応を感知した。

『さあ、おふたりさん。そろそろイイカシラ？』

今まで黙っていたクリスがオレ達に聞いてきた。

「そ、そういえば静かだったな。」

オレはクリスに聞く。

『ふん。たまには空気読むわよ！』

「た、たまになんだ…」

クリスの言葉を聞いて苦笑するフィオネ。

『よかったな。フィオネ』

「ふえ？／＼／＼」

ゼロも目を覚ます。

「ちょ！な、なにがよ？」

『さ、行こうか。劉』

「ゼロ〜!？」

ゼロはフィオネを無視してオレに言う。

「そつだな。ゼロ、セットアップ!」

『set up』

「ほら、フィオネ？」

「わ、わかってるわよ！転移ね!／＼／＼」

いまだに顔が赤いフィオネに転移を頼んで、現場に向かった。

「あゝ、今回はこれだったかあ。」

オレ達が着くと、レイジングハートもバルディッシュも半壊していた。場所は街中。そして、ちょうどフェイトがジュエルシードに向かっている。

（まったく、原作で知ってはいるけど…無茶な光景だよなあ。）

オレはフェイトの前に行き、フェイトを止めた。

「劉どいてー!!」

「ダメだ。なんで、ボクに今回の事を念話で教えてくれないんだ？」

「それは、劉に無茶してほしくないから…」

「それは、ボクも一緒。それに今のフェイトには言われたくないな。」

「…でも…」

「だから、ここはボクにまかせて。」

「劉……………わかった。」

オレがフェイトを説得していると、なのはもこちらにやってきた。

「なのはも大丈夫？」

「うん。私は平気だけどレイジングハートが…」

なのはが顔を俯かせながら言う。

「あ、それは自己修復するから平気だよ。ね、アルフ？」

「ああ。まあ、しばらくかかるけどね」

フェイトがなのはに自己修復機能を教えてあげている光景を見て少し驚いた。

(結構仲が良くなってないか?)

「そういえば、ユーノは？」

「ユーノ君はあそこでのびているの。」

なのはが指を指した先には、暴走したさいに起きた突風で吹っ飛んだであるうユーノがいた。

『「」愁傷様ね。』

クリスがユーノに哀れんでいる。

オレはジュエルシードに目を向ける。

(ここまで暴走しているヤツは生半可な攻撃じゃ収まらないな。)

「さ、少し本気ですか。フィオネ！」

「うん！」

「」「ユニゾン・イン！」

「さらに、クリスセットアップ！ファーストモード！」

『了解よ！set up』

「うわあ。劉ちゃんがクリスを起動したの〜！」

「すごいのか？」

フェイトはなのはにクリスがすごいのか聞く。

「うん！それはそれは、とっても、すっごく！すごいのか〜！」

その説明じゃ何がなんだかわからんぞ？

「クリス。お前に投影するぞ？」

『いいわよ！私は劉ちゃんの愛なら何でも受け止める自信があるから！さあきなさい！！』

なんだか投影する気が失せるな……

『えっあー！…』

「……………^{トレスオン}投影開始。エクスカリバー」

クリスを媒体にエクスカリバーが投影されていく。これは、普通に投影するより威力が比べ物にならないほど上がる、オレが考えた合
成魔法だ。

「んで、カートリッジ・ロード」

『Load cartridge』

「じゃ、行くか！」

オレはジュエルシードに近づく。ああそつだ…

「なのは達はこの結界の中にいてね。」

オレは一つ結界を出し、みんなをその中にいれてやる。

「では、いきますか！…！」

オレは一気にクリスに魔力をそそぐ。

『あああああ！…！か、感じるわあ！これが……これがあ！…劉ち
やんの…【愛】…！…！』

「……………」（無言でクリスを振りかぶる）

『ええ！？ちよつと！…無視！？』

『うう。暴走反応…なくなったわあ…グスツ……』

クリスの泣き声で今回は幕を下ろした。

「劉、普通はもっと大声で技名は言うものだよ？」

「そつなのー!!」

フェイトとなのはが結界から出るなり文句言ってくるが、それどころじゃない。

「そついでば、ユーノって……」

「……あつっ！……」

「結界に入れ忘れちゃったの……（汗）」

しばらく探したところ、無様にビルにめり込んでいるフェレットを一匹、フェイトが見つけた。

ユーノ……ごめん……

S
i
d
e

O
u
t

アースラ side

「艦長！ロストロギアによる次元震を捕捉しました！」

「次元震？」

「はい。小規模ですが…」

「場所は？」

「第97管理外世界『地球』です。」

「わかりました。これより私たちは、その次元震の元のロストロギアを回収しに『地球』に向かいます！クロノ執務官も準備を！」

「はい！！！」

アースラが地球に向けて発進した。

S
i
d
e

O
u
t

第19話：哀れ…フェレットの末路とやる気が出ないオレ。……そして、ついに

マ「私は帰ってきた！！作者のマーボーです！」

瑠「お久しぶりです。瑠璃です！」

フィ「ねえねえ知ってる？作者って赤点とりそうなんだって！フィオネです！！」

マ「おい！何いきなり暴露してるんだ！！」

フィ「いいじゃない別に！！」

マ「ふざけんな〜！」

ギヤーギヤー

瑠「で、では。私が進行させるよ？／／／／え、えつとあ、感謝コーナーです。Rain様、Mitsu様、AIRS様、ユタ様、

メガネ様、バラランシヤ様、流水様、畏無様、ばつど様、月光閃火様、アリア様、未来様、仮面ライダーディケイド神様、感想ありがとうございます！」

ゼ『おつかれたな、瑠璃。』

ク『おつつ〜〜！』

瑠『あ！クリスにゼロ！』

ク『きてやったわよ！ではここからは私が。お土産コーナーです！畏無様からは

・響介特製のチョコレート（劉&瑠璃&フィオネ&マーボー様）

・響介必殺魔法

【MoonlightBreaker】

（一発になのはのスターライトブレイカーの三発分）×1000

（マーボー様）

ユタ様からは

魔導書

優特製ブッシュ・ド・ノエル

エリクサーを100個を頂いたわ』

ゼ『ありがとうございます！』

マ『くっそお！そして、またこのおみやげかよー！』

フィ『ふっふっふ〜！がんばりなさいなあ！』

瑠「わあ！流れ星がいつぱいだよ〜！〜！」

マ「あれは流れ星じゃね〜！！！！」ダッシュ

ク「仕方ないわね〜。今回は私を使って防いでみる？」

ファイ「え？クリスが！？」

マ「いいのかよ！」

ク「ええ、いいわよ！」

ファイ《急にどうしたの？》

ク《まあ、見てなさい。あと、タイミングを見計らって私だけにバリアをお願い。》

ファイ《！〜！〜！〜！とね。了解！〜》

マ「今回は逃げずに立ち向かえるんだ！いつくぞ〜！クリスマスファーストモード！」

ク『了解！ファーストモード起動！』

マ「やった！起動できたぞ……って、重っ！？」

ク『あら〜？レディに対して重いはないんじゃない？』

マ「持つ事すら……できない……い……はあはあ。ってもうすぐそこまで砲撃が！？」

フィ「大変そうね〜。」

瑠「ね〜〜」

マ「瑠璃はどうせ何もわかってないだろうからいいけど。フィオネめ〜。そして、クリスマス！おまえもだ！！はめやがったな！？」

ク『さあね〜。ほうらきたわよ？』

マ「ぎゃ〜〜！……だ、だが、おまえだって……ってバリアはつとる〜〜！……う、うわああああ……！！……！！」

ドッゴオオオオオオオオン……！！……！！

マ「ふっ。このロリコン共が」

優「ろ、ロリ!？」

輝「お、俺達はちがうぞ!ただ愛でているだけだ!」

瑠「ロリコン?」「キョトン」

優「瑠璃ちゃんは知らなくていいことだよ?」

ク「いいわ!教えてあげる!ロリコンっていうのはね、その二人の事を言うのよ!」

瑠「へえ。お兄ちゃん達って、ロリコンなんだあ!」

優・輝「グッサア!!!!!」

マ「はっはっはあ!ロリコン二人が逝ったぞお!」

輝「おまえはまだ言うか!？」

マ「瑠璃!こつ言っつてやれ!...」

瑠「ほえ?...うん、いいよ。」

輝「???」

マ「え？嘘！？まじぎゃあああああああああ！?!?!?!
?!?!?!」

フィ「ごめんなさいね。このバカ作者が。ほら！」

マ「す、すみませんでしたあ。」（もらったエリクサーで回復した）

優「もっいいよ」

輝「ああ。じゃ、俺達はもう帰るからね」

瑠「まって！これを持ってって！皆で食べてください！」

輝「これは……」

優「生キャラメル？」

瑠「は、はじめて作ったの……。食べて……。くれる？／／／／／／
（涙目＋上目遣い）

優・輝」「もちろん！さっそく帰って皆と食べるよ！……！／／／
／／」

マ「おお。マツハで帰って行ったなあ」

ゼ『すごい速さだな』

ク『あの子達…できるわね……』

フィ「こゝ、今回はここまで！感想どしどしください！！」

瑠「感想がたくさんくると作者がやる気をだすんだって！」

マ「そりやもうね！では、次回の『どうしてこうなった？！
神による転生者の輪廻物語』もよろしくお願いします！！」

マ「ちなみに次回のゲストは…あいつが…あいつがくるんだ…。」

瑠「ほえ？あいつ??？」

フィ「まあ今回はストッパーもいるみたいだし。」

マ「なんとか…なるよな？瑠璃も頼むぞ。」

瑠「う、うん。がんばる…よ？」（誰が来るんだろっ？）

第20話：オレのデバイス事情……修理ってお金掛かるかな？（前書き）

では、20話始めます！

第20話：オレのデバイス事情……修理っってお金掛かるかな？

今朝一番にフェイトから念話があった。プレシアさんのところに行くからついて来てほしいと。

（プレシアさんかあ、どうしよう……。あの人も助けたいな。一応、管理局の上層部の被害者だし。あの人を止める方法で一番確実なのはアリシアの蘇生。でも、そうなると問題はフェイトの存在になる。アリシアを蘇生させる代わりにフェイトを娘と思え！なんて言える訳がない。オレとしては、心からフェイトのことを娘だと思ってほしいし……。）

「ん~~~~」

「…ちゃん？」

「ん~~~~」

「劉ちゃん？」

「ん！？なんだ、なのはか。」

今はみんなで朝食の途中だったか。

「むう、劉ちゃんがボーツとしてたから呼んだのにい」

「そっかそっか。ごめんな」

ナデナデ

「ふにゃ／＼／＼／＼」

なのはの頭を撫でて機嫌をなおしてやる。なのはやフィオネ……っ
ていうか、オレの周りの女性人は頭を撫でられるのが好きらしい。

「劉、何か考え事かい？」

「え！？いえ…ボクは大丈夫ですよ。」

「そうか。ならいいんだが…。魔法関係では何も役に立つ事ができないが、何か悩みがあるならいつでも相談してきなさい。相談するだけで心とは軽くなるものだからね。」

「はい。ありがとうございますね。」

「劉！俺も…俺もお前の力になるぞおお！！！」

「あ…うん。頼りにしてるよ。」

まったく、朝からうるさいなあ。しかも恭也さん…久々の出番なのにこんなセリフでいいのかな？新規読者にキャラ勘違いされるぞ？
………つと何か訳がわからん電波を受信しちゃったな…。

「「うちそうさま」。」

オレは皆より早く食べ終え、部屋に戻りベッドの上で横になる。

「ふわぁあ」

なんで、ご飯を食べた後ってこんなに眠くなるんだろう……。

(フェイトとの約束は13時だから、少し寝るかな…。)

時計を確認すると、今は9時をまわったところだった。

「クリス、11時くらいには起こしてくれる？」

『まつかせなさい！夫を起こすのも妻の務め…なら、やってやろうじゃない！！劉ちゃんの正妻であるこのわ・た・し・が』

「はいはい、頼んだよ。」

『ああ、劉ちゃんに冷たく受け流される……快感！……どうしようかしら。私、新しい扉を開いたかも知れないわ……。私……自分で自分が怖い……』

(じゃあ、やめればいいじゃん。それに怖いのはこっちだよ……汗)

声を出して突っ込むのが怖いので心の中で静かに突っ込みをいれる。

(本格的に眠くなってきたし……そろ……そ……ろ……zzz)

ガチャ

「劉ちゃん〜ん!〜ん!」

オレが眠りにつこうとする瞬間、フィオネが入ってきた。

「あら、おねむっ?」

「ん〜。今寝ようとしてたところ〜」

「ごめんなさいね。それより、さっきの事なんだけど。」

「ああ。だいたい検討はついているだろう?」

「プレシアさんのことね…。」

フィオネは少し顔を暗くさせながら言う。

「劉ちゃんが救ってあげたい人よね?」

「そうだよ。だから、少し気合入れなきゃね。」

いきなり雷をぶつけられたら、たまったもんじゃない。

「ま、フェイトとの約束は13時だし、少し寝るよ…。」

「じゃあ、私が起こしてあげる!」

『何言ってるのよ!劉ちゃんは私に頼んだのよ!?』

「え。だって、クリスは普通に忘れそうじゃない。」

『私が劉ちゃん関係で忘れるわけじゃない！！そう言うアムタこそ忘れそうじゃない！！』

「そ、そんな事ないもん！！」

『どっちもどっちだな…』

「『ゼロは黙ってて！！』」

『…はい…』

ゼロ…かわいそうに……。

「どっちでもいいから、11時くらいには起こしてくれよ？」

「『まっかせなさい！！』」

オレは二人にそう言って眠りについた……

side out

なのはside

さっきの劉ちゃんの悩んでいる顔…可愛かったの!……じゃなくて、きつと悩み事でもやもやしていると思うの!私に相談すれば少しは心が軽くなると思う。お父さんもそう言ってたし。

私はご飯を食べ終わってから、劉ちゃんの部屋に向かいながら考えていた。

「よし!やっぱり相談にのってあげよう!」

劉ちゃんの部屋についたので、軽くノックをするが返事がない。

「あれ?劉ちゃん?」

返事がないので少し中をのぞいてみる。

「あ！／／／／」

フィオネさんとクリスがなにやら言い合いをしている横で、劉ちゃんがベッドで気持ちよさそうに寝ているのを発見した。

「劉ちゃん…気持ちよさそうなの～。なんだか、私も……………zzz」

私も劉ちゃんに引きずられて眠くなったので、劉ちゃんの隣で寝ることにしました。なんで、わざわざ横なのかって？それは、私が劉ちゃんの正妻だからなの！

「『ちがうわよ！…！』」

s i d e o u t

劉side

「うん……」

なんだろう。なんだかすごい甘いおい？がする。

「劉ちゃん／＼／」

オレはおいに釣られて、少しずつ目を開けていく。

「…って、なんでなのはがここに…？」

なのはがオレに抱きつきながら寝ていた。

（この甘いにおいはなのはだったのか。）

オレはそつと、なのはから離れる。

「あん……。劉ちゃん／＼／」

すると今度は、後ろから声が聞こえてくる。

ふんせ

「あ……うん／＼／＼／」

まだ寝た体勢のまま振り向こうとすると、肘に柔らかい何かがある。

（あ。これすごく気持ちい。）

オレはそこで止めとけばよかったけど、何かに引き寄せられるように、後ろをむいたままの体勢でそのなにかを掴む。

もみもみ、もみもみ

「……………んああ／＼／＼／」

「……………」

（今の声は……なんだ？）

オレはだんだんと後ろを向くのが怖くなってきた。でも、何かを掴んでいる手は止められずに……

ふにゅふにゅ

「あ……ん……………んああああ／＼／＼／」

(いや、やめよう……。)

オレは勇気を振り絞り後ろを向く。

「はあはあ／＼／＼／＼／」

そこには、顔を紅潮させ、息が荒くなっているフィオネ（アウトフ
レームver）がいた。

「うわっ！ー！ご、ごめん！！！！／＼／／」

オレはいそいで手を離しフィオネに謝るが……

「劉ちやゝゝん／＼／＼……zzz」

フィオネはまだ寝ていた。

「寝て…いるのか？／＼／／」

オレはそっとフィオネの顔を覗き込むが、フィオネはすやすやと気
持ちよさそうにまだ眠っている。

そんな寝顔を見ながら、ふと思う。

(フィオネって結構美人だよな。)

フィオネの顔は整えられていて、誰もが美人だという顔だ。そして
今はまだ、若干顔が赤くなっている。

（黙っていればしつかりした大人って感じだけど、しゃべると完璧に子供なのが勿体ない…いや、そこがフィオネのイイところなのかもな。）

顔にかかった髪をどかしてやる。

（普段は、クリス達と言い合いばっかしていて、うるさい時も少しは……結構あるけど…（汗）

そつと、頬を撫でながら思う。

（でも、一番一緒にいて安心できるヤツなんだよな。）

オレはしばらくそうしていたが、ふと気がつく。

「そういえば、今何時だ？なんか、結構寝た感じがしたんだけど…」

オレは時計を見る。

「……………はい？」

現在時刻…… 13時05分

「うそ……だろ……?……ってそうだよ!誰が起こすかって事で言い合い

していたフィオネがなぜ寝ている！？おい！フィオネ！？」

「むにゃ…あと、五分……。」

ダメだ…。

「そつだ！クリスは！？オレ関係で忘れる事はないはずじゃあ！？」

『ああ！いい！！いいわあ！！！！最高よ！劉ちゃ〜ん！！ハアハア、ユニツバ〜ス！！！！』

「……………」

「こんのークソデバイスどもがああああ………!!!」

第20話：オレのデバイス事情……修理ってお金掛かるかな？（後書き）

マ「はい！20話でしたあ！作者のマーボーでっす！」

瑠「瑠璃です。」

フィ「劉ちゃんの正妻のフィオネです！さっそくだけでも感謝コーナー！！ユタ様、畏無様、メガネ様、A r i s h i a様、バラランシヤ様、A I R S様、天宮翔様、感想ありがとうございます！！」

瑠「お土産も頂きました。」

ユタ様からは、滅刃シリーズの幻滅刃 夢幻と滅刃

畏無様からは、

・響介特製のソフトクリーム（冷蔵庫ごと）

（瑠璃&フィオネ&マーボーさん）

更に！

こちらの作品の新キャラ（ようは、劉 瑠璃と同じ）の双葉の音声入りカードをマーボーさんに送ります！

内容は、『マーボーさん、頑張ってください！応援してます』です！

《追伸1》

これを作っている途中で、響介に気付かれてしまい、聞くと『今まで食らったダメージ（歴代の色んな作者様達のも）が帰ってくる』という無茶苦茶な機能を追加されたので、気をつけてください

《追伸2》

《追伸1》については、フィオネしか気付けないようになってます
(響介が設定)

《追伸3》

フィオネにお願いを

「もし食らってしまったら、これを飲ませてくれ」

《作者特製回復薬グレート(元ネタはモン　ンです…)》

AIRS様からは、

光司作のチョコレートケーキです！

『ありがとうございます！』

ク『瑠璃ちゃん、このケーキを食べてみなさい？』

瑠『うん。頂きます！…あむっ！』

フィ『うん！これは…』

マ『おいしいなあ！』

瑠『響君特製のソフトクリームもおいしいよ！』

フィ『たくさん貰っちゃったわね』

マ『毎日食べるから平気だろっ。』

マ「グボらっはあああああゝs.jwdhふあ歩.jfskfんらw
fqpl「1e@lk21p@「edkfofe.qjfeqrk
el、SDKおhf3rf3えふおpj3qrk
2eF:F!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?」

瑠「ふえ〜!?作者!?!」

ゼ「クリス?おまえ、何をした?」

ク「し、知らないわ!今回は私何もしてないわよ!?!」

フィ「【今回は】なのね…………。」

マ「…あ…………が…………あ…………」

フィ「ってそうだ!早く作者特製回復薬グレートを飲ませなきゃ!」

ゴクゴク

マ「くっ…………なんだっただ?」

フィ「さ、さあ?」

マ「おまえ何かしってるな？」

フィ「……今日もゲストの方が来ています！！では、どっぞっぞ！！」

マ「あっ！おい！！」

春「よう！『神に何度も殺された青年』の主人公の春人だ。」

マ「知ってるっての。」

春「うるさい！」

ドカツ！

マ「グフツ！？」

瑠「春おにーちゃんだあ！！」

春「おっと！おお、瑠璃かあ！元気だったか？」

瑠「うん！元気だよえへへ／＼／＼」

春「そ、そうか。／＼／＼／＼デレデレ」（なんか、おにいちゃんって呼び方が少し変わったかな？）

ア「ふん、私のこと…わすれてない？」

春「あ……」

瑠「????このおねーちゃん……誰?」(キョトン)

ア「!!わ、私は、アリシアよ。その春人の監視で来たわ。//
/」(か、かか可愛い!!////)

マ「春人は何回か来ているけど、アリシアは今回が初めてだな。」

ゼ『ようこそだ!』

ア「いつも、春人がご迷惑を。」

マ「や、まったくです!」

春「あゝあ!?!」

マ「……めんちゃい!」

ぶちっ!

春「クロス」

マ「うわゝ。瑠璃〜!」

瑠「ふみゆ?なに〜?」

マ「春人に言ってやれ!」

春・ア「「???」」

瑠「春お兄ちゃん!」

春「どう、どうした?」(また、呼び方が戻ったな)

瑠「ケンカは……メッ!!!!」

春「……………」

ア「……………」

マ「そして時は動き出す」

春・ア「「…ブッシャアアアアアアアアアアアアアアアアア!……………」」

(鼻血噴射)

瑠「ふえ、ふええええええ!?!?!」

フイ「きゃー、流血事件よー」（棒読み）

ゼ「こいつはあ……」

ク『致死量クラスね』

春「グフツ！……瑠璃ちゃん……可愛い／＼／＼」

ア「たしかに……お持ち帰りしたいわ／＼／＼」

マ「でも、春人はそんな事言ってられないよな？」「ニヤニヤ

春「な、なんだよ？」

マ「双葉ちゃん……」

春「……っな！？」

瑠「うう〜！春お兄ちゃん……この前……私のことも嫌いになっていたし……私に……飽きたの？／＼／＼」（涙目）

春「そ、そそそんなことないぞ！？」

カシヤカシヤ

ア「………」（無言でカメラで瑠璃の涙目を撮る）

瑠「春お兄ちゃん／＼／＼」

春「る、瑠璃／＼／＼」

瑠「そう言えば、春お兄ちゃんの言う事何でも聞くっていったね？
／／／／」

春「そ、そうだったけ？」（つ、ついにキタあ／／／／）

瑠「私に何してほしい？」（上目遣い）

春「あゝ、えゝゝ／／／／」

カシヤカシヤ

ア「……………」（ただひたすらに）ry

マ「2828」ビデオ録画中

フィ「ドキドキ」録音中

ク『さあ。言って楽になりなさい！』実況動画作成中

ゼ『……………」（かわいそうに……………」』同情の眼差し中

春「ん、んじゃあ、ほ、ほほほっぺでいいからあ……………」その……………／／／／」

瑠「う、うん。春お兄ちゃん。しゃがんで？／／／／」

春「あ、ああ。／／／／／／／／」

瑠「で、何してほしいの？／／／／」（春人の耳にヒソヒソ声で）

春「……………き、キスしてくれませんかあ！？／／／／／／」（なぜ

か敬語)

瑠「お兄ちゃん……ちゅっ／／／／／」

春「／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

マ(勝ったあ！)

ファイ(計画……)

ク(……通り！！)

ゼ(かわいいそうに……)

春「じゃあ、俺からも！……／／／／／／／」

瑠「ふえ！？／／／／」

春「……／／／／」(あ、あと少し／／／)

瑠「~~~~／／／／／／／／／」(もう少しでお兄ちゃんからのキス／／／／)

ア「それはダメええええええええええ！！！！！」

ドンッ！！

春「バツ！おまえ！？……んんん！！？／／／／／／／」

フィ「では、次回の『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪廻物語』をよろしくお願いします！」

ク「感想もいっばいください！！」

ゼ「瑠璃って口舌士のキス二回目だよな…しかも両方とも事故だし…」

マ「では、また次回〜！！！」

マ「春人が来て初めて殺されなかった回だ」

フィ「よかったわね………」（汗）」

第21話：目指せ！フェイトの家！！……これ絶対に、ラスボスの城だよな？

今回のゲストは久しぶりのあの人です！

では、21話始めます！

第21話：目指せ！フェイトの家！！……これ絶対に、ラスボスの城だよな？

「うえ〜ん！ごめんなさい。劉ちゃ〜ん！！！」（泣）

『妻だつて…妻だつてねえ！寝坊ぐらいするのよ〜！！』（泣）

「あゝあゝ！？」

「『ごめんなさ〜い！！！！』（泣）

「つたく〜！なのは、ボクは今から出かけてくるからね！」

「ん〜むにゃ〜zzzz」

「一応なのはには出かける事を教えとく。じゃないと、後が怖いからね…。」

「劉、出かけるの？」

「オレが過去になのはに何も言わずに出かけた時の事を思い出していると、ユーノがタイミングよく姿を現した。」

「うん、そつだよ。」

「ユーノとしゃべるのって…久しぶりだなあ。」

「劉???」

オレはユーノの顔を見ながら、そんな事思っていた。

「うん。何でもない。それより、なのは今レイジングハートが使えないんだから、何かあった時はユーノが守ってあげてね。」

「うん！もち」「いや！私は劉ちゃんに守ってほしいの！……
…zzz」…うん……うん…。」

ユーノがものつそい笑顔で答えようとしたのに…遮ったよ。あの魔王は……。

「なのは？起きてるの？」

「むにゃ〜、えへ〜劉ちゃん／＼……zzz」

なのはが起きているんじゃないかというタイミングで答えるから確認してみるが、ぐっすりと眠っているようだ。

「じゃ、じゃあ行ってくるね！ほら、行くぞ!?(汗)」

「うん…グスツ!…転移…開始…グスツ!」

オレはなのはの答えにきまわずくなって、フィオネに転移をいそがせた。

「あれ？ユーノ、劉ちゃんの部屋でどうしたの？」

「……うん……うん……うん……」

美由希さんがユーノに声をかけたが、何も返事がなかったという。

「じゅめんーフェイトー！」

オレはフェイトの部屋に着くなり、いそいでフェイトに謝った。
するど…

「うづん。こっちも急に呼んでごめんね！」

約束の時間に30分も遅刻したのにご機嫌だった。

「おう！よく来たねえ！」

アルフがこつちにやって来る。

《あのさ、ボクが遅刻したのに何でフェイトはご機嫌なの？》

オレはアルフにフェイトがご機嫌な理由を聞いてみた。

《ああ。それは劉が来てくれたからだよ。》

アルフはご機嫌なフェイトの様子を見ながらオレに言ってくる。

《だって、30分も遅刻したんだよ？》

《ふう。劉は何も分かってないねえ。来てくれる事に意味があるんだよ。》

アルフがやれやれと両手を挙げながら答える。

「さ、フェイトも。そろそろ行くよ！」

「あっ！まって、アルフ！」

アルフがフェイトを呼んで屋上に向かったので、オレもその後が続いた。

「~~~~」

フェイトが鼻歌を歌いながらオレ達より先を歩いていく。

《劉、少しいいかい？》

《ん？なに？》

先行くフェイトの様子を見ながら、屋上に向かっていたオレにアルフから念話がとどいた。

《実は…フェイトのお母さんのことだねえ……》

そこから、アルフの口からプレシアのことについて語られた。

《…ということなんだ……》

その時のアルフの顔はすごく悲しそうで…今にも崩れそうであった。

《だいたい分かったよ…》

《もしかしたら劉にも何かすると思うんだけど、その時は私が絶対

「守るから安心しな。」

アルフは頼もしそうに胸を張るが、体が少し震えていた。

《大丈夫だって。あとはボクに任せて！》

《任せる？》

《うん。ボクが強いのは知っているでしょ？》

《あ、ああ。そうだね。わかった！》

アルフは何を任せるのかと聞いてきたが、オレの言った事にすぐに納得した。

「劉〜！アルフ〜！！速く〜！！！！」

アルフと念話をしていたら、だいぶフェイトとの距離が離れていた。

「さ、オレ達も速く行こうか？」

「そうだね！」

「遅いよ。二人とも！」

「ごめんね、フェイトお」

アルフがすぐに謝る。

「何話していたの？」

「えつと〜……（汗）」

フェイトの問いに詰まるアルフ。

「今日遅刻した理由を話していたんだよ。」

「『ご、ごめんなさ〜い！！』（泣）」「」

オレが代わりに答えると、今まで静かだったデバイスがまた、泣きながら謝ってきた。

「え〜、私も聞きたいなあ！」

「いいよ。実はな……」

オレはさっきの出来事を、屋上に着くまでフェイトに話してあげた。

「劉、ついたよ?」

「ん?」

オレは転移する時目を瞑っていた。フィオネに転移してもらっているけど、なんか感じというか種類が違うみたいで、こっちの方が酔う感覚に似ていたので、目を瞑っていた。

(にしても、よくあんな長い番号を覚えれるよな)。たしか、『8
76C44193312D6993583D1460779F31
25』だっけ?あ、結構覚えれるわ……つかさあ……)

オレは目の前にそびえ立つ城の感想をもらす。

「ここはラスボスの城か…?」

「うん?ラスボス?」

オレのつばやきにもすっかり答えてくれるフェイト。

「いや、なんでもないよ。」

「ぶふっ、そっか。劉は面白いね。」

「いや、面白い事したか？」

オレはフェイトに案内されて、プレシアの部屋の前まで来た。

「ここが母さんの部屋だよ。」

「そのようだね…」

扉からも黒いオーラが染み出ている。

(これは、オレが訪問した事が吉とでるか凶とでるか…。)

「母さん！私です、フェイトテストロッサです。」

そして、フェイトがゆっくりと扉を開けた。

第21話：目指せ！フェイトの家！！……これ絶対に、ラスボスの城だよな？

マ「どうも！作者のマーボーです！」

瑠「瑠璃　にゃん！／／／／る、瑠璃です…うう／／／／／／／／」

フィ「劉ちゃんのお嫁さん決定のフィオネです！」

ク「劉ちゃんの正妻はもちろん！みんなのアイドルでもあるクリスティーナよ！おほほっほっほ！！！」

ゼ「アイドル（笑）……ゼロだ」

ク「ちょっと！なに（笑）って！！！」

フィ「その笑い方も変よ…」（汗）

マ「だよな。」

ク「キーツ！うるさいわねー！！作者には言われたくないわ！！！！」

マ「はいはい、めんごめんご。では、感謝コーナーです。」

フィ「その言い方も変…っていうか古いわね…。」

瑠「ユタ様、Rain様、Arishia様、バラランシャ様、メガネ様、月光閃火様、畏無様、ばっど様、天宮翔様、感想ありがとっございます。／／／／」

ク『いつまで、恥ずかしがってんのよ。』

ゼ『そうだぞ。クリスの方がよっぽど恥ずかしい事しているんだからな。』

ク『どこがよっ！！』

フィ『え〜、お土産コーナーです。ユタ様からは、ニンフが製作したデバイス性格改変プログラム。』

バラランシヤ様からは、アリシアにはS t sでライラのオリジナルが来ていた真・ソニックフォームの衣装。

畏無様からは、響介特製シュークリーム（チョコクリーム入り）

・マーボーさん専用兵器

SRB x 100 & MLB x 100

（二回に分けて発射）

を頂きました！ありがとうございます！！」

マ『おおっ！アリシアかわいいなあ！！！！』

瑠『うん、そうだね！可愛いねえ！／＼／＼』

フィ『この響介特製シュークリーム（チョコクリーム入り）もイケるわぁ！』

瑠「うま〜い！」

マ「こら。女の子はおいしいだろ？」

フィ「どっちでもいいのよ！ねえ？」

瑠「ねえ〜！」

マ「ふう。では、ニンフ特製デバイス性格改変プログラムを……」

ゼ「……………」

ク「……………」

マ「クリスに！」

ク「ガッデームッ！！！」

マ「ほいっと！」

カチッ！

ク「NOW Loading」

フィ「どうなるんだろっ？」

ク「……………みなさま、ご機嫌麗しゅう」

マ「ファイ・ゼ」「なんだこれ!? まだぶっ壊れてんじゃない!」

瑠「わぁ」

ク「それでは、ゲスト様のご紹介よう! おーほっほっほ!」

マ「高笑いはやめないのか!」

ヒュン!!

優「うわぁ! な、なんだあ!?!」

マ「はい! Arishia様の作品、『魔法少女リリカル……なんとか!』の主人公の暁優（裸リボン）です!」

瑠「////////////////////」ボンツ!

ゼ「おい、大丈夫か?」

瑠「うみゅ。だ、大丈夫!」

優「な、なにか着替えるものを!」

フィ「はい、ぎゅぎゅー！」

優「ふう。あ・の作者〜!！」

瑠「優お兄ちゃん!その…い、いらっしゃい／＼／＼／」(ちらっちらっ)

マ「ちなみに、裸リボン姿はすでに写真に撮ってあるから。」

優「くっそ〜!」

瑠「い、一生宝物にするね?／＼／」(ににっ)

優「うっ／＼／」(瑠璃に笑顔で言われたら何も言えない／＼)

ク『まあまあ、お若いわね〜』

マ「」

瑠「優お兄ちゃん!／＼／／」

優「な、なんだ?」

瑠「だっこして…ほしいな? / / / /」(涙目+上目遣い)

優「あ、ああ。いいよ / / / / / / ……よいしょ」(か、可愛い〜! / / / /)

瑠「重い? / / / /」

優「ん? そんな事ないよ。むしろ軽いくらい / / / /」(顔が近いんだけど / / / /)

マ「そりゃ、抱っこしてるし〜」2828

フィ「そうよね〜」2828

優「(うっざ!)(そろそろ降ろすね? / / / /」

瑠「あ…。う、うん…」(しょんぼり)

優「そんな顔しないでよ。あ、そろそろ帰らなきゃ。」

瑠「ふえ…もう!?!」(さらにしょんぼり)

優「ごめん! また来るからさ!」

瑠「うみゅ…グスツ!」

マ「泣かしたよ」

フィ「最低ね…」

優「だー！わかったよ！瑠璃ちゃん！／／／／／」

チュツ（頬にだぞ？byクリスマス）

瑠「ふえ／／／／／」

優「…これで元気出してくれ。じゃあな／／／／／」

マ「男みせたな…」

フィ「そうね…」

ゼ「だな…」

瑠「はうはう／／／／／」

マ「それでは今日はこの辺で！」

ク「次回の更新もよろしくお願いしますね！」

フィ「クリスマスはこれで治った事になったのかな？（汗）」

ゼ『そういえば……』

フィ「あれ……忘れてたわね……」

マ「……」

ヒューン
ヒューン
ヒューン

ドツガアアアアアアアアン！！！！！！

マ「せっかく流せるとおもてぎゃああああああああああ！！！！！！」

フィ「あ…MLBもきたわ…」

マ「……………」ピクピク

ドツゴオオオオオオオオン！！！！！！

ズドゴオオオオオオオオン！！！！！！

バグウオオオオオオオオオン！！！！！！

フィ「終わったわね…」

第22話：プレシアとの対面！…お義母さん！娘さんをボクにッ…って、違

22話か。無印長いかな？

ま、まだまだ続きますけどね〜！
では始まりま〜す！！

あと、今回はあとがきの方が長いです！なにせ、あの人がゲストで
すからwww

第22話：プレシアとの対面！…お義母さん！娘さんをボクにッ…って、違

フェイトが扉を開けた先には、

「……………」

無駄にでかい椅子に座って、無言でこちらを睨んでいるプレシアがいた。

「あの、母ね…」

フェイトがプレシアに話しかけようとする、それを遮るようにプレシアがこっちに手のひらをを向けてきた。

「まずいッ！ゼロ…！」

『set up…！』

オレがセットアップすると同時にプレシアから膨大な雷がはなれた。

「くそッ！トレース・オン投影開始！アイギス絶対守護の盾…！」

アイギスをトレースして雷を防ぐ。

「母さん！？」

「よく止めたわね。あなたは誰？」

プレシアが自分の攻撃を止めたオレが気になったのか聞いてくるが、

「誰か聞く前にあんなものとはしてこないでよ！！！！！」

フィオネがオレの代わりにプレシアに怒鳴った。

「知らないわ。で、あなたは誰で何しに来たの？」

プレシアはフィオネを無視してオレに聞いてくる。

「ボクは天道劉。こいつはフィオネ。あと、クリスとゼロだ。」

「…ふんっ！」

『よろしく』

『よろしくね …おばさん？』

みんなプレシアに挨拶するが…ゼロ、おまえだけだよ。

『だって仕様がなないじゃない！いきなり劉ちゃんを攻撃してきたのよ！…』

「そうよ！今回ばかりはクリスの言うことに賛成だわ！！！」

『フィオネ！』

「クリス！」

ガシッ！

二人は握手？というか、フィオネがオレの腕についているクリスを掴んでいた。

「それで…何しに来たのかしら？」

今までの流れを黙ってみていたプレシアがオレに聞く。

「フェイトの付き添いなんだけど…一応、貴方にも話がある。」

「劉？」

フェイトが何の話があるのかオレに聞こうとするが、

「ま、気にしないで。すぐに終わるから。」

フェイトがオレの前で報告を終えるとアルフと一緒に部屋から出て行った。

(ふん。例のお仕置きがないのは…オレが居るからか?)

フェイトが報告を終えた後、お仕置きがあるのかと思って構えていたが、そんな事はなかった。

「それで話ってなにかしら?」

「フェイトの事をどう思っている?」

オレは回りくどい話はやめて、単刀直入に聞く。だが、プレシアは考える素振りも見せずに…

「ただの使い捨ての人形よ。」

と素っ気無く答える。

(やっぱり。そう思っているのか。)

ある程度予想していたが、実際に聞くとこの言葉はつらい。こりゃ、フェイトがプレシアに聞いた時に心を壊しかけるのはあたりまえだと思った。

「……………それだけかしら?」

だが、ここで話は終わらせない。

「いいや、まだまだ。さっきの、フェイトが人形だって言ったのは、

フェイトがアリシアのクローンだからか？」

「っ！！なぜそれを知っているの！？まさか、あなたは…あいつの手下なの？」

プレシアがオレが聞いた事について、かなり驚いているが……まあ、普通そうだよな。にしてもあいつって………ジェイルのことか？

「どうなの！？答えなさい！？」

プレシアが杖を構えて聞く。

「落ち着いて。ボクは貴方が言うあいつの事を知らないのですが…」

「そ、そう…」

オレがそう言うとプレシアは椅子に座る。

「あいつとは…？」

オレはプレシアに質問する。

「………ジェイル・スカリエッティのことよ…。知っているかどうかは知らないけど。」

「…さあ？知りませんね。」

オレはここで知っていると答えたら面倒くさい事になると思ってとぼけた。

「そう。で、結局あなたは私に何が聞きたいの？」

「それはさっきの事です。」

「フェイトは人形だと答えたはずだけど？」

「…本当にそう思っているのか!？」

オレは少し殺気を込めてもう一度聞く。

「ええ!!そうよ!私はアリシアの代わりにあの子を造ったわ!…
けど、あの子はアリシアじゃなかった…: そんな子…私の娘じゃな
い!ただの人形よ!!」

「それはちがう!!生まれ方はどうであれ、フェイトを造ったのは
…生み出したのは貴方だろ!!貴方はフェイトの親なんだ!!!」

「ちがうわ!あの子はただの失敗作よ!!アリシアと同じじゃない
もの!..!」

プレシアはオレにフェイトが失敗作だと言う。

「失敗なんかじゃない！！アリシアと同じじゃない？そんなのは当たり前だろ！？この世に同じ人なんてのは存在しない！たとえば、人造魔導士だとしてもまったく同じ人なんか造れるわけないだろう！？」

「……………そんなことはないわ……………」

「あるね！個性は人それぞれなんだ！それを捻じ曲げて自分で全部作れると…人を創造できると本気で思っているのか！？貴方は…お前は神にでもなったつもりか！？」

オレがプレシアに大声で言うとプレシアは黙った。

「いいか？たとえば、人造魔導士だとしても…アリシアと人格が違くても、『フェイト』という娘を生み出したのはこの世で唯一人、プレシアテストロッサ……………貴方一人なんだよ。」

「それでもッ！あの子は！！！」

「もう、自分でも分かってはいるんだろう？あの子…フェイトは貴方の娘で、アリシアの妹でもあるんだ。貴方たち家族の一員なんだよ。」

「……！！！！！」

アリシアの妹と聞いてプレシアが目を見開く。この言葉は効いただろ。

「思い出して……アリシアは誕生日の時になんて言っていた？」

プレシアの目に涙が溜まり始める。

「私は……あの娘の妹を人形扱いしていたのね……わかっていたわ……でも、私は認めたくなかったのよ……」

プレシアは耐え切れなくなったのか……涙を流した。

「貴方はいつも……気づくのが遅すぎだ。」

「……そうね……私は……いつも……」

「そこでだ。プレシアさん、貴方はこれからどうするんだ？」

オレは涙を流しているプレシアに聞く。

「今更あの子に……フェイトになんて言えばいいのよ。」

「まだ、今なら間に合う。」

「いいえ。もうダメだわ。私も残り少ない……私は最後まで悪を演

じきるわ。」

「っ……あなたねえ……」

今まで黙っていたフィオネが、中々素直にならないプレシアに怒鳴るが、

「うるさいわ！これは私が決めた事！！貴方たちには関係ない！！」

プレシアはそう言うとオレ達の目の前に雷を落とす。

「さっさとあの子の元に帰りなさい……」

プレシアはオレに叫ぶ。

「プレシアさん貴方の考え、思いはよく分かった。だけど、悪を演じきる……この提案は却下させてもらう！【オレ】が必ず貴方たちを幸せにしてみせる……！！」

オレはそれだけ言うと、フェイトの元に転移して一緒に海鳴に帰った。

（さて、オレが助けるかどうかは、これからプレミアがどう選択するか…だな。）

第22話：プレシアとの対面！…お義母さん！娘さんをボクにッ…って、違

マ「どうも！作者のマーボーです！」

瑠「瑠璃です！」

フィ「フィオネよ！」

ゼ『ゼロだ…』

ク『またしても登場！みんなのアイドル ク・リ・ス・だ・ぞ？読者の方からクリスはどうしても出してほしいと言う要望が多かったから、仕様がなくなってきたわあ！！』

マ「最初っから全開だな…」

瑠「クリスカッコいい！！」

フィ「瑠璃ちゃんの感性も謎よねえ。」

ゼ『そして、そんな要望はきていない。』

ク『そのみんなあ！うるさいぞ〜』

マ・フィ・ゼ「……」(ぞくっ)

ク『では、感想コーナーよ！Arishia様、ユタ様、メガネ様、
天宮翔様、Rain様、バラランシャ様、畏無様、流水様、空言天
狐様、感想ありがとうございます！…』

瑠「お土産ももらいました！」

ユタ様からは、

滅刃 雷

電撃を吸収し所持者の力に変える

バラランシャ様からは、

絶対勝利の開闢星剣×999
エリシユ・カリパー

畏無様の所に春人がゲストとして出た2回目の時に貰った動画

核爆弾×100万発（時間差で麻婆豆腐に）

畏無様からは、

双葉特製の肉まん（全員分）

響介特製の七面鳥（全員分）

シャマル特製のポタージユ（マーボーさんのみ）

双葉のパジャマ（着付き）

メガネ様からは、

『O S H I O K I B O X』

女の場合は劉の声………を完璧にマネをしたコダイの罵倒。

男の場合は瑠璃の声………を完璧にマネをしたコダイの罵倒。

それらが約1000種類ランダムで永遠に流れ、破壊しようとする
と、罵倒のレベルが上がる。（ちなみに破壊できません）

空言天狐様からは、

興奮剤

(普段より赤面しやすくする薬。反動でその薬を飲んだ人の笑顔を
見ると理性と言つ名のリミッターを一瞬で解除)

悠妃が作ったデコレーションシフォンシフォンケーキ(媚薬入り)

媚薬の解毒剤

たくさんのお土産ありがとうございます!」(にこっ)

マ「やつふううううう!...!パジャマきたああ!...!」

フィ「の前に...はい!シヤマル特性ポタージュ!」

マ「は?...ゴクゴク...ぷはあ!なんだ?案外ふつごぱあ!...ドサッ」
ブルブル

瑠「作者...!?!」

ク「いい気味ね...!」

フィ「ま、気にしないで、肉まんも七面鳥も食べましょう!」

瑠「クリスマスみた...い!...もぐもぐ...おいしいねえ!」

ゼ「よかったなあ。」

ク「ん?何かこっちにミサイルのような物が...。」

フィ「ああ。春人が送った核かあ。」

マ「そうだろう！さて、クリスには『O S H I O K I B O X』に入ってもらおう！」

ク「え！？なんで！？」

マ「普段うるさいからだよ！」

ク「そんな！フィオネ達…ってみんな消えとる！？」

マ「さあ、行って来い！」

ク「白状ものー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ガチャ（劉の声で罵倒再生中！）

マ「ふう。そして、瑠璃にはジュース（興奮剤）を飲んでもらいます！」

瑠「ジュース？いいよ。ゴクゴク」

マ「あと、このケーキも一人で食べなさい。」

瑠「ありがとうー！…はむっ…ん〜！おいしいね〜！」（ゴクゴク）

マ「…か、可愛〜い！…瑠璃ちゅわ〜ん！…！」

フィ「って、アンタが興奮剤の犠牲第一号かあ！…！」

ドカッ！

マ「くふっ！す、すまん。」

瑠「はあはあ。このケーキ…食べたなら、なんだか体が／＼／

マ「よし！準備できたな！では、ここでゲストの登場です！！」

ファイ「ばつど様の作品『魔法少女リリカルなのはStrikers
〜道化師の在り方』の主人公の飛鳥光です！」

光「またまた来たぜ！世界の紳士、飛鳥光です」キラ

ゼ「よく来たな。」

光「おう！ところで、ルリルリは？」

マ「あそこで顔が赤くなって、座り込んでいるのがそうだ。」

瑠「はあはあ…あ、光…はあはあお兄ちゃん／＼／＼／

光「おい！ルリルリはどうしちゃったんだ！？」

マ「ん？媚薬入りケーキを食べさせた。」

光「なん…だと…？」

ファイ「本当よ…まったく。私が目を話した際に。」

光「作者！よくやった！」

マ「だろ？」

フィ「そして、光はこういう人だもんね。あと、作者のドヤ顔すごい。」

光「お〜い。ルリルリ〜！」

瑠「お、おにいちゃん／＼／＼／＼」

マ「瑠璃が光に抱きついたな。」

瑠「はあはあ、私…か、体が熱くて…こんな状態でごめんね／＼／＼」

光「いいさ。むしろ、好都合！さ、服を脱ごうか？」

瑠「うん…／＼／＼／＼」

ぬぎぬぎ

フィ「って、まちなさーい！何自然に脱がそうとしてんのよー！」

マ「別にいいじゃないか。瑠璃は熱がっているんだぞ？」

光「さ、これにおきがえしましょうね〜」

瑠「う、うん／＼／＼／＼」（今下着のみ）

ゼ『ん？その服装は？』

マ「体操着だな…しかもブルマ？」

光「そう！どうだ？いいだろう！？」

マ「ああ！なかなかいい趣味だな。」

フィ「つか、なんであんな物持ってんのよ？（汗）」

瑠「はあはあ。光お兄ちゃん。着替えたから…抱っこしてえ／／／／」

光「ええ、どうしよっかなあ」「ニヤニヤ

瑠「お、おねがい〜」（涙目&上目遣い&顔真っ赤&息が色っぽく
なっている）

光「お、おう。…んしょ／／／／」（なんだ？瑠璃が色っぽいぞ！
？）

瑠「はあはあ、光お兄ちゃんの体…少し冷たくて…はあはあ…気持
ちいいね／／／／」（にっこり）

光「つつ！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／」

マ「さ、瑠璃にあげた興奮剤の効果がくるぞ〜！！！！」

瑠「はあはあ…あつちに行こうよ／＼／＼」

光「ああ。そうだな／＼／＼」

マ「はい！ここまで！フィオネ、光をあの『O S H I O K I
BOX』に転移して！」

フィ「はあ。分かったわ。これ以上はまずいものね。」

ゼ「お！かわりにクリスが帰ってきたな。」

ク「ハアハア…わ、私は一生劉ちゃんの…め、雌奴隷よお」(うつ
とり)

マ「やっべ…入れすぎて、新たな扉開けちまった…(汗)」

ゼ「どうするんだ…?」

マ「ま、いいだろう。光はこのまま向こうに帰そう！あっ！もちろ
んこのビデオも一緒にね」ニヤリ

フィ「アンタ…本当に腐っているわね…天罰下るわよ?」

マ「ふん！んなものないない「あ…さっそく来たわ」…なにいい!?!」

マ「絶対勝利の開闢星剣…って、やべえ。もうきれた!?!くそ!ク
リス!」

ク『いいわあ。いいわああ!劉ちゃーん!?!!』

マ「…そうだったな…」

フィ「ふう。作者は無事に逝ったわ。」

瑠「私…どうしちゃったの？」

ゼ『気にするな』

フィ「そういえば、光を転移するの忘れてたわ……。 (汗)」

ゼ『あの爆発に巻き込まれて、あそこで……死んでいるぞ？』

フィ「…ドンマイということで、はい！転移！！」

瑠「え…っとお、今回はこれでお開きかな？」

ゼ『だな。感想どしどしください！！』

フィ「今回もあとがきの方が長くなったけど…この小説はその所を気にしたら負けよ！」

瑠「ここが本編なんだね！」

フィ「そ、それは…ちがうわ (汗)」

ゼ『では、次回もよろしく頼む！』

フィ「ああ、次のゲストは初のあの人だから！」

瑠「ばいばいです／＼／＼／＼」

マ「ビデオは例のごとく……配布式だ……ほしいヤツは……わかってい
るな……？……くっ……は……春人……め……」ガクッ

第23話：今考えると、Fクラスってカオスだよね…。オレのクラスもそうだよ

23話です！

今回のゲストは初の人です！
では、はじまります！！！！

第23話：今考えると、Fクラスってカオスだよ…。オレのクラスもそうだよ

時の庭園に行つて数日がたった。

（今日は二人で封印するんだよなあ。）

そしてあのKYが乱入して来るつと…。アイツは嫌いじゃないけど、あの考え方は今のうちに治させないとな。

「…聞いているの？」

はあ。疲れるな。

「劉！聞いているの!？」

「ふえ!？な、ななな何!？」

（やっべ、全然聞いてなかったうえに、変な声だしちゃった。）

ちなみに今は学校で、オレに話しかけてきたのはアリサだ。

「最近、なのはの様子が変わって言う事よ!!！」

「そ、そんなことないの!!！」

アリサの言葉を聞いて、今まで座っていたなのはが立ち上がる。

「だって、ずっと上の空じゃない！」

「ア、アリサちゃん。なのはちゃんも少し疲れているだけだよ。」
で、いつものごとくすすすがアリサを宥める。

「ああ。そのことか。ま、人間誰でもそんな時はあるさ。」

「アンタ…何歳よ？」

オレがアリサにせっかく助言したのにアリサは冷たい目でオレを見る。

「別に…普通にアリサ達と一緒に歳だよ。」

「全然そんな風に見えないの」

「うん。劉ちゃんって大人っぽいよね！美人さん？」

「でもでも、劉ちゃんも可愛いときがあるの！」

なのはとすすかは何やら二人で話し始めた。

「ま、劉がおじいちゃんになったってことで。」

アリサがそう纏めるが…うん。ひどいや……。

「そうだ。アンタ、今日また手紙貰っていたわよね？」

そして何を思ったのか、手紙について聞いてくる。…ってか、

「アリサはいつもボクが手紙を貰うのを知っているけどなんで!? 今日ボクが手紙を見つけた時は誰も居なかったはずだよ!？」

「え? 劉の事はなんでもお見通しよ?」

すごく真面目な顔になってオレに言うアリサ。本気で言っているのか、冗談で言っているのか分からない顔だ。

「ふ〜ん。」

「手紙について何も聞いてないの。劉ちゃん…」

「「^{なの}どついでこと!？」」

なのはとすずかがオレに顔を近づけて聞いてくる。もちろん目には光が一切ない。この状態のこいつ等は本気でやばい。人を目線ひとつで殺せるレベルだ。

「どついでつアリサ?」

「さあ。私は何も知らないわ。アンタが手紙なんか貰うのがいけないんじゃない!」

と、アリサはなぜか急に不機嫌になっていた。

「そ・れ・で、劉ちゃんは手紙をどつするのかな?」

すずかが聞いてくる。

「もちろん、ちゃんと会ってから断るよ。」

だって、その手紙の主が【男】なんだもん。ありえないでしょ!?!
男だよ!?!絶対普段からウホッウホッ言っているヤツだよ。

「へえ。会った〜」

あれ?なんで?オレが答えると三人がオレを殺す勢いで睨んでくる
んですけど。

(なんか、この三人が負のオーラを纏ってから外が曇りだしている
し…)

今日は、快晴だったんだけどな。おかしいなあ(汗

「…まあ、アンタは断るわよね?」

「うん。…断るよね?」

「ううん。断るしかないの…」

「だから、さっき断るっていったじゃん!?!」

ダメだ。本格的に三人の頭が働いていないのかも…。

「そ、そうだ!だって、相手は男だよ!?!断るしかないじゃん!?!」

相手が男だって伝えてないからこの三人がこんなに怒っていたのか?

「へえ。何組の?」

すずかが聞いてくる。

「え？と、隣のクラスの……」

「鮫島すぐに調べて………わかったわ。ありがとう。」

アリサが携帯を出して、1分ぐらいで相手が見つかったらしい。これは案外アリサが言っていた『え？劉の事はなんでもお見通しよ？』のセリフは本気かもしれない……（汗）

「さ、みんなもこの話は聞いてたわね!？」

アリサがクラスのみんなに大声で聞く。

瞬間、

「おおぅ!!ばっちりきいていたぞ!!」

「このクラスの四大女神である劉ちゃんにラブレターを送るなど……ユルセンナ」

「そっよ!許せないわ!」

「ヤッチャウヨ〜!オレ…ヤッチャウヨ〜!!」

「怖かったよね?まってて!私たちが劉ちゃんの不安対象にOH

A N A S H I してくるから！」

「劉ちゃんは何にも心配しなくても大丈夫だから！」

と、クラスの皆が一齐にオレに言ってきた。つか、O H A N A S H I ってここまで広まっていたのか！？それに、皆さん目が血走っていて、逆に貴方達の方が怖いし。なにより皆してオレ達の会話を聞いていたの！？ここはFクラスですか！？そして、突っ込みどころ多すぎですから！！

「さあ。逝くわよ。」

「待っててね。劉ちゃん。」

「すぐに戻るなの！」

「え、！？今から行くの！？もうすぐ休み時間終わるよ！？」

そんなオレの言葉を聞いていなかったのか、三人はクラスの全員を連れて隣のクラスに向かった。

キーンコーンカーンコーン

あ、チャイムがなった。

「のに…帰って」ない……。」

ガラガラ

「あら！？劉ちゃん以外誰もいないわ！？」

「先生！劉ちゃんはやめてください！」

「なんで？みんなそういう風に呼んでいるのだから、いいじゃないさ、少し少ないけど授業を始めましょうか！」

いや、少し少ないどころではない。オレ以外いないんだよ。それに、先生までいつのまにか【ちゃん付け】で呼んでいるし。

「ギヤアアアアアア嗚呼ああ」

隣のクラスから授業中なのに叫び声が聞こえたけど……気にしない。

（はあ。なのは様子が変だっ　て話からだ　いぶ脱線したな…）

そのあと、皆は制服を血で汚しながらすっきりした顔で帰ってきた。

そして、オレは手紙に書いてあった待ち合わせの場所に行ったが、その手紙の主が現れる事はありませんでした。

帰り道。アリサとすずかと別れ、なのはと二人で帰っていると…

「あれ？あそこにいるのって…ユーノ君？」

なのはが人だかりがある方を指を指して言った。

「しかも、なにやら網をもった人とかいるし……まさか…」

『劉ちゃん、あそこからユーノの魔力反応があるわよ。』

オレが嫌な予感していると、クリスが教えてくれた。

「行ってみよう！なのは！！！」

「うん！」

オレ達がそこに向かうと…

「ほら！早く籠にはいりなさい！」

「きゅ、きゅ……！！！」

無理やり籠に入れられそうになっているユーノがいました（笑

《あっ！劉になのは、助けて〜！！》

ユーノがオレとなのはに気がついて念話で助けを求めてくる。

《まったく。仕様がないな〜。》

「すみません。そいつ、ボク達のペットなんですよ。」

「そうなんですか？困りますね〜。放し飼いは〜」

「すみません。」

なのはと二人でその動物保護？の人に謝り、ユーノは回収できた。

『哀れね〜』

「で、ユーノはなんでここにいたの？」

「うん！レイジングハートの修理が終わったから、それを知らせにほら〜！」

ユーノがなのはにドヤ顔でレイジングハートを渡す。

「ありがとうなの！ユーノ君〜！」

なのははユーノを頬擦りして喜んでいた。

「よかったな、なのは。あと、ユーノさあ……」

「ん？どうしたの？劉。」

「別に外に出るときもフレット形態じゃなくてもいいんじゃない？一応、人には戻れるんだし……。」

「……あ……」

オレがユーノに言うと、ユーノは固まった。

「もしかして、自分が人間だって……忘れてた？」

「そ、そそそんなことないよー」（棒読み）

ユーノは慌てて言うが、明らかに動揺していた。

「まあ、いいや。さあて、かえ……っ！！！！なのは、ユーノ……」

オレが帰ろうかと言おうとすると、

「うん！これは……魔力反応!？」

『これは……ジュエルシードが発動したな。』

ゼロが魔力反応を解析して教えてくれる。オレ達は反応があった場所に向かって走り出した。

「ユーノ！フィオネは！？」

「え？劉の部屋で寝ていたよ？」

ユーノは結界を張りながら答える。

「しょうがないなあ。フィオネ！」

「はいはい！呼ばれて飛び出て（以下略）」

オレがフィオネの名前を呼ぶとすぐにオレの肩の上に転移してきた。

「フィオネさんはや〜い！」

「まあね。なんせ私は劉ちゃんのお嫁さんですからあ！えっへん／
／／／」

「って、小さいままかよ！？早く胸ポケットに入れ！」

「うん」

フィオネが小さいままだったので、ポケットにいそいで入れる。

「なんで、うれしそうなんだよ…。」

「うう〜、いいなあ。私も入りたいの！」

「いや無理だろ！？（汗）」

なのはが訳分からん事を言う。

「今はそれどころじゃないだろ！？ゼロ！セットアップ！」

『set up!』

オレはBJを展開させる。

「そ、そうなの！レイジングハート！」

『Stand by ready setup』

なのも慌てて変身する。

「フィオネ！」

「転移ね！ほいっと！」

そして、フィオネに転移してもらった。

到着すると、木のバケモノがいました。

「…って、でかつ!？」

でかい…とにかくでかいんだ……。

「ユーノ！結界張るわよ!!！」

「うん!！」

フィオネはユーノと結界を張りに向かう。

「こんだけでかいと…クリス起動！セカンドモード!!！」

『了解!!セカンドモード!!』

クリスがセカンドモードのツインガンになる。

「劉ちゃんどうするの!？」

「まあ、見てて。ゼロ、魔力変換【雷】!！」

『おう！変換【雷】!!!!』

オレは木のバケモノに近づいていく。木が枝で攻撃してくるが、

「アクセルシューター!!」

なのはがオレを守ってくれる。

「助かるよ!!」

「そんなことないの! 夫を支えるのはつm」それはもういい!!」
…むう」

とはいえ、なのはのおかげでだいぶ近づけた。

「この距離なら!!」

クリスの銃先に雷の魔力がたまる。

『準備完了! いつでもいいわよ! 劉ちゃん!!』

「OK! 轟け! ライトニングバースト!!」

オレがトリガーを引くと膨大な量の雷の魔力が木のバケモノを襲い直撃する。

「やったなの!!」

直撃したのを見て、なのはが喜びの声を上げるが…

「まだまだ! なのは!!」

「ふえ!?!」

なんとまあ、生意気な事に木のバケモノさんはバリアを張ってオレの攻撃を防いでいた。

『あのバリアは厄介だな。』

『キーー！！私と劉ちゃんの愛の攻撃を防ぐとは！！生意気なあああ！！！！』

ゼロの言う事も正しい。この場合は誰かが攻撃して、バリアで防いでいる所をたたくか、純粹にパワーで押し切るか…この二択だな。クリス？そんな子知りません（汗）

『そういえば…』

「どうした？」

ゼロがなにか思い出したようだ。

『ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇を使えばいいんじゃないか？』

「それはボクも考えた。けど、ジュエルシードも破壊しないかな？」

『…すまん。わからない…』

（ふう。どうしようか。なのはだけの攻撃じゃあ封印はきついよな）

オレが悩んでいると……

「割く……!!」

フェイトとアルフがやってきた。

第23話：今考えると、Fクラスってカオスだよ…。オレのクラスもそうだよ。

マ「さて、23話でした！作者のマーボーです！」

瑠「瑠璃です。」

フィ「フィオネです！」

ゼ「ゼロだ。」

ク「クリスよ。」

フィ「クリス、今回の挨拶は静かだね。」

ク「前のことがあるからね。それより、感謝コーナーよ！」

瑠「ユタ様、メガネ様、Rain様、バラランシャ様、畏無様、感想ありがとうございます。」

フィ「お土産は、ユタ様からは、

ケーキセット（シヨートからシヨコラまでいろいろある）ただしマーボーが食べると毒になる

ギヤラクシー・ブレイカーを一分でSLBの百倍まで威力を上げれる。秒間60万発打ってる。

バラランシャ様からは、

エリクサーを500個を頂きました！ありがとうございます！！！！

マ「さあ、ゲストも来る事だし、早めに終わらせようか……いいよ
おとおお……！」

ピカーン

フィ「さっそくきたわね。」

マ「一分間……。一分間耐えれば……！」

ドゴオオオオオオオオオオ……！！！！

マ「うわっと！」

ズツゴオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！

グオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！！！！！

マ「おっ！ 案外、避けれるな……！」

貴「よし！とれたぞ。」

瑠「あ、ありがと／＼／＼」

ゼ「なんか、瑠璃の反応がいつもと違うな。」

フィ「歳が近い相手は久しぶりだからじゃない？」

ク「そうね。お兄ちゃん系が多いからね。」

貴「ケーキ食べていたのか？」

瑠「うん。貴一君も食べる？／＼／＼」

貴「いいの？」

瑠「いいよ。はい、あ、あ／＼／＼」

貴「え！？／＼／＼」

瑠「あ／＼／＼／＼」

貴「わ、わかったよ。あ／＼／＼」

もぐもぐ

マ「そんなことはどうでもいい!」

ゼ『いいのか。』

マ「何だこの二人は!? 見ていてじれったいぞ!？」

ク『そうよね! 私もそう思ったわ!』

瑠「く、クリス〜! / / /」

貴「な、なんか大変な事になりそうだから、そろそろ帰るよ!」

瑠「ほえ! ? か、帰っちゃうの?」(涙目)

貴「あ、ああ。悪いな。」

フィ「そうね。この作者が暴走する前に帰ったほうがいいわ!」

瑠「じゃあ、お土産に。寒くなってきたから、マフラーを編んでいたの。」

貴「マフラーか。ありがとね。」瑠璃の頭をナデナデ

瑠「えへへ / / / / どういたしまして / / / /」

貴「じゃあね! / / /」(か、可愛い / / /)

マ「あゝあ！？貴一はどこに行った！？」

フィ「帰ったわよ。」

ク「なに勝手に帰しているのよ！！」

ゼ「お前たちが危ないからだ。（汗）」

マ・ク「ちつくしよおおお！！！！」

フィ「ふう。今回はここまでです。」

瑠「感想もいっばいください／＼／＼」

ゼ「次回のゲストはまたまたあの人だ。ヒントは春」

フィ「それはもう答えよ（汗）」

瑠「では、次回もよろしくお願いしますね／＼／＼」（にこっ）

瑠・フィ・ゼ「『バイバ』イ！！』」

マ「クリスさん！次回は力を貸してください！！」

ク『そうね。あなたが死んだら、その矛先が今度は私たちに来るからいいわよ。』

番外編：本編の続きが気になる？でもね…今回はいつもより長くなりそうだから

ということ、番外という事にして一話まるまるあとがきっぽくしてみました！

後悔？そんなものはしていません！…！

あ、あと、PV：128、926アクセス、ユニーク：16、08
9人突破しました！

読んでくださっている皆様、ありがとうございます…！

番外編：本編の続きが気になる？でもね…今回はいつもより長くなりそうだから

マ「やっちゃまった！まるまる一話あとがきだよ〜！」

瑠「わ〜！」ぱちぱち（拍手）

フィ「本当にやったのね…」（汗）

ゼ「すごいな…」

ク「でも記念でもあるんでしょ？」

フィ「え！？何が？」

マ「実はな、PV：128 / 926アクセス、ユニーク：16 / 0
89人突破したので、その記念もかねています！！」

瑠「やったねえ！」

マ「ハッハッハア！！この俺をあがめる！」

ク「いい気になるな！このクス男！」

フィ「そうよ！この駄作があるのは読者のおかげなのよ！？」

マ「え？…これって記念の番外編だよな？なんで俺が怒られる？」

ク「まったくアホよね〜」

マ「ふん。関係ないやい！俺がすごいんだい！！」

フィ「ふんっ！」

バキツ！

マ「くっは！？」

フィ「はい。読者の皆様に！」

マ「いつつ。えっと…こんな駄文を読んでくださりありがとうございます！！
います！」

瑠「ありがとうございますね。」（にこっ）

ク「ま、上出来ね。」

ゼ「では、ここで感謝コーナーだ！」

フィ「コホン！えく、ユタ様、A r i s h i a様、R a i N様、ブ
ラックサレナ様、A I R S様、バラランシャ様、仮面ライダー
ケイド神様、ばっど様、メガネ様、月光閃火様、感想ありがとうございます
ございます！！」

ゼ「お土産には、

バラランシャ様には、

エリクサーを500個＋エリクサー追加で400個
ルシフェリオン（パイロシューターやブラストファイヤー、ルシフ
エリオンブレイカーなど使える。）

ユタ様からは、

ギヤラクシー・ブレイカー（威力千倍の秒間100万を10分春人
がかえった後に。）

瑠璃にイージスを頂きました。ありがとうございます。』

マ「さてと、今回は特別ゲストを呼んでいます！」

フィ「それって……（汗）」

マ「ああ。ではー！どどどぞー！」

ア「どうもー！久しぶりね！アテネよ！」

フィ「ゲストってアテネのこと！？」

瑠「アテネだー！」トテトテ（アテネに抱きつく）

ア「あらあら、瑠璃ちゃんったら。いつも貴方たちの事は見させてもらっているわよ。」

ゼ『お恥ずかしい。』

ク『覗きが趣味とは悪趣味なものね〜ケツ!』

マ「おまえはどうしたんだ？」

ク『だって、あいつが劉ちゃんと出会った女第一号じゃない!』

フィ「余裕ないわね〜お・ば・さ・ん?（笑）」

ク『言うようになったわねえ!』

ア「ほら!貴方たち!やめなさい?」

フィ・ク「『アンタは黙ってなさい!』!」

ア「…フィオネ……クリスティーナ……黙りなさい……」

フィ・ク「…っ！は、はい！！」

ゼ『ど、どづいうことだ！？アテネに言われると…体の自由…が？』

マ「そりゃ、おまえらの生みの親だからなあ。」

瑠「ふえ〜。すごいね〜。」

ア「そんなことないわ〜。」（えっへん！

マ「とか言って、その自慢顔はなんだよ………」

ア「それより、あっちに何か人をヤメタっぽいモノ？がいたわよ。」

マ「…彘？」

春「コロスコロスコロス」

ク『ぎゃああああ！！でたああ！！！！』

フィ「や、やばいわ！アテネ！」

ア「私でも止めるのは無理ね。だって……疲れるし。」

フィ「ええええ！？」

ア「ま、ルリルリは守ってあげるわ。ほら、こっちにおいで〜？」

瑠「うん。みんなバイバイ」（にっこり）

マ」おっどー」

ドッガアアアアアアンー！！！！

ア「あらまあ。あんな早い攻撃を避けたわね。」

リ「う…そ…?」

アリ「わあ！前来た時より強くなっている!」

瑠「作者はね、すごいんだよ」（にっこり）

リ「う、うん。そうだね／＼／＼」（か、可愛いなこの子／＼／＼）

ア「そうだ。今のうちに自己紹介しちやいなさい。」

アリ「あ、はい。私は『神に何度も殺された青年』のアリシアテスタロッサです!」

リ「僕はリオラ・エスペラと言います。あそこで暴れている春人の弟でした。」

ア「はい。よくできました!…あっ!春人が追い詰められているわよ?。」

リ・アリ「はい!?!?!?。」

春「キサマアアアア!?!?!。」

マ「遅い…遅いよ!弱くなったな…春人ツ!。」

モリインは強いと思います！！」

フィ「何言ってるのよ！？」

マ「あゝ！？別にいいじゃないかよ！俺が勝ってたから！……！」

ゼ「ちがう！作者！後ろだぁ……！」

マ「うるさいなぁ。うしろがな……ん……だよ……？」

春「……………」

マ「……………」

春「キサマア!!!」

マ「クリスはそう簡単には折れないぜ?」(ニヤリ

ゼ『なんだ?作者がかっこ良くみえるぞ?』

フィ「そ、そうね…」

ア「ん」。この短期間であの作者はどれだけ強くなってんの?」

瑠「毎日、核弾頭×100から逃げてたよ?」

アリ「そ…それだけで春人を相手にできるの?」

リ「ま、まあ、今の兄さんは判断能力が鈍くなっていますし……」

キイイイン！！！！

ガキイイイイイン！！！！！！

キシヤアアアアン！！！！！！！！！！

マ「はぁあぁ!?!?!」

春「オラアアアア!?!?!」

キ「イイイイン!?!?!」(罅迫り合い中)

マ「はぁはぁ…。(ま、まずい。体力が…:くっ!」

春「マダマダア!?!?!」

ク「ちょっとアンタ!?!気張リなさいよ!?!」

ゼ「なんかまずくないか?」

フィ「そうね、体力が切れかけているわ。」

ゼ『どうする?』

フィ「そうね。ここで作者が負けたら次は…」

ゼ『俺たちだな』(遠い目をしている……目なんてないけど)

フィ「しょうがないか。ここは総動員で作者を応援よ!!作者く
!…!」

マ「な…なんだよつと!」

ガキイイイイン!…!…!

フィ「今から特別にユニゾンしてあげるわ!」

マ「え！？ユニズ」はい！ユニゾン・イン！！「…ふおおおおお
おおおおおおお！！！！！！」

春「クツ……」

マ「俺は今からスーパー俺になった！」

ファイ《行くわよー！！！！》

マ「カートリッジ・ロード！！！！」

ク『Load cartridge』

春「ソナモノ！」

マ・ファイ《「くらえ！！！！これは前にお前に喰らったああ！！！！
！エクス……」

春「コオオイ！！！！！！」

マ「……………」

フィ「ふう。ユニゾン・アウトされちゃった…」

ク『でも良くやったわ、作者!!見直したわよ!!』

マ「……………」

フィ「…作者……………」

春「ムダダ……」

フィ・ク「『……っ！！』」

春「ん……。そいつはもう……気絶している。」

フィ「春人！？意識がもどったのね！？」

春「あ、ああ。」

ク「やったわ！これで……！」

春「ま、でも罰は受けてもらおう！」

フィ・ク「『……彘？』」

バキッ！

ドカッ！……！

フイ・ク「『@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@』」(目を回している)

春「さつて、次は……」

ゼ『俺ならここだ。』

春「いさぎいいな。」

ゼ『まあな。』

春「そういうヤツは嫌いじゃない……………が、」

ドカッ！

春「見逃すわけにはいかない。」

リ「って！何やっているんですか！？馬鹿兄さん！！」

ドガツ！！

春「ぐはっ！？」

アリ「本当よ！！このっ！！」

バキッ！！

リ「ホントだね…さ、連れて帰りますか。」

ア「あ！まって！」

リ・アリ「「????」」

ア「今回は来てくれてありがとうございます！これはそのお礼ということ！」

リ「ありがとうございます！」

アリ「これは？」

ア「瑠璃のお手製マフラーよ。最近寒くなってきたからってあの子、一人一人に編んでは渡しているのよ。」

リ「そ、それはまた……」（汗）

アリ「大変そうね……」（汗）

ア「アリシアちゃん、リオラ君、あと春人の分と星菜ちゃんの間もあるわ。星菜ちゃんにはルシフェリオンをありがとうと、壊してごめんなさいって…伝えてくれる？」

アリ「わかりました。」

リ「では、失礼します。」ズルズル（春人を引きずっている音）

ア「ふう。行ったわね。」

瑠「今回も面白かったね」

ア「そうね。また機会があれば……ね。」

番外編：本編の続きが気になる？でもね…今回はいつもより長くなりそうだから

マ「くふっ！な、なんとか余っているエリクサーで復活した…マーポーです…。」

ア「本当に久しぶりね。アテネです。」

瑠「~~~~zzz」

フィ「瑠璃ちゃんは疲れて寝ちゃったわね。フィオネです。」

瑠「むにゃ…むにゃ…zzz」

ア「か、可愛いわね／／／」

フィ「写真とるわよ！！」

ク「そ、そうね！」

ゼ「あゝ。一応、クリスと俺もいるぞ。」

マ「…にしても…なんか忘れてるような気がするんだよね。」

フィ「そんなのはいいから作者も写真撮りなさい…！」

マ「んゝ。了解」

瑠「んゝ」

ア「起きた？」

瑠「~~~~」
「さ、さあ……」
「ZZZ」

ア「あと、私を出してという要望は大歓迎です!!!まっていますか
ら!っというかください!?!?!?くれた人には私が文字通り人肌脱
ぎ・ま・す・か・らッ!」

フィ「では、次回もよろしくお願いします!?!?!」

瑠「…むにゃあ……ばいばいでs……zzz」

第24話：この前も言ったけど、初対面の人には第一印象が大切なんだって！

え、前はとんだ暴挙を…すいません。

今回はちゃんと本編なので！………短いですが（ボソッ

では、24話どうぞー！！

第24話：この前も言ったけど、初対面の人には第一印象が大切なんだって！

前回のあらすじ。

天道劉です。

学校ではオレ以外のクラスメイトが授業をボイコットし、隣のクラスA君を集団リンチという聖祥大学付属小学校始まって以来の事件がありました。（その間オレは一人で授業を受けていた。）

事件の主犯格の魔王との帰り道、動物保護団体？の方々がフェレット一匹を捕獲している現場と遭遇。

嫌がるフェレットを無理やり籠に入れようと奮闘する動物保護団体？の方の顔は怖く、ときどき嫌がるフェレットが鳴き声をあげるとニヤリと口を微かにつり上げていました。

それは、傍から見たら動物を保護しているのか、虐待しているのか分からない凶でした。

しばらく見ていると、フェレットが「助けて」としゃべり始め、オレは

「ああ。日ごろの学校のストレスのせいで幻聴が聞こえるんだ」

と真剣に病院に行くかどうか悩みながらも、そのフェレットを助けました。

近くの公園にて、一緒に居た魔王はフェレットがおいしそうだったのか、笑いながら頬擦りをし、食料としての品定めをしていました。その光景に恐怖に感じていると、今度は耳鳴りがオレを襲い、苦痛にもだえるオレを魔王は

「いいなあ。」

と一言もらしながら、走り始めました。

オレも急に走り出した魔王が気になり後を追いかけると、そこには

大きい、大きい木のバケモノがいました。魔王は変身して木のバケモノに容赦なく攻撃をしますが、木のバケモノはバリアを張って防ぎます。

「これは…映画か、なにかか？」

混乱している頭を整理しようとして上を見上げると、

「劉〜！！！！！」

日々のストレスで末期と化したオレを狩るべくやってくる鎌を持った死神と、地獄の番犬らしき獣人がいました。

「なに……これ……？」

あらずじ終了

「劉〜！！！！！」

オレが悩んでいると、フェイトとアルフがちょうどイイタイミングでやって来た。

「もう！なんで呼んでくれなかったの!?!」

オレの横に着くなりフェイトがオレに対して怒ってきた。だって…なあ？

「フェイトは無茶する事が多いからボクだけで片付けようと」「ここ最近の劉に言われたくない!」「…はい。」

オレが理由を説明しようとする、フェイトにまた怒られてしまった。

「これからは、ちゃんと呼んでね?」

「わかったよ。でも、それはフェイトもだよ?」

「うん。ふふっ。二人だけの約束だね!」

「そうだな。」

フェイトと向き合いながら笑っていると、

ドカアアアッ!!

「「っ!!!!」「ビクッ

オレとフェイトの間に何かピンク色をした球体が落ちてきた。

「……な、なのは……さん？」

オレはその正体は何なのか分かり、そのピンク色の球体の落とし主を見上げる。

「劉ちゃん、フェイトちゃん。今はふざけている場合じゃないよね」
「？」

そこには、にこやかに笑う魔王「劉ちゃん？」……もとい、悪魔「スタートライト……」……失礼！なのはさんがいましたぁ！！！！！！

(なんで心が読めるんだよ……)

「お約束なの……！」

「????？」

オレとなのはしか分からないやり取りをしていると、フェイトが頭の上に？マークを浮かべる。

「ま、まあ、気にしないで！にしても、いい所に来てくれたよ。」

オレは今の状況を二人に説明する。

「ん〜。じゃあどうするんだい？」

説明を終えるとアルフが聞いてくる。

「作戦は一応あるんだ。」

『ゲイ・ジャルク
破魔の紅薔薇か？』

「いや、ここは純粹に力勝負だ。ジュエルシードを壊しても嫌だし。」

ゼロが聞いてくるが、オレは確実な方法の方をとった。

「でも、バリアがあるんだよね？」

今度はフェイトが聞いてくる。

「それに関しては心配しないで。バリアはボクが壊すから。」

「「劉が？」」

フェイトとアルフが仲良くハモる。

「一回、なのは所に言ってから説明するよ。」

「ふえ？劉ちゃんがバリアを？」

「通りなのはにも説明を終えると、なのはもオレに聞き返してくる。」

「…なにか……？」

「いや、劉ちゃんはか弱いから、私が守らないとおもって」…
「…きゃああああ！ごめんなさいの……！！！」(泣)

なのはの目が覚めていなかったらしいから、アイアンクローをして目を覚まさせてやる。

「うう。痛いなの。(泣)

「まったく、ボクの方が強いんだから、ボクが守ってあげる立場だろ。ねえ？フェイト。」

「……………」

フェイトに聞くが目をそらされてしまった。

「…フェイト？」

「うん！決して、決して！劉がお嫁さんみたいに可愛いから、私が守ってあげないなんて思ってないよ！……………あっ…」

うん。フェイトは勝手に自爆してくれた。

「はあ。もういいよ。先にこっちを片付けよう。」

オレはいまだに暴れている木のバケモノを見る。

「劉ちゃん！私にはアイアンクローをして、なんでフェイトちゃんにはしないの！？」

「そ、それは、やっぱり劉が私の事を大事にしてくれているから…
だよ／＼／＼／」

二人が言い合いを始めたが無視することにした。

「むう！そんなことないもん！劉ちゃんは私の事を大事にしてくれているもん！一緒に寝ても手を出してこないのが証拠なの！！」

「それは、なのはに興味がないんだよ。それに劉は私の家に来て、私の母さんに話があるって言って、二人で話していたもん！！」

「私はどうしたらいいんだい？」

「アルフは結界の補助をお願いできる？フィオネをこっちに呼ぶから、その穴埋めを頼みたいんだけど。」

「わっかた。結界のほうは任せな！」

アルフはそう言うとユーノがいる場所に飛んでいった。

「フィオネ！」

「は〜い！全部聞いてたよ〜！」

「そうか。じゃ、さっそく〜…」

「」「ユニゾン・イン〜！」」「」

「あ！劉ちゃんユニゾンしたんだ。」

フィオネとユニゾンしてなのはとフェイトの所に向かうとなのはに聞かれた。

「まあね。フエイトも準備はいい？」

「うん！いつでもいいよ！」

「それじゃ、いくか！クリス！」

『やっと、私の出番ね！まったく、いくら私が劉ちゃん以外の男に興味がないから安心して言っても私の事放っておきすぎよ？ああでも、放置プレイも嫌いじゃないのよ？むしろ、得意な方だわ！劉ちゃんからの冷たい攻撃・視線は私のハートを突いて、突いて、突きまくるのよね／＼／＼私の心を根こそぎ持っていくっていうのかな？キャツ／＼このい・け・な・いド・ロ・ボ・ウ・さんそんな悪い子は私が逮捕しちゃうぞ？ ふふつ、さらにさらに…もういいよ！！？』…もう、今日は突込みが激しいのね」

…うそ…だろ？オレたしか、「クリス！」としか言っていないぞ！？なんでこんなに言葉が出てくるんだ！？しかも自分が変態ですって言っているような内容ばかりだし…（汗）

『…劉…大丈夫か？』

「あ、ああ。心が折れそうだ…」

しかもまだ言おうとしていたよな？本気でこいつが心配だ。

『劉ちゃん…大丈夫？どこか痛いなら、私が治してあげましょうか？』

なん…だと…？こいつ、自分でオレの精神に攻撃しといて、そ知ら

ぬ顔で大丈夫？治そうか？…だと？やべえ。こいつは強敵だ…勝てる気がしない…。

「だ、大丈夫だよ。それより、今は目の前の敵に集中だ。いいな？」

『私はいつも集中しているわよ？』

「うん。いいんだよ。集中しているなら…いいんだ。」

『はあ。魔力変換【風】か？』

ゼロがオレの心を察してか、どれに変換するか聞いてくれる。

「いや、今回は【暴風】だ。悪いな。」

『劉を見ているとな…。わかった。魔力変換【暴風】！』

ちなみに、【風】と【暴風】はちがうぞ？なぜかって？【風】はどつちかというと対人戦に使うかな？

【暴風】は純粋な力だから、その辺の人間に使うと体がバラバラになる。そのぐらい強い威力だ。このバリアも壊せるだろう。

「劉ちゃん！！」

「劉！！」

とその時、なのはとフェイトがオレの名前を叫んだ。

《劉ちゃん！横だよ！！》

ユニゾンしているフィオネに言われ横を向くと、こっちに向かってこれまた大きい木の塊が飛んできていた。

「あせるなよ。クリス！」

『こんなもの余裕よ！！』

オレは木の塊に向かってセカンドモードのクリスを片方向ける。

「スチームシューター！！」

『ファイア！！』

クリスから圧縮された【暴風】の球体が発射され、木の塊に直撃する。すると、木の塊は呆気なく碎け散った。

「ふえええ！劉ちゃん、すごいの〜！」

「あの技…受けたくないなあ（汗）」

なのはとフェイトがオレの攻撃を見てはしゃいでいる。

「クリス、カートリッジ・ロード！」

『Load cartridge』

二発、カートリッジがロードされる。

「荒々しい暴風よ！今一時の間、【オレ】の力となり、敵を殲滅しろ！！ダイナストロア……」

「ギヤアアアシャアアアアアアアアアアア!!!」

木のバケモノもその魔力に対抗しようと先ほどのような塊を出して
くるが、まったく意味がなさない。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!

そして、木のバケモノに直撃する瞬間、やはりバリアを張ってくる。

が、バリアはすぐに砕け散り、その魔力は木のバケモノを呑みこんだ。

「はあはあ。なのは！フェイト！」

「うん！ディバイイイイン……」

「貫け！轟雷！！プラズマ……」

二人が溜めに溜めた魔力を発射する。

「……バスタアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！」

「……スマツシャアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！」

すでに『ダイナストア・ワルツ』で弱っていた木のバケモノをな
のはとフェイトの魔力がさらに襲う。

《これは…オーバーキル？（汗）》

フィオネが苦笑いしながら言う。

「まあ、これぐらいしなきゃダメだと思っつよ？」

「ふう。疲れたの〜。」

「うん。…私も…疲れちゃった。」

「なのは、フェイトお疲れ。」

なのはとフェイトに言つと、

「劉ちゃんさつき、【オレ】って言ったの。」

「へ？いつ？」

なのはがオレに言つて来るが、まったく身に覚えがない。

「あ！あれだよ、劉。詠唱している時の。」

「ん〜……あ……」

そういえば言つてたような……（汗

「いやいや、あれは許してよ！？」

「ダメなの」（ニコッ）

なのはがイイ笑顔でオレに答える。

「だってあれは詠唱の一部なんだよ！？」

「じゃあ、女の子も【オレ】って言つたの？」

「うっ……それはあ……そのお……」

「どつなの！？」

なのはがオレに詰め寄る。

(理不尽だ…なんだか…目から塩水が…)

「うう〜…」

「ふえ!?!劉ちゃん!?!」

オレはとうとう泣いてしまった。

《りゅ、劉ちゃん?泣かないで!?!》

「だって…ヒック……だってえ」

「…なのは…劉を泣かせたらダメだよ。」ジー

「うっ!」「ごめんなさいなの…」

「グスッ!フェイト〜」

「はい。よしよし」

フェイトがオレを包み込んでくれて、優しく背中を撫でてくれる。

《さて、そろそろユニゾン・アウトしようかなあ……ん?…劉ちゃん!?!何か来るよ!?!》

フィオネがユニゾンを解こうとした瞬間に何かがあると知らせてくる。

そして……

「そこまでだ。ここでの戦闘は危険すぎる。僕は時空管理局執務官クロノ・ハラウオン、戦闘を停止し詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

オレが泣いている時にKYが現れた……。

第24話：この前も言ったけど、初対面の人には第一印象が大切なんだって！

マ「はい！24話でした！！」

瑠「お疲れ様だね？」

フィ「アンタここ最近無理しすぎじゃない？」

マ「そんなことないさ！」

ク「そうよね。こんな事でくたばってもらっちゃこっちが困るわ
『！』」

ゼ「では、感謝コーナーです。Rain様、夜神様、畏無様、バラ
ランシャ様、ばつど様、ユタ様、メガネ様、流水様、TH・F様、
夜路様、感想ありがとうございます。』

フィ「感謝感激だね！」

瑠「お土産は、

ユタ様からは、

エリクサーを2000個

メガネ様からは、

胴体、頭、両腕に血の滲んだ包帯が巻かれているコダイの写真（結
構色っぽい奴）

夜神様からは、

特製ブルーベリータルト（人数分、特殊効果なし、翠屋でも絶賛販売中）と

作者宛てに特殊アイテム 瞬間再生能力付きの指輪
カナタの画像データ 裸ワイシャツver

夜路様からは、

刻徒君のスク水姿の写真

『刻徒製性転換媚薬』

バラランシヤ様からは、

写真『アリシアとライラがフェイトの真・ソニックフォームの衣装を着て恥ずかしがってる写真』

写真『星菜が某幻想郷の巫女さんの巫女服を着て、少し顔を赤らめている写真』

ルシフェリオンブレイカーが500発

春人の寝顔&寝言の入った動画

ユタ様からは、

エリクサーを2000個

を頂きました。ありがとうございます。」

マ「今回は画像や写真をたくさんもらったな。これで俺のコレクションが増えたぜ〜！ぐへへへへっ〜！」

フィ「……………ひくわ……………」

瑠「ねえねえ。」クイクイ（作者の袖を引っ張っている）

マ「なんだ？」

瑠「ぶ、ブルーベチツ……かんじやった……」

ゼ『ドンマイだ。瑠璃。』

ク『アンタって瑠璃には甘いわよね〜』

瑠「あうあう／＼／＼／＼／＼／」

マ「で、…なんだ？」

瑠「ブルーベリータルト…ブルーベリータルト…ブルーベリータルト…ブルーベリータルト」
ト（小声で練習中）

フィ「がんばれ！」

瑠「ブルーベリーチャ……ブルーベリータルト！食べたいですノノノノノ」

マ「ま、がんばったしいいか…。皆も食べよう。」

フィ「もぐもぐ…ん〜！美味ね！」

瑠「はむっ！…もぐ…もぐ…はむっ！…もぐもぐ…」

マ「うん。うまいなあ。瑠璃は？」

瑠「もぐ。おいしいね！びみだよー！」

ク『この子は何でも真似するわね』

マ「さて、そろそろゲストをよぶか。今回はメガネ様の作品『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界』の主人公のコダイが来てくれました!!」

コ「よう!これ手作りのクリームシチューだ。」

マ「ありがとな。」

フィ「うわ〜!おいしそう!」

コ「皆で食べてくれ。」

瑠「コダイ君ありがとう。」

コ「おお。瑠璃元気だったか?」

瑠「うん。」

ク『見ての通りよ!』

ゼ『絶好調だな。』

コ「...っと!そうだった。今日は、作者に一言言いに着たんだった!」

マ「ん?なんd「あんまりロリコンを増やすな!自重しろ!!そしてただ単純に死ねえええええ!!!!!!」

ベキッ！

バキッ！

ドカッ！

マ「グッ！ガッ！ちよつ最後のはちが…ぐっはあああ」ドサッ

フィ「うん！このシチュもおいし〜い！って、作者〜！？」

ゼ「いつのまにかだな」

マ「……………だが！この瞬間再生能力付きの指輪があれば、あらゆる思議！俺ふっくらじゃあもついつペン死んで来い！」…彘？」

ドスツドスツドスツ！！！！

バゴッ！

ク「あゝ。今のは逝ったわね〜（笑）」

ゼ『なぜ笑う!?!』

マ「…だ、だが……これさえあれ…ば…」はい。もう一回「…え、？」

ゴスツ!

ドガツ!

ピキューン!!……ドツガアアアアン!!!!!!

マ「……ダメだ。死にたい…。」

コ「ほう。ホントに再生するな。まだまだ逝けるな?」

マ「え!?!ちよつ!まつ…ぎゃあああああああ」

ク『あらあら。さらにルシフェリオン500発もきたわ(笑)』

ゼ『だからなんで笑っているんだ!?!』

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

コ「ふう。今回は帰るな。」（瑠璃の頭をなでなで）

瑠「…ん／＼また来てね？／＼／＼」

コ「ああ。そうだな。」

フィ「おっと！コダイ、お土産にこれ持ってって！」

コ「マフラーか。ありがたく貰っていくよ。じゃあな。」

瑠「ばいばい／＼／＼／＼」

ク「さ、今回はここまでね。」

ゼ「感想もどしどしくれ！待っている！」

フィ「次回もよろしくお願いします」「こらこら待たんかい！」「…なに
よーよってこないでよー！」「」

第25話：いや、久々にキレたね。でも、オレは悪くないもん！……全部クロー

ふう。最近はどうも瑠璃の人気があるみたいで…

ここで、アンケートでもしてみましようかね？と思っています！
では、25話です！！

第25話：いや、久々にキレたね。でも、オレは悪くないもん！……全部クロノ

「管理局執務官のクロノ・ハラウオンだ！」

オレが泣いている所にクロノが現れた。

「管理局！？」

フェイトが管理局の単語に反応する。

「劉〜！」

「どうしたの〜？」

そこに、アルフとユーノが帰ってくる。

「君達も仲間か？」

「ん？こいつは…誰だい？」

アルフが？マークを浮かべる。

「アルフ、管理局だって。」

「…っ！！なんだって！？」

フェイトから聞いたアルフがクロノを警戒する。

「あ、あの…管理局って？」

一人状況が判断できていないなのはに、

「管理局っていうのはね…」

ユーノが説明を始めた。

「さあ、武器を捨て、おとなしく投降してもらおうか？」

クロノが四つほどスティンガーレイを形成して軽く脅してくる。

「こんなの唯の脅迫じゃないか。」

《ほんとよね〜！》

「君達！何か言ったか！？」

オレ達の言葉にクロノが反応する。

「だから！こんなのは脅迫にしかなくていいと言ってるんだ！」

「貴様！管理局を侮辱する気か！？」

すぐに頭に血が上ったクロノはオレに向かってスフィアを発射しようとする…が、

「……………」

クロノがオレ達に気を取られている隙を突いてフェイトがジュエルシールドを取りに向かう。

「そこを動かくなあ！」

クロノはオレ達に撃とうとしていたスフィアをフェイトに向かって発射した。

「…あつ！」

フェイトは発射されたスフィアに驚くが、すぐに反応して避けるとそのままジュエルシールドから離れる。

「お前こそなにしてんだっ！！」

オレはクロノに一気に近づき、

ドガッ！

「カハッ！？」

クロノの脇腹に蹴りをいれた。

「フェイト、アルフ！今の内に逃げろ！！！」

「で、でも！劉が！」

「フェイト、ここは劉にまかせて逃げよう！」

戸惑うフェイトを抱えアルフはその場を離脱した。

「貴様あ！自分で何をしたのかわかっているのか!？」

蹴りをいれられたクロノはオレに向かっていくつかスフィアを撃ってきた。

「悪いな！オレは何も間違った事をしたつもりはないっ！」

《そうよ！劉ちゃんはまちがってないわ!》

ユニゾンしているオレからしてみればクロノのスフィアは止まって見えたので簡単に避けてみせる。

「なのはとユーノもここから逃げろ！」

「「^{なの}嫌だ!！」」

なのはとユーノにも逃げるよう言うが、二人は同時に断る。

「劉ちゃんをおいていけないの!」

「そっだよ!」

「…わかったよ。じゃあ、この中に入っただよ。」

オレは小さい結界を創って二人を入れた。

「管理局員に攻撃した貴様を逮捕する！」

クロノは周りにバインドを設置していく。そして、

「ステインガレー！」

さらにスフィアを放ってきた。

「ふんっ！この地球には管理局なんて存在しないんだ。お前の言う法律は無効になるんだよ！」

オレはスフィアを避け、クロノに近づきながら言う。

「今だ！！」

クロノはさっき仕掛けておいたバインドを発動してオレを捕らえようとする。

「だから、こんな物は意味ないよ。」

オレはさらにそれを避ける…が、

「そんなことは知っている！ディレイドバインド！！」

「なに！？」

避けた先にはいつのまにか設置していた、設置型バインドが発動していた。

「…いつのまに。」

《劉ちゃん！あれ！！》

「ん？」

フィオネに言われてクロノの方を見る。

「うわ〜。ブレイズキャノンかよ〜（汗）」

すでに、砲撃準備に入っているクロノがいた。

「はあ〜。これは…少し本気出すか。」

オレは目を瞑って集中した。

「喰らえ！ブレイズキャノン！」

クロノのデバイス、S2Uから砲撃魔法が発射される。

《「……バインドブレイク」》（ボソツ

パキイイイン！

《「^{トレスオン}投影開始絶対^{アイギス}守護の盾！！」》

オレはすぐさま絶対^{アイギス}守護の盾を投影しブレイズキャノンを防いだ。

「なっ！！ばかな！！」

ブレイズキャノンが直撃すると思っていたクロノは驚く。

「おまえ、自分が知っている事はすべて常識だと思っているだろ？」

オレはクロノに聞く。

「あたりまえだ！それに、魔導師が管理局を知らないわけないだろう！！」

すると、クロノはそう答える。

ぶちっ！

「その考えが間違っているってわからないのか！！！」ゲート・オブ・バビロン「王の財宝！！！」

クロノの言葉にキレたオレの後ろの何も無い空間から無数の宝具が出てくる。

「な、なんだ！？その魔法は！？」

クロノは驚きながらも砲撃の準備に入る。

ロールアウト
《《工程完了、全投影待機！》》
バレットクリア

「おまえはオレの友達に攻撃したんだ。これだけで済むと思っなよ？」

と言っが、

「……………」

どうやら気絶してしまったらしい。

「ったく。」

オレは気絶したクロノをそのまま海に落とそうとする。

すると…

《待ってください！！》

目の前に大きなモニターが現れる。

「……………あなたは？」

《時空管理局提督のリンディ・ハラOWNです。今、貴方が足を掴んでいる子の母親でもあります。》

「…それで？こいつはオレの友達に攻撃しといて、こちらは知らないと言っているのに、自分は知っているからお前らも知っているだ

ろつという考えを押し付けてきたんですけど?」

《その事については謝罪します。それと、ロストロギアの件について一度、こちらでお話を聞かせてもらってもよろしいでしょうか?》

(うん。ここまでブレイクしてはなんだけど……ここは原作どおりにするか。)

「了解しました。そちらに轉移します。」

《え!?ここまで轉移でk》

オレはリンディとの通信を一度きる。

「なのは、ユーノも行く?」

「うん!」

「僕も行くよ。」

オレは二人を連れてアースラに轉移した。

第25話：いや、久々にキレたね。でも、オレは悪くないもん！……全部クロ、

マ「今回は短いですね。作者のマーボーです。」

瑠「こ、こわかったね。瑠璃です。」

フィ「こわかったって…自分の事でしょうに。…フィオネです。（汗）」

ク「それに、劉ちゃんが自分のこと普通に【オレ】って言っていた事について！クリスよ。」

ゼ「劉は怒ると周りが見えなくなるからなあ。ゼロだ。」

マ「え〜。今回はさっそくですが、感謝コーナーを！メガネ様、畏無様、ユタ様、バラランシヤ様、夜神様、AIRS様、月光閃火様、天宮翔様、感想ありがとうございます！」

フィ「つづいて、お土産コーナーです。

畏無様からは、

アスラクラインのトランク（白銀）

バラランシヤ様からは、

ゲイ・ボウ

写真「必滅の黄薔薇と破魔の紅薔薇を両手で持ち、構える春人」

写真「瑠璃ちゃんを想いながら寝ている春人」

春人Tシャツ

極秘・春人の秘密日記（瑠璃の想いを綴る用）

不思議なホイッスル（使用回数：1回のみ）

詳細：このホイッスルを吹けば、1度だけ春人をその場に呼び出す

ことが出来る。

夜神様からは、
カナタの映像『カナタ、特大白クマ人形を発見する。』
を頂きました！ありがとうございます。」

瑠「えへへ／／／また宝物が増えたよ／／／」

ク『ホントうれしそうね。』

ゼ『そして、さっそくゲストの登場だ！』

フィ「ユタ様の作品『異世界を渡る』から哭堵優さんとニンフ&レインの登場です！」

マ「やあ、よくきて「死ねやああああ……！！」……はべりっ!？」

ヒュー

ドガアアア!!

優「ったく。あの作者は。」

瑠「あうあう。作者があ」

フィ「心配いらないわ。」

二「はあはあ。やっと追いついたわ」

レ「ほんとですよ…」

瑠「あーいらっしやですー！」

二「キヤー！生瑠璃ちゃんよー！！」（瑠璃に抱きつく。

瑠「ほえ！？きゃあー！」

二「えへへ」スリスリ（頬擦り

瑠「はう…／＼／＼恥ずかしい／＼／＼／＼」

レ「…はははっ（苦笑）」

ゼ『瑠璃はよく好かれるなあ。』

ク『それよりあつちは……』

マ「な、なぜ？…」

優「最近のお前はいき過ぎているからな。俺が直々に罰を…と思う

「ふふっ可愛いわ！ほっぺもぷにぷにねっ」

瑠「にゃ〜、くすぐりたいよ〜／＼／＼／＼」

レ「……」（可愛いな／＼／＼）

ゼ「天国と地獄は紙一重だな…」

ク「そうね〜」

フィ「まあ、作者一人が地獄ならいいんじゃない？」

ク・ゼ「うんうん！〜」

マ「ちょっとクリス！助けてくれ！！俺一人じゃ！！」

ク「え？この前のは特別だって言ったじゃない」

フィ「そうよね〜。」

マ「なっつ！〜？」

優「まあな。」

レ「急に行くんだもん。びっくりしちゃった。」

瑠「はあはあ／＼／＼あ！お兄ちゃん！」

優「久しぶりだな。」

瑠「そうだね。今日はどうしたの？」

優「いや…もう用事は終わったんだが…いいか？あっちには行くなよ？」

瑠「ふえ？どうして？」

優「……なんでもだ」（ニコッ）

瑠「／＼／＼／＼わ、わかった。お兄ちゃんの言う事聞くね。／／／」

優「さ、そろそ帰るか？」

レ「うん。」

ニ「そうね？」

瑠「あっ！まって。お兄ちゃん達にこれ、あげるね。」

レ「これは……」

優「マフラー？」

瑠「うん。最近寒いから／＼／＼」

二「もしかして、瑠璃ちゃんの手作り？」

瑠「うん…／＼／＼うまくなってきたか、わからないけど／＼／＼」
（ボソツ）

二「うわあ、瑠璃ちゃんの手作りよ…！ありがとね！」

瑠「どういたしまして／＼／＼」（ニッコシ）

優・二・レ「／＼／＼／＼／＼」

瑠「???」

優「じゃ、じゃあな！／＼／」

二「またね！／＼／」

レ「ばいばい！／＼／」

ゼ「瑠璃、最後にやったな。」

ク『そうね。』

フィ『まあ、いいんじゃない？さて、今回は【人気キャラ投票】をやります！』

ク『え〜つと、明日のam9時00分までの小さいものよ』

ゼ『この締め切りまでに、感想で好きなキャラを教えてください！』

フィ『ちなみに意味はありません！…っと言いたいですが、一位のキャラには何かしてもらいます！』

ク『では、今回はここまで！』

ゼ『次回も！』

フィ『よろしくね』

番外編：第一回人気キャラアンケート結果発表！！…え？番外が多い？それが

はい！前回から行われた人気キャラアンケートの結果発表です！

みなさんの好きなキャラは何位か？

ではどうぞ〜！

番外編：第一回人気キャラクターアンケート結果発表！！……え？番外が多い？それが

マ「はい！どうも！作者のマーボーです！」

劉「主人公の劉です。」

ファイ「劉ちゃんの心の支え、癒しのオアシス、そして！正妻のファイオネです！」

ク「皆さん、この私にたくさんの投票をありがとう！！……あたい……あたいっ！うれしくて涙が……うっうっ（泣）……あ、クリスよ。」

ゼ「おまえは何をやっている？（汗）……ゼロだ。」

ア「今回は私も登場！みんなの女神様のアテネです！」

マ「え〜、今回は勢いでやったこのアンケート。」

劉「たくさん投票がきました！」

ファイ「皆さんありがとうございました！」

ア「う〜ん。私：出番がないんだけど……これって、不利じゃない？」

ク「そんなことないわあ！貴方は出てても出なくても私に勝つことは出来ない運命なんだから！」

ゼ『はあ……。』

ア「そんなことないわよ！」

ク『ふんっ！何を言っても無駄よ！これは真実。ノーフィクションよ！』

マ「まったく、うるさいデバイスだよ。」

フィ「おまけに【馬鹿】だから救いようがないわね。」

劉「なんでこんなデバイスにしたのさ？」

ア「私も…これは予想外だったから……。ごめんなさい……」

ゼ『アテネ【が】謝ることではない。』

マ「……………」

劉「……………」

フィ「……………」

ア「……………」

ゼ『……………」

ク『ちよっ！何よこの空気…！私は何も悪くないわよ…っ。』

ゼ『アテネ【が】謝ることではない。』

マ「そうだな。」

フィ「アテネ【が】謝ることじゃないわね。」

ク「わ、わかったわよ！反省してまゝす（笑）これでいいかしら！？」

劉「お？クリスにしては珍しくちゃんと謝れたんじゃない？」

マ「たしかに。若干…いや、かなりうざい…つか、反省の態度が見えないけど。」

フィ「形だけでも謝れるなんて…」

ゼ「成長したな！」

ア「私は…私のデバイス設計はまちがってなかったのね」（泣）」

ク「ええ！？今で私としては謝れたほうなの！？？」

マ・劉・フィ・ア・ゼ「『『『『あぁ！そっだ！…！』』』』」

ク「私は皆にどういつ風に見られているのよ…！…！」（泣）」

マ「さ、そろそろ結果発表にいくらか！」

フィ「今回のアンケートでは、三人のキャラの名があがりました！」

ゼ『では、第三位の発表から！』

マ「え、第三位は投票数一票でアテネです！」

ア「え！？私！？」

マ「おう！そうだよ。」

劉「おめでとう！アテネ！」（ニコッ）

ア「え、ええ。ありがとねっ！／／／／／」

マ「っしかし、アテネの名前があがるとはなあ。」

ア「私も予想外よ。」

ク「あらあら、お情けの一票ね！」

ア「そんなことないわ！票を入れてくれた読者の方もありがとね
／／／／」

マ「急な話だけどさあ、」

劉「どうした？」

マ「票と栗って似てるよな？」

劉「……………」

フィ「では！第二位の発表です！」

マ「ムシ！？シカト！？」

ク「私の旦那である劉ちゃんよ！！！」

劉「だれだ？そんなヤツいないじゃないか？」

ク「真顔で返された！？（泣）」

フィ「本当に馬鹿ね。では、第二位の発表です！私の夫でもあり、
辛い時も二人で一緒に乗り越えてきた、愛という名の絆で結ばれた
パートナー！劉ちゃんです！」

劉「……………」

フィ「何か言つてよ〜」（泣）」

マ「はあ。第二位は、投票数三票で、この作品の主人公（笑）でもある、天道劉君です！」

劉「みんな、たくさんの投票ありがとう！そして、作者！（笑）は
いない！！」

マ「だって、主人公なのに……二位……ぷぷっ！」

劉「おまえのせいでもあるんだよ〜っ！！！！！」

バキッ！！

マ「ごぶっ?!…な、なぜ？」

劉「作者がもつとオレの見せ場を増やせばよかったんだ。」

マ「そ、それは…すまん。」

ゼ「ま、第二回に期待だな。」

ク『うつうつうつ』（泣）」

ア「どうしたのよ？いきなり泣いちゃって？」

ク『つ、妻である私が旦那に人気投票で勝つなんて…うつつ』(泣)

ア『……………そ、そうね』(棒読み)

フィ『では、第一回人気キャラ投票の栄光ある第一位は…!』

マ『栄光あんのか?』

劉『自分で言うなよ(汗)』

ア『はい!劉ちゃん!あ〜ん!』

ク『この私!…って、劉ちゃんに…あのキャンディーは……まっ、まさか…』

劉『あむっ!…うん。やっぱりうまいな』
「コロコロ

ピカ……………!』

ク『まさかああああ…!…!…!』

瑠「ふえ！？クリス？」

マ「気にすんな。」

ア「ふふっ！あなた…私より出番があるのに0票って…。かわいそうに。」

ク『……………』ぷすぷす

ゼ『シヨートしたな。』

フィ「わ、私だってねえ。毎回出ているのに…0なんて…orz」
泣

マ「にしても…やっぱり、瑠璃なのか。」

瑠「わ、私が一位でいいのかな？／／／／／」

ゼ『みんなに選ばれたんだからいいだろう！』

ア「そうよ！堂々と胸をはりなさい！」

瑠「え、えっへん！／／／／／」

フィ「まあ、瑠璃ちゃんできったわ。…これで、本当にクリスが一位で私が0だったら…死んでたわ。」

ア「ルリルリ万歳ね！」

マ「さて、一位になった瑠璃には何してもらおうかな？」

瑠「何かするの？」

ア「そうね」「ニヤニヤ

瑠「恥ずかしいのはイヤだよ？／＼／＼／」

フィ「うゝん。…あつ！そうだ！作者！」

マ「ん？」

フィ「えつとね」「じよじよ

マ「うん、うん。なるほど！…よしっ！それに決めた！」

瑠「????」

マ「瑠璃視点の番外編でi fストーリーみたいな感じにするって」とで決定！！！！」

瑠「ふえええ！？／＼／」

ア「あら！いいじゃない！」

マ「ま、全然内容が決まっていからいつになることやら…」

フィ「別にやれば来年でもいいんじゃない？」

番外編：第一回人気キャラクターアンケート結果発表！！…え？番外が多い？それが二

マ「ふう疲れた…。」

フィ「では、感謝コーナー！」

ア「ユタ様、Arisshia様、メガネ様、畏無様、バラランシヤ様、White Seal様、流水様、夜神様、天宮翔様、月光閃火様、ばつど様、感想&投票してくれた方、ありがとうございます！
た！！」

ゼ「つづいて、お土産コーナーだ。

メガネ様からは、
フィオネにフェイトのバリアジャケットの服

畏無様からは、

瑠璃に双葉ちゃんとお揃いの髪止め（クローバー）
マーボーに『護式・斬冠刀』

バラランシヤ様からは、

春人特製スペシャルフルーツタルト（低カロリー）

春人特製フルーツミックスジュース（果汁100%）

デバイス擬人化プログラム（1度のみ使用可能）×2

春人の着ていたTシャツ（瑠璃ちゃん）

某禁書目録シスターのシスター服（瑠璃ちゃん）

ルシフェリオン、バルフィニカス、エルシニアクロイツのコピー

（マーボー様）

オーズドライバー+コアメダル10種（マーボー様）

夜神様からは、

? 守護の腕輪（作者とペア）

第一段階で悪質なロリコンに対し警告音を発する。

第二段階で瑠璃ちゃんのみを結界で守護・一時隔離する。

第三段階で作者を強化し、迎撃に向かわせる（戦闘力が増加する）

これは余程の相手が来ない限り壊れない（春人クラスは一回で壊れる。）

天宮翔様からは、

七天煌魔・第二章『煌麟』（マーボーに）を頂いた。』

ク『たくさんのお土産ありがとうね!』

マ『さっそくだけど、このバイス擬人化プログラムをクリスとゼロに...』

カチッ!

ク『あら? 本当に人型になったわね!』

ゼ『たしかに。』

マ『これは【あの】春人がお前らにもタルトを食わせるためにくれた物なんだ。』

フィ『...言っちゃ悪いけど、怖いわね（汗）』

ア『そうかしら?』

ク「そうね。毒でも入ってるんじゃない？」

ゼ「スキャン完了！毒なんてないぞ。」

マ「ま、いいだろう。あ、そうそうあとフィオネはこれ着る。」

フィ「こ、これを？」

マ「あとで劉にもみせてといてやるから！」

フィ「わ、わかったわ。」

少々お待ちを。。。。

フィ「どう？／＼／＼／」

マ「うほ〜！！！！フェイトのバリアジャケット似合っな！！」
カシヤカシヤ

瑠「そうだね〜。きれい！」

ク「そうね〜…もぐもぐ」

ゼ「だ〜…もぐもぐ」

マ「ちょ！もう食ってる！？」

フィ「私も〜あむっ！」

瑠「おいしいね〜。しかも、低カロリーだから太らないんだよね？
／＼／」

マ「いや、どっちにしろ食いすぎは太るから。」

瑠「がーん…」

マ「にしても、このジュースもうまいな。ホント、どうしたんだよ、
春人は。」

ゼ「さ、この辺でゲストも呼ぶぞ。」

ク「夜神様の作品『魔法少女リリカルなのは〜転生者はHAPPY
Y ENDを至高とする〜』から、カナタ・アマギとハイペリオン

(愛称：リオン)が来てくれたわ。」

ヒュー

スタッ

カ「どうも。作者が忙しすぎて暇だったから、来たよ。」

リ「私もマスターについてきました！」

マ「いらっしやい。」

カ「にしても…どうなってんの？」

現状

瑠璃…タルトに夢中

フィオネ…フェイトのB」

クリス&ゼロ…擬人化

ア「あ、あはは〜」

マ「いろいろあった…。」

瑠「あ、カナタ君いらっしやい。」

カ「瑠璃お姉ちゃん、おじやまします。」

マ「へ？」

瑠「お姉ちゃん？」

リ『マスターはそう呼ぶように言われているのです。』

マ「なるほど…（汗）」

瑠「お姉ちゃんかあ…うん。私、お姉ちゃん！／／／／」

カ「いいかな？」

瑠「うん。私お姉ちゃんだから、お世話してあげる。」

カ「え？お世話！？」

瑠「そうだよ。はい、このタルト食べる？春お兄ちゃんが作ってくれたんだよ。」

カ「う、うん。たべ」
「そっか。お姉ちゃんだから…はい、あくん
／／「…ええ?!」

瑠「ほら、あくん／／／」

カ「あくん。／／／／うん、おいしいよ。」

リ『マスター』 カシャカシャ（写真撮影中）

瑠「おいしいの？よかったね／＼／＼」なでなで（カナタの頭を撫でる）

カ「う、うづうん！よかったよ／＼／＼／＼」（なんだろう？安心する／＼／

マ「瑠璃のヤツどうしたんだ？」

フィ「普段は甘える立場だから、頼られるのがうれしいとか？」

ア「珍しいから録画しとくわ！」

瑠「はい。ジュースもあるよ」（ここにこ）

カ「う、うん。いただきます／＼／＼／

瑠「おいしい？」（ここにこ）

カ「うん。おいしいよ／＼／

瑠「よかったね〜！（なでなで）

カ「／＼／＼／＼／＼／／」

リ「赤くなっているマスター…！ありがとうございます！」

ク「あらあら、」

ゼ「瑠璃…成長したな〜っ（泣）」

マ「あゝあゝ！！！！カナタを抱っこするの忘れてたあ！！！！！！」

フィ「そんなことを…大げさねえ…。」

ク「では、次回もよろしくね！あと、さっきのお姉ちゃん瑠璃の動画は配布するから。」

ゼ「さらばだ！」

ア・瑠「バイバイ！」

マ「どうだ？フィオネのフェイトのB」姿は！」

劉「う、うん。可愛い以外に言葉が………」ポタポタ（鼻血が垂れ
ている）

第26話・無罪と引き換えに。これで少しは安心かな。(前書き)

では、短いですが26話です！

第26話：無罪と引き換えに。これで少しは安心かな。

オレはユニゾンしたまんまの状態でなのはとユーノと気絶中のクロノを連れてアースラに転移して来た。

「へ〜。なんかSFの世界だな〜。」

いや、ホントSFのまんまの感じだよ。

「劉ちゃん、その人治してあげないと死んじゃうの!」

なのはが血だらけのクロノを見て言った。

「ああ、回復させるよ!サイフォジオ!」

オレは大きい剣を出現させ、クロノの腹にさした。

「ちよつ!劉!?!」

「劉ちゃん、その人が死んじゃうの!?!」

オレがクロノをさしたのを見て、なのはとユーノは焦る。

「大丈夫だから。見てて。」

みるみるクロノの傷がなくなっていく。

本来のサイフォジオはここまでの効果はないと思うけど、これはオレ仕様だからだ。

「すごいっ！」

なのはが目を大きくして驚いていた。

「うっ……僕は……？」

すると、クロノが目を覚まし始める。

「おっ！クロノっ！起きろっ？」

ペチペチ

「……ん……き、君は……？」

「ま、まあまあ、落ち着いて。早く、リンディさんの所に案内してよ。」

「君は母さ……艦長のことを知っているのか……？……そういえば、ここはアースラ……？」

『やっと気づいたのね。』

クロノの言葉にクリスが呆れる。

「さあ、早く案内してくれない？」

「わ、わかった。」

クロノはしぶしぶリンディがいる部屋に案内してくれた。

「そうだ。その前にB」を解除してくれ。」

部屋の前でクロノが思い出したかのようにオレ達に言う。

「わかったの。」

「了解。フィオネ？」

《OK!》

「ユニゾン・アウト!」「」

オレはフィオネとのユニゾンを解除する。

「君もだ。」

「うん。わかった。」

ユーノも人型になる。

(本当はここでユーノが人間だとなのはにバレるんだよな。)

案内された部屋に入るとリンディが部屋の真ん中で正座してお茶を啜ってた。

(…部屋の内装おかしいだろ!? 日本を勘違いしている外人か!?)

リンディはクロノを見て驚くが、自己紹介をはじめ。

「さきほど自己紹介しましたが、時空管理局提督のリンディ・ハラウンです。クロノのケガは……」

「ボクが治しました。」

「あのケガを治したのですか!？」

「え、ええ。まあ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

治したと聞いたリンディは驚くが、すぐに頭を下げてる。

「それで、あなた方はの名前は……」

「ボクの名前は天道劉。こいつらは、フィオネにクリス、ゼロです。」

「私の名前は高町なのです。」

「僕はユーノスクライアです。」

「では、なぜあなた方はロストロギアを？」

それぞれ自己紹介をすると、さっそくロストロギアについて聞いてくる。

「それは…僕のせいなんです。」

すると、ユーノが説明しだす。

「立派だわ。」

「だが、同時に無謀でもある。」

「…すみません。」

ユーノが謝る。

「わかりました。今回のロストロギアの件、私たちが全権持ちます。」

「「えっ!?!」」

なのはとユーノがリンディの言葉を聞いて驚く。

(このリンディのセリフが気に食わないんだよな。このなのは達を騙すようなやり方が。)

オレはここでリンディに騙すのは止めるように言おうとする…が、

「…と言いたい所ですが、どうか貴方達三人の力を貸してもらえませんか？」

リンディの口から出た言葉を聞いて固まるオレ。

「はい！私こそ手伝わせてください！」

「僕も！この件は元々僕の責任でもありますから！」

二人はすぐに協力すると返事する。

（まさか、リンディがオレ達に素直に協力を頼んでくるとは……。これもオレがこの世界に来た影響なのか？）

「それで…劉さんは？」

（そうだ！悪い影響ならまだしも、こういった良い影響なら別に良いじゃないか。）

「はっはい！ですが、条件があります。」

「条件？なにかしら？」

オレは協力する代わりに前から考えていた条件を出す。

「今回の犯人の無罪を。」

「なっ！？そんな事出来るわけないだろう!？」

「どうです？リンディさん。」

オレはクロノを無視してリンディに聞く。

「それは難しいわね。ロストログアを集め、小規模のものでも次元震を起こしたのだから……」

「そうですか……。では、このような場合はどうです？」

リンディとクロノにオレが独自で集めといたプレシアの過去の事件の真実が書かれている資料を見せた。

「プレシアテストロッサ……って事は今回の犯人とは……」

「それは今はおいといて……その資料を見てください。」

オレは二人に資料に目を通すように促す。

「こ、これはっ……」

「そんな…管理局が……?」

「管理局なんてそんな物だよ。いいか？プレシアはある意味で管理局が起こした事件の被害者だ。だから今回の件は……」

「わかりました。今回の件については見逃しましょう。」

リンディが無罪に言った所で、

「じゃあ、ボクも協力するよ！」

オレも協力をすると返事をした。

「すまないな。本来ならこういう件は民間人を関わらせる訳にはい
かないんだが、恥ずかしながら局も人員不足でね。今は少しでも魔
力が高い魔導師が必要なんだ。」

「そうだろうね。EーS級の魔導師がクロノ一人っというので大体
想像はつくよ。でもそうも言ってもらえない。……絶対にあの親子を
救ってみせる！」

「私も！フェイトちゃん達を助けるの！」

「ああ、そうだな。」

オレはなのはの頭を軽く撫でる。

「オレ達は一度地球に戻る。」

「わかりました。では、集合時間・場所などは……」

そこからリンディと少し話してオレ達は地球に転移した。

「そつえば、劉ちゃん！」

「ん〜。どうした？」

「詠唱以外の時も【オレ】って言ったの」

「え？」

第26話：無罪と引き換えに。これで少しは安心かな。（後書き）

マ「はい、26話です。作者のマーボーです。」

フィ「さすがに疲れたわね。フィオネです。」

瑠「ふみゆ……zzz」

ク「瑠璃は寝たわ……永久に！クリスよ。」

ゼ「何を言ってるんだ？疲れて寝ているだけだろう。…ゼロだ。」

マ「うん。疲れた……！！！！眠いよ……眠いよ……！！」

フィ「じゃ、さっきの結果発表でやめればよかったのに……（汗）」

マ「それは、本編派の人に申し訳ないじゃん！さ、さっそく感謝コーナー！」

ク「ユタ様、メガネ様、バラランシャ様、夜神様、畏無様、流水様、感想ありがとうございます！」

マ「お土産は、ユタ様からは、

超低カロリーのケーキセット

バラランシャ様からは、

春人特製バームクーヘン（ゼロカロリー）

春人特製ミルクココア

デバイス擬人化プログラム×2

デバイス擬獣化プログラム（使用限度1回）×2

春人隠し撮り写真集（瑠璃ちゃん）

『豆腐』と書かれた看板：一度貼り付けると後書き2話分は外す
ことが出来ない。

夜神様からは、

？カナタの手作り手袋（瑠璃ちゃん用）

？サンタ服セット各種（フィオネや作者も着れる）

？カナタの音声つき目覚まし時計（全員分）

瑠璃ちゃんの場合

「瑠璃お姉ちゃん、朝だよ。起きて 起きないと、ぼ、僕も一緒に
寝ちゃうよ／＼／」

マーボ さんの場合

「マーボ 兄、おはよう！今日も元気に頑張ろう」

フィオネの場合

「フィオ姉 時間だよ！起きないと悪戯しちゃうよ」

畏無様からは、

一位の瑠璃にはスカイのレプリカ（ブレスレット）

二位三位の劉とアテネにはプチチョコケーキ

フィオネに『無限のフロンティア』のヒロイン《楠舞神夜》のコス
チュームを頂いたぜ」

フィ「瑠璃ちゃん。おやつよ。」

瑠「お、おにゃつー！」

ク『かんだけど…逆に言いにくくないかしら？(汗)』

マ『ほら、今回は低カロリー系のものばっかだ！』

瑠『やったあ！いただきま〜す！…もぐもぐ』

ゼ『寝起きでよく食えるな…(汗)』

瑠『おいしいよ〜！これで、太らないんだよ！春お兄ちゃんやコダイ君は天才だね！』

フィ『このプチチョコケーキはアテネに送りましょう！』

マ『さてと、今回もゲストが来ています！しかもダブルゲスト！』

ク『月光閃火様とその作品『WOLFANG - ウルフアング - 』
狼男は不良青年』の主人公の輝刃と畏無様の作品『魔法少女リリカルなのは〜偽りノ騎士〜』の主人公の響介よ！』

月『よお…久しぶりだな。』

輝『久しぶり。』

響『俺も久しぶりだな。』

瑠『月光閃火さんと輝刃お兄ちゃんと響君、久しぶりだね！』(ニコッ)

月・輝・響『……………』

マ「くっ！俺が全面的に悪いのは分かっているけど…このままじゃフルボッコだな（汗）」

ゼ「素直に罰を受けるんだな。」

マ「だが断る！こんな事で俺は負けるかああああ…！！！」（注：
悪いのは全てこいつです

輝「ふんっ！」

マ「おそいつ！」

響「こっちは二人だ！レイスピア！」

ヒュンヒュン！！

マ「光の矢…か。マ―ボー武器庫展開！」

輝・響「なに！？」

マ「こい！護式・斬冠刀！！」

カキカキカキイイン！！

響「くっ！全部落とされた！？」

マ「護式・斬冠刀……。こいつは……わかるよな？」

響「俺のとこの作者が渡した……」

マ「そうだよ！いざっ！」

響「くっそおおおお！……！」

輝「おっと！後ろがからあきだ……！」

マ「それも……よんでいる！白銀……！」

ヒュン！

輝「なっ！？パンチがとどかない！？」

マ「おまえと俺の空間を切断させてもらった。そして……」

カキイイイイン

響「止められた！？」

マ「残るはおまえだけだな」(ニヤリ)

響「ふっ！だがこの零距离からの！！月砲(Moonbuster)！！！！」

マ「なっ！？」

ドゴオオオオオオン！！！！

響「くっぞ。服もボロボロだ。」

輝「白銀の能力もきえたな。」

マ「……………」

月「よくやった。」

溜「????」

輝「いや何でもないよ。」なでなで

溜「ふみゆうっ／／／／」

響「…(か、可愛すぎる／／／／」

マ「油断したな？」

ドカツ！

バキッ！！

輝「がつ！？なん…だと?!」

響「ごふっ！ばかな!？」

マ「俺には瞬間再生能力付きの指輪がある上に、毎回攻撃を受けてきたんだ。月砲（MoonBuster）一発じゃ、死なないよ。」

響「くっそ……。」

輝「ありえね……。」

マ「今のお前たちを見てみると悲しいよ…。ああ、悲しいよ…。」


~~~~~

マ「……………くっは…」(吐血)

響「夢みんなよ。」

輝「たしかに、月砲(MoonBuster)一発じゃ倒れなかったが、月砲(MoonBuster)を10000000発、ラストにMoonlightBreaker1発は耐えられなかったな。」

響「はあはあ。う、撃つほうもきついつてのに……………おまえ…本当に…人間か？」

マ「まさか、白銀をだそうとしたところでうってくるとは…な。」  
ガクッ

輝「響介、おまえだけに負担をかけてすまないな(汗)」

響「き、気にすんな…」

劉「ん？どつしたんだ？」

月「おお！劉になっている！？」

響「ふう。少し休んだし、俺はそろそろ帰るな。」

フィ「あゝ、これお土産ね！」

響「ん。瑠璃ちゃんの手作りセーターか。／＼ありがとな。じゃあ！」

月「劉、おまえは可愛いな。」なでなで

劉「なっ！？／＼／」

輝「ほら閃火。帰るぞ！」

フィ「じゃ、二人にも。瑠璃ちゃんの手作りマフラーに手袋よ！」



輝「おお！ありがとな／＼／＼」（手作り／＼／＼）

月「も、もう少しぐらい…」「帰るぞ」「…ああ。」

劉「また来てくださいね！」（ニコッ）

月「絶対に来るぞ！／＼／＼／」

輝「そうだな！／＼／＼／」

ぜ『うん。これが作者らしいな。』

ク『そうよね〜』

フィ「では、次回もよろしくお願いします…！」

劉「じゃ〜な〜」

マ「……あと……少し……グスッ（泣）」

第27話…ついにデレた！？　じよ、女装している私も…好きですか？／／／／

27話です。

なんか話が進むの遅いですよね…すいません。

では、はじまりまーす…！

第27話：ついにデレた!?　じよ、女装している私も…好きですか? / / / /

自分の事を【オレ】と言っていた事を桃子さんに報告され、罰として今日1日、女装をして自分の事は【私】と言うように命じられた。今はスカートをかかれた状態で朝食を摂っている。このスカートは驚いた事に美由希さんのお下がりやなのではなく、わざわざオレのために買っておいた物だと言う。

(なんでオレがこんな目に……)(泣)

オレは心の中で一人泣く。

《ねえ。劉ちゃん。》

《ん?なに?》

フィオネから念話がかかる。

《あのさ士郎さん達にアースラに行くこと言わなくていいの?》

(あ……忘れてたよ……)(汗)

そうだった。その事をすっかり忘れていた…。

フィオネはそれだけ言うと小さくなって、オレの太ももの上で眠ってしまった。

《なのは？》

「ふえ！？」

ガチャガチャッ！！

なのははいきなりの念話で驚いたのか、持っていたマグカップを落とした。

「だ、大丈夫？なのは？」

美由希さんがなのはに聞く。

「うん。大丈夫なの／＼／＼」

なのはは恥ずかしかったのか顔を赤くして答える。

《もう！びっくりしたの！》

《いきなりだったね。ごめん、ごめん。》

なのはが念話で怒り、オレはなのはに謝る。

《それでき、アースラに行くから、しばらく家を空けることを言わ

ないと。》

《そ、そうだったの！それじゃ、私からお話するの！》

うん。なんだろう……なのはが【お話】って単語を言つと……………〇

H A N A S H Iに聞こえるから不思議だ……………（汗

「お父さん…あのね…」

つと、どつちやらののが説明しだしたようだ。

なのは説明中。……………

なのはが四人に説明し終えたと…

ガタツ！

「なのはと劉が家を空ける！？そんなのはダメだ！！！」

恭也さんがイスから立ち上がり、家を空ける事に反対してくる。

「恭也s「今日はお兄ちゃんだ！！」「…お兄ちゃん、ユーノもいるよっ。」

「ユーノは男だから別に行っても平気だろう。」

恭也さんが訳の分からない事を言ってくる。

「それだったら、ボク「劉ちゃん、私でしょ？」(にっこり)「…私も男だよ?」

桃子さんに言われて言い直すが…

「ふふつ。劉ちゃん説得力ないよ。」

「うう〜」

美由希さんの言うとおり、説得力がない……。

「その管理局とやらには男はいるのか?」

「そりゃあいるよ。」

「じゃあダメだ!?!」

恭也さんは管理局に男がいると、行ってはダメだと言う。

「なんでだよ!?!」

「なのはと劉が襲われるからだ!?!」

そんなことだろうと思ったよ…。

「私は男だ!そうでしょ?フィオネ?」



眠っているフィオネを起こして聞く。

「ん〜……劉ちゃんは女の子だよ……zzz」

（このユニゾンデバイスは……）

フィオネはそれだけ言うと、また眠ってしまった。

「ほら見る！」

恭也さんが満足げな顔をしていた。

「あなた、どうします？」

士郎さんが目を閉じて瞑って考え始めた。

「士郎さん？」

オレは目を閉じたままの士郎さんと呼ぶ、

「うん。なのはや劉が決めた事だ。行ってもいいと思う。」

「なっ!?!」

士郎さんの言葉に恭也さんが驚く。

「ただし、」

「「ただし?」「」

なのはと一緒に聞き返す。

「無事に…帰って来てくれ!」

「お父さん…」

「士郎さん…わかりました!絶対に無事に帰ってきますね!」

士郎さんに了承を得る事が出来た。

「それでいつからなんだい?」

「えっと…なるべく早くだつて。」

なのはが答える。

「じゃあ、今から行ってきなさい。」

「え！？今から！？」

「ああ。だって、早いほうが良いんだろっ？」

「それは…まあ。」

「ならそうした方がいい。」

「わかりました。行こうか、なのは。」

「うん。すぐ支度するの。！」

~~~~~

「じゃ、行ってきますね。」

「お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、行ってくるの。！」

「いってきます。」

オレ、なのは、ユーノの順番で挨拶をする。

「さっきも言ったが、無事に帰って来てくれ。」

「帰ってきたらいっぱいお話聞かせてね!」

「な^のばあ^あ、りゅ^うう^う、ぶ^ぶぶ^じに^いだ^ああ^ああ^あ」
号泣

士郎さん、美由希さん、恭也さんの順番で言う。

「桃子さん。」

オレは顔を俯かせている桃子さんに声をかける。すると、桃子さんが急にオレとなのはに抱きついてきた。

「お、お母さん!?!」

なのはもいきなりの事で驚いている。

「二人とも…ケガだけはしないで……絶対に無茶しちゃダメよ…」

桃子さんはそれだけ言う^と涙を流しながら、さらに強く抱きしめてくる。

「もちろんだよ。なのはも私も…それにユーノだって。無茶はしないから。」

きつと、桃子さんは昔、士郎さんが無茶をしてケガをして入院した事を思い出したんだろう。士郎さんを見ると、目を逸らしながら頭

を掻いていた。

「だから、安心してよ。…えっと……か、母さん／＼／／」

「『え！？！？』」

「ふふふつ。劉ちゃんつたら。」

オレ以外の高町家＋ユーノが驚き、フィオネはオレの頭の上に乗る、微笑む。

「さ、さあ。もう行くのか！／＼／／」

オレは恥ずかしくなり、なのはの手を引いて高町家を出た。

「。おっちはビックリしたの。」

~~~~~

後ろから、慌ててユーノが追ってきた。

「おっ、おっ……」

なのははまだ驚いていた。

「ま、まあね／＼／＼／＼」

『あらあら照れちゃってえ』

「もう！劉ちゃんったら可愛いわぁー！」

「うう／＼／＼／＼」

『そう、からかってやるな。』

ゼロがクリスとフィオネに注意してオレの味方をしてくれる。

（そうだ。フェイトに会うところ。アースラに行ったら、しばらく会えないかもしれないし。）

「なのは、ユーノ。私は少し寄るところがあるから。」

「うん、わかったの。行こう、ユーノ君。」

「うん！なのは！」

なのはとユーノは合流地点である公園に向かった。

~~~~~

なのは達と別れ、

「ユーノのヤツ、すごい嬉しそうだったなあ。あの二人の仲、少しは進展するかな？」

オレはアウトフレームで横を歩いているフィオネに聞いた。

「いや……それはないわよ…（汗）」

「え？なんで!？」

「はあ〜。劉ちゃんどんか〜ん。」

「どこがだよ!？」

「クリス〜、ゼロ〜」

『どうしようもないわね。まあ、そこが劉ちゃんのイイところなんじゃない?』

『…だな。』

このデバイスたちは何を言っているんだ（汗）

「ほら、フェイトちゃんのマンションに着いたわよ。」

フィオネ達と話しているといつのまにか、フェイトのマンションに着いてた。

第27話：ついにデレた！？　じよ、女装している私も…好きですか？／／／／

マ「マーボーです！」

瑠「瑠璃です。」

フィ「劉ちゃんがデレたわね。」

ク「可愛かったわあ！」

ゼ「そうだな。」

マ「では、感謝コーナー！ユタ様、メガネ様、バラランシャ様、流水様、夜神様、A r i s h i a様、ばつど様、月光閃火様、紅　幽鹿様、感想ありがとうございました！」

フィ「お土産コーナー！」

ユタ様にはノンカロリーのお菓子セット

メガネ様にはゼロには性格や言動がコダイになるチップ

バラランシャ様には　擬似春人化の指輪

詳細：この指輪を填めると、春人と同じ能力を得ることが出来る。
ただし、使用時間は後書き1話分で、充電には後書き2話分必要。

幻想殺しの腕輪

詳細：某不幸少年の右手と同じ能力を得ることが出来る。

ただし、この腕輪を填めている間は他の物を使うことが出来ず、填めたが最後、後書きが3話経つまで外すことはできない

夜神様にはカナタのメッセージ（ナースver）

三分間なりきりセット（時間内は好きなキャラの能力が使える。）

紅　幽鹿様にはアスクレピオスの杖「一匹の蛇が巻き付いた杖」

マグダラの聖骸布を頂きました！」

ク『さつそくゲストの紹介よ！』

瑠『え〜つと、ユタ様の作品『異世界を渡る』から優おにーちゃん
とセイお姉ちゃん、イカロスお姉ちゃんにニンフお姉ちゃんが来て
くれました。』

ドカツ！

マ『ぶべらっ!?!?』

優『お前は前回、瑠璃になにをした!?!?』

セ『泣かせましたよね!?!?』

ニ『ふふふっ!?!?どう改造しようかなあ』

イ『……………』ゴゴゴゴゴゴゴッ

フィ『無言怖っ!?!?』

ク『無言が一番怖いのよね〜』

ゼ『無言の圧力だな。』
『フレッシャー』

瑠『こ、こわいよ〜』ガクガク

優「おっと！瑠璃が怖がったら意味がないな。」

二「瑠璃ちゃん久しぶり〜！」（瑠璃に抱きつく）

瑠「ふえ？え？きゃっ！！／／／／」

セ「わ、私も撫でて来てイイですか？」ウズウズ

イ「わ、私も…」

優「ああ、ここは俺にまかせとけ！」

セ「で、でわ…」（そーっと手を伸ばす

なでなで

瑠「…んっ／／／ふみゆ〜／／／／」

セ「可愛いですね／／／」

イ「……………」

なでなで

瑠「あう／／／…はう／／／」

イ「……可愛い／＼／＼」（ボソッ

ゼ『瑠璃には絶対に何かあるな。』

フィ「みんな頭を撫でていくもんね。」

ク『あつちも始まったみたいよ?』

優「ほらほら！ギャラクシー・ブレイカー！！！」

マ「そんな集束魔法をスフィアみたいにバンバン使うな〜！！！！」

優「そう言いながら、避けられているじゃないか。」

マ「いつも喰らってたんだ！軌道ぐらいよめて当然だ！マーボー武器
庫展開！！白銀のトランク！からのっ白銀の剣！！！」

カキカキカキカキイイイイイイイ！！！！！

マ「へっ！これくら」おらよっ！！」「…がつふう！？」

マ「蹴りが思いつきり入ったぞ……。くっそおおお！！三分間
なりきりセット！天道 劉set！！！」

優「！？」

マ「トレースオン投影開始！！白式第二形態・せつら雪羅！イゲニツジョン・ブースト瞬間加速！！！」

優「そう簡単に近づけさせねえよ！！！！氷と雷のアイスサンダートルネード竜巻！！！」

マ「え！？ちょ！それhがああああああつはああああああ！
！！！！！！！！」

優「ふんっ！獄炎一閃！！！」

マ「せつら雪羅！！！！」

ガキイイイイイイイ！！！！！！

優「いい加減にやられるお！！！！ギャラクシー・ブレイカー×1
0000」

イ「はい…／／／」

二「はあ…満足よ／／／／／」

瑠「…はふう／／／／／／／」

フィ「ああ、これお土産よ。瑠璃ちゃん特製のクリスマスケーキとセイとイカロスにはこの前渡せなかった瑠璃ちゃんが編んだマフラーよ…」

ク『明日はイヴだしね！』

二「わあ！ありがとうございます！」

セ「いただきますね。」

イ「ありがとうございます。」

優「じゃあな！」

フィ「ふう。では、先ほどのクリスマスケーキはほしい人にもプレゼントです。」

ゼ「では、またな!」

瑠「よ、よろしくです〜／＼／＼／＼」

ク「じゃ〜ね〜!」

マ「……………瞬間再生能力付きの指輪のおかげで、回復したよ。あっ!それでは次回もよろしくお願ひします〜!〜!〜!」

番外編：クリスマス編！…今回は番外編やっても別にいいよね？（前書き）

今回は劉と瑠璃が『なのはの世界で』平和に暮らす話です！

ではどうぶつ〜！…！

番外編：クリスマス編！…今回は番外編やっても別にいいよね？

みなさん、本編でははじめまして。瑠璃です。今回は私メインのお話という事らしいです。あう…恥ずかしい／＼／＼／＼この話は人気投票で一位になったから作者が作っただけらしいです／＼／＼

~~~~~

「瑠璃どうした？」

「ふえ！？劉お兄ちゃん！？」

いきなり私を呼んだこの人は、私のお兄ちゃんの劉お兄ちゃんです。私の家族は高町家のみなさんと劉お兄ちゃんとフィオネとクリスマスとゼロの大家族です。

「ちょっとボーツとしちゃって…」

「そうか。少し休むか？」

「ううん。大丈夫だよ」（にこっ

「そ、そうか。／＼／＼」

今日はクリスマススイヴなので高町家でフェイトちゃん、アルフさん、アリサちゃん、月村姉妹、ユーノ君、クロノ君、リンディさん、エイミィさん達とイヴパーティーを開きます。  
涼君と香奈ちゃんはお出かけして来れないらしい。

「にしても、買い物多いよなあ。」

「そりゃそうでしょ」

『なにせ皆が来るしな。』

『ま、私たちは楽だからいいけどね』

劉お兄ちゃんがフィオネとクリス、ゼロと話しながら歩いていく。

（なんだか最近、劉お兄ちゃんの周りにはたくさん女の子の友達が増えたような……）

フィオネやなのはちゃんは最初からだから別に気にしないけど、フェイトちゃんやアリサちゃん、すずかちゃん、香奈ちゃんと急に増えた事に多少不安を感じる私。

（劉お兄ちゃん、昔はいっぱい私と一緒に居てくれたのに。最近ほかの女の子の友達と遊びに行っちゃう事が多いし……むう、思い出したらなんだか【また】モヤモヤしてきた。）

このモヤモヤの正体は知っている。劉お兄ちゃんが女の子と仲良く

している時やしていた時の事を思い出すと必ずなる現象。

嫉妬だ。

私は劉お兄ちゃんの事が好きだ。この気持ちに気がついたのは…いつものことだろう？よく覚えてない。気がついたら、好きになっただ。いつも優しくしてくれて、一緒に遊んでくれる私のお兄ちゃんでも、劉お兄ちゃんはお兄ちゃんだから、実の妹である私とは付き合えない。その事を知っていた私はこの気持ちを打ち明けられないまま今日まで来た。

「瑠璃く？家に着いたぞ？」

「ふえ！？も、もう！？」

「瑠璃ちゃん、今日はどうしたの？」

『瑠璃にこの荷物は重すぎたか…』

「たしかにそうかもな。ごめんな瑠璃。」

なでなで（瑠璃の頭を撫でる）

「ほえ！？…はうう／／／／／／／」

フィオネとゼロが心配してくれて、劉お兄ちゃんは私に謝りながら頭を撫でてくれた。そして、私の手から買い物袋を持っていく。

『重いって………1?のペットボトル一本だけじゃない。』





「ただいま。」

「劉……！！！瑠璃……！！！」

「よつと！」

「はみゃあ！？」

家に入った瞬間に恭也お兄ちゃんが劉お兄ちゃんと私に抱きついてきた。劉お兄ちゃんはすぐに反応して避けたけど、私は反応できずに避けられなかった。

「あ……！帰りが遅いから心配したんだぞ……！！」すりすり（頬擦り

「あう／＼／＼恭也お兄ちゃんくすぐったいよ……／＼／＼」

『遅いって……往復、約15分のスーパーを買い物して30分で帰ってきたのに！？』

「あたりまえだ……！劉と瑠璃が誘拐にでも遭ったんじゃないかと心配していたんだぞ……！」

クリスが恭也お兄ちゃんに突っ込むけど、恭也お兄ちゃんはそれを平然と受け止めてみせる。

「誘拐って……私たちがいるんだから……。それに、劉ちゃん強いじゃない。」

「馬鹿者！劉だつてまだ子供だぞ！？それに瑠璃はこんなにも可愛い！もちろん、劉だつて可愛い！！いくら、フィオネ達が付いていようと、まわりの変質者は誘拐しようとするのはあたりまえだろ！？」

「そ、そうね……。」

恭也お兄ちゃんのすごい気迫で頷いてしまふフィオネ。

「ああ、瑠璃。こんなにも冷えているじゃないか！一緒にお風呂に入つて暖まろう！！！」

恭也お兄ちゃんが私の腰に手を回しお風呂に行こうとする。

「何言つてんの！？劉ちゃん、瑠璃ちゃん！ここは私とクリスとゼ口が止めるから二人でお風呂に入つてきなさい！！！」

「え！？ボクと！？」

「私が…一緒に！？」

「そうよ！『兄妹』なんだから平気でしょ！？」

ずきん

フィオネが言った言葉に少し心が痛くなつた私。

「じゃあ！俺だつて兄妹だあ！！！！！」

恭也お兄ちゃんはその言つと私に飛び掛ってこよつとしました……  
けど、

『させないわ！プロテクション！』

ドカツッ！！

「あがつ！？」

『さ、今の内に二人で入って来い。』

クリスがバリアを張って、恭也お兄ちゃんはそれに激突して倒れちゃいました。

「じゃ、じゃあ行こうか？瑠璃／／／／」

「ふえ！？いいの？／／／／」

「ま、まあな。早く入らないと風邪引きそうだし／／／／」

「うん。早く入ろう！お兄ちゃん！！／／／／」

私は劉お兄ちゃんから一緒にお風呂に入ろうと言ってくれた事が嬉しくて、劉お兄ちゃんの腕に抱きつきました。

「あつ、歩きづらいだろ！？／／／／」

「えへへ〜大丈夫だよ〜／／／／」

私も少し恥ずかしかったけど、一緒に入れる嬉しさで、すぐに恥ずかしさは忘れちゃいました。

~~~~~

ちやぽん

「……………
／／／／／
」

「……………
／／／／／
」

今私たちは二人で浴槽に浸かっている。
背中同士をくっつけて、お互いの顔は見えないけど、たぶん二人とも顔は赤くなっていると思う。

「……あ、あのさ、狭く…ないか？／／／／」

「…だ、だいしょうびゅ…大丈夫だよ／／／／」

（~~~~かんじやったよ／／／／／）

私はさらに顔が真っ赤になっていくのが自分でもわかった。

（でも…なんだか久しぶりだな。劉お兄ちゃんが入るの／／／／）

私は昔、一緒に入っていた時の事を思い出す。しばらく思い出に浸っている…

「そういえば、瑠璃とお風呂に入るのも久しぶりだな／／／／」

劉お兄ちゃんも思い出していたのか、いきなりそう言ってきた。

「そ、そだね。／／／／」

「…って、お互いもう一緒に入る歳でもないしな。あはは…／／／／／」

劉お兄ちゃんは少し笑うと、

「さ、さて、そろそろ皆も来る頃だし上がるのか？／＼／＼」

「ふえ？！も。もう上がったちゃうの？／＼／」

「ああ、瑠璃はまだ寒かったら入っていていいからな！／＼／＼」

劉お兄ちゃんはそういつと、お風呂場から出て行きました。

「もう少し…一緒に入って居たかったなあ／＼／」（ボソッ

浴槽に一人残された私の言葉はお風呂場に少し響いて消えました。

~~~~~

『『メリ〜クリスマス〜ス!!!!!!』』

みんなが来たのは私がお風呂から上がってすぐの事でした。

「ま、昨日のイヴでもこのクリパやったんだけどね。」

「一応クリスマスなんだからいいんじゃないか？」

アリサちゃん言葉に、劉お兄ちゃんが突っ込んでいました。

「瑠璃ちゃん、プレゼントは貰った？」

「うん、貰ったよ。すずかちゃんは？」

「私も！今日の朝起きたらね、ベッドの横にかけて置いたくつ下の  
中に入っていたんだ〜！」

すずかちゃんが嬉しそうに話す。

「へえ！私も今日の朝、くつ下に入っていたよ〜！」

私とすずかちゃんが話していると…、

「瑠璃、メリークリスマス！」

「メリークリスマス!!!」

クロノ君とユーノ君がやってきた。

「きよ、今日は瑠璃ちゃんにプレゼントがあるんだ！はいっ！これ！！！！！！」

ユーノ君が緊張しながら私にプレゼントを渡してきた。

「ぼ、僕も！受け取って…くれるかい？！！！！」

クロノ君も少し緊張しているのか、顔が赤くなっている状態で渡してきた。

「あらあら。」

「よかったわね？瑠璃。」

「瑠璃はモテモテだね〜」ニヤニヤ

リンディさん、桃子お母さん、美由希お姉ちゃんの順番に言うてる。

「あ、ありがとう。…でも、いいの？」

「うん！！！！」

「瑠璃に受け取ってほしいから！！！！」





「「そ、それは、後で読んでほしいんだけど……!!」」

手紙を見つけた途端、さつきまで言い合いをしていた二人は何やら焦り始めていて、息ぴったりに言うてくる。

「はっはあん?」「ニヤニヤ

「これは?」「ニヤニヤ

「ラブレターですな?」「ニヤニヤ

「「あっ!!!!」」

「はう////ら、ラブレター!?!」

フィオネ、エイミィさん、美由希お姉ちゃんの順番にそう言つと、二人と私は顔が赤くなつた。

「はあ。アンタ達も懲りないわね。これで何回目よ。」

「しょうがないの!瑠璃ちゃんは学校でもモテモテなの!」

「そつだよね。瑠璃ちゃん可愛いもん」

「わ、私も瑠璃は可愛いと思つ。」

アリスちゃん、なのはちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃんが言う。

「へえ。瑠璃はそんなにモテモテなのかい？」

「そりゃあな。なにせ聖祥大附属小五大女神って言われているくらいだし……」

「そりゃすごいねえ！！」

劉お兄ちゃんとアルフさんが話しているけど、

「あもう、劉お兄ちゃん。」

「どうした？」

「聖祥大附属小五大女神じゃなくて、聖祥大附属小六大女神だよ？」

「……なにそれ？」

私が教えてあげると、劉お兄ちゃんは？マークを浮かべていました。

「だから、劉ちゃんを入れて六大女神でしょ？」

フィオネが言うと……、

「……………彘？」

劉お兄ちゃんは固まってしまった。

「りゅ、劉お兄ちゃん!？」

私が劉お兄ちゃんを揺さぶるけど

「……………」

「返事がない。ただの屍のようね。」

アリサちゃんがそんな事をつぶやいた。

「さうて、だいぶ脱線したけど、読んでみようか？」

「「な、なにを!？」」

エイメイさんがそう言うとまた二人が焦り始めた。

「も・ち・ろ・ん〜!」

「ラブレターよ〜!」

リンディさんと桃子お母さんもノリノリでした。

「では、私が…コホン…え〜……………なにこれ？」

フィオネが二枚の手紙を交互に見直しました。

「どうしたの？フィオネさん。」

忍さんがフィオネに聞きます。

「いやね、二人とも同じ内容なの。」

「またかぶつたのかあ！！??？」

二人がまた言い合いを始めました。

「まあ、読んでみるわね。」

一生一緒にいてくれや

みてくれや才能も全部含めて

愛を持って僕を見てくれや

今の僕にとっちや瑠璃が全て

一生一緒にいてくれや

ひねくれや意地っ張りなんかいらない

ちゃんと僕を愛してくれや

僕を信じなさい。

.....  
「以上です。」

『 『 『 ..... 『 『 『 『



それを聞いた二人は顔を赤くして、同時に叫びだしました。

「はあ。クロノ…私は恥ずかしいわ。」

「クロノ君…これは…ないわ。」

リンディさんとエイミィさんが頭を抱えながら、ため息をついた。

「ユーノ君も…ダメだね。この内容は（汗）」

美由希お姉ちゃんもダメだしをして

「ぐっさあー!!」

二人がさらにダメージを受けていました。

「さ、瑠璃ちゃん。二人に返事をしなきゃ!」

「ほえ!?わ、わわ私が!?!?!?!」

フィオネにいきない話を振られた私は少しパニックになりました。

「そりゃそつでしょ。これは瑠璃ちゃんが貰ったんだから。」







うか？」「

泣いている二人を連れて道場に行っちゃいました。

「まったく土郎さんも土郎さんもだけど、恭也さんはシスコンなんだから。」

いつのまにか復活した劉お兄ちゃんはため息をついていました。

「よく言つわよ。アンタだって重度のシスコンじゃない。」

「ばっ！そ、そんなことはない！！！！／／／／／」

劉お兄ちゃんはアリサちゃんの言葉を否定すると、

「そんなことないの！」

「い、いつも瑠璃のことばかり……」

「瑠璃ちゃんが羨ましいよ。」

なのはちゃんとフェイトちゃん、すずかちゃんもアリサちゃんの加勢にまわりました。

「ボクが？そ、そうかなあ？」

「「「「<sup>なの</sup>そうよ……！！！！」」」」

私は少し離れた位置でみんなの事を眺めていました。

シスコンじゃないと必死で否定する劉お兄ちゃん。

その劉お兄ちゃんにシスコンを認めると言っている、なのはちゃん、  
フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん。

それを見て微笑んでいる、桃子お母さん、フィオネ、リンディさん。

三人でお話している、美由希お姉ちゃん、忍さん、エイミーさん。

一生懸命にお料理を食べているアルフさん。

道場から戻ってきた、土郎お父さん、恭也お兄ちゃんとボロボロだけど劉お兄ちゃん達を見て笑っているクロノ君、ユーノ君。

幸せだなあ……。

ああ。なんだろう……

「あっ！そういえばね、今日買い物に行った時にね……」

私は劉お兄ちゃんとは兄妹だから付き合えはしないけど……

「ペットボトル一本の荷物で重いつて言ってるの、アンタ!？」

「それはまた……。」

「じゃはは……。劉ちゃんらしいね…（汗）」

「うん。劉らしいね。」

それはとっても悲しい事だけど……

「そ、それぐらい普通だろ!？」

それでも……

「普通じゃないの!やっぱり劉ちゃんはシスコンなの!！」



この幸せな光景がずっと続いてくれればいいと、

「おい。瑠璃もこっちに来て何か言ってくれよ〜」

私は思っているのかもしれない…。

「うん！今行くね！劉お兄ちゃん！」

たとえ叶わない想いでも、ずっと好きでいていいよねっ……劉お兄ちゃん



「……おい……おい！」

「……ふみゆつ……？」

『瑠璃ちゃん起きた？』

「作者と……クリス？」

『まだ、寝ぼけているみたいだな。』

「そうね〜。ほら、そろそろ目は覚めた？」

「ゼロに……フィオネ？……あれ？……じゃ、今までの……夢？」

「夢？」

「そうだよ、作者。なんだか、とっても幸せな夢だったんだ〜／／／／えへへ／／／／／／／／」

「こりゃ、まだ目覚めてないみたいだな。これからあとがきだから

目を覚ませよ。」

プニプニ(ほっぺをプニプニ

「じゃ、じゃあ／＼／＼／＼／＼くすぐりたいよ／＼／＼／＼」

「さてと、そろそろ行くうか！」

『そっね〜!』

『だな!』

「瑠璃ちゃんも!」

「あ…うん!待ってえ!」

今日はクリスマス。

サンタさん…またいつか……あの夢の続きが見れますように！

番外編：クリスマス編！…今回は番外編やっても別にいいよね？（後書き）

マ「どうもすいませんでしたあ！！作者のマーボーです！」

フィ「文がg d g dね。フィオネです。」

ク「せっかくのイヴになんつゝ物みせてくれんのよ！クリスマスよ。」

ゼ「まったくだ。ゼロだ。」

瑠「は、恥ずかしかつた／＼／＼…瑠璃です。」

マ「まあ、切腹覚悟で書いてみた。後悔はしていない！」

ク「そこまでの覚悟ならよし！」

フィ「では感謝コーナーです！光閻雪様、メガネ様、紅様、ユタ様、  
TH・F様、バラランシャ様、夜神様、紅 幽鹿様、ブラックサレ  
ナ様、月光閃火様、感想ありがとうございます！」

瑠「お土産は、

ユタ様からは、瑠璃に優の写真（ゴスロリ（黒）（ver）、優の女  
口調版目覚まし時計で内蔵の喋りのパターンは三個。

『瑠璃ちゃん、朝だよ。起きないと』

『瑠璃ちゃん。朝だよ。寝坊はだめだよ』

『早く起きないと、私も一緒に寝ちゃうぞ』

TH・F様からは、高町家に「メイド服を着て顔を赤らめ、恥ずか  
しながらセクシーポーズをとっている劉の等身大人形」。

夜神様からは、カナタの抱き枕

表： 女の子の洋服を着てぬいぐるみを抱きしめながらコチラを見つめている図（若干、拗ねた感じ）

裏： 両手を広げ、露出度の高いドレス姿で抱っこをねだっている図（ウル目&頬が朱に染まっている）

秘薬「素直にナルノデス」（使用しても減らない）、カナタのオスメ：紅茶の茶葉セット（上質な茶葉：各種類詰め合わせ）

紅 幽鹿様からは、

無駄なしの弓『フェイルノート』、年齢詐称薬（無制限）、脇巫女服、二着（黒色と赤色・・・黒の方は幸夜、使用済み）を貰いました。ありがとうございます！」

フィ「さて、本日のゲストは……」

マ「バラランシヤ様の作品『神に何度も殺させた青年』の主人公の春人（笑）と星菜、ライラ、桜花の三人娘と畏無様の作品『魔法少女リリカルなのは』偽リノ騎士』から双葉ちゃんが来てくれました！」

双「ふ、双葉ですノノノノ」

星「はじめまして。星菜です。」

ラ「ライラだよ〜！！」

桜「我の名前は桜花だ！」

マ「は〜い！いらっし〜てめえ！なんだこの（笑）ってのはよお！



「！！」…突っ込みおっそ！！？」

ドガアアア

春「殺す！今日はお前を鍛えようと思ったが、やめた！殺してやる  
！」

フイ「ありやりや…（汗）」

マ「くっ！だったらやってやらあ！こちとらお前を倒すために、鍛えてきてんだよあ！！！」

春「ふん！何言ってやがる。ジャックナイフ銀符！！！」

マ「へっ！こんなもの余裕すぎ！」

春「！？」

マ「今度はこっちからだ！マーボ―武器庫展開！無駄なしの弓！！！」フェイルノート

春「なめるなよ！？万象一切灰燼と為せ、流刃若火！」

瑠「みんないらっしやい！」

双「あ！瑠璃ちゃん久しぶり！」

瑠「双葉ちゃん！いらっしやい！」

フイ「クリスマスケーキあるけど食べる？」

ラ「わーい！ケーキ、ケーキ！」

星「いただきますよう！」

桜「うむ。いただきますか。」

双「わ、私も食べる！」

ゼ『みんないい子達だ。』（もはや父親の目

ク『アンタってロリコン？』（それを否定した真正の変態神

マ「ふうふう。焼け死ぬかと思った…。」

春「おまえ……この技を全て避けるのかよ。」

マ「ふんっ！油断しているからだろ！白銀のトランク…！」

春「なに!？」

マ「白銀抜刀！」

白「闇より深き深淵より出でし 其は、科学の幻影<sup>かけ</sup>を裁く剣！」

ザシユウウ!!!

春「くっ！！」

マ「いけえ！白銀！！」

春「くっそ！」

キイン！！

ガキイン！！

キイイン！！！！

マ「今だ！白銀！！」

白「闇より深き深淵より出でし 其は、科学の幻影<sup>かげ</sup>を裁く剣！！」

春「しまっ……」

マ「ふっふっふう。これで動けないなあ。」

春「……………」

マ「さうて、どうしてくれようか?」「ニヤニヤ

春「なんてな!」

マ「なっ!?」

春「こんな物!力でねじ伏せる!!」

マ「ってなんだ。焦ったよ。無理無理!無理だよ!」

春「…っ!!ふんっっ!!!!!!」

バキバキッ!!!

マ「……………はい?」

春「おらあああ!……!!」

フイ「ひえ〜〜！春人すごいわね〜」（汗）

ク「これは……」

ゼ「まずいな……。」

瑠「春お兄ちゃん……カッコいいなあ／／／／」

双「うん。春人兄様……かっこいい／／／今日は来れてよかったあ／／／」

星「春人ですから。」

ラ「そうだね！」

桜「だな。」









マ「はあはあ……。三分……ジャスト……」バタッ

春「……………」

フィ「今回は春人の油断が招いた結果ね（汗）」

ゼ「ま、たまには作者が勝ってもいいだろう。」

ク「これで次からは容赦無しでくるでしょうけどね。」

双「春人兄様大丈夫かな？」

ラ「春人なら問題ないよ！」

星「そうですね。ふう。ケーキ、おいしかったです／＼／＼／

桜「うむ。そうだな。／＼／＼／

ラ「それに、春人連れて帰らないと！／＼／

瑠「じゃあお土産に、三人と双葉ちゃんにはマフラーと手袋！」

フィ「バラランシヤ様とアリシアにはクリスマスケーキを！」

瑠「あと、春お兄ちゃんにはいつでも私を呼び出せる（ただし、呼び出せる回数は一回のみ。お願いを一回なら聞かせられる事も可能）



フィ「ふう。今回はここまで。」

マ「俺、瞬間再生能力付きの指輪によって復活！」

ゼ『おまえ…進化したな。』

瑠「作者も春お兄ちゃんもかつこよか…た…よ…?…」

フィ「瑠璃ちゃんどうしたの?」

瑠「うみゆう〜、眠くなってきちゃって〜」

ゼ『今回はお疲れだからな。』

ク『そうね!早く寝させてあげましょう!』

マ「では、最後に。今回の話は批判でもいいので【とにかく】感想ください!それによって、自分の力を再認識しようと思っていますので…!」

フィ「いい考えだと思っわ!」

マ「本当に批判でもいいので絶対にこの話の感想を!~では、次回もよろしく願います!~!」

瑠「おやすみなさい……zzz」

ク『ね、寝たわね…（汗）』

ゼ『寝たな。』

フィ『メ、メリークリスマス！！！！』

第28話：念話って心の中だから【私】って言わなくてもいいよね？bV劉（前

はい！第28話です！PV 175,535アクセス ユニーク2  
0,001人突破しました。これも皆様のおかげです！ありがとうございます！  
ございます！！

そして、いつまで無印やってんだあ！！という方もいらっしやるか  
と思いますけど…もう少しお付き合いくださると嬉しいですよ。  
では短いですが、はじまります！！

第28話・念話って心の中だから【私】って言わなくてもいいよね？bV劉

フェイトのマンションに着き、各部屋に備えつけてあるインターホンを押す。

ピンポン

「新聞なら要りませ〜ん！」

インターホンを押すとフェイトの声が聞こえたが……

(ま、まあしつかりしているってことだよな……) 汗

ピンポン

もう一度押す

「フェイ「間に合っているので大丈夫です。」……………(汗)」

なんだろう。最初に会った時といい、フェイトはオレの言葉を遮る事が多いな……。

「よし、フェイトがその気ならもう一度！」



オレが再度押そうとした時、

「劉ちゃん、念話してみたら？」

「……………」

(き、気づいていたよ？念話でしょ？念話。ちよつと向きになっただけで、決して念話を忘れていたわけじゃあ……。)

「誰に言い訳しているの？」

(フィオネさん、オレの心をよまないでくれないか？)

「うん。無理…かな」

(さいですか…。)

《フェイト？》

オレはさっそくフェイトに念話を試してみる事にした。

《！？りゅ、劉！？劉なの！？》

おお。なにやら驚いている様子なフェイト。

《あのさ…さっきk《し、心配したんだよ！？その後連絡もしてくれないし…！》うん…「めんね。》

(いや、たしかにね。その後連絡しなかったオレも悪いけど。)

オレの中でのフェイトは【話を聞かない。ってか聞いていない】で決定……!

《でさ、さっきからインターホンを《そうなんだ。さっきから、しつこいの。最近新聞を取らせようとする人が多くて……。ホント、今朝ごはん中なのに……迷惑だよな。あ、でも、洗剤とかくれるんだよ……って、なんで今、新聞の人が来たの知っているの?》……あんな、それ……ボクなんだ。》

《え?劉が新聞を?》

もうダメだ……。会話するのが疲れてくるよ。……この場合会話しているのか分からないけど……(汗)

「念【話】なんだから会話でいいんじゃない?」

「うん。そうだね。だから、心はよまないでね?」

「だから、それは無理!だよ」

さいですか……って、やりとりはさっきしたね。

《フェイト、さっきからインターホンを押しているのはボクなんだ。》

《え!?!?》

《だ〜か〜ら〜!?!さっきからインターホンを押しているのはボクなんだ!?!》

《う…そ…》

ドタドタ

ドアの向こうから、こっちに近づいて来る足音が聞こえてくる。

ガチャ

「わ！ほほふおんほづにゆづだ！／＼／＼／＼」（ヒョコッ

ドアを少し開けてヒョコッと顔を出してきたフェイト。そして、口にはカロリーメイトを啜えたまま。

バタン！

「え？」

《ちょ、ちょっと待ってて！》

フェイトはオレの姿を確認すると、すぐに扉を閉めて念話で少し待つよう言っ、またドタドタと慌しく戻っていった。

『カロリーメイト啜えたまんまだったわね。』

「念話だったから普通に喋っている様に聞こえたけどね。」

『念話だから口に啜えたままでも関係ないってことか。』

なにやらデバイス陣は感心？していた。オレはというと…

（あの、カロリーメイトを啜えたままで、少し顔をだしたフェイト。  
…可愛かったなあ／＼）

と思っていたのは秘密だ。

「劉ちゃん、そんな事思っていたの？」

……………秘密だ。

「劉ちゃん!？」

がちゃ!

「ハアハア。い、いらっしやい。」

フィオネが何か言ってくるが、それを受け流しながら5分くらい待つと、息をきらしたフェイトがドアを開けてくれた。

「そ、そんなに慌てないでもよかったのに。朝ごはん食べていたん

でしょ?」

「えー!?そ、そんな事ないよ?」

いや、さっき食べているって言ってたし、なにより口に唾えていたじゃん。カロリーメイトを。

「と、とにかく上がって!」

「おじやまします」

フェイトに促され、オレとフィオネは部屋に上がらせてもらう。す

「……………」

アルフが夢中でドックフードを食べていた。

「よう!アルフ。」

「おお!劉!!無事だったんだなあ!!」

「まあね。それより…やっぱり食事中だったじゃん。」

オレはフェイトの方を見る。

「ち、ちがうよ。私はちょうど食べ終わっていたから」(ニコッ)

「フェイト。劉が来たってわかったら、いそいでごはんのカロリーメイトを口につっ込んで、歯を磨いて、着替えてたよ。」

「ありゃ、ごめんね。」

フィオネが手を合わせながら謝る。

「別に大丈夫だよ。……………アルフにはあとでO H A N A S H Iかな。」

「……………」ガクガク

フェイトがそうつぶやくとアルフがいきなり震え始めた。

(あれ！？フェイトもその技つかえるの！？)

オレが驚いている中、アルフが話題をかえてきた。

「そ、それより、劉はどうしてスカートなんて穿いているんだい？」

「あ〜、これはね……………」

オレが言葉を濁していると、フィオネが代わりに説明してくれた。

「あゝはっはっはっはあ！！！」（大爆笑）

「あ、あはは。」（苦笑）

フィオネが説明し終わると、アルフはお腹を押さえながら笑い始めた。フェイトも苦笑？していた。

「で、でも、劉。その格好似合っているよ？」

フェイトがそう言つと、

「ああ。それは保障する！」

とアルフもサムズアップしてくる。誰かあの指折ってくれないかな

「フェイト、似合っているって言うけど…、私、男なんだから…嬉しくないよ。」

「あ、ごめん。」

「劉も大変なんだね〜（汗）」

そんな二人にオレは疑問に思っていた事を聞く。

「フェイトはいつもカロリーメイトなの？」

「うん。知ってる？これって便利なんだよ！これひとつで必要な栄養すべて摂れるんだから！」

フェイトが胸を張りながら言ってくる。

「って、それだけじゃダメだよ！」

フィオネがフェイトの言葉を聞いて突っ込む。

「そうだよな〜。少し冷蔵庫見ていい？」

「うん。いいよ。」

フェイトの了承を得て、フィオネと二人で冷蔵庫を開けてみると、中には卵1パックしか入っていなかった。



「「なぜ卵だけ!?!」」

思わず、フィオネと一緒に突っ込んでしまったが、

「お隣さんが分けてくれたんだ。」

とかえしてきた。

「…本当にはカロリーメイトしかないんだね」（汗）」

その後も探すのが、食料はカロリーメイトしか見つからなかった。

「ああ、ほかにはね……。」「

すると、フェイトがフィオネの言葉を聞いて、違う部屋に行く。

「こっちだよ。」

「「?????」「

フェイトがなにやら呼んでいるが…とりあえず行ってみようか？というアイコンタクトをフィオネとして、（その間約0.5秒）フェイトの元に向かう。

「な、なんだよ…これ？」

「す、すごいわね。」

『こ、これ全部…』

『ドックフード!?!?』

オレ、フィオネ、ゼロ、クリスの順番にこの部屋の感想を洩らす。

「うん。そつだよ。アルフはたくさん食べるから、台所には置ききれないと思ってこっちに移したんだ。」

フェイトは普通に言うが、

(いや、数が尋常じゃないんだけど……)

そう。みなさん、想像してみてください。今あなたの頭の中に、一つの部屋があります。あ、部屋といっても決して狭くありませんよ？ 充分広い部屋です。そこにあなたが、「もうこれ以上は置けない」って思うぐらいドックフードを並べてください。……並べました？ OKですか？

では、言いますね。軽く、その30倍はあります。もはや、缶詰状態です(笑)

「ちょ、ちょっと買いきちやったかな？」

すごいですよね。このお嬢様は。買いきってレベルじゃないのにさ。

「じゃ、向こうの部屋に戻ろうか。」

フェイトが戻っていくので、オレ達もその後に続くが……オレは聞いたぞ。部屋がミシミシ言っているのを……(汗)

「さて、フェイト。この食生活じゃダメだ！」

「え？でもこれさえあればだい「大丈夫じゃない！！」…は、っは  
い…！」

フェイトが何かいいそうだったから、オレはその言葉を遮ってやる。

「ううゝ劉がいじわるだゝゝ」

フェイトがぶくゝと頬を膨らませてこつちを上目遣いで見てくるが、  
オレは負けないぞ！！

「なにせ、これもフェイトのためなんだ！心を鬼にしてだな…」

「劉ちゃん、心の声が出ているよ」（ボソッ

おっと、いかん、いかん。

「ところで、フェイトはまだお腹すいてる？」

「いや、もつお腹はいっぱい（きゅ〜）…い…だよ…？／／／／／」

フェイトが答えると同時にお腹がなる。

「……これで大丈夫だと？」

「うう〜／／／／」

フェイトが顔を赤くして俯く。そんなフェイトにオレはある提案のする。

「よし！今からオムライスを作っであげる！」

「オムライス？」

「そつだよ！アルフもまだ食べれる？」

「もつちろん！まだまだいけるよ！…！」

アルフも食べれるって言うけど……

（アルフはあの部屋のドックフードを食べさせて、早くあの部屋を楽にさせないとダメか？）

と思ってしまう。我ながら部屋が楽になるなんて変な事を言っていると思っけど、言っている意味は正しいと思う。

「でも、材料は卵しかないよ？」

「ん？」

そんなことを思っていると、フェイトがオレに言ってくる。

「それなら、心配ないよ。ゲートオブパビロン 王の財宝！」

オレは何もない空間から一つの小さな冷蔵庫を出す。物は使いようだね。

そして、オレは白米、ケチャップ、デミグラスソース、鶏肉などを取り出していく。

「アンタ…そんな物までだせるのかい…」

アルフが目を丸くして驚いている。

「すぐ作るから待っててね！」

オレはエプロンをして台所に立つ。料理は得意なほうだ。昔っから喫茶翠屋に習いに通っていたし。

「私も手伝うよ！」

「さんきゅー！」

フィオネも手伝うと言うと、エプロンを取り出して、一緒に料理を開始する。実はフィオネも料理は結構うまい。

「劉ちゃんにおいしい料理を食べてもらいたいからね〜！／＼／」

『キーツ！！私だって体があれば料理くらいねーッ！！！！！！』

フィオネの言葉にクリスが何やら悔しがる。

「はい、完成！」

「もうできたの!?!」

フェイトがオレの言葉になにやら驚いているけど…大体、20分くらいかな?そんなに早いとは思わないけど…。

オレは出来たオムライスを二人が待っているテーブルの上に置く。

「うわぁ!おいしそうだね!」

「うん!もう食べていいかい!?!」

「どうぞ、召し上がれ!」

二人が早く食べたそうにしていたから、オレは食べていいと言つと、

「「いただきます!?!!」」

言つが早いか、二人はすぐに食べ始めた。

( よっぽど、お腹すいていたんだな。 )

オレは二人の食べっぷりに驚きながらも、嬉しい気持ちもあった。

「味はどうかな?」

フィオネが二人に聞く。





オレはすかさず反論するが……、

「全部！！！！／／／／」

すぐに言い返された……orz

二人が食べ終わり、フィオネが食器を洗っている間、オレはこれらの事を二人に話す事にした。

「…劉が管理局に協力する代わりに私たちが無罪？」

「ロストロギアを持っているのかい？」

「うん。」

あの後あったことを二人に話す。

「でも、私達のために劉が協力するって……悪いよ。」

フエイトが申し訳なさそうに言う。

「そう気にしないでよ。なのは達も協力することになったしね。それにさ…フエイト達が危なくなったら、【オレ】が絶対に助けに行くから。」

「りゅ、劉が？私を？／／／／／」

「すまないね。劉達にばかり。」

フエイトはなんだか顔を赤くして体をくねくねさせ始め、アルフはまた謝ってくる。

「だから、気にしないでつて。そもそもオレ達がフエイト達を協力するって言うってのこれだし…。むしろこっちがごめんだよ。」

『あら、劉ちゃん。そろそろいかなきゃ。』

クリスが時間だと教えてくれる。

「そうだね。じゃあまたね、二人とも！無茶だけはしないでよ？」

「大丈夫だよ！」

フェイトがはっきりと答えるが、

「いや、私としてはフェイトが一番無茶していると思っただけど…」  
（汗）

「うんうん。」

オレの言葉にアルフも頷いてくれる。

「そ、そんなことないよ／＼／＼」

フェイトもアルフに頷かれて顔を赤くする。

「それじゃあ行くよ！フィオネ！」

「じゃ〜ね〜！」

フィオネに頼んでオレ達はアースラに転移した。



「ねえ、アルフ。劉が助けってくれるって！／／／／／／／／／／／／」

「そ、そうだね……あははは……」

フェイトがわざと無茶しないか不安いっぱいアルフだった。

第28話：念話って心の中だから【私】って言わなくてもいいよね？bby劉（後

マ「28話更新しました！」

瑠「お疲れ様。」

フィ「いいのよ、別に。」

ク「そうね。何が今日中に上げるよ！？」

ゼ「もう、日にちまたいでいるだろう？」

マ「うつ！…だって、プロット作っても、書いているその間、間にまた話を組み込んでいっちゃって……気づいたら、時間が（汗」

フィ「はあ。仕様がないわね。」

ク「もういいわ。では、感謝コーナー！ユタ様、バラランシャ様、畏無様、紅様、メガネ様、月光閃火様、Arishia様、夜神様、流水様、紅幽鹿様、感想ありがとうございます！！」

ゼ「お土産は、畏無からは、響介特製のビターチョコモンブラン  
フィオネには、劉さんぬいぐるみ  
響介特製のチョコクリスマスケーキ

メガネ様からは、袋を担いでるミニスカサンのツインテールのコ  
ダイ、直筆（かなり可愛い字で）『Mary Xmas』のメッセ  
ージ入り。

月光閃火様からは、劉宛・閃火特製デジタル目覚まし時計：

「よお…朝だぜ？そろそろ目を覚まそうや。目を覚まさんと…イタズラするぜ？（妖笑）」

瑠璃宛・輝刃特製デジタル目覚まし時計：

「朝だ…そろそろ起きろ。」

こうやって瑠璃の寝顔を見るのも一興だが、いい加減に起きないと一緒に出掛ける時間が減るからな…（照）。」

ユタ様からは、滅刃 召

夜神様からは、写真「カナタの食事風景」（頬がハムスター状態）を全員分

紅 幽鹿様からは、【恋符】マスタースパーク

召喚符（これで、召喚されるものはマーボー様次第）

幸夜の写真（猫耳、尻尾付きの上目遣い写真）

瑠璃ちゃんには、魔女っ子服（魔理沙の服）と幸夜特製きつね人形（きつね人形には、瑠璃ちゃんを狙う【変態】を撃退する、機能が付いております）

。劉君には、病除けのルーンを刻ん指輪と幸夜特製フルーツジュース

バラランシヤ様からは 死滅ガイ・バルカロールの黒薔薇

ランク：EX

種別：対星宝具



レンジ：

最大補足：1人

原典：なし

詳細：漆黒に輝く三叉槍。春人の固有特殊能力『ケミストリー宝具合成』を使用することでのみ創り出すことが出来る特殊な宝具で、惑星1つを易々と破壊することが可能なほどの威力を秘めている。

この宝具を防ぐ術は無く、1度放たれると攻撃対象を殲滅するまで追い続けると言う最強で最狂で最凶な宝具。

ただし、この宝具使用者は全ての魔力を吸いつくされてしまい、さらに体力も限界まで奪っていく。

を頂きました！ありがとうございます！！』

マ「つて、なんだよ！最後のはあ！！！」

瑠「ああ！なにかきたよ！」

フィ「ちよつと作者！向こうに行きなさいよ！！！」

マ「い、いやだよ！助けてえ（泣）」

ク『だが断る！』

フィ「ばいばい。作者。」

瑠「ばいばいなのか？」

ク『そうよ。瑠璃ちゃん。さあ、最後の挨拶をなさい。ううっ』  
（  
噓泣き

瑠「ん〜。わかった。作者ばいばい！」（ニコッ

ファイ「よし！もういいわね？転移！！」

マ「ちよっ！ませ」

マ「って……って、JJJJJJJJ！？」

ファイ《無人世界よ。》

マ「はあ！？！？！」

ク《貴方は今から星になるのよ》

マ「だからって、その マークはやめる！何回も言ってるが、うん  
いー！」

瑠《星かぁ。ふふっ、ロマンチックだねえ／＼／＼》

マ「瑠璃は絶対に何もわかってないでしょー!？」

ゼ《作者!》

マ「ゼロ!おまえなら……」

ゼ《すまん。俺には止められない。》

マ「ゼロー……!」

ファイ《あと5秒!》

マ「え!?!ホントに!?!」

ク《4!》

瑠《3!》

ゼ《2!》

マ「やだ……!……!いやだ……!……!……!……!」

ク《1!WWW》

マ「草はやすなあ………!!」

フィ《0!…!!》

マ「わあああああああ………!!」

マ「あれ？何も起きない？やったあ!!俺は何か知らないけど勝ったんだあ!!ざまあみる!春人!!」





マ「ねえ。知ってる？圧倒的な力の差の前では…バリアってお煎餅  
みたいに呆気なく割れるんだよ。」（にっこり

フイ「????今、空が光ったようなあ？」

ク「さあ？」

瑠「か、かみなり？おへそとられちゃうよー!？」



ぜ（扱いがひどいな…）

フィ「さて、今回もゲストが！」

ク「まずは前回の番外編の話から、人気が高かった、ユーノ&クロノです。」

ユ「恥ずかしいな／＼／」

ク「ああ。／＼／」

フィ「そして、ユタ様の作品『異世界を渡る』から優君が来ました！」

優「今日はすぐ帰るから。」

ク「なんだ。せっかく来たんだから、ゆっくりしていけばいいのに。」

瑠「うん。そうだよ。ね〜ユーノ君？」

ユ「う、うん。そうだね！／＼／＼／」（はあ〜可愛い／＼／）

フィ「！！瑠璃ちゃんはこちらに来ようね〜？」

瑠「？わかった。」

優「さて、ここに来た理由……。」

ユ・ク「「?????」」

優「いくら夢でも瑠璃にラブレター?しかもあんな……ふざけた……。  
だから、皆の代表として殺しに来たよ!」

ユ・ク「「…ゑ!?!」」

優「死ねえ!!!ギャラクシー・ブレイカー!!!!!!!」x」

ユ・ク「「ギャああああああああああ!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」

フィ「優の気持ちギャラクシー・ブレイカーの数に比例している  
のね……(汗)」

ク『今回はこのままお別れよ！』

ゼ『では、次回もよろしくな！』

瑠『ぜ、絶対に見てね！絶対だよ！私との約束です／／／／』

フィ『ではまた次回！！！』

優『おらおらあー！！』

ユ・ク『も、もうやめ……ギヤああああああアアアッアア！

』

第28 / 5話：あの後の出来事……。それはトラウマ全開だった。……後に某執務

週間ユニークアクセス3721突破！

PV186 / 597アクセス、ユニーク20 / 710人

読者の皆様ありがとうございます！

そんな読者様に申し訳ありませんが、今回はあとがきが本編です！

（キリッ

では、29話はじまり〜!!!

第28 / 5話：あ後の出来事…。それはトラウマ全開だった。

……後に某執務

アースラ内廊下

オレ達はあの後アースラに転移してきて、今はリンディさんの所に向かっている最中だ。

「そついえばさ〜」

「ん？どうしたフィオネ？」

フィオネが何かを思い出したようだ。

「フェイトちゃんに助けらって言った時……………」

「????？」

「劉ちゃん…【オレ】が助けらって言ったわよね？」

……………おやおやおや？

『言ってたな。』

『そうね。なんで、そのセリフを私に言ってくれないのよ!?!』

ゼロも言ってくるが……………クリス…おまえは、もう黙って

「…まあ、バレないだろう。フィオネもお願い!」

「いいわよ。私もただ思い出したただけだから。」

フィオネもオレの願いを聞いてくれた。

「さんきゅ。さ、早いところ艦長室に行こうよ。」

オレは話を切り上げ早く行くことと言っ………が、

「……劉ちゃん？」

「う……うん？」

いつのまにか、なのはがオレの後ろにいた。

「あちゃ〜」

フィオネはすぐに小さくなり、オレの胸ポケットの中に隠れる。

（そうだよ。なのはが今の会話を聞いていたとは限らない。）

「ど、どどどどうしたんだ？なのは？」

(でもなんか若干、なのは後ろから黒いオーラが…(汗)

「劉ちゃん…【オレ】って言ったんだ…今はお母さんからの罰の途中なのに…」

「いやまあ、…あのね?」

(やっぱりバレてるーーーーーッ?!?!?!?)

魔王なのはさんにはすべてお見通しだったようです。(泣)

『聞こえてただけでしょう?』

(クリスさん…今は本当に黙ってて!)

「しかもッ!」

「ひいい!?!」

なのはが急に大声を出し、それにオレは怯えてしまふ。だって仕様が  
がないじゃん。今のなのは…純粹に怖いよ……orz

「…しかも……少し寄るところがあるって…フェイトちゃんの所だ  
ったんだ…」

キラッ

「いや…だから………」

なのはがこつちをすごい形相で睨んでくる。

「りゅ、りゅりゅ劉ちゃん（泣）」

フィオネもオレの胸ポケットに入っているのに怯えている。

（た、たぶん、フィオネもなのはの暗黒オーラが怖いんだ。）

オレはそつと胸ポケットを撫でてやる。

「なのは、落ち着いてね？私はこの前の事でフェイトが心配していると思っただから……」

「問答無用なのッ！！！」

なのははオレの言葉を遮るとオレに近づいてきた。

「ちょ！？なのは！？ごめん！だから……」

「少し…地獄見ようか？」（にっっこり）



最後のなのはの笑顔。それはそれは、立派な笑顔だったという。  
え？この後はどうなったって？その事は聞かないでください！…っ  
てか、察して。

アースラ艦長室

「うう、グスツ……」

「よしよし、泣かないで。」

オレはフィオネ（アウトフレームver）に抱きついて泣いていた。まだ体の震えが止まらない。

「え〜っとお」

苦笑しながら、リンディさんとクロノがこっちを見ている。ユーノ（フェレット）はあの後、なのはの八つ当たりを受けて倒れている。そして、なのははというと…

「……………」

無言で待機状態のレイジングハートを磨いている。だから恐いって！

「にしても、君はなんて格好しているんだ？／＼／＼」

見かねたクロノがオレに言ってくる。顔が赤いけど、今はそれどころじゃない。

「グスツ！し、仕方ないじゃないか！オレ「レイジングハート」…」

…私！！私だって本当は嫌なんだよ！？」

オレは途中滑りそうになった自分の口を恨みながら、クロノに涙目で訴えた。

「君は本当に男かい？／＼／＼／＼」

「男だ!！」

「あら?でも可愛いわよ!」

「うわあああ!!!!!!!ファイオネーッ!!!!!!!!!」

オレはクロノに訴えたが、リンディさんの一言で心がプライドもろともぶっ壊れた。そりゃもう、コナツゴナにね。

「ハイハイ。劉ちゃんは男の子だよ。カッコいいよ!」

ファイオネがまた優しく抱きしめて、頭を撫でてくれる。

「うう〜」

「よ〜しよ〜し。」

しばらく撫でられていると、

「…はふう／＼／／」

少し落ち着いてきた。

(ファイオネに撫でられると落ち着くな〜／＼)

「それでは、」

オレが落ち着いてきたのを見計らって、リンディさんが真面目な声で場を仕切りなおす。

「これから、高町なのはさん、天道劉ちゃん、フィオネさん、ユー・スクライアさん、民間協力者としてよろしくお願いしますね。」

「……………よろしく願いますなの……」

「ビクッ！うう……。まだ怒ってるよ……」(なのはの声を聞いてまた怯えだす)

「よ、よろしく……」(苦笑)「なでなで(劉の頭を撫でながら

「……………」(いまだに気絶中

こうして、オレ達は正式にアースラの手伝いをする事になった。

「こ、この四人で大丈夫なのか？」（汗

この様子を見ていた某執務官はただただ、不安がいつぱいだった。

第28 / 5話：あの後の出来事……。それはトラウマ全開だった。

……後に某執務

マ「今回はちょっとした話でした！マーボーです！」

瑠「瑠璃です。」

フィ「劉ちゃんはしばらく…無理そうね。フィオネです！！！」

ク「ふう。疲れたわ〜、クリスマスよ〜！」

ゼ「まさか、聞かれているとは…。ゼロだ。」

マ「では、感謝コーナーです。月光閃火様、空言天狐様、ユタ様、夜神様、TH・F様、紅 幽鹿様、メガネ様、ブラックサレナ様、龍賀様、バラランシャ様、感想ありがとうございます！！！」

フィ「お土産コーナー！空言天狐様からは、人型サイズの形代かたしろ、ペインアブソーバーLvMAX・リング、リターンペイン。（首輪）  
苺ケーキ（媚薬）、チョコレートケーキ（性格反転剤）、チーズケーキ（性別変化薬）、マロンケーキ（食べた人の笑顔を見ると理性を強制解除）、ロールケーキ（自白剤）、  
シフォンケーキ（食べた人の髪の色が水色に変わる）、ティラミス（考える力を失わせる）、克蘭ベリーケーキ（惚れ薬）、  
ダーズリンケーキ（頭が良いほど頭が悪く、頭が悪い人ほど頭がよくなる薬）、どんな事もなかったことにする簡易魔法陣

ユタ様からは、瑠璃にケーキセット（甘いのにカロリーゼロな物）

TH・F様からは、劉「お正月に向けての女性用着物」

紅 幽鹿からは、気味の悪い人形、偽・妖精眼のレンズ『グラムサイト』。瑠璃には、幸運の指輪と幸夜特製フルーツケーキ、病除けの指輪（効果は、どんな病気、呪い、悪い薬の効果を無効化する）幸運の指輪（劉と同じデザイン）、皆にこたつ。

メガネ様からは、劉にカツコイイスーツ（コレを着て『君の瞳に恋してる』など恥ずかしい歯の浮くセリフを永遠とフィオネに言う事）

バラランシヤ様からは、エリクサーを1000個（いくつか、飲んだらどんな傷でも一瞬で回復するが、その瞬間から暫くの間、自身にとつて一番最悪なトラウマがフラッシュバックするのが入っている）、

死滅の黒薔薇強制豆腐看板付き。ガイ・バルカロールを頂きました！いつもありがとうございます！  
「ごぞいますー！」

マ「では、瑠璃には一回劉に戻ってもらおうか。はい、このキャンディを食べなさい。」

瑠「うん。あゝむっ！コロコロ」

ピカー！！！！！！

劉「…オレは…オレは…orz」

マ「こりゃひどいな。でも…はい。このスーツ着てねー！」





劉「ふふっ。やさしいね、フィオネは。でもね。フィオネの事はずっと見てきたんだよ？」（顔を近づける）

フィ「そ、そうなの???／／／／」（か、顔が近い／／／／

劉「うん。フィオネは気にしているみたいだけど、オレは君の事だけをずっと、見てきた。もちろんこれからもね。」

フィ「あ……はああ／／／／し、幸せだよ／／／／／」

マ「一気にアクセル全開だな。」

ゼ「あれは？本音か？」

マ「惚れ薬。自白剤。考える力を失わせるの三連コンボだからな。わからん。」

ク「……………」『プスプス（ショートした）』















瑠「へえ。あ、エリクサーあるわよ。ほら飲みな〜。」

ズボツ！（豆腐の鼻の中にエリクサーを突っ込む

豆腐「ぐぼぼぬおがうが！?!?!?!げほっげほっ!?!?!」

ク「や、やばいわね。」

瑠「あらあら、きたないわね。私の足にかかったじゃない。ほら、マロンケーキ（食べた人の笑顔を見ると理性を強制解除）を食べて。その後になめてきれいになさい？」（靴下をぬいで足を出す。

豆腐「もぐもぐ…。瑠璃の生足？」

瑠「クスクス。そうよ？さあ。さあ!?!」



ク『今回は…色々まずいわね。』チラッ

ファイ「あう~~~~」  
// // // // // // // // // // // // // // // // //

ゼ『瑠璃が。瑠璃がああ……!!……!!……!!……!!』(泣)

豆腐「なんであの時に飾ってたんだよ!あんの馬鹿親がああ……!!」

瑠「いい声ね。私…もうびちゃびちゃだよ」(オリアナ「トムソン風」)

ク「え〜今回はここまでよ。感想いっぱい頂戴！では、次回もよろしく！〜どんな事もなかったことにする簡易魔法陣発動！」

瑠「…ふえ？！な、なんで私、作者の頭の上に座っているの！？／  
／／／／」

豆腐「そういう俺はなぜ瑠璃のお尻が俺の顔に乗ってるの？」

フィ「あれれ？私も…どうしたんだろう？」

ゼ「まったく思い出せないな」

ク「豆腐だけは取れなかったわね（汗）」

第29話：ちょっとした騒動の後のアラート！…フェイトの為に今、向かいます

え〜。29話更新です。

本来なら、大晦日番外編を上げるつもりでしたが、もしかしたら、明日の夜に執筆できる可能性があるので番外編はその時にいそいで書きます！

いや……もしかしたら番外編は結局時間がなくて書けない事も充分にありますので、その辺はご了承ください！  
では、はじまりま〜す！！！！

第29話…ちょっとした騒動の後のアリート！…フェイトの為に今、向かいます

「ゼロ！魔力変換【炎】！！」

『了解！【炎】 set』

「いくぞ！鳳凰天翔剣！！！」

「今だ！なのは！！！」

「うんユーノ君！リリカルマジカル……」

~~~~~

アースラ内

「ただいま」

「みなさん、お疲れ様ですね。」

オレ達がアースラに戻るとリンディさんが出迎えてくれた。

「つかれたの〜」

「たしかに。つかれたね〜」

なのはがイスに座りながら言うと、ユーノも頷いている。

アースラに来て、もう数日がたつ。その間はジュエルシードの反応があつたり、なかったり。

ない方が多いけど、その間はクロノと模擬線戦をしたりとヒマをつぶしていた。

「劉ちゃんいっぱい汗掻いたね〜。はいこれ！」

フィオネがオレにタオルを渡してくれる。

「ありがとな〜」

オレはフィオネに礼を言いながら、タオルで顔を拭く。

「むう〜」

その様子を見ていたなのはが睨んでくる。

（なぜ睨む……）

オレはため息をつく。

「魔力変換で【炎】を使うと汗いっぱい掻いちゃうんだよね〜。あ

〜あ、あつ〜…」

「君はいくつ魔力変換をもっているんだ？」

クロノがオレに聞いてくる。

「うん。基本は四つだけど…ゼロと一緒に開発する事ができる。」

「普通は一個あるだけでもすごいのに…。君は規格外だな……（汗）」

クロノが一人で納得している。そんなクロノを尻目に見ながら、オレはシャツを脱ぎ、Tシャツになる。

「あゝ、汗でベタベタだゝゝ」

オレは服を脱いで体の汗を拭く。

「ちよつ！劉ちゃん!?!」

「うん?」

するとエイミーさんがオレの名前を呼ぶ。

「二人とも見ちゃダメなのゝゝ!!!!!!」

なのはも叫んでクロノとユーノに目潰しをする。

「「ぎゃゝゝぎゃあああああああ!!!!!!!!!!!!」」

「なのは!?!何してるんだ!?!」

なのはの行動に驚くオレ。

「あつ！劉ちゃん汗でTシャツが透けてるよ!？」

エイミーさんとなのはが焦っている理由をフィオネが教えてくれる。

「????別にいいじゃないか？」

「よくないの〜〜!!!!」

オレは別にいいと言うがなのはそれがダメだと言う。

(そもそもオレは男だぞ?別に透けていても問題ないはずだ。)

オレが考えていると、男性局員と女性局員が数人こちらにやってきた。

「りゅ、劉ちゃん！俺が着替えを手伝ってあげよう!!」

「ハアハア、劉ちゃん…お、俺と一緒にい…ハアハア」

「劉ちゃん、私と一緒にシャワーを浴びて汗をながしましょう?」

「それより私と一緒に…ね?入ろう!」

皆がそれぞれに言ってくるが…皆目が怖い。

「いや…ボク…男…ですから。」

オレは言ってくる人達を断るが、

「じゃ、じゃじゃじゃあ、同じ男同士で…ハアハア。」

目が血走った男性局員がオレの手を掴む。

「ひいつ!?え、遠慮します!!」

オレはすぐにその手を振り払い、まだ目を押さえていたクロノの後ろに隠れる。

「ちょ、ちよつと!?ノノノノ」

クロノが顔を赤くしていたけど、今回は見逃す事にする。

「だ、だったら、ボクはクロノとユーノと入ります。」

オレはクロノの背中から、少し顔を出してその男性局員に言つと、

「じゃ、お洋服を用意しとくわね」

フィオネがオレの部屋に向かう。

「行こう!二人とも!!」

オレは二人の手を引っ張り、風呂場に向かう。

「わ、私も〜!」

なのはが慌ててオレ達を追いかけてくる。

「なのはは女の子なんだからダメだって!」

ちなみに、オレの服はすでに風呂場に用意されてた。

s i d e o u t

フ ェ イ ト s i d e

「中々みつからないね〜」

「うん。」

私は今、アルフと一緒にジュエルシードを探している。

「フェイト、今日はもう休もうよ。最近ほとんど眠ってないだろう？」

アルフが心配して私に言ってくるけど…

「大丈夫だよ。」

私はアルフに微笑む。

（早く。早く、母さんの為にジュエルシードを見つけなきゃ。）

「でも、これだけ探してないとなると…」

アルフが頭を抱えて考える。

「…海…かな？」

私は思いついた事をつぶやく。

「海かあ。今まで思いつかなかったよ。」

アルフも海は頭になかったみたいだ。

「じゃ、行ってみようか。」

「あっ！フェイト！。待ってよー！！」

私がある場に向かうと、アルフが慌てて私を追いかけてきた。

s i d e o u t

劉 side

「ふっ〜ヒマだ〜」

「そうね〜」

「なの〜」

今オレはフィオネとなのはと部屋でだらだらしている。クロノはエイメイさんの所、ユーノはレイジングハートとクリス、ゼロを診ている。

「劉ちゃん〜ん。」

「ん〜〜?」

フィオネがごろごろしながらオレを呼ぶ。

「ヒ〜〜マ〜〜」

「だね〜〜」

あのちょっとした騒動からジュエルシードは見つかっていない。つまり今のオレ達はヒマ！

「ふう、早くジュエルシードが見つかってほしいの〜〜!!」

今まで同じくぐるぐるしていたのはが急に叫んだ。すると...

ブーブー！

「き、緊急アラート!?!」

《劉!》

同時にクロノから通信がはいる。

「どうしたの!?!」

「ジュエルシードだ!今すぐこっちにきてくれ!」

「わ、わかったの!」

オレ達は部屋を飛び出しクロノの所に向かった。

「にしても、なのはが叫ぶと同時に反応が起るとは……さすが、

将来の魔王。」

「そ、そんなことないの……!!!!」

途中、こんなやりとりが合ったのは言うまでもない。

クロノの元に向かうと大きな画面があつて、そこには…

「フェイトちゃん!!!!」

フェイトの姿が映し出されていた。

(あゝ、この時かぁ……)

画面に映し出されているフェイトは、6個のジュエルシールドを一気に封印しようとしていた。

「い、今すぐ助けに行くの!!!!」

なのはがユーノからデバイスを受け取ると、すぐに向かおうとする。

「その必要はない!!」

が、そのなのはをクロノが止める。

「え!?!」

「このまま様子を見て、彼女の魔力が尽きた時に捕まえればいい。」

クロノは少し顔を歪ませながら、何かを耐えるように言う。

「そんな……」

(こいつも、本当は耐えられないんだな。)

クロノを見てオレは思う。だが、

「フィオネ! クリスとゼロは?」

「ここにあるわ!」

ユーノからすでに預かっていると云うように、オレに見せてくる。

「さんきゅ!」

オレはフィオネから受け取ると、すぐに転移の準備にはいった。

「まてっ! 劉! 君は……!」

クロノがやはりオレの事も止めようとしてくる。

「悪いねクロノ! 【オレ】はフェイトがピンチの時には助けに行く

って約束したんだ！」

「私も行くの！」

「僕も！！！」

なのはとユーノがオレに引っ付いてくる。

「じゃ、いってきま〜す！」

フィオネの声を聞くと同時にオレ達は転移した。

第29話：ちょっとした騒動の後のアラート！…フェイトの為に今、向かいます

豆腐「29話です！」

フィ「ではさっそく、感謝コーナー！」

瑠「紅様、龍賀様、ユタ様、バラランシヤ様、仮面ライダーディケイド神様、メガネ様、Arishia様、紅 幽鹿様、畏無様、夜神様、空言天狐様、天宮翔様、月光閃火様、桜川リマ様、感想ありがとうございますね！」（にっこり）

ク「お土産コーナーよ！龍賀からは、空想具現化を1分間使用可能にする薬

ユタ様からは、終末の鎌・ラグナロク効果

この武器に触れるすべての物はなかったものとされる（人には効果なし）

真名開放されると闇の斬撃を放つことが出来る

終末の鎌だけ合って攻撃力も高く人に対してはそのものの悪夢を夢で強制的に見せることも可能

バラランシヤ様からは、死滅の黒薔薇三連打（ゲイ・バルカロール）

ぬいぐるみ外装・カラス（クリス専用）

ぬいぐるみ外装・狼（ゼロ専用）

春人が調合に失敗したエリクサー（表面上は完全回復している様に見せかけて、内側は全く治って無いと言う代物）

メガネ様からは、瑠璃にケーキのレシピ（この通りに作ると、食べ

た人間は作った人に対して超ドMになる)

紅 幽鹿様からは、虎徹と菊一文字

皆に幸夜特製カロリーゼロのショートケーキ、モンブラン、チョコケーキ、フルーツケーキ、メロンケーキ

畏無様からは、瑠璃に『侵略！イカ娘』のイカ娘の頭(白い三角)と髪(触手)をくつつけた帽子、

フィオネに『無限のフロンティアEXCEED』のキャラクター「ネージュ・ハウゼン」のコスプレ

マーボーに「O H A N A S H I」(護式・斬冠刀)

夜神様からは、フラグブレイカー(マーボー専用アイテム)

あとがき内で起こる出来事一つに対し、完全にフラグを折る事が出来る。

カナタ特製フルーツロールケーキ(低カロリー)を人数分

「フェイト&カナタの寝顔写真」(二人で寄り添う形で寝てる&色々と際どいパジャマ姿)

空言天狐様からは、劉に『トラウマ忘却剤』

瑠璃にはSDの劉が描かれたマフラ

ゼロ、クリスには2話分だけ人の姿でいられる装置。

なのはには今回オレが使ったスターライトブレイカー・ファランク
スシフトの魔法

フェイトにはフォトンランサー・ファランクスシフトを使っても疲れないようにした腕輪

マーボー様には強制看板の呪いを解除する薬品、マーボー作者に飛んでくる攻撃は空言天狐様に届くよう設定した空間接続装置(激痛8倍)

次回ゲストを女にする呪いビーム

莓ケーキ20個(性格反転薬、超下剤(食べると二日ほど下痢状態))

)

仮面ライダーディケイド様からは、トリプルブレイカー×100000000回を頂いたわ！ありがとね！』

マ「と、言う事で！見ろっ！豆腐の呪いがとけたぞ！！」

フィ「しかも、今回の攻撃はすべて…」

ゼ『空言天狐様に転送される…と。』

マ「今回は俺の勝利だあ！！！！」

ク「では、ゲストの紹介よ！ユタ様の作品『異世界を渡る』から、優と紅 幽鹿様の作品『魔法少女リリカルなのは』から幸夜が来たわよ〜！』

優「……」

幸「こんにちわ！」

瑠「いらっしや〜い！」

フィ「幸夜君は初めてよね！よろしくね！」

幸「は、はい。／／／／」（い、いきなり二人に出迎えられた／／／

マ「で、なんで二人は女になっていないんだ？」

ゼ『次回ゲストを女にする呪いビームの効果でな。』

優「それは俺が消させてもらった。別になってもよかったが、今日
はやる事があるからな。幸夜はついでだ。」

幸夜「ありがとうございます。」

マ「わかった。……で、お前はなぜそんなに怒っている？」

優「それはな……前回の瑠璃についてだ。おまえがあれを食わせな
ければ、俺の瑠璃像がああああ……!!」

マ「やばい!! ってギャあああああ!!……!!……!!……!!」

優「おらおら!!今回はなんとか武器庫なんて展開させねえぞ!!」

マ「ま、マーボー武器庫だあ!!」

優「んな事はどうでもいい!!……ギャラクシーブレイカー!!……!!」

マ「フギヤああああああ!!……!!……!!……!!……!!……!!……!!」

瑠「私ね。いっぱいケーキ貰ったんだよ。幸夜君も食べる?」

幸「うん。いただきます!」

瑠「あっ！まって。……はい、あ〜ん／＼／＼」

幸「え!？」

瑠「フィオネがね。ゲストにはこうしてって言ってたんだ。だから、はい、あ〜ん／＼／＼」

幸「そ、そうなんだ〜／＼／＼」（フィオネをチラ見

フィ）（どう?いい仕事したっしょ?）

幸「（あ、ありがとうございます!〜!）（∴あ、あ〜ん／＼／＼」

ゼ『ほほえましいな。』

ク『そうね〜。』

ゼ『ちなみに最近暴走していないが?』

ク『別にいつも暴走なんてしてないわ！劉ちゃんへの愛が大きすぎてそうなっているだけよ！！』

ゼ『……で、何で最近は？』

ク『無視したわね。最近はお劉ちゃんの日観察動画を密かに見ているのよ！はあく、いいわあ！』

ゼ『…聞かなかったことにしよう』

優「ふう。武器庫がなくてもしつこかったな。」

フィ「最近は何も鍛えられているからね。」

幸「さて、そろそろ帰りますかね。」

優「そうだな。目的は果たせた。」

瑠「お土産に私が作ったプリンとカップケーキ、もってって。」

優「さんきゅ。」

幸「ありがとう！」

ゼ『では、今回はここまで！』

瑠「またね〜！」

フィ「次回は番外編！」

ゼ『またあとがき風か』

瑠「そうだったね。」

フィ「じゃ〜ね〜」

ク『うふふ、劉ちゃ〜ん／／／ふ／／／／／／／／／／』

マ「今回はノープランで書きました。すいませんね。え？なにで復活した？瞬間再生能力付きの指輪があるじゃない！」

フィ「きもい！」

ドガツ！！

マ「あべしっ！？？」

番外編：大晦日だよ！全員集合！！！（前書き）

PV201 / 782 アクセス ユニーク22 / 141 人突破しまし
た！！

皆様ありがとうございます！！！！

番外編：大晦日だよ！全員集合！！！！

マ「大晦日だよ！！！！」

劉「全員集合！！！！！！！！！！」

フィ「ドンドンパフパフ！！」

ク「はあ。また始まったわね。」

ゼ「ま、いいだろう。」

光「それより劉！こっちに来てよ！！！！」

劉「え？う、うん。」

マ・フィ・ク・ゼ「……………」

光「よしよし。いい子だなあ、おまえは「なでなで

劉「そ、そうかな？／＼／＼」

マ・フィ・ク・ゼ「……………」
「なんでおまえがここにおいるんだ」

光「え？それは前回のクロノとユーノ兄が羨ましくてだな。」
「なで

劉「え？う、羨ましい？／＼／＼／」

光「そりゃそうだろ！？俺も劉の髪を洗ったり背中洗ったりしたか
つたんだ……」

フィ「それはわかるわぁ！！」

ア「そうね！私もあのサラサラな髪を洗ってあげたいわぁ！！」

マ「つて、お前も来てたのかよ！？」

ゼ『神出鬼没だな……』

ア「だって、こうやって出てこないと……出番が……orz」

マ「それは……ごめんな。」

ア「だから！こうして出てきたのよ！！」

光「ちなみに、俺はアテネの事はネー姉って呼ぶことに決めたから。」

ア「ホント？うれしいわぁ！ありがとね〜光ちゃん！！」

光「いいってことさ。」

マ「もう劉は女だな。」

劉「なッ!?なんでそうなるんだよ!？」

マ「いやいや、今回の話を初見の人が読んでみる!?たぶん、普通にお前を女性キャラと勘違いするぞ!？」

劉「そ、そんなのわからないじゃん!」

マ「じゃあ、アンケートだ!!今回の話を読んで劉が一瞬でも女性キャラと勘違いした読者は感想で教えてください!」

フィ「なんか、感想がほしいからやっているような……」

ク「ずる賢い野郎ね」

ゼ「まっただ」

マ「はい、そのデバイス陣だまってろッ!」

光「なあなあ。大体さあ、大晦日ってなにやるんだ?」なでなで

マ「さあ?」

ア「大掃除とかじゃない?」

マ・劉・フィ・ク・ゼ「……」それだ――――ッ!――!

!――!――!

光「え〜。掃除とかいいよ〜」なでなで

マ「だよな〜面倒くさいよな〜」

ア「貴方達は……（汗）」

フィ「じゃあアレは？おそば!！」

マ・光「それだーーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ゼ「どれだけテンションが上がるんだ？」

光「劉!さっそくお前の手作りそばを食べさせてくれ!！」

ク「いや、さすがに手作りは……」

劉「うん!わかった!」

ク「できるの!?さっすが【私】の劉ちゃん!どんだけハイスぺックなの!?料理が出来る男は将来モデルるわよ〜!ま、劉ちゃん【私】の嫁だから問題ないんだけど〜!！」

フィ「誰がクリスの嫁よーーーーッ!!!劉ちゃんはこの【私】の嫁よ!！」

劉「その前にオレは男だから嫁にはならんツ！」

ア「でも、劉ちゃんは男の娘だから嫁になるわよ？」

劉「なんで男の娘なんだよ!？」

マ「お前…自分の設定見てないのか？性別のところ…男の娘にしたろ？」

劉「あの時に直せって言ったでしょ!？」

ア「私たちはそれでこう言ったわ！」

マ・ア「無理ツツ!!!」「」

マ「ってな。」

劉「いやいや!そんな事言ってるようで、実際は言っていないからね!?!」

光「そんな事より手作りそば〜!!!」

劉「あう…光さん、少し待っててね。まずこの二人をどうにかしないと、オレが嫁になっちゃうんだ。」

光「別にいいだろう。ま、お兄ちゃんとしては…悲しいけどな…
うつつ。」(マジ泣き)

ファイ・ク「お義兄さん！弟さんを私に！……！」

光「そう簡単にやれるか……！……！……！……！……！」

劉「こ、光さん……！……！……！」

ゼ「あっという間にカオスな空間ができたな……！」

マ「ま、これがこの小説！」

ア「そうね。これがこの小説（笑）ね。」

マ「（笑）をつける意味がわからないんだが……！」

光「ふう。にしてもさ……、劉の手作りそばが食べたいんだが。」

ファイ「光はそればっかね……！」

光「あれは、皆が勘違いしている。俺は向こうに行ってただ一緒に添い寝をしようとしただけだ。」

フィ「それでも、光の愛は一線越えてると思うんだけど……」

ク「そうね……。変態ね……。」

マ「そのセリフをクリスからは言われたくないんだけど。」

ク「どういう意味よ!?!?」

劉「オレもそう思う。」

ク「劉ちゃん~~~~ん（泣）」

フィ「ふっ！泣きなさい。劉ちゃんは貴方なんて必要ないって言うてるわ!」

劉「いや、オレにとってクリスは必要だよ。」

ク「え!?!い、今……なんて……?」

劉「????いや、だから。クリスは必要だって……。」「だってオレの相棒だし」

ク「よっしゃあああああああ!?!?!?!?!デレ頂きましたあ!?!?!これ即ち勝利!?!?!」

フィ「そ、そんな……。劉ちゃん!私は!?!?」

劉「もちろん！フィオネもだよ。」（だってあ（ry

フィ「やったあああああ！……！……！愛してるってえ！……！」

劉「いや、そんな事は言っていないぞ！？」

ク「キーーーーッ！……！悔しいーーーーッ！……！……！」

マ「こいつの耳もおかしいな。」

ア「まあ、耳なんてないけどね。……。」

ゼ「はああ」

マ「つと、そつだ。光に聞きたい事があつたんだ。」

光「ん？なんだ？」

マ「前に恋愛感情に近いものを抱いているのはアリサだって言つた事。」

光「……………」

ア「あッ！私もそれは気になってたわ！……！」

フィ「私も私も！……！」

光「……いや…それはあ〜」

マ・フィ・ア「それは〜〜〜?」「」

光「……劉!そばはまた今度!!じゃあな!!!!!!」

チュツ(類に

劉「あへっ!?あ!あうあう〜〜〜//////////////////////」

マ・フィ・ア「」に、逃げた上にキスしてつたああ!?!」「」

ゼ「兄弟愛か。」

ク「違うわよ!?!!!」

フィ・ク「次着たら……クロス……」

劉「い、今…キス…されちゃった……。え、えへへ…よかったの…かな?だって、兄弟だって、言っただし。//////////////」

「フィ・ク」でも、劉ちゃんが可愛いから許す~~~~~!!!!!!
「!!!!!!」

「マ」うるさいヤツラだ。」

「ア」ま、いいんじゃない(苦笑)

「ゼ」では、今回はここまで!」

「ア」ご愛読ありがとうございます!次回のマ」それだと打ち切りみたいだからね!!!!?」:::はいはい。」

「マ」では、今回の番外編はここまで!!!次にあとがきに行ってみよう!!!!!!!!!!!!」

番外編：大晦日だよ！全員集合！！！（後書き）

マ「はい！書いてみた！」

劉「／／／／／／／／／／／」

フィ「可愛いわぁ／／／」

ク「そうね／／／／／／／」

ゼ「…感謝コーナーだ。」

マ「え〜、ユタ様、光闇雪様、天宮翔様、仮面ライダーディケイド様、T.H・F様、夜神様、紅 幽鹿様、畏無様、月光閃火様、龍賀様、桜川リマ様、ばつど様、感想ありがとうございました！」

ア「次はお土産ね。ユタ様からは、希望と終末が交差する斬撃（指輪破壊機能付き）」

仮面ライダーディケイド様からは、真紅のアゾット、ディケイドライバーとディエンドライバー、トリプルブレイカー、イグザズノシス・アクシオーマテイテロン（改）、ディメンションキック

T.H・F様からは、フェイトに「某ドジ神子の衣服にチャクラム×2つと、着けるとドジになるスキルの付いたクル スの輝石のレプリカ」と「ステージ衣装」

夜神様からは、ルシフェリオンブレイカー！！×2

紅 幽鹿様からは、劉君に欲情した男性局員とクロノにゲイ・ボルクの一撃を

マーボ様に、どんな事が起きても精神が折れない薬

劉君に、スーツと黒のかっこいい帽子

瑠璃ちゃんに、おしることカップアイス

フィオネさんに、カメラを（このカメラで、劉君のスーツ姿を取ってください）

畏無様からは、マーボーにSLB&アルカンシエル&核攻撃、瑠璃には、『MELTY BLOOD』のシオン・エルトナム・アトラシアのコスプレを、
フィオネには、瑠璃と同じく『MELTY BLOOD』の遠野秋葉のコスプレ

桜川リマ様からは、マーボーと劉ちゃんの弱点帳をお互いにプレゼント。

こんなに頂いたわ。みんな、ありがとう!!--」

マ「さつて、今回はさらにゲストが来てくれた。」

ク「最近多いわね〜」

ゼ「でも、ありがたい事だ。」

フィ「月光閃火様の作品『WOLFANG - ウルフアング - 』狼男は不良青年〜」から月光閃火&輝刃コンビと龍賀様の作品『テン

ブレな転生（仮）『より森 龍斗君が来てくれたわ〜!』

月「よう……」

輝「来たぞ。」

龍「はじめましてだな。」

マ「おお!よくきたな。」

劉「いらつしやい!」

月「劉!」（劉に抱きつく

劉「ほえ!?!」

月「はあ、お前はいいなあ。」

フィ「これが劉ちゃん成分ね。」

輝「閃火は劉を愛でたがっていたからな〜。」

劉「はう／＼／＼／」

月「はあ〜よ〜しよし」なでなで

劉「はう／＼／＼／／／／／／／／／／／／／／／／」

月「（やばい!もう…無理だ!）きよ、今日は俺と一緒にホテ、それはさせねええええええええええ!…!!…!!…!!ガフツ!?!」

龍・輝「た、食べる!!」

瑠「ほ、ホント!? わかった。少し待っててね!」

マ「はあ。こいつは…」

ア「ま、瑠璃ちゃんだから…」

フィ「にしても、何かあるわよね〜」

ア「さあ? 私の神眼でも何もわからないわ。」

ゼ『さすがだ! 瑠璃!!』

ク『アンタそればっか…』

龍・輝「い、いただきま〜す!!」

瑠「召し上がれ〜」

マ「そうだ。光にも劉がさっき作ってたそばを送ろう!!」

フィ「ばっど様、みなさんでお召し上がりください!」

龍「うまっ!!」

輝「ああ。とてもおいしい。」

瑠「あのね。だしも今日のために作つといたんだ／＼／＼」（すごい？すごい？）

マ「瑠璃から褒めてオーラが…」

フィ「犬だつたら絶対に尻尾ふってるわね。」

龍「うん。すごいよ。」

輝「うまかった。ご馳走さま。」

瑠「え、えへへへ／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

マ「さ、お前らにも手作りそばだ。皆で食べてくれ。」

龍・輝「「ありがとう！！！！」」

輝「ではな。行くぞ！閃火！」

月「……………」

マ「ひ、引きずってつたぞ!？」

龍「じゃあね。瑠璃ちゃん!／＼／＼／」

瑠「うん!、またね。」

フィ「おっと。龍斗にはこれも。」

龍「??.??.」

フィ「瑠璃ちゃんがエプロン（ピンクのフリフリ）付けてそばを作っているやつ。それはシールになっていて、それをはがすとお風呂に入っている写真が出てくるわ。」

龍「//////////」

フィ「じゃ、瑠璃ちゃんに気づかれる前に転移!..!」

マ「ふう。なんとか終わった。」

フィ「そうね。」

ア「でも、貴方にはまだあるわよ。」

マ「...あ?..」

ク「ほら!きたわ〜!」

瑠「うわあ。きれいななが」「だから違うって言うてんだろ〜〜」

マ「……………ひどい…や…」バタッ

フィ「これをみなきゃね。」

ア「年越せないわ。」

瑠「きれいだったね。」

ゼ『ではまた来年!』

ク『あの作者がもし目をさましたら、後でまた更新するかもね!』

ア「でも、目を覚まさなかったときの為に!…!」

瑠・ア・フィ・ク・ゼ「『みなさんよいお年を〜!…!…!』」

「」

マ「……絶対にか、……かい……ふ……k……」

第30話：えげつない魔法。…オレはそんなつもりはない!! (前書き)

な、なんとか復活…。

で、でも時間が時間なんで、短めで！
でははじまります!!

第30話：えげつない魔法。…オレはそんなつもりはない!!

「うわ~~~~~!!!!!!」

いきなりどうした?と思う人もいますが、今思いつきり落ちています(笑)

いや、笑いどころではないんだけどね……(汗)
オレは横で一緒に落ちているのはを見る。

「風は空に!星は天に!……」

なんとなのは普通にセットアップしようとしていた。

(普通にきついだろ……)

ろくに息も吸えない状態なんですけど……。さすがは魔王「魔王じゃないの~~ッ!……」。

「さ、いくか?ゼロ!セーットアップ!……」

『set up』

「劉ちゃんは呪文ないの?」

「そんな余裕はないッ!……」

いや、本当に息が……。

そんなこんなで。オレ達はようやくフェイトの元についた。

「あッ！劉！！」

「アンタ達！」

着くと、フェイトがオレに抱きついてきた。

「ふえ、フェイト！？／／／／」

オレはいきなりのフェイト行動に驚く。

「本当に……。本当に来てくれたんだ……。」

フェイトが涙を流しながら、オレの胸に顔を押し付けてくる。そんなフェイトの頭をオレはやさしく撫でてやる。

「言つたる？フェイトがピンチの時は、【オレ】が助けに行くって。」

「うん…うん！そうだったね、劉。その…来てくれてうれしいよ／＼／＼」

「あーあー。ゴホン！劉ちゃん？」

「あ……。」

なのはがわざとらしく咳払いをしてオレの名前を呼ぶ。

(やばッ…すっかり忘れてたよ。)

すると、なのはがオレの腕に抱きついてくる。

「なのは？」

「わ、私も劉ちゃんに撫でてほしいの。／＼／＼」

べっぴんやら怒ってはいないみたいだ。

「ああ。いいよ。」

「えへへ／＼／＼」

オレはなのはの頭も撫でてやる。

「劉ちゃん！…そろそろまずいよ！…」

「おっと、そうだった！」

フィオネに言われて、ここに来た理由を思い出す。

「ユーノとアルフはバインドを頼む！なのはとフェイトは二人で封印の準備を！フィオネはボクとユニゾンだ！」

「了解なの！！」

「ユニゾン・イン！！！」

オレはフィオネとユニゾンする。

「クリス！」

『最近セリフがないから忘れられたかと思ったわ。』

何言ってるんだ？このデバイスは？

「クリス！サードモード起動！！」

『OK！！サードモード起動！！』

オレはクリスのサードモードの槍を片手に、詠唱を開始しようとする……が、

「くっ！まずい！劉、そつちに竜巻が！！」

ユーノのバインドが一つ破れ、オレの方に一本の竜巻が向かってくる。

《劉ちゃん！》

「わかってる！！クリス！」

『Load Cartridge』

オレはクリスのカートリッジをロードする。

「部分 コード！発動！！」

『だな？了解！！』

クリスの刃に 魔力を纏わせる。

「時よ！止まれ！すべての時の概念を押し崩せ！！」

『クロックランス！』

オレは向かってきた竜巻にクリスで軽く斬りつける。すると、

「うわ！竜巻が…」

「止まった…のかい？」

ユーノとアルフが目丸くする。

「まだまだ！これはもって二十秒。それまでには終わらせる！！」
オレは竜巻より上に飛ぶ。

《こっちの魔力は充分よ！》

フィオネが知らせてくる。それを合図にオレはさらにクリスのカートリッジをロードする。

「ゼロ！魔力変換【氷結】！！」

『魔力変換【氷結】！！』

クリスに【氷結】の魔力を纏わせ、さらにそのクリスを遠くの竜巻に向かって、何回も空を斬りつける。

「劉は何をやっているの？」

「わからないの。あれだと…ただ竜巻に向かって素振り？しているみたいなの。」

なのはとフェイトの言葉を聞きながらもオレは何回も何回も空を斬り続ける。すると、だんだんとその斬った所が青くなっていく。

「これは…かまいたち！？」

どうやらユーノは分かったみたいだ。

《「大気に満ちる空気よ！凍れ、氷の刃となりて、切り刻め！！！」
》

そして腕にありつただけの魔力を溜めて、それを斬り続けて青くなっている箇所を思いつきりたたきつける。

《「セレスティアル・ブリザード！！！」》

たたきつけた瞬間、今まで溜まっていた氷のかまいたちは6本の竜巻に向かつて発射される。かまいたちが通った箇所は一瞬で凍り、すぐに切り刻まれ、砕け散る。

「うえ！？なにあの魔法！？」

「え、えげつないの…。」

アルフとなのはがそんな事を言う。

「劉…。」

「劉の魔法は怖いのはっかだね…。」

ユーノとフェイトも言うてくる。

(そんなにひどいかな…?)

そんなやり取りの間にもオレの攻撃はどんどんと竜巻に迫り、衝突

する…も、すぐに凍って砕け散った。

「「「あ…あんなにも大きい竜巻が一瞬で…。「「「

四人で同時に言ってくる。

「や、やりすぎたかな？」

『そんなことないわよ。』

オレはクリスに聞くが、平気だと言ってくれる。久々にクリスが天使に見えた瞬間だった。

「劉、あの技は人相手に使っちゃダメだよ？」

「約束なの！」

封印を終え、なのはとフェイトはオレに近づくなり注意してくる。

《大丈夫！人が相手のときは加減するから！》

フィオネが言うが、

「絶対にダメ……！」

二人同時に言われ、フィオネはオレの中でしゅんとしてしまった。

「さ、今回のジュエルシードは6個。二人で半分個に分けよう。

「え！？いいの？」

フェイトがオレに聞いてくる。

「もちろん！二人とも仲良くな。」

オレは二人にジュエルシードを渡す。

「ありがとう、劉。…なのはも…ありがとう／＼／＼」

「うん！フェイトちゃん！私も…ありがとうなの！！／＼／＼」

オレから受け取った二人は目のまでお互いにお礼を言って、握手する。

（これで二人とも問題なくなったな。）

「じゃ、帰ろう！アルフ！」

「うん！今日はありがとな！」

フェイトはアルフと帰り、

「さて、ボク達も帰ろう。」

「うん！」

オレ達もアースラに転移した。

（あそこで雷がこなかったって事は…プレシアもだいぶ迷っているな。これはもうすぐ終結しそうだ。）

オレは帰りながらそんな事を考えていた。

この後、あんな終幕を迎えるなんて……この時のオレには想像もつかなかった。

第30話：えげつない魔法。…オレはそんなつもりはない！！（後書き）

マ「なんとか今日中に間に合った！」

フィ「でも油断できないわ！」

ク「感謝コーナー！月光閃火様、ユタ様、仮面ライダーディケイド様、龍賀様、畏無様、紅 幽鹿様、空言天狐様、ばっど様、桜川リマ様、夜神様、感想ありがとうございます！」

瑠「お土産は、ユタ様から、クリスマスにバインドかけて希望と終末が交差する斬撃、鍋セット（かに&肉）」

仮面ライダーディケイド様からは、エクセリオンバスター×10
0000000000000000回

龍賀様からは、かなり凝った手作りのパフェ

紅 幽鹿様からは、皆さまにお正月用の着物

マーボ様に轟く五星「ブリューナク」

空言天狐様からは、エリクサー（飲むと完全回復&運動能力強化）、フラガラハ、強制看板の呪いを解除する薬品の3点セット

夜神様からは、カナタ特製「おせち料理」（人数分）を貰ったよ！
ありがとう！」

ゼ『今回はまた後でお正月スペシャルを書くからここまでだ！』

マ「では、また後で会おうー！ーでは、よいお年をー！ー！」

瑠「よいお年をー！ー」（トトト）

番外編…お正月!…なんでこんなにもテンションが上がるんだろう? (前書き)

え〜。さきほどはドタバタと…

今回もお正月という事で、番外編です!

では、どうぞ!…!

番外編…お正月!…なんでこんなにもテンションが上がるんだろう?

マ「みなさん!明けましておめでと〜いになります!…」

瑠「おでシ…おめでと〜いになりますノノノノ」

マ「今年もよろしくお願ひします!…」

フィ「よろしくお願ひします!…」

ク「え〜〜また番外?もう飽きたわ〜。はやくお土産に頂いたお節食〜べ〜た〜い〜!!」

ゼ『雰囲氣ぶち壊しだな…(汗)』



マ「さて、挨拶もしたことだし！さっそくゲストでも呼んで、後は
だらだらすごそうか？」

ク『賛成！！』

フィ「いや、ゲスト呼ぶんだったらはまずいでしょ！？」

マ「いいじゃん、別に。俺もう疲れたよ。」「ダラ。」「

フィ「こんの駄作者が。！！！」

瑠「ねえねえ、私お腹すいたよ。」「／／」「きゅ。」「（お腹の音が
なる

フィ「そうね。じゃ、ゲストを呼んでみんなで食べましょうか！」

ク『えつと、夜路様から』魔法少女リリカルなのは　↳ 転生した結
果こうなりました。』から刻徒と畏無様から『魔法少女リリカルな
のは　偽リノ騎士。』から悠。そして月光閃火様&輝刃コンビで
す！』

月「よう。」「

輝「またまたお邪魔してきました。」「

刻「おじゃまします！」

マ「いらっしや〜い」ダラダラ

月「おお、ぐだつてんなあ。」

マ「まあね〜」

瑠「いらっしやい。みさなん、早く座ってください！」座布団をポンポン叩く

刻「イチゴのケーキを持ってきたぞ。」

瑠「ケーキ！？やったあ！！」

マ「おっと忘れてた。お土産コーナー！ユタ様から、鍋セット（かに&肉）、クリスとゼロへの擬人化プログラム

夜神様からは、カナタ特製「おせち料理」（人数分）

畏無様からは、SLB&アルカンシエル再発射！、ロングトゥーム・シユバルツスペシャル（RS2）、高町家特製おせち

紅 幽鹿様からは、皆にお正月用の着物、
仮面ライダー龍騎のゾルダのカードデッキ

黒鍵×10000本

劉には、妖刀（劉君には害はありません）

フィオネには、自分の願望が叶う薬（使用回数一回まで）

瑠璃には、どんなに物を斬っても切れ味が落ちない包丁を頂きました。ありがとうございます！！！！」

フィ「みんなで紅 幽鹿様から頂いた着物にチェンジよ！！」

ゼ「俺達は擬人化プログラムだ。」

ク「これで私もお節が食べられるわね。」

少々お待ちを。○○○○○○○○○○

マ「さ、待たせたな。」

瑠「みてみてえ！どう？似合っ？」

輝・刻「似合ってるよ！！／／／」

瑠「ホント？ありがとう！！」

フィ「瑠璃ちゃん、よかったわね？」

瑠「うん！」

月「フィオネも中々似合ってるぞ。」

フィ「はえ！？わ、私！？」

悠「ああ。似合ってるよ。」

フィ「あ、ありがとう／／／／／」

ク「けっ！なにさ、なにさ。私だってねえ、美人なのよ！！」

悠「おまえ…クリスか？」

ク「そうよ？」

月「たしかに…和服美人だな。」

輝「あ、ああ。」

刻「きれい／＼／＼」

ク「そうでしょ？やっぱり私はこの世で一番美人なのよ！おーほっほっほっほー！！」

月「高笑いは止めないんだな…。」

ゼ「これでじゃべらなければ、美人でいいのにな。」

輝「ゼロも似合ってるな。」

ゼ「ありがとう。」

フィ「さて、みんなで頂くとしよう！」

マ「そうだ、あっっ！！」「…どうした？」

悠「スカイのお土産（笑）忘れてたよ。」

マ「…あ……」

悠「もうそろそろくるぞ!？」

マ「先にこれを終わらせるか!りゅ……つ……?」

瑠「???」「(きよとん

マ「しまったああああああアアああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

悠「どうする?」

マ「仕様がない。マーボー武器庫展開!三分間なりきりセット、天道劉 set!」

悠「その手があったか!」

マ「……あ、あぶなかつた〜」

悠「すまんな。」

フィ「お疲れ〜！お鍋とかの用意はしといたわよ〜！」

マ「さんきゅ〜！」

瑠「おなか……すいたあ……。」

輝「おい！瑠璃がもう限界だ！」

刻「僕も少しお腹すいたよ」

マ「さ、食べようか！！」

全『いったただつきま〜〜す！！！！！！！！！』

ク「さすが高町家特製のおせち！！！とってもおいしいわあ！」

瑠「私はね〜、このもちがおいしいなあ！もちもち〜」

月「瑠璃のほっぺがハムスターみたいになってるな。」

輝「……瑠璃…いいか？」

瑠「ふあい？」

ぶにぶに（瑠璃のほっぺを押す

輝「おお！！！や、やわらかいぞ！！！」

悠「そ、それより、大丈夫なのか？」

マ「ま、ほっとごう。」

月「幸せそうな顔だな。」

輝「ああ。」

瑠「ねえ。作者〜！カニは〜？」

マ「おう！鍋もいいんじゃないか？」

フィ「そうね。はい瑠璃ちゃん。カニさんだよ〜」

瑠「うわあ！！…あむっ！！…おいひ〜い！！」

刻「ホントだ！お肉も柔らかくて！！」

ク「カナタ特製のお節も！！今回は贅沢だわ〜！！」

マ「いや〜、皆様本当にありがとうございますね！！…こんなにも…たく…さん…ううっ。」

フィ「あれれ〜？作者泣いているの〜？」ニヤニヤ

マ「う、うるせえ！こんな駄文でもゲストに来てくれたり、お土産も貰ったり、…まあ、たまに訳が分からないお土産もありますか…」（ボソッ）

瑠「????」

マ「でも！本当にうれしいです！今年も精一杯頑張りますので、どうぞヨロシクです！！」

瑠「わ〜！パチパチ〜！！」

フィ「うん。アンタは精一杯やんなきゃね！それでもダメダメなんだから。」

マ「そ、そうだね！よし！今回は無礼講だ〜〜！！！！！！！」

ク「さあ皆様、こちらを飲んでくださ〜い！」

月「いただきます。」

刻「いただきます。」

悠「うん。うまいな。」

輝「（このにおいは……ま、うまいからいいか。」

ク（計画通り！）（ニヤリ

ゼ「はあ……。また何かやったのか……」

1
時間後

月「クソ～～ッ！劉はどこだ～～！！！」

輝「る～～り～～！！！」

瑠「はみゅ～～、なんだか、体がポカポカすりゅ～～／／／／／」

悠「ハアア。なんだか…」

刻「いい気持ちだ～～！」

マ「……………」（汗）」

ゼ「…おい。クリス？」

ク「あゝら。なにかしら？」

フィ「アンタ…酒…ませたでしょ？（汗）」

ク「だってえ、作者が無礼講だって。」

マ「そういう意味じゃねえ！！！」

ク「あらあら、そうだったの。まったくわからなかったわ〜〜！」

マ「…こいつ……………」

フィ「と、とりあえず、皆様には、瑠璃が作ったお雑煮をお土産に持たせて、転移！！！」

マ「ふう。まったく、このデバイスは…。」

フィ「今回は…」までね。」

ゼ「では…。」

瑠「あとがきに…書いてみよ……です／＼／＼／＼／」

番外編…お正月!…なんでこんなにもテンションが上がるんだろう? (後書き)

マ「番外編でした!」

フィ「今回はあとがきはありません!」

瑠「では、今年もよろしく願いします!」

第31話：なんで言い合いばかりするのだろう？不思議で仕方がない。

(前書

えゝ前回、感謝コーナーを忘れてしまったのでここで。桜川リマ様、夜路様、夜神様、畏無様、ユタ様、月光閃火様、紅 幽鹿様、けーくん様、仮面ライダーディケイド神様、感想ありがとうございます！

今後は忘れないようにします！

第31話：なんで言い合いばかりするのだろう？不思議で仕方がない。

「まったく君達は……」

あの後、アースラに戻るとリンディさんとクロノの説教が待っていた。しかも解放されたのがその一時間後。その間はずっと正座で、ユーノだけ説教中になのはに念話をしたのがバレて空気イスだった……（汗）

「うう、足がびりびりなの〜。」

なのははまだ足が痺れているのか、涙を流しながら、足をさすっている。ユーノは……屍と化した。

「そんなに痺れているのなら、ボクがさすってあげようか？」

「ふえ！？りゅ、劉ちゃんが！？……お、お願いしますなの！／／／／」

なのはに聞くと、なのはは顔を赤くしながらオレに足を向ける。

（こいつは……。足が痺れている時に触られるとどうなるか……しらないのか？）

オレは冗談で言ったつもりなのに、なのはが足を向けてきて少し戸

惑う。

「劉ちゃん、はやくなの……！！／／／／」

なのはが早くさするように促す。

（仕様がないな。）

オレは仕方なく。そう、仕方なく足をさすってあげる。

ちんちん……

アースラ内でなのはの叫び声が響いた。

「うう〜。劉ちゃんひどいの〜!ど、ドSなの〜!」

なのはがこつちをほっぺを膨らませながら見てくる。

(そんな事言ったって〜)

でも、今回はさすがにオレが悪いと思ったから謝ろうとする...と

「でも、劉ちゃんがドSで、私をいじめて楽しんでいるんなら〜。わ、私もがんばってMになるの〜/~/~/~/~/」

と、体をもじもじさせながら言っ。

(うん!謝らなくていいや)

オレはなのはに謝る事をやめる。だって、顔がすんつつつつく
！幸せそうなんだもん。

『ちよつと！劉ちゃんはアンタなんかに渡さないわよ！！！』

さっきまで黙っていたクリスがなのはの言葉を聞いて急に食ってか
かる。

「ど、どうしたんだよ。急に…（汗）」

『劉ちゃんは少し黙っててね。大丈夫！私たちの夫婦の間にこんな
泥棒ネコは入れさせないから！』

クリスがそう言うと、今度は…

「なぐに言っちゃってんのよ！！！私たち夫婦？劉ちゃんの夫はこ
の私よ！」

フィオネが参戦してきた。…ってか、

「…なんでフィオネが夫なんだ？」

オレはフィオネの言った事に疑問をもち、突っ込む。

「だって、劉ちゃんは嫁でも全然問題ないから！！！」

そんなオレにフィオネはなぜか胸を張りながら言ってくる。

『ふんッ！劉ちゃんは嫁なんて嫌だと言ってるわ！劉ちゃん？こん


~~~~~  
30分後~~~~~

「ファイ・ク」』どうして、おいでっちゃんのおよよよ!!!!!!!!  
「!!!」

ファイオネがクリスを持ちながら、オレの部屋に泣き叫びながら入ってくる。

「だって、いつまでたっても終わりそうにないから。」

「ファイ」うううう。」

ク』つめたいわねうう。でも、貴方のそんなところが私は好き。

よ  
』

「はいはい。それより今から時の庭園に向かうぞ。」

そんな二人？を無視してこれからの事を指示する。

『今からか？』

ゼロがオレに聞いてくる。

「そうだ。もしかしたら、もうすぐ終わるかもしれないからね。」

オレはクリスを腕につけて、艦長室に向かった。

「失礼します！」

艦長室のドアをノックして、中に入る。

そこには、リンディさんはもちろん、クロノとエイミーさん、そしてなのはとユーノがいた。

クロノとエイミーさんは分かるけど…

「なぜなのはとユーノも？」

「フェイトちゃんの事を聞かれたの。」

なのはに聞いたところ、さっきフェイトと握手をしていたのを見ていたリンディさんは、フェイトとの関係をなのはに聞いてきたらしい。

「一応気になりましたので。」

（たしかに、自分たちが追っている相手を助けたり、握手したり。そりゃ、気になるわな。）

オレは一人で納得して、早速リンディさんに確認をとる事にする。

「リンディさん。」

「なにかしら？」

「今回の犯人無罪の件…わかっていますよね？」

「ええ。理解しています。」

オレの言葉に頷くリンディさん。

「ではこれから少し、個人行動をとりますので許可をお願いします。」

「

「え、ええいいですけど……どちらへ？」

「劉ちゃんどこに行くの？」

リンディさんとなのはが聞いてくる。場所はもちろん……

「プレシアさんの所。」

な・ユ・リ・ク・エ「」「」「……は？」「」「」「」

「じゃあな！」

「いってきま〜す!!」

五人の驚いている顔を見ながら、オレは時の庭園に転移した。

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

第31話：なんで言い合いばかりするのだろう？不思議で仕方がない。

(後書

マ「え〜。前は感謝コーナーを忘れてしまって、すみませんでした！」

フィ「まったく馬鹿よね〜。」

ゼ「今後はこんな事がないようにしっかりと俺達が管理する。」

ク「という事で、さっそく感謝コーナーよ！」

瑠「紅 幽鹿様、夜神様、Rain様、畏無様、バラランシヤ様、夜路様、ユタ様、月光閃火様、紅様、仮面ライダーディケイド神様、感想ありがとうございます！」

フィ「お土産コーナー！！紅 幽鹿様からは、皆に二日酔いを無くす薬

瑠璃に、おいしいマーボー豆腐の作り方レシピ

夜神様からは、年賀状（カナタのウサギのコスプレ姿が印刷されている）

畏無様からは、フィオネと瑠璃に玩具の剣（マーボーに振ると、リアルな斬激が出る）

バラランシヤ様からは、リオラ特製お節&amp;お雑煮

デバイス擬人化プログラムx2

夜路様からは、【同姓だろうが異性だろうが見境無く襲うようにな



る薬】

ユタ様からは、希望と終末の斬撃×一万!!!+着弾時ユタの周りのみにaegisを展開しほかに被害が出ないように、あと弓矢型最終兵器のAPOLLONを千くらいを頂きました!ありがとうございます!!」

マ「え〜。本日のゲストです!」

フィ「バラランシヤ様の作品『神に何度も殺された青年』から、アリシアちゃんと作者のバラランシヤ様です!!」

ア「明けましておめでとございます!」

バ「いや〜、去年はうちの馬鹿(春人)がご迷惑をかけました。」

マ「や、まったくです。今年もよろしくお願いします!」

フィ「このやり取りはどっかで見たとやうな〜。」

マ「おお!!アリシア!今日も可愛いなあ!!ア〜リ〜シ〜ア〜ちや〜ん!.....!」(アリシアに抱きつこうとする。

フィ「やらせないよ!?スカイ作の玩具の剣!!!」

ザシユウウウウウウウウ!.....!!

バ「わっ!本物の斬激!?!マーボーさん!危な〜い!!!」

マ「心配後無用！マーボー武器庫展開！！白銀のトランク！白銀の剣！！」

シユン！！

フィ「ちっ！斬激を亜空間に持ってかれた。」

バ「な、なんてあとがきだ…。」

ア「また強くなってるわね……。 (汗)」

瑠「あ！アリシアお姉ちゃん！いらっしや〜い！！」 (アリシアに抱きつく)

ア「瑠璃ちゃん！！また来たわよ〜！着物可愛いわね〜！！」

瑠「えへへ／＼あ、ありがとう／＼」

バ「おおおお！！！！生瑠璃ちゃんだああ！！！！」

瑠「ふえ！？」「ビクッ」 (びっくりしてアリシアの後ろに隠れる。

ア「ちょっと！瑠璃ちゃんがびっくりしちゃうじゃない！！」

ゼ『瑠璃。こちらは、バラランシヤ様だ。』

瑠「春お兄ちゃんのか？」 (少し顔をだす。



(手を引く)

バ「へ？お、おう。」

マ「ま、こいつは食べ物の事になると、大抵の事はは忘れるから。

(汗)

バ「そ、そうなんだ。」(あゝ、ちっちゃい手だな。／／／

フィ「クリスとゼロも、擬人化プログラムを……ってもう使ってるし

……。」

ク「もっちろん！」

ゼ「ありがたく使わせてもらった。」

マ「では、いただきます……！」

全『いっただただきま〜す！！！！！』

マ『うん！うまいな〜。』

フィ『リオラ料理上手ね〜！』

瑠『私ね〜、お餅が大好きなんだ〜！』

ア『ふふっ。そうなんだ〜。』

バ『おいしいもんな〜。』（瑠璃のホッペが、は、ハムスターの頬袋になってる？）

ク『ま、合格点ね。』

ゼ『毎度のことながら、お前は何様なんだ？（汗）』

瑠『〜』。

マ「おまえ…いっぱい食ったなあ。」

瑠「だっておいしいんだもん／＼／＼／」

ア「ふう。私も少し食べ過ぎちゃったわ〜。」

バ「ふと「何か言った?」…何も言ってますん。」

フィ「はあ、お正月はこんなおいしい物が食べれて幸せね〜。」

ゼ「そうだな。」

バ「さてと、そろそろ帰るか。」

ア「え〜もっ?」

バ「ああ。また遊びに来させてもらおう。」

マ「こっちはいつでもいいからな。」

瑠「また、遊びに来てね!その…バラランシヤ様も…ね?／＼／  
／」

バ「も、ももちろん!／＼／＼／＼／」(す、少しは馴れて  
くれたかな?)

ク「あとこれ、お土産よ。持ってきたさい。」

ア「わあ!フルーツポンチだ!」

瑠「さつき作ったの。みんなで食べてね。」

マ「リオラにも『ちそうさま』と言っといてくれ。」

ア「わかったわ。ありがとね。」「なでなで

瑠「う、うん。／＼／＼／」

バ「お、俺もいいかな？」

瑠「い、いいよ／＼／」

バ「では…」「なでなで

瑠「ふみゆ……はふう／＼／＼／＼／＼／」

バ「おおお！！！！／＼／＼／＼／」

ゼ「瑠璃も馴れてきたな。」

ア「さ、帰るわよ!!」

バ「じゃ、じゃね!!」

瑠「今度遊びに行かせてね?」

ア「待ってるわ／＼!!!!」

マ「ふう。今回はここまでだな。」

フィ「前回の感想やメッセで私たちの着物姿が見たいとのコメントが多かったので、ほしい方には配布しちゃいます!!」

ク「感想もどんどんちょうだい!」

ゼ「無印ももう少しで終わるからな。」

マ「では、これにて!!!!」



第32話：終わりが見えた物語。…もつそろそろだな。（前書き）

では、はじまります！

第32話：終わりが見えた物語。…もうそろそろだな。

プレシア side

「ただいま、母さん。」

今、私の前にはジュエルシードを持ってきたフェイトがいる。

「そ、それで…あの……」

フェイトは【娘】。でも私の余命はそこまで残されてない。この前来た少年…天道劉に諭され、最初はフェイトの事を愛そうと考えていた。でも、すぐに現実に戻される。自分の体のこと…。もうフェイトの事を愛せなくなった体の事を……。私がこの娘の事を愛しても、私はすぐにいなくなる存在。だったら、この娘の為に最後まで悪を演じきる事に決めた。そうすれば、私がいなくなっても……

「……さん、母さん？」

「…っ！！な、なによ？」

「これ…ジュエルシードです。」

フェイトはそう言うと、三つのジュエルシードを渡してきた。

(三つもだなんて…)

私はさっきの事を映像で見ていたからわかる。この娘は…フェイトはボロボロになりながらも、こんな私の為によく頑張ってくれてい

た。…こんな私なんかの…ために…。

…でも…

「たった三つ？」

私はデバイスを鞭にして、床を思いっきり叩く。

「フェイト、私はもっとジュエルシールドが必要なのよ！！なぜ分かってくれないの！？」

私はフェイトの近くの床を叩く。

(そうよ。何を戸惑っているの？私は…私はこの娘この為に悪を演じきると決めたじゃない。だったら、この娘こを…フェイトを叩かなくて…どうするのよッ！！！)

私は、痛みに備えて目を瞑っているフェイトに鞭を振るおうとした  
…

カラン

したけど……

私にはこれ以上無理だった…。

私はフェイトを抱きしめる。

（この想いは気づかされた想い……………だけど…今はフェイトの事が  
こんなにも愛しい。

それは…フェイトが私の【娘】だから。

こんなにも愛しいこの娘この事を人形扱いしていたなんて…）

フェイトは痛みを備えて目を瞑っていたところに抱きつかれたから、  
オロオロしている。

（余命が残りわずかになって、やっと気づかされるなんて…気づく  
なんて…………）

「あの少年の言うとおりね…………。私はいつも…気づくのが…………遅す  
ぎる…。」

私は涙を流す。

「母さん？」

そんな私にフェイトは困ったように私の名前を呼ぶ。

「いいえ。なんでもないわ。私の【娘】、フェイト…よくがんばったわね。」

「……え…?」

フェイトは私が何を言ったのか分からなかったのか、目を丸くしている。

(当然ね……)

私はさらにフェイトの事を強く抱きしめて…

「ジュエルシードを三つもなんて…よくがんばったわ。私の可愛いフェイト。」

「母…さん……グスッ…」

「フェイト。」

「母さん…うつ…うつわあああああああ…ヒック…グスッ…わああああああああん!!!!!!」

私の言葉を理解したフェイトは涙を流しながら、私の名前を何度も呼ぶ。

「今までつらかったわね。ごめんなさいね。」

泣いてるフェイトの頭をやさしく撫でる。

「わ、わたしは…グスッ…わたしは…ただ、母さんの為に…」

「うん。わかってるわ……わかってるわ……フェイト。」

私はフェイトをさらに抱きしめた。

外で待っていたアルフがフェイトの泣き声を聞いて部屋に入ってきて、目を丸くしている。

そして…その隣には、彼がいた。

s i d e o u t

劉 side

「転移完了!だな。」

「で、どうするの?」

時の庭園に転移してプレシアの元に向かって歩いていると、フィオネが早速聞いてくる。

「今回は最終テストだな。」

「テスト?」

フィオネがオレの言葉の意味を理解できないのか、?マークを浮かべる。

「ああ。たぶんプレシアさんは悪を演じきるって言ってたけど、それは出来ないと思うんだ。」

「うんうん。」

オレの言葉に頷くフィオネ。

「で、もしプレシアさんがフェイトに対して自分の【娘】として接したら合格。」

「じゃあ、接してなかったら不合格ってこと？」

「そういうこと！まあ不合格はないと思うよ。」

オレは自信たっぷり�に答えてみせる。

『ちなみに、合格したらどうするの？』

今度はクリスが聞いてくる。

「うん。とりあえず……プレシアさんの治療とアリシアの蘇生かな。」

オレは今、頭の中にあるプランを教える。

『できるのか？』

ゼロも気になったのか聞いてくる。

「できるよ。でも、ただ治して蘇生するだけじゃダメなんだ。」

「プレシアさんがフェイトちゃんの事を自分の【娘】として認識した上でじゃないと意味がない……でしょ？」

オレが言うつおうとした事をフィオネが先に言ってきてオレに抱きつく。



「…って、なんでそこで抱きつく？」

「ううん。さっすが【私】の劉ちゃんだなあ、っと思ってさあ。」

『まうた何言ってるのよ、この子は？劉ちゃんは【私】のよ！！！』

(はあ…またかよ…)

ホント、一日に何回ケンカすればいいんだ？

『劉。その魔法でおまえの両親を蘇生させることはできないのか？』

ゼロがオレに聞くと、ついさっきまでケンカしていた二人も静かになる。

「……無理だな。今回はたまたま、アリシアの体がきれいに保存してあったからできるんだ。……母さんや父さんの体は…もうないだろうっ。」

『『『『………』』』』

オレの言葉で無言になってしまっデバイス陣。

「ま、まあ、あの時にこの魔法が使えるば、とは思っけど…仕様が  
ないよね。それに、母さんや父さんは今もオレの心に…っってな。」  
(ニッコ)

オレはそんなデバイス陣に笑って見せる。

「そ、そうよね！劉ちゃんのご両親は私たちの事を見守ってくれているわよ！／＼／＼」

『そうよ、そうよ！！まったく、何言ってるのよ！この馬鹿デバイスは！？／＼／＼』

『ふっ、まったくもってその通りだったな。……でも、クリスにだけは馬鹿デバイスとは言われたくないな。』

『なんですってえええ！？』

急にフィオネが顔を赤くしたと思ったら、クリスとゼロがまた言い合いを始める。

（なんだかんだ言っても、言い合いはやめないんだな……）

オレは半分諦めつつ、歩いていく。

しばらく歩いていると、あの大きなドアの前でアルフが座っていた。

「よう！アルフ！」

「な！？りゅ、劉！？どうしてここに！？」

いきなり現れたオレに驚くアルフ。

「まあ、最終テストのため…かな？」

「…へ？て、テスト…？」

アルフがオレに聞き返すと同時に中からフェイトの泣き声が聞こえてきた。

「フェイト！？」

フェイトの泣き声を聞いて、慌てるアルフだが…

「ふふっ、合格だな。」

オレはフェイトの泣き声を聞いて確信した。

「なにがだい？」

「開けてみなよ。」

フィオネに促されて恐る恐るドアを開けるアルフ。

「ど、どうなってんだい？」

そこには、フェイトとプレシアさんが抱き合いながら泣いていた。

「上出来だ。」

しばらく見ていると、プレシアさんがこっちに気づく。

「あなたは……」

「……グズツ……劉？」

オレは二人に近づいて、プレシアさんの前に立つ。

「……プレシアさん。」

「劉……私には無理だった……最後まで演じきるなんて……無理だった

わ…………。」

オレにも泣きながら言ってくるプレシアさん。

「そうですね。…………では、もう一度聞かせてもらいます。フェイトは貴方の何ですか？」

オレの質問に…………

「フェイトは私の大切な【娘】よ!!」

プレシアさんはフェイトの前で言い切った。

「よく言った、プレシアさん!!」

「え?」

「今から貴方の治療、そして………アリシアの蘇生を行う!」

「で、できるのッ!?!?」

プレシアさんが声を裏返ししながら聞いてくる。

「できる!…が、その前にプレシアさん。フェイトとアルフにアリシアの説明を。」

オレはアリシアを知らない二人に説明するように言う。

「そうね……。フェイト、アルフ、今から私がジュエルシードを欲しがっていた理由を話すわね。」

「…え?」

「ついでにホワイトとアルファ、プレミアの口から真実が語られた。」

第32話：終わりが見えた物語。…もうそろそろだな。（後書き）

マ「はあ〜！やっと終わった〜！〜！」

瑠「お疲れ様！」

フィ「さ、感謝コーナーよ！」

ゼ「作者月詠様、畏無様、夜神様、バラランシヤ様、紅様、紅幽鹿様、ユタ様、仮面ライダーディケイド神様、龍賀様、感想ありがとうございました〜！」

ク「続いてお土産コーナーよ！」

フィ「作者月詠様からは、『雷の暴風』を封じ込めた弾丸と魔導式デザートイーグル（劉用カスタム）  
アスラクライン（TV版）の黒金（PCに漢字出ない…）の人間サイズの鎧。（服の様に軽い）  
私自信作のハンバーグカレー（半熟卵付き）、人数分  
同じく自信作のオレンジマドレーヌ、瑠璃用

畏無様からは、きなこ餅、玩具の剣（全作者にのみ斬激が出る）

夜神様からは、こたつセット（美味しい蜜柑もセット）

バラランシヤ様からは、  
死滅の黒薔薇×3発

ゲイ・バルカロール

紅 幽鹿様からは、

世界創世の剣『ワールド・クリエイト・ソード』レプリカ（レプリ



力の為本物の四分の一の威力、ちなみに、天地乖離す開闢の星『エヌマ・エリツシュ』と同じ威力）  
劉に、アーチャーの『赤原礼装』

瑠璃に、セイバーのドレスの鎧（普通の服と同じ重さです）  
ファイオネに、遠坂凜の服

ユタ様からは、ルシフェリオン・ブレイカーを干発

龍賀様からは、聖盾・ガブリエル、エーテライト、蒼の魔道書（模  
造品）

をいただきました！ありがとうございます！！」

マ「今回はダブルゲスト！ユタ様の作品『異世界を渡る』より作者のユタ様とニンフ。仮面ライダーディケイド神様の作品『魔法少女リリカルなのは チート少年の瞳は何を見る』から作者の仮面ライダーディケイド神様と黒なのはです！！」

ユ「どうも〜！」

ニ「瑠璃ちゃん〜ん！！」

瑠「あっ！ニンフお姉ちゃん！会いたかったよ〜！！」（ニンフに抱きつく。）

ニ「る、瑠璃ちゃんから！？し、しししかも着物！か…可愛い／＼」

黒「こんにちわなの。」

仮「今回は…」





ミッドリフト「。さ。か。る。て。い。く。ま」



ぜ『それはそれは、きれいな笑顔だったと言っ。』











フィ「惨劇ね。」

瑠「怖いよー！……！」

ニ「。」「。」

マ・ユ・仮・黒「……………」

フィ「おわったわね。」

ニ「ある意味ね。」

ゼ『今回はこのままお別れだ。』

ク『感想いっぱいちょうだい!』

瑠「あと、皆様に今回の怖いビデオあげちゃいます。」

ニ「ま、欲しい人は言ってね!」

フィ「では、また次回〜！(汗)」

マ「今回は俺達が死んだだけじゃん……」

第33話：予想外の出来事……（前書き）

今回【も】gggdgdな展開になりました、33話です！

それでもいいという方だけどうぞ！  
では、始まりま〜す！！

第33話：予想外の出来事……

プレシアさんが説明し終わると、フェイトとアルフはショックを受けていた。

「本当にごめんなさい。」

プレシアさんが謝るが耳に入っていないのか、反応がない。フェイトはずっと顔を俯かせている。

「けどなフェイト、それは前までの事だ。今はプレシアさんは心からおまえの事を愛しているし、アリシアについては自分に姉が出来ると思えばいいよ。」

オレはフェイトの頭をやさしく撫でる。

「で、でも……」

「ん？」

やっとフェイトが反応して顔を上げる。

「でも……わた、私は……っ、つくりものだし……」

（やっぱり、その事を気にしていたか。）

顔を上げたフェイトは泣いていた。

「それはちがうぞ、フェイト」

オレはなるべく優しく、フェイトを抱きしめる。

「どんな生まれでもフェイトはフェイトなんだ。今まで【オレ】達と過ごしてきたのは、作り物でもないし、アリシアでもない。フェイト・テストロッサっていう一人の人間なんだ。」

「……劉」

「ここにいる皆、おまえに出会えて、うれしいと思ってるよ。生まれてきてくれてありがとう。」

「劉……私も……ありがとう。」

フェイトはオレの中でそう小さくつぶやくと、逆に強く抱きしめ返してきた。



「では、始めるとするか。まずプレシアさん、前に。」

「ええ。」

オレの言つとおりに一歩前に出るプレシアさん。そんなプレシアさんに手をかざす。

「慈愛に満ちたる天の光よ、それは天使の息吹なり。全ての者を癒せ！エンジェル・プレス天光治療！」

詠唱を終え、プレシアさんが光に包まれる。

「わっ！まぶし！」

アルフがフェイトの後ろに隠れる。一瞬、アルフが犬に見えたのは内緒だ。…ってか、アルフは狼だから間違っ  
てないか？人型だとか

やこしいな。

「何考えてるの…劉ちゃん……。」

フィオネがこつちをジト目で見てくる。

「だから…心を読むな…っと、終わったみたいだな。」

プレシアさんを包んでいた光は徐々に消えていった。

「どうです？プレシアさん。」

「え、ええ。たしかに体は軽くなってるわね…。これで本当に治ったのかしら？」

プレシアさんが驚きながら自分の体を触っている。

その時………

「軽くなっただって…ただ太ってたんじゃない…」



「ひい!!」

アルフがいた所に巨大な雷が落ちる。

「今…なんて言ったかしら？」

プレシアさんはデバイスを鞭にして避けたアルフの元に歩いていく。

「な、なななんでもないです！」

アルフはすっかり怯えてしまっている。

「ま、まあまあこれで治っているって分かったってことで」

フィオネがプレシアさんを止めにかかる。

「そうね。たしかに魔法を使っても、体に反動はないわ。ありがとう、劉。」

プレシアさんがオレの頭を撫でてくる。

「べ、別にたいした事はしてないですよ／＼／＼／＼…さ、次はアリシアだ。」

オレはフェイトに服を、プレシアさんにタオルを持ってこさせる。  
プレシアさんはアリシアの体を拭き、フェイトが持ってきた服を着  
させる。

オレ？ちゃんと後ろ向いてたよ？つか、フィオネに強制的に向か  
されていた。

「よし…これでいいわね。劉、お願い。」

プレシアさんがオレにOKの返事をだす。

「了解。契約に従い、我が呼びかけに答えよ、再生の象徴よ！！」

オレの周りに触っても熱くない赤と金色の炎と魔方陣が広がり始め  
る。

「さあ現れる！蘇生の意志よ！！不死鳥フェニックス！！！！」

周りにあつた炎は一つに集まり、大きな鳥になる。

「な、なんなの？この魔法は！？」

プレシアさんが大きな炎の鳥を見て驚いている。

《私を呼び出したのは…誰かしら？》

フェニックス  
不死鳥から念話のようなものが送られてくる。

「えっと…ボクです。」

オレはおずおずと手を上げる。

《へえ。君が？私を？》

「はい。天道劉です。」

オレが自己紹介すると、不死鳥フェニックスは急に人型になってオレに抱きついてきた。

「わわっ!?!」

オレはいきなりすることに、何がなんだか分からなくなる。

「貴方が私のご主人？かつわいいわあ／＼／＼／＼／」

「ふえ、フェニックス!?!ちょ、ちよっと!?!」

オレはなんとかフェニックスを引き剥がす事に成功。

「ちえ／＼。」

逆にフェニックスは不機嫌になる。

「あ、あのさ「ちよっと!何してくれてんのよ!?!」……………」

オレがフェニックスに用件を言おうとすると、フィオネがフェニックスにくっついてかかる。

『ホントよね／＼。アンタ…新入りの分際で何いきなりかましてくれちゃってんのよ!?!?』











「お〜い！プレシアさん？」

オレは意識を失ったプレシアさんの頬をペチペチと叩く。

（少し強く叩きすぎたかな？）

「お〜い！」

「……うっ……あれ？私は……」

しばらく叩いていると、プレシアさんが気がついた。

「私は…アリシアを……っ！…そうだわ！…アリシアは！？ねえ！  
アリシアは！？」

意識が完璧に覚醒したのか、プレシアさんが急にオレに聞いた。だす。

「お、落ち着いてください！…」

オレは肩をつかまれ、揺さぶられながら、プレシアさんを止める。

「う、後ろを…向いて…。」

目を回しながら、後ろを向くように言い、それに従って後ろを向く  
プレシアさん。

そこには

楽しそうに、フェイトとアルフ、フィオネと話すアリシアがいた。

「あ、ああアリシア………ッ！……！」

プレシアさんはアリシアの姿を確認すると、一目散に抱きついた。

「えー！？ちょっ！お、お母さん！？」

何がなんだか分からずに、困惑するアリシア。

「よかった…よかったわぁ！！！！」

そのまま、アリシアを抱きしめながら泣き出すプレシアさん

30分後……。。。。。

今はだいぶ落ち着いていたプレシアさん。すごいよ、この人。本当に30分泣きっぱ。止めなきゃ絶対にまだ泣いていたし…（汗

（ま、それだけ大切な存在だったんだろう…）

「ところでアリシア。フェイトとはもう？」

「うん！私の妹よ！！」

プレシアさんが聞くと、アリシアは胸を張りながら言った。

「そう、紹介はすんだのね。じゃあ劉は？」

「まだだよ。だれ？」

「貴方を救ってくれた人よ。」

「ボクだよ。天道劉です。よろしく。」

プレシアさんに紹介され、握手しようと手をだすが、

「……………」

反応がない。

「あ、あの……」

「……………いい」

「え？」

しばらく反応がなかったアリシアが何か呟くが、何を言ってるか聞こえなかった。

「貴方が…わたしを…？」

「あ、ああ。そうだけど…」

すると、アリシアがオレに近づいて顔を近づける。

「っていうことは、貴方は私の…王子様なのね／／／／／」

「え！？」

アリシアが変なことを言い始めた。

「顔も整っていて、カッコ可愛いし、……………私の…理想の…人／／／／／」

「ぶ、プレシアさん！？」

オレはプレシアさんに助けを求めるが、

「娘が二人できたと思ったら、もう巢立つのね……………。フェイトとアリシアを大事にしてね！」

と、一人また泣き始め、アルフが肩をポンポン叩いている。

「ささッ、今夜は寝かせませんよ、劉君！／／／／／」

アリシアがオレの腕を引っ張りながら、言ってくる。

「おまえはいつたい何歳だよ！？」

オレが軽くため息をつくと…





『set up』

クリスの言葉に頷きながら、ゼロをセットアップし、

「トレスオン 投影開始!! アイギス 絶対守護の盾!!!!」

すぐに絶対守護アイギスの盾を投影して、その何かを防ぐ。

「これは……電撃?」

オレは電撃がとんできた方を見る。

「い、こいつは……」

目の前にはあの最終話に出てくる、ロボが約数万体はいた。

「ぶ、プレシアさん!? これは!?!」

「ふふん! これは私が作ったものよ!」

プレシアさんは誇らしげに言うてる。

「じゃあ、なんで電撃をとばしてくるんですか!?!」

「ん〜。わからないわ……。それに…操れない!?!」

プレシアさんはここで操れないのがわかったのか、急に焦りだす。

(…ってことは、暴走か……。なんでこんな事に…)

オレは目の前のロボ達を見る。

『劉ちゃん！こいつら全員SS以上よ！！』

「うそ！？Aランク設定のはずよ！？」

(どうしたらAがSSに！?)

もう何がなんだか分からないが、とにかくこいつらを一体も残さず  
に潰さない。

「お母さん。」

「大丈夫よ。アリシア。」

ロボ達に怯えるアリシア。

「劉！今度は氷のつぶだ！！」

フェイトの声で気づき、いそいで絶対守護アイギスの盾で防ぐ。

(くっ！キリがないぞ。)

オレがなんとか無数の氷の粒を防いでいると………



「そこまでだ!!!」

「…っ!?!」

オレ達を護るように突如、ガツシュの『マ・セシルド』が展開される。

「そこのおまえら、あぶなかつたな。」

そして目の前に、どこから入ってきたのか、ガツシュのマントを着ている男の子が現れた。



第33話：予想外の出来事……（後書き）

マ「どうしてこうなった?!」

ア「え〜、今回はここに瑠璃もフィオネもゼロもクリスもいません。

マ「皆バラランシヤ様の所に行っています。」

ア「きつとこの作者に愛想つかせて、出て行ったのね。はい!これにて』どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』は完結です!?!?!」

マ「はい。皆様のおかげで無事完結する事ができました。」

ア「そうよね〜。本当に書き上げるとは思わなかったわ〜。」

マ「俺もそう思う。本当に、皆様には感謝です!?!」

ア「では、次作も投稿予定なのでそちらの方もよろしくです!」

マ「ちなみに次作はAsの予定です!だいたいこの続きからです。

ア「ってか、ここからじゃないとわからないでしょ?」

マ「それもそうだ。投稿予定は半年後になります。」

ア「それまでは忘れないでね!」

「マ」ではでは、また次回作にお会いしましょう……！」











ア「お土産コーナー！ユタ様からは、五聖竜、パワーツール、セイバアー・スター、セイバアー・デモン、シューティング・スター、スカーレット・ノヴァ、  
所用限界ぎりぎりまで魔力を溜めた宝具百個、フォトンランサー・ファランクスシフト（1073×10）を二回、  
プラズマランサー・ファランクスシフト（1073×100）を二回、ビックバン・ブレイカーを百回、  
スター・ライト・ブレイカー七回、ヴィドフィル・ブレイカーを二回、ミラルーツに十分間追いかけられた、ゼロ・ブレイカー×千以上、

希望と終末が交差する斬撃一万以上、ハンドレット・ゼロ・ブレイカー、

SLB×10011000&アルカンシエル×10005000更に、ラグナロク ×10000000、  
シューティング・ソニック×1000発、アサルト・ソニック・バイン×1000発、  
シューティング・プラスター・ソニック1000発、アブソリュート・パワーフォース×1000発、  
エクストリーム・クリムゾン・フォース×1000発、アルティメット・パワーフォース×1000発、  
バーニング・ソウル×1000発、インフィニティ・ブレイカーを1000発、アンノウン・ブレイカーを1000発、  
シャドウ・ブレイカーを1000発（影の中から発射）、さらにブルーアイズの滅びのバーストトリームを1000発

龍賀様からは、エレクシール×500個、アワーグラス×250個、ライフボトル×650個

バラランシャ様からは、  
神殺しの魔槍<sup>ロンギヌス</sup>×1





第34話：共闘？ムリムリ。だって、こいつ……エロトだぜ？（前書き）

次回あたりに無印終わるかもです！



第34話：共闘？ムリムリ。だって、こいつ……エロトだぜ？

前回のあらすじ！

目の前にガツシユのマントを着た男の子が降ってきた。

つか見た目が……

~~~~~

(だっせ~~~~)

第一印象が……ださい。

周りを見ても、みんな顔が微妙だ……。

(こんなヤツ原作にはいなかったよな……。だ、だよな!?)

普通にガツシユのマントって時点で原作にはいないことは分かるの
だが、この時のオレの頭は思った以上に混乱していたらしい。

「き、君は？」

オレは顔を引きつらせながら、その男の子に聞く。

「俺かい？」

男の子は一タマントを翻しながら後ろにいるオレ達の方を向く。

「俺の名前は木下タカト。君達の……いや、フェイト、アリシア、プレシアさん、アルフ。君達のピンチに助けに来るヒーローと思ってくれ。」

木下はそう言いながら、フェイトとアリシアの手をとり、その手の甲にキスしようとする。

「い、いや……ッ！……！」

……が、二人はその手を振り解き、オレの後ろに隠れる。プレシアさんもアルフも啞然としてその光景を見ているしかないらしい。つか、固まってる。

「なんだよ。俺から逃げるなよ。」

ここで容姿の説明をしよう。

身長はオレもよりも高い。オレより高い時点でたぶん、なのはよりも高いな。体系はそこまでガツシリとはしていない。金髪で……そうだな……顔がFORTUNE ARTERIALの伊織の顔に似てるな。普通にこの顔ならカッコいいはずなのに、なぜだろう？こいつの場合は……気持ち悪く見える。……いや……なんでだろう？で、で、手には杖型のデバイスがある。

「ちえっ、まあいいや。さっきも言ったとおり、ここは俺にまかせ

な。」

木下はそう言うと、ロボ達の方を向く。

(こいつ一人だと心配だな。)

「ボクもここに残るよ。」

オレもフェイト達の前に出る。

「「「「りゅ、劉^君!?!?!」」」」

四人がオレの名前を呼ぶ。

「木下…だっけ？ボクの名前は天道劉。こいつらはフィオネにクリス、ゼロだ。」

「天道ね〜。ま、よろしくな。」

木下はオレに握手しようと手を差し出してくる。

(こいつ…何考えているんだ?)

オレは握手した時に、レベル7のサイコメトリーを使う。

「う、うおえ!?!?!」

「な、なにこれ!？」

オレとフィオネはこいつの頭の中を覗いて吐きそうになる。

「?どうしたんだ?」

木下が不思議そうに聞いてくる。

「な、なんでもない…。」

なんつーか、こいつの頭の中は………ピンク色一色だったよ。しかも相手が、主要キャラのみならず、桃子さん、美由希さん、忍さんなどの言っちゃ悪いが、サブキャラやテレビで一瞬映ったようなモブまでだ。こいつはこれ等のキャラ達でハーレムを創ろうとしているらしい……。

「だ、大丈夫かい?」

アルフもオレが気になったのか聞いてくる。

「だ、大丈夫だよ。それより今から、オレ達以外をアースラに送るから。フィオネ!」

「了解!!向こうには一応話はしてあるから、心配しないでね!」

フィオネはそう言いながらも、転移の準備に入る。

「え!?ちよっ!りゅ…。」

フェイトが何か言いかけた瞬間に転移の準備が整ったのか、テスト

ロツサー家はアースラに転移した。

《リンディさん!》

《劉ちゃん!?今、プレシア・テストロツサ達が転移してきたんだけど?》

オレはいそいでリンディに念話を繋ぐと、もう向こうにフェイト達は着いたみたいだ。

《ボクが送ったんだ。後の事はわかるよね?》

《わ、わかりますが…あなた》

オレはリンディさんの返事を聞くとすぐに念話を切る。

「……………」

「…なんだよ?」

木下がこっちをジーツと見てきていた。

「おまえ…トリッパー転生者だろ?」

「…おまえこそ。」

やっぱりこいつもオレと同じだった。

「天道つていったよな。おまえ…女か?」

「どこがだ！？オレは男だぞ！？」

「ふん、男かよ。見た目がいいから俺の嫁にしてやろうとしたのによ。まあ、いいや。俺の邪魔だけはしないでくれよ。」

木下はそれだけ言うと、『マ・セシルド』を解いた。

「好きにしてろ。フィオネ！」

「OK!！」

「「ユニゾン・イン!！」」

「クリス起動！サードモード!！」

『おうよう！サードモード!！」』

クリスの言葉に関しては今回はスルーだ。

『ひびいッ!！」』

「いくぞ!！」

オレは敵がわんさかいる中に飛び込んでいった。

s i d e o u t

タカト s i d e

俺は…死んだ…。万引きした帰りにトラックに轢かれて。で、目の前に神がいて、その神は転生してくれると言った。本当は俺みたいなヤツはダメらしいんだが、轢かれた原因がどうやらこの神のせいらしい。場所は、生前好きだった『リリカルなのは』だ。

魔力はチートにしてもらい、ガツシュにでてくる全能力を使えるようにしてもらった。

これで、俺は無敵だ。みんなメロメロになるはず……だった。そんな期待をしながら、この世界に来てみたらどうだ？原作とかなり違

うじゃないか！！

アリシアは生き返っているし、フェイトもプレシアと仲が良さそうだし…。

なにより、俺のハーレム計画の邪魔になりそうなほかの転生者がいやがる。最初は女だと思ったから、嫁にしてやって色々ヤロウかと思っただが、男だしよ〜。

ま、こんなザコはほっとこう。ここで俺が活躍すれば、なのはやフ、エイト、アリシア、リンデイ、エイミィ、プレシア、アルフにあとこいつのユニゾンデバイスもいいな。ふひひっ！フィオネだっけかあ？それに女性局員のヤツら……。いいね。みなぎってきたよ！！俺はストレージデバイスの『ゼオン』を構えた。

s i d e o u t

劉 side

《りゅ、劉ちゃん！寒気が！》

「ユニゾンしているからオレにも分かる。…フィオネは大丈夫か？」
ユニゾンしているフィオネがオレに訴えてくる。

《うん。なんとか今は…》

「にしても、数が多すぎるな…。」

あのエロトリッパを横目で見る。

（あのエロトリッパ…中々やるなあ。能力はガツシュだけか？）

以外とエロトのヤツはロボを倒している。

エロトリッパの略

（これなら放っておいても平気かな。）

「クリス！ファーストモード！！」

『あいよ〜ッ！ファーストはいりましたああああ！！！！！！！！！！』

「……………」

クリスの訳分からん掛け声とともに形状が、槍から剣になっていく。

「ゼロ、魔力変換【炎】！」

『魔力変換【炎】！！』

《「全てを燃やし尽くせ！！！」》

『ブレイジング・ボルケーノ！！』

襲ってくるロボたちを溶かしていく。

「まだまだあ！！！」

そしてその後からも、わんさか出てくるロボを斬っていく。

《「古より伝わりし、浄化の炎よ！落ちよ！」》

オレの周りに赤色の魔方陣が広がる。

《「エンシェントノヴァ！！！」》

そして上空にもいくつもの魔方阵がでてきて、そこからたくさん
の炎がロボに向かって落ちる。その時…、

「ガンズザケル!!」

「うわっ!?!」

エロトのガンズザケルがこっちに一つとんできて、オレは間髪
を避ける。

「あつぶないなあ!!」

「悪いな〜WWW」

(うっぎ。。)

エロトはオレに謝る?とロボ達にキガノゾニスを放つ。

(ちっ!だったらこっちもだ!)

「ゼロ!魔力変換【雷】!!」

『…いいのか?』

《かまわない!私が許す!!》

「おらああ!!!シン・ベルワン・バオウ・ザケルガアア!!!!!!」
「……………」

「ふう…じめんね?」(トコト)

オレはエロトに向かって自分にできる一番のスマイルを向ける。

「ふっざけるなあああ!?!?!?!」

瓦礫の中からエロトが叫びながらでてくる。

「なんでだよ!?!こっちは【ガンズ】なのに、なんでそっちは【シン】なんだよ!?!」

「だから、あつちのを倒そうと思ったんだけど、おまえがいてさ。」

《だいたい、アンタが先にやってきたんじゃない!?!!》

『そつよそつよ!?!?!』

「うるせえ!?!規模が違つだろ!?!」

エロトは叫ぶと同時に…

「ディオエムルゼモルク!!」

腕に炎を纏わせてオレに向かってくる。だが、

「今はそれどころじゃないだろ!？」

ちよっとした仕返しのもりなのに、向こうが本気?になってしまったようだ。

《劉ちゃん!いくわよ!!!》

(フィオネ、おまえもか……)

「おちつけ、フィオネ。ゼロ!」

『コード発動!!!』

瞬間、周りの時間が止まる。

「さてと、あいつはどうしよう。」

まだ周りにはロボもわんさかいるし……。

「はあ。ホントどうしよう。」

『っ!!劉ちゃん!!!!』

オレがため息をつくとき、ちょうどクリスがオレを呼ぶ。

「どっしたんだ？」

『違う場所からこいつらとは違う魔力反応が！』

「なんだって？」

(誰だ？まだこんな転生者がいるのか？)

オレは コードを解く。

「らあああああああああ！！！！」

エロトがこつちにやってくるのを軽く避ける、すると、エロトは瓦礫に突っ込んでいった。

『あいつは何がやりたいんだ？』

ゼロの言う事はもっともだ。

「木下！オレは少しの間別の場所に行く！」

オレはいまだに瓦礫に突っ込んだままのエロトに叫ぶ。

「つぷはあーは！？なんでだよ！？ふっ…まあい。こっちは俺にま
k「安心しろ！少し消していく！」…なに？」

「ゼロ！魔力変換【氷結】！」

『まかせろ！【氷結】！！！！』

オレはクリスで空を斬る。それと同時に青い魔方陣が広がる。

《「大気に満ちる空気よ！凍れ、氷の刃となりて、切り刻め！！！」
》

「な、なにしてんだ！？」

エロトが何か呟く。

《「セレスティアル・ブリザード！！！！！」
》

かまいたちがロボに向かってとび、着弾と同時に凍って砕け散って
く。

「うわぁ！？」

エロトの近くのロボも砕けていく。

「これでいいだろう。」

今のでロボ達は何千体か消えていた。

「じゃ、少しの間頼むぞ！」

オレは呆気にとられているエロトを残して、反応があった場所に転
移した。

「ここか？」

『そのはずよ。』

転移した場所には転生者はおろか、誰もいなかった。

(どこかに隠れているのか?)

周りの気配をさぐるも、何も感じない。

『何もないじゃないか。』

『なによ！本当に感じたんだってば！！……あ、感じたって、そっちじゃないからね？劉ちゃん』

「知らないよ……」

もうクリスもガタがきてるのかも知れない。……というか、今回のオレって偉くない？クリスに何にも言っていないよね？

《うーん。あつ！その辺から！！》

と、その時にフィオネが何かを見つけたらしいが……

「……っ！……た、たしかに……ここから……って、これはッ！？」

近くまで行くと、オレにも反応がわかった。しかも……、

《どうしたの？劉ちゃん》

フィオネがオレに聞く。

「た、たぶん……おい。おまえ……リニス……か？」

オレは感じた事を口に出す。

「私が……わかるのですか？」

第34話：共闘？ムリムリ。だって、いつ……エロッたぜ？（後書き）

マ「ふう。もうすぐ無印終わるど〜ッ！〜！」

瑠「ふみゆ…眠い／／／／」

ク・ファイ「劉ちゃんの写真いいわあ／／／／／」

ゼ「つ、次こそは…負けん！〜！」

ア「はあ……いい出会い…ないかしら？」

マ「……はい。これにて終了です。」

全「うわあああ！〜！〜！ごめんなさ〜い！〜！〜！」

マ「はあ。では、感謝コーナー！」

フィ「え、ユタ様、けーくん様、夜神様、メガネ様、龍賀様、鏡様、A r i s h i a様、紅 幽鹿様、T H ・ F様、桜川リマ様、感想ありがとうございます！」

ゼ「つついて、お土産コーナーだ。」

ク「ユタ様からは、優作ケーキ（カロリーゼロ）セット

メガネ様からは、マーボーに後書きが始まった瞬間に O S H I
O K I B O X

仮面ライダーディケイド神様からは、イグザズノシス・アクシオー
マディテロン！ディメンションキック！メルクオーブ！月読！アル
ティメットストリーム&アルカンシエル&トリプルなのはブレイカ
I x 1 0 0 0 0 0 0 0

バラランシャ様からは、リオラ&アリシア作のマカロン、瑠璃の寝
顔写真数枚と春人が何もやってないと言う証拠の映像

紅 幽鹿様からは、キバットバット？世

マ「はあはあ…え?」

ゼ『まだ一秒ぐらいだぞ?』

マ「そ、そんなあ。」

フィ「そして、ちょっと遅れたけど、O S H I O K I B O
X行きよ〜!」

マ「はい!?ふ、不幸d…」

ボタン!

ドタバタツ(O S H I O K I B O Xが揺れる音

ク『あばれてるわね〜』

ゼ『でもあれって、暴れるほど…』

マ「ぎゃあああああああああ!?!?!?」

フィ「ひどくなるのよね?」

ア「はあああ。」

ク「今まで黙ってた、どうしたのよ?」

ア「ホント、最近は出会いがないのよ〜。」

ゼ』どの〇』だ？』

ア『インフィニティ・ゼロ……黙りなさい。』

フィ『そうよー！』

ク『男が口出すんじゃないわよ！』

ゼ』……はい。』

フィ』で、最近って、どのくらい？』

ア『ん〜……2000年くらい？』

フィ・ク』………』

ア『ん？どづしたの？』

ク』いや………』

フィ』で、でも2000年前には相手が？』

ア『そうなのよー！聞いてくれる？マカロンやケーキセット、シフォンケーキとかあるし、お茶しながらね！』

フィ』アテネの恋愛かあ……いいわね！』

ク『おもしろそうね！私もいいわよー！』

きゅきゅきゅきゅきゅ

ゼ『男は蚊帳の外だな…』

マ「た、ただいま……」

ゼ『おう！おかえり！』

マ「……もう締めていいから、後はたの……ん……だ……」「ドサッ

ゼ『………というところらしいので、感想いっぱいくれー！』

瑠「ふわぁ。おはよう。」

ゼ『お！起きたか！そうだ、瑠璃に締めてもらおうか。』

瑠「ふええ？えつと…次回も…よろし…く？」

ゼ『よくできたな。さ、お風呂に入ってきてなさい。』

瑠「う〜ん。わかった〜。」

ゼ『ということで、瑠璃も言っている通り、次回もよろしくだ！瑠璃の願いだからな！絶対だぞ！？』

のに私にも体があれば膝枕できたのに、耳掃除できたのに私にも体
があれば膝枕できたのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕
できたのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、
耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、耳掃除でき
たのに私にも体があれば膝枕できたのに、耳掃除できたのに私にも
体があれば膝枕できたのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝
枕できたのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、
耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、耳掃除でき
たのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、
耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、耳掃除でき
たのに私にも体があれば膝枕できたのに、耳掃除できたのに私にも
体があれば膝枕できたのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝
枕できたのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、
耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、耳掃除でき
たのに、耳掃除できたのに私にも体があれば膝枕できたのに、

ア「では、紹介です！」

名前：エロト（木下・タカト）

性別：（男）

身長：なのは達より少し大きい。

体重：なのは達よりは重い。

容姿：金髪でFORTUNE ARTERIALの伊織の顔にそっくり。だが、黙ってたらカッコいい訳でもなく、目線、オーラ、雰囲気全てが気持ち悪い。「見られると頭から納豆をかけられている感じがする。」という意見が女子から多数。

好き：全ヒロイン（ブス以外らしい。）、自分の顔（笑）

嫌い：この世の男、自分以外のカッコいい男、自分よりかっこ悪い男。：とりま、男が嫌い。

特技：可愛い子がいたら、その場で自分の脳内で裸にできる。（その間0.002秒）

ウルク（ガツシュに出てくる術で、自身のスピードを早くできる術）
を使つてのスカートめくり。

ストーキング（結構ガチ。何回か通報されている。）

性格：腐つてる。「この世の女は全て俺のもの」をモットーに日々
生きているが、一度も付き合つたことがない。むしろ、嫌われまく
っている。すぐ、ヒロインや、女性キャラの体を触ろうとしたり、
匂いを嗅いだりする【変態】。あと、イカ臭い。とにかくゴミ野郎
あと、自分の事をオリ主だと思つている所がまた痛い。

能力：魔力は一応EX

ガツシュの術を全て使える。

経緯：万引きをした帰りにトラックに轢かれて死んだらしい。本来
なら、イイコトをした人以外は転生できないが、こいつの場合は、
神がまちがつて殺してしまったため、特別に転生させてもらった。
特別なので願いは二つ。ちなみに、その時の神はアテネではない。

マ「…とまあ、こんな感じかな。」

劉「…救いようないな……。」「

フィ「まっただわ。」「

マ「ちなみに、こいつは主人公の悪友的立場でもなんでもありません。」「

ゼ「なんで出したんだ?」

マ「いや…こんなヤツがいたら盛り上がるかって。」「

フィ「え〜、嫌よ。」「

マ「それに、こいつにフラグなんて物ははなッから存在しません!」「!

劉「ホント、なんなのこいつ?」

ク「存在価値皆無ね。』」

マ「嘸ませだと思ってください。一生幸せは訪れないんで!」

劉「じゃ、あとがきにいつてみよ〜。」「

これって誰得！？エロトの紹介（笑）（後書き）

「はい！ということですよ。」

ク『感謝コーナー！コウ様、ユタ様、A r i s h i a様、けーくん様、メガネ様、R a i N様、龍賀様、ばつど様、作者月詠様、月光閃火様、畏無様、バラランシャ様、紅様、紅 幽鹿様、夜神様、感想ありがとうございます！』

フィ『お土産コーナーよ！龍賀様からは、千魂冥烙

作者月詠様からは、エロト限定 ラグナロクブレイカー、飛竜爆旋×五千、ゴルディオーン・シユラーク、デアポリック・エミツシヨーン×空一面覆う程のを…、前回送った魔導地雷投下×一万レギュラー陣用 B級グルメ祭招待券
女性陣用 一日劉を好きに出来ちゃう（はーと）券×人数分

畏無様からは、瑠璃に『B R A C K C A T』のイヴのコスプレ、フィオネに橙色の着物、マーポーには、『11eyes』の奈落落とし。

バラランシャ様からは、死滅の黒薔薇^{ゲイ・バルカロール}×5発、断罪の蒼薔薇^{ゲイ・オンディーナ}×10発、エリクサーを10000個

紅 幽鹿様からは、エロトに轟く五星『ブリューナク』！破魔の赤薔薇『ゲイ・ジャルク』！必滅の黄薔薇『ゲイ・ボウ』！神仙達の裁き『火尖槍』！大神宣言『グングニル』、天地乖離す開闢の星『エヌマ・エリツシユ』！約束された勝利の剣『エクスカリバー』！お上に仇名す破滅の妖刀『村正』！射殺す百頭『ナインライブス』、

エレメントドラゴンブレイカー×10000000と無限の剣製での斬撃（壊れた幻想でトドメを）と持っている地味な不幸が永遠と続く指輪（嵌めたら一生取れず、外しても何時の間にか指の方に戻る）、マーボークに【時と因果を捻じる剣】（自分の体に刺し、真名解放をすると自分の受けた傷などが回復する）、劉君、瑠璃ちゃん、フィオネさんには変態撃退人形ver2（人形はそれぞれ、うさぎ、くま、ねこがあり、どれも同じで変態が持ち主の人に近づいたらスターライトブレイカー並の砲撃やエクスカリバー並の斬撃を飛ばし、変態を始末する機能が付いている）、

夜神様からは、カナタ特製シュークリーム（低カロリー）×人数分を頂きました！ありがとうございます！！」

マ「ということで、逝ってこい！！」

エ「やっと俺の出番だな。で、どこに行けばいい？」

ア「あそこのバツテン印がついている所よ。」

エ「ふ〜ん。」（こいつもいい女じゃん！ぐひっ、さいご〜う。

ア「…アンタ……。私は神眼で心の中が丸見えなのよ？」

エ「え、！？な、なんでもないッ！行ってくるよ！」ダッシュ

劉「逝ってらっしや〜い（棒読み）」

エ……たく。アイツ神かよ。俺のときはじじいだったから油断し
たぜ。」

「おおおおおおおおおおおおおおおお
おおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
……！」

エ「…ん？なんだあ…」

「.....」H
びく
びく
びく

フィ「うわぁ、Gみたい……」

ク『気色悪いわ。』

ゼ『こんなヤツ、瑠璃には会わせん!!!!』

劉「……………気持ち悪くなってきた。」

ア「あらあら、大丈夫？劉ちゃんは私が介護してあげるわ／／／／」

フィ・ク「『あゝ!!?!?!?』」

ギヤ—ギヤ—

マ「今回はここまで！こいつについての感想をくれるとうれしいです。

何回もいますが、こいつは主人公の悪友とかではないです！絶対に幸せはない嘸ませです。では、次回もよろしく〜！！」

マ「今日中に本編上げれるかな？（ボソッ）」

第35話：辿りついた物語の終幕……その果てに見た物は……。この題かっこよく

「私が……わかるのですか？」

何もない空間から聞こえた声……それはまぎれもなくリニスの声だった。

「あ、ああ。でも…なぜここに？」

オレは一番疑問に思っていた事を口にする。

「私はプレシアとの契約が切れ、消える予定でしたが、フェイトの事が心配で体が無くなった後も精神だけ残ったのです。」

「せ、精神だけ？」

（そんな事ができるのか？ いやでも実際に起こっている現象だし…。）

《劉ちゃん。》

「？なんだ？」

オレがこの事を考えていると、フィオネがオレに一つの提案をする。

《劉ちゃんがリニスと契約してあげなよ。》

「…オレ…が？」

『そうね。それが一番手っ取り早いわね。』

『だな。』

その提案にクリスとゼロが賛成してくる。

「ま、まあオレは別にいいk「ダメですッ！！」…え？」

オレの言葉を遮ってリニスが反対してきた。

「だって、そうすればフェイトともまた会えるんだよ？」

「そ、それでもです！」

が、リニスは反対してくる。

「…も。もしかして…：：：契約…：：：オレとじゃ嫌だった？」

（困ったな…。後はエロトくらいだぞ…。）

オレはほかに契約できそうな相手を必死に考える。

「ま、まっってください！」

が、それをまたもやりニスが遮る。

「あ、貴方が嫌なわけじゃないです。…私はいつも見ていました。フェイトを助けてくれて…プレシアの目を覚まさせてくれたのも…。む、むしろ…貴方となら／＼／＼」

リニスはそう言うのと体をくねくねさせた。なんかフェイトとかぶるな。フェイトはこんなリニスの真似をしていたのかな？

「じゃあ、どうして？」

オレが聞くとリニスは真剣な表情に戻った。

「それはですね。契約には膨大な量の魔力が必要なんです。」

『劉ちゃんなら魔力の心配はないわよ。』

クリスがリニスに向かって言うが、

「たしかに。貴方の事はずっと見てきたので魔力については大丈夫なのは承知しています。ですが、契約とは、貴方の魔力を継続してもらっほかに、貴方には私たちが使い魔の命を預かるという重い責務があるのです。その事をわかっていきますか？」

リニスが言いたい事はわかった。リニスはオレに命を預かるという責務…重さを教えたいのか。

「…わかってる。それを踏まえてもう一度言うよ。」

オレはリニスに手を指しの際は。

「オレと…契約してくれないか？」

リニスは一度目を瞑るが、すぐにその目を開く。

「はい。これから、よろしくお願いします。ご主人様。^{マスター}」

リニスはそう言うとオレの手を【掴む】。瞬間、オレの中から魔力が持ってかれるのがわかった。

「オレの名前は天道劉。劉と呼んでくれ。こいつらはクリスとゼロ。あと、ユニゾンしているけどフィオネってヤツがいるんだ。」

《よろしく〜！》

『よろしく頼む。』

『よろしくね。あ、一つ言い忘れたけど、劉ちゃんに手を出すんじゃないわよ?』

例によって、クリスはまた意味不明な事を言う。

「クリスの事は気にしないでくれ。」

「は、そうですか。…そ、それですね…… / / / /」

リニスはそう言うと、急に顔を赤くしてもじもじしはじめた。

「まだ契約は終わってないんですよ / / / /」

「……………」

リニスの言葉に驚くオレ。

《だ、だって、劉ちゃんの魔力が貴方についているから貴方は体を…》

フィオネの言う事ももつともだ。

「そ、そうなんですけど。…これが最終調整なんですよ。 / / / /」

そう言うと、リニスはオレに近づく。

「さ、最終調整?」

「はい。最終調整です / / / /」

「んもう！可愛いんですからあ！私のマスターはあ／／／／／」

リリスはそう言つとオレに抱きついてきた。

《あ、ああああ貴方……よ、よくもッ……!》

『……よくも……やってくれたわねッ……!……!……!』

『……………』ブルブル

この事にデバイス陣…フィオネとクリスはブチギレた。

「あゝら、私は最終調整をしただけですよ?」

《そんな調整はないわよーッ……!》

『キーーッ……!……!さっそくやってくれたわね……!……!』

ギ
ヤ
ー
ギ
ヤ
ー

「……………ハッ！！…お、オレは？」

あまりの出来事で一瞬、気を失っていたようだ。

「…お、オレ……………／／／／／／」

唇にそっと触れ、さっきの事を思い出す。

(ま、またかよ〜ツ／／／／／)

人生のキス経験、2回とも奪われる形になってしまった。

オレはそのばでorz状態になる。

「『？？？？？』」

オレの行動に言い合いをやめる三人。それでもオレはこの言葉を言うしかない…

「もう……………お嫁にいけn…じゃなかった！！お、お婿にいけない／／／／／」

なんてこった。もうセリフすらまともに家言えなくなってしまうとは……（泣）

だが、そんなオレの考えとは裏腹に、

「いいですよ！！私がマスターの婿にッ！！！！」

《いや、ちがいますう！！私が劉ちゃんのお婿さんにッ！！！！》

『なーにいつてのんよ！？劉ちゃんの夫になるのはこの私でしょうがッ！！！！！！』

『その前に、劉は男だk《『^{貴方}アンタは黙ってなさいッッッ！！！！！！』』』《……はい。』

婿宣言をしてくる三人？ゼロが突っ込んでくれるが………だよな。男って…弱いよね………。

そして三人？がまたギャーギャー言い合いを始めるが………

ドガアアアアアン！！！！！！！！！！

「おい！天道！！ここはもうもたない！捨てるぞ！！」

エロトが壁を破壊して、オレの元に来た。

「……………ロボは？」

オレはさっきまでロボの相手をしていたエロトに聞く。

「あ、ああ……………あいつらか……………。ま、まあ、この俺が大体は破壊してやったぜ！！（汗）」

と、焦りながら答えるエロト。

「はあ……………。わかった。エロトとリニスは先にアースラに行つてくれよ。」

《了解！》

フィオネがオレの言葉と同時に転移魔法を発動する。

「え！？ま、マスト……………」

「うひょーッ！！生のリス……」

二人の言葉は途切れ、アースラに転移された。

「エロトの野郎……最後まであんなのかよ……。」

『真正のアホ……いや変態だな。』

オレとゼロはため息をつきながら、エロトが破壊した壁を覗き込む。

「嘘……だろ!？」

《やってくれたわね……》

目の前にある光景、それは……

『あんの変態。なぐにが大体は破壊したよ。』

『さっきより数が増えてるな……。』

そう。さっきより明らかにロボの数が増えていた。

「はああ。やってくれたよ。フィオネ、クリスマス、ゼロ、少し無茶するけど……。」

《私は劉ちゃんと一緒ならッ!》

『あーら。珍しく意見があうじゃない。』

『俺たちは劉が全ての人を守ると決めた日からそれを手伝うと決めたんだ。今さらだろ?』

それぞれからの返事を聞いて、オレの胸に熱いモノが込み上げてくる。

「ありがとう……絶対に帰ろうなッ!!!」

クリスを構えると同時に部屋の壁がすべて崩れ去る。

「こいつらを一体でも逃がしちゃダメだ!!!」

《分かってるわ!!!》

「クリス!カートリッジフルロード!!!」

『. . . K O 』

クリスのカートリッジを全てロードする。

「ゼロ！ だ！」

『おう！ 発動！！』

コードで時間を止めている間に詠唱を開始する。

《「我が身に宿りし光の欠片、其れは我が唯一の命の煌きなり。森羅万象幾億の命、幾億の運命、幾億に広がるは無限の宇宙全てを統べる鍵にして、扉を開く者。そこに在るは光にして闇なりッ！！！」

クリスの刃先に黒色の魔力が纏わりつく。

《「…永久に続く光を遮る深遠の闇、時に束縛され、其れは終えては還る！！！」》

オレはありつたけの魔力をクリスに込める。

そして…

その魔力を、もう何体いるかわからないロボ達に向かって放った。

《「ワールド・オブ・ディストラクション世界終焉の覇者！！！！」》

魔力の塊が着弾すると、そこから時空が裂け、ロボ達は一瞬で呑み込まれて消えていった。

「…や…っべ…体が…うごかないや…フィオネ…クリス…ゼ…
口？」

反応がないデバイス達。フィオネはオレの中で気を失っている。クリスは刃の部分が折れていて、ゼロは殆んど破けてしまっていた。

(はは…少し…とばし過ぎた…かな)

オレもそこで気を失い、時空の狭間に呑み込まれていった。

s i d e o u t

アースラ s i d e

時間はフェイト達が転移してきた頃に戻る。

「フェイトちゃん！」

「いてて…っ！！劉！！劉は！？」

転移してきたフェイトはここが何処だか気がつくのと、劉の存在を探し始めた。

「劉ならまだ帰ってきてないけど？」

ユーノがフェイトに知らせると、リンディがこちらにやってきた。

「今、劉ちゃんから念話がありました。なにやら向こうは大変な

事になっているみたいですね？プレシア。」

「ええ。…厄介なことになってるわ。」

「そ、そんな…」

プレシアの言葉に顔を青くするのは。

「劉ちゃんが…私も行きます！！」

「やめるんだ！！今、君が行っても危険だ！！」

なのはが転送ポートに向かおうとするが、すぐにクロノに止められる。

「プレシア、厄介な事とは？」

「私が前に造ったロボ達が暴走してるわ。原因は不明。ランクはAだったものが…SSにまで跳ね上がっているわ。」

「な、なんですって!?!」

「…SS……」

「劉ちゃん……」

プレシアの言葉にリンディとクロノは驚き、なのははさらに顔を青くする。

そっぴ…

「艦長！アースラにまた転移反応が！！」

エイミーから報告が入る。みんな劉だと思い、反応がある場所を凝視する……………が、

「……………つたく。あの野郎！」

「マスターの事を悪く言わないでください！！あなたなんかより全然良い人なんですから！！」

「んだとツ！？」

なぜかケンカをしているリニスと見知らぬ少年。

「……リニス！？」「」

リニスの事を知っているプレシア、フェイト、アルフはリニスを見て驚く。

「久しぶりですね。プレシア、フェイト、アルフ、バルディッシュ。それに、始めましてです。アリシア。」

「な、なんで貴方がここに!?!」

プレシアがリニスに聞く。

「実はですね……」

「なるほどね。」

「はい。それでマスターと契約をして、もう一度体を頂きました。」

「リニス〜!!」

一通りプレシアに説明をし終わったリニスに、フェイトは抱きつく。そんなフェイトの頭をリニスは優しく撫でてあげる。

「よく頑張りましたね、フェイト。」

その様子を見て涙ぐむアルフ。

「それで…あなたは？」

その横で、リンディが男の子に聞く。

「はい。俺の名前は木下タカトです。信じてもらえるかわかりませんが、目の前が急に光りだして、気がついたらあの場所に……。このデバイス、『ゼオン』もいつのまにか手にありました。名前と使いは、こいつから頭の中に。」

「うーん。次元漂流者…でいいのかな？」

木下の説明を聞いて、首を傾げるエイミィ。

「そ、それで、劉は!?!」

「うん! うん!」

ユーノとなのはがエロトに聞く。

「ああ。アイツならな、ロボがさらに増えたから離脱しようとしたんだけど、俺等だけをここに転移したんだ。」

「そ、そんな……。」「

「!!!なのは!」

エロトの言葉を聞いてなのはが崩れそうになり、それをフェイトが支えた。

「劉なら平気だよ、なのは。」

「そうだよ!」

クロノとアルフがなのはに声をかける…と同時に大きな揺れが起こる。

「艦長!次元震発生!!場所は…プレシアさん達が転移してきた所です。」

「時の庭園…から?」

フェイトがポツリと洩らす。さらに、エイミイの言葉が追い討ちをかける。

「時の庭園…完全消滅……せ、生存反応……ありません…。」

「そ…そん……な…」

なのはが完全に崩れる。

「でも!私が消えないんだから、マスターは消えないはずですよ!」

リニスが大きな声でみんなに言うが、

「だとしても…時空の狭間につかまったら、そこから救出するのは
……」

クロノの言葉で消される。

こうして、この事件は幕を閉じた…。

s i d e o u t

アテネ side

「うん。まずい事になったわね〜。」

劉ちゃんが今何処にいるのか探すが……

「全然見つからないわ……。」「

ここまで探して見つからないとなると……

「この世界とは真逆オモイの世界に跳ばされた可能性があるわね……」

待っててね劉ちゃん！貴方は絶対に助けてみせるわ！！

s
i
d
e

o
u
t

劉 side

「……………ちゃん……………りゆうちゃん……………」

…ん？誰だ？人が眠っているのに起こすやつは……

「劉ちゃん！劉ちゃん！！！」

え？…この声は…フィオネか？

「…グスツ……………起きてよお。ねえ……………起きてっばあ。」

オレの頬に暖かい何かが落ちる。それに反応してゆっくりと目を開

ける。

「……………つつつ……………ここ…は…?」

オレが目を覚ましたのは…森?そして目の前には涙を流しながらオレを必死に起こしていたフィオネ。

「うわあああん!!!劉ちゃんが生き返ったよおお!!!」

「…え?うわあ!?!」

オレが目を覚ますと、アウトフレイムverフィオネが抱きついてきた。

「ど、どうしたんだよ?」

「だって、だってえ…グスツ……………うわああああん!!!」

フィオネに説明を頼んだが、泣いてしまってどうしようもない。

(落ち着くまでまつか…)

オレはフィオネの頭を撫でながら、泣き止むのをまつた。

20分くらいたって、ようやく落ち着いてきたフィオネから聞くと、

「え？オレの反応がないから死んだと思った？」

「…グスツ……うん。」

なんだそりゃ……

「え〜と、心臓はうごいていた？」

「…さあ？」

「瞳孔はひらいていた？」

「…さあ？」

なんにもわかってないじゃん！！

「だって、劉ちゃんが…劉ちゃんがあ……！！！」

「ごめんごめん。だから泣かないで。」

再び泣きそうだったフィオネの頭を撫でてあげる。

「で、ここは…？」

「…海鳴市だよ。」

はい？海鳴？

「じゃあ、帰ってきたのか？」

「……うん。違うよ。」

海鳴に帰ってきたのに…違う？

「ま、まあ、いいや。とりあえず、町に行こう。」

フィオネは小さくなってオレの胸ポケットに入る。

「劉ちゃんの心臓の音だ…。本当に…本当によかったよお／＼／＼」

フィオネはオレの心臓の音を聞いて安心したらしい。

「さうて、魔力も完全回復してないし、デバイス達も直さないとしたし…。まずは…翠屋だよな……。」

（魔力が回復していれば、簡単に直せるんだけどな。リカバリーとかで一発！）

オレ達は翠屋に向かって歩き始める。

しばらくたつと……

「劉ちゃん！魔力反応だよ！」

フィオネが警戒してくる。

「魔力？こんな所で？」

場所はまだ町には出ておらず、森の中のまま。

オレは周りを警戒する。

「……………っ！！！！トリースオン 投影開始！絶対守護の盾！！」アイギス

オレは何かが飛んでくるのを感じ、すぐに盾でそれを防ぐ。

「このピンク色の球体は！？」

「なのはちゃんの魔力！？」

そう。オレに向かって飛んできたのは、なのはのアクセルシューターだった。

「劉ちゃん！上！！！」

「なに！？ってうお！！！」

上を見ると、またもや大量のシューターが飛んできて、間一髪でそれを避ける。

「へえ。結構やるじゃん。」

「…え？」

今の声……。

オレは声のするほうを向く。

そこにいたのは……。

「なかなか強そうだね。」

「そうだね。なのは。」

「まあ、俺たちには勝てないけどな。」

そこにいたのは……なのはとフェイト、そして……あの木下タカトだった。

第35話：辿りついた物語の終幕……その果てに見た物は……。この題かっこよく

マ「はい！今回で一応無印完結！！」

フィ「どうしてこうなった？！」

ゼ「誰が予想できたのか…」

ク「そうね。では、感謝コーナーよ！月光閃火様、メガネ様、ユタ様、夜神様、仮面ライダーディケイド神様、バラランシャ様、紅幽鹿様、龍賀様、Arishia様、感想ありがとうございます！
『！』

瑠「お土産だよ！メガネ様からは、エロトが瑠璃にあつた瞬間にOSHIOKI BOX行き

夜神様からは、符「漢女道」
詳細：恋する姫たちが無双する某ゲームのマッスル漢女を召喚できる。

仮面ライダーディケイド神様からは、スターライトブレイカー×10000回！トリプルなのはブレイカー×100000000回！アルカンシエル&トリプルブレイカーそれぞれ×100000回！月読。

紅 幽鹿様からは、エロトに、炎を纏う害なす魔の杖「レーヴァテイン」の一撃と慈悲を持ち氷の刃「アルマス」の一撃と負けを知らぬ光りの剣「クラウ・ソラス」の一撃、マーボーにベホイミの効果がある、腕輪、劉にデザートイーグル（これでエロトを片づけて下さい）瑠璃に、世界のケーキの作り方が載っているレシピ。

龍賀様からは、エロトにBlut de Scbwester>>
ブルート・ディ・シユヴェスタア<<ーx100000(月落と
し)、ー虚空陣奥儀 悪滅ーx50000を貰ったよ。ありが
とございます。」

マ「今回はゲストが…三人…(汗)」

フィ「え、ユタ様の作品『異世界を渡る』から優と、バラランシ
ヤ様の作品『神に何度も殺された青年』から春人、紅 幽鹿様の作
品『魔法少女リリカルなのは紅』から幸夜が来てくれました
〜!」

マ「やあ。みんなよくキタね〜!」

優・春・幸「「し〜ね〜〜ツ!!!!!」」

マ「がでぶっ!?!?!?」

ゼ『いい蹴りがはいつたな。』

マ「くつぞ。なんで!?!?」

春「おまえは、前回、俺の攻撃を避け、尚且つあんな変態を召還し
たんだ。」

優「瑠璃とあいつが会ったらどうするつもりだ?」

幸「少し…頭ひやそつか？」

マ「ひいひい…！」

ク『ま、自業自得ね。』

瑠「?????」

エ「お〜い！作者！！来てやったぞ〜！」

マ「おお！エロト！よくキタ。俺の盾に…」
「おお！！なんだ！？この可愛子ちゃんは！？！？」
「…やっぱ…。」

エ「うひょ〜ッ！！！！興奮する〜！！すう〜はあ。イイ匂〜い！！」

瑠「ふえ！？え、えつと…誰…ですか？」

エ「おつと、俺の名前は『エロトよ。』…なんて事教えやがる…！」

ク『べつつにいいじゃない。あと近よんな。』

瑠「エロトさんですか。始めましてです。」
「（ペコリ

エ「お、おう！！！！！！」（今一瞬、屈んだ時に胸の谷間が〜。
ぐひっ！！！！！！

フィ「……さいていね。ま、今すぐにも罰が下るわ。」

エ「ぐひひっ……ってなんだ!?!お前らは!?!」

春「あゝあゝ!?!今お前…何見た?」

エ「べ、別に〜。」(んだよ、男かよ。

優「コロスコロスコロス!?!」

幸「ホント、どうしようもないね。(ニコッ」

フィ「あの〜作者は〜?」(汗

優・春・幸「」「あそこ!?!」「」

フィ「ん〜?……あ……」

マ「……………ガッフ。」

ク「あのゴミみたいなのが……………」

ゼ「あなはくじこ……………」

春「さてと、まずはおまえは飛んでこーいッ！……！」

ぶんッ！……）エロトを上を思いつきり投げる

エ「ぎゃあああああああ……！……！……！……！……！……！」

優「そして、空中でほかの作者から、おまえにお土産だ！」

エ「え！？なに？！ラブレターとか！？！？？」

幸「いゝや！喰らえ！……！」

エアフにエfhwせりfぽqwejrfernrusdlmfnf
slggmsnsgskfgfwgajrgagfgf;k
fejfofef@pkweroppga;smdf::;smdk
vsvma::おえfじじえfgfぽwrんがそfwlんggいんgr
g.rkggんwrjが;fldfgsgspggぽwぶおえfpkd:
くぁd::え、fm、rw:klfめいお;rj24
ihf340@9璫3q-」4「yt3^4」-itt3@^t<j
54jr9gg5お歩jtt930じt-30ittgg3r!?!?!?!?
!?
!?
「?!?」

ク『汚い花火だ。』

ク『……』

ぐしゃ (落下してきた変態)

瑠「み、みんな！可愛そうだよ！！」 (ヒロトに近づく。)

春「お、おい！瑠璃！！なにやってんだ？！！」

エ「…ってて、なんなんだよあれは」。

瑠「うう、大丈夫ですか？」

エ「はい！大丈夫ですよ！！」 (キラッ)

瑠「えへへ、よかったです。」

優「さて、殺すか。」

幸「そうだね。そして瑠璃ちゃんを消毒しなきゃ。」

フィ「……………」ガクブル

エ「あー、でも、痛いなー。」（棒読み

瑠「ふえ！？そんなんですか？」

エ「ああ。でも一つだけ治す方法が……。」

瑠「な、なに？私に出来ることなら……。」

エ「本当かい？それはね……」「ニヤニヤ

春「そうだな。」（にじっ）

幸「生きて還れるとおもわないでね。」（にじっ）

ズルズル（エロトを引きずっていく音）

ファイ「あ、OSHIOKI BOXに入れられて、そのOSHIOKI BOXは破壊されんばかりの威力で攻撃されて

第36話…どうしてこうなった?!まったくもって意味不明な世界…(前書き)

え、今回からだいたい…5話くらい?の短い話をやります。

これはプロットもなしでの物になります。

こうやって直に書きながら考えているので、どうなるか分かりませ
んが…。(汗)

これが終わったら、Asに入れるので!

第36話…どうしてこうなった?!まったくもって意味不明な世界…

「な、なんだよ、おまえら。攻撃なんてしてきて。」

オレはすぐに投影を解除して三人に近づくが……

「……………え?」

「劉ちゃん!!!!」

エロトの蹴りがオレの腹部を直撃する。

「なんだ? 貴様は? 俺の名前を知っているようだが。」

オレはそのまま近くの木に激突する。

「…くつ。……………おまえ…なにすんだよ…。」

「何をする? 異常な魔力反応があったと思ったから、俺たち管理局が来たんだろ。で、そこにはおまえがいた。……………つまりおまえが今

回の次元震の犯人だろ？」

「な、何をいつてるんだ？」

エロトはオレに淡々と説明をする。

「その反応だと知らないようだな。…いいさ。だったら教えてやるよ。俺達管理局は絶対的な力を持った団体だ。そこでは、犯罪に少しでも関与した物はその場で処罰する。これが鉄則だ。次元震は立派な犯罪。よって貴様を…排除する。」（ニヤリ

エロトが説明を終えて笑ったと思うと、

「ハーケンセイバー!!!」

「デイベインバスター!!!」

なのはとフェイトが攻撃してきた。

「まじかよッ!」

オレはすぐにその攻撃を回避して、逃げる。

「はあはあ。いったいどうなってんだ？」

「劉ちゃん。これって…?」

フィオネも混乱しているみたいだ。

「はあはあ。す、少なくとも、ここはオレ達がいた世界では…ないみたいだ……。はあはあ…くっ」

オレは先ほど蹴られた腹を押さえながら走る。

「逃がさないぞ!!ザケルガ!!!!」

「くっそお!!!!」

オレはそれも何とか避ける。

(みんなの能力は変わってないみたいだな。)

攻撃を避けながら走っていると、

「あの人は……プレシアさん!!」

目の前にプレシアさんが立っていた。だが様子がおかしい。それにあの手を持っているのは……

「あ、あのトランクは!?!」

トランクの正体に気がついたオレはその場でストップする。

「貴方が今回の犯罪者ね。逃がさないわ。」

プレシアさんがそのトランクを開けながらいうと……

『闇より暗き深淵より出でし 其は、科学の光が落とす影!』

トランクから出てきたのは……

「? 鐵……。」

それに、胸の部分がむき出しになっている。

「ベリアル・ドール 副葬処女がない?」

本当にどうなってんだ？この世界は！！

「さあ！行きなさい！！」

？鐵がこっちに突っ込んでくる。

「前はこいつで、後ろからは…エロトか。」

(逃げてもこりゃ、追いかけてくるな…くっそ…どうすれば……。)
必死に考えるが……

「戦うしか…ないのか…」

ポロポロのクリスとゼロを見る。

「セットアップは無理でも、投影ならなんとか…。トレスオン 投影開始！！白銀の剣！！」

手に空間切断能力をもった剣を投影する。

「おらあああああ！……！！！」

その剣を手に、オレは？ 鐵と激突する。

「くっ……。」

鏝迫り合いになるが……

「そ、そもその力が……ちがい……すぎるっ……！！！」

オレは力負けして吹っ飛ばされる。

「劉ちゃん大丈夫！？」

「ああ、だ、大丈夫……だ……よ……げほっ……」

ぴちゃ、ぴちゃ

咳き込むと同時に口から血が出る。

「劉ちゃん……」

「げほっ…ごほっ…くっそ！」

いまだに痛む腹を押さえる。

「どっちらここまでのようだな。」

「…っ！..！」

エロトが追いついてきたようだ。

「これでも喰らって…終わりな。」

エロトが手に魔力を集め始める。だが、その後ろには…

「なのはとフェイトが…いない？」

そう、さっきまで一緒にいたなのはとフェイトがいなくなっていた。

「あいつらか？あいつらは、別の魔力反応があったからそっちに向かわせた。」

そう言いながらも、エロトは準備に入る。

（別の魔力反応？…まさか、オレと同じ境遇のヤツが！？…だとしたら、危険だ！）

「フィオネ！今すぐにその反応を探せ！！」

オレはフィオネに指示する。

「い、今の状況で！？」

「そうだ！ここはなんとか切り抜ける。投影開始トレースオンIS白式！！」

白式を展開して、

「イケンリッジョン・ブースト
瞬時加速！！！！」

すぐにエロトかた距離をとる。

「あッ！こらまで！！」

エロトが慌てて追いかけてよつとするが、速さが違う。

「劉ちゃん！前！！」

「逃がさないわ！！！！」

前には？鐵が重力球を構えていた。

「その対策は出来ている！！！！零落れいらく白夜発動！！！！白銀の劍に！！！！」

白銀の剣に魔力を通す。

『闇より暗き深淵より出でし 其は、科学の光が落とす影！』

？鐵との距離をつめた瞬間、重力球を放ってくる。

「無駄だあ！！！」

だが、零落^{れいらくびやく}白夜を発動している間は、相手の攻撃を無効化にできる。これで？鐵の重力球を無効化し、

「消えろおおッ！！！」

白銀の剣で？鐵をたたき斬った。

すると？鐵は、斬られた所から空間が裂け、それに呑み込まれるようにして消える。？鐵が消えると同時にプレシアは糸が切れた人形のようにその場に倒れた。たぶん気を失ったんだろう。

「劉ちゃん！場所がわかったわ！！！」

フィオネがさっきの反応があった場所を見つけたようだ。

「そうか。転移…は…無理か？」

「うん…。ユニゾンがあと一回ぐらい…かな？」

フィオネが顔を俯かせながら言う。

「しょうがないよ。あんな事後だし…。とりあえず、エロトが追いついてこないうちに早くそこに行こう！」

「うん。」

オレはそのままイケニッション・ブースト瞬時加速を継続させたままその場所に向かった。

（反応があった場所にはいったい何が？）

そんな疑問を抱きながら…

第36話…どうしてこうなった?!まったくもって意味不明な世界…(後書き)

マ「ふう。終わった。」

フィ「もうボロボロね。劉ちゃん。」

ク「くう!!この私がいれば…」

ゼ「俺だって…」

マ「まあ気にすんな。では、感謝コーナーだ!!」

瑠「A r i s h i a様、ユタ様、けーくん様、畏無様、龍賀様、メ
ガネ様、バラランシャ様、R a i N様、コウ様、夜神様、紅 幽鹿
様、作者月詠様、仮面ライダーディケイド神様、いつも感想ありが
とうございます!」

ク「瑠璃ちゃんも噛まなくなってきたわね。」

ゼ「瑠璃はやれば出来る子だからな。」

フィ「はいはい、お父さん。」

マ「お土産コーナーは……これはひどいな……。畏無様からは、瑠璃
に響介特製のチョコプリン、フィオネに悠特製のチョコモンブラン、
マーポーとエロトには、アルカンシエル&SLB

メガネ様からは、ウサギさんの着ぐるみ型のパジャマ

バラランシャ様からは、今までマーボアが受けてきたダメージと同じ量の攻撃をエロトに。マーボアに断罪の蒼薔薇ゲイ・オンディーナ×1

夜神様からは、エロト限定で攻撃「こおるせかい」&「燃える天空」
(どちらも手加減なし)

紅 幽鹿様からは、エロトに燃える天空と千の雷と騎英の手綱『ベルレフォン』と交錯する絶望と希望分かつ運命の裁断『スパイラル・フェイト・プリンガー』

作者月詠様からは、エロト限定 シヤマルによるガタキリバキック×50、サゴーズインパクト、凜によるラグナロクスピアア、守護騎士全員によるキリングナイトブレイカー、全員限定 案外上達した(良い意味で)シヤマル料理フルコース

仮面ライダーディケイド神様からは、マーボアにイグザズノシス(以下略)！ディメンションキック！メルクオーブ！月読。

ユタ様からは、一発で世界が崩壊するルシフェリオン・ブレイカーを一兆、イカロスがアポロンを一兆、をエロトに…を頂きました。皆さんありがとう！！」

エ「おい！なんで俺ばっかなんだよ！！」

ゼ「あたりまえだ！！瑠璃にあんな事を！！」

エ「は？…あゝそっかあ。おまえら…嫉妬か？」(ニヤリ)

フィ「多分違うわよ…(汗)」

エ「あーあ、ヤダねえ。男共の嫉妬は醜いだけだぜ？ま、たしかにあの瑠璃ちゃん…だっけ？あの子の胸はそりゃ、小さいながらもあの年のわりには少し大きくて、柔らかくって、張りがあつたなあ。ぐひひっ！」

ク「ケツ！男の嫉妬が醜い？安心なさい。アンタほど醜い存在もそうそう…いや絶対にいないから。」

エ「んだとツ！！こんお糞デバイスが！！！」

ク「やめて！アンタみたいなGに罵られても何も感じないわッ！！！」

フィ「ふ、普段は感じてたのね……」

ク「そりゃ〜ね〜。劉ちゃんにだから…／／／／」

エ「なんだ？このデバイスは…変態だな。」

ク「アンタにだけは言われたくないわあッ！！！」

ゼ「お前にも言われたくないがな…」

マ「その辺にしとけ。ではゲストだ！」

瑠璃（ウサギの着ぐるみに着替えた。）「えっと、Arishia様の作品『魔法少女リリカル…』…なんとか！」から、優お兄ちゃんと龍賀様の作品『テンプレな転生（仮）』からは龍斗君、仮面ライダーデイケイド神様の作品『魔法少女リリカルなのは チート少年の瞳は何を見る』からは黒なのはちゃん、ユタ様の作品『異世界を

渡る』からは、ニンフお姉ちゃんが来てくれました。優お兄ちゃん
くん！！！！」(優に抱きつく

優「おっと、久しぶりだね。」

瑠「うん。えへへ、優お兄ちゃんだあ／＼／＼」(優にスリスリ頬
擦りしている

エ「くそがッ！リア充爆死しろ。」

マ「まあ、そう言っな。それよりな、今回のゲストたちは、みんな
共通点があるんだ。…なんだと思う？」

エ「は？なんだ？」

龍「ソレハナ…」

ニ「クロスクロスクロス…」

エ「うお！なんだこいつら！？…怖ッ！！」

黒「マーボーとおまえに制裁を！！」(レイジングハートを振りか
ぶる

フィ「レイジングハートって、あんな使い方だっけ！？」

ゼ「いや違っただろ！？」

ク『ま、楽しそうだからいいじゃない。』

瑠「見て見てえ！この着ぐるみ貰ったの〜！／／／／」

優「うん。似合ってるね〜！」なでなで

瑠「はう／／／／あ、ありがと／／／／／」

マ「ま、今回はおとなしく受けるか…。」

エ「俺はこの黒なのはとニンフになら別にいいぜ。」

マ「そりゃ、なんでだ？」

エ「ある種の興奮が……むふふっ」

優「うわぁ…変態だ…。」

エ「うるせえ！！リア充爆死しろ！！ラドム！！」

優「おっと…」

龍「ゴチャゴチャウルセーヤローダ！！！！オラアアアアア！！！！」

二「超々超音波振動子（パラダイスⅡソング）！！！」

エ「おっと！作者バリア！！！」

マ「させるかあッ！！断罪の蒼薔薇！！！」
ガイ・オンディーナ

エ「ぐほっ！?!?!?!」

黒「ほーら！！トリプルなのはブレイカー！！！」

ドガアアアアアン！！！！

エ「エクスタシーーーーーッ！！！！！」

龍「なッ！こいつ…攻撃が効いてない!？」

二「やだ…本当にきもちわるいわッ！！！」

ゲシッ（ニンフがエロトの腹に蹴りを入れる

エ「ぐぶっ！！ぐびひいゝ。いいわあゝゝ／／／／」

二「きゃあああ……！けがれた……ッ……！！！」

フィ「はい！ニルフさん！消毒……！！！」

二「あ、ありがとう……」

「まずいな……そろそろこいつを無人世界に跳ばさないと……他作者様のお土産が……」

黒「ふん！デイバインバスター……！！！」

エ「Oh……Yes……！！！」

優「……やっぱり変態だな……（汗。「なでなで（瑠璃が抱きついたらま
まなので戦闘に参加できない

瑠「えへへ／＼／＼／＼／＼」（優に抱きついたらま。

龍「このッ……！おわれ……！！このっ……！！！」

エ「おまえなんかは攻撃を喰らっても、ちっともうれしくないわ！
！ディオガグラビドン！！！！」

龍「うお！？このッ！！」

二「死ぬ変態！！アフロディーテAphrodite！！！！」

エ「はい！喰らいます！！って、ぎゃああ！！！！頭が！！！！」

黒「今なの！！」

マ「ああ！！」

黒「スターライトブレイカー！！！！」

マ「断罪の蒼薔薇！！！！」ガイ・オンディーナ

エ「おっと！作者のは避けてつと、SLBは俺のものッ！！！！ぎゃ
っほおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！
？！！？」

マ「おい…あんな状態から避けれるのか」

ク「い、一応チートなだけあるわね…」

フィ「じゃあもう転移させるわよ？」

マ「頼む…」

ヒュン！！（エロトが転移した。）

フィ「エロトがいた星がなくなったわ。」

優「さて、帰るか。」

マ「みんな、今日はありがとうな。」

ニ「別にいいわ。」

龍「ああ。」

黒「あいつは地球にいない存在。」

瑠「皆さん、これをお土産にどうぞです!」

ゼ『瑠璃お手製の七草粥だ。』

優「そういえば今日だっけ?」

ニ「わあ〜い!瑠璃ちゃんの手作りだあ!〜!」

龍「ありがとうな。」

黒「いただきます！！」

マ「じゃあな！みんな！」

全「バイバイ！！！」

ク「ふう。今回は大変だったわね。」

フィ「今回はここまで！！感想いっぱい頂戴！！！」

マ「では、また次回!!!」

ゼ『ではなッ!』

瑠「またね...です! / / / /」

第37話：う〜ん、思い出しそうで思い出せない……。いついつってイライ

今回のゲストはユタ様の作品『異世界を渡る』から、優、セイ、イカロスとバラランシャ様の作品『神に何度も殺された青年』から春人&リオラです！

そして、今回【も】あとがきが本編です。

それがOKな方だけでもどうぞ……！！

では、はいじまります……！！！！

第37話…う〜ん、思い出しそうで思い出せない……。う〜ん時ってイン

オレは今、フィオネが見つけた反応があった場所に向かっていた。

「この辺なんだよね？」

「ん〜……………あ！あそこから！！！」

フィオネが指を指した先…そこから、ピンク色の砲撃が飛んでいるのが見えた。

「あいつら、もう攻撃してんのかよ！？」

オレはいそいでその場に向かった。すると…

「アクセルシューター！！！」

「プラズマランサー！！！」

なのはとフェイトが…

「うわぁ！…いきなりなんなの〜ッ!？」

狐耳で、狐の尻尾を生やしている女性に攻撃していた。

「くう！！逃げるなの！！！！」

「動きが速い…。バインド！！」

先に動きを止めようとしたのか、フェイトがその狐女をバインドで動きを封じようとした。

「させるかああ！！！！投影開始！！！！」

オレはそれを阻止するべく、フェイトに向かって…

「天の鎖エルキドゥ！！！！」

「えッ！？なに！？」

天の鎖エルキドゥをとばし、フェイトを縛り付ける。

「しばらくじっとしてろ！！」

次に俺はなのはの元に向かう。

「うにゃーッ！ちょこまかと〜！！こっぴなったら！！」

なのはが追いかけるのをやめて、急に上に浮上した。

「？？？？」

狐女はなのはの行動を不思議そうに見ている。

…が、

なのはの行動の意味を理解したオレにはそんな余裕はない。

「おい！そこの君！！」

「え？アタシですか！？」

オレの言葉に狐女は反応する。それと同時に…

「いつくよ〜！全力全開！！！！」

なのはがカートリッジをロードする。

（やっぱりか。つかカートリッジを搭載しているって事は……今はAS後か！？）

「スターライトーツ！！！！！！！！」

おっと！それどころではない。

「君！オレの後ろに隠れて！！」

「え？は、はい……！」

オレが指示すると、狐女はオレの背中にぴったりくっつく様に隠れる。

(こ、こんなに密着しなくてもいいよね！？／／／)

密着する事により、柔らかい物が背中に……／／／

「劉ちゃん……今……何を考えてたの？」ジー

フィオネの視線が痛い。

「あ、あのSLBに対抗するんだったら……これだ！トレースオン投影開始！！
しんごち・どうじきりやすつな真打・童子切安綱！！！」

オレの手に一本の禍々しいオーラを纏った妖刀が投影される。その妖刀の柄の部分からいくつもの手が出てきてオレの腕に絡みつき、そこから棘が出てきてオレの血を吸う。

「くっ……これ、結構きついな……」

だが、妖刀であるこいつはお構い無しにどんどんオレの血肉を吸収していく。

「劉ちゃん！くるわ……！」

フィオネの言葉と同時に……

「ブレイカー……ッ!!!!!!!!!!!!!!」

なのはがオレ達に特大のSLBを撃つてきた。

「そう易々とやられるかあ!!!!!!!!!!斬り裂け!!!!!!!!!!」

SLBに向かって一気に振り切る。

「鬼牙絶刀!!!!!!!!!!」

振り切った妖刀からは禍々しい衝撃波が放たれ、なのはのSLBと衝突する。

「うう、負けないのお……!!」

なのはが魔力を込めるが……

「それは……こっちのセリフだあああああ!!!!!!!!!!」

オレも童子切安綱とうじきやすつなにさらに力を込める。すると、だんだんとSLB

どこで見たことがあるのか必死に思い出そうとするが…

「何も思えだせない…(汗)」

「え?どうしたの?」

オレの呟きに対して聞いてくるフィオネ。

「いや、なんでもない。」

オレはそこで一回思考を中断する。

「で、君は?」

「はい。アタシはキャスターとm「あーーーーーッ!!!!!!!!!!」…
…???」

(そうだ、そうだ!どっかで見たと思ったら、『Fate/EXTRA』に出てくるキャス狐じゃん!)

「そっかそっか」

スッキリしたオレは一人うんうんと頷く。

「それですね……」

そんなオレに疑問を抱いていたキャス狐が、またしてもオレに頭を下げてきた。

「あの！！アタシのご主人様マスターになってください！！」

「うんいいよ。」

「え！？」

オレが受け入れると、キヤス狐が目を丸くしてオレを見てくる。

「だからいいよ。」

「ほ、本当に？」

キヤス狐はオレにもう一度聞いてくる。

「ああ。オレがお前のマスターになってあげるよ。」（ニコッ

「はああ……／／／／／／／／／／／」

オレが微笑みかけると、キヤス狐の顔が赤くなっていった。

「もう…劉ちゃんは…」

ぎゅっ！

「いてッ!？」

フィオネがムスツとした顔でそっぽを向きながらオレの腕をつねってきた。

「ありがとうございますね!!--ご主人様!!あと、アタシの真名はタマモノエ【玉藻の前】と申します。どうぞ、タマモとお呼びになってください!／／／」

タマモがそう言うてくるが……

「そんなに簡単に真名を教えていいのか？」

「はい。ご主人様になら／／／」

オレの疑問にタマモは簡単に返してくる。

「そんなもんか。じゃあ、タマモって呼ぶな。」

「はい!」

タマモは機嫌よそそうに答えると…

「そりゃ」「

オレの腕に抱きついてきた。

「ああッ！！！劉ちゃんから離れなさいよ！！！！」

その様子を見ていたフィオネはタマモを引き剥がそうとするが、タマモはオレから離れなかった。

「さ、さて、なのはは気絶してるし。フェイトも……絡まったまま気絶してるな。」

無理やり引きちぎろうとしたフェイトは余計に強く縛られたようで、いつのまにか気絶していた。

「……で、エロトも来ていないし……。とりあえず、休めるところに移動しようか？」

「「さんせうい！！」」

フィオネとタマモもオレの提案に賛成してくる。

「それでしたらご主人様。あつちに洞窟がありましたよ。」

タマモが指を指しながら教えてくれる。

「そうか。……ひとまず、今日はそこに避難しておこう。」

「この二人はどうするの？」

フィオネがなのは達はどうするか聞いてくるが…

「放っておいても大丈夫じゃないかな？」

たぶん、エロトあたりが回収するだろうし、もし今なのは達を起してしまったと思うと………（汗）

「さて、タマモ。案内してくれる？」

「はい！もちろんですよ！！」

オレ達はタマモに案内されて、その洞窟に向かった。

第37話：うーん、思い出しそうで思い出せない……。じじい時ってイライ

マ「はい、やっと終わった。」

フィ「プロットもない状態じゃあね〜(汗)」

ク「ばかね……」

マ「すみませんでしたねえ！！でも、そこまで言わなくてもよくないか!？」

フィ「はい。では、感謝コーナーです!!」

マ「無視するなよ!？」

ゼ「メガネ様、紅 幽鹿様、夜神様、畏無様、龍賀様、ユタ様、桜川リマ様、仮面ライダーディケイド神様、Arishia様、バラランシヤ様、けーくん様、鏡様、月光閃火様、感想ありがとう!」

マ「お土産コーナーです。メガネ様からは、『死にたくても死ねない薬』×1000

紅 幽鹿様からは、マーボーに世界終焉の剣『ワールド・エンド・ソード』レプリカ(レプリカの為、本物の四分の一ぐらいの威力で、天地乖離す開闢の星『エヌマ・エリシュ』と同じ威力)、エロトに刺し穿つ死棘の槍『ゲイ・ボルク』× での攻撃、瑠璃に、うさぎのぬいぐるみ

畏無様からは、マーボーと瑠璃とフィオネにチョコクリームパン、

クリスとゼロには、デバイス用のカスタムテーマ（クリスは星で、ゼロは雷）、エロトにトリプルブレイカー&アルカンシエル&核弾頭をセットにして、999999999（滅んでも大丈夫そうな小惑星付）セット

龍賀様からは、審聖・人ヲ裁ク神×5000000、滅びの剣×650000、メギドラオン×7000000、ハルマゲドン×800000、逆行運河・創世光年×1000000

桜川リマ様からは、七草粥

仮面ライダーディケイド神様からは、イグザズノシス！（以下略）螺旋丸！メルクオーブ！とどめにトリプルなのはブレイカー&アルカンシエル×100000回、なのはライフ

月光閃火様からは、エロトにあまりにもやり過ぎな罰を下した者は月光閃火様の【万達者攻撃フルコース^{オール・マスター}】をいただきました。ありがとうございます！

瑠「そして！この前ユタ様のところで行われました、『特別番外編PV50000アクセス記念 バトルロワイヤル』で劉君？が優勝しました。」

マ「本当にありがとうございます。」

瑠「この劉って…だあれ？」

フィ「瑠璃ちゃんは気にしないでいいのよ」なでなで

ゼ『そして、そこで賞品をもらいました。』

ク「滅刃シリーズの滅刃 神を除いた全て、優特製料理セット（中華、和食、洋食）、好きな人を一日独占券（デバイス陣にも）を頂きました。」

マ「滅刃シリーズの滅刃 神を除いた全てって……すごすぎる。……」

フィ・ク「『この券で劉ちゃんと……』／／／」

マ「あいつらは……（汗）」

エ「この券で瑠璃ちゃんと……ぐっふっふう」

ゼ「貴様のぶんはないぞ……！」

春・リ「よく言った（言いました）ゼロ……！貴様（貴方）のぶんはねえ（ありません）……！」

ドガツ……！

エ「はでぶふ……！」

瑠「あ！春……お兄ちゃんと……リオラお兄ちゃんだ……！」（リオラに抱きつく）

優・セ・イ「……そして、お前は死になっさー！ーい！ー！！！」

エ「ごぼらっぱー!？」

優「貴方は前回、私の妻を汚しました。よって死刑」

エ「なんで女口調?!そして、なんで格好が東方のチルノ服!？」

セ「優は今あまりの怒りに女口調になっているだけです。」

イ「それよりも…覚悟はいいですね?」「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

エ「はい!セイとイカロスのご奉仕という名のお仕置きならッ!」

優「いいんですね?」

エ「お前はよくないッ!」

春「問答無用だ!」

エ「に、逃げてやる!ー!シン・シュドルク!ー!」「ダッシユ

フィ「逃げたわね……」

ク「でも、バラランシャ様からの天の鎖エルキドゥがエロトを追ってたわ。」

ゼ「しかも春人の機能が追加してあるな、あれは。」

リ「瑠璃ちゃん、少し離れててね。……影分身！」

マ「何する気だ？……分身がエロトに追いついて捕まえて……からの、千鳥流しか。」

フィ「あ、天の鎖エルキドゥにつかまって、先ほど届いたルシフェリオンブレイカー！！」「極光斬！！」「エクスカリバー！！」が直撃したわね……」

ゼ「でも、あいつ……笑ってないか？」

エ「ぐふッ！……ふひひっ……この技の味は……星菜、ライラ、桜花
だな。女はすべて俺のものだああああ！！！！！！」

優「死になさい！！！！」

ドカツ！

エ「ツルペイ！？」

春「こんの肩がッ！！」

バキッ！ドゴッ！グシャッ！

エ「がはっ！？こんのお、エクセレスザケルガ！！！！」

春「こいつ……反撃してきやがった！！！！」

優「面倒くさいわね。」

セ「でも……」

イ「排除します！」

エ「セイとイカロスには喜んで！！後は死ね！！」

春・優「……………」

フィ「あ、まずいわね……」

瑠「リオラお兄ちゃん／＼」

リ「よしよし」なでなで

春・優「お前が死ねや……ッ……………」

エ「うわぁ……こいつらギャクギレしやがった!？」

フィ「いやどこがギャクギレなのよ!？」

マ「にしても、エロトのおかげで俺も平和になった。」

ゼ「よかったな。」

ク「そんな貴方にちよつとしたスリリングな体験」

マ「…あつ。」

リ「兄さん、手伝います。」

春「ああ。こいつは今クロス!!」

優「いくぞ!!」(女口調がとけた

セ「ですね」

イ「では、殲滅を開始します。」

リ「いきます!!麒麟!!!!!!」

春「死滅の黒薔薇!!!!!!」
ゲイ・バルカロール

優「希望と終末が交差する斬撃（ホープエンドクロスブレイカー！
！……！！）」

セ「ルシフェリオンブレイカー……ッ！……！！！」

イ「アポロンAPOLLON！！！！！」

ク『では、アンタも逝ってきなさ〜い！』
マ「それって、ちょっとしたスリリングじゃな……」

ヒュン（転移された

マ「うっそ~~~~ッ!？」

エ「よう。」

マ「なんで俺まで……そして、おまえはなんで笑っている？」

エ「セイとイカロスの全力を体で受け止める……。ふひっ！俺、イクかも。」

マ「うん、死ぬ……って、きこぎゃあああつあつあああつあああ
ああ

.....」

フィ「ほかの作者様達の攻撃も一緒にくらってるわね……」

瑠「わあ、芸術だね」

フィ「え……！？そ、そうかな？（汗）」

ゼ「瑠璃が言うならそうなんだ！」

ク「うるさい親父ね。」

マ・エ」「……………」

イ「殲滅完了」

優「さて、帰るか。」

セ「はい。」

ヒュン（優達が転移した

春「もういいだろう」

リ「では、兄さん。先に帰ってますね。」

春「わかった。」

ヒュン（リオラが転移した

春「な、なあ。瑠璃？」

瑠「……なに？」

春「えっと……とりあえず……ごめんッ！……！」

瑠「むう……とりあえずなんだ……。」「ジー

春「あれ？え、えっとお……（汗）」

フィ「こんな春人を見るのも面白いわね。」

ゼ「瑠璃に何かしたらクロスー!!」

ク「面白いんだからいいじゃない。」

春「え、えっと……（汗）」

瑠「ふふっ／＼／＼／」

春「へ？」

瑠「うそだよ。もう許してるから／＼／＼／」（春人に抱きつく

春「そ、そうなのか!?／＼／＼／」

瑠「うん／＼／＼ごめんね、イジワルしちゃって。」

春「い、いや…今回は、お、俺も悪かったし……その……」

瑠「春お兄ちゃん、ちょっとしやがんで？／＼／＼／」

春「うん？」

チュッ

瑠「えへへ／＼／＼チュウするの久しぶりだね／＼／」

春「そ、そうだな／＼／」

瑠「もっと…する？／＼／」

春「えっと…い。いいのか？／＼／」

瑠「うん／＼／＼」

春「じゃ、じゃあ…／＼／」

フィ「あ、あれは……」

ゼ「月光閃火様の【万達者攻撃フルコース】オール・マスターだな。」

ク「随分遅れてきたわね。ま、瑠璃ちゃんが危ないからとりあえず
転移つと」

瑠「ああ！春お兄ちゃんがぁ！！！！」(涙目)

ゼ『ふんっ！瑠璃にキスされた罰だ！！』

フィ「それって、春人が悪いの？」

ク『どうでしょうね…。では、今回はここまでよ！』

フィ「感想どんどん頂戴！！」

瑠「ええ…えつと…楽しみにしていますね！」

マ「では次回！！！！」

フイ「復活したの!？」

マ「もちろん!俺は攻撃慣れしてるからな!」

ク『哀れな男ね…。』

瑠「春お兄ちゃんが~~~~~」(泣)

第38話…いきなりですか…。第二戦始まるよー！（前書き）

はい。38話です…

どしどしおしゃべり…。ではおしまいです…！

第38話：いきなりですか…。第二戦始まるよ〜！

オレ達はタマモの案内で、洞窟に来て体を休めていた。

「少し……疲れたな。」

「そりゃそうよ！劉ちゃんったら無茶ばっかするんだもん！」

オレの言葉に怒るフィオネ。

「しょうがないだろう？それより、フィオネはしっかり休んでくれよ。じゃないと、ユニゾンもできないんだからさ。」

ユニゾンができれば魔力が回復するから、こんな傷はすぐに治る…はず。

「わかったわ。少し眠るわね〜」

フィオネはそう言うと小さくなり、オレのハンカチをかぶって寝始める。

「もう少し待っててな。ゼロ、クリス。」

手にはまだボロボロのデバイス。

「それはなんです？」

タマモがオレに聞いてくる。

「そうだな。オレ達の事…話そうか。」

オレはタマモになぜこの世界に来たのか、前の世界ではどうだったのかを話した。

「許せませんね！……！」

オレの話を聞き終わったタマモはキレていた。

「なんなんですか！？そのなのはやフェイト、アリサにすずかっ子達は！？」

ほかの女子達に……。

「なんでさ（汗）」

「だってですよ！？アタシのご主人様マスターに手を出すなんてツ……！」

タマモはそう言うと、オレの体に自分の尻尾を巻きつけて、その上から抱きついてきた。

「た、タマモ！？／／／」

「ご主人様マスターは誰にも渡しませんツ……！」

なんだろう……あつたかい……。だけど、それだけじゃない……。

「ふわふわだ……ッ」

そう。タマモの尻尾はものっそいふわふわだった。そして……

「体の傷が癒えている……？」

さつきまで痛んでいた箇所がなくなっていた。

「はい。一応、治療術を使いましたので。」

タマモはオレに微笑む。

「そうか。ありがとう、タマモ……。」

オレはこの心地よさになんとも言えない安堵感を覚えながら、意識を手放した。

side out

タマモ side

（なんだろう。今度の^{マスター}ご主人様は前までのマスターとは全然違う感じがする。）

私は自分の胸の中で眠っている新しいご主人様を見る。^{マスター}

(こんなに強いのに、見ていて放っておけない感じっていうのかな?)

とにかくアタシはこのご主人様^{マスター}に惹かれた。

(にしても…違う『世界線』ですか…少し…面倒くさい状況ですね。)

ご主人様^{マスター}の顔にかかっている前髪をどかして上げる。

(ま、ご主人様^{マスター}のためにも、私の『世界一幸せなお嫁さん計画』のためにも今回は頑張っていきましょうか!)

side out

劉 side

「…ん……?」

オレが目を覚ますと、タマモが洞窟の入り口に結界みたいな物を張っていた。

「あ、おはようございます。ご主人様。マスター」

オレが起きたのに気がついたタマモは微笑みながら挨拶をしてくる。

「あ、ああ。おはよう。」

あまりにも普通に挨拶してくるタマモにオレも戸惑いながら挨拶をかえす。

「劉ちゃん、おはよう!」

すると、今度は後ろからフィオネが抱きついてきた。

「ちよっ!? フィオ! あー! ツ! ! ! 何やってるんですか、貴方

はーッ！！！」…タマモ？（汗）」

「なによ！劉ちゃんは私のよー！！」

「いいえ！違いますう！！ご主人様はアタシのですう！！！！」
マスター

タマモとフィオネがオレの横でケンカし始める。

「あ、あのさ、その前になんで結界なんて張ってるの？」

「敵襲がきたからに決まってるじゃないですかあ。」

タマモはオレの質問に簡単に返してくる。

「え？て、敵！？」

「そうよ。でも、劉ちゃんは疲れていると思ったから、この【私】が寝かせておこうと…」

「違います！！この【アタシ】が最初に言ったんじゃないですか！」

はああ…。クリスがいなくても、この言い合いは止まらないらしい…。

「で、敵ってのは？」

「えっと、なのはちゃんとフェイトちゃん、あとは…クロノかな。」

フィオネが三人の名前をあげる。

(クロノかぁ。こっちのクロノってどうなってるんだろ?)

「ま、アタシがいれば平気ですよ！」

タマモはそう言うと、一人だけで結界の外に出て行った。

「ちょッ!! フィオネ、オレ達も行くぞ!!」

「わかってるわ! 安心して! 劉ちゃんは私が守る!!」

(さいですか。)

起きたばっかの戦闘はきついけど、タマモのおかげで傷はだいぶ減っている。

「よしッ! 行くぞ!!」

オレとフィオネも結界の外に出た。

「そこのお前たち!!今すぐに武器を捨て投降するんだ!!」

外に出ると、クロノがこっちにエクスカリバーを向けてきた。

「って、エクスカリバー!?!」

オレはクロノの持っている物を見て驚く。

「よし、投降する気はないみたいだな。では、いくぞ!てやっ!!」

戦いたくてうずうずしていたのか、すぐに投降をする気がないと判断したクロノはそう言つとオレに斬りかかってくる。

「クロノ!私も手伝うよ!」

フェイトもこっちにやって来る。

(タマモは…なのはと対決しているみたいだな。)

「フィオネ!ユニゾンいくぞ!」

「オツケーツ!」

「ユニゾン・イン」

オレはフィオネとユニゾンして二人と対峙する。

「フィオネ、体は大丈夫か？」

《うん、平気だよ！》

どうやら、ユニゾンしても何も問題はないらしい。

（よしッ！クリス、ゼロのリカバリーモード起動！）

このユニゾン状態のなら、魔力の心配はないと判断したオレはデバイスの修復を開始した。

「貴様！何をした！？」

クロノはオレの容姿が変わった事に驚いたのか、オレに怒鳴ってくる。

「クロノ、そんな関係ないよ。早く、消しちゃおう？。プラズママシンサー……」

フェイトは冷静にオレに向かったの攻撃の準備に入る。

《うっくん、やっぱり攻撃しにくいなあ……》

フィオネの言う事ももつともだ。だけど……

「やらなきゃこっちが…死ぬことになる。投影開始！トレスオンエクスカリバ

……」

オレもクロノにならって、エクスカリバーを投影する。

「なッ!?!」

クロノがオレの投影した剣を見てまた驚く。

「ファイアッ!?!」

オレが投影したと同時にフェイトがランサーを撃ってくる。

《劉ちゃん!》

「まかせろッ!?!」

オレに向かってくるランサーをエクスカリバーで斬っていく。

「余所見をするなあ!?!」

オレが攻撃を防いでいると、いつのまにか後ろに回りこんでいたクロノが斬りつけてくる。

「あまいよ。」

オレはフェイトのランサーをすべて斬りおとすと同時に振り向き、クロノの攻撃を防ぐ。

「貴様の……本物なのか？」

クロノはオレに斬りつけながら聞いてくる。

「なにがだ…っよー!!」

「くっ!!…そのエクスカリバーの事だ!!」

クロノはオレの斬激を受け止めながら言う。

「…一応、本物だけど…おまえのは？」

「……………だ。」

「え？」

クロノは急に俯くと、ボソツと何か呟く。

「これは…レプリカだあああああ………!!」

《「え……ええええええ!!?!?」》

クロノは涙目になりながら、オレに怒鳴ってくる。

「う、うそ……。」

「うるさいうるさいうるさい……!!」

クロノはそう叫ぶと、剣を構えオレに突進してくる。

「私もいるんだよ！」

後方からフェイトがバルディッシュをザンバーモードにしてやってくる。

「ふんっ！！！！」

クロノは無視して、オレはフェイトのザンバーを受け止める。

《クロノがきたわよ！！》

フィオネが知らせてくれる。

「トレスオン投影開始！！絶対守護の盾アイキス！！！」

オレは絶対守護アイキスの盾を投影して、クロノの攻撃を受け止め、

「てりゃああああ！！！！！」

さらにフェイトのザンバーを押しつけて、フェイトを吹っ飛ばす。

「きゃあああ！！！」

フェイトは吹っ飛ばされると、木に激突して倒れる。

「絶対守護の盾!!」
アイギス

絶対守護の盾でその爆発を防ぐ。
アイギス

「これは…量子変速？」
シンクロトロン

「まだだあ!!」

クロノが手を前にかざす。すると、風：真空刃がとんできた。

「今度は風力使いかよ!!」
エアロシューター

オレがその真空刃を避けると、その避けた先でクロノがレプリカを構えていた。

《空間移動!?!》
テレポート

「くッ!!」

オレはいそいで、エクスカリバーで防御をとり直すか、

「レプリカだって、本物に勝てるんだよあ!!!!」

レプリカでも剣だ。防御が一瞬遅れたオレはそのまま斬りつけられ

……

《劉ちゃん!!》

「さらに！ファイアスロア火炎放射！！」

「うわあああああ！！！！！！」

オレはクロノから発した炎に巻き込まれた。

「……………マルチスキル けほっ…多才能力…か。」

オレは膝をつきながら、『とある科学の超電磁砲』の木山先生の事を思い出した。

「ふん。僕の事を甘く見るところになる。」

クロノはレプリカをオレに向けながら言う。

その時……………

『 recovery complete 』

ユニゾンした時に発動しといたデバイス修復…リカバリーが完了したようだ。

「クリス…ゼロ…」

『すまん。』

『私は貴方の妻よ。絶対に戻ってくるわ。』

「またせたな。さっそくだけど……」

オレは二つのデバイスを握り締めながらクロノを見据える。

「くッ！僕がさせると思つか！」

クロノがレプリカを振りかぶる。

「そうはいかないよ。ゼロ！クリス！セットアップ！」

『set up』

クリスとゼロを起動すると、オレの体を眩い光が包み込む。

「し、しまった！」

クロノがこの光から目を逸らす。その間に、オレの体にはバリアジヤケットが展開される。

「クリス！ファーストモード！！クリスを媒体に投影開始！トレスオンエクス
カリバー！！！」

『了解よ！！』

合成魔法でクリスにエクスカリバーを投影する。

「くっそ〜！これでも喰らえ！！アタッククラッシュ念動砲弾！！！」

クロノが腕に念力を纏わせてパンチしてくる。

《「そんな攻撃で大丈夫か？エクス……」》

突っ込んでくるクロノに向かって、剣を振りかぶる。

《「…カリバー…ッ！！！！！！！！」》

輝きを増した黄金の光を放った。

放たれた魔力同士はぶつかる。

「くッ…管理局は……負けない！こんな…腐っているヤツらなんかにい…！…！」

フェイトがオレに叫ぶと同時に、魔力を上げてくる。そして、こっちが押されはじめていく。

「どっ！？これが…これがッ！！…管理局の…力なんだああ！！！！…！」

フェイトの叫びを聞くと同時に、オレの中にある想いが込み上げてくる。

そっか…。こいつはオレの知っているフェイトじゃないんだ…。

…この世界線での管理局は腐ってる……。その管理局のせいで、その住民までもが腐ってしまっている。

認めない……オレはこんな世界線は…認めないッ！！

《劉ちゃん…》

「オレは…この世界線を認めないッ！そして、フェイト！お前にも…絶対に負けない！」【約束された勝利の剣】《エクスカリバー》
「…！！！！！」

オレはフェイトに叫び返す。

同時に、一【約束された勝利の剣】《エクスカリバー》がそれに答える様に、魔力を爆発させる。

「なッ…！！！」

その力に驚くフェイト。だが、その表情もすぐに黄金の光に呑み込まれていった。

第38話：いきなりですか…。第二戦始まるよ〜！（後書き）

マ「…ふう……………終わった…」

フィ「おかえり〜。」

ク「はあ…アンタ、何してたの？」

マ「いや〜、熱が下がっては、上がったの繰り返しです〜。」

ゼ「大変だったな。」

マ「ホントだよ…。しかも、まだ頭が働かないし…。」

ク「だから、こんなグダグダなのね…。」

フィ「では、感謝コーナー！！」

ゼ「ユタ様、犀龍様、メガネ様、TH・F様、けーくん様、仮面ライダーデイケイド神様、紅 幽鹿様、バラランシャ様、畏無様、月光閃火様、Arishia様、夜神様、空言天狐様、感想ありがとうございます。」

フィ「お土産コーナー！ユタ様からは、後書きの間、エロトは入れないイージスを展開（これで優勝賞品のごはんをとのこと）

メガネ様からは、劉にタマモと同じ着物

TH・F様からは、エロトに「TOSのミ スの無限キック」

仮面ライダーディケイド様からは、イグザズノシスと螺旋丸と月読、真・聖王の鎧と聖王の剣と聖王の盾、瑠璃に世界一綺麗なドレス、フィオネには人造人間の体

紅 幽鹿様からは、エロトに某閻魔さまのお説教が入ったレコードテープ、マーボに、ヘルメスのサンダル、劉に、慈悲を持ち氷の刃『アルマス』、瑠璃に、狐耳、フィオネにextraのセイバーの服

バラランシヤ様からは、春人特製ウイルスプログラムをゼロに。詳細：春人が直々に作り上げたデバイス専用ウイルスプログラム。対象のデバイスに気付かれることなく侵入し、そのデバイスの保存しているデータの中で嚴重にプロテクトの掛かっているものや、デバイス個人が保存しているデータなどを周囲のデバイスへと流出させる。

データを全て流出した後、AIプログラムを一時的に狂わせ、変態の様な性格へと変化させる。

畏無様からは、劉に、『11eyes』の臯月駆の制服verのコスプレ服、フィオネと瑠璃に、『GOT EATER』のアリサ（フィオネ用）と『Angel Beats!』の仲村ゆり（瑠璃）のコスプレ服

夜神様からは、リニス（ネコ）&キャスター（狐）のヌイグルミ

空言天狐様からは、エロトにトリプルブレイカー&アルカンシエル&核弾頭をセットにして、999999999（滅んでも大丈夫そんな小惑星付）セット、世界終焉の剣『ワールド・エンド・ソード』レプリカ（レプリカの為、本物の四分の一ぐらいの威力で、天地乖離す開闢の星『エヌマ・エリシュ』と同じ威力）、刺し穿つ死棘の

槍『ゲイ・ボルク』× での攻撃、審聖・人ヲ裁ク神×500000、滅びの剣×650000、メギドラオン×700000、ハルマゲドン×800000、逆行運河・創世光年×1000000
最高級の材料を使って悠妃が作ったストロベリーケーキ（男衆が食べる）一ヶ月お腹を下す）、瑠璃にマロンケーキ（食べると体が25歳の体になる）、エロトにロールケーキ（食べると体中に紫、青、緑の斑点が出来る）を頂きました。ありがとね〜！」

マ「きつと、エロトも今頃苦しんでいるでしょう。」

ク『…なにその手抜き。』

マ「……………（汗）」

ゼ『それより、瑠璃は？』

瑠「…こ、ここだよ……………けほっけほっ……………」

マ「????どうした?」

瑠「うう〜…頭が痛いよ〜、喉が痛いよ〜、鼻水が止まらないよ〜。」

フィ「どれどれ……………うん、風邪ね。」

ク『あらあら。しかもこれ……………どんな魔法でも、治らないヤツじゃない。』

ゼ『なんだと!?では、もう治らないのか!?!?』

マ「まあ、落ち着け。」

ク「そうよ、お父さん。これは、安静にしていれば自然に治る風邪よ。」

ゼ「そ、そうか。よかった。」

フィ「という訳で…瑠璃ちゃんはしばらくおねんねよ。」

瑠「けほっ…は〜い…けほっけほっ…うう〜」

マ「フィオネ、おまえも一応看病についてやれ。」

フィ「うん。わかったわ!」

ゼ「治ればいいがな〜」そわそわ

ク「アンタ…動けないのに、器用な真似するわね〜。」

マ「…という訳でして…今回はここまで!」

ク「アンタ…絶対に手を抜いたわね…(汗)」

ゼ「だな。ま、みんな、感想をいっぱいくれ!」

マ「…で、次回もよろしく〜!!!(汗)」

マ「予約を頂いたゲストさんは次回招待させていただきます！詳しくは活動報告を見ていただくと……。今回は、本当に申し訳ございませんでした！！！！」

第39話：クリスマス&ゼロ完全復活！！でも、周りが余計にうるさくなりました。

さて、もうこの作品も後一話で40話ですね。
こんなに続くとは思いませんでしたよ。

それですね、PV313、681アクセス、ユニーク30、9
25人を突破しました！！

読んでくださっている読者の皆様、本当にありがとうございます！
これを記念にまた番外編でもやろうと思いましたが……皆様はどうで
しょう？「番外編をやってほしいな」か……または、「本編をやれ
よ！更新遅いんだからよッ！！」

皆様の意見を教えてくださいさるとうれしいです！！
では、39話はじまりま〜す！

「はあはあ……」

オレはフェイトが落下していくのを見る。

(助けたいけど……ここで助けたら……な。)

《劉ちゃん……大丈夫?》

オレの心を読んだのか、フィオネが心配してくれる。

「はあ……まったく、勝手に心を読むなって言っただろ?」

《よ、読んでないよ!!ユニゾンしてるから、劉ちゃんの心の中がわかつちゃうんだよ》(汗)《》

あ、そういうことですか……

『劉ちゃんくん!!夫として、帰ってきた妻に一言何か言ってみよう!愛してるとか愛してるとか愛してるとか……』

クリスはまだリカバリーが完全ではなかったらしいな……。」

『ふう。ま、今回は迷惑を掛けたな。』

そんなクリスを見無視して、ゼロが話してくる。

「いや、今回は時の庭園で無理をさせてオレが悪いから。」

『それでもだ。今回はすまなかつた。』

『私たちデバイスは、主の期待に答えられる様にしなくちゃいけないのね…』

ゼロに続いて、さっきまで一人壊れていたクリスマでもが急に真面目に謝ってきた。

《く、クリスが…直った!?!》

『私はもうどこも壊れてないわよ!!--』

《なによ!さっきまで同じことずっとループしてたじゃない!!--》

『わ、私が…私が、壊れたレイディオだとも言いたいの!?!』

《微炭酸?》

『違うわよ!--ラ・ジ・オの事よ!!--』

「フィオネもそうだけど、クリスマもよくそんな事知ってたな…(汗)」

『知ってたって、そりゃ……神だから?』

《『「違うだろツ!!--!!--」』》

思わず、ゼロも含めて皆で突っ込むオレ達。

「ま、そんな事よりも……今回はとにかくお前達は悪くないから。」

オレはクリスとゼロに言う。

『そうか?』

「もちろんだよ、ゼロ」

『じゃ、私に「愛してるよ。」……って言うってみて!……ってか言うてく
ださい!……!』

なんでそうなる……

《なんでそうなるのよ!……!》

おお……フィオネと考えている事同じだった。

《いや、私が劉ちゃんの中の心を代弁しただけだよ。まあ、実際私もそう思ったけどね。》

『いいから!……さ、速く言うて!……!さあッ!……!』

「わ、わかったよ。(汗)」

オレはクリスが静かになるなら……と思い、その言葉を口に出そうと

タマモの声が聞こえたと思ったら、急にどでかい爆発が起きて、なのはが吹っ飛んでいった。

「その言葉、ちょっと待ったです!」

そして、オレの横で息を切らしたタマモがいた。

『な、なによアンタ!! 邪魔しないでくれる!?』

「な〜に言ってますか!?!? マスターご主人様はこのアタシのものですからね!」

《『アンタこそ何言ってるのよお!!!!!』》

う、うそだろ……? タマモが増えたって事は…この言い合いの音量が大きくなるってことなのかよ…。

『劉、この人? はどなただ?』

「あ、ああ。この世界でオレを助けてくれて、オレ達の仲間になった……」

「タマモと言います。よろしくお願いしますね。」

『誰がよろしくするかい!! それと、劉ちゃんを助けてくれた事は例を言うわ!』

『ああ、よろしく頼む。あと、劉を助けてくれてありがとう。』

言い方はだいぶ…180度違うけど、言ってる事は同じデバイス達。

《劉ちゃん、そろそろ…》

「おっと、そうだったな。」

《「ユニゾン・アウト!」!》

すっかり、ユニゾンしっぱなしだったのを思い出して、ユニゾン・アウトしてオレ達。

「ふう…にしても、さっきはすごい爆発だったわね。」

フィオネはオレの肩に座ると、タマモにさっきの爆発のことについて聞く。

「しかもなのはヤツ、かなぐり跳んでいったぞ?」

「ああ、アレのことですか。いや、最初は遊んであげてたんですよ。もっちゃん、ご主人様マスターの事を神心で観ながらですよ?でも、そしてたらそのデバイスが変な事言い始めるから、思わず少し力を入れてしまってますね。」

『そういうことだったのか。』

『つか、誰も変な事は言っていないわよ!?!』

「ううん。充分に変な事よ!」

タマモのヤツ…遊んでいたのか。しかも、あれで少し力を入れただけって……

「ホント、向こうも本気でくればよかったのに…。なんですか?あのす、すす…すくらいかーぶれいかー?でしたっけ?あの誘導弾みたいになちっばけなヤツは?」

「スターライトブレイカーね…(汗)」

(本当にタマモを怒らせるのはやめよう…(汗))

ほかのデバイス陣もそれは理解したようだ。

「ん?でも、そんなに強いんだったら、なんで最初に会った時は逃げてばっかだったの?」

たしかに、最初に会った時はなのはとフェイトから逃げているところだったな。

「あれはですね、まだマスターが見つかっていなかったから、技術がほとんど使えなくなっていて……。ま、軽い物なら使えたんですけどね。さすがにそれだけじゃ、対処しきれないと思いましたがでも今は…っと、ほらご主人様、^{マスター}右手の甲を見てください。」

言われた通りに見てみると、そこにはいつのまにか令呪は現れていました。

「令呪。これは、アタシとご主人様マスターの愛の証……これさえあれば、もうアタシに敵う者はいませんよ」

「なるほどね。」

『「けっ！何が愛の証よ」ボソッ』

「ま、その負け惜しみコンビはおいといて……先ほどの洞窟に戻りましょうか？」

「……そ、そうだね。（汗）」

『「まっつてびびっ……！！」泣』

オレは洞窟に戻ると、さっそくクリスとゼロにこの世界線の事を説明した。

『なるほどな。』

『おかしな事になってるわね。でも、アテネならどうにかしてくれそうよね。』

たしかに…でも……

「念話が通じないんだよね。」

ホント、どうしたもんか……」

そんな感じで困っている……

「^{マスター}ご主人様、何か力を感知しました。」

タマモがなにかを感じ取ったようだ。

「あ、本当だ。……っと、あそこからもつすぐ……」

フィオネが指を指す。すると……

「……………え？」

突如、空間が裂けて円型のトンネルのような物ができた。

「な、なんだこれ？」

そこから手が伸びてくる。

「き、気持ち悪いわね……。」

そしてその手は、近づいたオレの腕を掴み……

「え!?! ちょっと!?! う、うわあああああ!?!?!?!?!」

「待ってください!?! マスターご主人様!?!」

「劉ちゃん!?!?!」

空間に空いた穴に引っ張り込んだ。

「……………ここは？」

空間を抜けた先にあつたのは…小さい…部屋？

「よかったわ。間に合つて。」

「うん。間一髪だったね。」

そして、部屋の持ち主らしき一人の女性と女の子。

「はじめまして。いきなり申し訳ありませんね。私はダイダロスと言います。」

一人の女性は知っている。『そらのおとしもの』にでてくるダイダロスだ。

だけど…

「私の名前は【瑠璃】っていいです。あゝ、貴方のお名前は？」

こいつは…誰だ？

第39話：クリスマス&ゼロ完全復活！！でも、周りが余計にうるさくなりました。

マ「39話終わったぜ！！」

ゼ『瑠璃の出番だな！』

ク『そうね。これで仲間になるのかしら？』

マ「いや、ならん。」

ファイ「ならないの?!」

マ「ああ、ネタバレになるかもだけど、先に言う。【この世界線の話】ではならん!!」

キャ「ふうん。あ、アタシも来たわよ！」

マ「おまえは感想返しの時から、乗っ取りに来てたじゃん。」

キャ「まあね。では、感謝コーナー」

マ「ほら、さっそく…」

キャ「そんな事はどうでもいいでしょ？え〜、夜神様、紅、幽鹿様、ユタ様、畏無様、メガネ様、仮面ライダーディケイド様、けーくん様、Arishia様、空言天狐、感想ありがとございませぬ……した／／／／」

ク『なによ。噛んでるじゃない。』

キャ「そ、そんな事はどうでもいいんです！！／＼／＼世界で一番可愛いお嫁さんになれるタマモちゃんはやればできる子……………よしッ！！次は…」

ゼ『お土産コーナーだ。紅 幽鹿様からは、エロトにソラの手料理（十二の命が一気に11個削られる程の不味さです）劉にジョーカ―メモリー、マーボに音撃棒・烈火、瑠璃にチヨコクッキー（カクリーゼロ）、フィオネには、もふもふの尻尾（これで劉君をいぢころだ）

畏無様からは、瑠璃に、『夏目友人帳』のにゃんこ先生こと、斑（普段の依り代の姿）の巨大ぬいぐるみ

仮面ライダーディケイド様からは、マーボ―にディメンションキック！イグザズノシス！メルクオーブ！月読！（21世紀間フルボッコされるが外では一瞬）、犬剣

空言天狐様からは、マーボ―に風邪によく効く苦い漢方薬を、あと瑠璃用に風邪によく効く漢方薬が入ったカプセル、祈祷用の巫女服、修道服を頂いた。ありがとう。』

キャ「うわーッ！！ゼリフとられたーッ！！！！！！！！！！」

ク『一々うるさい女狐ね〜！！』

キャ「うるっさいですね！！おい！そのデバイスこれでも喰らえ！！まずは金的っ！次も金的っ！懺悔しやがれ、コレがトドメの金的だーッ！！」

ゼ『なぜだろう…ないはずなのに、勝手に体が震える…』

マ「あ、ああ、聞ってる俺もだよ……」

キヤ「ふう。ま、いいです。さて、今回のゲストは……」

マ「今回は、畏無様の作品から『魔法少女リリカルなのは〜偽リノ騎士』から、双葉、悠、スカイと作者の月光閃火様とその作品『WOLFRANG - ウルファング - 〜狼男は不良青年〜』から輝刃だ。」

双「こんにちわです。」

悠「……ったく、いきなりいくというんだからな（汗）」

ス「どうもですね。」

輝「久しぶりだな。」

キヤ「まったく、またアタシのセリフを……。あーあ、これだから！死にたいのかなー？それとも殺されたいのかなー？うーん、男の人の気持ちって分からないですねーッ」

月「な、なんだこの物騒な事を言っているヤツは……（汗）」

マ「放っておいてOKだ。それより、悪いな。今は瑠璃のヤツ、風邪で出て来れないんだよ。」

月・輝「な、なんだってー!?!?」

双「え？そうなんですか？」

マ「申しわけないことした。だが、これも必要な犠s…」本当に何してんのよーッ！…！」「…あべしっ！？」

フィ「こいつだけはクロス…」

キャ「その必要はないみたいですよ。」

ク『あら、本当ね。』

マ「……………あべっ？」

マ「た、タマモ！護つてよ！！」

キャ「うくん……今回は作者さんが悪いのでパス……みたいな」

ゼ「ホシが黒いな。（汗）」

マ「そ、そんぎゃあああああつあああああつあああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああ

ああああああああああああああああああああああああ
ああ

ああああああああああああああああああああああああ
ああ

ああああああああああああああああああああああああ
ああ

ああああああああああああああああああああああああ
ああ

ああああああああああああああああああああああああ
ああ

ああああああああああああああああああああああああ
ああ

ああああああああああああああああああああああああ
?!

?!
?!

?!!??!!??!!??!!??!!??!!??!!??!!??!!

フィ「ふう。今回ゲストに来ていただいた方々にはお詫びと…」

ク「私のヌードしゃ「いませんです!」……………」

ゼ「デバイスにヌードなんてあるのか?まずはそこからだ。(汗)」

キャ「え〜、アタシ特製の「これを使えば誰もがモテる!気になるあの人に届け!この想い!」……………まあ、ぶっちゃけると媚薬を差し上げます。」

フィ「ちよツ!?!」

キャ「きゃ!まちがえて転移させちゃいました」

ゼ「しらじらしいな。」

ク「ま、いいわ。読者の皆は感想ちょうだいね!」

キャ・フィ「「では、次回もよろしく〜!!」……………」

「泣」……「マ」

第40話：頼りになる人って、その人の名前が出るだけで安心するよね？（前書

意外と番外編をしてほしいとの意見がありましたので、

次回は番外編をやらせていただきます！

形式はいつものあとがき風で。

では、40話はじまりまーっす!!

第40話：頼りになる人って、その人の名前が出るだけで安心するよね？

「……………あのお？」

目の前の女の子は首を傾げながらオレに聞いてきた。

「わ、私の顔に何かついてますか？／／／」

「い、いや、なんでもないよ。(汗)」

どうやら、オレは無意識でこの子の事を見つめていたらしい。

(にしても、この子はいつたいたいなんなんだろう…。原作はもちろん、ほかの作品でも見たことは……ん？『星空へ架かる橋』に出てくる神本 円佳（しんもと まゆか）に少し似ているかな？)

「?????／／／／」

つと、またもや見つめてしまっていた。

「「ご主人様マスター？」」

「劉リウちゃん？」

ゾクッ！

オレが女の子…瑠璃だっけ？瑠璃の顔を見ていると、背後からオレを呼ぶ死神…もとい九尾…は違うね。普通にフィオネとタマモがいた。

「な、なにこの娘に見惚れちゃってんのよ!!」

「蕩れーなんですか!？ご主人様はこの娘に蕩れなんですかッ!？」

「マスター フィオネさん誤解ですよ。あと、タマモはよくそんな事知ってるな…。」

「この蕩れは流行ると思っただんですけどね。」

タマモはオレの心の声を読んだのかそう返すと、さっきまでの怒りは何処へやら、急に一人でうんうん悩み始めた。

(ホント、どうしたんだ？こいつは。(汗))

「…で、その娘は？」

いまだにジト目のフィオネ。

「あ、私達は…」

フィオネに自己紹介を始めるダイダロスと瑠璃。
そんな瑠璃の横顔を見ながらオレは思う。

(なんだろう？この娘には親近感…っていつのかな？初めて会った
感覚じゃないや……)

オレがまた瑠璃の顔を見てみると、向こうもオレの視線に気がつく。

「あの〜、私達って…前に何処かで会いましたか？」

「!?!?!」

やっぱり向こうもそう思っていたのか…。

(でも、オレ達は会ったことはないはず。少なくともこの世界線は着たばかりなんだから。)

「もう、瑠璃はおかしな事を言うわね。この方達はこの世界線には着たばかりなのよ？」

ダイダロスが言った言葉に驚くオレ達。

「な、なんでそのことを知っているの!?!」

フィオネがダイダロスに聞く。

「私達も聞かされたのよ、貴方達がここに着く少し前に。」

ダイダロスはフィオネの問いに答える。

「へえ。いったい誰に聞いたんですか？」

タマモは少し警戒しているのか、手には呪符を持っている。

「えっと…誰だっけ？」

ダイダロスの横では瑠璃が頭に？マークを浮かべている。

（おいおい。そこは覚えていようよ）汗（

瑠璃に目をやりながらそんな事を考えていたオレだったが、ダイダロスの口にした言葉にその考えは吹っ飛んだ。

「アテネっていう…自称神って言っていた変人よ。」

「.....え？」

今こいつ…アテネって言ったか…？

「まったく、最初はいたずらかと思ったけど、本当に貴方達に来るんだもん。驚いたわよ。」

ダイダロスはその後もなにやら言ってるが、正直耳に入らない。

「は、ははは…。」

オレの口からは渴いた笑いがこぼれ…

「りゅ、劉ちゃん！？どうしたの!?!」

「^{マスター}ご主人様!?!」

目からは涙がこぼれていた。

「…そっか。アテネが……そっか…。」

オレはアテネの名を聞いた途端、安心したのか急にその場に腰を下ろす。

『ちよっ！？劉ちゃん、貴方どうしちゃったの？』

「い、いや…なんでもないよ。」

『無理もないな。この世界線にきてからの劉は少し無茶のしすぎだったからな。そこに頼れるアテネの名を聞いたんだ。やっと、緊張の糸が解れて安心したんだろう。』

ゼロがオレの心を代弁してくれるが、これはこれで恥ずかしい。

「そうだったんですか、ごめんなさいマスターご主人様。気付いて上げられなくて。」

「私も、ごめんね。」

『そうよ。ま、私は気付いてたけどね！』

「気にしないでいいよ。フィオネ、タマモ。……クリスは…ね？」

オレはタマモとフィオネに感謝して、クリスにはもうなんて言えばいいのか分からない気持ちでいっぱいだ。さつきとは違う意味で涙がまたでる。

『ほ、ほら、劉ちゃん？安心したのよね？大丈夫！私が貴方を包み込んで上げるから、私の胸で泣きなさい！…！』

(…おまえ…デバイスじゃん…)

「『『』……………」

フィオネ、タマモ、ゼロ、ダイダロスまでもが、クリスにジト目を送る。

「????」

横では瑠璃が？マークを浮かべているのは…お約束だな。

「…で、アテネは何か言ってたの？」

気を取り直し、ダイダロスに聞く。

「ええ。伝言はあるわよ。でもこの内容も無茶苦茶なのよね。」

「いいから、教えてくれるか？」

「そ、そうね。わかったわ。」

ダイダロスは何やら深刻そうな顔をしている。瑠璃もだ。

「では…コホン！」

ダイダロスは軽い咳払いをすると、内容を口にした。

「え、私の可愛い、可愛い劉ちゃん。お元気ですか？私は今もうスピードで貴方の事を探しています。なぜ、探しているのか？もちろん、劉ちゃんの事が心配なのと、劉ちゃんが可愛いから！！あ、可愛いと言っても、魔法を使っている時の劉ちゃんはカッコいいわよ／＼／＼…っと、話が逸れたわね。それで、貴方達が着くであろう世界線を見したので先に現地の人に伝言を頼みました。まず、この世界線は最悪です。在ってはいけない世界と言っても過言ではないわ。理由はもちろん、エロトのせいよ。アイツはこの世界でも転生者^{トリンパー}だわ。そして、ヤツのハーレム計画は進行中。むしろ、エロトがハーレム計画を進めていった末路がこの世界線なの…。それなんだけど、劉ちゃん達がこの世界線から脱出する方法を教えてくださいわ。」

そこで区切るダイダロス。

「やっぱり、エロトのせいなのね。でも、なんでいきなり、脱出方

法？」

フィオネが口に出す。

「あ、では続きがまだあるので、……その脱出方法は……この世界線の管理局とエロトを…消す事。アイツを消せばこの世界線は復活するわ。そして、元々この世界線じゃなかった貴方たちはこの世界線から弾き出されて、私のいる…神界に辿り着く事が出来る。後は私が元の世界に帰せばOKって事よ！え？そのまま元の世界に帰せないのか？それはきついわ。だって、劉ちゃんはこの世界線の人達を見捨てる？私の可愛い、劉ちゃんはそんな事しないわよね？じゃ、待ってるわ〜ア・ナ・タ / / / / ……っていう内容なんですけど……」

………なんかアテネのキャラ…変わってない？

「っていうより、なんですか！？この内容は半分はご主人様マスターへの力ツコカワイイ宣言じゃないですかー！ツ！…！あんの駄女神ー！天誅、鉄槌、天罰必中、いいからそこに直りやがれー！ツ！…！」

「お、落ち着けタマモ。そのカツコカワイイ宣言は取り消してくれ。あとお前、アテネの事知ってるの？」

「ええ、だってアタシ言いましたよね？アタシは英霊と言うよりは神だって。」

「あ、ああ……。」

そつえば、言ってたような？

「まあ、元の世界への帰り方も分かったんだし。」

『そうね。管理局とエロトを消せばいいんだもんね。』

『楽勝だな。』

フィオネ、クリス、ゼロの言葉を聞いたダイダロスは猛反対して
くる。

「ば、馬鹿な事を考えるのはおやめなさい!!」

「大丈夫よ！劉ちゃんはある連中に負けないわ！」

フィオネが言い返す。

「それでもです！あの管理局と…そのトップを消すなんて…」

「え！？え、エロトが…管理局の!？」

「…うそ…。」

オレとフィオネが驚く。

「知らなかったの？あの人は管理局の元帥なのよ？」

知らなかった。ある程度の地位にはいると思ってたけど…まさかそんな所にいるとは…

「だ、だとしたら、なんで元帥が態々見回りみたいなことを？」

フィオネの疑問ももっともだが、答えはすぐに出る。

「元帥なのに市民の安全の為に動く…。ま、そりゃモテるかもですね。」

タマモがくだらないとばかりの吐き捨てるように言う。

『まあ、元帥と言っても、アイツの力は分かるわけだしな。』

「でも…！！あの人達の力ははつきりいつて最凶です！私もそうですが…瑠璃だって何回も痛い目に…。」

そこで、ダイダロスは顔を俯かせる。

オレは瑠璃に目を向ける。

「え、えつとですね…前にもあつたんです。反管理局運動が…。でも、それは危険な事だから、私とダイダロスはその人達を止めようと、その人達の拠点に行つたんです。その時に…。」

「管理局の人と鉢合わせてしまって…その瞬間、局員は何も言わずに唯、攻撃してきて…そのせいで…瑠璃は…。」

そこまで言うと、ダイダロスは涙を流し始める。

「瑠璃が…どうしたんだ？」

「瑠璃が…局員の攻撃を受けて意識不明の重体に…私が開発した a e g i s s l も効かなくて…。」

「そ、そんな！あれはダイダロスのせいじゃないよ！！」

瑠璃がダイダロスを励ます。

「劉ちゃん……」

「マスターご主人様……」

「そうだな。これで、オレも管理局に対する個人的な恨みが出来た。」

「……え？」

ダイダロスと瑠璃がオレの言葉に驚く。

「オレ達の恩人を傷つけられたんだ。これで黙ってろって方が無理だよ。……なあ。みんな？」

「そっくだよね！」

「もっちらんです！！」

「それでこそ、男だ！」

『そんな劉ちゃんが好きよ！』

うん。例によって一人？が空気を読まなかったけど……

「ま、そういうことだから。」

「でも私達のためにそんな危険な事するなんて……」

瑠璃がまだ何かを言おうとする。

オレはそんな瑠璃の頭を撫でてあげた。

「はう……／＼／＼／」

「何も心配しないでいいんだ。これからの事はすべてオレ達に任せ
てくれ、な？」

「は、はいい／＼／＼／」

「よし、いい娘だ！」

オレはさらに撫でてあげる。

「あ、あうう／＼／＼／」

「……いいなあ。」

「そうですねえ。」

『…本当よね。』

「何がさ？（汗）」

女性メンツはなにやら拗ねていた。

『ま、これでこそ劉だな。』

「ゼロ、さっきのセリフと一緒にじゃないか？」

『……………（汗）』

「さて、管理局に乗り込むのはいつにしようか……………」

「それはもちろん！明日です！-」

「えゝ！？-」

タマモさん？何をおっしゃってるのでしょうか？

「そうよね。明日にでも行こうよ、劉ちゃん！-」

ふい、フィオネさん？

『そうね。そして、この世界線をはやく直してあげましょう！-』

く、クリスさん？

『……………諦めよう、劉。』

「そ、そうだな……………」

さすがに明日は早いと思ったが……………ま、いいか。

「明日に行くんですか……………」

ダイダロスが何やら考えると……………

「はい、わかりました！」

と、言っつて研究所の中に駆け込んでいった。

「ダイダロスはどうしたんだ？」

オレは残っている瑠璃に聞く。

「えっと、管理局元帥の部屋には特殊なバリアがあるみたいで、そのバリアは魔力を通さないみたいなんです。なので、ダイダロスはそのバリアを壊すための装置を開発している状態なんです。」

「なるほどな〜」

瑠璃はそう言っつと、台所に向かった。

「「「「? ? ? ? ?」」」」

「え、えっと、皆さん明日戦いに行くとの事なので、それにお腹空いてらっつしゃると思っつたので、私が何か精のつく物を作ろっつと思っつまして。」

きゅ〜

瑠璃が料理を作ると言つのを聞いて、オレのお腹がなる。

「うッ／＼／＼」

「りゅ、劉ちゃん…／＼／＼／」

「^{マスター}ご主人様…可愛いです／＼／＼／」

「ふふッ、じゃあ、作ってきますね！」

瑠璃はそう言つと、調理を開始した。

「わあ！！おいしそうだね〜！！！！」

テーブルには瑠璃が作った料理が並んでいた。

「えへへ／＼／＼私、腕をふるっちゃいました／＼／＼」

瑠璃って案外しっかりしているんだな。

「むう…あ、アタシも料理を学ばなければ……」

「ま、まあまあね。」

タマモは料理ができないのか…、そしてフィオネ。汗がすごいぞ……

『ダイダロスは食べないの?』

「は、はい。ダイダロスは今はいいと……」

「そっか……。じゃ、オレ達だけで食べるか。」

「そうですね。いただきますよ。」

「いったただつきまゝす!!」

フィオネの言葉とともにオレ達は皆で食べ始めた。

「ふう…おいしかった」

「しゅしゅちそうさま」

「た、食べ過ぎましたね」

「お、お粗末様でした。」

瑠璃はそう言いつと、空になったお皿をさげはじめる。

「あ、洗い物はオレ達がやるよ。」

「え？で、でも…」

「そうよね。ご馳走になったんだし。」

「アタシもお手伝いしますよー！」

オレ達は瑠璃の代わりお皿をさげはじめた。

「え…えっと、じゃ、じゃあお願いしますね。」

瑠璃はそういうと、ダイダロスの所に向かった。

「さて、洗い物を始めますか。」

「おーっしーっしー」

「これで、最後かな？」

「ふう…終わった」

「こゝ、これも良妻になるための修行ですね。」

洗い物を終えたオレ達に…

「あ、お風呂に入りませんか？」

瑠璃からお風呂のお誘いがあった。

「ありがとう。フィオネ、タマモ、先に入っておいでよ。」

「「^のいいんですか？」」

「ああ、いいよ。」

二人には先に入ってもらい、その次にオレもお風呂に入り、その日は空いている部屋をかりて、そこで寝た。

「……………どうしてこうなった？」

朝、目を強制的に覚まさせられる。

「…意外と早かったですね」

ダイダロスに起こしてもらい、外を見ると、そこには……………

「局員の大群だね。」

フィオネの言うとおり、外にはたくさんの局員がいた。

「はあ……また、朝からこれですか……。この世界線は戦いが好きらしいな……」

第40話：頼りになる人って、その人の名前が出るだけで安心するよね？（後書

マ「お、終わった〜！40話!!」

瑠「お疲れ様。」

フィ「瑠璃ちゃん、もう平気なの？」

瑠「うん、ありがとね。フィオネ。」

ゼ「よかった！本当によかったあ!!!」（泣）」

ク「はいはい。お父さん、お父さん。では、感謝コーナー！仮面ライダーデイケイド神様、ユタ様、畏無様、夜神様、Arishia様、光閻雪様、月光閃火様、紅 幽鹿様、バラランシャ様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとうございます！」

ゼ「お土産コーナー！畏無様からは、響介特製の新世界産の栗で作ったモンブラン

メガネ様からは、コダイが劉の声真似で「おねーちゃん！大好き！」と言ったボイスを、アテネとタマモに。

Arishia様からは、瑠璃に優の着替えている時の写真（盗撮）、マーボーには……イビルジョー（MHP3）を。タマモにはFate/EXTRAのチート礼装「アトラスの悪魔」を頂いた。ありがとう！」

キャ「このモンブラン！最高ねえ!!」

マ「その前に……ってきた！うわあああああ!!!!!!」

瑠「優お兄ちゃんの…写真／／／／」

ア「おねーちゃんって…やん！劉ちゃんったらあ／／／／」

ゼ「アテネはいつのまに…（汗）」

ク「そして、ゲストの紹介よ！」

瑠「え、えつと、ユタ様の作品『異世界を渡る』から、悠お兄ちゃん」と雷夏お姉ちゃんとフィアお姉ちゃん。バラランの作品『神に何度も殺された青年』から春お兄ちゃんがきてくれたよ！」

雷・フィ「瑠璃！大丈夫か！？」

悠「はあはあ。おまえら…早いな…。」

春「よっ！作者のPCがぶっ壊れて暇だから来た。」

キヤ「あらあら、いらっしやうい」

フィ「春人は久しぶりね〜」

マ「そ、そんなことより、こいつをどうにかしてくれ〜〜！…！
ダッシュ中

春「ん？イビルジョーか。こんなもの……ふんッ！！」

マ「うわあああああ……って、あれ？あいつは？」

フィ「春人がパンチしたら吹っ飛んでったわ。」

マ「さ、さすが規格外。」

春「なんか言ってたか？絹ごし？」

マ「なんでもありません！」（土下座中

瑠「雷夏お姉ちゃん、フィアお姉ちゃんありがとうね。」

雷「いや、元気ならOKだよ！」

フィ「そうだな。」

悠「…で、瑠璃は今何やってんの？」

瑠「えつとね…。アテネとタマモにパンチの仕方を習っているの。」

春「ぱ、パンチ！？」

ゼ『そうなんだ。頼む！なんとかしめて止めさせてくれないか？瑠璃には危険だ！春人なら分かってくれるはずだ！』

春「そ、そうだな。瑠璃！危ないからやめよう、な？」

瑠「え？うゝん……」

キヤ「動揺しすぎですね。」

ゼ『お、お父さんは認めんぞー！ーッ！ー！ー！』

ク『あ、とつとつお父さん言ったわ。こいつ…。』

フィ「で、どうなの？」

瑠「そうだけど……わ、私は春お兄ちゃんのこと……好き……だよ／＼／＼／」

春「…っ！／／／／／／／／／／／」

雷「…なんか…」

フィ「……そうだな。」

悠「俺たちは蚊帳の外だな。」

マ「ま、今回はこいつらで好きにやらせてみようかな。」

瑠「春お兄ちゃんの事も……好きだよ／／／／」

春「そ、そうかそうか。(デレッ／／／／／／／／／／／」

フィ「おお！春人の顔が崩壊してるわ！」

春「う、うるせえ!!!／／／／」

ゼ『お、お父さんはーッ!!!!!!!!!!!!!!』

ク『うるっさいわねッ!』

ア「インフィニティ・ゼロ…強制スリープ」

ゼ『Yes sir』

キャ「哀れですね…」

マ「つと、そうだ。先にお土産を渡しとくよ。これは、タマモが作っていたんだけど。どんな料理も振り掛けるだけでおいしくなる粉なんだと。」

キャ「ま、正直に言うと、麻痺薬なんで。ほかの事にも使ってください!!!」

マ「いやダメだろ!？」

雷「いやありがとう!」

フィ「おもしろそうだな。」

悠「まあ、俺がしっかり見張っとく。さ、今回は帰ろう!」

マ「あぁ。今回はありがとくなー！」

ファイ「…で、」

ア「まだ続いてるわね。」

瑠「／／／／／／／／／／／／」

春「／／／／／／／／／／／／／／」

マ「もういいや。今回はここまで！」

キャ「そうですねえ。あ、感想くださいね〜 タマモとのヤ・ク・ソ・ク ですよ?」

ファイ「そうね!みんなの感想待ってるわ!」

ア「では、次回ね。」

マ「今回は番外編!先ほど紹介させて頂いたArishia様の作品に出てくる、暁優とのコラボだ!瑠璃が一肌脱ぐぞ!」

春「!!!な、なんだって!?!?!」

瑠「そ、そうなの!?!?!」

フィ「そこには反応するんだ…(汗)」

キャ「さすが、ロリコンですね。」

ア「そうよね。」

マ「では、次回も楽しみにしてくださいね〜!」

番外編：うーくん。ツンデレって難しい…。誰か書き方を教えてください！

え、番外編です！

今回の番外編は瑠璃のキャラがある【薬】でおかしくなります…。

「る、瑠璃のキャラを壊したくない！壊したくないんだあああ！！
！」…という読者の方々は、見ないことをオススメします。…あ、
あと、エロトも出ます。120%不愉快な思いをされる方々が出る
と思いますので、そちらの方もよろしくお願いします！

では、番外編：始まります。

番外編…うーん。ツンデレって難しい…。誰か書き方を教えてください！

マ「さて、どうしたもんか…(汗)」

フィ「…そつね(汗)」

ク「あら？面白そつだしいんじゃない？」

ゼ「瑠璃が…瑠璃があああああ！！！！！！」

キヤ「いや、こんな事になるとは…思いませんでしたよ」

マ「ホント、やってくれたよ…」

エ「あ？別によくな？あの瑠璃ちゃんもいいとおもつぜ…はあはあ…」

ク「ちっ！どこから湧いて出たのよ、このGは！」

エ「んだと！？この変態デバイス！！」

ク「だから！アンタにだけは言われたくないのよ！！こんの変態野郎！！」

フィ「そのセリフはクリスにも言われたくないって…」

『ぜ』る~~~~り~~~~っ……!!……!!……!!』

キヤ「あーもう!ほんっとうにうるさいお父さんですねえ!……!!」

マ「……やばい……いきなり、訳分からなくなってるな……では、なんでこんな事になってるのか?今の瑠璃を見てみましょう。……どうぞ。」

フィ「テヘッ じゃないわよー……ッ……!……!……!」

ドゴッ!

マ「ガビシッ!?!?!」

エ「おお!…今はイイのをもらったな」

ク「アンタがそのセリフを言うと、違う意味に聞こえるわね。」

エ「おまえの変換能力がぶっ壊れているからじゃね?」

ク「んなわけないでしょうが!……!」

フィ「ちなみに、エロトはなんていう風に思ってたわけ?」

エ「え?普通に羨ましいな〜って。」

フィ「クリスは間違っただけじゃないじゃな〜いッ!……!……!」

ズドオッ!……!

エ「ありがとっ!ごいま〜……す……!……!……!」キラーン

フィ「あいつ…吹っ飛びながらも笑顔だったわね。」

ク「さすが…変態の中の変態。HENTAI is meね!」

フィ「うん。間違っではないわね。」

キャ「それより、あっちはどうします?」

瑠「しっつこいわね!」

ゼ『瑠璃がああああああ(号泣)』

マ「はあ…大体こんな事になったのって、タマモがいたらずらで作ったのが原因だろう?」

キャ「いや、殿方ってツンデレってというのが好きと聞いたんで、ア

タシもこれでご主人様マスターに好かれるかなあって、考えただけですよ！」

フィ「な、なるほど!!」

ク「その手があった訳ね!!」

マ「おまえら…間違えているからな(汗)」

エ「そうだ！男はヤンデレもクーデレも好きなんだぞ!!」

キャ「アナタはエロければ何でもいいのではなくて？」

エ「もちろんそうだツ!!」

ク「つか、いつの間に戻ってきたのよ…」

フィ「無駄にチートなんだから…」

マ「ま、あんな瑠璃でも今回のゲストを呼べば少しは丸くなるだろう。」

フィ「え？聞いてないわよ？」

マ「そうだっけ？では、今回のゲストは、Arishia様の作品『魔法少女リリカル……なんとか!』のフラグ最高神こと男の娘代表の主人公の暁優です！」

優「俺は最高神でも、男の娘でもなーいッ!!」

6歳くらいまで大きくなってるじゃんかよ。」

マ「ああ。すべては、タマモのせいなんだ。」

キヤ「や、やっちゃいました。」

優「今のポーズ、俺の所の作者に向かってやってあげてくれ。」

キヤ「いいですよ。Arishia様♡やっちゃいました。」

ク「けっ！誰得よ！」

エ「いまのは……萌だな／＼／＼／」

キヤ「蕩れではなくて？」

エ「萌だな／＼／＼」

キヤ「やっぱり、流行らないんですかね……？」

マ「お前はなんでその言葉を推したいんだ？（汗）」

フィ「さ、優はあの瑠璃ちゃんをどうにかしてきてちょうだい！」

優「わ、分かったよ……」

瑠「ふう。もう疲れたわ〜。アンタ、今度私の前で喋ったら……私に関するデータ全部消去ね？」

ぜ『それだけはー……ッ……!!!!! (号泣)』

瑠「はい、喋ったあ！大体アンタは私のお父さんかって言つのよ。」

優「ほら。その辺にしろってあげなよ？」

瑠「はあ？アンタだ……れ……？」

優「????？」

瑠「あ、あえ!??え、えつと……ゆ、優おにちや!??
///////
/」

優「えつと〜、そうだけど？」

キャ「おお！効き目ばっちりですね！」

フィ「瑠璃ちゃんも噛み噛みね。動揺してるのが一発だわ！」

エ「ちツ！これだからリア充は。爆死しろ。」

ク「はいはい、負け惜しみ乙」

エ「誰が負け惜しみなんか言うかあ！！！」

マ「すぐ怒鳴ると凶星だと思われるぞ？」

エ「べ、別に怒ってなんかないんだからねっ！／／／」

全「キモい……………」

エ「わかっていたさ……………」

フィ・ク「勉強になるわね」

マ「いや、学ばなくてもいから」

エ「はあはあ……たまらん！俺、ちょっと行ってくるわ！」

マ「あつ、おい！………行っちゃったよ（汗）」

瑠「あ、あのさ……優お兄ちゃんってさ……す………／／／／／」

優「す?」

瑠「す、……すすすk「キャッホオオオオオ!……!!……る
りちや~~~~ん!!……」

エ「ん~~~~!!……!こ、こんの太もも!たまらん~~~~」

瑠「!……!ちよ、ちよつと!?!?」

エ「は~~~~、その怒った時のきつとした目も最高」

瑠「きゃ~~~~っ!……!こんの変態!……!」

バキッ!

エ「おう!?な、ナイスキック……はあ……い、いいね。ツン
デレ娘に足蹴にされる……興奮しすぎて、死ぬ所だったぜ……」

瑠「そ、そのまま死ね~~~~っ!……!」

ドカッ!

ズゴッ!

バシッ！

エ「ああ……た、たまんねえ／＼／＼あ、頭を踏まれた時なんか……い、イクかと思っただわ／＼／＼」

優「へ、変態だ……って、瑠璃ちゃん？もうその辺にしときなよ？こいつは後で俺が葬るから。」

エ「は？なんで俺が男の攻撃なんか喰らわなきゃいけないんだよ？」

優「おまえのその考え方完全におかしいからな！？」

エ「おかしくないわっ！どうせ喰らうなら、可愛い娘からの方が気持ちいいだろ！？」

優「まず、気持ちよさを求めている時点でおかしいからね！？」

瑠「ほ、ほんとになんなの……？もういいわ……アンタのそれ……潰す。」

エ・優「……えっ？」

優「わ、わかってるよ！！！！！」

エ「はぁ……瑠璃ちゃんが俺の股間に足を置いてる……夢のようだ……
おっと！どうせならこいつを履いてくれ！」

瑠「あら？ハイヒール？いいものもってんじゃない。これ履いて、
アンタのそのイカ臭い汚物を遊んでほしいってわけ？」

エ「そ、そうです！も、もっと遊んでください！！！！／／／／／
いいわぁ。もっと罵ってくれ！！！」

優「つて、お前真正銘の馬鹿だろ！？る、瑠璃ちゃん？そ、それ
だけは止めてあげるんだ……」

エ「うっせえリア充！！邪魔すんな！！！」

優「なんで俺が怒られるんだ！？」

瑠「よし！準備OKね！じゃ、行くわよ？」

マ「あ……………」

キャ「やりましたね！瑠璃ちゃん！一夫多妻去勢拳です！！！！」

フィ「作者は青い顔をして股間を押さえてるわね……」

マ「お、男にしかわからんよ……この痛みは……」

ク「しかも、涙目になってきてるし。」

マ「いや、あの音を思い出したら……………神よ、なぜ男にこの痛みを与えたのですか？」

ア「さあ？知らないわ……。』

マ「……………お前も…神だったな……………（涙）」

キャ「アタシもそうですよ」

フィ「あ……瑠璃ちゃんが……」

マ「……な……そんな……。そんな事が許されるのか？……神よ……。」

キャ「うっくん。これはアタシも予想外でしたよ。」

ク「もう、地獄絵図ね……」

優「る、瑠璃ちゃん?……そんなに足を振り上げて…何をする気だ
い…?」

瑠「あ、あうあうあうあうあう／／／／／／／／／／／／／／／／
／／」

ゼ「る、瑠璃?感触が気持ち悪かったんだよね?…じゃ、じゃあも
う止めるんだ…」

瑠「い、いや――――――ツ!?!?!?!?!」

ブォン!(足を振り落とす音)

マ「さ、さて。瑠璃も落ち着いたし、げ、ゲストの優です！」

優「ど、どうも。暁優です…」

フィ「よく来たわね〜!!」

ク『みんな必死ね。』

キャ「そうでしょうね〜。ま、彼は最初ッからいなかった。それで良いんですよ。」

ゼ『そうだな。』

瑠「まったく、気持ち悪かったわ…」

マ「おまえ、そういうこと言うか!?!さすがに同情したぞ!?!」

瑠「な、なによ!?!うるっさいわね〜!?!」

フィ「ま、まあまあ。落ち着いて(汗)」

優「そうだよ、瑠璃ちゃん?女の子がそんな言葉を使ったらダメだよ?」

瑠「…っ!?!そ、そんな事、優お兄ちゃんには関係ないじゃない!?!
/ / / / /」(そっぽを向く)

ゼ』る、瑠璃？』

瑠「ああもう！アンタも少し黙りなさいよ！そ、それで、優お兄ちゃんは今回はどうして来たの？／／／／」

優「いや、前回瑠璃ちゃんが危ない事をしていたから。怪我があつたら治して上げようかと思って。」

瑠「ほえ？わ、私の為に？……わ、わざわざ！？／／／／」

優「うん。そうだけど…大丈夫だった？」

マ「ああ。怪我はなさs「アンタは答えなくていいっ！！！」…ぶべらっ！？」

瑠「へ、平気よ！／／／わ、私があんな事で怪我をすと思うてるとか…ば、馬鹿じゃない！？／／／／」

優「そうか。ならよかった」なでなで

瑠「ふ、ふみゅ／／／／」

フィ「中々難儀な性格になったわね」

キヤ「あれは失敗作だった、てことでしょうか？」

ク「そういう事じゃない？ま、観点はよかったわよ。」

マ「はあ。…みぞに入った…（涙目）」

瑠「アンタが余計な事を言うからでしょ？」

マ「はい！その通りッス！！マジすつませんでした！！」

フィ「ホント弱いわね…」

キャ「そうですね～。でも、もつとつでもいいですよ」

優「それで、瑠璃ちゃん。何かしてほしい事とかあるかな？」

瑠「な、なによ、いきなり？」

優「いや、ここに来たら、毎回お願い事でも聞こうかになって。」

マ「そ、そんな事、俺は聞いてないぞ！？いいなあ！！！」

フィ「うん、作者は向こうに行こうか？」

マ「え？い、いやだ…俺も何か願いたい」「ふんっ！…！」「…はべれッ
！？」

ズルズルツ（作者が引きずれられて）r y

瑠「そ、そんな急に言われても…／／／／／／／／」（もじもじ

優（おお？さっきまで強気だった瑠璃ちゃんが急にもじもじし始め
たぞ！？／／／／／）

瑠「そ、それなら、手…出して？／／／／／／」

優「う、うん。いいけど…」

瑠「そ、それじゃ…／／／／／」（優の手を握る

優「え？／／／／」

瑠「な、なによ？そっちから何でも言う事を聞くって言ったんじゃない。／／／／」（そのまま恋人握りにして、優の胸にそのまま体を預ける様に抱きつく）

優「そ、それはそうだけど／／／／／（汗）」

瑠「なら、いいじゃない／／／／このまま…このままでいいから…／／／／／」

フイ「きゃ〜ッ!!!!いいわぁ!ああいう雰囲気!!!!」

ク「私だっけいつか劉ちゃんと〜!!」

キャ「いいえ!アタシがご主人様マスターとあの様な関係になるんです!!」

ゼ「それは劉が選ぶ事だろう?」

フイ・キャ・ク「『そんな事は分いかまつてちるのよっ!!!!』」「

ゼ「『……………」

マ「ふっ。これも、もうお約束だな。」

ゼ「『ああ。男は…………』

マ「『…………弱いだ。』

マ「お？瑠璃が寝たみたいだぞ？」

フィ「そうみたいね。」

ク「瑠璃ちゃんほどのくらいあの状態が続くのかしら？」

キヤ「寝れば解けますよ。…ほら、段々と体も小さくなってきたきましたよ。」

ゼ「おお！瑠璃が戻っていくぞ！！！」

優「ん？戻ったみたいだな？…よししょっ！」（瑠璃をお姫様抱っこする）

瑠「…ん…みゆう…zzz」

マ「はい、お疲れ〜！」

キヤ「中々よかったですよ〜！」

優「まあ、瑠璃ちゃんが喜んでくれたら俺は…」

フィ「ねえねえ、あの瑠璃ちゃんはとうだった？」「ニヤニヤ

ク『そうよね〜、それは気になるわ〜。』

優「えゝ！？ま、まあ、誰にでもああいう背伸びしたい時はあると思っよ？」

マ「…ま、優だしな。これでいつか。」

優「…？？？じゃあ、もう帰るな！」

キャ「あ！お土産です。」

優「？この…毛の塊は？」

キャ「いや、優もそうですけど、Arishia様にアタシの毛で作ったマフラーです。結構自信作なんですよ？」

優「へえ、そうか。」

フィ「あとは、このケーキセットを持って行って」

優「こんなにいいのか？」

ゼ『今回は瑠璃が世話になったからな。』

優「じゃ、ありがたく貰ってくよ。じゃあな！」

マ「おう！またな」

フイ「ふう。瑠璃ちゃんはどうする？」

マ「ん、この後はほかのゲストが来るからな。」

キャ「では、ゲストが来たら起こしましょうか？」

ゼ「そうだな。」

ク「じゃ、あとがきにいきましょう！」

番外編：うゝん。ツンデレって難しい…。誰か書き方を教えてください！

マ「はい！いきなりですが、感謝コーナーです！ユタ様、仮面ライダーデイケイド神様、Arishia様、犀龍様、夜神様、光闇雪様、メガネ様、けーくん様、畏無様、月光閃火様、AIRS様、紅幽鹿様、バラランシャ様、感想ありがとうございます！」

ゼ「お土産コーナーだ！仮面ライダーデイケイド神様からは、回復薬400個

犀龍様からは、エロトには、フィーナの戦艦砲撃「時空歪曲砲」x

畏無様からは、「ゼーガペイン」の機体「ゼーガペイン アルティール（1/1ver）」を劉とフィオネに。マーボーには、「Angel Beets!」の麻婆豆腐&肉うどんを。「初音ミク」のキャラの「鏡音リン」のコス。

紅 幽鹿様からは、劉に世界創世の剣「ワールド・クリエイト・ソード」のレプリカと世界終焉の剣「ワールド・エンド・ソード」のレプリカを頂いた。ありがとうございます！」

フィ「では、さっそくゲストね。犀龍様の作品「D・C・?&なのは」時を越えし者の物語」から桜内流君と畏無様の作品「魔法少女リリカルなのは」偽リノ騎士」から、畏無様&双葉ちゃん。

瑠「あと、バラランの作品「神に何度も殺された青年」からまたまた春お兄ちゃんが来てくれたよ」

キヤ「あら？瑠璃ちゃん起きたんですね？」

瑠「うん。クリスに起こされた…」

ク「えっへん！」

ゼ「俺が起こしたかった。」

春「何言ってるんだ、このロリコンは？」

双「やつほー！ツ！瑠璃ちゃん！」

瑠「あ、双葉ちゃん！！」

畏「おじやまします。」

マ「いらっしやい。何にもないですけど、どうぞ寛いでいって下さい。」

畏「いえいえ、こちらこそ。どうもです。」

春「なんだ？今回は双葉ちゃんもいたんだ。」

双「あ！兄様だ！兄様ー！！」（春人に抱きつく）

春「久しぶり、双葉ちゃん。」

瑠「むう…春お兄ちゃん！私もー！！！！」（春人に抱きつく）

春「え？おっと、瑠璃もか。」

瑠「えへへ／＼／＼」

マ「なにやら、今回は修羅場になりそうだな。」

ク『いいじゃない。ドロドロ感があつたほうが面白いわよ?』

ゼ『絶対に昼ドラ好きだな。』

流「ん〜。たしかに昼ドラが好きそうだな。」

フィ「いるわよね〜。こういうおばちゃんか。」

ク『誰がおばちゃんか!?!?』

キヤ「貴方しかいないじゃないですか。」

ク『キーーツ!?!?!』

マ「にしても、何か食べたいな〜。」

流「あ、じゃ、このドラ焼きでも食べる?」

フィ「そういえば、流君はおかしを出せたのよね。」

流「少しだけどね。あ、瑠璃ちゃんや双葉ちゃんも食べる？」

瑠・双「お菓子？…たべる〜！！！」

春「ほう。珍しい能力だな。」

流「まあ、生まれつき？みたいな物だよ。」

マ「いや〜、いいなこの能力。」

フィ「しかも、おいしいし！」

キヤ「文句ないですね。」

流「よかった。」

双「はい、兄様。あ〜ん。／＼／」

瑠「むっ、はい春お兄ちゃん。あ〜ん／＼／」

春「お、おう！あ、あ〜ん／＼／……もぐもぐ」（両方一気に食べた

マ「器用なヤツだな……」

流「さて、俺はそろそろ帰るよ。」

フィ「もう帰るの？だったら、お土産にこの白状剤をあげるわ。」

キャ「アタシが作りました。これは…宴会とかで使うと面白いですよ。」

流「ん。ありがとう。じゃあな！」

畏「さて、俺達も帰るか。双葉？」

双「え〜、もう帰るの〜？」

畏「ああ。そろそろ帰らないと。」

双「わかったよ。…じゃ、じゃあね。瑠璃ちゃん、兄様！／＼／＼」

春「ああ。また今度な。」

瑠「双葉ちゃん、ばいばい！」

マ「あ、畏無様も白状剤を…どうぞ。…これは捨てたほうがいいと思いますけど…」

畏「ありがとうごさいます。…ええ、わかっています。これは…存在ってはならない物だ…」

双「じゃあね〜！」

畏「では、また今度！」

フィ「ばいばい!!！」

ク「また来るのよ!!！」

マ「ふう。今回はここまで。読者の皆様。感想いっぱいくださいね
！」

春「ちなみに。俺はうちの作者のPCが壊れて暇だから、しばらく
こっちにいる事になったからな。だから、次回もここで会えるぞ。」

瑠「えへへ／／／春お兄ちゃんと一緒にだね／／／」

キヤ「次回は本編ですよね？」

マ「その予定だ。」

ゼ「なら、次回からやっとクライマックスにはいるな。」

ク「みんなちゃんと読むのよ??！」

「フィ」では、次回もよろしくね〜！」

第41話：なんだかな…タマモの強さには驚くばかりだよ。(前書き)

いきなりですが…

しばらくしたら、人気キャラ投票をやろうと思います！

理由は…タマモが増えたからです！

どうなるんだろうなあ。では、短いですが、41話始まります！

第41話：なんだかな…タマモの強さには驚くばかりだよ。

(さて、あの同員達はとうするか。)

オレは外にいるたくさん同員達を見る。

「あ、朝ごはんはどうしますか？」

オレが外にいる同員をどうしようか考えていると、瑠璃が呑気な事を言ってきた。

「あ、朝ごはん!？」

「はい。朝ごはんです。(にこっ)」

「いや、今はそれどころじゃ…。」

オレは瑠璃に戸惑い、フィオネが瑠璃に苦笑するが、

「あら?ご主人様達はどうぞ、優雅に朝食をおとりになってください。
い。」

タマモはそんな事を言ってきた。そして、呪符を手に持ち、

「ここはアタシ…良妻狐デリバリーのタマモに任せていただければ
万事OKです。」

そして、外に飛び出していった。

「おい!!タマモ!?!」

オレはタマモが外に飛び出していったのに驚き、慌てて外を見る。

「おまえは!?!」

「すいませんが、アタシのご主人様マスターは朝食中なのでアタシが相手さ
せてもらいます。」

「は?お前がか?」

「俺達がお前みたいなのには負けるわけないだろ!」

「おらああああ!?!?!」

「呪相・炎天!?!」

タマモは局員に呪符を飛ばしたと思うと、そこから炎が出現して周りに広がる。

「うわぁ！な、なんだこの炎は！？」

「消えないぞ！？」

慌てる局員達の声

「あらあら？アタシはまだ本気のほの字も出してませんよ？」

そう言ったタマモは、違う種類の呪符を胸元から取り出し、

「呪相・氷天！！！」

相手に向かって飛ばす。

「ぎゃあああ！！！！今度は凍ってく！！？」

見る見るうちに、局員達は凍っていった。

「ふふっ、まだまだですよ」

「劉ちゃん、外はどうなってるの？」

外を覗いていると、フィオネが気になったのか聞いてきた。

「いや、タマモ強い……よ……」

オレはフィオネの方を向く。すると……

「ふおえ〜、ふごいんだねえ〜」(訳：へえ〜、すごいんだね〜)

口いっぱいにおにぎりを頬張っていました。

「な、なんで食べてんの!？」

「タマモがくれた時間だもん。無駄にしたらダメだよ。」

フィオネはそういうと、オレに食べかけのおにぎりを渡してくれた。

「え？こ、これ…フィオネが……／＼／＼／」

「???別にいいじゃない。はい。食べちゃってね！」

フィオネはオレにおにぎりを渡すと、テーブルに戻って行った。

「こ、これ……どうすればいいんだよ……／＼／」

オレの手にある食べかけのおにぎり。

『ま、今回は食べちゃえば？』

『そつだな。』

クリスとゼロは簡単に言うが…

「うう…でも／＼／」

おにぎりを見る。

「しょ、しょうがない…よな？い、いただきます！／＼／」

オレは決意し、その手にあるおにぎりを喰べ……

…れなかった。

「はあ…はあ…ぎ、ギリギリセーフでしたね…」

いつのまにか戻ってきたタマモ。そして…

「では、いただきます！あむっ…もぐもぐ……うん！さっすが瑠璃ちゃんです！塩加減がまた…」

オレの手から搔っ攫ったおにぎりを頬張った。

『アンタ、外の連中は？』

「え？見てみてくださいよ。」

クリスの質問に、唇についたごはんつぶをとり、口に運びながら言うタマモ。

「?????」

オレも気になったから外をしてみる。

「…な、なんじゃこりゃ…」

そこに広がっていた光景…

すべて凍っていました。

そう。局員も、木々も……炎も。

「ねえ、タマモ…炎まで凍ってるんだけど……（汗）」

「ええ。だって、ご主人様マスターが間接キスをしそうだったんで、少し力を込めて最速で終わらせましたよ。」

いや、そんな簡単に言われても…

「さつてと、アタシも食べますかね？」

タマモはそう言うと、台所のほうに向かっていった。

「…お、オレも食べようかな。」

なんだか考えるのが馬鹿らしくなって、オレも朝食を摂りに行った。

「で、では。気をつけてくださいね？」

「この装置が完成したら、ちゃんと届けに行きますので。」

「いや、危ないと思うし、無理しないでいいからね？」

朝食を摂ったオレ達は管理局本部に向かうため、ダイダロスと瑠璃に別れと礼を言う。

「いいえ！絶対に届けますから。」

「でも、劉君達も無茶しないでくださいね？」

瑠璃が涙目になりながら、オレに言ってくる。

「もちろんだよ。だからそんなに心配しないで？」

今にも泣きそうな瑠璃の頭を撫でてあげる。

「ふみゅ…ありがとうございます／＼」

頭を撫でてあげると、瑠璃は涙目から顔を赤くさせ俯く。

ぎゅっ！

「いつっ!？」

瑠璃の顔が赤くなつたのを見てみると、両隣からオレの二の腕を引っ張ってくるフィオネとタマモ。

「また劉ちゃんは？」

「もう。ご主人様は誰にでもお優しいんですから…アタシ、妬いちやいますよ?。」

何言ってるんだ、この二人は?

『劉、そろそろだ。』

「そうだな。じゃあ行くか。二人ともありがとな!。」

「き、気をつけてくださいね!!。」

二人に別れをつけて、オレ達は管理局本部に向かった。

管理局本部には歩いて向かう。なぜなら、少しでも魔力を感知されないためだ。

「ここで魔法を使って、周りを囲まれたりしたら大変だもんね。」

「そうですね？その時はアタシがやっつけてあげますよ。」

フィオネとタマモはさっきからこの調子で話し続けている。

「うーん、私もそろそろ美肌パックを使おうかしら？」

「…お前はデバイスだろ（汗）」

デバイス二名もこの調子だ。

（はあ…。なんか、乗り込む雰囲気じゃないな。）

まるで、遠足か何かみたいだ。

（にしても、この世界線はおかしい所がありすぎる。）

忘れているかもしれないが、ここは海鳴。そこになぜ、管理局本部があるのか。この世界線では魔法を使うのは普通なのか？そして、さっきの戦闘もだけど、あんなだけの騒ぎを起こしといて警察すら動き出していない。

（本当に管理局が仕切っているのかな？）

それからもしばらく歩いた。

今は海鳴市の……あ、フェイトのマンション前だ。

「ここって、フェイトちゃんのマンションよね？」

「ああ。そうだよ。」

壁でマンションを見上げる。

その時……

「あ………」

「……え？」

オレ達がマンションを見上げていたら、マンションから一人の金髪娘が出てきて、お互いに目が合う。

.....
や、
やっ
ち
ゃ
っ
た
.....。

第41話：なんだかな…タマモの強さには驚くばかりだよ。（後書き）

マ「今回はグダグダです。すみませんでした！」

フィ「では、さっそく感謝コーナー！仮面ライダーディケイド神様、メガネ様、けーくん様、月光閃火様、夜神様、犀龍様、畏無様、紅幽鹿様、バラランシャ様、ユタ様、A r i s h i a様、桜川リマ様、感想ありがとね！」

ゼ「お土産コーナー！仮面ライダーディケイド神様からは、マーボ―とエロトにイグザズノシスに、キツク。メルクオーブに月読（1兆年間スーパーフルボッコされるが外では一瞬）かめはめはに、アルカンシエルにトリプルなのはブレイカー！」

犀龍様からは、エロトに「ぬい」というキャラ（胃袋はブラックホールで出来ている）

畏無様からは、瑠璃とお揃いのパジャマな…他には、マーボ―に、「飲むとオカマ語になる薬」と、フィオネとえつと…狐に「11e yesの虹校の制服」を。ゼロとクリスには、「アルトアイゼン」と「ヴァイスリッター」を（ロツクマンのコピーロイド（？）と同様）

紅 幽鹿様からは、エロトに自重薬、劉君に武士のコスプレセット、マーボ―に、精神安定剤、ゼロに精神安定プログラム、瑠璃に、初代プリキュアのホワイトの服

バラランシャ様からは、春人特製七星宝剣×100

詳細：春人が創った北斗七星が刻まれた短剣。

刀身には、魔法反射の術式が掛かっているが、それぞれ造りに粗があり、射撃魔法さえ反射できない出来損ないなものから、収束砲を何度も反射するものまである。

メガネ様からは、野菜ケーキを頂いた。ありがとう！」

春「なんだ。今回は早いな。」

夕「そうみたいですな。」

瑠「え〜と、メガネ様の作品『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界〜』からコダイ君（黒ゴスのツインテールver）と、月光閃火様の作品『WOLFANG・ウルファング〜狼男は不良青年〜』から、輝刃お兄ちゃんと、月光閃火様が来てくれました。」

ク「さ、いらっしやい。」

月「…よう。」

輝「また、来てしまった。」

コ「俺も来たぞ。」

キヤ「いらっしやい。」

春「よく来たな」（ニヤリ

マ「なんでお前が言ってんの？」

フィ「いいじゃない。器が小さいわね」

マ「っるさい！（汗）」

コ「ま、そんな事はどうでもいいんだが…」

マ「そんな事！？（涙）」

月「まあ、なんだ…。」

輝「ドンマイだ。」

マ「……………（泣）」

キャ「でも、なんでコダイ君はそんな格好をしているんですか？」

コ「いい質問だ、タマモ。今回はこのロリコンに一言、言いに来た。」

春「あ？どういう事だ？それに、俺はロリコンじゃねえ。」

フィ「な、なんか一触即発の雰囲気よ…。」

ク「…どうなるのかしら？」

ゼ「止めなくていいのか？」

マ「俺には無理だ…。」

春「…で？何が言いたいんだ？」

コ「そう慌てるよ。今から言ってるからさ…」

月「な、なにやら危ないな…。」

輝「ああ。そして、コダイはなんて言いたいのか…。」

コ「では…言っぞ…あー、コホン！…。」

春「ん？？？」

コ「お、おにーちゃん」

春「……………」

全「……………はい？」

コ「これが言いたかったただけだ。本当はこの『DEATH NOT E』を使つて、おまえの恥ずかしい事すべてを暴露しようと思つたが……………今回はおまえのその顔を見て満足としよう。じゃあな。」

マ「え？ちよっ！おい!？」

キヤ「帰っちゃったわね」

フィ「本当に一言だけつて……………」

輝「？それより、春人の様子がおかしいぞ？」

春「……………」

月「……………おい？」

春「……………」

ク「固まってるわね。」

ゼ『本当だな。』

キヤ「まあ放っておきましょうか。」

瑠「いいの？」

マ「いいんじゃないか？」

月「さ、ここからは俺が瑠璃の相手をしよう。」

瑠「ほえ？…私と遊んでくれるんですか？」

月「ああ。俺が遊んでやるよ。」

輝「なにやら危ない気がするからパスだ！」

ドガッ！

月「グフツ…！？」

瑠「げ、月光閃火様？」

キヤ「イイのが入りましたね〜」

フィ「あ、月光閃火様が倒れたわよ（汗）」

輝「ふう、今回は瑠璃ちゃんを愛でようと思ったんだが、閃火を連

れて帰らないと…」

フィ「毎回このパターンよね（汗）」

マ「そうだな。」

輝「次は閃火は置いてくるか」

キヤ「そうですね。」

輝「ではな。」

マ「はあ…今回はこの様にグダグダでした。」

フィ「グダグダだったのはいつもの事だけど……どうしたの？」

マ「本当は昨日投稿予定だったんだけどさ、昨日は色々あって、それどころじゃなかったんだよ。ま、詳しくは感想版を見てくださ
い。」

キヤ「じゃ、今回はここまでにしときましょつか？」

マ「そうしてくれ……」

春「……………」

瑠「は、春お兄ちゃん？」

ク「あ、こいつも放っておいていいわよ。」

ゼ「では、また次回！」

第42話…どの世界線でも…そいつはそいつなのかもしれない。(前書き)

今回もグダグダな展開です。

では、42話はじまりま〜す！

第42話…どの世界線でも…そいつはそいつなのかもしれない。

「あ……」

「……………え？」

フェイトとエンカウントした。

「あ、貴方たちは……」

フェイトはオレ達を見ると、目を大きくしながら、手にバルディッシュをとる。

「ちょっと待て！ここは街中だぞ！？」

「何にも知らないみたいだね。私達管理局はそんな事はないんだよ。この世界では魔法は知られているからね。バルディツシュ、セツトアップ！」

フェイトはオレにそう言うと、バリアジャケットを展開して…

《なのは、タカト、例のグループを発見したよ。今から私が迎撃するから応援を。》

本部に通信して、応援を呼んだようだ。

「くっそ、ゼロ！」

『set up!』

オレもバリアジャケットを展開する。その横では、タマモも呪符を持って戦闘態勢に入る。

「トレスオン 投影開始！デュランダル 全てを破壊する剣！」

そして、一本の剣を投影して構える。

「今度は…負けないよ。…ハアアッ！！！！」

フェイトはバルディツシュをアックスの状態で突っ込んでくる。

「なっ！？速い！？」

突っ込んできたフェイトはそのままオレにバルディッシュを振り下ろす。

「^{マスター}ご主人様！くっ、やらせない！呪相・氷天！」

タマモはオレとフェイトの間に氷の壁を作り、フェイトの攻撃から防いでくれた。

「あ、ありがとう。タマモ。」

「油断しないでくださいね、^{マスター}ご主人様！この子、前回となにやら纏っている空気が違います！！」

「纏っている空気が？」

フェイトの目を見る……すると、フェイトの目が…赤い？

「劉ちゃん、フェイトちゃんの目は最初っから赤いわよ？」（汗）」

「……………（汗）」

そ、そんなのは知ってたよ？

「フィオネはこの一体に結界をお願い！」

「分かったわ！」

フィオネに結界を頼み、デュランダル全てを破壊する剣を構えなおす。

「そんなスピードで私についてこれるかな？ソニックムーブ！」

フェイトがソニックムーブを使って、さらにスピードを上げてくる。

「ちっ！ゼロ！」

『おう！ソニックムーブ！』

こっちもフェイトに対抗するために、ソニックムーブを使ってスピードを上げた。

「ふんッ！」

「はあ！！！」

フェイトのアクセスとオレのデュランダル全てを破壊する剣がぶつかる。

「へえ…、君もソニックムーブが使えたんだ…っね！」

フェイトはオレに笑いかけながらまた、振りかぶる。

「…っ！！！！！」

だが、そんなフェイトのセリフが、オレの世界のフェイトのセリフと重なった事に、一瞬気を削られる。

「劉ちゃん!」

「だ、大丈夫だよ! くっ!」

気を削られるも、なんとか持ち直し、フェイトの攻撃をさばいていく。

「本当にやるね。フォトンランサー!」

フェイトの周りにいくつ物ランサーが形成されていく。

「魔力変換【暴風】…」

『! ! いいのか?』

オレがその言葉を言うと、ゼロがオレの言葉に驚きながら聞き返してきた。当然だ。人相手にはこの魔力変換は極力使わないようにしている。だが……、

「今は…そんな事を言っている場合じゃないんだよ!」

『わかった…。【暴風】だな。』

思わず怒鳴ってしまったオレに対して、ゼロは何も言わずに言う事を聞いてくれた。

「ごめん、ゼロ。ストームシューター……」

「ファイアーツ!!!!!!」

オレとフェイトが一気に、周りに形成したスフィアを飛ばして、お互いの攻撃を防ぎながら、距離を詰めていく。

「私は…負けない!」

「それはオレもなんだよ!!」

^{デュランダル}全てを破壊する剣を握りなおし、フェイトに一閃。

が、フェイトもそれを防ぐと……

「ハーケンセイバー!!!!!!」

フェイトがバルディッシュをハーケンフォームにして、黄色の斬激を放つ。

至近距離で撃たれたオレは何とか^{デュランダル}全てを破壊する剣で防ぐが……

「^{デュランダル}全てを破壊する剣に…ヒビが!?!」

^{デュラ}間近で受けた攻撃は思ったよりも威力があったみたいで、^{デュラ}全てを破

壊する剣にヒビが入って、そこから崩れていく。

「この威力は…おかしいぞ？」

フェイトは何も言わずにバルディッシュをザンバーフォームにする。

「だから…この前みたいにはいかないと言ったんだ。」

フェイトはカートリッジをロードする。

「はあああ！…！雷神一風！…！」

フェイトがザンバーに雷の魔力を溜めると、それをオレに放ってきた。

「トレスオン 投影開始！アイギス 絶対守護の盾！…！」

今まで見たこともない攻撃に驚きながらも、アイギス 絶対守護の盾を投影して防ぐ……が…

「そんな防御は意味ないよ！」

フェイトが叫ぶと同時に、こっちに向かってくる雷の斬激はいきなり、四方に別れ、オレを襲う。

「なにつ！？」

「くっ…呪層・黒天洞！！」

オレが攻撃を喰らう瞬間、タマモが呪層・黒天洞を使った。

「……………これで…終わりだね。」

フェイトは鼻で笑うと、オレから目を逸らす。

「まだだ…。」

「え？」

オレの声が聞こえたのが予想外だったのか、フェイトは再びオレの方を見るが…

「油断大敵だったね。」

クリスのファーストモードを起動して、振り返ったフェイトの事を斬りつける。

「…っ…かはっ!？」

斬られた箇所からは血が噴出す…。

「悪いね…。今は本気でいかせてもらったよ」

倒れるフェイトに向かって、オレは言う。

「…な、なんで…攻撃が…効いてないの…?」

フェイトは口から血を出しながら、オレに聞いてくる。

「それは、アタシの呪層・黒天洞の効果です。これは、相手のダメージを減少させる効果があるんですよ。」

オレの代わりにタマモが隣に来て、フェイトに説明する。

「それに加え、ご主人様には絶対守護の盾がありましたしね。だから、ダメージは殆んど無かったわけです。」

「ああ……なるほどね……」

タマモが説明し終わると、フェイトは納得したのか目を瞑りながら微笑に笑う。

「…なんだよ？」

笑うフェイトにオレは聞き返す。

「だってさ…おかしくて……。」

フェイトはそう言うと、体全体から魔力を放出させる。

「な、なんだこれ!？」

「ご主人様!!!」

タマモがオレを抱え、フェイトから距離をとる。

「…君が言ったんだよ？……油断大敵…。なんで私が君に説明を求めたか…わかる？」

フェイトはゆっくりと起き上がる。

「魔力の蓄積。……まあ、様は時間稼ぎだね。…この魔法を…発動させる為に…」

起き上がったフェイトは光に包まれる。

「何が起こるんだ…？」

この世界線はおかしい。何が起こるかはわからない…。

「……ふふっ…力が…わいてくるのがわかるよ。」

包み込んでいた光が周りに四散して、そこから現れたフェイトは……

「バリアジャケットが…変わってる?」

フェイトのバリアジャケットが黒と黄色にアレンジされていて、バルディツシュは馬鹿でかい双剣になっている。見た目、真・ソニッククフォームなんだが、所々から、黄色の魔力が放出されている。

「バーストモード…起動。」

フェイトがそう呟くと、辺りが一瞬また光り、その光りがフェイトに縮小していった。

(バーストモード……って、たしか、デジモンセイバーズであったような…)

だとしたら、たぶん……やばいな。

「フィオネ!」

「うん!」

「ユニゾン・イン!!!」

フィオネとユニゾンして、クリスを構える。

その時……

オレ達の周りに、局員達がやってきた。たぶん、さっき応援を呼んだ時のだろう。その中には……

「フェイト!!」

あのクロノがいた。

「クロノはそっちの狐の使い魔をお願い。」

「よし、わかった!」

狐の使い魔って……(汗)

フェイトがクロノに指示を出す。

「使い魔…それって、ご主人様と一生マスターいてもイイとお許しですか? だったら、このアタクシ、タマモは喜んでご主人様マスターの使い魔になっちゃいますよ! 狐ですね! コン コン!」

タマモは急にテンションを上げ始め、それに合わせて周りの局員を倒し始めた。

「それじゃ、こっちも始めようか？」

フェイトは双剣を構え、オレに向かってくる。

「そうだな……これで終わらせるー!!」

クリスを握り締め、フェイトに立ち向かう。

「ハアアアアアー!!!!」

近づくなり、斬りつけてくるフェイト。

(さっきとはパワーもスピードも全然違う。)

「休ませない!!」

フェイトは双剣での攻撃をあびせてくる。正直、受けきるのが精一杯だ。

「ふんっ!!これならッ!!」

フェイトはカートリッジを4発ロードする。

「轟け轟雷!!!!」

フェイトの周りに、いくつもの、雷の竜巻が発生する。

「ボルティック・トルネード!!」

形成した竜巻はオレに向かってくる。その竜巻は雷の魔力で出来ていて、そう簡単には崩せそうもない。

だけど……、

「ゼロ！魔力変換【氷結】！！！！」

「了解！【氷結】！」

クリスで何度も空を斬っていく。

（オレにはこの魔法があるんだ）

《「大気に満ちる空気よ！凍れ、氷の刃となりて、切り刻め！！！」

そして、その魔力を爆発させる。

《「セレスティアル・ブリザード！！！」》

フェイトの竜巻にオレのかまいたちが着弾していく。

「な、なにこの魔法は!?!」

フェイトが作った竜巻は次々と凍り、崩れ去っていく。

「まだまだ!氷柱地獄!?!」

そのままフェイトの周りに氷柱を次々と出現させていく。

「取り囲め!」

出現させた氷柱はフェイトを取り囲み、動きを封じた。

(ここで終わらせない!)

オレはさらに魔力に力を入れる。

《「氷結は終焉、せめて刹那にて碎けよ!?!」》

動きを封じられたフェイトに向かって手をかざす。

《「インブレイスエンド!?!」》

フェイトの上空に大きい氷の塊が形成され、そのままフェイトに向かって落下した。

さらさら…

《「凍れ！それは刹那のごとく過ぎ去る時がもたらす奇跡！！！」》

クリスに氷結の魔法を溜めて、攻撃を喰らっているであろうフェイトに向かって振り斬った。

《「マーヴェラス・クリスタル！！！」》

放たれた青い閃光はフェイトに着弾して、そこからクリスタル状に凍っていった。

「はあはあ……ち、ちすが、じねなら……」

《そつね。》

オレはクリスタル状に氷漬けになっているフェイトを見る。

が……、

「ちっ！まだかよ…」

そのクリスタル状の氷にヒビがはいつていく。

《はああ。ま、まだなの？》

そして、ヒビはどんどんと広がりに…

「……つつ……はあはあ……」

バリアジャケットがボロボロのフェイトが中から出てきた。

「い、今は本気で危なかったよ……君。」

フェイトはオレに片方の剣を向けながら言う。

「いや、今ので終わってもよかったんだけどな。」

オレもクリスをにカートリッジを詰める。

(たぶん、フェイトも本当に限界が近いんだな。)

次の一撃で決着がつくと思ったオレはクリスにカートリッジを詰め込み、一気に全部ロードする。

「なんだ……君も……次で決着をつけようとしてたんだ……。ふふっ……気が合うね……」

フェイトもそう言うと、カートリッジをロードしていく。

(…………ん？あれは……涙？)

ロードし終わったフェイトの目には涙が溜まっていて、ツーンと頬を伝っていく。

「君とは……なんだが、こうなる前に……会っていたか……たかも……。」

フェイトはバルディッシュを握りなおすと、双剣を一つに纏め上げ、大剣にする。

「……私はいつも……遅すぎるね(にこっ)」

フェイトはオレに微笑みながらそう言うと、一回目を閉じる。

そして……、

「でも……もう、戻れないからッ！……！」

目を開け、目線をキッとさせながら、原作Asでシグナムがフェイトに言った言葉を言う。

(皮肉だな……。フェイトにこの言葉を言わせるなんて…)

だが、オレもそんなフェイトを見据え、視線を受け止める。

「いくよ…フィオネ…クリス…ゼロ…」

《OK!》

『いつでもいいわよ。』

『今度は耐えて見せるぞ。』

フェイトは、その大剣を振りかぶると、魔力を溜めていく。

（ライオットザンバースラッシュ…では、ないみたいだな。）

オレもクリスに魔力を溜めながら、構えに入る。

「創造するんだ……今の…フェイトに勝てる技を……」

「いくよ……雷の神の化身よ、今一時間、私に立ちはだかる存在を打ち消す力を……」

フェイトのザンバー刀身部分に雷が落ちる。

「ボルテック・ダイバインスグレイザー……！！……！！……！！」

フェイトが振り切ると同時に、閃光は放たれ、地面を抉りながら向かってくる。

「ゼロ…」

『発動!』

ゼロが を発動させ、オレは詠唱に入る。

《「我が身に宿りし闇の欠片、其れは我が唯一の命の煌きなり。森羅万象幾億の命、幾億の運命、幾億に広がるは無限の宇宙全てを統べる鍵にして、扉を開く者。そこに在るは闇にして光なりッ!!!」

そこで、一回目を瞑る。

《「…永久に続く光を遮る深遠の闇、時に束縛され、其れは終えては還る!!!」》

そして詠唱を終え、目を開けると同時に も解ける。

時が動き出し、フェイトの最大の一撃はまた、オレに向かって動き出す。

《「打ち勝て！！ワールド・オブ・ジェネシス世界の創造神！！！！！！」》

オレもフェイトの一撃に向けて、光り輝く閃光を放ち、

お互いの閃光同士がぶつかり、拮抗する。

……が、

拮抗したのは一瞬だった…。

オレの閃光がすぐにフェイトの技を呑み込み、そのまま立ち尽くしているフェイトに迫る。

「フェイト——ッ——!!」

オレは何を思ったんだろっ……

オレが放った技に呑み込まれていくフェイトの姿を見たくなかった
のだろうか……

その、呑み込まれていくフェイトの顔を見て叫ぶ。

だ
け
ど
……
フ
ェ
イ
ト
の
顔
は
……

なぜだか……笑顔だった……。

「フヘイト……」

そのまま、この世界線のフェイトは笑顔のまま呑み込まれていった
……

第42話：どの世界線でも…そいつはそいつなのかもしれない。(後書き)

マ「はあ…やっちゃまったよ。今回もグダった〜!!」

キャ「ふ〜ん。では、感謝コーナー!!」

マ「え?ふ〜んで済まされた!??」

春「絹ごしなんてそんなもんだ。」

キャ「えつと〜、メガネ様、畏無様、ユタ様、龍賀様、光闇雪様、月光閃火様、感想ありがとうございますね」

ゼ「お土産コーナーは…メガネ様からは、タマモに体操着とブルマを(体操着の胸元には『たまも』と書かれている)

畏無様からは、スカイからアルカンシエル(核弾頭付)を頂いた。ありがとうございます。』

キャ「えへへ／／／これで、アタシもご主人様^{マスター}に…／／／」

瑠「???」

フィ「ま、今は瑠璃ちゃんだしね〜」

春「今回もゲストがいるのか?」

マ「ああ、いるよ。」

春「ホント、ゲストが多いな。(汗)」

ク「悪かったわね。…ったく、今は更新が休みだからって……この二ートが(ボソツ)」

春「ああ!?!今…なんつった!?!」

ク「強制スリープモードに移行します」

ゼ「……………本当にスリープモードになった……」

ファイ「え〜、ではゲストの紹介よ!ユタ様の作品『異世界を渡る』からニンフちゃん、畏無様の作品『魔法少女リリカルなのは〜偽リノ騎士〜』から、作者の畏無様とチビツ子ズの双葉ちゃんと楓ちゃんよ〜!」

畏「すみません、また来ちゃいました。」

マ「や、気にしないで。来てくれてうれしいですよ〜!」

楓「初めまして。」

キヤ「そういえば、この娘は初めてですね。」

双「そうだよ。…それと、今回は…ねえ?」

瑠「あ、そうだったね。双葉ちゃん。」

春「?????」

瑠・双「春お兄ちゃん（兄様）！！ちょっと、お話があります（の）！！！」

春「お、おれ！？…どうしたんだ？（汗）」

双「前回の…なんで固まっていたの？」

春「…え？！」

瑠「そうだよ！は、春お兄ちゃんには私たちがいるのに…／／／／／」

双「そうだよ！！／／／／」

春「あ〜〜…ごめん！（土下座）」

フイ「うわ！春人が…土下座！？」

ゼ『珍しいな。』

二「ふふふつ…怒ってる瑠璃ちゃんも可愛いわあ／／／／」

瑠「むう…わ、私は怒ってるんだよ？」

二「そこがまたいいのよ〜！こんなにほっぺを膨らませちゃってえ／／／／」（瑠璃に抱きつく）

瑠「う、うわぁ！？／／／／」

フィ「また、はじまったわね……」

キャ「楽しそうですね」

畏「あゝ！そうだった……」

マ「どうしたんです？」

畏「いや…スカイが…アルカンシエル（核弾頭付き）を…（汗）」

フィ「そうだったわね（汗）」

マ「それなら、心配しないでください。この春人特製七星宝剣がありますから……」

楓「???」

春「それは俺が作ったんだ。射撃魔法さえ反射できない出来損ないなものから、収束砲を何度も反射するものまである。今回はみんながいるから、成功の物だ。これで、反射させてもらう。もちろん、反射先は…スカイだ（ニヤリ）」

双「兄様かつこいい！！／／／／／」

瑠「うん！かつこいいね／／／／／」

二「その顔も可愛いわよ〜！〜！！！！」

瑠「ふええ！？／／／／／」

フィ「ふう……。何とかなったわね。」

キヤ「そうですねえ。」

畏「さて、そろそろ帰るか？」

楓「……………」(こくこく)無言で頷く

双「え、もう帰るの？」

二「じゃ、私も帰ろっかな。」

キヤ「あ、でしたらお土産に、アタシが作ったシフォンケーキをどうぞ。」

楓「????」

キヤ「はい！今、良妻修行中なので。」

ゼ「花嫁修行ではないんだな。」

畏「ありがとうございますね。」

双「う、兄様、また今度こっちにも来てくださいね？」

春「そうだな。」

楓「……………」(ぺこり)

「二」ありがとね。じゃあね〜!」

マ「さってつとお、今回はここまでです!」

瑠「お疲れ様〜」

フィ「この話の感想をいっばいくださいね!」

ゼ『結構気になるからな。』

キヤ「では皆さん、次回もご愛読よろしく願いしますね〜」
「」

第43話：人間誰にでも大きなミスはあるはずだ！……あ、あるよね？（汗）

43話、はじまります！

第43話：人間誰にでも大きなミスはあるはずだ！……あ、あるよね？（汗

「はあ……はあ……」

クリスから大量の煙が噴出される。

《…劉ちゃん。》

オレはよろよると、クレーターのある所に向かう。

中心地点にはフェイトがボロボロの状態で横たわっていた。

「…フェイト」

オレはすぐに倒れているフェイトの元に駆ける。

「フェイト！！」

「……………」

返事がない。どうやら、気絶しているみたいだ。

（よかった。気絶してる…だけ…か…？）

だが、フェイトの様子がおかしい。普通、生きている人間は胸が上下に動くものだ。

そう、【生きていたら】

オレは慌ててフェイトの胸の上に頭をのせて、聞こえるはずの音を聞こえぬままにする...

が……

「……し……心臓が……動いて……ない……？」

『そんな馬鹿な!?!』

ゼロが反論してくるが、それどころじゃない!!

「くっ！契約に従い、我が呼びかけに答えよ、再生の象徴よ……さあ現れる！蘇生の意志よ！！不死鳥フェニックス！！！」

オレはフェニックスを呼び出す。

「フェニックス!!!」

「ええ、わかってるわ。」

フェニックスは出てきた瞬間にフェイトに近寄り、蘇生を開始した。

「ふう…。それにしても、危なかったわね。」

フェニックスが蘇生を終えたようだ。フェイトを見ると、さっきより顔色がよくなっている。

「よかった…。本当に…。よかった…」

オレはその場で泣き崩れそうになる。

「大体の事情は把握しています、何かお力になれることがあれば、なんなりと。」

「ああ…。ありがとう。」

フェニックスに礼を言うと、フェニックスは再び燃え始めて、その場から姿を消した。

「でも…なんでフェイトが？」

『非殺傷設定のままよ？』

クリスを見ると、そう答えてくる。

《あの時も…そうだったわね。》

「え？」

《あの劉ちゃんがフェイトちゃんの一瞬の油断についての奇襲。クリスでフェイトちゃんを斬った時も…あの血量……》

たしかにそうだ。あの時のフェイトの血量はおかしかった。

『まさか…』

そこでゼロが口を開く

『まさか……この世界線は…非殺傷設定が…ない…のか？』

そう。オレも頭に浮かんだ事だ。でも…

『ちょっと、何言ってるのよ、それだけはあっちゃダメでしょう！
？』

わかってる……それがないことぐらい……あつてはいけない事ぐらい
……だけ…

「もしかしたら…その可能性もある。」

『そんな…』

クリスはオレの言葉に声の力を無くす。

「絶対…絶対にこんな世界線は在ってはいけない。必ず、戻すぞ。」

オレはそこで、フェイトに一枚の毛布を投影してかけてあげる。

「フェイト……」

オレはフェイトの頭を撫でる。

今でも、フェイトが顔を赤くしながら体をくねくねするの思いつく。

けど、フェイトは規則的な寝息をたてるだけ。

(生きてくれて本当によかった。)

「…よし。タマモの所に向かおう。」

オレはすっかり忘れてしまった、クロノ達と戦っているタマモの所に向かった。

「あら、お帰りなさいませ！^{マスター}ご主人様
」

「……………」

オレ達がタマモの元に向かうと…

「き、きさま……………かなり……………きよ……………くは……………せ……………いぎ……………だ……………」

クロノがフルボッコにあっていた。

「まだ言いますか。この子は…もう燃えちゃってください！そして、名前通り、真っ黒くろすけになっちゃってください！……」

タマモはそう言うと、呪相・炎天を取り出す。

「ちよっ!!待ってくれタマモ!!」

オレはタマモの腕を掴む。

「はい?どうされたんです??」

「その…あまり、やりすぎるのは…よくないと思うんだ。この世界線は非殺傷設定がないから。」

オレがそこまで言うと、タマモはため息をつく。

「あのですねご主人様^{マスター}?そ・れ・が、普通なんですよ?」

「え…?」

タマモの言葉に驚くオレ。

「アタシのいた世界でもそうでした…。あ、アタシ…前の世界では聖杯戦争っていうのがありましてですね、そこで英霊として戦ってたんですよ。」

タマモはそこで懐かしそうな顔をする。

「アタシは…その聖杯戦争では、違うマスターと組んで戦ってたんですけどね…負けちゃいました。聖杯戦争は、文字通り普通の戦争と変わりません。自分たちの命を懸けて戦ってたんですよ。……」

でも…負けちゃいました…。アタシは自分が消える瞬間に見たマスターの顔を今も思い出します。あの、自分を責めて、アタシに対して申し訳なさそうな顔を…。今にも泣き崩れてしまいそうな顔を。それでも、マスターはアタシに言ったんです。……………「ごめん」と。「俺の力が足りなかったが為に、タマモにまで迷惑をかけてしまっ

て…」と。そこでアタシは消えてしまいましたから、その後の事は分かりませんが……………」

そこでタマモは暗い顔をして俯ぐが、すぐにオレの目を見てくる。

「アタシは一度、マスターに戦う事をやめるように言いました。…けど、マスターは戦いをやめなかった。ああなる事がわかっていても、やめなかった。……………負ければ死ぬと分かっているも!!」

「…タマモ。」

「^{マスター}ご主人様、これが…覚悟なんです。戦う者の覚悟なんです。自分の命を懸けて戦う。そして相手に勝ったら、その者の命の分まで生きる。」

タマモはそう区切ると、

「わかりましたか、^{マスター}ご主人様?」

オレに微笑みかけてきた。

「それが…覚悟。戦う者が持つていなきゃいけない物なんです。」

そこでタマモは、呪相・炎天を胸元にしまつ。

「でも…^{マスター}ご主人様がやめると仰るなら、アタシはそれに従いますけどね。」

そして、オレに抱きつく。

「あと誤解しないでくださいね？前までのマスターは前までのマスター。今のアタシは^{マスター}ご主人様だけの良妻狐ですから」

《はあ…いい話をしてたのに…》

『まず、自分で良妻なんて言わないわよ！』

『その前に、早く向かわないか？』

うん。ゼロの意見に賛成だ。

「ゼロ、行こうか？」

『ああ。そうだな。』

オレはクリスを地面に優しく置くと、そのまま本局に向かって歩き始めた。

《劉ちゃん!?!》

『まっつてよお!?!!(泣)』

「そうですねよお!?!!ご主人様マスター!?!!

タマモはクリスを拾い上げてオレの横に並び、歩く。

「一応、クロノ…でしたっけ?動きを封じ込めました。」

そう言いながら、オレにクリスを渡してくる。

「ああ…ありがとう。」

「いえいえ〜。」

タマモはオレにまた笑顔を見せるが……

「いや…戦う覚悟の事。」

「え?。」

「オレも……タマモの話聞いて覚悟…改めて出来たよ。」

「そうですねか!?!」

あれからだいぶ走ったが、タマモは息一つ切らさずにオレを追ってきた。

「はあ…はあ…ふう。」

オレは一息入れて、周りを見る。

(なんだ？この一体地面が…コンクリート？)

オレが周りを見て、違和感を感じている中でも、デバイス陣は話し始める。

《ユニゾンしても追いつかれるなんてね。》

『本当だよな。』

『……………』

フィオネとゼロが話し始めるが、クリスが黙ったままだ。

「どづしっ…むぐっ」

オレが聞こうとすると、後ろからタマモに手で口を塞がれる。

「むがっ…むいっ！？」

《静かにしてください。ご主人様！》
マスター

そこで、タマモから念話がる。

『無意味よ…タマモ。それより劉ちゃん…私達…』

「むじ…つぶはあ…はあはあ…な、なんだよ？」

オレはやっと、タマモから開放されて新鮮な息を吸いながら栗栖に聞く。

『私達……やっちゃたわ…』

「え？」

クリスが言うと同時に、オレ達の周りを局員たちが取り囲む。

『こいつらは一体何処から…』

「はあ。貴方はまだそんな事を言ってるんですか？」

タマモはゼロに聞く。そして…

「アタシ達……やってしまったんですよ。」

タマモはやれやれと、両手を挙げた状態で言う。

《だから何を!??》

タマモとクリスの言い回しにフィオネは少しいらいらしながら聞く。

が…

「ふい、フィオネさん？周りを見てみなよ。」

オレはさつき感じた違和感と局員でようやく、自分が犯した間抜けなミスに気づいて、フィオネに教えてあげる。

《だから、局員に取り囲まれているわよね？》

まだ分からないのか……

「だからな……」

「ほう……ここまで来たんだな。」

「おまえら……馬鹿か？」

「うん！馬鹿なの～～！！！」

フィオネに説明しようとする、上空から誰かの声が聞こえてくる。

（はぁ………ここに来ていきなりこいつ等の登場か……。）

そして、目の前に大きなディスプレイが現れる。

そこには、この世で性格がもっとも醜い男が映っていた。

『よつこそ……管理局本部へ。』

《……………》

「はあ…‥ようこそだって？…‥いきなり、こいつ等を寄越してくるなんてな…‥歓迎してくれてんのか、そうじゃないのか、わからないよ。」

『いやいや、これは俺に出来る最高の歓迎だよ。』

男はそうオレに言つとニヤリと気味悪く笑つ。

「だったら、お前が出て来いよ。」

『それはVIP専用だ。ま、ここまで来れたら、顔ぐらい直接見せてやるよ。』

そこで、ディスプレイが消える。

「本当、何やってるんだろ？」

目の前にはなのはとシグナム、ヴィータ。

周りは局員。

そして、目には大きな建物。

そこに大きなエロトの顔が張り出されていて、顔の上には大きな文字が……

『木下タカトに会えるのは【管理局本部】だけ』…と書かれた大き

な文字があつた。

「一応…目的地には着いたな。
…いや、着いてたな。」

オレが何度目か分からないため息をつく、
なのは達がオレ達に
斉攻撃を開始してきた。

第43話：人間誰にでも大きなミスはあるはずだ！……あ、あるよね？（汗）

マ「43話でしたあ！！！」

瑠「ど、どきどきだね。」

フィ「ホント、私たちは何やってんだろ？」

キャ「間抜けでしたね。」

ク「そうよね。」

ゼ「でもまあ、たたく気がつかなかったぞ？（汗）」

マ「まあそれはしょうがないよ。」

キャ「ではではあ！良妻狐タマモの感謝コーナーです！！！」

ク「いつそんなコーナーできたのよ？」

キャ「うるさいですよ。え、コウ様、ユタ様、光闇雪様、バララ
ンシヤ様、三浦一平様、紅 幽鹿様、メガネ様、けーくん様、A r
i s h i a 様、毬藻様、畏無様、龍賀様、夜神様、感想ありがとうございます
ございますね！」

ゼ「お土産は、夜神様から、マーボー宛に『森近霖之介のコスプレ』
、劉&瑠璃宛に『八雲 橙ちえんのコスプレ』、フィオネ宛てに『八雲
紫のコスプレ』、タマモ宛てに『八雲 藍のコスプレ』を頂いた。」

瑠「ありがとございませ〜す!」

ク『で、アンタ。言う事あるんじゃないの?』

マ「そうでした。前回の話で、大変不愉快な思いをさせてしまった事を深く、お詫びいたします。」

フィ「ん?なんかあったの?」

マ「そういうメッセージが届いた。たぶん、フェイトファンの方なんだろう。」

キャ「フェイトファン……FFですか?」

マ「Arishia様に謝れッ!」

キャ「うう〜、ごめんなさいです」

ク『謝ってるのは文だけね。』

ゼ『謝る気あるのか? (汗)』

キャ「う〜、ごめんなさい〜」

マ「本当に申し訳ありません!……たく、タマモは……俺もArishia様の活動報告でのFF祭りに参加したかったぜ。」

瑠「お祭り?私も行きたいなあ」

ク『いいわねえ。私は断然、射的をやるわあ。こつ、相手を撃ち落

すなんて最高じゃない!」

マ「いや、その祭りじゃないし、クリスのいう射的はは絶対に楽しみ方を間違えてるからね(汗)」

春「俺は……いいや。」

フィ「うわあ!?!い、居たの!?!」

春「……居たら悪いか?」

ゼ「急に現れたからびっくりしたな。」

瑠「なんで?お祭りは行きたくないの?」

春「その時の気分次第だな。」

瑠「私はね、水あめにチョコバナナに、わたあめに、後はヨーヨー釣りもしたいなあ。」

春・ゼ「だったら、俺が買ってやる!?!」

フィ「でたわね……ロリコンとお父さんが。」

キャ「そうでしたね。春人はロリコンでしたね。」

春「……だったらなんだ?」

フィ「うわ…認めるんだ(汗)」

ク「私は分かってたわよ〜!!!」

ゼ『いや、みんな知ってたことだからな。』

マ「そして、なんでクリスマスはドヤ顔しながら言ってくるんだ？」

キヤ「わかりませんね〜。顔なんてありませんから。」

瑠「それとそれと〜、たこ焼きも食べたいな。ほふほふしておいしいよね〜／／／／／」

フィ「瑠璃ちゃん、よだれよだれ(汗)」

瑠「あう／／／／／…春お兄ちゃん、今の…見た？」

春「ん？何をだ？」

瑠「う、ううん！な、何でもないから！！／／／／(うう〜、見られてなくてよかったよ〜／／／／／」

春(ま、本当は見ちゃったけどな。)

キヤ「で、話は変わりますが、これからのアタシ達はどうなるんですか？」

マ「そつだな…。ああなって、こうなって、どうなる？」

ク「ネタバレになるからそう言うのはわかるけど、最後のは私たち

に聞いているわよね?」

ゼ『そうだな。』

春「ダメだな。おまえなんて布野郎で充分だ。」

マ「……なんだと?」
ゴゴゴゴゴゴッ

フィ「なんでそこでマジギレ!?!」

キヤ「キレどころがわかんないですね…(汗)」

マ「おい。久しぶりに……殺るか?」

春「ほう……面白いな……。瑠璃、ちょっと待ってな。」
なでなで

瑠「ほう……わかったあ／＼／＼／＼」

フィ「まったく、今回は物騒なお土産もないのに……」

ク『ホントよね。』

ゼ『平和に終わったのにな。』

キヤ「じゃ、もう締めちゃいましょうよ!では、感想いっぱいくださいね!」

フィ「そうしましょうか。作者は昨日、一人カラオケで6時間半費やした可愛そうな人だからね。」

第44話：いや〜まいった。本当に…。

前回のあらすじ。。。。

タマモに追いかけられたオレは、無我夢中に走って逃げるが、追いつかれてしまう。

そして立ち止まった所は、目的地であるはずの管理局本部。

そう、無我夢中になりすぎて、目的地内いつのまにか侵入していた。

あらすじ終了!。。。。

「で……どうしよう。」

なのはを始め、周りの局員達も一斉に撃ってきた。

「おまかせをッ！！」

タマモがオレの前に立ったと思ったら、周りに結界を張る。

『ふう〜ん、結構役にたつじゃない。』

『なぜお前は上から目線なんだ？』

管理局の一斉攻撃を防御しきると、シグナムとヴィータがこっちに跳んでくる。

「タマモ！なのはは……」

「おまかせくださいッ！さあ、遊んであげますよ」

タマモはそう言うと、なのはの前まで移動した。

「むう〜、それは私のセリフなのお！！」

なのはさん、貴方中の人ネタ分かるの？それとも普通に言おうとしたの？

「なにをぼさつとしてる!」

「…っど。」

変な事を考えていると、すでにシグナムが目の前に来ていて、レヴアンティンを抜刀していた。

「ぼさつとはしてないよ!いくぞお!」

オレはシグナムが一閃してきたの、しゃがんで回避。そのまま懐に入り、

「双撞掌底破そごうていしちていは!!!!」

「ガフ…アアアアッ!!!!」

まともに攻撃を喰らったシグナムは局員たちがいる方に吹っ飛ぶ。

「てめえ、よくもシグナムを!!!!」

ヴィータがグラーファイゼンで攻撃をしてくる。

「投影開始トレスオン!!ノヴァ・ブラッド!」

オレは半月状の剣を投影してヴィータの一撃を受け止める。

「ぐっ……」

《なに…この衝撃は…》

「ふんっ……中タイイモノを持ってたが…我々ベルカの騎士には…
効かん！…！」

そこには、先ほど吹っ飛ばしたシグナムがレヴァンティンを構えた
状態でした。

「まずいッ…！」

オレは飛ばされながらも防御をとろうと、手を顔の前でクロスさせる。

「好きなものはひけんつばめがえし…！」

《「！？」》

「特技はひけんつばめがえし…！」

シグナムはオレに向かって、レヴァンティンを……

「趣味は…ひけんつばめがえしッ！…！…！」

「ぐっ………な、なんだ……よ。」

やっぱりシグナムも普通じゃなかったようだ。

(だとすると…ヴィータも?)

ヴィータを見てみるが、変わった所は何もない。

《劉ちゃん、血が…。今から止血を!》

フィオネが自然治癒を発動してくれたおかげで血はなんとか、止まったようだ。

『やっぱり、非殺傷設定ではないようだな。』

「そうみたいだな。」

オレは立ち上がり、いまだにオレにデバイスを構えている二人を見る。

「クリス起動! サードモード!」

『わかったわ!』

クリスを第三形態の槍型にする。

「…いくぞッ!」

オレは二人に接近する。

「真っ向勝負か!」

「へッ…面白いじゃん!」

シグナムはその場でレヴァンティンを構え、ヴィータだけがオレに向かってくる。

「らあああああああ！……！！！」

ヴィータがアイゼンで攻め、オレがそれを受け流していく。

そして、

《「ゼロ！魔力変換【炎】！！！」》

『了解！魔力変換【炎】！！！！』

槍をに炎を纏わせ……

《「火龍連撃！！！」》

隙を見つけては、反撃をしていく。

「うがッ……このヤロー……ッ……！！！！！」

だが、ヴィータもこっちの隙を突いてくる。

と、その時……

「なんだこの殺気は!?!」

《後ろよッ!?!》

ヴィータはこの殺気に反応して一旦下がる。

殺気の正体は…

「翔けよ!隼!?!」

「シュツルムファルケンか!?!」

(さっきから戦闘に入ってこなかったのはこの為かよ。)

「相殺させるぞ!?!」

『おう!魔力変換【雷】!?!』

オレの意図を読んだゼロは何も言わなくても魔力変換をしてくれた。

「頼りになる相棒だ…:疾風轟雷!?!」

「て…てめ……」

シグナムが倒れたのを目を逸らさずに見ていると、後ろから声が聞こえる。

「てめええええええええええ、よくも…よくもお…!!シグナムを
————つ!!!!!!!!!!!!!!」

シグナムが殺られた事に怒りを見せたヴィータ。

「アイゼン！カートリッジフルロード!!!!!!!!!!」

アイゼンのカートリッジをフルロードすると、残しといていたストックも詰めて、さらにロードしていく。

そんな魔力に耐えられるはずもなく、アイゼンにヒビが入り始める。

「おい！そんな事したら……」

「うるせえ！！！！この……殺人鬼がああ！！！！！！」

「……っ！！」

ヴィータが泣きながら叫んだ言葉にオレは一瞬怯む。

が……、

【ご主人様^{マスター}、これが……覚悟なんです。戦う者の覚悟なんです。自分の命を懸けて戦う。そして相手に勝ったら、その者の命の分まで生きる。】

すぐに、タマモの言葉を思い出し、唇を噛み締めながら、ヴィータを見据える。

【わかりましたか、ご主人様^{マスター}？】

そう言った後にタマモが微笑んだのも、思い出す。

すると、自然とオレ顔にも笑みが浮かぶ。

「わかってるよ、タマモ。」

「あゝあゝ!？」

オレの言葉に反応するヴィータ。

(ありがとな。)

オレは心の中でそつと、タマモにお礼を言つと、

「クリス、戻って来い！」

クリスの名を呼ぶ。すると、その手にクリスがしっかりと帰ってきた。

『はいはい。戻ってきたわよ？ア・ナ・タ』

手に収まったクリスはオレに軽い冗談本音を言うが、今のオレにはその

大きさは、ギガントフォーム時のアイゼンなんかとは比べ物にならないほどの大きさだ。

しかもこれでは、周りの局員達も巻き込んでしまつう。

「おい！おまえ、局員達も巻き込む気か！？」

大声でヴィータに怒鳴るが…

「は？局員が巻き込まれる？……だからなんだってんだ？」

ヴィータは真顔でオレに言い返してくる。

「こいつらなんかより、アタシはシグナムが殺られた事に怒ってるだ。それに、こいつらがどうなるうと、関係はないッ！！！！」

ヴィータはそう言うと、出来上がった巨大なハンマーに魔力を注いでいく。

(こいつ……)

「ふざけるなッ！！！！！！たしかに、仲間が殺られて怒るのはわかる。仲間を殺ったヤツを、己の最強の一撃でしとめようとするのもまだわかる！！けどな…その攻撃に…自分の勝手な怒りに他人を

巻き込むなッ！！！！他人の命を大事にしないヤツが、仲間の敵討ちだと！？そんな事は間違っているんだよッ！！！！」

自分も人を殺めといて、何を言ってるんだ？と思ったが、オレはそんなのをお構い無しに、今、ヴィータに言わなければという気持ちで頭がいつぱいだった。

オレはクリスを待機形態に戻す。

「トレスオン 投影開始！ジェネシックガオガイガー 究極絶対破壊神！！！！」

両手に、魔力で形成された破壊神と同じ手を纏わせる。

「はんッ！！たてこいつらがどうなってもな。代わりは幾らでもいるんだよ！！そんな事もわかんねえヤツが管理局の事なんか心配しなくても結構！！！！」

ヴィータがその巨大なハンマーを振り上げる。

ヴィータの言葉を聞いて、さらに頭に血が上るオレ。

「この局員達だって生きてるんだ……その人達の命はどうなってもいい？代わりは幾らでもいる？……この人達の命の代わりなんてな

あ…そんなモノはこの世にはないんだよおお…!!…!!…!!」

オレも手に魔力を注ぎ始める。

「それに…この腐った管理局の心配なんて……するわけねえだろうがああああ!!…!!…!!」

《「ヘルアンドヘブン…!!…!!」》

右腕に攻撃エネルギー、左腕に防御エネルギーを集中させ、その両手を伸ばした状態で、掌を合わせる。

《「ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ」》

「何をやっても、この攻撃に敵うはずがねえ…!!…!!…!!ゴルディオ…!!…!!」

《「負ける訳^{ない}ねえ…!!…!!…!!ウイーター…!!…!!…!!」

『劉、このままだと…』

「わかってる…！…！」

わかってるが……これは、相当きつい。

『劉ちゃん！まずいわッ！…！…』

「え？」

その時、突然時が止まる。

『…発動だ…』

ゼロが を発動したのだ。

「…な、なんで？」

ゼロの意図が読めずに聞く。

『劉、後ろだ。』

自分の胸を見る。

そこには、ボロボロのレヴァンティンが突き刺さっていた。

シグナムの目は虚ろだった。たぶん、もう意識はない。

《りゅ、劉ちゃん……!》

『そんな……』

『劉……!……!』

オレはそこで意識を失った。

第44話…いや〜まいった。本当に…。(後書き)

マ「今回はこの後にも出来れば投稿したいのであとがきは…なしで
「……」

第45話：少し痛いのと、ちょっと痛いのって…やっぱり違うのさ…？（涙目

「ここは…どこだろう？」

目を覚ませば、周りは真っ暗。

何にもない、ただの真っ暗な空間。

「オレは…何してたっけ？」

何も思い出せない。

「ん〜、イライラする〜！〜！〜！」

オレは髪をぐしゃぐしゃに掻き毟り、仰向けに倒れた。

「ふふっ…久しぶりね。劉ちゃん。」

「……っ!!」

オレはその声に即座に反応する。

その声为谁のか気になったのではなく。

その声为谁のか分かったから反応したんだと思う。

今までで何故だか聞きたいと思っていた声だったから反応したんだと思う。

「……あ、アテネ？」

「ええ、久しぶりね。劉ちゃん。」

アテはそう言つと、にこつと笑つ。

オレはその笑顔になぜか涙を流す。

「あ、アテネ！……アテネー！！！！」

オレはすぐに起き上がり、アテネに抱きつく。

「よく、がんばったわね。」

アテネはそう言つと、抱きついたオレを逆に抱きしめながら頭を撫でてくれた。

「????? 頑張ったって……何を？」

オレはアテネが何を言ってるのか分からなかった。

そもそも、なんでオレはアテネの声を聞いて、姿を見て、笑顔を見て、泣いたのかすらも分からなかった。

「あら？覚えてないの？」

アテネはそこで、うんと頭を傾げながら考え始める。

「そっかわッ！……！」

何かを思いついたのか、アテネは急に顔を輝かせると、オレのおでこに手をあてる。

「きつと、シヨックで記憶が少し無くなっちゃったのね。大丈夫よ、今戻すから!」

アテネはそう言つと、手に魔力とは違う何かを通わせていき、それをオレの頭に通す。

「これは神力つて言つてね。まあ、使い方は色々あるけど…、今回は無くしちゃった記憶を修復してあげる!」

瞬間……

「うっ……が、ああああああああああああああああああああああああああああああ……!」

オレに激痛が襲つ。

「ちよっつと、痛いと思うけど我慢してねえ?」

アテネが微笑むが……

「どこ……が、ちょ……っと？」

「違うわ。ちよ……っと……よ？」

そんな問題じゃない！！……とは突っ込む気力すら失せるほど、痛みはオレの頭を襲う。

「はい、もう終わりよ？」

アテネの声と共に、オレはその場に膝をつく。

「はあ……はあ……」

「大丈夫？」

そんなオレにアテネは心配の声をかけてくる。

「少し痛かったわよね？……ごめんね。」

あくまで、アテネはこの痛みを少しや、ちょっとで済ますつもりらしい。

でも……

「でも、そのおかげで……記憶は……戻った……」

オレはいまだに痛い頭を押さえながら立ち上がる。

「オレは……死んだのか？」

「……そうよ。」

アテネは顔を暗くしながら言う。

「やっぱりか……。」

最後、シグナムにさされた痛みを思い出して自分の胸を押さえる。

「今回はごめんなさいね。劉ちゃんには、無茶ばっかささせちゃって。」

「そんなこと……。でも、オレは……。」

何もできなかった。……と言おうとした。

けど、そついう前にアテネがオレを抱きしめる。

「そんな事ないわ！劉ちゃんは頑張ってくれたわよ！！」

アテネの目か涙が落ちる。

「……アテネ……。」

「……グスッ！……でも……劉ちゃんには……また……。」

そこで、アテネは辛そうな顔をして言葉を区切る。

「……ああ。わかってるよ。…オレからも頼む。」

オレはアテネからゆっくり離れる。

「もう一度…」

アテネの目を見る。

「…もう一度…オレを…あの世界線に…戻してくれないか？」

「…劉ちゃん。」

「本当はさ、一刻も早く元の…オレが居た世界線に戻してほしいんだけどさ…。」

そこで、オレは上を向く。

「でも…あの世界線でオレは…遣り残した事がまだあるんだよ。(にじっ)」

アテネの顔を見ながら、微笑む。

「や、遣り残した事？／／／／」

ん？アテネの顔が赤くなってくぞぞ？

「まあね。オレはあの世界線を直さなきゃいけないんだよ。瑠璃の為にも、ダイダロスの為にも。それに…フェイトやなのは達だつてそうだ。あの世界線を直して…オレが居た世界線のような性格に、やさしい性格になってほしいんだ。」

オレはフェイトと戦った時の事を思い出す。

なのはは純粋な分、すぐにエロトの考えを吸収してあんな性格になつたかもしれない。

でも、フェイトを見て思った。本当は…まだ優しい性格だったんじゃないかって。

全部エロトの考えに沿って行動していくうちに、ああいう黒く染まった性格になっただんじじゃないかって。

「だから…オレをあの世界線に…戻してくれ。」

「劉ちゃん……」

アテネはオレの言葉を聞き終えると、目を瞑る。

「そうね。…劉ちゃん、また…行って来てくれる?」

そして、アテネは涙目になりながら、オレに聞いてくる。

「ああ。行って来ます。」

「この穴に落ちれば、あの世界線に行けるわ。」

アテネの前に一つの穴が開く。

「落ちれば？」

「うん。落ちれば、よー！」

はあ…もっとマシな方法はないのかな？（汗

「わかったよ。」

「ああ後ね、リニス。彼女はプレシアの使い魔に戻ったわ。」

「え!？」

どうしてだ？

「劉ちゃんが死んじゃったからよ……魔力があの子にいかなくなつたからよ。で、あの子が消えそうな時に、近くにプレシアが居たら、代わりに彼女が契約してあげたの。」

「そっか……。迷惑掛けたな……。オレがリニスに手を差し伸べたのに……。」

オレは今になって、リニスが言った【使い魔の命を預かる責任の重さ】を実感した。

「はああ。許してもらえないと思うけど……帰ったら、謝らないとな。」

「そうしてあげてね。………まあ、彼女だったら劉ちゃんの事を許すだろうけどね（ボソッ）」

「ん？何か言った？？」

「な、なんでもないわよ！！何も言っていないわ（汗）」

「そうか？」

疑問を持ったまま、オレはその穴に腰をかける………が、その状態で止まる。

「それでき、さっきのアテネの神力である世界線は戻せれないの？」

オレは考えていた事を聞いてみる。

「うん。私もそう思ったんだけどね。神力といっても、相手が世界だと少し厳しいのよ。」

アテネは困った風に手を頬に当てる。

「まあ、そんな事はやった事ないから知らないけどね」

「じゃあ出来るかもって事かよ……（汗）」

いや、アテネなら普通にできそうだけど……。

「それに……劉ちゃん。なんで、私は貴方に【解析&創造】の力をあげたか覚えてる？」

「ん？それは、因果を操れる魔法を創るようになって。」

そっだ……。最近この魔法を創ることを忘れてた……（汗）

「覚えてるわね！じゃあ、これから先……辛い事が起こるかもしれないわ……」

そこでアテネはまた顔を暗くさせる。

「起こるのか……。」

「そうかもしれない。わからないわ。でも…その時は、自分の力を信じて。……自分の力を信じてればその時起こる事を覆せるかもしれない。前に運命は集束するって言ったけどね……それも、覆せるかもしれない。」

「え？」

「まあ、とにかく！自分の力を信じてって事よ！…！」

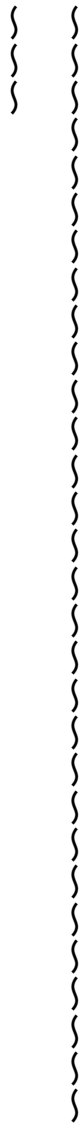
バンツ！！

「…はい？」

アテネが急に笑いながら、オレの背中を叩く。

オレは今、穴に腰をかけた状態……

皆様…わかりますね？



「…………ん」

気がついたら、オレは……

「劉ちやああん！……！！……！！……！！」号泣

「マスターご主人様！？」号泣

『劉ちやああああん！……！！……！！……！！』

『劉！……！！……！！』

「うう、でもお！！！」

タマモは何やら腑に落ちない顔だ。

「そんな顔をしないでくれよ……ほら。」

オレはタマモのホッペを摘んで、軽く伸ばす。

「ほ、ひよつと！？はふたあ！？」

少し伸ばした後に、手を離してあげる。

「な？タマモは笑顔のほうがいいからさ！（にこっ）」

「ご主人様……マスター／／／／／」

タマモは涙目になりながら、顔を赤くしていく。

「う、ごめん！強く引つ張りすぎた！？」

オレはタマモのホッペをやさしく、さすってあげる。

「きゃッ！もう、ご主人様はあマスター／／／／もう、大丈夫ですから！
／／／／／」

タマモはそう言うと立ちあがり、オレから顔を逸らす。

「はあ……劉ちゃんは……」

フィオネもため息をついて、立ち上がる。

「?????」

オレもそれにつられて立ち上がる。

「そういえば、なんでだ?ここって、本部だろ?なんで、
職員達はやって来ない?」

「それは、アタシが結界を張ったからですよ!ご主人様^{マスター}」

タマモは、えっへんと胸を張ってくる。

「そうか。ありがとな。」なでなで

「えへへへ／＼／＼／」

オレはタマモの頭を撫でてあげる。

「ま、まずいわ……最近、タマモにはっかイベントが……」

『な、何とかしなければ……!』

フィオネとクリスがぶつぶつ言ってる。

『放っておいてやれ。』

「そうか。」

オレはゼロの言葉を聞いて、詮索するのを止めた。

「さてと…そろそろ…行くか？」

空を見ると、もう日も高い位置に上っている。早くしなきゃ夜になっちゃうかも…。

「そだね。行きましようか。」

「そうですね。」

『皆の者！！気張っていくわよお！！！！』

『お前は仕切りたがるな…（汗）』

オレ達は結界から出て、エロトの元へ向かった。

おまけ…

「でさ…結局なんで劉ちゃんは？」

「ああ…アテネに助けられたんだよ。」

『なるほどな〜。』

「あんの駄女神め〜！！！！」

「タマモ…落ち着きなよ…」（汗）」

『ちっ！！また、イベントをちゃっかりこなしちゃっているヤツが居たわね！！！！！！！』

「……………オレはタマモを落ち着かせたから、あの二人は…ゼロ…頼んだ（汗）」

『え！？』

第46話：なんか意外なヤツが強い時ってあるよね？……その時って誰もがかな

「ん〜、だいぶ歩いたよな〜。」

「そうね〜。」

オレ達はあの後、本部内部に侵入する事に成功した。

のはいいけど……

『これって……』

「迷子ですか？」

『この女狐！！空気を讀みなさいよ！！！！』

「『クリスには言われたくない！！』」

『ひどいわ……（泣）』

タマモの言ったとおりこれ……迷ったかな。何処を歩いてても、壁にはエロトの顔写真ばっか。

「本当に趣味が悪いわね」

フィオネはさつきから写真を見ては、批判ばっかしている。まあ、気持ちは分かるから誰もそれを止めはしない。

『本当に困ったわね。魔力も感知できないし…』

クリスもお手上げ状態だ。

「とにかく場所だけでも把握したいよな。」

オレは周りに、案内図がないか見ながら歩く。で、階段があれば上へ上る。だって、アイツの事だから、自分の部屋は上にある。…ってか、元帥の部屋って無駄に高い所にあるそうだし…。

「ねえねえ…そっいえばさ。」

今度は壁に貼ってあるエロトの顔写真を破りながら飛んで行くフィオネがタマモに聞く。

「なのはちゃんはどうしたの？」

「ああ…あの娘ですか…」

たしかに…オレもそれは気になってたな。

「あの娘なら、また遊んであげてたんですよ。そしたら、^{マスター}ご主人様の生気が無くなっていくのが分かったので、頭掴んで、本部の上
思いっきり投げつけてあげましたよ。」

『だからか。さっき劉がやられた時に、いきなり上の階から物凄い音が聞こえて来て、大きな穴が空いていたのは……（汗）』

「ええ。我ながらあれはすごかったと思いましたよー!!」

タマモはふふん！と鼻をならす。

（なんか、この世界線のなのは不幸な事ばっかだな。）

「それは私も見たけど……その場所って……この階じゃなかったっけ？」

フィオネが破り終わった写真を刻み始める。

『そうかもしれないわね。ま、関係ないでしょ。』

クリスは関係ないと言う。まあ、普通そう思うよな。今頃は気絶中だと思っし。

「この場所はでは……不利かな……。」

なのはは遠距離魔法に長けている。こつちを近づけさせない術はもつてる……はず。

「だから、こつちも対抗してツインガンにしたけど……。」

正直、なのは相手に射撃戦はきつい。

「でしたら、サポートはアタシにお任せを！」

タマモはそう言うと、呪符を何枚も取り出して、戦闘態勢に入る。

「いいのか？」

「はい！おまかせください！……！」

タマモはオレに微笑みかけると、なのはの方には視線を鋭くさせる。

「と、言う事ですので、今回はお相手を出来ませんので。」

「むう……また邪魔をして……許さないの……！」

そう言うやいなや、なのははアクセルシューターをこの通路内に何十個と出してきた。

「一気に終わらせるの……！シューット……！！……！」

さすがに、この数は……喰らったら死ぬレベルだろ……。

オレは絶対守護の盾を投影しようとするが…

「ご主人様はそのまま突っ込んでください!!」
マスター

タマモはしれっと言う。

『アンタ、正気!?!』

クリスの言い分にも一理ある

…けど……

「わかった!クリス、ファーストモードだ!!」

『ほ、本当に行くの?劉ちゃん!?!』

オレの言葉にさらに驚くクリス。

「ああ。大マジだ、早く!」

『りよ、了解!ファーストモード!』

クリスはしびしびと言った感じで剣の形態になる。

《「じゃ、行きますかね!」》

オレはクリスをしっかりと握り、シューターの地獄に向かって…なのは向かって、走り出した。

「ふふん！本気なの？まあ、私は倒せたらそれでいいけどね…なの！！」

なのははの余裕の笑み。

……が、

その笑みも一瞬で崩される事になる。

「アタシが何も出来ないとも思っていますか？」

オレはなのはに向かって走っているから、後ろにいるタマモの事が見えないが、おそらくタマモは今、笑っているだろう。

そして……

「そ、そんな!?!」

なのはの笑みは崩れた。

何があったって？そんな事…オレも半ば信じられない。オレの後ろ

からいくつモノ光りが飛んで来たと思ったら、その光りがオレを狙ってくるシューター、一つ一つに命中して、撃ち落していくのだ。

『…マジか。』

ゼロも思わず、驚きの声をこぼす。そして気がつけば、オレはなのはの前まで来ていて、なのはに向かってクリスを構えていて、斬りかかる所だった。

「い、今のは…なんなの!?!」

「さあな。オレも驚いているよ。でも……この続きは外でやろっとな!?!」

オレはクリスでなのはの事を斬りつける。

「きゃあああああ!?!?!?!?!」

斬りつけられたなのは、そのまま通路の壁に衝突して外に吹っ飛んでいった。

「ふう…タマモ。」

オレはタマモの方を向く。

「どうです?アタシの力は?」

タマモは片目を閉じたままでオレ達に聞いてくる。

『ま、アンタの力……しかと見てやったわ。』

《ホント…素直じゃないデバイスね（汗）》

クリスはこう言っているけど、タマモの力を認めたようだ。

「では、アタシは空中戦を得意としますので……^{マスター}ご主人様、ご武運を」

《「ああ、行ってくる！」》

オレはタマモに見送られながら、外に吹っ飛んでいったのは追いかけていった。

「はあ……ふう……。ちょっと！私のバリアジャケットに血が付いちやっただなの……！」

外に出ると、なのははバリアジャケットが汚れた事に怒っていた。

「はあ……今ので終わっていればよかったのに……！」

《結構、タフね。》

なのはを斬った箇所を見る。血はいまだに少しずつ出てるし、それなりにダメージは喰らっているはず。

「私はこんな攻撃じゃ倒れないの……！」

なぜだか胸を反らすなのは。

『言ってなさい！アンタがおバカ過ぎてダメージの大きさに気が付いていないだけだから。』

「うう……！そんな事ないもん……！」

クリスの言葉に怒ったなのはは、さっきとは比べ物にならないほどのシューターを出してくる。

「こ、この数って……」

《数百はあるわね》

オレは顔を青くしながら、なのはの方を見る。

「喰らえ!! シュート」

なのははオレの顔が青くなってるのが楽しいのか、笑いながら撃ってきた。

《「まずいッ!!」》

オレは急いで回避行動をとる。

「そればつかに気がいつてたら、大変な事になるの!」

オレがいくつモノシューターを避けていると、なのはの声が響く…。

「デイベイインバスター……ッ!!……!!……!!」

オレが回避行動をとった先にちょうど当たるように撃ってきたのは。オレはそれに見事に直撃する。

えていた。

「一体何処に？」

『上よ！劉ちゃん！！！！』

クリスに言われ、上を向く。

「ま、マジかよ……………」

そこには……………

SLBの準備に入っているのはがいた。しかも、なのはの周りにはたくさんのカートリッジの残骸が…。

「アレだけの数のカートリッジでのSLBを撃とうとしたのか！？」

しかもあの一瞬で……………

『これは…楽な相手じゃなさそうだな…』

ゼロの声にも余裕は消えている。

そして……………

「落ちろ！……！ファイアー……！……！……！……！」

オレがクリスで空を斬ると、それを合図になのはに向かっていく暴風の矢。

「くう……これは……まずいの……！」

なのははエアリアルランサーの一つにディバインバスターを撃つが……

《「無駄だ……！」》

撃たれたディバインバスターはエアリアルランサーに衝突すると同時に弾け跳ぶ。

「な！？い、一体どうすればいいの……！？！？」

なのははその場であたふたし始める。

（チャンスだな……。）

オレはその場からなのはに向かって飛ぶ。

「うう……！……！こうなったらシールドを……！」

なのはが自身の目の前にシールドを張り、防御に備える。

「…くっそ……」

あの後、なのはは力なく落下していった。オレはその後を追うが、どこにもなのはの姿がない。

「さっきので仕留め損なつたのか？」

『でも、手ごたえはあつたわよ？』

クリスにはたしかな確信があるようだ。

「じゃあ、いったいどこい……」

フィオネにも魔力で探してもらってるが……

《うっっん。見つからないわねっ。》

全然見つからない。

「いったい……どこに劉ちゃん……!……!」
「……あぁ。」

フィオネが大声でオレに呼びかけてくる。

理由は分かっている。

「なのはのヤツ……バーストモードか……」

フェイトもアレには時間が必要だと言っていた事を思い出す。

そして、割と近い位置からピンク色の魔法力が天に向かって上がるのがわかった。

(これで、バーストモードが完了した訳か……。)

オレはなのはのいる場所に向かおうとする。

周りには木々が邪魔でなのはの姿は見えない。

「……まったく。邪魔だな。」

オレは小さく、小言を洩らす。

「そうっ？じゃあ、消してあげるね。」

《「…え？」》

瞬間、目の前の木々は一瞬にしてピンク色の大威力魔法に呑み込まれていった。

第46話：なんか意外なヤツが強い時ってあるよね？……その時って誰もがかな

マ「っ、疲れた…。」

フィ「お疲れ様〜。」

ゼ「もう…無理だ。」

瑠「…眠いよ……」

ク「アンタ……バカじゃないの!？」

キャ「もう…どうでもいいです。さ、感謝コーナーいきますね〜。」

A r i s h i a様、ユタ様、けーくん様、メガネ様、毬藻様、光閻雪様、仮面ライダーディケイド様、畏無様、月光閃火様、AIRS様、夜神様、バラランシヤ様、空言天狐様、m a d a o様、紅 幽鹿様、三浦一平様、感想ありがとうございます。」

ゼ「お土産は…仮面ライダーディケイド様からは、フィオネとタマモに絶対きく惚れ薬、劉には真紅のアゾットと対をなす真相のアゾットと取り寄せバック（平行世界のものでも取り出せる版）」

畏無様からは、スカイからアイス（瑠璃に）付きアルカンシエル（マーボー&春人）

月光閃火様からは、エロトにカランダタ・ストリング（神でしか斬る事が出来ない糸。）

バラランシヤ様からは、瑠璃に春人特製ハート型チョコ×1

紅「幽鹿様からは、劉に色々な魔法が書かれている魔導書をいただいた……さんきゅ……zzz」(強制スリープモードが働いた)

ク「あ、じゃあ私も……zzz」(強制スリープ)

瑠「うわぁ!!春お兄ちゃんのチョコだぁ/////////し、しかもハート////////」

マ「いきなり元気になったな。」

キャ「さ、さすがですね。」

エ「ほほう。あの笑顔……可愛いな。」

フィ「って、アンタは……縛られてるわね。」

エ「ああ。なんか禁欲の為に送られてきたとか言ってたが……俺にこれは……快感しか覚えないんだが?」

マ「さすがだな……ってか、おまえ……玉は平気か?」

エ「ああ。復活した。チートなもんで!」

フィ「うっわ。でたわね……無駄にチート。」

キャ「はぁ……そして……(チラツ)」

瑠「た、食べるのが勿体無いよ……//////////」

フィ「そうね…元気そうね。で、その春人は？」

春「……………ZZZ」

マ「さつきから寝てるぞ？」

フィ「ざっけんじゃないわよ！…こんのニートがッ！…！！」

спан！

春「……………ZZZ」

キャ「…寝てますね。」

フィ「すごいわね。」

マ「まあな…。あ、でも、バラランシャ様のPCも復活したみたいだからね。これからの更新が楽しみだ！…！！」

フィ「って事は…春人は帰るの？」

瑠「ええ！？か、帰っちゃうの！？（涙目）」

マ「いや、しばらく残るみたいだぞ？」

キャ「そうですか。よかったですね？瑠璃ちゃん…って、あれ？」

フィ「瑠璃ちゃんは？」

マ「ん〜、あ！あそこに！…！！」

瑠「すう……すう……zzz」

フィ「い、いつのまに春人の横に……」

キャ「そして、寝るの速いですね……。」

マ「そうだな。でも、春人からのチョコを片手に寝ている瑠璃の顔……幸せそうだな。」

フィ「そうね……まあ、溶けるとアレだから回収はするけどね。」

マ「そのセリフ……ユメモキボウモありゃしないな。」

キャ「さて、作者さんはあちらに行ってもらえます?」

マ「……わかってるよ。春人が寝てる今、オレが瑠璃のアイスを取ってやる。……ったくよお……」

キャ「はいッ！瑠璃ちゃんのアイスも回収完了です！」

フィ「じゃあ、今回はここまでね、感想いっぱい頂戴ね！」

キャ「それでは…次回もよろしくです」

フィ「はい、かい〜さん！〜！」

キャ「はい、おやすみなさいませ〜〜ZZZ」

「メ」……「カ」……「シ」……「フ」……「ミ」

第47話：初めてオレより上がった！？…力の差ってつらいよね。（前書き）

今回は短いですが…では、47話はじまりま〜す！

第47話：初めてオレより上がいた！？…力の差ってつらいよね。

「……………けほっ……………」

オレは……………

「……………あのやろっ……………いきなりどこかいのを……………」

《だ、だいじょうぶ…？》

「あ、ああ……………クリスとゼロは？」

『ええ。なんとかって所かしら。』

『問題ない。』

べじちやら、とっさに投影したすべ^{アサマロン}て遠き理想郷が間に合ったようだ。

「……………」

オレの手にあるすべて遠き理想郷アトアロンを見ると、ボロボロの状態だった。

『これは…かなりの破壊力だな。』

あんなモノをまともに喰らったら、死ぬ。

そんな想いが、オレの頭を過ぎる。緊張の為か、手には汗が掻いてきた。

《劉ちゃん？》

「あ、ああ。心配しないでくれ。少し…な。」

これが本物の生死をかけた戦い。フェイトやシグナム、ヴィータの時もそうだったが、今回は違う。

圧倒的な力に呑み込まれそうになる感覚。シグナムに殺された時は違う、恐怖がオレに襲い掛かってくる。

（シグナムの時は何がなんだか分からなかったけど……今回は呑み込まれる寸前まで見てたからな…）

目の前の木々がピンク色の光りに呑み込まれた時に、一瞬で消え去る光景。

それが、自分に当たったときの事を考えてしまう。

「なあんだ。あれでも生きてたんだ。」

《「っ!?!?!」》

前方でオレにレイジングハートを構えているのは。バリアジャケットは黒とピンクで作られている。感じとしては、STServerのエクシードモードを使った時の様だ。

(たぶん、あのレイジングハートも何か新しい形態になるんだろうな。)

今の所は変わった様子は見られない…が、これまでがこれまでだ。油断は出来ない。

「ねえ。私にこれを使わせたのは褒めてあげるよ。だから……」

なのははまた周りにシューターを出していく。

「もっ…消えちやいなよ。(こっ)」

なのははオレに笑いながら…

「シューット…!!」

そのいくつものシューターを放ってくるが……

「ちっ…!!」

《これって…ひとつひとつが、ディバインバスタークラスよ!?!》

オレのエリアルランサーを真似て作ったのか、どうかは知らないが、これは厄介だ。

「ゼロ！【氷結】だ！」

『了解！！【氷結】！！！！』

オレはクリスで空を斬る。

《「大気に満ちる空気よ！凍れ、氷の刃となりて、切り刻め！！！」

》

そして…

《「セレスティアル・ブリザード！！！」》

オレはその砲撃クラスのシューターに氷結で出来たかまいたちを放つ。

「おもしろい魔法だね。でも、そんな魔法はね……」

なのはがレイジングハートに魔力を上乗せさせる。

「あたらなきや意味がないんだよ」

《「なにッ!?!」》

なのはのシューターはオレの『セレスティアル・ブリザード』を避けてながら、オレに向かってくる。

『ホーミング追尾機能か!?!』

そのままオレに音をたてながら向かってくるシューター。

「ゼロ!! だ!!」

『了解だ! 発動!?!』

オレは少しの間、時を止め上空に上がり、その場を離脱する。

「ここから一気にあの魔法を潰す! クリスはセカンド! ゼロは【暴風】で頼む!」

『よし! 魔力変換【暴風】!?!』

『了解よ!?!』

クリスをツインガンにして、下で止まっているのが放ったシューターに構える。

『Load cartridge』

クリスは何も言わなくてもカートリッジを4発ロードしてくれた。

《「荒々しい暴風よ！今一時間の間、オレの力となり、敵を殲滅しろ！！ダイナストロアワルツ！！」》

そして が解け、シューターがこっちに向かってくる。オレはそのシューターに向かって引き金を引き、銃先から圧縮された魔力を放った。

「い、いつのまにあんな所にい！？」

なのはは慌ててコントロールしようとするが…

《「残念、遅いよ！」》

間に合わずに、撃ち落されていくシューター。

「くう、やってくれたの〜〜〜！！！！！！」

なのははその場で悔しそうな顔をする……

「ここは私が一発どぎついのをくれてやるのーッ!……!」

オレ目掛けて飛んできた。

《「っ!!速い!?!」》

なのはの飛んでくるスピードが速い。おそらく……フェイト以上。

《「でも……ストームシューター!……!」》

高速で飛んでくるなのは目掛けて……

《「ファイア!……!」》

ストームシューターを放ち、なのはから距離を離そうとする。

「無駄なの!」

なのははカートリッジをロードする。

オレとなのははお互いに距離を詰め、

《「だあ！！とッ！！はあああ！！……！」》

「ツッ！？…き・か・な・い・の——！！……！」

突きを炸裂させる。

お互い相手の隙を狙っては、その攻撃を受け流す。

「くっそ、こっちなのはは近距離戦術も……」

あきらかに強い。こっちの攻撃は殆んど通りきってない。

「ふふっ！そ〜れ！サービスなのっ！！」

なのはは自分の傷口に指を突っ込み、オレに血を飛ばしてきた。

《「…っ！？！？」》

その血は避けきれず、目に付着する。

《「やばい…見えない…!!」》

目に付着した血のせいで視界が奪われる。

「隙は出来たの！いつけえー！！！」

なのはの声がどんどん近づいてくるのがわかる。

《「くっ………よし！とれ！」》

オレはなんとか血を袖で拭く。完全にはふき取れなかったが、戦うには充分だ。

そして視界に移ったのは、なのはがオレに槍の刀身部を向けて突っ込んできている瞬間だった。

「くっし刺しなの〜！！！」

なのはの場違いな声と共に、オレの腹部に刀身部が突き刺さる。

《「がはっ！あああああああ………！！！」》

刺された箇所、口から血が出る。

「まゝだ、なの!?!」

その後にまだ貫通しきつてない状態で、なのはは細い魔力光線を放ち、オレの腹部を貫通させた。

《「ぐっ!?!?!」》

そして、そのまま地面に叩き付けられるように、蹴り落とされた。

「……はあ……はあ……まいった……」

オレは上空でなにやら集束魔法の準備に入っているのはを見上げながら、なのはの強さをゼロに分析してもらおう。

『ふむ……ランクは、EX+だな。』

《EX+!?》

なるほど……オレより強いわけだよ。

「これじゃあ、エロトはどんだけなんだろうな。」

オレはクリスをファーストモードにしながら立ち上がる。

「でも…負けるわけにはいかないからな。クリス、カートリッジフルロード！」

『Load cartridge』

オレは全カートリッジをロードする。

《「我が身に宿りし闇の欠片、其れは我が唯一の命の煌きなり。森羅万象幾億の命、幾億の運命、幾億に広がるは無限の宇宙全てを統べる鍵にして、扉を開く者。そこに在るは闇にして光なりッ！！」》

なのはの攻撃に備え、詠唱を開始する。

《「永久に続く光を遮る深遠の闇、時に束縛され、其れは終えては還る！！」》

それと同時にオレは足に魔力を溜めて、もう一つの準備に入る。

「あれ？いつのまにか起き上がってるの。まあ、関係ないけどね」

そして、なのはは槍状のレイジングハートを構え……

「トリニティ・スターダスト・ジャベリン！！！！！！」

オレに目掛けて膨大な魔力を纏ったレイジングハートを投槍してきた。

《こっちもいくわよっ！！！！！！》

「ああ！！！！ワールド・オブ・ジェネシス世界の創造神！！！！！！！！！！」

その槍に向かって光り輝く閃光を放つ。

「ワールド・オブ・ジェネシスが、ワールド・オブ・ジェネシスレイジンググハートは世界の創造神と衝突するが、ワールド・オブ・ジェネシス世界の創造神を斬り裂いていく。」

「なんて…魔力…！」

クリスも頑張る

結果、ワールド・オブ・ジェネシス世界の創造神は相殺された。

けど……

「はっはっはあ…！これが私の力なの…！…！」

(この一瞬さえあれば!!!!!!)

周りは相殺された後の煙が一面を覆ってる。

(この煙を利用して!!!!!!)

オレはさっき足に溜めといた魔力を爆発させる。

《「クワトロフル・アクセル(四重加速)発動!!!!!!」》

オレは神速でなのはの元に跳ぶ。

クリスがなのはの胸に深く突き刺さっていた。

「……じっ！…！」

なのはが口から血の塊を吐き出す。

「なのは…！」

「……くっ！……ま、だ……つまだあ……！！！」

なのはの目は死んでいなかった。

「ごめんな……なのは。」

なのはは白目をむき、痛さのあまり叫ぶ。

が、段々と声は小さくなっていく。

そして力をなくし、ダランとした状態なのは、そのまま落下していった。

第47話：初めてオレより上がった！？…力の差ってつらいよね。（後書き）

マ「はい！47話でしたあ！」

春「ちなみに、この途中突っかった部分ってのは骨のことな。」

フィ「一々言わなくてもわかるわ！！！」

キャ「では、感謝コーナーです！！ユタ様、光闇雪様、月光閃火様、バラランシャ様、仮面ライダーディケイド様、感想ありがとうございます！！！」

ゼ「お土産は…月光閃火様からは、カンダタ・ストリング（マイン Dver.）

ユタ様からは、劉の魂管理権限

仮面ライダーディケイド様からは、マーボーとエロトに月読（99兆9999億9999万9999年間作者と大介に刺され続ける&トリプルなのはブレイカー連発されるが外では1秒）、回復薬を10個を頂いた。ありがとう。」

エ「今回は俺の登場か？」

ク「そうね。殺虫剤買ってこなきゃ。」

エ「おい、それはどういう意味だ？」

ク「アンタが今頭に思い浮かべた意味よ。」

マ「悟り開いたんじゃない？」

ク「…だといいいけどね。」

エ「……………俺は…勘違いしていた。」

全「おお！？」

エ「……………男の娘もアリだッ！！！」（くわッ！！）

マ「……………やっちゃまった。」

春「何も言えないな。」

フィ「放つときましよう。」

キャ「それがいいですね。」

ク「で、仮面ライダーディケイド様のお土産はどつするっ。」

劉「それは、オレにやらせてくれ。」

ゼ「今回は珍しく劉だな。」

春「なんか、瑠璃は泣き疲れたらしい。」

フィ「ああ…そういうことね。」

キヤ「詳しくはwebですね?」

マ「いや、ここwebだから。(汗)」

劉「さあって、お?きたな。投影開始!幻想殺しの防御結界」
トレースオン
イマジナリフレクト

フィ「今回は劉ちゃんどうしたの?」

劉「いや、感想で少しな。イラつときた。」

マ「ま、まあ落ち着けよ。仮面ライダーディケイド様、やり返すのはいいので、これからはメッセに返事ください。前から言ってますよね?」

キヤ「さて、今回は…ここまでにします?」

劉「そうだ」おお!!!劉だあ!!!かつわええ!!!!!!「……は
い?」

エ「うひょー!ー!なんだあの首を傾げて、怪訝そうな目で俺のハートを打ち抜く感じは!ー!むふー、たまらんっ!ー!」

劉「なんか…こわれてない?」

春「気にするな。向こうに行こう。」

エ「あ!てめえ!ー!何独り占めにしようとしてんだ!?」

マ「すんげえな。(汗)」

春「じゃ、今回はここまでだ。」

劉「皆さん、感想いっぱいくださいね！」

ゼ『では、次回また会おう！』

第48話：おい…緊張感が台無しだよ…。

「あ！お帰りなさいませ、ご主人様！」^{マスター}

オレはあの後タマモと合流した。

「結構、時間かかりましたね。」

「…ああ。」

オレはなのはが落下していった後、蘇生魔法を使おうとしたが、

《なのはちゃんには可愛そうだけど…蘇生魔法を使うのはやめましょう。》

『そうだな。これで蘇生したらきつと俺たちを襲ってくる』

『そうしたら、次に勝てる可能性は…ないわね。今回勝てたのもラッキーみたいなモンだから。』

と、各デバイス陣の意見を聞き、結局…蘇生魔法は使わなかった。

(たしかに…もし次戦ったら、まちがいなく殺される…な。)

「?????どうしました?」

タマモがオレの顔を覗き込みながら聞いてくる。

「いや、なんでもないよ。エロトの元に向かおうか?」

「そうですか……あっ!アタシ、エロトの位置を捕捉しましたよ〜!」

タマモは誇らしげに言うと、尻尾を振りながら、キラキラした目でオレを見てくる。

(狐……って言うより、まるで犬だな。)

「そうか、ありがとね。」

オレはタマモの頭を優しく撫でてあげる。

「いいえ〜、どういたしましてです!ご主人様マスターノノノ」

頭を撫でられたタマモはさらに上機嫌になって顔をニヤ〜とさせる。

《『ちっ!〜!ま〜たイベントを回収しちゃってさ〜……』》

フィオネとクリスは不機嫌になっていたが…

「では！エロトの元に向かいますかあ！！」

タマモはそう言うなり先頭に立ち、張り切って歩きはじめた。

「……ここが？」

「はい！ここで間違いありません。」

タマモに案内されてやってきた扉の前。たしかに……元帥室なんてプレートがあるけど……

（小学校かよ……）

なんか想像してたのは違って気が抜ける。

《そつだ。劉ちゃん、この扉はどうするの？》

「え？なにがさ？」

《ほら、ダイダロスが言ってたじゃない。この扉には魔力を通さない特殊なバリアがあるって。》

あー、そんな事言ってたな。

「……どうする？」

『劉ではどうにかして開けられないのか？』

オレがどうするかデバイス陣に聞くが、逆にゼロに聞かれる。

「ん〜、たしダイダロスが届けるって言ってたよね？」

オレ達がここに向かう時にダイダロスがこの特殊なバリアを壊す装置を届けに来るって。

《ああ。たしかに言ってたわね〜。》

『すっかり、忘れてたな。』

『そうね。まあ、来たら危ないと思うけど…』

デバイス陣はダイダロスの事をすっかり忘れていたみたいだ。

「…………ふむ」

とその時、タマモがその扉に触れる。

「おい！危ないぞ！？」

タマモが扉に触れると、何かに弾かれたみたいになるが…………タマモはそれを強引に押し付けるようにする。

《ちょ、ちょっと！？》

『何やってるのよ！？』

『バカな真似はよせ！…！』

オレ達が注意するも中々止めずにぶつぶつ言っているタマモ。

その状態が続いてしばらく経つ。

すると、扉の抵抗が段々と無くなっていくのがわかった。

そして……

「ふう……ご主人様、終了しました。」

タマモはため息をつきながら、オレの方を向く。

「これで扉が開いたはずですよ。」

『『『『………』』』』

タマモの言った事に言葉も出ない。

『だ、ただただ……え？魔力は通さないって……』

「はい。魔力は通しませんね。」

クリスの慌てぶりにタマモはその通りだと言わんばかりに答える。

「でも、神力ではどうでしょうね。」

『『『あ……………』』』

そうだった。時々忘れそうになるが、タマモは英霊というより、神に近い存在。もちろん神力も使えるはずだ。

「ま、結果はこの通りですけどね〜。」

タマモはそう言って軽い調子で扉を押す。

《ま、まって!~!》

『そうよ!何いきなり開けてるのよ!~?』

だが扉は止まることなく、開いていく。

そして……………

そこで見た光景は……………

「うお！？ちよっ！だ、誰だ！？」

『『』』……………『』』

「あらあら」

オレ達がいきなり扉を開けた事で驚いたのか：慌ててエロ本・DV
Dなどのコレクション？を片そうとするエロトの姿。

しかも量がハンパない。

「は、入るならノックしてからにしてくれッ！！！！」

エロトは逆ギレしながらも、その大量のコレクションを無理やり、
机の引き出しに入れようとするが…………。

「おい…それは入らないだろ…？」

「るっせえ！！！！」

エロトは無理やり入れようとするが、入れてはすぐに崩れ落ち、ま

るで片せてない。

《今更隠せると思ってるのかな(汗)》

『エロト…その名に恥じぬ名だな。』

ゼロ…そこは感心するところじゃないよ……。

「ん？これは何ですかね？」

タマモが足元にあった一冊のアルバムを拾う。

「お、おいッ！……それは…っ！……」

なんだ？エロトの慌てっぷりが尋常じゃない。

『タマモ、見ちゃいなさいよ。』

「そうですね」

クリスに急かされて……

「ではオープン……」

タマモが勢いよく開けたアルバム。

そこに写っていた物は……

「……盗撮写真……？」

オレ達が見た物……それは……まごうことなき盗撮された写真の数々。それも色々なアニメやゲーム、ラノベやマンガ、ssといった世界の盗撮写真だ。

よくもこれだけ集めたもんだ………だが、

「……フィオネ、今すぐ管理局に連絡しろ。盗撮犯を確保したと。」

『ついでに性犯罪者とも付け足しなさい。』

《無駄よ！なんせ、そのトップがこの性犯罪盗撮異常者なんだから！》

『世も末だな。』

「おいっ！てめえら、返しやがれえ！！！！！」

エロトがタマモに近づいて、アルバムを奪い取る。

「………まったく。なんでだよ。ノックしたら、ちゃんと落ち着いて隠せたのによ。」

アルバムを奪い取ると、それをペラペラと捲りながら文句を言うエロト。

「あのさ………隠すとかそついう問題じゃなくてさ………量をどうにかしろよ？（汗）」

「なにを！？この時の俺の俊敏性はネコにも負けないんだぞっ！！！！」

「そんな事は聞いてない。」

いや、すごいと思うよ。人間がネコより俊敏性があるんだからな。

「……………ん？」

そこで、エロトは気づく。

「なんで？おまえらがここにいる…？」

ようやく気が付いたか…………。

「だって、オレ達はここにのり込んで来たんだぞ？」

「だ・か・ら！！なんでこの部屋に入れるんだ！？ここには特殊なバリアを…………」

「あ…それ、アタシが壊しました。」

エロトの言葉を遮り、自分が壊したと教えるタマモ。

「…………え？…マジか？」

エロトは扉を開け閉めする。

「…………マジかよ（ボソッ）」

(無理があるだろう……)

たぶん、タマモもデバイス陣もそう思っているだろう。

「ふんっ！この俺の秘密…俺のコレクションを見たんだ。生きては帰さんぞっ！！！！」

エロトはガツシユのマント状のバリアジャケットを展開し、手に杖型のデバイスを持つ。たしか、ゼオンだったか？

《ねえ？何か趣旨がズレてない？》

『そうだな。』

『これもしょうがないわよ、相手が相手だし……』

「っていつか、あの中の写真にアタシの写真もあったんですが……」

たしかに趣旨はズレてるし、タマモにいたっては……ドンマイだ。

けどな……

「ここからは気合いれろよ？今まで戦ってきたヤツ等のボスなんだからな。」

オレはクリスをファーストモードにして手に持つ。

そして、お互い睨みつける。

こうして、この世界線でのオレ達の最終決戦はグダグダで始まった。

第48話：おい…緊張感が台無しだよ……。 (後書き)

マ「はい！今回は時間がないので、ぱぱっと終わらせます！」

キャ「そうですね。では感謝コーナー！龍賀様、Arishia様、ユタ様、光闇雪様、バラランシヤ様、メガネ様、夜神様、けーくん様、月光閃火様、毬藻様、感想ありがとうございます」

ゼ「お土産コーナー！龍賀様からは、エロトにブラックオンスロートユタ様からは、エロトの次の生をとあるの主人公より不幸に。

バラランシヤ様からは、ジュエルミート 宝石の肉 虹の実ゼリー センチュリースープ

メガネ様からは、アテネに聖祥の女子制服を来た劉をデフォルメにしたぬいぐるみ

夜神様からは、エロトに幻覚剤：会う人全てが男に見えるようになるクスリをいただいた！ありがとう！」

劉「で？今回はなんでそんなに急いでるの？」

マ「妹だ…」

フィ「ああ…PCを代わってことね」

マ「そうだ。お土産は次回ということ。すみません！」

劉「では次回！」

第49話：元帥の力……………最終決戦始まるよ〜！！

《「……………」》

「そろそろそろあぁあぁ……………」

オレは今、エロトの超強化分身術ディマブルクと交戦している。

「なんか…分身はそこまで強くないんだな……………」

《そうね〜。》

それでも、なんでこの分身と戦っているのかというと……………

「うつせえ！俺がこれを片し終えるまで待ってる！そしたら、好きに料理してやるよっ！！！」

エロト本体がコレクションをしまっているからだ。

いや、オレ自身何してるんだろ？とか思ってるけど…この分身が襲ってくるから相手をしなきゃいけない。

『…面倒ね。一気にやっちゃいましょうか?』

クリスマスもいい加減痺れを切らしている。

「そうだな。ゼロ、魔力変換…」

『おう！魔力変換【炎】！』

オレの周りに赤色の魔力が広がる。

「そんなもの。この俺様の手にかかれば…!!!!」

分身は何も考えずに突っ込んでくる。

《「ふ〜、落ちろ！全てを滅する浄化の炎…!!クリムゾンシャワ
ー!!!!!!」》

分身の上から幾つモノ炎を落としていく。

「ぎゃあああああ!!!!!!あっつ!!!!あち、あちっつ!!!!!!ぎ
やあああああああ!!!!」

哀れ……分身は何も対処法とか考えていなかったみたいだ。断末魔
だけを残し、分身は燃えていった。

『なにあれ……』

本当に何なんだろな…

オレはクリスを構え、エロトが片付けている方を向く。

《あれ？……エロトがいない？》

そこでさっきまで片付けていたはずのエロトの姿が消えていた。

『劉ちゃん！後ろよっ！！』

「なに！？」

オレが後ろを向くと、斬激がとんでくる。

「くう…っ！！」

なんとかクリスでそれを防ぐが…

「ぐっ…があああああああああああ！！！！！！！！！！」

そのまま押し切られて、外までぶっ飛ばされた。

「よう……俺の準備は出来た。これより、犯罪者の死刑を執行する。」

建物から出てきたエロトはゼオンを構えながら言ってくる。

「…そうかい、こっちもお前を消すつもりでいくからな…。悪く思うなよ。」

「ふんっ！俺が負ける訳ねえだろ。ゼオン、モードリリース。そして、ライトニング・ザルグブレード！」

エロトがデバイスを待機状態にすると、手から雷で出来た剣を出す。

（ハンドソニックみたいだな。）

形はそのまんまだが……

「まずは、踊れ。」

エロトがこっちにザルグブレードを向けると、そこから雷がオレ達に飛んできた。

「そんな物、喰らうわけないだろ!!」

オレはそれを難なく避けていく。

《今度はこっちの番よ!》

「イグニートスファイア……ファイアツ!!」

周りに豪火球を形成して放っていく。

「ふんっ!」

が、エロトはザルグブレードでイグニートスファイアをどんどん斬ってきたから、オレに接近してくる。

『さすが……元帥ね。』

「だけど……勝負は始まったばかりだッ!!」

オレもエロトに接近し、クリスで一閃。

エロトもその一閃をザルグブレードで受け止めると、今度は斬りかかってくる。

《くっ!!》

それを防ぐが…

(こいつ…一撃が重い……！)

「どうした！？俺の力はまだまだこんな物じゃないぜっ！！」

エロトと剣を交わしていると、突然左手を向けてくる。

「まずいつー！」

「遅いなー！テオザケル！！」

エロトが呪文を唱えると、手から高密度の電撃がオレを襲う。

『させるかつ！ 発動！』

ゼロが を起動し、時が止まる。

《ナイスよ、ゼロ！！》

オレはその間にエロトから距離をとる。

『 解除』

ゼロが解除すると、時が動き出す。

「へっへ、どうだ…って、なにい！？」

自分の攻撃があたったと思ったエロトはオレが回避している事に驚く。

「お前…何をした？」

「教えるわけないだろっ！おとなしく燃えてろ！ブレイジングボール
ケーノツ！！！」

クリスをエロトに向け、触れるだけでもすべて燃やし尽くす炎を放
つ。

「どんなトリックを使ったてんだ……。マ・セシルド！！！」

さっきの事を考えながらも強度を誇る盾を出現させ、オレの攻撃を
防ぐエロト。

「ちっ！さっきの事はパスだ。ジガザルク！！！」

突如、上空から青い雷がエロトに落ち、その雷はエロトに纏ったま
まになる。

(こいつ…最初の術を見てから考えていたが……)

雷を纏っているエロトを見る。

「オリジナルの術を使えるな…。」

どれも、【ガッシュ】では見なかった術だ。たぶん、自分で術を編
み出しているに違いない。

「いくぞっ!!こっからは肉弾戦だあ!!」

エロトが猛スピードでこっちにやってくる。

「そうかい…フィオネ、身体強化のサポート頼む!!」

《OK!まかせてッ!》

こっちも身体強化を使って、やってくるエロトに備える。

「らああああ!!!!!!!!」

エロトがオレに近づくなり猛ラッシュを仕掛けてきた。

「肉弾戦か。なら、こっちからもいくぞ?」

オレはエロトの猛ラッシュを潜り抜け、懐に入り……

《「隙だらけだよ!!!!」》

オレはエロトの顔面に左右両方から一発ずつ入れた。

「がへっ!?!ぐふっ!……こんのお!!!!」

エロトが脳震盪を起こしながらも殴りかかってくる。オレはそのエロトのパンチを受け止め握り、

エロトは起き上がる様子を見せない。

『ん〜、これではやられてないと思うわよ?』

オレもそれには同感だが……何か引つかかる。

(なんだ……ガツシユの術で何か忘れてる……)

《あれ〜?そういえば、タマモは?》

「タマモ?」

そういえば、戦い始めてから姿を見てないな。

『タマモなら……ほら、後ろのほうだ。』

ゼロが言った先には……

「かつこいいですよ〜!ご主人様マスターノノノノノノノ」

どこから出したのか、ビデオカメラを片手に応援しているタマモがいた。

《あ、あの狐ったら〜!〜!〜!》

『まあ、今回はいいわ。後であのビデオファイルは貰うけどね。』

『そついつ問題か…?』

(はあ…やれやれだ。)

オレはいつもと同じ事にため息をつきながら、エロトの方を向く。

「ずいぶんと余裕だな。」

『『『「!?!?!?」』』』

振り向くと、目の前にエロトが立っていた。ザルグブレードを出した状態で。

『な、なんで!? 魔力は感知しなかったわよ!?』

「そりゃそうだ。なんたって、これは魔法じゃない。魔術に近い存在…っだ!」

エロト言い切ると同時にオレの腹部を深く刺す。

『「くっ!…あああああああああ!…!…!…!…!」』

「そ…れっ! おまけだあ!…! ゴウ・パウレン!…!」

ザルグブレードを抜き取ったエロトはそのままオレを地面に叩きつけた。

「さらに、さらにい！！紳士な俺はもう一丁サービスだあ！！！」
叩きつけたオレの頭を蹴り飛ばすエロト。

蹴り飛ばされたオレは再び地面に叩きつけられる。

《「ガハッ！！！！」》

腹からも口からも血が出る。鉄臭い匂いがオレの鼻を抜けて伝わってくる。

「げっほ…けほっ……この世界線では、こんな様ばっかだな。」

オレは口の血を拭いながら膝をつく。

(ま、今は完全に自業自得だけ。)

《くう…にしてもなんで、エロトは復活してんの？》

『そうね。どうしてかしら？』

そっか。こいつ等はわからないのか？

「あれは…ジオルク。死なない限り、どんなケガも一発で治す術だ。まあ、自分自身だけの回復術だけだな。」

『そんなモノ術まであるのか!?!』

さつきから忘れていた正体はこいつだ。

『関係ないでしょ! どうせ消すんだから。何回蘇っても関係ないわ!』

「…だな。」

オレは刺された箇所ケアルガをかけながら立ち上がる。エロトは…まだオレを蹴っ飛ばした所にいるな。

「この距離から攻撃を仕掛けてみるか。クリス、セカンドモード! 魔力変換【暴風】!」

『よしてきたあッ!?!?!』

『了解だ。【暴風】!』

ツインガンにしてカートリッジをロードする。

《「いくぞ! ルーインデイスサイクロン!」》

オレは無数の竜巻を形成して飛ばす。

「ほう。まだ生きてたか、ギガノ……」

エロトがおでこに両手をあてる。

「ゾニスッ！……！」

すると、エロトのおでこから一つの膨大な竜巻が放たれ、オレのル
ーインデイスサイクロンを相殺していく。

《「いまだ！クワトロフル・アクセル（四重加速）」》

オレはなのはにやった時のように、奇襲をねらい……

「……ん？」

エロトの後ろに回り、クリスをファーストにする。

《「喰らえッ！……！」》

「そんなモノ喰らうかよーッ！」

エロトがオレに気づき、ザルグブレードを出し、逆に斬りかかって
きた。

《「かかったな。」》

オレはさらに、なのはにやった様に横に切り裂き……

《「まだまだあ!!!^{トレスオン}投影開始!!!&真名開放【転輪する勝利の剣】
(エクスカリバー・ガラティーン)!!!」》

手に、エクスカリバーの兄弟剣を投影する。

《「散れッ!!!エクスカリバー・ガラティーンッ!!!」
》

熱量を持った球体を形成して真名開放した【転輪する勝利の剣】
(エクスカリバー・ガラティーン)でエロトを横薙ぎに斬りつけた。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおお!!!……!!!
!??????」

エロトは斬りつけられたまま吹っ飛び、地面にころころ転がって
く。

「くっ!」

オレはそこから、またアクセル・ターン（超加速）を発動して近づ
き、マウントポジションをとる。

「確実に…確実に……終わらせるッ!」

そのマウントで下になっているエロトの胸にクリスをまた刺す。

「ぎゃああああああつあああああああああああああああ
あ!」

骨がボキボキ折れる音が聞こえて、オレの体にエロトの返り血がこ
びりつく。

《も、もついいんじゃないかしら…?》

「…あ、ああ。そうだな。」

オレはエロトからそつとクリスを抜き、エロトを見下ろす。

「……………くっ!」

足が限界を迎えていたのか、太ももから出血していた。

『アクセル・ターン（超加速）を無理に使った反動ね。』

オレはその箇所にケアルガをかけて回復していく。

「はぁ…はぁ…と、とりあえず、ここから離れようか。」

エロトは殆んど息も満足に出来ていない状態だ。

オレは少しフラフラになりながら、タマモの元に向かった。

「^{マスター}ご主人様！！大丈夫ですか？」

向かっている最中にタマモがこっちに駆け寄ってくる。

「……………少し…疲れた……………かな。」

オレはその場で腰を下ろす。

「お疲れ様です。」

タマモが後ろから優しく支えてくれた。

「エロトは…?」

「ああ。あいつは……………もう大丈夫かな。」

オレはタマモにそう言って、自分に回復魔法をかけていく。

《これで帰れるのよね?》

『そうね。エロトが死んだらね。』

『でも…本当にアレで終わったんだらうか？』

ゼロがオレに言ってくる。

「どうしたんだよ？さすがにアイツだってあの状態じゃあ……」

『じゃあ、なんで俺達は元の世界線に帰れてない！？』

《それは……まだ、すぐに帰れるわけじゃないんじゃない？》

フィオネが答えるが……

『では、いつ帰れるんだ！？今回はアテネが帰してくれる訳ではない。この世界線が自動で修正するんだぞ！？…なぜ…その修正が始まらない…？』

ゼロが大声で言った瞬間……

エロトが倒れているはずの所から大きな魔力が天に昇っていくのが

見えた。

それに、これは……

『はあ……エロトの魔力反応……感知よ。』

クリスがうんざりそつに言う。

どつちら、まだ……最終決戦は終わってないよつだ。

第49話：元帥の力……最終決戦始まるよー！！（後書き）

マ「どうもです！今回の話は、自分で書いてて、よくわかってませんでした！！」

フィ「まあ、エロトがまだ生きてて、最悪って感じよ。」

ク「本当に殺虫剤ぶっかけようかしら？」

ゼ「やめてやれ。では、感謝コーナー。」

キヤ「ユタ様、毬藻様、夜神様、光闇雪様、バラランシャ様、けーくん様、メガネ様、紅 幽鹿様、月光閃火、感想ありがとうございませぬ」

ゼ「お土産コーナーだ。」

ク「ユタ様からは、タマモに遠距離焼却装置

バラランシャ様からは、エロトに偽・螺旋剣（カラドボルグ？）、
是、射殺す百頭、ナインライフスプレイドワークス全投影連続層写（フリーズアウト、ソードバレルフルオープン）

仮面ライダーディケイド様からは、月読！滅びのバーストストリーム！アルティメット・ストリーム！エターナルコフィン！トリプルなのはブレイカー！トリプルブレイカー！バレット・コーディネーション！ソード・コーディネーション！ギア・ブラスト！（剣と銃を組み合わせながら剣と銃とレーザーガンとそのほか核やらミサイルやら出せるのがギア・ブラスト）弾数はそれぞれ1千兆を貰った

フィ「はいはい。ロリにお父さんは黙ってな。」

マ「で、今回はどうする？防ぐのか？」

劉「いや、ちゃんと受けてあげるよ。」

フィ「だ、だいじょうぶなの!？」

劉「まあ、見てて。」（スタスタ

キヤ「ご主人様^{マスター}…頑張ってください!!」

春「まあ、劉なら何とかするだろう。」

劉「……っっ……へ、へへ。……余裕……うっ……（ニヤリ）」
バタッ

キヤ「ご主人様^{マスター}！……！」

フィ「劉ちゃああん！……！」

ク「そんな……」

春「……絹ごし、俺は寝てくるぞ」

マ「あ……ああ。……なんか春人が怖いよ。」

ゼ『……瑠璃に会えないストレスか？俺だつて会いたい！！』

マ「おまえのキャラもだいぶ変わったな。」

劉「……ごめん……しばらく……寝るわ。」

フィ「い、今、回復させてあげる！」

ク『そ、そうね（汗』

キャ「……………」

マ「……………た、タマモさん？（汗」

キャ「……………クロス」

ゼ『……タマモ？（汗』

キヤ「次、攻撃してきたらこの神で良妻狐のアタシ……【玉藻御前】
が全力であるの、場末の神社の賽銭箱とまちがえるぐらいシケた内容
の攻撃を止めてみせます！！！！どっからでもかかってきやがれー！
ーッ！！！！！！」

マ「こ、ここここえ〜〜〜〜！！！！！！！！」ガクブル

ゼ「そ、そうだな……」ガクブル

キヤ「……では次回もご期待くださいね」

マ「……変わり身早いな……」ガクブル

ゼ「そ、そうだな……」ガクブル

第50話：目覚める力、護るために。

「ふう……いくか」

オレは回復魔法をかけおえ、エロトの魔力が昇っている所を見る。

「タマモは……手を出さないでね。」

「で、ですが、^{マスター}ご主人様！！あ、アタシも一緒に戦ったほうが……！！」

タマモがオレの腕を掴む。

《そ、そうよ！タマモと戦ったほうが……》

「それでもだ！あいつは……エロトはオレが……倒す。」

オレはゆっくりタマモの腕を離させる。

「それにさ、オレが戦いを終えて戻ってきた時に誰かが……仲間が笑顔で迎えてくれたほうがいいしさ（にこっ）」

オレはタマモの目を見て微笑む。

「……^{マスター}ご主人様……／／／／／」

タマモは顔を赤くさせる。

《まあ、そつだよな！》

『アンタに私達を出迎える義務を与えるわ!』

『…おまえは本当に……（汗）』

「だから……ここで待っていてくれるか？」

オレは再度タマモに聞く。

「そ、それは……」

そこで、タマモは一旦口を閉じる

「^{マスター}ご主人様!!!い、今は、オレの嫁宣言”と見て、間違いありませんね!?!?!?!?!?!」

「では、いってらっしゃいませ！^{マスター}ご主人様！！」

そして、丁寧に頭を下げてきた。

「さ・て・と、エロトの場所に来たまではいいけど……」

オレはタマモに見送られながら、この場所まで来た。そのせいで、
デバイス陣…まあ、どのデバイスかは言わなくても分かると思うけ

ど、かなぐり、不機嫌になっていた。

そして、目の前のエロトは……

「……おい！！お前だけは絶対に殺す！！この俺がああ！！！！」

うん。怒り狂ってた。

『なによッ！！逆にアンタを殺してやるわ！！！！』

クリスはエロトに怒鳴り返す。

「るっせえ！！おめえらは絶対に……この管理局の名の下に……殺す
！！！！！！」

エロトはそう怒鳴ると、

「落ちろやあ！！！！シン？バベルガ？グラビドン！！！！」

オレに手をかざし、オレめがけて膨大な重力を落としてきた。

「うわっ！！アクセル・ターン！！！！」

オレは超加速を使って、その範囲から逃れる。

「そんなモノ避けたぐらいで、いい気になるなあ！！！！！！」

今度は両手をかざしてくる。

『劉！…なにか来るぞ！！』

「わかってる！」

クリスをファーストモードにする。

「おらああッ！！！！シン？フェイウルク！！！！」

エロトがマツハを超えた速度でオレに近づく。

本来この術はあまりの速さで、体当たりぐらいでしか使えないが……

「くッ！この術を移動の為だけに……！！！！」

「ふんッ！俺だからなあ！！！！！！シン？ドルゾニス！！！！！！」

エロトが両手にドリル状の風を纏わせ、オレに向かって刺してくる。

「くっそ！」

オレはクリスでその攻撃を防いでいく、

「生意気な野郎だな！！絶対殺す！！！！」

「それはお前のほうだ…よッ！！！！」

もはや、周りには見えないほどのスピードで攻撃を交わしていく。

「っッ！しまった！」

《まずいわよッ！！！！》

が、エロトのシン？ドルゾニスがクリスを弾く。

「もらったあ！！！！風穴開けやー！！！！！！！！！！」

エロトがその隙をついて、オレの腹にシン？ドルゾニスを刺してきた…いや、挟んできた。

《「ぐわあああああああああああああッ！……………！！」》

「終わりだッ！……………」

エロトがオレから距離をとる。

《「…まずいッ……………投影開始！……………」》

「黒いバオウ・ザケルガ……ッ！……………」

《「……………絶対^{イジス}防御領域！……………」》

オレの周りに球体のバリアを張る。

「そんなモノでこの術が負けるわけねえだろうがああ……………！！」

エロトの黒いバオウ・ザケルガがオレの絶対^{イジス}防御領域にぶつかり……………

「…なんとか防御しきつたな。」

《クリス！》

『分かってるわよ！！』

フィオネがクリスを呼び寄せると、オレの手に収まる。

「よく止めたもんだな！だが、まだ終わってねえぜ！！！」

《「…っ！?!?!？」》

「シン？ドラゴノス？ブロア！！！」

エロトの口から、巨大な波動が放たれ……

オレは爆発に巻き込まれた。

「……はあはあ……どうだ？……さ、さすがに……」

エロトが息を切らしているのがわかる。

（あいつの技の爆煙でオレの姿は見えないはず……やるなら今だな。
投影開始（トリースオン！）真打・童子切安綱（したつち・どうじぎりやすつな）

「オレの血肉を糧として、敵を滅せ！！！！！」

「……っ！！！！な、なんだと！？」

急に爆煙から出てきたオレに驚くエロト。

《「きがぜつとつ鬼牙絶刀！！！！！」》

オレはエロトに禍々しい衝撃波を放つ。

「くそがあ！！！！チャージル・セシ……」

エロトが防御呪文を唱えようとするが、間に合わなかったエロトはオレが放った衝撃波に呑み込まれていった。

「……………」

衝撃波に呑み込まれたエロトは無言で立ち上がる。

《「……………いい加減しつこいな……………」》

さすがに、しぶとすぎるだろ……

「……ひとつ聞く。なんでさっきは、俺の攻撃が効いてなかった？」

エロトの声は小さかったが、なぜか周りに響いた。

《「……それは、すべて遠き理想郷……って言えばわかるよな？」》

「……ちッ！あの一瞬でかよ。」

エロトは舌打ちをすると、ため息をつく。

「まあ、あれだ。俺をここまで追い詰めたヤツは、お前が始めてだ。俺は転生してきたんだがよ……。お前ならわかるよな？^{トリッパー}転生者の事をよ。」

エロトに聞かれるが、オレは無言のままだった。

「……俺はこの世界で『ハーレム計画』を練っていたんだ。だって、なのはやフェイト達がいるんだぜ？そりゃ、そんな計画をたてなきゃ損だろう。……でも、なんでだろうな……。たしかに友達まではうまくなれたんだ。でも……その先にはいけなかった。」

エロトは自分の掌を見る。

「で、でも!？」

『いいから!今、解除しないで、いつ解除するのよ!!!』

クリスにはリミッターがある。こいつは普通のデバイスとは威力そのものが違うみたいで、普段はこのリミッターのおかげで通常のデバイスの威力で戦っている。

けどリミッターを解除したら、その力は解き放たれ、正直その力はクリスも耐えられないほどだ。

「…ギルザケル・バルスルク」

その時、エロトが一つの禁術を唱える。

するとエロトは白目になり、全身から毛が生えてくる。そして大きさもかなりでかくなっている。

《ちょッ!あの姿なに!?!》

「あれは…狂戦士だ。」

ハイパーカー

今のエロトは雪男のように毛が伸びきっていて、意識は……

「ぐはあああ……へ……へ……へ。さあ、かかって来い……！」

エロトの意識はあった。

「あいつ……あの力をモノにしたってのか……！」

エロトの底力に一瞬恐怖する。

「でも……オレも負けられない。……クリス……！」

『了解よ！クリスティーナ、リミッター解除！……！』

クリスから大きな魔力があふれてくる。

その魔力はクリスの周りに集まり、クリスの形をこつく変えていく。

「大丈夫か、クリス？」

『そうね。負ける気がしないわ。』

上空から神の雷をエロトに落とす。

「それこそ喰らうかよーッ！……！」

エロトはなんなく避ける。

が、

《「その避ける事は読んでいた！……！」》

エロトに手をかざす。

《「セレスティアル・ブリザード！……！」》

エロトに向かってかまいたちを放つ。エロトは逸れも避けようとす
るが、避けきれずに足に当たり、動きを封じ込めた。

「ぐッ！このお……なんて固いんだ！？今の俺の力でも壊せないとは
………！」

《「ダブルアクセル・ターン（二重加速）」》

そこでエロトはジャンプする。

『のしかかりか…!?!?』

ゼロの言葉に反応してなんと横に転がって回避する。エロトが落下してきて着地すると、

『なんて力よ…!』

オレがさっきまでいた場所は粉々になって、軽い地割れが起きた。

「あつぶねえ………」

オレは額の汗を拭いながら、落下してきたエロトを睨みつける。

「……ちいッ…そろそろ壊れるよ!こん畜生があ!!!!!!」

エロトがさっき地割れを起こした時にできた岩を何個も投げってくる。

《「アクセル・ターン（超加速）!!!」》

オレはアクセル・ターン（超加速）を発動して、その岩を避けてい

オレはエロトを見る。

「うがああああ……!……!……!」

エロトは叫びながら立ち上がると、口から血を吐く。

「ぜえ……はあ……負けねえよ。」

エロトがさらに魔力をあげる。

『劉ちゃん！……ここに誰かやってくるわ！！』

「……え？」

エロトと睨みあっていると、クリスが知らせてきた。

「こんな時に……いったい誰だよ！？」

『来るわ！……！』

クリスが大声で言うと……

そこに現れたのは……

「……ヒック！りゅ、劉君！！…グスツ！！」

空間に穴が空き、そこから現れた泣きじゃくっている一人の少女。

「る、瑠璃！？なんでここに！？」

「だ、ダイダロスが…これを届けてって…グスツ！」

瑠璃がオレに一つの機械を渡してくる。たぶん、あの特殊なバリアを壊すための装置だろう。

「…で、ダイダロスは？」

なんでダイダロスは瑠璃に届けさせたんだ？

「……………じゃった。」

《「.....え？」》

「し、……グスツ！死んじやったよお……！！」

《「な、なんだって!？」》

瑠璃の言葉に驚かされるオレ達。

その時、エロトが微かにニヤッと笑うのが分かった。

「おまえ…何か知ってるのか？」

「あいつは…俺が殺させたよ。なにやら、へんな物を作っていると情報が入ったからなあ。」

瞬間、エロトがオレの所まで跳んできて、近くにいた瑠璃を攫う。

《「しませ〜……!？」》

オレはダイダロスの事で頭がいっぱいになってエロトの速さについていけなかった。

「う、うわああああああああああん！！！！助けてえ！！！！
劉く！！！！ん！！！！！！！！！！」

エロトに攫われた瑠璃はさっきよりも大声で泣きじゃくりながら、オレに助けを呼ぶ。

《「瑠璃……！……！」》

「ああ！？この俺が目の前にいるんだぞ？それなのに、ほかの男か！？」

エロトは瑠璃に顔を近づけながら聞く。

「ほら、答えるよ？お前は結構可愛いから俺の嫁候補にしてやるよ
お！」

ヒロアはニヤつきながら、瑠璃に言った。

が……、

「いやだッ！！！！だ、だったら、劉君の方がいいもんッ！！！！！！！！！！」

瑠璃は顔を近づけてくるヒロトの顔を叩きながら断る。

「あ、あ、！？お前も俺の言っ事を聞かないのか！？」

エロトは瑠璃を鷲つかみにしたまま、上に持ち上げる。

《瑠璃ちゃん!.....!》

「瑠璃.....ッ.....!」

ドクン！

急に時が遅くなり、アテネの言葉を思い出す。

【これから先…辛い事が起こるかもしれないわ…】

【でも…その時は、自分の力を信じて。 ……自分の力を信じてれば
その時起こる事を覆せるかもしれない。前に運命は集束するって言
ったけどね……それも、覆せるかもしれない。】

【まあ、とにかく！自分の力を信じてって事よ！…】

アテネの言葉を思い出した瞬間……

時は急に元の速さに戻る。

ドクン！

ヒロトが瑠璃を叩きしつちんちんちん。

ドクン！ドクン！

……?
(このままじゃ、瑠璃が……死ぬ……？……オレは……護れないのか

その時、オレの胸が熱くなるのがわかった。

(頼む！アテネの言った通りなら……オレの中に眠る力よ……オ
レにみんなを護れる力を…今、瑠璃を護る事が出来る力を…!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!オレに貸してくれ!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!)

心の中で強く願った。神速で、エロトに近づきながらもオレは強く願った。

願うごとに胸は熱くなり、目にも違和感を感じるようになった。

「うがあああああああつあああああああああああああああああああああ

あ……………!!

「!!

《劉ちゃん!?!?!?!?!?!?!?》

そして、頭の中に一つの魔法名が頭を過ぎる。

これが……オレの中に眠っている力……なのか？

だ
っ
た
ら、
使
っ
て
や
る
！

使って、
瑠璃を…みんなを護ってやる。

オレは目に模様を浮かべた状態で、その魔法名を力いっぱい叫んだ。

「カウザリテイ・トリガー因果の引き金…発動ッッ……!!」

第50話：目覚める力、護るために。（後書き）

マ「今回は結構グダグダになったな。」

ゼ「そうだな。」

フィ「じゃ、感謝コーナー！」

キャ「えつと、Arishia様、夜神様、光闇雪様、バラランシヤ様、けーくん様、メガネ様、ユタ様、月光閃火様、仮面ライダーデイケイド様、紅 幽鹿様、感想ありがとうございます！」

瑠「ふみゆ……」

ゼ「おお！瑠璃が久しぶりに……！」

春「目が真っ赤だぞ……！」

キャ「いっぱい泣きましたからね」

フィ「かわいそうに……」

マ「では、お土産コーナー！ユタ様から、劉に極楽温泉旅行二泊三日の旅（三名様まで）を頂きました！ありがとうございます……！」

ク「じゃ、悪いけど、今回はここまでよ……！」

マ「すみません……妹が（ry）」

「フィ」なっさけないわね」

瑠「みなさん、今話の感想くださいね？」（にこっ

春「瑠璃の目が…！おいゼロ…！」

ゼ「目薬だな！？わかった…！」

キヤ「では、次回もよろしくです…！」

第51話…ついに決着の時。この魔法って…何でもあり？それともリスクあるの

では、51話です!!

「くう……」

力を維持しようと、魔力を込めていく。

すると……

オレの目から血が垂れてくる。

『劉ちゃん！目から！！』

『大丈夫か！？』

「う…うん。平気だよ……それより、瑠璃は？」

オレは血を流しながらも、瑠璃を見る。

「な、なに！？あの生意気な娘はどこに行った！？」

エロトの手から、瑠璃はいなくなっていた。

「^{マスター}ご主人様！こっちはです！！」

タマモの方をちらっと見る。

するとタマモの横に、何がなんだか分かってなくキョロキョロしている瑠璃がいた。

「あ、あんな所に！？いったいどうやって！？」

エロトは瑠璃を見て驚く。

「オレが瑠璃が捕まったという因果を書き換えた！！ついでに、お前もだ！！！」

オレはさらに目に魔力を注ぐ。

「ジャウロ・ザケルガ!!!」

大きな電撃の輪から複数のザケルガがオレに向かってくる。

《「そんなモノ…トレスオン 投影開始!フルンディング 赤原獵犬!!!」

オレはその複数のザケルガに備え、弓を投影する。

《「我が魂に眠れる、【闇】【光】【氷】【雷】【炎】!!!」

オレが弓を構え、詠唱する。すると、黒、黄色、薄い黄色、水色、赤色の矢が五つ現れ……

《「我が血肉を得て、力を呼びさませ……? am the bone of my sword. 『我が魂は奮え狂っ』!!!!!!!」

ジガデイルス・ウル・ザケルガは腹部から極太レーザーを放つ準備に入る。

《「あれは撃たれたらやばいが、その前ならっ！……クリス！！」》

『準備はOKよ！……！』

クリスのカートリッジをロードする。

《「我、力を制する者なり。我の前に立ちはだかりし物に、我が力をもってこれを粉碎する。……出でよ聖なる剣、我に仇為す物をその刃において浄化せよ！……！」》

詠唱を終えると、クリスの刀身から魔力で出来た巨大な剣が伸びてきた。

「これなら……」クワトロフル・アクセル《四重加速》！！！！」

レーザーが発射される前に神速で接近する。

《「らあああ！！！！！！」ダイバYYYYYン……」》

巨大な剣を振りかぶる。

ジガディラス・ウル・ザケルガに一闪。

巨大なジガディラス・ウル・ザケルガは斜めにズレていく。

そして……

ジガディラス・ウル・ザケルガは爆炎と共に散っていった。

「そ、そんなバカなああ！！！！！！！！！！」

エロトが自分の術が敗れた事に顔を絶望色に染める。

《「これでお前は終わりだ。」》

「ぐう……………!!」

オレはエロトの前に立つ。

「お、俺の計画がダメになるなんて……………そんな訳ねええええ!!
……………!!」

エロトはザルグブレードを発動して、オレに斬りかかってくる。

《「ふんッ……！」》

だが……リミットブレイクしたクリスの敵ではない。

エロトがもがき倒れる。

「だ、だが…俺には死なない限り回復できる術が……っ！……！」

《「」……どうかしたか？「》

「おまえ…またやったのか！？」

エロトがジオルクを使えないのに気づき、オレに聞いてきた。

《「ああ、お前がジオルクを使える因果……消させてもらった。」》

オレはそこでカートリッジをロードする。

「……やめろ……やめろ……」
「……」

《「やめない！お前は…やりすぎたんだ！おとなしく喰らってこの世界線から消え去れ！！！」》

クリスに黒くて膨大な魔力が纏わりつく。

「くそがああ……………やめろってんだ……………ッ……………！！！」

エロトが手をこっちに向け、最後の力を振り絞りザケルガを放つ。

「.?!」

「^{マスター}ご主人様!!!」

オレが戻ると、タマモが抱きついてきた。

「お帰りなさいませ！ずっとお待ちしていました！」

タマモがそう言つと……

「何やってんのよお！……！」

『本当よ……早く離れなさい……！』

フィオネはタマモを引き剥がし、三人で言い合いを始める。

「あ、あの……」

「ん？」

オレが言い合いを見ていると、オレの袖を瑠璃が引っ張ってくる。

「あの…さっきは…ありがとございました…／／／／／」

瑠璃が顔を赤くさせながら言ってくる。

「ああ、その事か。別にいいよ。」

オレはそんな彼女の頭を撫でてあげた。

「あう…／／／でも、でも…／／／」

瑠璃は少し悩む…

「あ、そうだ！お、お礼あげるね。少しお顔を…／／／／／」

「?????…お礼？」

オレは瑠璃に言われた通りに顔を近づける。

「で、では...お礼です／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

す
ず
／
／
／
／
／
／
／
／

「はへッ!? // // // // // // //」

え？今頬に何か柔らかいものが…… // // // //

『「あああああ！……！何やってんのよ……^{ですか}……ッ！……！
！！！！！！」』

「ふみゆう // // // // ……あッ劉君の体が……」

瑠璃が驚きながらオレを見てくる。

「ん〜、あ、あれ？」

オレの体が段々と光り輝いてくる。オレ体だけじゃない。フィオネ、やタマモ達も体が光っていた。

『これが…世界の修正なのか？』

ゼロが言った言葉で思い出す。

世界の修正…

「やっと…終わったのか…」

オレはこの世界線に来た時の事を思い出す。

日にちはそんなになっていないのに、この世界線に来たのはだいぶ前のように感じる。

「りゅ、劉君……」

瑠璃が涙目でオレを見てくる。

「瑠璃……」

瑠璃には本当にお世話になった。それに……ダイダロスにも。

そのダイダロスは今はいない。

この世界の修復って、今思えばどうなるんだ？

死んでった人達は蘇れるのか？

もし蘇らずにそのままだったら……

オレは瑠璃を見る。

「うう……劉君……グスッ」

「瑠璃……」

オレはやさしく瑠璃を抱き寄せる。

「りゅ、劉君！？／／／／／」

「瑠璃…心配しないで。オレ達はずっとそばにいる。」

「ふえ！？／／／／／」

「だから……お前は一人じゃない。今も…これからも、ずっと一緒だよ。」

オレは抱きしめながらも瑠璃の頭を撫でる。

「でも、劉君…消えちゃう…」

ああ…その事が……

「さつきも言っただろう？オレ達はこれからも一緒だって。オレ達はこれから違う世界に行っちゃうけど……それでもだ。ずっと一緒にいる。」

「グスッ！……へへ。劉君／／／／／」

オレと瑠璃はそのまま何も喋らないまま抱き合い続けた。

そして……

光りが一瞬強く光る。そろそろオレはこの世界線から消えるのだろ
う。

オレは目を瞑る。

その時……

瑠璃がオレの耳に口を寄せた。

「え？」

「ありがとね、劉君。また会えるの…私、待ってるから／／／／／」

「はへッ!?!」

瑠璃がもう一度、オレの頬にキスしてくる。

瑠璃がキスすると同時に……

オレはこの世界線から弾き出された。

頬に瑠璃の温もりを感じながら…。

「皆、お帰りなさい……でいいのかな？」

「…そうだね。」

オレ達はあの後、アテネの予想通りに神界に辿りついた。

「今回は本当にお疲れ様でした。」

アテネがオレ達に頭を下げてくる。

「そんな、別にいいわよ。」

『ふんッ！そうね、頭を上げなさい。』

『……………もう、何も言わん…（汗）』

デバイス陣はアテネに頭を上げるように言う。

「あの、アタシもここに居ていいんでしょうか？」

そんなオレの後ろから、タマモの声が聞こえてくる。

「…って、タマモ!？」

オレはタマモの声に驚いた。

「や、やっぱり…アタシは居たらダメなんですかね？」

オレの驚きようにタマモは若干、涙目になる。

「いいのよ。貴方だって元はあの世界線にいた人物ではないもの。」

アテネはタマモに優しく言っが……

「そんな事は知ってるんです！貴方のような駄女神に言われなくてもです！アタシはご主人様マスターに聞いているんですよ！！」

タマモはアテネに言い返す。

「何よ！少しはまともな性格になったと思ったのに…！！そっちだって、違う世界線に紛れ込んだほどの駄女狐じゃない！！！！」

「へえ…言いますね… ……殺してあげましょうか？」

「あら…？よくしゃべる油揚げだこと。うどんの上のっけて、食べてあげましょうか？」

アテネはタマモの挑発にのり、逆に言い返す。

「ご主人様マスターに食べられるなら本望です！！」

だが…タマモは違う所で反応してた。

『残念でした〜！劉ちゃんはお蕎麦派よ〜！』

「アンタも残念ね。劉ちゃんはそうめん派よ〜！」

そこで隣に居たフィオネとクリスも言い合いを始めた。

『……ちなみに劉は？』

「オレは何でも食べれるし、好きだから。」

オレはため息をつく。

「……………っ！…！」

ため息をつくと同時にオレは頭に痛みを覚えた。

「うっ……………あ、ああああああ！?!?!?」

『ど、どうした！？劉ー！』

ゼロがいち早くオレの異変に気がつき、声をかけてくる。

「あ…頭がツ……！」

そこでオレの意識は段々と遠ざかっていく。

意識を失っていく中、フィオネ達もオレの様子に気がつき、こっちに近づいてくるのがわかった。

（ああ…そうだ……。アテネには瑠璃があの後、どうなったのか聞かないとさ。）

オレはそこで完全に意識を手放した。

第51話：ついに決着の時。この魔法って…何でもあり？それともリスクあるの

マ「これにて一応…終わりかな？」

フィ「アンタ…最初は五話とか言ってなかった？」

マ「すみません（汗）」

ク「この話って必要なかつたんじゃない？」

キャ「そしたらアタシはどうなるんですか!？」

フィ・ク「貴方は必要ないわ。』」

キャ「そんな事言わないでください〜!!（涙目）」

春「まあ、今回の話がなかったら、劉も新しい魔法を覚えなかったしな。」

瑠「わ、私の出番もありませんでした／＼／＼／」

ゼ「それが一番の問題だな!」

マ「さ、こんな奴らの事は気にせず感謝コーナー!ユタ様、夜神様、
仮面ライダーディケイド様、光閻雪様、三浦一平様、畏無様、メガ
ネ様、田中伸宙様、けーくん様、バラランシャ様、毬藻様、AIR
S様、Arishia様、空言天狐様、madao様、紅 幽鹿様、

感想、いつもありがとうございます！皆様の感想のおかげでこの小説は成り立っていると云っても過言ではありません！これからもどうぞ、よろしくお願いしますね！」

ク「これであとがきは終わり？」

エ「んな訳ねえだろ！このポンコツデバイスがッ！！」

フィ「出たわね！今回の話でもっとも人気が落ちたG！！」

エ「ふんッ！俺の何処が人気が落ちたって？」

春「いや、今回のお土産を見れば分かるだろ。」

エ「ああ？何を言ってる……」

ゼ「では、お土産コーナーだ。ユタ様からはエロトに、希望と終末が交差する斬撃×一万、アフロディーテAphrodite、アポロンAPOLLON×一万、ルシフェリオン・ブレイカー×一万、雷刃滅殺極光斬×一万、エクスカリバー×一万

仮面ライダーディケイド様からは、タマモに惚れ薬（絶対効く）と神天下一武道会の参加チケット、どこでもドアと空気砲に地球破壊爆弾と神破壊爆弾（爆弾は保管してあるのでマーパーが使いたいくきに見える）

バラランシャ様からは、劉に夏奈ちゃんの笑顔の写真

空言天狐様からはエロトに逆運命改変の指輪

madao様からは、エロトにジェノサイドプレイヤー

紅 幽鹿様からは、エロトにダブルドラゴンライダーキックを頂いた。いつもありがとう！』

エ「……系？」

フィ「って事で、喰らってきなさい」

エ「はい！？ちょっと待ってくれ！これは何かのまちg（無人惑星に転送）」

エ「がいなんだよ!!…っつて、ここはどクギや ああああああ

ああ

ああああああああああああああああああああああああああ

ああ

ああああああああああああああああああああああああああ

ああ

あああああああああああ!!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?

?!?

!?」

キヤ「惑星消滅を確認しました。」

ク『でもGって宇宙空間でも数秒は生きられるっていつし…』

マ「それにたしか、【ガツシュ】の術の中に宇宙空間でも空気を吸える術があったよな…あと、宇宙に行けるほどの移動性がある術も。」

春「ああ…たしかにあったな。」

瑠「かつこいいね!」

ゼ『瑠璃。それは…いや、アイツはカッコよくないんだぞ?』

フィ「お父さん!今回は応援するわ!」

キヤ「なんとか誤解を解いてあげてください!」

ク『そうね。瑠璃の今後の人生はアンタにかかっていると言っても過言じゃないわ。』

ゼ『わかったあ!!!!俺に任せろお!!!!!!』

春「いいか瑠璃?エロトは何をやるとカッコよくはないんだ。わか

「ったな？」

瑠「うん！春お兄ちゃんの言う事信じるね／＼／＼／＼（春人に抱きつく）」

春「そ、そうか？／＼／＼／＼／」

ゼ「ガーンツ…………orz」

ク「あらごめんなさいね、お父さん。貴方はもうお払い箱みたいね。」

キャ「そうみたいですな。」

フィ「ドンマイよ、お父さん。」

マ「つか、デバイスのおまえがorzを使っても…（汗）」

ゼ「…それは、気分の問題だ…」

マ「さて、今回はここまでです！この【暗黒次元のハイド編】は必

要だったか、そうでないかの意見をお聞かせくださるとうれしです
！」

フィ「そうね。ま、ほかの感想もちょうだいね！」

ク「絶対よ！もし、くれなかつたら…そうね。私がアンタ達の顔を
踏みつけてあげるわ。」

キャ「では、アタシは愛を込めた一夫多妻去勢拳を」

マ「あれはマジで痛いから……」

春「じゃあな。」

瑠「次回もよろしくお願いしますね（にこっ）」

マ「さ、終わった事だし……バラランシヤ様に頂いた『夏奈ちゃん
の笑顔の写真』をガン見するか……!!」

フィ「アンタって人は……」

第52話：新しい魔法って大抵なんかしらのリスクがあるよね。（前書き）

今回は更新が遅れまして申し訳ございませんでした！

中々進まず、文章もグダグダで短いです。

では、52話はじまります！

第52話：新しい魔法って大抵なんかしらのリスクがあるよね。

「あれ……？」

しばらく眠っていたのか、目を覚ましたオレはベッドの上に居た。

「頭の痛みは…なくなっているな。けどなんか、ボーッとする。」

まだ覚めきっていないからか、頭がボーッとしている。オレはその頭を軽く振りながらベットから起き上がり、部屋から出た。

「ん？なんだ、このネックレスは？」

今更気が付いたんだが、見たことのないネックレスが掛けてあった。

「アテネかフィオネがオレに？それか…タマモとか？」

オレは疑問に思いながら、そのネックレスを外す。

すると……

「うわぁッ!!!」

ネックレスを外した瞬間、オレの体から今まで感じた事のない魔力が大量に放出していく。

「な、なんだこれ!？」

オレはいきなりの事に戸惑いを隠せない。

「あら？劉ちゃん目覚めたのね〜！」

「はへ!？」

オレが一人であたふたしていると、いつの間に現れたのか、アテネが後ろから抱きつきながらオレの耳に口を近づけながら囁いてきた。

「アテネ!？これは？」

「まあ、心配しないで大丈夫よ。とりあえず今はそのネックレスを付けちゃってね！」

アテネはオレに微笑みながら首にネックレスを掛けるジェスチャーをする。

「わ、わかったよ。」

オレはアテネの言う事を聞いて、首にネックレスを掛けた。すると…

「あ、魔力の放出が止まった…?」

それまで大量に放出していた魔力はぴたりと止まった。

「…ねえ?…これって?」

「その説明は後ですから…ね?今はフィオネ達が待ってるから」

アテネはそう言うと、オレの腕に腕を絡めてくる。

「では行きましょうか?ア・ナ・タ」

「はいい!?!?」

オレはアテネが何を言ってるのかわからないまま、フィオネ達の下へ転移した。

フィオネ達の下に転移したのはよかったけど……うん。大変だったよ。

まずはフィオネとタマモに泣きながら抱きつかれ、その後にアテネがオレに手を組んでいるのを見てさらに激怒…。

「つかさ…気づくの遅くない？」

「だ、だって劉ちゃんが目を覚ましてくれたのがうれしくて」

「そうですね！それより早くその駄女神の腕を放して方がいいですよー！ー！」

タマモがオレをアテネから離させる。

「んもう!…まあいいわ。さて、劉ちゃんに説明しなきゃね。」

アテネはそう言つと自分の神をすこしかき上げてため息をつく。

「そつだ。オレって何時間ぐらい寝てたの?それとも何日?」

オレはさつき起きた時に感じたあのブーツとした感覚から何時間か何日が寝ていたのかと考えていた。

アテネの言葉を聞くまでは……

「……半年よ。」

「…は?」

「だから…約半年よ。」

オレはアテネの言葉に耳を疑った。

「は…半年？」

「そう。半年よ。」

オレはフィオネ達の顔を見る。

「……………」

が、フィオネもタマモも何も言おうとしない。

「な、なんでオレはそんなに？」

「それはね。劉ちゃんが使った魔法の反動なのよ。」

「魔法って…あの？」

「そう。因果律を操作する魔法の事よ。」

なんてこった。あの魔法にそんなリスクがあるなんて……………ま、ま
あ、因果を操作するなんて魔法にリスクがなかったらそれはそれで
やばいけど……………（汗）

「あの魔法を使うとね、脳を休ませるために大体一ヶ月ぐらいは眠
る事になるみたい。まあ、今回はこの魔法を多用してから半年も眠
った事になったみたいだけどね。」

たしかに。エロトと戦っていた時にこの魔法を何度も使っていたけ

ど。あれだけの回数で半年か。

「それで、その魔法を使っていた時に目に何か変化がなかった？」
そういえば、目に違和感を覚えたのを思い出す。

「たしか…急に血が出てきたな。」

「あッ！それと劉ちゃんの目に変な模様みたいなのが出てたよ！」
と、フィオネ。

「それは『創造神の目』ジェネシスアイズとでも名前をつけましょうか。その目の事もわかったわ。その目を発動している間は、心の中で思ったことを何でも創造出来るようになるわ。まあ、主に武器とかかな。あと、因果カウサリテイ・トリガーの引き金を使えるのもその目を発動している間だけね。」

なるほど。あの目を発動しないとあの魔法は使えないのか。

「それと目からの出血の事なんだけど。別に失明の心配もないわ。ただ人間の目では耐えられないだけで、劉ちゃんのその体ならすぐにその目も回復するからね。ちなみに因果カウサリテイ・トリガーの引き金を使って眠るだけで済むのもその体のおかげね。普通の人ならまず使えないし、使ったとしても脳を休ませる前に爆発して終了よ。(にこっ)

アテネの言っている言葉に体を軽く振るわせる。なんでこんなにもイイ笑顔で怖い事をいえるんだ？

「まあ、説明はこんな感じでいいかしら？」

「うん、ありがとね。ただ……」

オレはさっきからの説明で気になった事を聞いてみる。

「アテネはオレがあの世界線でこの魔法を使えるようになることを知ってたの？」

「そうね。知ってたわ。だからあの時、劉ちゃんが死んで神界に来た時に言わなかったかしら？」

たしかに、それっぽいことは言ってたけどさ。

「まあ、よかったじゃない。ようやく念願の因果操作魔法を使えるようになったんだもの！」

「それはね。この魔法でこれから多くの人を護っていけるよ。」

「でも、私はその魔法をあんまり使ってほしくないな。」

「あ、アタシもですよ、^{マスター}ご主人様！！」

フィオネとタマモがオレに言ってくる。

「だって、誰かを護っても劉ちゃんが傷ついちゃうんだったら意味ないよ」

急に涙目になるフィオネ。

「で、でも脳を休ませるために眠るだけだし。」

「それでもですッ！！それでご主人様マスターの身になにかあつたら……」
タマモまで涙目になる。

「フィオネ……タマモ……。」

オレはこの二人の言葉を聞いて何も言えなくなる。

……………。

しばらく沈黙が続き、気まずい雰囲気流れる。

『…フィオネ。アンタ、そんな事を本当に考えてるの？』

と、そこでクリスがこの気まずい沈黙を破った。

「く、クリス？」

『確かに、私だって劉ちゃんにはそんな事はしてほしくないわ！……でもね、あの時の事を忘れたわけじゃないでしょ？』

「あ……………」

フィオネはクリスの言葉を聞いて何かを思い出したようだ。

「アテネ……」

「今回、この魔法を手に入れた劉ちゃんはこれから自分を犠牲にする戦い方をするようになると思うの。そして、この因果を操作する魔法……たしかにアレだけのリスクで済むのは分かっているけど、それだけで済むレベルを超えたらどうなるか……未だに分かってない魔法なのよ。」

アテネはそこで区切り、フィオネとクリス……そしてオレに顔を向け、近づいてくる。

「だから、クリスの支える役目もわかるし、フィオネのこの魔法をあんまり使わせたくない気持ちも分かる。……だから劉ちゃんもこの魔法をあまり多用しないで。そして、周りの皆も大切だけど、自分を大切に。貴方が傷つく事で傷つく人達がいる事を忘れないで。」

アテネはそう言うと、オレに抱きつく。

「あ、アテネ!？」

「私だって、その一人なのよ?」

アテネが一層強く抱きしめる。

「アテネ……ごめん。これからは気をつけるよ。」

オレもアテネを抱きしめ返す……

「劉ちゃん……………（ニヤリ）」

……………が、

「ほらッ！見なさい貴方たち！劉ちゃんから私を抱きしめ返してきてわよ　！！！！」

「……？」

声を一気に明るくしたアテネがフィオネ達に聞こえるように大声を出す。

『あ……………アンタ……………』

「せっかく、いい事を言ってるなあ……………って、思ってた時に……」

「あ、アタシは今回の事はよく分からなかったので黙っていたのに……やっぱり一回……殺っちゃいましょうか？」

そのアテネの言葉にさっきまでの暗い雰囲気はどこえやら……ファイオネたちはアテネに食って掛かる。

『ふむ……やはりアテネには敵わんな。』

「……………だな。」

ゼロのそつと呟いた言葉に賛同するオレ。

そんな感じでしたらオレはこの言い合いを眺めていた。

「ふう……ふう……さすがは腐っても女神ですね……」

「や、やっぱり命令されたら逆らえない……（ガクブル）」

『ひ、卑怯よッ！……（ガクブル）』

「あら？ 私に構わずに反抗してみればいいじゃない？そして、タマモ……！ 私は腐ってないわッ……！」

「お、落ち着けて、アテネ……！皆もだ……！」

「つたく。本当にタマモとアテネはバトルし始めるし、フィオネとクリスは戦意喪失してるし……。どうしてこうなった？！」

『……たしかに、ここまで大きなバトルになるとはな……』

「ふう……まあ今回はここまでね。それより、劉ちゃんも回復した事だし、そろそろ元の世界線に戻る？」

アテネはさっきのバトルで全然疲れた様子を見せないで聞いてくる。

「あ、あの、余裕がムカつきます……ッ……！貴方、これから出

会う狐にはせいぜい注意する事ですねッ！……！」

タマモは意味分らない事をアテネに叫ぶ。

「……で、戻る？」

……が、アテネは平然とシカト。

「そうだね。そろそろ戻るよ……で、今はどの時期なのかな？」

「そうね……だいたい、A Sの中盤ぐらい？」

え？……もうそんなに進んでるの！？

「だってあの世界線ではそんなにいなかったのに……なんで！？」

「劉ちゃん……半年眠っていたの忘れているでしょ？」

アテネのジト目でオレはその事を思い出した。

「あ………／／／／」

穴があったら入りたいとはこのことだ。オレはすっかり恥ずかしくなって、顔が一気に赤くなる。

「まあ、そんな所が劉ちゃんが可愛い理由だけだね〜」

アテネはそう言うがいなや、オレの周りにフィオネ達を集めた。

「あ、そういえば瑠璃はあの後どうなったんだ？」

すっかり忘れる所だった。

「ああ、瑠璃ちゃんなら……」

アテネがオレ達の前に一つの大きな画面を出す。

そこには、瑠璃とダイダロス、なのはやフェイト達が楽しく過ごしている映像が映し出されていた。

「ダイダロスになのはやフェイトも!!」

みんな復活していて、幸せそうな笑顔を浮かべている。

『ほう…世界の修正は無事に終わったみたいだな。』

「よかった……本当によかった。」

オレは目の端に涙を浮かべながら、この世界線の事を思い返していた。最初着いた時は最悪で…つらい戦いが続いたけど…それでも頑張ってきてよかった。この世界線での皆の笑顔を見てよかった。

「じゃあ、今からさっそく戻してあげるわ。貴方はどうするのか？」

アテネはタマモに聞く

すると……

「もちろん！アタシだって行くに決まっているじゃないですか？」

タマモはオレに飛びつきながら言った。

「そう。まあ、ほどほどにね。」

アテネはため息をつくと同時にオレ達の足元に魔方陣を展開させる。

「ミッド式の魔法だから、向こうの管理局もすぐに気づいてくれると思うわ。じゃあね、また今度会いましょう」

「ああ…今回は本当にありがとね！困った事があつたらまたいつでも呼んでくれ。」

オレがその言葉を言うと同時にアテネはオレ達は元の世界線に飛ばされた。

時期はA S中盤……………残されている時間はもうそんなには……………ない……………。

第52話：新しい魔法って大抵なんかしらのリスクがあるよね。（後書き）

マ「今回は遅くなって本当にすいませんでしたあッ！！！」

フィ「何してたのよ？」

マ「いや、バイトやら教習所やらでさ……それに専門学校に入る前にある程度、ゲームのシナリオも作つとかないとだし……。」

ク「それぐらいチャチャツと終わらせなさいよ！」

マ「無茶言つなよ。それに、なんだか『暗黒次元のハイド』を終わらせてから微妙にやる気……つか、うん。燃え尽きた感じ？がしてさ。」

ゼ「大半の理由がそつちだな。」

マ「今回の話も一週間前から書き続けているから、今も書いていてよくわかってないんだよね。だからグツダグツダだと思います。本当にさーせんッ！！！」

キャ「それに短いですしね。文章の方は……【いつも通り】の腐り具合なので平気ですよ。」

マ「ノオオオオオオ！！！！！」

瑠「皆さん、お久しぶりです！」

フィ「挨拶のタイミングおかしいわよ？（汗）」

瑠「だって、今まで出番が……」（涙目）

春「俺の出番もな。…ほくら、泣くな瑠璃。」

瑠「うん／＼／＼」

マ「けッ！一生やってる。このロリク」おらッ！」「…ふべらッ!？」

春「死ぬ。」

キャ「…えー、では感謝コーナーです！」

ク『三浦一平様、月光閃火様、けーくん様、光闇雪様、バラランシヤ様、龍賀様、メガネ様、紅 幽鹿様、仮面ライダーディケイド様、空言天狐様、夜神様、感想ありがとうございます。』

マ「それとお返事がおくれてしまいました読者の皆様、本当にもうしわけございませんでした！」

ぜ『お土産は…月光閃火様からはお土産…というか、エロトに性別セクシ変換ヤライズをかけた（過去形）

メガネ様からは、エロト抹殺記念で劉に酒を樽で百個を頂いた。ありがとう！』

キャ「こちらは次回のあとがきにて使わせていただきますね！」

瑠「楽しみだね！」

春「そうだな。……まあ、劉が飲むんだけどな（ボソッ）」

マ「では、この後はリアタイで教習所に行かなくてはいけませんのでここまでです！」

フィ「次回もよろしくね！」

キャ「よろしくです」

第53話…これってオレの出番はなしってことなのかな？（前書き）

今回は遅くなってしまって申し訳ありません！
そして短いです…

では、ごうぞー！…！

第53話：これってオレの出番はなしってことなのかな？

なのは side

劉ちゃんがいなくなって半年…。最初は劉ちゃんは絶対に帰ってくると信じていた…。けど、今はその可能性がぐっと低くなっちゃった。ちょうど劉ちゃんがいなくなった頃、突然劉ちゃんと契約していたリニスさんが倒れた。そして、今まで劉ちゃんが生きている証であった契約は切れてしまったの。…その時にプレシアさんが近くに居たからリニスさんはなんとか助かったけど…。劉ちゃんは…、

そして、この半年は色々なことがあったの。フェイトちゃん達が帰ってきて、タカト君と囑託魔導師になっていて…。アリシアちゃんは魔導師にはならなかったけど。この三人は同じクラスに転入してきたの。

タカト君は最初こそモテた…。のかな？なんだか一言喋った途端、皆から目を逸らされ始めていたけど…。あのやさしいアリサちゃんやすずかちゃんもタカト君は苦手だといったの。アリサちゃん曰く「顔はそこそこいいけど、視線がキモい。あと下心がまるわかり。」らしい。

フェイトちゃん達も正直嫌がってた。…私も少しだけ苦手なのは内緒なの。

そのほかに起こっている事は…。闇の書事件。

そう。この事件で今は大慌てな事になっている。囑託魔導師のはずのタカト君が闇の書事件に手を貸すために姿を消し、フェイトちゃんのリンカーコアを蒐集したの。

曰く「俺に少し考えがあるんだ。…だから今は見守っていてほしい。」だそうです。絶対に許せないの。

そんな事をずっと考えていたらクロノ君から連絡が入った。

なんでも、大きな次元震が起こったから少しの間地球を離れる事になるらしい。

しょうがないと思うけど少し不安……

「…こんな時に劉ちゃんがいたらな〜。」

私は今はどこにいるのかもわからない大切な人の名を口にしながら空を見上げた。

なのは side out

アースラ side

場所は次元震があつた無人惑星。

「まさか、闇の書事件の最中にあんなにおおきな次元震が起こるなんてね。」

アースラ内部では軽い調子でエイミイがキーボードを叩きながら次から次へと画面を出していく。

「しょうがないだろ、あれだけ大きかったら。：でも早く原因を突き止めて地球に戻らないと。」

クロノはすでに自分のデバイスであるS2Uを起動させている。

「さて、クロノ。準備はいい？」

リンディはイスに座りながらすでに準備が整っているクロノに確認をとる。

「わかりました。」

side out

クロノside

僕達は今、次元震の原因を突き止めるために現場である無人惑星に
来ていた。

「ん？なんにも起こってないぞ？」

僕は隊員を何人が引き連れながらその無人惑星を調査していく。

「木とかも枯れている様子がないな。」

近くにあった木に触れる。次元震が起きたらその周辺の木々は枯れ
たり、無くなっているが、ここの周辺の木々に変わった様子はまっ
たく見られなかった。

「く、クロノ執務官！！」

「????？」

その時……

一人の隊員が僕の所に慌てた様子で駆け寄ってきた。

「どうしたんだ？」

「あ、あちらに…とにかく来てくださいッ！！」

僕はその隊員に急かされながらも、その場所に向かった。

「な…なんだ、これは…」

その場所に向かった僕の目の前にある光景。

「一面…何も無い…？」

そう、木々も何もかも無くなっている。それも広範囲で。

「おそらくここです…」

「ああ…そうだろうな。」

おそらくここが次元震の中心なんだろう。

「クロノ執務、あちらにクレーターがありました！その中心には二名の女性と一機のユニゾンデバイスが…！！」

おそらく今回の犯人なんだろう。

「わかった。今向かう！」

「あそこで横たわっている者達です。」

隊員に案内されてやってきた場所には大きなクレーターが在った。しかにその中心には二名の女性らしき人物？が横たわっていた。

「結構深いから顔の確認が出来ないな。」

「それでしたら今、隊員が向かっていますので顔の確認が取れますよ。」

そう言いながら僕に画面を出して見せてくる。

「…なツ…!？」

僕はその画面に映っていた人物の顔を見て驚きのあまり言葉をなくした。

「あの…執務官？」

「い、いや…なんでもない。」

僕はその画面に映っている眠っている者の顔をもう一度見る。

「この者達はどうしましょうか？」

「ああ…こいつらは艦に運んで手当てを。僕の知り合いだ。」

隊員は僕の指示に従い、ほかの隊員にも指示を送る。

「そうだ、後一つ付け加えとく。こいつは女性に見えるかもしれないが……」

僕は画面に映っている一人の女性…いや女の子の顔を指差す。

「こいつは、男だよ。」

「ん？！？」

僕はその隊員の驚いている顔を見て満足する。

「さ、早く運んでやれ。」

自然に顔がニヤけるのがわかった。

「まさか帰ってこれるとは……無事で何よりだ……。」

僕は運ばれている者達の顔を画面越しに見る。

「よかった……よく帰ってきた……劉。」

第53話：これってオレの出番はなしってことなのかな？（後書き）

マ「なんだか最近、何にも思い浮かばないマーボーです。」

フィ「なんでよ？アンタ、As終盤ぐらいつまでストックあるんじゃないの？」

マ「これは中学のヤツだからさ…今読み返すと、微妙だな〜って感じなんだ。」

ク「そうね〜。今でも文才ないのにね〜」

瑠「可愛そうだね（涙目）」

春「おい…そんな目でみてやるな（ニヤニヤ）」

ゼ「そういつお前はなんだ？（汗）」

キャ「ぶつちやけどうでもいいです。では感謝コーナー！畏無様、ユタ様、m a d a o様、光閻雪様、A r i s h i a様、仮面ライダーデイケイド様、バラランシヤ様、紅 幽鹿様、メガネ様、三浦一平様、けーくん様、感想ありがとうございます！」

ゼ「お土産はm a d a o様からは、劉にウエディングケーキ（名前の所は劉と 自由に記入）」

光閻雪様からは、タマモとフィオネに『劉の嫁許可証』、クリスに『劉の嫁許可証』、信慈特製煎茶』

仮面ライダーディケイド様からは、ビームや核も撃てる剣と、回復薬×99999個

紅「幽鹿様からは、悪魔と契約した剣『魔剣』、神と契約した剣『神剣』」

三浦一平様からは、陽菜特製のクッキーを頂いた。ありがとう！」

マ「そしてさ、次回…エロトが女性になってあとがきにやってくるらしい。」

フィ「え、！？そうなの？」

春「それって今回のあとがきじゃなかったか？」

マ「……次回…エロトが女性になって…」

春「もういい。わかった。」

瑠「ふふっ、楽しみだね！」

ゼ「瑠璃には触れさせないぞー！」

キヤ「その前にエロトは女になっても女性が好きなんじゃないか？」

ク「その実験もかねてね。」

マ「さて、今回はバレンタインという事で……」

瑠「私はハート型のチョコを」

フィ「私はチヨコトリュフを」

キャ「アタシはキツネ型という完成度高いヤツを。」

ク「私は普通の板チヨコですがなにか？」

瑠「…を作ったので皆さんにプレゼントしますね！」

春「俺はもうすでに貰ったぞ。」

ゼ「俺もだ！」

マ「…俺は貰ってないんだが……orz」

フィ「あげるわけないでしょ」

キャ「そうですね」

ク「ま、ほしい人はコメでもいいから頂戴。」

マ「はあ…では今回はここまで」

瑠「ばいばい」

第54話：癪ってそう簡単には直せないのな。たとえば…KYとかKYとかKY

さてこの後はどうしようか？（汗

54話、始まりますー！

第54話：癩ってそう簡単には直せないのな。たとえば…KYとかKYとかK

「ん……知らない天井だ……」

頭がククラする……どうしててだ……。

オレは起き上がる。

「……ベッド？」

さっきまで自分が寝ていたベッドを見て不思議に思いながらもこの部屋を出た。

「あ……見知った廊下だ。」

廊下に出ると、ここがアースラだという事がわかった。

「なんどもこの廊下は歩いているからな」

オレはそこである事に気付く。

「……って事は……オレは戻ってこれたのか……？」

その事にやっと気付き、うれしさのあまり叫ぼうとする。

……が、

「はあ… やつと戻ったことに気が付いたのか……」

「… ツ！？！？」

急に後ろから声を掛けられてオレは驚くがすぐにハンドソニックを出し、そいつの後ろに回りこみながらそいつの首にハンドソニックを押し当てた。

「お、落ち着け劉！！僕だ！！」

オレが首に押し当てている相手はクロノだった。

そいつ…クロノはオレの行動に慌てながらも自分が誰であるかを言う。

「わ。悪い！」

オレはすぐにハンドソニックをしまつて、クロノから離れた。

「はあ…び、びっくりしたな……。」

クロノは首に手を当てながらオレを見てくる。

「い、ごめん…つい条件反射？みたいな物でさ…」

「…？？？」

クロノは頭上に？マークを浮かべていた。

「なんでもないよ。それよりここはどこだ？」

「何を言ってるんだ君は？」

クロノが本気で心配している目でオレを見てきた。

「そんな目で見ないでくれよ。じゃ、じゃあ質問を変える。お前はレプリカのエクスカリバーを持つてるか？それと……そうだ……邪気眼！これらに覚えは？」

「……………」

「え？ちょ……おい！？」

クロノがオレを無言で引つ張り歩き始めた。

「く、クロノ？」

「君はたぶん頭を打つたんだ。だから……そもそも虚数空間から無事に戻ってこれるはずが……なかったんだ……」

クロノは目に涙を溜めながらオレを見てきた。

「ま、まってくれよ！オレは正常だ！！」

「うるさい！しばらく黙っている！！」

オレはそんなクロノの腕を振り解く。

「……ったく。どうやらここは本当の元の世界線みたいだね。」

「元の世界線？また訳のわからない事を…」

クロノが近づいてきた。

「まあ言っても信じないよな…。フィオネ！」

オレがフィオネの名を呼ぶ…

すると……

「はいはい！おはよう劉ちゃん！！」

フィオネがオレの肩の上に転移してきて、そのまま肩に座りながらオレの頬に抱きつく。

「私達、元の世界線に戻って来れたんだよ！」

「どうやらそのようだな。」

オレはフィオネに頼んで、リンディさんの元へ転移した。

「お、おい！まだ頭の検査を…」

クロノを置いて。

「^{マスター}ご主人様！！！！」

オレがリンディさんの元へ転移すると、タマモがオレに抱きついてきた。

「おはようございます^{マスター}ご主人様！！お体は大丈夫ですか？」

「大丈夫だよタマモ……っつと、お久しぶり？でいいんですかね。リンディさん。」

オレはタマモを引き剥がしながら、目の前に立っているリンディさんを見る。

「帰ってきてくれて本当によかったわ。」

「なんか色々とスイマセンでしたね。」

リンディさんに軽く頭を下げながら周りを見る。

「フィオネ、クリスとゼロは？」

「あーそれなら今はデバイスルームにてメンテナンス中だよー！」

と、エイミイさんが来て教えてくれた。

「それにしても本当よく帰って来れたね〜！たぶん劉ちゃんが初めてじゃない？」

エイミイさんはなにやら興奮しながらオレに言ってきた。

「で、で、虚数空間の中ってどうだった？どんな所？」

「やめなさい、エイミイ。」

リンディさんはそんなエイミイを止めようとする。

「まあ、別にいいですよ。あの中は………違う世界線に繋がってましたよ。」

オレはエイミイさんに教えてあげた。

「違う…世界線？」

「そう。まあ平行世界みたいなものでしたね。」

オレの説明でわかったのかエイミーさんとリンディさんは…

「面白そうだね〜！」

「行ってみたいわ〜！」

なんて話し始めた。

「そうですね。オレは二度とごめんですが…」

「…え？」

オレの言葉に二人は固まる。

そんな二人にお構い無しにオレは前の世界線の事を思い出していた。

あの世界線がなければオレは本当の覚悟は何か…これをわかっていなかったただろうけど…できるならあんな惨状の世界線にはもう行きたくないな。

「えつと…」

「あの…何かまずかったかしら？」

「は、はい？」

ようやく二人の声が耳に入ってきたオレは逆に二人に聞き返してしまった。

「い、いえなんでもないですよ。」

リンディさんはそこで口を閉ざし、気まずき空気が生まれた。

「劉……君はここで何をしているんだ!？」

その空気の中、クロノが走ってやってきた。大きな声を出しながら…

「あ、相変わらず空気が読めないヤツだな…」

オレはクロノにため息をつきながら言う反面、あの空気を見事にぶち壊してくれたクロノに心で感謝した。

「くうー…まあいい。ところでずっと気になっていたんだが…君と一緒にいる彼女は誰なんだ？」

クロノはようやく諦めたのか、タマモの事を聞いてきた。

「ん、タマモはオレが跳ばされた世界線で仲間になったというか…こっちで言う使い魔？的だな。」

「改めて自己紹介を…。アタシはご主人様マスターの嫁である玉藻御前、どうぞタマモとお呼びくださいな。」

タマモはそう言うと、お辞儀をする。

「な、なな何を言ってるのよアンタはっ！！！！嫁はこの私よーッ！！！！」

フィオネがさかさずタマモに突っ込みを始めた。

「は、ははは。相変わらず見たいだね、劉ちゃんは。」

その様子を見て、エイミィさんは苦笑いをしていた。

「にしても新しい使い魔か。リニスが怒るぞ？」

ひと段落着いたオレ達は今、リンディ茶をご馳走になっている。ま
ずいと思っていたけど、なんだか抹茶を甘くした感じでおいしいな。

「そうよねー。リニスさんの契約が切れたと聞いた時は本当に驚い
たわ。」

リンディさんはそう言いながらもお茶をすする。

「ってことは、虚数空間に落ちる、又は平行世界に行くを使い魔と
の契約は切れるということなのかな？」

エイミィさんはなにやら必死にノートにメモしている。まあ、虚数
空間に落ちて帰ってきた人なんてそうそう…つかいないよな？

「いや、リニスの契約が切れたのは…」

フィオネがオレの代わりに説明しようとしているが、そこで途切れる。

「あ、アタシもあの時の事は言いたくありませんねえ。」

タマモはオレを自分の尻尾で包み込みながら言う。フィオネはその尻尾の上に小さくなって乗っている感じだな。

「「「あの時の事?」「」」

メモしていたり、お茶をすすっていた三人はその事に喰い付いてきた。

「何があつたんだ?」

クロノがオレに聞いてくる。

「うん。オレが一回死んだって事だよ。」

オレは契約が切れた原因をクロノに教えてやった。

「な、何を言ってるんだ君は?」

「…あの落ち着きました？」

「いや、落ち着くも何も…」

「う、嘘でしょ？」

クロノとエイミーさんは未だに信じられないみたいだ。

「でもそれが本当の話だとして、劉ちゃんはどうやって…その…生き返ったのですか？」

リンディも最初こそ驚いていたが、すぐに切り替えてオレに質問してきた。

「言ってイイのかどうかわかんないけど…」

チラッとタマモを見る。

「ん、まあいいんじゃないですか？アタシはあの駄女神が困らうと知りませんし」

タマモの許し？が出たからオレは教えてやることにする。

「死んだ後に神界というところに逝って、そこにいる女神のアテネっていう人に会って生き返らせてくれた。」

うん。説明といってもこの程度しか言えることはないよね。

「め、女神？そんなバカな!？」

クロノは未だに信じない。エイミイさんもそんなのが存在しているのとぶつぶつ言ってるし。

「クロノ、貴方は少し落ち着きなさい。そしてこの世界では未だに私たちでも何もわかっていない事がたくさんあるという事をまず知りなさい。」

そんなクロノにリンディさんはピシャリと言ってクロノを黙らせた。

「さ、さすがリンディさんだね。」

フィオネがリンディさんの管理局での一面を見て感心している。

「それで、タマモさんが先ほどその女神を駄女神と言っていた様子から、知り合いだと推測しているのですが…違いますか？」

そしてこの洞察力、本当にすごいと思った。

「はい。アタシも使い魔…でしたっけ？それよりは神の位に属する者なんで、なのでさっき言っていた女神とは知り合いですね。」

タマモの言った事にさらに頭を混乱させているクロノ。

「まあ、だから契約が切れたんだと思いますよ。」

オレはその場を纏めるべく結論を言った。

「なるほど……それで、劉ちゃんがいた世界線とは？」

リンデイさんがさらに質問してきた。ある程度予想はしてたけどね、さすがに…

「それは少しお話できませんね。ただ、オレが死ぬような事が頻繁に起こっていた世界線だったということです。」

「ん？世界線【だった】？」

クロノはそこに気が付く。

「そう、過去形。オレがその女神…アテネって言うんだけど。そのアテネの力を借りて世界線を修正したんだ。だから今は平和に暮らしていると思うよ。」

オレの言葉にもはや驚く気もなくなったのか、三人はもう何も言うてこなかった。

「さて、これから地球に戻ろうと思いますけど、それでいいですね？」

一息入れたオレ達は地球に戻る事を提案してきた。

「ええ、いいですよ。」

オレはその案に頷く。

「久しぶりだね！」

フィオネのテンションは高かった。

「そうだな。クリスマスもゼロも喜ぶだろうな。」

「アタシも楽しみですね〜！！主にご主人様マスターのお部屋が！そしてベツドの下にあるであろう秘密の本などが」

タマモは違う事に楽しみにしているみたいだ…。

「では、これより地球に向けて一気に帰還しますー！」

リンディさんの一声で、オレ達は地球に向かった。

第54話：癖ってそう簡単には直せないのな。たとえば…KYとかKYとかK

マ「早速だが感謝コーナーです！コウ様、光闇雪様、畏無様、ユタ様、龍賀様、バラランシヤ様、仮面ライダーディケイド様、月光閃火様、メガネ様、感想ありがとうございます！！！」

ゼ「畏無様からは、エロトに核×9999発、双葉ちゃんからマーポーと春人、劉、瑠璃、フィオネにゼロとクリス、タマモに手作りチョコ」

龍賀様からは、マーポーと瑠璃、劉、タマモ、フィオネにチョコ

仮面ライダーディケイド様からは、劉にカブトゼクターとトリプルなのはブレイカー、マーポーには対変態用の爆弾を頂いた。ありがとうー！」

劉「はあ…」

春「今回は劉なんだな。」

ク「そうみたいね。」

フィ「ではゲストです！月光閃火様の作品『WOLFANG・ウルファング〜狼男は不良青年〜』から輝刃とバラランシヤ様の作品『神に何度も殺された青年』から桜花、星菜、ライラの三人娘が来てくれました！」

輝「やっとなついた…」

花「来てやったぞ！」

星「迎えに来ました。」

ラ「遊びに来たよ〜！！」

マ「この三人は元気だな。」

劉「いらっしやい！」

春「お、迎えに来てくれたのか。ありがとな。」

ク「それで、輝刃の横にいる女は誰なの？」

輝「ああ。こいつは冥界のな……」

ファイ「邪魔だから帰ってもらいましょう！」

キヤ「転移完了ですね！」

マ「…早いな……」

エ「そして…私も参上よ！」

ゼ「…誰だお前は？」

春「どっかで見ただことあるな……」

輝「あ…こいつは……」

!!
.....!!

工「きゃああああああああああああああああああ!!
!!
.....!!
!!

マ「.....ふう.....汚い花火だ。」

劉「も、もうお嬢にいけないノノノノノノ」

ク・キャ・フィ「『なら私が貰^{アタシ}ってあげるわ!!!』」「

輝「エロトが……哀れだな。」

春「アイツはあれぐらいがちょうどいいんだ。さ、帰るか。」

マ「そつか。帰っちゃうのか。」

春「なんだ？寂しいのか？絹ごし」

マ「んな訳あるかよ。そうだ、瑠璃からお前にだ」

キャ「アタシ達のもです!」

春「ん？」

マ「チョコだとよ。しかもなんだこの大きさは…(汗)」

ラ「うわあ!!!」

星「これは…」

花「大きなハートだな。」

春「ありがとう。そう瑠璃に伝えてくれ。／／／／／」

マ「お？照れてるか？」

春「うるせえっ！／＼／＼／＼じゃあな！！」

マ「おう！また来いよ！！」

輝「俺も帰るかな。」

フィ「今回は遅くなってごめんなさいね。」

マ「その代わりにお前も冥界でいい女を見つけてたな。」

輝「あ、あれは／＼／＼／」

キヤ「そんな貴方にも瑠璃ちゃんとアタシ達からです！」

輝「い、いいのか？」

マ「ま、受け取ってやれ。」

輝「ありがとう…じゃあな／＼／＼／」

マ「さて今回からゲストの招待を再開させてもらいます！」

劉「チヨ、チヨコの受付はまだしてます。ほしい人は言うてください
い／／／／／」

ゼ『じゃ、今回はここまでだな。』

ク『そうね。ま、次回からの話は…』

フィ「劉ちゃんが海鳴に帰る話でイイのかな？」

マ「そうだな。ま、なんとか書いてみせるさ！」

キヤ「では次回、お楽しみにい」

マ「ゆるぎやコンコンって聞こえるけど、雪やこんって言っつらしないな。」

キヤ「あら。アタシの出番じゃないんですかあ…」

劉「ありや、耳がたれちゃったよ?」

ク「犬みたいね」

ゼ「そうだな」

フィ「でも可愛いからいいんじゃない? / / / /」

第55話：人前だと恥ずかしい事ってあるよね。思春期男子は特にそうだと思う。

では55話始めます！

あ、ちなみにそろそろ人気キャラランキングをやるうかと。

第55話：人前だと恥ずかしい事ってあるよね。思春期男子は特にそうだと思う。

地球に向けてのアースラの中。オレはフィオネとタマモと一緒に椅子に座りながら周りの景色を見た。

まあ景色といっても真っ暗な宇宙が広がっているだけで、アニメや映画みたいに明るくはない。

「はあ……………」

オレ達が景色を見ると、クロノがため息をつきながらこっちにやってきた。

「どうしたんだよ？そんなため息について。」

「…………君達の事だ」

クロノがオレ達を見ながら言う。

「君達の事、地球にいるのは達に教えてあげたんだが…はあ、危なかったよ……………」

クロノは額に浮かんでいた汗を拭きながら、再びため息をつく。

「すごい喜びようだな。スターライトブレイカーを花火代わりに撃とうとしていたみたいだ。ユーノが必死に止めていたよ。」

「…………あ、あはは……………」

なのはのヤツ、無印編ではSLBなんて作る時はなかった筈なのにな。結局は作ってしまうとは……。天性の砲撃魔なんだな…。

「劉…今君が考えている事がなんなのか分らないが、とりあえずそれは止めといた方がいいと思う。」

「そ、そうだな。」

クロノと共にため息をつきながらオレは地球につくのを待ち続けた。

「ふう…着いたな。」

「なんだか懐かしいわね〜！」

「その前に、私達の出番がなかった件について!!」

「しょうがないだろ。(汗)」

地球に着いたオレ達はデバイスルームに行ってクリスとゼロを受け取り、翠屋の前に来ていた。

「俺達はメンテナンスを受けていたんだから。」

「大体、そのメンテナンス自体いらなかったわよッ!! 私達を何だと思っっているの!？」

クリスが何に対してかわからないが怒鳴り散らす。

「すまないな。でも一応メンテナンスはやっておいた方がいいと思
つて。まあ、結局はデバイスまでもが規格外でその必要はなかつた
みたいだが。」

クロノはそう言つとオレを見てくる。

「クロノ…そのデバイス【までもが】って…どういう意味？」

「言葉どおり、君も十分に規格外だという意味だ。聞いていなかった
だが、どうやったなら時空の狭間から出てこられる？」

ん？そういえば言つてなかつたっけ？

「アテネに助けられた。」

「……はあ……もついい」

クロノはオレを軽く流し、翠屋の中に入っていった。

「さあ、私達も入りましょう。」

「そうですね。」

オレはリンディさんに促され、翠屋のドアを開ける。

「ただしい」劉くちやくんツ！！！！」「…まま！？」

ドアを開けると、いきなりなのはが飛びついてきた。
いや、飛びついたというより……

「ごほッ！！た、タツクル？」

なのはの頭がオレの腹に見事にはいった。

「劉ちゃん劉ちゃん劉ちゃん劉ちゃん劉ちゃん劉ちゃん……ん……！！！！！！」

なのはは泣きながら顔を押し付けてくる。

「た、ただいま、なのは。」

「よかったの！本当によかったの……！！！！」

なのはは顔を上げながらオレに向かって言っが……

「ははっ。顔がすごい事になっているぞ？」

なのはの目から溢れている涙を指で拭ってやる。

「あ、ありがとう……なの／＼／＼／＼」

なのははさっきまでの自分を思い出したのか、急にオレから離れて顔を赤くさせた。

「ふう……君も大変だな。」

クロノが後頭部を抑えながら店の奥から出てきた。

「そついえば最初に入っていったよな？どうしたんだ？」

そうだ。桃子さんじゃなかった。

「お……お母……さん／＼／＼」

恥ずかしかつたけど我慢して言っただけ

すると……

「~~~~ (ゴゴッ)」

さっきまでの表情から一変、お母さんは顔を綻ばせてオレをやさしく包み込むように抱きついてきた。

「おかえりなさい、劉。」

「お母さん／＼……ただいま。」

オレもお母さんを抱きしめ返す。

「よ、よかつたわね！劉ちゃん……」(泣)

「感動の場面ですね、泣けますよ」(泣)

「よかつたですね、劉ちゃん。」

「か、母さん。涙を拭いて。」

「~~~~っ／／／／」

「あっ………」

オレは周りの視線を感じて一気にお母さんから離れた。

「ほら、クロノ君が大きい声を出すから〜」

『ったく。ちつとは空気を読みなさいよね。』

「ぼ、僕のせいじゃないだろ!？」

エイミイさんとクリスがクロノを責めていたが、今のオレはそれどころじゃない。

「さ、さっきの…／／／／」

『劉っ。』

「さっきのはなしッ! な、なかった事にしてえ!!!／／／／／」

オレはその場を逃げるように店の奥に逃げた。

「はあ…はあ。は、恥ずかしかった／＼／＼」

『そんなに恥ずかしがる事ないじゃない。親子なんだから。』

「うっ…！！／＼／」

クリス言う事に言葉を詰まらせるオレ。たしかにクリスの言う事も確かなんだけどさ…。

「や、やっぱり恥ずかしいよ／＼ゼロなら分ってくれるでしょ？」

同じ男であるゼロに聞く。

『そうだな。たしかに親子といっても、男は人前ではなかなかな。』

「で、でしょ？」

さっすがゼロ。男の気持ちを分ってくれる唯一の相棒だよ。

『でも、久しぶりの親子の再会だ。少しぐらい我慢したらどうだ？
くっ…まさかゼロまでもがそう言うとは。……たしかにゼロの言う
事ももつともだけどぞ。』

『さあ劉、戻ったらどうだ？きっとなのは達が待っているはずだぞ
』？』

「くうう！／＼／＼／」

クリスマスもそうだけど、ゼロにまで言われたらしょうがない。オレは
さっき逃げ出した恥ずかしさを抑えながら皆の所に戻った。

「あ！劉ちゃんが戻ってきたの〜！！」

「うっ／＼／／」

オレの事をいち早く見つけたのは。

「え、えっと…まだちゃんと言ってなかったね。ただいま、みんな
／＼／」

オレは皆の顔を見ながら言っが…

「あ、あれ？そういえば…お、お父さんと恭也さんは？」

高町家の男メンツの姿が見えない事に気がついた。

「あー！。」

「あの二人なら」

お母さんと美由希さんが言葉を濁す。

「どっしたの？」

「お父さんとお兄ちゃんは道場にいるの！」

「え、道場？」

フィオネがなのはの言葉を聞いて、聞き返す。

「えっとね、なんか劉ちゃんに久しぶりに会えるとなって興奮した
らしくてさ、それで精神を落ち着かせようとしているらしいよ。」

美由希さんが苦笑いをしながら教えてくれる。

そんなお父さんや恭也さん達の事を周りの皆も苦笑い。

「でも、あの二人らしいじゃない？」

そして、この場をお母さんがきれいに纏めてくれた。

「劉ちゃん！あれから劉ちゃんはどこに行ってたの？」

「ん〜？」

あの後翠屋の席に座り、お母さんと美由希さんが皆にケーキとお茶を運んでくれたから、オレ達はそれぞれを食べたりしながら適当に談笑していた。

そしてなのはの質問である。

「それと、まだこの人の説明をしてもらってないの！」

なのははケーキを頬張っているタマモを指差す。

「アタシですか？アタシはご主人様のお嫁…良妻狐のタマモさんです」

タマモはなぜか胸を張りながらなのはに自己紹介をする。

「『ちよつと待てえ（待つ）！！！！』」

が、そこはこいつら。タマモにさっそく突っ込みを入れた。

「なんですか？騒々しいですよ？」

タマモはそう言うと、用意された緑茶を一口飲む。

「あちっ！はひっ猫舌ならぬ、狐舌ですよお」

タマモが舌を出してふうふうし始める。

「それどころじゃないでしょ！？」

『アンタ…やっぱりあの世界線に置いてきた方がよかったわねッ！』

「むう、タマモさんがライバルだという事はわかったのお！」

そんなタマモに三人は怒るが……

「知ってましたご主人様？^{マスター}犬も猫舌なんですよ。犬なのに変ですよ
ね。」

さすがタマモ。華麗にスルーしているよ。

『タマモの方が何枚か上手だな。』

ゼロもオレと同じ事を思っていたらしい。

「ま、まあ落ち着いてよ。タマモは【オレ】の使い魔って言うのか
な？仲間なんだ。」

「…え？」

オレがタマモの説明をしていると、後ろから声が聞こえた。

「こ、この声は……」

オレは嫌な予感がしながらも後ろを向く。

「そ、そんな…。」

そこには泣きそうになっているリニス&テストアロッサ家一向。

せらには……

「劉ちゃん……今、【オレ】って言ったの。」

「……はッ!！」

なのはに言われて、一人称をボクに直し忘れた事に気づくオレ。

目の前には目からハイライトが消えているのは。いや、なのはさん。

「う、ご主人様……。」

「な、なんで……?」

タマモとフィオネがオレに涙目になりながら抱きついてくる。

そんなのオレだって……

「……はあ……どうしてこうなったのさ……」

もう今日で何回目か分からないため息をつきながら、リニスとなのはの対処を考えた。

第55話：人前だと恥ずかしい事ってあるよね。思春期男子は特にそうだと思う。

マ「さ、いつきなしだが感謝コーナー!!」

フィ「けーくん様、光闇雪様、月光閃火様、龍賀様、毬藻様、バラランシャ様、仮面ライダーディケイド様、ユタ様、メガネ様、紅幽鹿様、三浦一平様、感想ありがとうございます!!」

ゼ「お土産コーナーだ。光闇雪様からは、『信慈特製煎茶』と『覚悟バツチ』

紅 幽鹿様からは、劉にタキシード（白色）瑠璃達女性陣にウエディングドレスとカメラ

三浦一平様からは、エロトに鏡幻結界で百万本の剣に突き刺さ精神攻撃を頂いた。ありがとう!!」

瑠「そして、ゲストの紹介です。」

ク「龍賀様のところの作品の【テンプレな転生（仮）】から龍斗が来てくれたわ。」

龍「よう!!」

キヤ「はじめましてですね。」

龍「そうだな。はじめまして。」

瑠「龍斗君、久しぶりだね!!」

マ「よく来たな。ま、何にもないがゆっくりして行ってくれ。」

龍「おう、ありがとう。」

瑠「えへへ」

フィ「なにやら今回の瑠璃ちゃんはご機嫌ね。」

ク「同じ位の年齢の子が少ないからじゃない?」

ゼ「いつだったかの時もそうだったな。」

龍「さて、来たはいいけど…なにしよう?」

マ「そうだな。ここには何にもないからな。あ、一応こたつはあるからさ、入りなよ。」

瑠「はふう…こたつは暖かいね／＼」

フィ「そうね。」

キヤ「なんだか眠くなりますね。ふわあ…ZZZ」

マ「いや、まだ寝るなよ!？」

ク「はあ。これだから獣はダメなのよ。本能に素直というか。」

ゼ「お前も結構本能に忠実だよな?」

ク『だったら何よ！？私は本能に忠実な素直な女なのよ！！』

フィ『じゃ、じゃあクリスはタマモに何も言えないじゃん…(汗)』

龍『いつもこんな感じなのか？』

マ『ああ。こんな感じだよ。まったく、ゲストが来ている時ぐらい少しは静かにしろ！そして暴れるな！こたつから熱気が無くなるだろ！！』

ゼ『大半がその理由だろ？』

マ『もっちろん！！』

瑠『あ、みかんがあったんだ。龍斗君も食べる？』

龍『あ、じゃあ貰うよ。ありがとう。』

キヤ『ホント、自由ですね。』

マ『……悪いかよ？』

キヤ『いえいえ、そうは言ってませんよ。こつこつ雰囲気もいいなあ……って。』

ゼ『そうだな。』

全『……………』

さわっ…

フィ「ん？今誰かの足に当たったかしら？」

マ「さあ？」

龍「俺も違っぞ？」

瑠「私も。」

キヤ「違いますね〜ZZZ」

マ「だから寝るな！」

瑠「ん〜、このみかん甘くておいしい／＼／＼」

龍「そうだね。あむ…うん！おいしいよ」

キヤ「〜ZZZ〜っ！…！」

マ「うおー！い、いきなりどうしたよ！？」

ク『そうよ。いきなりビクッてなって。』

ゼ『まさか寝てたのか？』

キャ「ち、違いますよ！今、足を誰かに触られたような感じがして
…！」

フィ「た、タママも？」

マ「つつたつてさ、どうせ誰かと当たったんだろ？」

瑠「〜っ！〜ひゃうっ！？／／／／／／／／／／／／」

龍「ど、どうしたの！？」

瑠「わ、私も…太ももなでなでされた／／／／／」

ゼ「なにに！？おい！作者！…！」

マ「いやいや俺何にもやってないからね！？」

ク「はいはい。うるさいわよ、馬鹿共。フィオネ、こたつの中を見
て見なさい。そうすれば解決できるでしょう？」

フィ「えっ…く、クリスがまともな事を…？」

キャ「天変地異の前兆ですね。」

ゼ「それだけで済めばいいのだが…」

ク「天変地異だけで済めばいいとか。どれだけ私のレベルは高いの
よ…!?？」

龍「い、いいから見てみなよ?。」

フィ「わかったわ。じゃ、じゃあ……」

ちらツ……パサツ!

マ「ど、どうした?。」

フィ「……みんな……このこたつからすぐ出なせよ……」

全『はい?。?』

フィ「いいから出なせーいッ!……!」

マ「わ、わかったよ。」

ク『で、何かあったのよ?。』

フィ「ちょっと、タマモ。あのこたつ壊して……つか燃やして。」

キヤ「????わかりました。呪相・炎天！」

マ「あーッ!!何すんだあ!!」

エ「あ、あつちい!!!!」

ク「え、エロト!?!」

マ「い、いつのまに?」

エ「て、てめえら!何しやがる!?!」

瑠「だ、大丈夫ですか?」

エ「おおう!俺の心配してくれるのは瑠璃ちゃん。君だけだ!!」

龍「さて、そろそろ帰るかな。」

マ「お、そうか？じゃあお土産という事で。」

龍「箱？これはうわ、色んなケーキがあるぞ！？」

マ「ま、お土産としてはよくある感じだけだな。」

瑠「私とフィオネとタマモで作ったんだ／＼」

龍「そうか、ありがとうな。」なでなで

瑠「えへへ／＼／＼」

フィ「私達にはないの？」

龍「えゝ！？／＼／＼」

キヤ「ふっふう まだまだ子供ですね」

マ「おいおい（汗）」

龍「じゃ、じゃあね！／＼／＼／＼（汗）」

瑠「ばいばい！...」

マ「さ、今回はここまで！龍賀様、キャラは壊れてませんでしたか？」

ク「まあ壊れるような事はしていないけどね。」

ゼ「それで、人気投票は？」

マ「そうだったな。えー、期間は、20日の大体夜ぐらいます。」

フィ「読者の皆様が好きキャラの名前と理由を感想、メッセージで教えてください。」

瑠「皆さん、いっぱい投票してくださいね！」

キャ「アタシも初参戦ですからね！」

ク「ふっ！前は散々だったけど…今回は…勝つ！！！」

ゼ「…何にだよ？（汗）」

マ「では、人気投票&次話もよろしくお願ひします！！！」

第56話：オレの苦労って一体……orz（前書き）

人気投票はまだまだ受け付けているので、皆さん投票の方をよろしくお願いしますね〜！

では、56話始まりマ〜〜ス！！

第56話：オレの苦勞つて一体……orz

「さて…」

オレはなのはの方は無視する事にして、リニスを席に座らせた。

「それで、この方は？」

座って運ばれてきた紅茶を飲んで落ち着いたリニスはオレに聞いてくる。もちろんタマモの事だ。

「えっと、オレが向こうの世界線で仲間になった方です。」

「ふん…仲間ですか？」

「~~~~ツ!!!(ビクツ)」

リニスの声で体を震わせるオレとフィオネ。フェイトとアリシアもさっきまではオレと話をしたいと騒いでいたが、今のリニスを見て静かになった。

たぶん、今のリニスを刺激してはまずいと理解しているのだろう。アルフにいたってはすっかり丸くなってしまっている。オレはちらつとなのはの方も見てみた。

「……………」

すっかり放心しきっているのは。
オレがいない間は高町家にいたって言うし、魔法の特訓とかでこの
リニスにたっぷり絞られていたんだろ。

「お〜い！劉〜〜！！！」

「心配したんだぞ〜〜！！！」

と、そこで翠屋に土郎さ…お父さんと恭也さんが乱入してきた。
そんな二人には周りから空気読めの痛い視線が送られる。

「うツ…私達はやってしまったようだな…。」

「そ、それに…この殺気は…リニス！？」

恭也さんはリニスを見て驚く。

そりゃそうだ。今リニスが放っている殺気はそれほど半端じゃない
んだ。

「…ふう…それで、【元】マスター…いえ、劉。なんで貴方は私と
の契約が切れたっていうんですか？」

「そ、それはですね……………」

オレは恐る恐るといった感じでリニスのオーラに怯え、涙目になりながら向こうの世界線の事を細かく説明していった。
いや、多少はぼかすけどさ。

「……という事がありましたですね。」

一通り説明を終えたオレは顔を上げる。
オレの話を聞いていた皆は暗い顔をしていた。
すでに話を聞いていたリンディさん、エイミーさん、クロノもだ。

「それで、リニスとの契約が…切れたんだと思います…」

リニスの顔を見るが表情が読み取れない。

「劉ちゃん…！」

お母さんがオレに近寄ろうとするが、それをお父さんが抑える。

「劉は…私を捨てた訳ではないんですね？」

「…え？」

リニスが静かに口を開く。

「私を捨ててその方と契約した訳ではないんですね？」

リニスの目に涙が溜まりはじめる。

「もちろんだよ！リニスを捨てる訳ないじゃないかッ！…！」

オレはリニスに近寄り抱きつく。

「ごめんね、リニス。不安にさせて。本当にごめんね。」

オレはリニスに抱きつくが、逆にリニスに抱き返される。

「え!？」

「たしかに不安でした。劉に契約を切られて、捨てられたんじゃないかって。でも、それよりも！」

リニスの目から涙がこぼれる。

「貴方に…何かあったんじゃないかって……その事を考えるだけで、私の胸が…張り裂けそうで…！」

そこからリニスは泣き崩れてしまった。

「落ち着いた？」

「は、はい… / / / /」

リニスはハンカチで涙を拭きながら、椅子に座る。

「皆もそんなに暗い顔をしないでよ。」

オレはなるべく明るく言うが……

「いや、それでもだな……」

皆、暗いまんまだ。

どうしたもんか……

《劉…。》

《なんだよ？ゼロ。》

どうするか悩んでいた所に、ゼロから念話がくる。

《とりあえず、土郎さん達には料理を作ってもらったらどうだ？おつきからお腹空いているだろう？》

「あ…。」

ゼロに言われて急にお腹が空いているという事を実感してくる。

《それに少しはこの場の空気も入れ替わるだろう？》

なるほどな。

さすがゼロだ。頼りになる。

《ありがとう、ゼロ。》

「あ、あのさ…」

オレは少し困って風に笑いながらお腹をさする。

「どうしたんだい？」

士郎さんが答えてくれる。

「ごめん。オレ、お腹空いちやってさ。」

オレが言うと同時に空気を読んだのか、お腹がなった。

「あう！／＼／＼」

そんなオレの様子に皆次第に笑いが出てくる。

「ははっ、わかった。今何か作ってこよう。桃子。」

「そうね。今日はたくさん作りましょうか！」

士郎さんと桃子さんがキッチンの中に入っていった。

「あ！私もお料理作るの〜！！」

「あたしも手伝うよ。」

なのはと美由希さんもその後を追っていった。

「りゅ、劉！／／／」

「ん？フェイトか。」

料理を待っている間、フェイトとアリシアがオレに詰め寄ってきた。

「あ、あの大丈夫…じゃなかったよね。その…大丈夫？／／／」

フェイト…君は自分で何を言っているのか把握しているのかい？

「もうフェイト。それ自分で何言っているのか分ってる？」

「?????…あつ…／／／／」

呆れながらアリシアに言われたフェイトは顔を真っ赤にさせた。

「えへへ、それより、やっとちゃんと会えましたね！」

アリシアはフェイトからオレの方を向いてくる。

「あの時ちゃんと言えなかったから……ありがとね。私やお母さん、フェイトやアルフにリニスを救ってくれて。／／／／」

アリシアは照れながらお礼を言う。

「いや、そんなお礼を言われるような事じゃ…／＼／」

そのアリシアの様子を見て、オレは可愛いと思ってしまった。

「それでもですよ。ありがとうございます！」

そう言うと、アリシアはオレに抱きつく。

「ちよっ!!／＼／／」

「な、何やっているの！姉さん!!」

フェイトが慌ててアリシアを引き剥がしにかかるが…

「いいじゃない！劉君は私の王子様なのよ？そして私は助け出されたお姫様。だから甘える権限があるのよ？」

「そ、それを言ったら、さっき私も助けられた言ったんだから私もお姫様だよな？」

「うっ…!!」

フェイトに思わぬ反撃を受けたアリシア。言葉を詰まらせるが……

「じゃあさっきのはやっぱなし！これでいいでしょ？」

簡単にさっきのお礼は無かった事にされた。

「アンタ達…そんな事はどうでもいいのよ…。早く劉ちゃんから離れなさいーいッ…！」

「今回は意見がぴったしですね。アタシのご主人様マスターからとつと離れやがれです〜…！」

『アンタもよ！何さり気なく自分の物にしようとしているのよ！！』

そこにフィオネ、タマモ、クリスが加わって騒ぎは大きくなってしまった。

「お、お前ら…いい加減にしろー…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！」

オレはそんな騒ぎの中心でそう叫ぶしかなかった。

「本当にお前らは……」

「まったく抜け駆けなんてひどいの……」

「少しはおとなしくして下さい……」

「『ごめんなさい……』……」

さっきまで暴れていたメンツはオレ、なのは、リニスに怒られて正

座の状態で反省していた。
あ、クリスは正座じゃないよ？

「それに劉ちゃんもなんで【オレ】なんて言ってるの？」

「うっ！！そ、それは〜」

なのはから目を逸らす、すぐに回り込まれて視線を合わせてくるのは。

「劉ちゃん〜ん？」

「くっ…！」

ここで引き下がったらダメだ。

今ここではつきりと言わないとたぶん一生…あの一人称のまんまだろっ。

だったら…

「別にいいじゃないか！自分のことをなんて言おうと、これからは

【オレ】って言うんだ！！」

「…っ！！」

「お、オレはいつまでたっても子供じゃない！そういう事だっ自分で決められるんだよ！！」

オレはなのはの目を見ながら真剣に訴える。

が、逆効果だったかもしれない…。

「劉ちゃんが……ふ、不良になっちゃったの……」

「…彘？」

なのは信じられないといった顔をしてオレから少し離れていく。

「お、おかーさん！！劉ちゃんがああ！！！！」

なのはそのままお母さんの所に走って行ってしまった。

「あ、あれー？」

オレは自体が把握しきれずにフィオネの方を見る。

「ん〜、まあドンマイだよ！（にこにこ）」

ここ最近でフィオネの素晴らしい笑顔が炸裂。

「タマモ〜？」

今度はタマモに助けを求める。

「大丈夫です！アタシがついていますよ！ご主人様マスター！！」

タマモはそう言うと、オレに親指を立ててくる。

さすがタマモ。役に立つ。

「まあ俺も劉の味方だ。そろそろ劉は男らしくなってきたしな。」
後ろからオレの肩を叩いて微笑んでくる恭也さん。

「恭也さん…（涙目）」

「違う！お兄ちゃんだッ！！」

一瞬天使に見えた微笑は一転して顔が険しくなった。

「わ、わかったよ、恭也お兄ちゃん。」

「あつはああゝ！！！！／／／／」

そう呼ぶと恭也さんは鼻血を出しながら倒れた。

「っ、つかえない…」

そのまま恭也さんはフィオネに運ばれログアウト。

「ほ、ほら劉ちゃんが不良にい！！」

お母さんとなぜか片手に木刀を持っているお父さんを連れてきたなのは。

「もう劉ちゃん。【ボク】って可愛く言わなきゃダメでしょう？」

お母さんが人差し指を立ててオレに言ってくる。

「で、でももういいじゃないか。【オレ】って言ったって。恭也さんだって賛成してくれたもん！」

今はいないけどね…

「ふむ…劉。」

お父さんはオレの名を呼ぶと、

「……ッ！！！」

いきなりオレに斬りかかってくるお父さん。

しかもこれは…神速だ。

前までのオレなら反応しきれない速さだ。

そう…前までのオレなら。

「…っ！！！」

オレはこっちに向かってくる土郎さんの懐に迷わず突っ込む。

そのままオレの頭にお父さんは木刀を振り落としてくるが、それを横に避けながらかわす。

振り落とされた木刀は翠屋の床に突き刺さった。

その隙を突いたオレは木刀を踏み台にしてお父さんの頭の上をジャンプして後ろに回り込む。

踏み台にした時に木刀は折れたみたいだ。

最後に土郎さんの首にハンドソニックを押し当てる。

「……………ふむ…。」

ハンドソニックを押し当てられた土郎さんはその状態で目を瞑る。

「……………はっ！…！ご、ごめんなさいっ！…！」

オレは慌ててハンドソニックをしまつて土郎さんから離れた。

「み、見えなかつたぞ…。」

「うん。私も…。」

「劉君、かつこい！…！」

クロノとフェイトとアリシアがそれぞれ感想を言っている。

「うん。立派になったな、劉。」

そんなオレにお父さんはオレの頭を強くなでてきた。

「お、お父さん？」

「こ、こんなんで一人称を直せたの？」

今までのオレの苦勞はいつたいたい……。
本気で泣きそうになった、帰還後の一日目だった。

第56話：オレの苦勞つて一体……orz（後書き）

マ「さ、感謝コーナーです！Arishia様、メガネ様、月光閃火様、畏無様、光闇雪様、バラランシヤ様、ユタ様、夜神様、感想ありがとうございます！」

劉「お土産コーナー！メガネ様からは、女性陣にウエディングドレス畏無様からは、エロトに核弾頭×9999発&アルカンシエル×9999発&SLB（お馴染みの）×9999発&ミーティア・フルバースト（ガンダムSEED）×9999発

バラランシヤ様からは、タマモに春人特性の媚薬

ユタ様からは、対象絶対消滅魔法、完全忘却魔法、エンドレスブレイカーを頂きました！ありがとうございます！！

マ「今回はこれにて終了します。すいません！！」

劉「なんでさ？」

マ「この後教習所。」

劉「ふ〜。読者の皆様申し訳ございません！」

マ「では、次回もよろしくです！！…あ、人気投票の受付はまだまだなので、お願いしますね！！」

現状は瑠璃が一位ですwwww

第57話：なんだかこんな日常は懐かしいなあ。(前書き)

なんだか瑠璃とタマモの票がすごい事に……。

では、57話はじまります!!

第57話：なんだかこんな日常は懐かしいなあ。

「ふわぁ……んん…っ！」

朝。オレは目を覚ます。

まだぼやけている目を擦りながら起き上がろうとする……

「…あれ？」

起き上がろうとするが…何故だか起き上がれない。

…いや、ごめんなさい。何故だかじゃないです。理由は分かっています。

それは……

「スウ…スウ……うう〜ご主人様マスター／／／／」

はい。この狐娘が原因です。

「はぁ…またタマモか。」

そう。毎回…毎回なんです。オレが朝起きるとタマモの尻尾がオレを包み込んでいて、しかも何気にこの力が強くて…身動きが取れないんです。

「でも、ふわふわしてて気持ちいいや／＼／＼」

そして毎回この気持ちよさのせいで怒れずに許しちゃうオレが居ます／＼／

「むにゃ／＼劉ちゃん…zzz」

「…ん？」

少し体制を変えて横を試してみる。

「なんだ。なのはか。」

声がした方を見ると、パジャマ姿のなのはが寝ていた。

「…あれ？」

なのはの寝顔を見ると、目のところが若干赤くなっているのが分かった。

『泣いていたぞ。』

「え？」

オレがなのはの顔を見ると、机の上のゼロが突然喋りだした。

『なのはの事だろ？夜中にな、ベッドに忍び込んで劉の名前を何度も呟きながら泣いていたぞ。たぶん劉が帰ってきて安心したんだろうな。』

ゼロは一通り喋り終わるとまたスリープモードになってしまった。

「…なのは。」

今回の事ですんごい心配を掛けた事を今になって更に実感した。

「なのは…。」

「むにゃ…なに？劉ちゃん？」

「…つ／／／／／」

オレがなのはの名前を呟くと同時に目を覚ました。

「んゝ、おはよう…劉ちゃん…zzz」

「…って寝ぼけていただけか…。」

オレはそんなのはを見て苦笑する。

「帰って…きたんだな。」

昨日からずっとこの事はつか考えている自分がいた。

「…うぐ、おれ……ぶはあッ…！」

「な、なんだ？」

変な声がした方を見る。

「はぁ…またコレで目が覚める毎日か…」

その声の正体はフィオネだった。

「なのはちゃん…何回避けてもなぜか目が覚めると、私を枕みたい
に……orz」

フィオネがリアルにorzのポージングをとりながら涙を流す。

「まあ、しょうがないよ。フィオネもアウトフレームで寝ればいい
じゃないか？」

「ダメよ…そしたら…歯止めが利なくなっちゃうでしょ？／／／
／」

うん。ごめん。そのままです。

オレはフィオネと少し朝の会話をして時計を見る。
時間は…6時45分ぐらい。

「さてそろそろ起きるか。タマモ？」

オレは未だにふわふわに包まれながらタマモを起こそうと尻尾をわ
さわさ触る。

「はぁ…あ…うつ、ふうん／／／」

タマモの口から艶かしい声が洩れる。

「ほぐら、起きて〜!!」

「やつ…だ、ダメですよお／＼／＼」

これは毎朝の出来事だからもう何とも思わない。
最初はびっくりしたけど……

「タ〜マ〜モ〜!!」

「ん……んふ〜…くはあ〜ッ!!」

タマモがやつと目を開けて欠伸をする。

「んにゃ…おはようございませゆ…^{マスター}ご主人様…」

「今日も噛み噛みだね。」

朝のタマモは基本こんな感じだ。

「さあ、少し尻尾の力を抜いて？」

「わかりました〜」

尻尾の力が抜けるのがわかる。

「ふう。やつとこさ開放。」

オレはそのままタマモ、なのはを寝かしたままフィオネを肩に乗せ

てリビングに向かった。

「おはよう、お母さん。」

「桃子さんおはよう!」

「あら、おはよう。劉ちゃん、フィオネちゃん。」

リビングに行くと、お母さんが朝食を作っていた。

「お父さん達は道場?」

「そうよ。行って来たら?」

「ん〜、少し顔出してくるよ〜」

オレが道場に向かおうとする。

「あ、ちよつと待って。」

「はい？…ひゃう！？」

オレがお母さんに呼ばれて振り向くと、オレの口に一本のウィンナーが入れられる。

「ふふっ、今ボイルしたばっかなのよ。人間っていうのはね、起きた後に一口物を入れてようやく目が覚めるのよ！…どう？目、覚めた？」

「……………」（コクコク

オレはウィンナーを加えたまま頷く。

「あゝ、私も食べたいです！」

「そうね、いいわよ。」

フィオネもお母さんにウィンナーを一本貰い、食べながら道場に向かった。

「おはようございま〜す…っ」と。

オレが道場に入ると、中では美由希さんと恭也さんが試合をしていた。お父さんは審判。

「ハアアアアアツ！！！！」

「フンツ！！！」

恭也さんの動きに何とかついていつてる美由希さん。

「おお…二人とも動き早いな。」

「よしッ！それまで！！」

お父さんの声で動きを止める二人。

「今朝はここまでだな。」

「「ありがとうございます！！」「」

二人はお父さんに挨拶すると、タオルで汗を拭き始める。

「ん？おお、劉。おはよう。」

そこで、お父さんがオレに気づいて挨拶してきた。

「おはよう、お父さん。」

「恭也さんと美由希さんもおはようございます！」

「おはよう！」

「劉〜！今朝も可愛いなあ……！」

恭也さんがオレを見つけるや否やオレに抱きついてきた。

「ちょッ！ちょつと!?!？」

「はあああ…劉の匂い…この感触…久しぶりだな〜」

そう言いながら頭を撫でたり、髪を弄ったりしてくる恭也さん。

「ま、まって！変態レベルが上がってない!?!？」

「そんな事ないぞ〜!?!？」

そう言いながらも手の動きは止めていない。

「恭ちゃん、昨日までの反動だね〜。」

美由希さんがメガネを掛けながら言う。

「そ、そんなに溜まってたの…?？」

オレは抱きつかれながらだから、自然と恭也さんからだと上目遣いに見える位置で聞いてみた。

「はあ…もう道場には行かない。」

オレは少しムスツとした表情でトーストを頬張った。

「う、ごめん。」

恭也さんはオレにチョップされた所を氷嚢で冷やしながら、コーヒーを飲む。

「私まだ…スマン。」

お父さんはお母さんにお代わりを買っていた。

「いいなあ。アタシもその場にいたかったですよお！」

なのは食べ終わった食器を流しに持って行くと、歯を高速で磨いて外に出て行った。

「なのはちゃん、どうしちゃったんだろう?」

「さあ?」

フィオネの質問に、まったりしながらお茶を飲んで適当に受け流すタマモ。

「何を誤魔化そうとしてるんだ?」

オレも食べ終わった食器を片して、歯を磨き、クリスとゼロを持って外に出た。

「…あ……………// // // //」

そして……

(ふう…そっだよな)

急いで外に出たのはいいものの、まだバスが来る時間ではなかったからバス停の前に立っているのはを見つけた。

どんだけ慌ててたんだよ…（汗

「あ、あはは。バスがまだ来てなかったの。」

「そりゃそうでしょ。」

バスが来るまでまだ少し時間がある。といっても五分ほどだけ。

「さて、何を誤魔化しているのか…教えてもらおうか？」

「な、何も誤魔化してなんかいないの！！」

やっぱり強情なのは。

誤魔化している事…たぶん闇の書事件の事だろう。

「そ、それよりも今日から学校なの！！劉ちゃん楽しみ？」

なのはがあたふたしながらもオレに話しかけてくる。

「そうだね。休学扱いだったんだよね？」

「そうなの！だから今日から行っても問題ないの！昨日お母さんが学校に電話していたし。」

ありがたい話だ。
今日からまた通える学校……あ、アリサとすずかにはなんて言おうか。

「あ、ああバスが来たのー。」

そしてこの棒読み。

（はあ…誤魔化す気があるのか、ないのか…。）

通学バスが来たのでそれに乗り込むオレ達。

（おっと、そうだ！）

オレはある事を思いついた。

なのはが先に乗り込み、その後にオレがつづく。

オレが乗り込んだ時にアリサやすずか、クラスメイトが驚くのがわかった。

けど……

《なのは。後で闇の書事件でユーノが無限書庫にてネコの使い魔といる事について教えてね。》

オレはなのはにそう念話を送った。

「…ふえ？」

第57話：なんだかこんな日常は懐かしいなあ。（後書き）

マ「さて感謝コーナーです！Arishia様、バラランシヤ様、畏無様、咲夜月 黒蝶様、仮面ライダーディケイド様、光闇雪様、月光閃火様、紅 幽鹿様、三浦一平様、けーくん様、メガネ様、感想ありがとうございます！！」

ゼ「続いてお土産コーナーだ。仮面ライダーディケイド様から、ラブレター（偽物で開けたら他の作者様の攻撃に強制的に当てられる。もちろん攻撃は他の人にも当たる）を貰った。ありがとう！」

フィ「あのさ、なんか最近手を抜きすぎじゃない？」

マ「え？」

キャ「そうですね。なんかそんな感じがします。」

マ「そ、そんなことないよー（棒読み）」

ク「その棒読みですべてわかったわ。」

瑠「それより、今回はゲストの方が来てるんだよね？」

マ「ああ。えっと、畏無様の作品『魔法少女リリカルなのは』偽リノ騎士』から響介とスカイ。」

瑠「バラランの作品『神に何度も殺された青年』からアリシアお姉ちゃんが来てくれました！」

響「お邪魔しに来たぞ〜」

ス「お久しぶりですね。』

瑠「あ、お久しぶりです。」

ア「る〜り〜ちゃ〜んツ!!!」

瑠「うわッ!?!」

ア「あ〜、久しぶりねこの感触〜」

瑠「あ、アリシアお姉ちゃんノノノノ」

マ「よお、みんなよく来たな…って、アリシアが物凄い勢いで瑠璃に頬擦りしている…。」

キヤ「なんだか楽しそうですね。アタシもまぜてください〜い!」

瑠「わにゃあ!?!ノノノノ」

ゼ「瑠璃…可愛いぞ〜!」

ク「今この瞬間、ゼロはお父さんから超絶ロリコンに正式にジョブチェンジしたわ。』

フィ「ま、まあまあ(汗)」

響「相変わらずだな。おっと、今回はお土産を持って来たんだった。

」

マ「お〜！モンブランじゃないか。俺モンブラン好きなんだよな〜」

フィ「この材料はなに？」

ス「これは味噌煮うどんの材料です。こちらで調理させていただきます。」

マ「お？響介が作ってくれるのか？」

響「そうだ。台所借りるぞ？」

マ「じゃ、お願いするわ。」

キャ「はふう…満足です。／＼／」

ク「アンタは何してんのよ？」

マ「ナニしてたんだろ？」

フィ「してないでしょうがっ！！このセクハラ野郎が！！」

ドゴッ！…

マ「がへッ！？」

ア「ふう…ひとまず休憩。」

フィ「ひとまずなのね…(汗)」

ク「アリシアも随分と変わったわね。立派な変態になったわ。」

ゼ「お前には言われたくないがな。」

マ「ちなみに今のゼロにも言われたくないからな？」

ゼ「な、何故だ!?!」

キャ「だって、ロリコンじゃないですかあ」

ゼ「な……っ!?!」

ア「そうよね。ゼロには言われたくないわね。」

フィ「ふふん。ゼロも落ちたものね。瑠璃ちゃんに言っておげなさい……」

瑠「ふん、そう言えばいいの?」

フィ「バッチグーよ!」

ゼ「?..?..?」

瑠「このロリコン犯罪者野郎、いい加減にしないと通報するぞ?」
にっ」

ゼ「……………」

ア「あちゃ〜」

ゼ『強制スリープモードに移行します。』

フィ「終わったわね…」

響「おい、出来たぞ〜って、どうした？」

キャ「何でもないですよ〜！」

ク『あえて言うと、ロリコンが逝っただけよ。』

ス『調理している間に一体何が…？』

マ「ナニがありました。」

フィ「だ・か・ら、死になさー！っ！…！」

ドゴツ！

バギツ！！

グシャツ！！！！

マ「うごお！？！？？」

バタリッ

響「おいおいいいのかよ？（汗）」

フィ「…ま、問題ないでしょ。」

ス「今の間は…」

ク「気にしたら負けよ。」

キヤ「さ、冷めないうちに頂きましょう！」

瑠「いただきます！」

フィ「もぐもぐ…うん！美味しいじゃない！！」

キヤ「そうですね〜！アタシもこんなに美味しいうどんを頂いたのは初めてですよ」「

瑠「あちッ…うん！美味しいね！」

響「そうか。よかった。」

ク「そうだ。作者にも食べさせましょう。」

マ「……………」

キャ「さあモンブランも頂きましょう!」

マ「え!?!ここまでしといて何無視してんの!?!」

瑠「わあ!これもおいしい」

全「変わり身早ツ!?!?!」

響「ま、まあ喜んでもらえたならいいや。今回はこの辺で帰らせてもらう。」

ス「そうですね。」

キャ「そうですね。じゃ、アタシの毛で作ったこのクッションを。」

フィ「あ、真似て作っただけね。でも、このふわふわ感はそのまんまよ。」

響「おお!ありがとうございます!」

ス「では、また今度。」

ア「私もそろそろ帰らなきゃ……」

瑠「アリシアお姉ちゃん。」

ア「ま、また今度会いにすればいいよね」

瑠「うん！私もアリシアお姉ちゃんとまた一緒に遊びたいな。／／」

ア「…っ！！！！／／／／」

マ「そうだな…っってうわ！！て、停電！？」

フィ「ちよつと待ってて！…っよいつしょ！」

キャ「あ、明るくなりましたね。」

ク「つて、瑠璃ちゃんは？」

マ「あれ？アリシアもいないぞ？」

キャ「ん〜。瑠璃ちゃんは…連れてかれましたね。」

フィ「そ、それホント！？」

マ「なんてヤツだ…アリシア…っ恐ろしい娘！」

ク「ま、遊びに行ったたでも思えばいいんじゃない。」

キャ「そうですね。では、次回の更新もよろしくです」

マ「勝手に締めるなあ！あ、投票の方よろしくです！ちなみに現状の一位は瑠璃とタマモが同率です！！」

番外編：第二回人気キャラアンケート結果発表！！この結果は予想してなかった

さ、さてどうしてこうなったのか…。

俺にもわかりません。(汗)

今回は後がき風に書こうと思います。

ではどうぞ…！

マ「それについては聞くな。」

フィ「そうね。さ、とっととやっっちゃいましょうか？」

劉「気になるんだが……」

マ「うるせー！そんな事気にしてたら……死ぬぜ？」

キヤ「貴方も大概おかしいですよ。さ、では第四位の発表です！
！」

マ「ぐすつ……え、第四位は……同率！？」

ク「ふん。ま、そんな低順位には興味なしッ！！」

ゼ『……………』

フィ「ホント、うるさいわね。はい同率第四位の登場です！！」

な「えへへ、どうもです。」

フェ「わ、ここに出るの初めてだね、なのは。」

ゼ『ふむ…四位か。票が貰えるだけうれしいな。』

マ『はい。三人とも票数は2票！！なのは&フェイト&ゼロで〜す！！！！』

な『にやはは。うれしいの〜！！！！』

フェ『うん！私もうれしいです！！！！』

ゼ『まさか、入っているとは…。入れてくれた皆、ありがとう！』

ク『三人とも、おめでとう……………ぶぶっ……………』

マ『お前最低だな……………』

ク『だ、だって、二位って…。きっと私の十分の一以下よ？』

な『む〜〜！クリスが意地悪なの〜！』

フェ『りゅ、劉……………？』

劉『いや、二人ともよかったな。おめでとう！』なでなで

な・フェ「えへへ／／／／」

ク「ガツデム!!」

フィ「はああ。」

ゼ「少しは静かにしたらどうだ? (汗)」

キャ「では、第三位の発表です!」

マ「え、第三位は…票数が…4票ですね!」

劉「お?結構四位と差はないな。」

フィ「そうね。じゃ、作者お願い。」

マ「おう!ではお越しいただきましょう!第三位の……アリシアー
—————ッ!—————!」

アリ「わーい!みんなー!投票ありがとうーっ!……!」

劉「おめでとう。」なでなで

アリ「ありがとう、劉君！！／＼／＼／」(劉に抱きつく)

な「あ、アリシアちゃん！おめでとうだけど、それは許せないのー
ーッ！ー！！！」

フェ「ね、姉さん！ー！！」

アリ「おっとつと。なんだかそのお二人さんがうるさいから一回
離れるね。」

フィ「まったく、なのはちゃん達は。」

ク「もう少し大人の余裕ってヤツを見せなさいよね。」

キヤ「そうですね。まだお二人とも子供だから無理だと思いま
すけど。」

な・フェ「……………ぶちっ！！」

劉「…な、なのは？…フェイト？」

な・フェ「……………そっちはおばさんじゃん。」

マ「ん、それもそうだな。では、第二位は票数……12票です。」

フィ「ここからの差がすごいわね！」

マ「票数12票で第二位……え、我等が主人公の天道 劉です
……！」

劉「お？オレだったのか。ははっ、みんなありがとう！（にこっ）」

キヤ「きゃー！きゃー！！んもっつ！^{マスター}ご主人様のイケメン」

フィ「その笑顔が可愛いわよ……！！！」

アリ「でもでもカッコいいーッ！！！！！」

ク「さすがは私の夫ね！」

マ「おめでとう。【二位】の主人公さん。（にこっ）」

劉「ありがとう……不人気作者さん（にこっ）」

ガシッ！（二人仲良く握手しました

フィ「そのふたり〜！戻ってきなさい？」

キヤ「無駄みたいですね。」

ク「さてと、そろそろ私の出番かしら〜？」

ゼ「…ん？一位も同率みたいだぞ？」

アリ「ええ！？本当に!？」

フィ「…あー、なんかよめてたわ〜。」

キヤ「????？」

ク「そんなの言わなくてもわかるわ。きっと、私と…私？」

マ「つけ。あんのダメダメ主人公が…で？お前は何またぶっ壊れた事言ってたんだ？」

劉「クリス…同率でなんでお前とお前なんだよ…。」

ク『じよ、冗談よ〜』

フィ「それで、同率一位の発表は？」

マ「そうだな。劉、コレ食べ。」

劉「????いいけど…あむっ」

ピカーーッ!!!!!!!!!!!!!!

瑠「はふ……あれ?みんなどうしたの？」

ク『ああ。私と瑠璃ちゃんだったのね。』

瑠「?????」

フィ「このデバイスの事は気にしないでいいのよ〜。」

マ「では、同率一位の発表です!票数はなんと………はあ…19です。」

全『はああああ!?!?!?19票!?!?』

瑠「すごいね」

様々！やりましたよーッ！！」

アリ「いいなあ。」

マ「にしても二人とも19票も入るとは思わなかったよ。」

フィ「でもこの二人ならなんか…予想通りって感じね。」

ゼ「そうだな。そして、瑠璃〜！！可愛いぞーッ！！！！！！！！！！」

瑠「あ、ありがとう／＼／＼／＼」

マ「え〜、一位になったお二人には……………何にも考えていません。」

フィ「そうなの!?!」

マ「ああ。だからさらにアンケートだ。この二人にしてほしい事は何かありますか?」

ゼ「例えば?」

マ「いや、それが思いつかないからアンケートをだな。例も思い浮かばないし…。最初は番外編でも書くのかな〜って思ったんだけどさ…。難しいね、キャラの番外編って。」

キャ「ダメダメですね。」

瑠「ダメダメだね。」

マ「すみませんねえ！……！」

フィ「という訳らしいので皆様、何かしてほしい事などあったら感想&メッセにて教えてくださいね！」

ゼ『では今回は本当にありがとう！』

マ「ああ。皆様には本当に感謝です……！」

キャ「それでは後書きにいきましょう……！」

番外編：第二回人気キャラクターアンケート結果発表！！この結果は予想してなかった

マ「はい！ではでは、さっそく感謝コーナーです！」

キャ「ユタ様、バラランシヤ様、龍賀様、仮面ライダーディケイド様、
様、Arishia様、畏無様、光閻雪様、メガネ様、毬藻様、紅
幽鹿様、三浦一平様、感想ありがとうございます！！」

ゼ「お土産コーナー！仮面ライダーディケイド様からは、pspと
遊戯王のストラクチャーデッキ（烈風の覇者）」

畏無様からは、悠が作った5段チョコケーキを頂いた。ありがとう
！！」

マ「この5段チョコケーキ……すごいな。」

フィ「本当ね。早速頂きましょう！」

キャ「あむ……もぐもぐ……はああ。おいしいですね」

瑠「えへへ／／／美味しい〜！」

マ「瑠璃、ホッペの周りにチョコ付いてるぞ。」

フィ「ほら拭いてあげるわ。」

瑠「あ、ありがとう／／／／」

ゼ「照れている瑠璃も……アリだ！！」

フィ「アンタは何でもアリでしょうが。」

マ「あれ？クリスは？」

ク『強制スリープモード発動！』

ゼ『相当ショックだったんだな。』

マ「あれだけ自信があって票数が0だったからな。」

アリ「そして私登場！」

マ「ん？お前は…バラランシヤ様の所のアリシアか！？」

アリ「さあッ！今度は逃がさないわよーッ！！」

瑠「ふえ？きゃッ！…むぐう！！」

アリ「ではさようならー！！」

マ「鮮やかな縄縛りだったな。」

フィ「瑠璃ちゃん小さいから大きめなカバンにすっぽりだったわね。」

ゼ『…強制スリープモード発動』

キャ『そしてゼロもショックで……（汗）』

フィ『これも…しょうがないわね。』

キャ『さてと、瑠璃ちゃんはアタシが向かいにいきます。なのでこの辺で！…』

フィ『うわ！き、消えた！？』

マ『さすがは神様。』

フィ『じゃ、こっちも終わらせましょうか？』

マ『そうだな。では一位の二人に何をさせてほしいか。皆様にゆだねます！！（…）思いつきり他力本願です！！』

フィ『こんな作者でスイマセンね…。』

マ『本当にごめんなさい！では皆様のお力をお貸しください！…』

フィ『今回も本当にありがとうございました！次回もよろしくです
~~~~~』

第58話：なんだか今回は各ヒロインに出番があるね。（前書き）

さてさて、皆様アンケートありがとうございます。

なんだかどれもイイ案すぎて迷っている現状です。

少し時間がかかると思いますが、その話を投稿する時は活動報告にて教えますので、楽しみに？まっけていてください！WWW

では、58話始まります。

第58話：なんだか今回は各ヒロインに出番があるね。

「アンタ…いつ帰ってきたのよ？」

「ん？」

あの後オレは、なのはの口を塞ぎアリサ達が空けていた席に座った。

「だってアンタは外国に留学するからしばらく学校を休学するって…。」

「誰がそんな事を？」

「え？なのはちゃんだよ？」

隣で座っていたさすがが言ってきた。

ちなみに席順なのは、アリサ、オレ、さすがの順番だ。

「いやオレは、少し親戚の所に行っていたただぞ？」

お母さんとお父さんと話し合っただけだから学校にもそう言うてあるはず。

「ちよっ！なのは、違っじゃない!？」

「にゃ、にゃはは。そうだったんだ。ごめんね！」

なのはが笑いながらアリサに謝る。

「笑いながら謝られても…(汗)」

たしかに……笑いながらだと反省してないように見える。

「でもそしたらあの時のアリサちゃんの涙はなんだったんだろうね？(ここにここ)」

「なっ…！！！！／／／／／」

すずかの言葉に顔を真っ赤にするアリサ。

「な、ななな何言ってるのよ！？すずか！！！！／／／／」

「だって劉ちゃんが留学したって聞いた時にアリサちゃん泣いてたでしょ？」

「~~~~っ！！！！／／／／な、泣いてたのはすずかだってそうじゃないっ！！！！！！」

「だって私は悲しかったもん。アリサちゃんは悲しくなかったの？」

「やっ…そ、それは…そのお………ごにょごにょ／／／／」

「え？なんて？」

「か、悲しかったわよっ！！泣いたわよっ！！！！これでいいのかしら！…うわあああん！！！！／／／／／」

／／／／／

アリサとすずかのやりとり。最後はアリサが顔を真っ赤にして泣きながら認めていた。

「じゃはは〜。」

なのは、そこは笑う所じゃない。

けど、あのアリサを手玉に取るなんて…おとなしい感じを出して、気が付かなかったが、一番この中で怖いのはすずかなんじゃないだろうか？

「〜〜〜 (ににににに)」

鼻歌を歌いながら上機嫌のすずか。

こいつは真正のドSだ……。

オレは席に座りながらすずかに改めて恐怖した。

「おお！劉じゃなか〜！！」

「おかえり！だ、大丈夫なの！？」

「なんか劉ちゃんが面接拒否の大きな病になっただって聞いたけど？」

「でもよかつたわ〜。もう治ったんでしょ？」

「うわ〜相変わらず綺麗な髪の毛だね〜！サラサラだよ〜！！」

教室に入るなりオレを見つけたクラスメイトがオレの所にやってきた。

「あのさ…オレ、病気じゃなくて少し親戚の所に行ってただけなんだけど…。」

オレはなんで休んでいる事になっているんだ？  
なのはの方を見る。

「…なのっ！！ひゅ、ひゅ〜」

驚いたなのはは口笛らしきものを目を逸らしながら吹きはじめた。  
こいつは…これで誤魔化せると思うのか？

横ではアリサとすずかも苦笑いしていた。つか、こいつ等もだ。クラスではオレは病気になっているのに、この二人の中では留學って…  
……（汗）



「言わなかった？」

「あ、ああ。そうだけど、最近テストタロツサ姉妹と一緒に転入してきたヤツなんだ。劉も気をつけたほうがいいぞ？」

吊ろうとしていた男子に聞いてみるが……最近転入してきた木下つて…アイツ…だよな。」

「はあ。ついてないや……」

「何がついてないんだ？」

オレのこぼした言葉に反応してくる一人の男。

(この声は……)  
嫌な予感とはあたるものだ。後ろにいたソイツは、オレに近づいてきた。

木下エロト<sup>タカト</sup>だ。

「はああ。」

エロトはオレの顔を見て大きなため息をつくと同時に、すごい爽やかなスマイルをする。

「やあ。俺は少し前に転入してきた木下タカトっていうんだ。よろしく。」

手を指し伸ばしてくるエロト。

(なに？握手でもしろと？)



そんなのはお断りしたい。

「はじめまして。オレは天道 劉。休学していたんだけど、今日から復学します。どうぞよろしく！」

オレはエロトの握手を無視して自己紹介する。

「ああこちらこそ夜・露・死・苦・なあ。」

エロトはオレの手を取ると、無理やり握ってきた。

「きゃー！ーッ！ー！ー！劉ちゃんに何してんのよ！？」

「今すぐその汚い手を離しなさいよ！ー！ー！」

「は、早く！早く消毒を！ー！ー！」

「まかせろっ！今から俺が貰ってきてやる！ー！」

なんだ？このエロトがオレに触れた瞬間のこいつ等の反応は……。

「ちっ！一々うるせーヤツラだな。」

そんなエロトは周りの反応に舌打ちをする。

（さすがにこの反応は…可愛そうだな。）

オレは周りを止めようとする。

……が、

「おい！その騒いでいる女子！！また着替えを覗いてやるから覚悟しとけよ！？」

「いっっやっっッ！！！！こんの、変態！！！！／／／／／」

なんだろ…同情が一気に失せた…。

「お前…そんな事してんのか？」

「ま、俺にかかれば朝飯前さ。」

オレが呆れた視線を送っているにもかかわらずに、エロトはなぜか誇らしそうに胸を張っていた。

(こいつは本当に…)

エロトから離れ、オレは席を案内してもらう。

どうやらオレが休んでいる間に席替えをしたようだ。

で、席が…

「ど、どうしてこうなった？！」

教室のど真ん中。そこがオレに用意されていた席。

「だって、劉ちゃんはクラスの共有財産だもん！！」

「そつよね〜！」

女子達が何か言ってるが正直耳に入らない。

「えっと…それで〜」

オレの右隣がアリシアで、左がすずか。後ろがアリサで前がなのは、その右隣がフェイトだ。  
なんだこの布陣は……。

「あれ？エロトは……」

お、どうやら窓際の席らしい。いいなあ……。

「どうだ？いいだろう、俺は主人公だからな。こつという席が似合ってるんだよ！」

…さいですか。

オレは軽く無視して席に座り、担任が来るのを待った。

「あれ？そういえば、フェイト達は？」

もうすぐHRが始まるのに、テストロッサ姉妹が来ていなかった。

「え？アンタ、フェイト達の事知ってるの？」

が、逆にアリサに訊ねられた。

「ああ。一応な。」

「アリサちゃん。なのはちゃんと言ってたでしょ？劉ちゃんとフェイトちゃん達はお友達だって。」

「あーそういえばそうだったわね。」

アリサって意外と忘れっぽいのかな？

「ふう…まったく姉さんのせいだよ？」

「じめんね、フェイト…。はあ…はあ…あ、劉君だあ…！」

「お？アリシ…へぶっ…！」

フェイトとアリシアが教室に来たと思ったら、アリシアがオレに飛びついてきた。

「わあ、本当に教室で劉君に会えた！」

「そ、そうだね。オレもうれしいよ。だから降りてくれる？」

「えへへ。やうだ」

「え…！？」

アリシアのオレに抱きつく力がさらに強くなる。

「ちょっと待つのーッ…！」

オレがアリシアを引き剥がそうとしていると、なのはが急に叫びだした。

「アリシアちゃん……」

「アンタ…少しやりすぎじゃないかしら？」

それに、アリサとすずかも続いていく。  
二人とも。いや、なのはを含めて三人か。三人のオーラがヤバ  
い。

「……姉さん…劉に迷惑を掛けるなら…リニスの力を借りる事にな  
るけど？」

「…っ！！」

フェイトの言葉に一瞬体を反応させるアリシア。そのままオレに抱  
きつきながら、フェイトの方を壊れた人形のように『ギギギ…』と  
音を立てて振り向く。

「……本気だよ？（にこっ）」

「~~~~ッ！！（にこにこ）」

フェイトの笑顔に顔を引きつらせながら、無言で頷くアリシア。

「は〜い！皆さん席についてくださ〜い！！」

ちょうどその時、担任の先生がやって来てその場はなんとか治まっ  
た。

「ふう…。」

「おつかれ、劉。」

休み時間、オレがひと息ついた所でフェイトがこっちに近寄ってきた。

「まったくだよ……なんでさっきの時間はオレへの質問タイムなんだよ……」

そう。さっきの授業は休んでいたオレへの質問タイムだった。しかも、その質問が……

「好きな男子は？」

「なんでそんなにイイ匂いがするの？」

「髪サラサラだけど特別な手入れ方法は？」

「好きな男子がいないなら好きな女子は？」

「私の抱き枕になって？」

といったモノばかりで、それが丸々授業一つ分行われていた。

「~~~~~」

オレが机に垂れていると、フェイトがご機嫌な様子でオレに話しかけてきた。

「なんだかうれしいな〜」

「…なにが？」

「劉と一緒に学校に通えて（にじつ）」

「あ……／＼／＼／」

フエイトの笑みにオレは顔を赤くさせる。

「劉ちゃん！今日は一緒に屋上で食べるの～～！！」

照れていると、後ろからなのはに抱きつかれた。

「はい？わ、わかったから抱きつくなよ／＼／＼（汗）」

「む～～！！」

なのははホッペを膨らませながら離れてくれる。

「ほら、そんなにホッペを膨らませないで。」

未だに膨れているホッペを指で押してみる。

すると、なのはの口から溜まっていた空気が抜けていった。

「むむむ～～！！！！」

その事にさらに顔を真っ赤にしながらホッペを膨らませるのは。

もちろん、オレはまた押す。

「もう！劉ちゃん！！！！」



さすがに我慢の限界だったのか、なのはが両手を上げて怒り出した。

「あはは。ごめん、ごめん。」

オレは笑いながら謝るが、

「笑っていたら反省の色が見えないの〜！」

(いや、それは朝のなのはも一緒じゃん……)

オレが朝の事を思い出しつつ心の中で突っ込んでいると……

「りゅ、劉……／＼／＼／」

フェイトが顔を赤くしながらオレの名を呼んできた。

そう……ホッペを膨らませながら……

「私の事も……押して？／＼／＼……あ……。」

フェイトが喋ると、もちろん口の中の空気はなくなる。

「ちょっと待ってて！／＼／」

フェイトがもう一回空気を吸い、自分のホッペを指さし……

「い、いいよ！……あう／＼／／」

後はその繰り返し……

なんだ…この可愛い生き物は？／／／／（笑

昼休み。。。

オレは、なのは、アリサ、すずか、フェイト、アリシア、エロトと一緒に屋上に来ていた。

「おお！今日はいい天気だーっ！！」

エロトが屋上に出ると、空に向かって叫び始める。まるでヒロゲの主人公を意識したかのように…。

「つか、なんでアンタがいんのよ？」

アリサがエロトに聞く。

「へへっ！俺は劉に呼ばれたんだぜっ！！」

「そ、そうなの？」

フェイトがオレに聞いてきた。

「ああ。少し聞きたいことがあってね。」

やっぱりフェイトには申し訳なかったかな？



「はぁぁ〜食べた〜」。

オレは満腹になり、その場で横になる。

「あ、食べてすぐ横になると牛になっちゃっよう?」

「牛?」

すると、さすがオレに注意してきた。

「そう。牛になっちゃっよう?」

そんな幼稚園児でも今時信じないような事をさすがは真面目な顔で言うてくる。

「これは……」

エロトが何かを言いかける……が、

エロトが何を言いたいのか、それはオレにもわかった。

それは……

【ギャップ萌】だッ!!!

朝、バスでのすずかはDSの中のDS…激Sな一面を見せていた。それが今のすずかはどうだ?

まるで子供まあ子供なんだけどのように言っている事が、朝の時とは180度変わっている。

…この破壊力は……抜群だ…。

「劉ちゃん？」

「は、はい！／／／／」

オレはその場で正座する。

「わ、わかったよ。食べた後にすぐ寝るのはやめるよ！／／／／」

「うん、うん。その方がいいよ。」

「「「「「………」」」」」

なんか皆からの視線が痛い…。  
エロトは鼻血を出していた。

「あ、フェイト？」

「ん？あ、そうだね。みんな、そろそろ時間だよ？」

屋上に備え付けの時計を見て昼休みが終わる事に気がついたアリシアとフェイト。

「そうね。そろそろ戻りましょうか？」

みんな弁当箱を片付け立っていく。

「あーっと、そうだ。オレは少しエロトと話があるからさ、皆は先に帰っていてくれ。」

「…………え！？！？……………」

「なあ、エロト？」

「エロトじゃねえよ！俺は木下タカトだ！…！」

そんな事はどうでもいい。

つか認めるよ…（汗）

《なのは、フェイト。》

《…っ！？》

《オレは今からエロトと話があるんだけど…たぶん別の惑星に行くかもしれない。だから今日は学校をこのままサボるかも…》

たぶん、エロトとなら十中八九話し合いだけじゃ済まないだろう。

《…うん。わかったの!》

《劉、気をつけてね?》

二人はそう言うと……

「さ、行こうなの!」

「そうだね、なのは。ほらすずかと姉さんも!」

「え?ちょっと?」

「なのは!待ちなさいって!」

「フエイト、腕を引っ張らないで〜!」

戸惑う三人を引きずりながら校舎に戻っていった。



「で？話ってなんだよ？」

エロトの方を向く。

そこにはすでに、ガツシユのマント状のバリアジャケットを展開したエロトがオレの前に立っていた。

第58話：なんだか今回は各ヒロインに出番があるね。（後書き）

マ「はい！58話でした！！」

キャ「ふ〜ん。この後はどうなるんでしょうね？」

マ「言うわけないだろ？（汗）」

瑠「えつと感謝コーナーだね。ユタ様、バラランシャ様、Aris  
hia様、メガネ様、仮面ライダーディケイド様、光閻雪様、龍賀  
様、月光閃火様、けーくん様、畏無様、TH・F様、毬藻様、月触  
の仮面様、夜神様、三浦一平様、いっぱい感想ありがとうございま  
した。」

ク「そして今回は出番がなかったから次回もきつと人気投票がビリ  
決定の私がお土産コーナーを。仮面ライダーディケイド様からは、  
BFと戦士デツキ

光閻雪様からは、1位と2位の3人にはお祝いに『ウエディングケ  
ーキ』

畏無様からは、モンブラン8段ケーキ、瑠璃とタマモに一位記念で  
ファイナルファンタジー  
『FF』のチョコボ

夜神様からは、瑠璃にクマのヌイグルミ、タマモに極上の油揚げ（  
一分分）、劉にメンズファッション引換券（二万円相当）を貰った  
わ。ありがとう！』

ゼ「お前は何を拗ねているんだ？（汗）」

ク『拗ねてなんかないわよ!』

フィ「逆ギレ!?!」

キャ「きゃ〜!それより見てください!この油揚げの山を!!!」

瑠「熊さんのぬいぐるみだ」

フィ「それにこの8段モンブランにウエディングケーキ!なんだかどっちも大きいわね」

マ「さて今回はゲストが来ています!ユタ様の作品『神になりし者が行く 異世界の旅』の主人公の優が来てくれました!!!」

優「やつとか」

フィ「待たせたわね〜!」

マ「ホント、すみません!」

優「ん?お前は...」

キャ「あゝ貴方は...:はあ...なるべく会いたくなかった相手ですね」

瑠「あれ?タマモは知ってるの?」

キャ「そうですね〜。神界で少しお会いした事があるぐらいです。」

ゼ『そういえば、優も『暗黒次元のハイド』の世界線にいったんだよな?』

優「行ってきたな。まあ相手にならなかつたが。」

ク『どういうこと?』

優「全員殺ってきたって事だ。」

フイ「え!?!ま、マジで?」

優「ああ。大マジだ。」

マ「どんだけだよ…。それにお前がさらに強くなる予定だってユタ様の活動報告で見たんだが……?」

優「…らしいな。俺は知らないが。」

ゼ『それ以上強くなってどうするんだ?』

ク『本当よね?』

瑠「でも強いとカツコいいよね?」

キヤ「そういう意見もありますが…この人の場合は限度ってモノがありますからね。」

優「まああの作者がどうするかだ。さて、俺は今回は帰るな。」

マ「そうか?じゃ、お土産にこのティーカップのセットを。」

瑠「私とフィオネとタマモで選んだんだよ！」

優「そうなのか？ありがとう。」なでなで

瑠「どういたしましてす／＼／＼／」

優「じゃあな。」

マ「なんつゝか、オーラが違ったよな。」

キヤ「はああ。できればもう会いたくないですね。」

フィ「そう？」

瑠「面白かったよね。」

ゼ「ま、また来てくれるだろう」

ク「そうね。その時はどれだけ強くなっているんでしょっね？」

マ「さあな。では今回はこの辺で！ー！」

第59話：なんだろう。あの世界線での事は無駄ではなかったんだなと思った。

はあ…やっぱりか。

目の前にはバリアジャケットを展開させているエロト。

「それで…話ってなんだよ？」

エロトはゼオンを構えて俺の事を睨んでくる。

殺気も混じっているみたいだけど……たいした事ないかも。

あっちのエロトのほうは何倍もすごかったな。

やっぱりあっちの世界線のヤツラはオレ達のもっと上をいった形だったんだ。

「いや、大体察しはついているだろうけど……闇の書について。」

たしかこいつはヴォルケンリッター側についているんだよな。

「あ？闇の書だあ？お前には関係ないだろうが？」

エロトは構えていたゼオンをおろし、ため息ついて続けた。

「だってよお、この世界では俺が主人公なんだぜ？お前じゃないの。だから闇の書も俺が助けてハッピーエンド。俺ハーレム。わかるか？今の計画にはお前の名前は出てこなかったら？だからお前には関係ないの。」

…こ、こいつは本気で言ってるのか？

主人公云々はともかくとして、簡単に闇の書を助けるだと…？

「一つ聞く。エロト、お前はどうかやって闇の書を助けるんだ？それにどうすれば助けた事になる？」

「そんなのはお前…助ける方法はただだけだよ、どうやってたら助けた事になるかはあれだ…リインフォースを救えばいいんだよ。」

簡単に言ってくれるな…。

「で、その救出方法はどうするつもりだ？」

「だからまだ考えてないって言ってるだろ！？大体さお前だって何も出来ないくせに…」

「オレには出来るぞ？」

「なっ!?!？」

オレの言葉に何も言えなくなるエロト。

「オレには出来るっていったんだよ。リインフォースを救う事がな。」

そう。アノ世界線で手に入れた魔法。

因果の引き金カウサリテイ・トリガーを使えば、リインフォース消滅の因果も書き換えることだって出来るはずだ。

「は、はは。デタラメ言うなよ。そんなこと出来る訳ねえだろ？」

エロトの顔に焦りが生まれる。

けど……

「それになあ。もし使えたとしてもだ…これでお前が本気で邪魔な事は確定した。」

けど…やっぱりこうなるのか…

「お前は今ここで消しておく！！この世界では俺が中心なんだからなあ！！！」

エロトがテオザケルを手から放ってくる。

いきなり中級呪文を使ってくるあたり、こいつもやっぱりチートな部類なんだと思う。

けど…やっぱり向こうのエロトとは威力が全然違う。

こっちの方が断然に規模が小さい。

オレはその規模の小さいテオザケルを横にずれるだけの最小限の回避方法でかわす。

「…で？」

「この野郎…！」

オレの言葉にエロトが額に青筋を浮かせる。

そうとうキレてるな。

…ったく。バカが…

「クソが！これはまだ挨拶みたいなものだっつーの！！！！！」

「その挨拶を避けられてたら意味がないんじゃないのか？」



「黙れーっ!!」

オレの言葉にどんどん怒り増していく。

本当にバカだ。戦いにおいて怒りは大切だけど、それによって冷静さを失ったらどうなるのかわかってない。

やっぱりコイツは向こうのエロトより格下だ。

…けど油断をしてはダメだ。

「ガンズザケル！ガンズザケル！ガンズザケル！！」

エロトが自身の周りに幾つモノ球体型のザケルを出現させていく。

「おいおい。ここは学校だぞ？」

「んな事は関係ねえ！てめえをここで始末できればなーっ！」

関係ない？学校にいるみんなは関係ないって言ってるのかコイツは？

「ちっ…フィオネ！！」

「はい。」

オレに呼ばれて速攻で目の前に現れるフィオネ。

「転移頼む。場所は適当な無人世界。」

「わかったわ…っとその前に…タマモ！出てきなさい！！」

「…っ!？」

フィオネが何も無い所に呼びかける。

すると…

空間が急に歪み始め、そこからタマモが舌を出しながら現れた。

「あちゃ〜、やっぱり貴方にはバレていましたか〜。」

「当たり前よ。…ってか、私がここに転移すると同時にアンタも姿を消したのが見えたからね。絶対に此処に来るのわかったもん。」

そういう事か。ずっと見張られていたのかと思って本気で焦った。

「おいおい。ソイツはキャス狐か？」

エロトがタマモを見て何やら驚いている。

「ああ。どうだけど?」

「ちつくしよおお!!てめえはやっぱり敵だ!!」

エロトがさらに魔力を込めはじめる。

「なんだよそれ…。まあいい。タマモ、その修復頼める?」

さっきのテオザケルで抉れた箇所を指さす。

「いいですけど〜。コレが終わったらアタシも連れて行ってくださいな?」

「いや、オレは今すぐにも転移するんだけど…」

フィオネの方も準備は完了しているみたいで、頼めばいつでも転移は出来そうだ。

「わかりました。では今すぐ速効で瞬時に音速、高速、神速で終わらせます！」

タマモが挟れている箇所を手をかざし力を込める。  
たぶん神力だろう。

すると、一瞬で挟れた箇所が直ってしまった。

「さすがだな。」

「いえいえ、では連れて行ってくださいね！」

タマモが言いながらオレに抱きついてきた。

「ちよっ！なんでそこでくっついてくるんだよ!?!」

「え、知らないんですか？誰かと転移する時は体を密着させなきゃいけないですよ？」

そんな話は聞いた事がない。

「そんなのは嘘よ！もういいわ！さっさと転移開始よ!!!」

フィオネがなんだか投げやりな感じ転移を開始した。

「よしっ。ここがいいな。」

目の前には自然も何もない。ただ荒れ狂う荒野だけがつついている世界。

「こっちの準備も完了だ！人の前でイチャイチャしゃがって…これでも喰らってくたばりやがれ！！擬似フアランクス・シフト……」

エロトが両手をこっちに向け…

「フアイアーーーーーッ！！！！！」

自身周りに形成していた球型のザケルを一斉発射してきた。

「考えたな。たしかにこれはフアランクスっぽいな。」

まあ威力の方もフェイトのよりはありそうだけど。

「でも…な。あ、タマモは手を出すなよ?」

「はい わかってますよ〜。」

タマモは一步下がりに、何処からか座布団を出してそこに正座して、手には『ご主人様マスターファイト〜』と書かれた小さな旗を持っていた。

「あ、アンタ…今何処からそんなモノを?」

うん。フィオネも驚いているけど、オレもかなり驚いている。

「まあまあいいじゃないですか〜。それより、きてますよ〜?」

タマモに言われ、前を見るといくつもの電撃がオレ目掛けて向かってきてる。

「フィオネ、いけるか?」

「問題ないわ!じゃ、いくわよ〜!」

「「ユニゾン・イン!」!」

フィオネとユニゾンして魔力を感じ取る。

「よしいい感じた。」

オレは向かってくる電撃たちに手の平を向けた。

「はっ！おまえ、そんなんじゃ死ぬ…ゼツ！！！」

エロトが擬似フランクスを撃ちながら言ってるが…

「どうだろうな？」

同時に、幾つモノ電撃がオレに着弾する。

辺りは着弾した時に出る煙で覆われて向こうからは何も見えない状態になっていた。

「はっはー！これで終わりだ！！！」

エロトがいくつが残った電撃で大きな槍を作る。

「スパーク・エンドッ！！！！！」

そして投槍。

エロトが放ったその槍は音を立てながらオレに向かってくるのがわかった。

「なんだかな〜。」

オレは向かってきた槍を片手で止めた。

瞬間に、その受け止めた風で周りの煙は四散する。

「おい…嘘だろ…?」

フランクスを片手で耐え、スパークエンドを握っているオレを見て驚きを隠せていないエロト。

「嘘じゃないよ…。これが現実だ。」

手に力を入れ、スパークエンドを破壊。

「ゼロ、セットアップだ。」

「了解だ。set up!!」

スリープモードを解除して、オレもバリアジャケットを展開させる。

「くっそお!!!!」

エロトの体に雷が落ちて、金色に光る。

「ラウザルク…身体強化か。」

身体強化を使ったエロトがオレに向かってくる。

「でも…!!」

向かってくるエロトに構えをとる。

「ユニゾンしたオレには効かないよ!!」

「知るかよ!!」

エロトがオレに近づいた瞬間足元の地面を思いっきり殴る。そして粉碎して空中に浮ぶ岩を全部拳で撃ってきた。

「ちっ!」

オレは飛んでくる岩を一つ一つ粉碎していく。

「…ふん!いつまでその岩に構ってるんだ?」

飛んでくる岩を粉碎していたら、後ろからエロトの声が響く。

「らあああ!!」

エロトはオレの顔目掛けて拳を突き出してきた。

「ふっ!!…つと、りゃああ!!」

その拳を自分の手前で叩き落とし、がら空きになったボディに一発。

「ぐはッ!?!」

一発入れられて口から空気を吐き出すエロト。

そのままよろよろと膝を地面に下ろそうとする…が、

「まだだッ!!」



オレは膝の位置にあるエロトの顔を思いっきり蹴り飛ばした。

「ぐ…ああ。」

エロトは蹴られた顔を押さえながら地面をのた打ち回っている。

「く…そ野郎があ…！」

いきなり立ち上がったと思うと、急に距離をとり魔力を溜め始めたエロト。

たぶん上級呪文を使うんだろうな。

《どうするの？》

「そうだな。クリスを使うかな。」

オレはスリープモードのクリスに魔力を込める。

『あああん！寝込みを襲うなんて…いつから肉食系になったの？劉  
ちゃんは／＼／＼』

《……………》

「しめん。やっぱりお前の出番はないわ。」

『ちょっと、ちょっと…！まって…！ごめんなさい…！』

「はあ。」

必死に謝るクリスをセカンドモードにする。

《クリスも謝るぐらいなら最初ツからやらなきゃいいのに》。

『黙りなさい！このニートが！アンタは家でおとなしく！お  
さん  
といっしょ』でも見てなさいよ！』

《なッ！そ、そんなの見てないわよッ！！！／／／》

クリスの言葉を否定するフィオネ。  
でも必死すぎるぞ。

「あゝこの娘さつき見てましたよ〜」

《コラ、そこの油揚げ！！／／／》

タマモに密告されて秘密？を暴露されるフィオネ。

『あっはははは！！フィオネ〜アンタ本当に見てたの？』

《見てないわよ！…いや見たけどさ。だって劉ちゃんがないと  
V見るしかやる事なくて、その時間も面白いものやってなかったん  
だもん！しょうがないでしょ？／／／》

ユニゾンしているけど、顔を真っ赤にしているであろうフィオネ。  
…でも……

「いや、別にいいんじゃない？オレは可愛いと思うよ？」

《え？ほ、本当に？／＼／》

「ああ。オレはそう思うよ？」

だってな。あのフィオネが暇つぶしとはいえ、見ている所を想像したら……うん。可愛いと思った／＼／

《えへへ／＼／ありがとう／＼／》

『ちよつとお！！なにそれ！？え？本当になにそれ！？』

クリス…。

『わかったわ。劉ちゃん、私も「ひよクラブ」を読もうと思って  
います！…！』

いや、思っています…って言われても…（汗

『ん、どうやら向こうの準備が出来たみたいだぞ？』

ゼロに言われ、エロトを見ると…

「てめえだけは…てめえだけは…てめえだけは………！！！」

《なにあのヤンデレ…きもい…》

たしかに。あれは、病んじやってるな。

『劉ちゃんにシカトされる…うふふ、ぞくぞくするじゃない／＼』  
こっちもこっちでおかしな事になっているし…。

「はああ。これもエロトが攻撃してもなければ、こんなおかしな事には…。クリス、ゼロ…」

『魔力変換【暴風】！』

『はいはい。Load Cartridge』

二発のカートリッジをロードする。

「てめえだけはここで潰す！！バオウ・ザケルガア！！！！！」

エロトから黄金色のでかい電撃で出来た龍が放たれた。

「やっぱりその呪文か。でもな…」

クリスに力を込めるオレ。

「その呪文に負けるオレじゃねえ！！！」

『ダイナストロア・ワルツ！！』

クリスからバオウ・ザケルガに向かって暴風で出来た魔力の塊が発射され……

「な、なにい!?!」

バオウ・ザケルガは呆気なく弾けとぶ。

ダイナストロア・ワルツはその後も勢いをなくすことなくエロトをそのまま呑み込んだ。

「はあ。こいつは本当にこんなんで闇の書を…」

「……………」

目の前には気絶しているエロト。

「まあコイツはコイツでなにやら考えているみたいだな。オレは自分にできる事をやるだけだ。タマモ〜!そろそろ帰るぞ〜!」

「は〜い わかりましたあ!ご主人様?」  
マスター

『何、色目使ってるのよ！この女狐が！』

「ささッ。こんなデバイスは放っておいて、早くアタシ達の愛の巢に帰りましょう！」

《却下よ！じゃ、私と劉ちゃんの愛の巢に転移開始！！》

「いや、それも違うだろ…（汗）」

オレはエロトをそのまま残して、地球に戻った。

第59話：なんだろう。あの世界線での事は無駄ではなかったんだなと思った。

「マ、エロトも一応はチートなんだけどな。」

「キャ、感謝コーナーです！ユタ様、光闇雪様、毬藻様、畏無様、月光閃火様、咲夜月、黒蝶様、仮面ライダーディケイド様、Arishia様、madao様、メガネ様、夜神様、紅、幽鹿様、バララシヤ様、三浦一平様、けーくん様、リオン・マグナス様、感想ありがとうございます！」

「ゼ、お土産は畏無様からは、エロトに向かって核のオンパレード、15段のホワイトチョコケーキ」

咲夜月、黒蝶様からは、なのはに《神の翼を支えし者》の3番星で登場したワンピース、フェイトに漆黒色の《ほしな歌唄》のステージ衣装&制服、ゼロにはインスタントの【カメラ】、アリスには白にふちのほうに緑で葉っぱの刺繍がしてある【ワンピース】、劉には(D、グレの)六幻<sup>ムゲン</sup>、タマモには【願いの叶うマリモ】、瑠璃には【瑠璃色の勾玉】のネックレス

仮面ライダーディケイド様からは、変態対策の爆弾

madao様からは、瑠璃&タマモにはケーキをワンホール、その他には生八橋、エロトにはルナドーパント(W映画に登場、アツチ系のイイオトコ)

紅、幽鹿様からは、神仙達の裁き『火尖槍』大神宣言『グングニル』

三浦一平様からは、エロトに「男<sup>ホモ</sup>だらけの惑星一年の旅」行きの子

ケツト

リオン・マグナス様からは、エロトに天地乖離す開闢の星、エヌマ・エリシュ劉君に  
メロダック原罪と大神宣言、ケンケニルセイバーリリイとシャナのコスチューム、悠二と  
さくらがつくったケーキをワンホールを貰った。ありがとう！』

マ「さてさて、エロトへの批判の数が半端ないです。」

フィ「アイツだからね。」

マ「でもこれからアイツはもっと、もっとはじけさせていきたい  
と思っていますー!..!」

ク『迷惑ね。』

劉「本当にな。」

マ「まあそう言っな。では、今回はお土産で何かしようと思ってい  
たのですが…」

フィ「またPC使えないの?」

マ「ああ。今日の10時くらいに使えたら感想を返せると思っけ  
どな。というわけで今回は此処までです!たくさんのお土産、本当  
にありがとうございます!皆様から頂いているお土産はすべて俺  
が脳内で使っていますのでご安心を!」

劉「何をどう安心しろと…?」

マ「うっせえ!では、次回もよろしくお願いします!..!」



**第60話：なんだか今回は無駄に疲れたよ……orz(前書き)**

はい。60話です！

前回の人気投票のお話はまだ出来上がっておりません！

え、いつになったら出来るのかは未定。

気長に待ってくれたらうれしいです！

では、60話ハジマリマ〜ス！！

第60話：なんだか今回は無駄に疲れたよ……orz

「んっッ!!」

皆さん、こつちの世界からだとおはようございます！

天道 劉です。今日はオレ、学校をサボろうと思います。

え？いきなり何を言っているんだ？

そうですね。オレもこんな事を言おうだなんて昨日までは思ってませんでしたよ。

でもね。今起きて思ったんですよ。

そろそろやばいかなあって…。

何がやばいのか。それは……

「八神 はやてと接触しとかなくちゃ……」

そう。Asも中盤…いや、終盤に入るころ。

それなのに助けだす相手と接触していないのはまずいと思った次第です。

たぶんこの時期だとはやては…病院かな？

「さつて、そうと決まったら……」

モフモフ…モフモフ

「…んっ！あふう／／／／」

「タ〜マ〜モ〜！お・き・ろーッ！…」

オレを包み込んでいる尻尾をモフモフ触ってタマモを起こす。

「あっ……ん〜あう……おひゃよづ……いじやいましゅ……」

「おはようタマモ。オレはもう起きるけど、タマモはまだ寝ててい  
いからね？」

「ふあ〜い……zzz」

頭を撫でてあげると、気持ち良さそうに欠伸をしながら再び眠りに  
つくタマモ。

「そして、フィオネ〜？」

毎朝起きると必ず居なくなっているアイツを探す。  
まあでも……

「……です〜〜!」

なのはの頭の下から這い出て来たフィオネ。

「やっぱりか。」

「うう〜、相変わらず目覚めさいあく〜」

頭を押さえながらオレの頭の上に乗る。

「ははっ。だったら……」

「違う部屋で寝るのはいわよ？」

「……………」

オレが言う前にきっぱりと言い切るフィオネ。  
そのままオレをジト目で見てくる。

「……………」

「……………(ジー)」

「…悪かったよ。だからそんな目で見ないでよ。」

オレはフィオネに謝りながらベッドから出る。

「うっ……っ」

…寒い。

さすが12月だな。

ベッドではなのはとタマモ主に尻尾だけがいたから暖かく眠れたけど、ベッドから出ると一気に寒さがオレの体を攻撃してきた。

「ほれ。劉ちゃんファイト〜！」

フィオネが頭の上から応援してくれる。

その応援に答えて、なんとか部屋を出て廊下に出る。  
すると、朝食のいい匂いがした。

「お腹すいたな〜」

「そうだね。あ、でも桃子さん達にはなんて説明するの？」

「え？私に聞くの？え〜っつと……………」

なんとかして説得したいんだけどな。

「ん〜、やっぱり正直に言っちゃえばいいんじゃない？」

「え？」

「だってここで誤魔化しても士郎さんとかにはバレちゃうと思うし」

たしかに…。高町家には人の心の中を見れるという特技があったのを思い出す。

それだったら……………」

「そうだね。正直に話せば許してくれるよね。」

「あら？何を正直に話すのかしらっ？」

「…っ！?!?!?!?!」

後ろから急に話しかけられ、びっくりするオレとフィオネ。すぐに声のした方を振り返る。

「い、いつのまに…」

そこには片手を頬にあててニコニコ笑っている桃子さん…お母さんがいた。

「え、えつと〜」

なんでだ？今の場所はまだ廊下。

さっきまではリビングから朝食を作る音が聞こえていた。

それなのに急に後ろから…リビングではなく、廊下で話しかけられる？

「???? (ニコニコ)」

お母さんは相変わらずニコニコしているだけだ。

「あ、あのさお母さん？」

「なにかしら？」

「さっきまでリビングの方に居たよね？」

「ええ。じゃないと朝食の準備が出来ないでしょう？」

お母さんはニコニコと笑顔を絶やさずに答えてくれる。  
なんだろう？この笑顔がとてつもなく怖いや…。

「じゃ、じゃあなんでここにいるの？」

しかも後ろからなんて…明らかに不可能だ。

「…さあ？（ニクニク）」

さあって……（汗

「あ、あはは。」

フィオネもお母さんの返答に苦笑しかないようだ。

「それで、何を正直に話すのかしら？」

オレもフィオネにつられて苦笑していると、今度はお母さんがさつきと同じ事を聞いてきた。

ん……………

「え、えっとね。」

さて、何て話そう。

1、実は今日午前中に女の子のお見舞いに行かなきゃ行けないから学校休んでいい？

2、実は昨日久しぶりに学校に行ったら、欲求の塊みたいな変質者に絡まれて心身ともに疲れているから今日は休んでいい？

3、なんかクラスの殆んどが変態ばっかだから休んでいい？

うん。変態っていうのはまちがってないよね。だって、男のオレにクラスの男子が群がってくるんだよ。変態だよな？

「でも女の子だって劉ちゃんに寄ってくるでしょう?」

「うん。そうなんだよ。まあオレも男だからね。別に嫌ではないんだけど…皆の目が怖くて…って!？」

「劉ちゃん…気づくの遅いよ(汗)」

気づくのが遅いって言われても…こっちは普通に会話が成り立っていると思っ込んでいたんだもん。

「それで…どうなの?(ニクニク)」

「う…」。

なんかお母さんの笑顔が若干…若干怖くなっている…かも。

「ど・う・な・の!？」

ひい…こっちはとっとと答えた方がいいかもしれない。

「ま、まあ女子もオレの所に少しは来るけど…さ(ちらっ)」

「……………(ニクニク)」

「……………っっ!?!?!?」



なんだか物凄いオーラが漂っているんですけど…(汗)

「ふふふつ。今度、その女の子たちをウチへ連れてきなさい？ウチの劉ちゃんはそう簡単には渡さないわよ」「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

「は、はいい！！」

オレはお母さんのオーラに怯み、その場で敬礼した。

「ふむ。それで劉はその娘に会いに行くために学校を？」

「はい。学校を終わってからの時間だとその娘の都合が悪くて…。」

朝食の時間。

テーブルで皆と朝食を食べている時に思い切ってお父さんたちに話してみた。

さっきはお母さんのオーラのせいでオレが何も話せなかったからね

(涙目)

でもお父さんは中々首を縦に振ってくれない。

「お願い！お父さん！！」

「しかしだな。学校は…」

「だ、ダメ…かな？(上目遣い)」

オレはお父さんの目をじつと見る。

「~~~~っ！！！！」

「お願いだよ…お父さん…(涙目+上目遣い)」

「…い、いいだろう！！！！」

オレの必死の頼み込みが通じたのかお父さんが賛成してくれた。

「ほ、ホント！？ありがとう！！！！」

「ただし！！！！」

そこでお父さんが何やら条件を出してきた。

まあ、今のオレはどんな条件でも呑むけどね。

「今度私の抱き枕になってくれ!!あ、もちろんコスプレ済みでな。」

とんでもない条件だった。

「は、はああ!?!おかしんじゃないの!?!」

オレは勢いあまって席を立つ。

「まあまあマスターご主人様、落ち着いてください。」

タマモがオレを宥める。

「だ、だってえ」

「でもその条件を呑めばOKなんですよ?」

フィオネもオレの頭の上でそんな事を言ってくる。

つか、頭の上でパンだけは食べないでくれ。パンのクズが……

「さ、どうだい?」

「あ、それはもちろん私も一緒よ」

お母さんまでその条件に入ってきた。

「そ、それなら俺だってえ!!!」

「じゃああたしも〜！」

そして恭也さんと美由希さんまで…

「私もなの〜！！！」

「いや、お前は毎朝だろ。」

なのはだけはきっぱりと断る。  
はああ。

「わかりました。なので今回は学校を休ませていただきますよ。それじゃ。」

オレは何かを言われる前に自分の部屋にいそいで戻った。

「まさかあんな事になるなんて…」

オレはベッドにダイブして天井を見上げる。

「…ったく。エロトが居なければな〜。」

そう。今回学校を休んだ理由。別に学校が終わってから行っても、はやてに問題はないはずだ。

オレ自身はすずかの友達だと言えはいいはずだしね。

ただ、学校が終わってから行くと、エロトと遭遇する確立が高くなると思った。

昨日の今日でアイツとの戦闘は正直嫌だ。

「まあでも、今日は学校を休めるんだし。」

オレはコロンと横向きになる。

「<sup>マスター</sup>ご主人様 / / / /」

そこには何故か顔を赤らめているタマモが…

「…って、なんでここに居るんだよ!？」

部屋に入ったときは一人だったのに。

オレは慌てて起き上がろうとするが、すぐにタマモに押し倒されてしまう。

「うふふ。さあ？」

「……………もうやだ。(涙目)」

なんなんだよ。朝からこんなばっかだ。

「なのはちゃんは学校に行きました。フィオネは今はリビングで寝ています。クリスとゼロも未だにスリープモードを解除していません。っていう事は……」

タマモの唇がオレの唇に近づいてくる。

「わかりますよね?ご主人様……………マスター / / / / /」

もうタマモの唇はすぐそこ。

このまま少し顔を上げればすぐにでもキスできそうな距離。

い、いったいどうしてこうなったんだ?!

「させるか!…この淫乱狐が……ッ!……!……!」

「ほっと！」

あと少しという所でアウトフレームverファイオネが部屋に乱入。  
そのままタマモにドロップキックをするが、タマモはそれを普通に  
かわしていた。

「ちっ！いい所で。」

「この女狐めえ。なに？発情期なの？」

うわぁ…なんかすごい火花がちっっているよ。  
しかもタマモは呪符まで取り出すし…

「……さっきも言ったが、どうしてこうなったんだー！ーッ?!」

「……っは！」

オレは上半身だけ起き上がらせる。

「い、今は……」

夢？

いつのまにかベッドで寝てしまっていたようだ。

「な、なんてリアルな夢なんだ……」

オレは額に掻いていた汗を拭く。

「…こいつ等のせいだったのかな？」

いつのまにかオレの隣で寝ていたタマモとフィオネ。

「ふう。さあって、そろそろはやてに会いに行かないと。」



オレは部屋の時計に目をやる。

「……………あれ？」

オレは一瞬目を疑う。

時刻… pm 12 : 30

あつれえ？午前中に行こうとしたんだけどなあ……………（汗

「ふい、フィオネ！タマモ！！」

オレは二人を揺さぶり起こす。

「アンタ…発情期なの…むにゃむにゃ」

「いつつもいつつも邪魔ばかりいい…zzz」

二人は起きる気配を見せずに寝言をこぼす。  
つか、もしかして同じ夢を見てるのか!?

「って今はどうでもいいか。ほら早く起きてよ!」

少し大きい声を出すか二人はまったく起きない。  
前にもこんな事あったよね?

「ああもう…クリス!ゼロ!」

二つのデバイスに魔力を通して、スリープモードを解除する。

『あら、おはよう。劉ちゃん。お困りのようね。』

『なんだか久しぶりだな。』

ゼロ、何も言うな。

「そうなんだよ。この二人が起きなくて…」

『そんなの簡単よ。』

オレはこの二人の事を説明するが、クリスは起こすのは簡単だとい  
う。

『その二人。今すぐに起きないと劉ちゃんが貴方たちの事を嫌い  
になるわよ。』

「え？これで起きるの？」

んなバカな。

オレがそう言おうとした瞬間……

「はい！ただいま起きました！！」

「せ、セーフですよね！？き、嫌いになってませんよね？ご主人様  
……」  
マスター

「……ま、マジかよ……orz」

こんな事で簡単に起きるなんて……

「ああ！！劉ちゃん！もうこんな時間だよ！？」

「もう、何をやっているんですか。ご主人様はあ。<sup>マスター</sup>」

え？なに？オレが悪いの？

「さ、アタシが一気にその病院に連れて行って上げますよ！！」

タマモが目を瞑り神力でオレ達を包み込む。

「え？ちよツ！い、いきなり病室！？」

「はい！ではいきますよお！！！！」

タマモが一瞬力を込めたと同時に、オレ達ははやての病室に転移した。

第60話：なんだか今回は無駄に疲れたよ……orz（後書き）

マ「どうもです！なんか頭が働かなくて何を書いているのかさっぱりなマーボーです！」

ク「大丈夫よ。さっぱりなのは元から。」

キ「ですね。では感謝コーナー！バラランシヤ様、仮面ライダー  
ディケイド様、畏無様、月光閃火様、光闇雪様、リオン・マグナス  
様、作者月詠様、紅 幽鹿様、メガネ様、黒龍様、毬藻様、三浦一  
平様、AIRS様、けーくん様、madao様、夜神様、空言天狐  
様、ブラックサレナ様、感想ありがとうございます！」

フィ「随分たくさん貰ったわね。」

マ「ああ。うれしいかぎりだよ。」

ゼ「お土産コーナーだ。仮面ライダーディケイド様からは、強制的  
に青鬼の世界に行かせるチケット、変態対策爆弾を1千兆個

畏無様からは、ビターチョコケーキ18段

光闇雪様からは、『どうしてこうなった？！ 神による転生者の輪  
廻物語』のトランプ（トランプの裏の絵柄は全員の集合写真  
そして、ハート、クラブ、スペード、ダイヤのA、Q、Kの絵柄に  
は、それぞれ瑠璃、タマモ、クリス、フィオネ。Kはそれぞれ劉に  
口づけされている構図、Jはゼロ、ババはエロト）

リオン・マグナス様からは、輪転する勝利の剣、エクスカリバー・ガラティーンダブルオークアン

夕、妖刀【悪食】、惚れ薬、リトバスのコスプレ全種類

作者月詠様からは、エロト用無味無臭性転換薬入りカレー（シヤマル特性食欲誘発剤入り）、タマモ用『東方project』の『八雲藍』のコスプレ、キャラ全員用『死ぬほど美味しいバイキング招待券』（エロト（女性版に限る））

紅 幽鹿様からは、万兵討ち果たす護国の矢『諸葛弩』

三浦一平様からは、女性陣には一騎と陽菜の手作りケーキ詰め合わせ（イチゴ、チョコ、モンブラン、抹茶、チーズ、フルーツ）、男性陣には対変態用地雷と人物転換ジュース（ぶっちゃけ中身が入れ換わる飲み物）

madao様からは、劉達にはチョコフォンデュセット、エロトには性欲抑制リング「えっちなはいけないとおもいます！」を強制装着

空言天狐様からは、エロトにザケルガ（黒いバオウ・ザケルガと同等の威）

ブラックサレナ様からは、マーボーにアメリカの空気、エロト以外の皆にはラスベガスのサイコロ、エロトにはフォーク。を頂いた。ありがとうございます！

瑠「そしてゲストさんです。」

マ「メガネ様の作品『魔法少女リリカルなのは』ある転生者の新たな世界」からコダイとレイちゃんに来てくれたぞ！！」

コ「よじ。」

レ「ヤッホー！」

フィ「なんかごめんね。遅れちゃって。」

コ「まったく。こっちはずっと待っていたんだぞ？」

瑠「本当だよな。」

マ「ごめんな、コダイ。そしてお前はなんだ、瑠璃。」

レ「ルリちゃん。ひさしぶり〜」

瑠「えへへ。久しぶり〜」

キヤ「ってコダイの腕を撫でてますよ？」

ク「一応、レイちゃんをナデナデしているだけでしょ。」

ゼ「さすが瑠璃だ。なんて思いやりのある娘だ。」

フィ「はいはい。ゼロ様相変わらずね〜。」

マ「さて、今回はたくさんデザートを買ったんだ。コダイも食べないか？」

コ「…一応貰うか。」

レ「あ！ワタシもたべたいな〜？」

ゼ『それじゃ、データにして送ってやるっ。』

ク『さっすがロリコンね!』

キャ『って、レイちゃんは別にロリコンでは…』

レ『わあい!オイシイね』

フィ『ロリの類じゃない?』

マ『そうだよな。可愛ええなあ。』

コ『おいそのロリコン作者。』

マ『い、いきなりなんだよ?後、俺はロリコンじゃない。』

コ『エロトはどうしたんだ?』

マ『綺麗にシカトですか。アイツは今は月光閃火様の所だ。』

レ『ん?ナンデ?』

フィ『なんかアイツが女性になって帰ってくるらしいのよ。』

コ『ほう…(ニヤリ)』

ゼ『なんか今、目に怪しい光りが…』

コ『いや、なんでもない。』



フィ「そして真顔に戻った。」

瑠「コダイ君カッコいいねえー!!」

コ「ん。ありがとう。」

マ「瑠璃にもこの態度。さすがお前だよ。」

フィ「まあそこがコダイのいい所なんだけどね。」

キャ「そうですねえ。アタシもいいと思いますよー!!」

コ「ありがとう…っと、そろそろ時間だ。」

マ「そうなのか?じゃ、お土産にこのミックスフルーツタルトを持って行ってくれ。」

レ「いいの?アリガト〜!!」

コ「ありがたく頂戴する。じゃあな。」

マ「よし今回はいいままでー」

フィ「皆さんこの作品で、ここはこうした方がいとかあったら教えてくださいね！」

キャ「そうですね。そういう感想はありがたいですもんね！」

マ「ああ。それは確かだ！感想、お待ちしています！！！」

瑠「頑張れ！」

ク「ま、そういう事みたいだね。お願いするわ。」

ゼ「じゃ、次回もよろしく頼む！」

第61話：何回も言うけど、初対面の人には（ry

「は〜い！病室前に到着です！」

「え？うおー！」

さすがタマモだな。あれから、目を瞑った一瞬のうちにこの病室前まで転移してしまった。  
でもさ……

「ねえタマモ。オレ靴履いてないんだけど……」

そう。部屋からここに直行したからオレは靴を履いていない。

「あちゃ〜やつちやいました。すぐに取ってきますね！」

タマモはオレにお辞儀すると転移してしまった。

「つか、今の人に見られてないよな？」

「たぶん…平気なんじゃない？」

オレは慌てて周りの様子を窺う。

幸い、この辺りは人がいな……いわけじゃなかった。  
普通に人がちらほらいる。…けど、誰もこつちを見ていない。

「ふう…ただいまです、<sup>マスター</sup>ご主人様」

タマモが靴を一足オレに渡す。

「ありがとねタマモ。それよりさ、オレ達急にここに転移してきたのに周りの人は何とも思っていないみたいなんだけど…?」

受け取った靴を履きながら、タマモに聞いてみた。

「あ、それはアタシが転移すると同時に結界を張ったからですよ。」  
『なるほどな。』

ゼロはタマモの話を聞いて感心していた。  
オレはというと、ただただ「すごい」と思っていた。

「はああ、さすがタマモね。アンタには敵わないわ〜。」

フィオネが両手を挙げて、参ったという顔をする。

『まあそれでも劉ちゃんは渡さないけどね!』

「それはどうですかねえ?」

あゝクリスとタマモの間に火花が散ってるよ〜  
まったく。こいつ等は……

「ほら、そんな所でケンカしないで病室に入るよ。」

オレは二人を注意しながら病室をノックした。  
一応フィオネはアウトフレームの状態だ。

「はあい。」

中からは女の子の声。

はやてだ。

オレははやての声を確認してからドアを開けて、中に入った。

「いらっしやうい…って、どちら様です？」

中に入ると、はやてがベッドの上でオレを見て頭に？マークを浮かべていた。

「あ、えつと…はじめまして！オレは月村すずかの友達で、天道劉って言います。隣に居るのは、付き添いのフィオネとタマモ。」

「よろしくね！」

「よろしくお願ひしますね！」

フィオネとタマモがそれぞれ頭を下げる。

「あ、はい。ご丁寧に。ウチの名前は八神はやてって言います。」

はやてもそれにつられて、その場で頭を下げて挨拶する。

「…って、アンタらの名前やのうて、どうしてウチの所に来たのかっていう意味や！」

おお！関西弁でのノリ突っ込みだ！！

オレ少し感動。

若干、おとなしかったはやてとのギャップに驚いたけど。

「……………ジー」

うっ…少しはやてからの視線が痛い…。

「…って、すずかちゃんの友達やったんやな。」

と、はやてはさっきまでの視線を止めて、オレににこっと笑いかけ  
てくる。

「は、ははは。急に来たオレも悪いもんね。ごめん。」

「いやいや、来てくれてうれしいわ。ウチもこの入院生活にはヒマ  
しとったんよ。あ、そのイスに座ってええよ。」

はやてが後頭部を掻きながらオレに座るように促す。  
よかった。なんとか仲良くなれそうかな？

オレははやての態度に少しホッとしながらイスに座る。

「それで劉君やったか？」

「…っ！…！」

オレははやての言葉に一瞬驚き、涙が出そうになる。

「ど、どないしたんや？ウチ、何かまずい事でも？」

オレの態度にはやては焦りながら聞いてきた。

いや、普通そうだよな。  
いきなり名前を呼ばれて泣きそうになるなんて。

「ち、違うんだ。オレ、いつもちゃん付けで呼ばれているからさ。」

オレを君付けで読んでくれるのはアリシアだけだ。

「だからそれが…うれしくて…うっっ」

やばい涙が…

「ああ泣いてしもうた。アカンよ？男の子がそんな簡単に泣いたら。」

はやてが優しくオレの頭を撫でてくれた。

「よしよし…あ。」

オレを撫でてくれていたはやてが何かを思い出す。

「どうしたの？」

「いやな、すずかちゃんのお友達でちゃん付けで呼ばれている男の娘を思い出したんよ。それって…」

ああそういう事が…。

「うん。たぶんそれ…オレの事だよ。」

「ほえ〜、やっぱりか。いや〜、すずかちゃんの言うとおりベప్పい  
んさんやな〜。」

そのままオレの髪を弄るはやて。

「じゃ、劉ちゃんはホンマにすずかちゃんと友達なんやな。」

「そうだよ…ってまだ疑ってたの!?!」

「そらそうや。いきなり来て「すずかちゃんと友達や〜」言っても  
なあ。信じられへんやろ。」

たしかに…。

オレだったら絶対に信じないな。

「だとしたらそんな相手を簡単に病室に入れたらダメだよ。」

「それは大丈夫や。劉ちゃんの目は綺麗な目やった。嘘を言うよう  
な目やなかったしなあ。それに、入ってきたのは劉ちゃんのほづや  
ろ?」

それを言われると痛いな。

「でもさ。そんな綺麗な目をしているオレを少しは信じてくれても  
…」

「それとこれは別や! (にににに)」

はやては笑顔できっぱりとオレに言う。  
なんだろう。



はやてには口では勝てない気がする。

「はああ。ホンマ、ウチの同居人も少しはまともな目をしてくれたらええんやけどなあ。」

はやてがオレを撫でるのを止めて、窓を見る。

同居人？

それって……

「ねえ。それって…エロトの事？」

「エロト？」

はやては誰の事かわからないみたいだ。  
そりゃそうか。

「え〜っと、木下タカトのこと？」

「おおそや、そや。なんで劉ちゃんが知ってるん？」

はやてがオレに聞いてくる。

「オレとアイツは同じ学校なんだよ。すずかからは聞いてない？」

「いや、すずかちゃんからはタカト君の話は出てけーへんで？」

「そ、そつか。」

…エロト。

お前のハーレム計画は大丈夫か…？

「まあいいや。で、アイツのあだ名の由来なんだけど、単純にエロいから。」

「なるほどなあ。たしかにタカト君…ちやう、エロトからはそういう視線を感じるわ。」

あ、エロトって言った。

「ホンマあれだけはどうかしてくれんと…ヴィータ達も気に入らんいうてるしなあ。」

やっぱヴィータ達もなのか。

「ヴィータ？」

ここでは一応知らない事にしとく。

「あーえつとな。ウチの大事な家族や。ほかにシグナム、シヤマル、ザフィーラというんやけど。」

そこではやてがヴォルケنزの話が始める。

ヴォルケنزの話をしている時のはやての顔は終始笑顔で、幸せそうだった。

「そや！もうすぐみんな来ると思うやんけど、その時に紹介したるわ！ー！」

話を終えたはやてはオレに紹介してくれるといってきた。

「それって私達もいていいの？」

ここでやっと話に入ってこれたフィオネ。

「アタシもいいんですか？」

タマモも入ってきた。

「もちろんや！！あと、そのタマモさんの耳って…」

「これですか？もちろん本物ですよ」

あ、バカッ！

「え？本物なんですか？」

「そうなんですよ〜！」

タマモが耳をぴくぴく動かす。

「わぁ、ザフィーラみたいやなぁ。」

はやてはそんなタマモの耳を見てそんな感想を洩らす。

おい、はやて。そんな事言っただいいのか？

「わぁっ！尻尾もふかふかや〜！！」

はやてはそんな事お構いなしな感じでタマモに尻尾に抱きついてい  
る。

ふっ…少し、弄ってみようかな。

「あのさあはやて〜?」

「???」

はやてが尻尾に顔をあてたままこつちを見る。

「そのザフィーラっていう【人】にもタマモみたいな耳があるの?」

「そうや。ザフィーラにも……っ!」

と、はやてがそこまで言いかけ、言葉を止める。

「そのザフィーラっていう【人】…こんな耳があるんだ?」

「そ、それは…そのっ…。」

おお、すごいテンパリようだな。

おそらくはやての中では、オレの「そのザフィーラっていう【人】」  
っっていうセリフで、ザフィーラを犬として説明しようという考えは  
消えて、人として説明をしようという考えになっているはずだ。

そうなると、あとは簡単。  
唯ひたすら弄る!

「どうなのさ〜?」

「う…あ、その…なんや。ぎ、ザフィーラは……」

……が、はやてがそこまで言いかけると、涙目になってしまった。  
やばい。やりすぎたか?



「失礼します、主はやて。」

オレがフィオネに聞くと同時に入室してきた誰か……

「あつ！！」

「…誰だてめえ？」

「ヴィ、ヴィータちゃん。」

「ん？ご学友ですか？」

「……………」

そう。皆さん判っていると思いますが、この部屋に入ってきた人物達。

「そうや。私の新しい友達や！劉ちゃん、この人達がウチの家族。シグナムとヴィータ、シャマルとザフィーラや！！！」

はやてがオレに紹介してくれる。

「は、はじめまして。オレの名前は天道劉です！こっちにいるのは

……」

オレも最初と同じ挨拶をして、すぐに四人から目を逸らす。

やばい…オレ…魔力を隠すの忘れてたよ…。

そんな不安と後悔を胸に、オレとヴォルケンスは出会った。

第61話：何回も言うけど、初対面の人には（ry（後書き）

マ「すいません！今回は簡単に。」

キヤ「感謝コーナー！毬藻様、光闇雪様、空言天狐様、龍賀様、畏無様、Arishia様、メガネ様、月光閃火様、夜神様、三浦一平様、黒龍様、マサ様、TH・F様、感想ありがとうございました」

瑠「お土産だよ！空言天狐様からは、フィオネに 夢浸食飴（食べた人は自分が望む夢を見ることが出来て、ひとりだけ別の人にも見ている夢を見せることが出来る。対象が寝ている必要はない）、劉に暗示目覚まし（音の鳴らない目覚まし。ただし、脳波に刺激を与えてセットした時間には絶対に目を覚ますことが出来る。）

畏無様からは、モンブランタワー20段

黒龍様からは、四メートルの巨大ケーキ。エロトに、フェイトが作った物体X

マサ様からは、エロトにアテナ・エクスクラメーションを貰いました。皆様、ありがとうございます！」

マ「今回はあとがきはここまで！アンケート&アドバイスありがとうございます！はやての口調でおかしい所は教えてくださいさるとうれいす！では、次回もよろしくお願ひします！」

フィ「ちなみに次話のゲストは月光閃火様&輝刃、それと…エロトが帰ってくるわ。」



瑠「その次は春お兄ちゃんだったて!!」

ク『うれしそうね。ってか、私のセリフが少ないんですけどッ!!』

ゼ『あとがきはもう締めたんだからここで終わるぞ。文句なら…俺が聞いてやるから…な?』

ク『キーーーーーッ!!!許さないわよおおおお!!!!!!』

第62話：あれ？ヴォルケンスってこんなだったっけか？（汗）（前書き）

今回もはやての口調で誤りがありましたら、報告をお願いします！

（汗）

ではあとがきのエロトはどうなる！？62話のはじまりです！！

第62話：あれ？ヴォルケンスってこんなんだっけか？（汗

さて、どうしたもんか…。

今はやての病室にて、ヴォルケンスと出くわしてから一時間ぐらいたっていた。

その間はお互い普通に喋ったりして、警戒しているオーラとかは見られない。

「それで天道はつい先日、学校に復帰したと？」

「はい。そうなんですよ。」

「おお！おいおい、この尻尾ふわふわだぞ！ギガふわだぞ！！」

「もうヴィータちゃんつたら…あ、でも私も触らせてくれますか？」

「あ、いいですよ。」

「タマモの尻尾大人気ね。」

「……………」

どれが誰のセリフかわかりますか？

たぶんわかると思うんですけど……なんだか本当に和やかなムードが流れています。

「ウチの家族と仲良くなってもらえてよかったわあ。」

はやてはそんなオレ達の様子を見て笑顔だった。

「なに？天道は剣術を習っているのか？」

「え、ええ。家が道場をやっています…。」

「そ、そうか！道場なのか！！今度行ってみよう！」

なんかシグナムの目がすごいキラキラだよ。

「なに！？しかもケーキ屋なのか！しかもアノ喫茶翠屋だって！？」

横ではフィオネとタマモがヴィータに話していた。

「あそこのシュークリームは何回か買ったわよね、ヴィータちゃん？」

「あそのこケーキははやての料理の次にギガうまだからなっ！！」

ヴィータは腕を組んでうんうん頷いている。

「うちもあそこのお菓子は大ファンや。」

「どうやら、はやても知っていたらしい。

まあ買っていたら、そりゃ知ってるか。

「よし！では軽くどうだ？」

再びシグナムを見ると、なにやら興奮した様子のシグナムが素振りしていた。

「いえ。今日は…遠慮しときます(汗)」

「そうか…。」

シグナムは相当ショックだったのか、かなり落ち込んでいた。最近は蒐集に力を入れていて中々そういった機会がないのかな？でもフェイトと戦っているわけだし、エロトだって一応は強いんだから…。

「へえ、劉ちゃんもタカト君の事知っているんですか？」

シヤマルがオレにいきなり聞いてきた。

「だって、同じ学校なんでしょう？」

後ろでフィオネが手を合わせていた。  
まあ隠す意味もないし…

「そうですよ。アイツとは…まあ、腐れ縁ですよ。ホント…」

同じ転生者って言う意味でね。  
つかさ……

「シヤマルさん…なんでオレの事をちゃん付け？」

「だってフィオネちゃんやタマモちゃんがそう呼んでいたから…」

ちらっ

「……………」

「……」

フィオネとタマモを見る。

二人は目を逸らしたり、鼻歌を歌っていた。

「はあ、いいですよ。もう慣れましたから。」

「……………」

ザフィーラがオレに寄り添ってきた。

お前は励ましてくれるのか？

「ありがとな、ザッフィー。」

「!?!?!?」

ありゃ？ザフィーラが驚いちゃった。

「よしよし。」

オレはそんなザフィーラを撫でてあげた。

「でも最初見たとき、女の子だと思いましたよ。」

「あ、アタシもだ。」

「うむ。実は私も。」

「……………」

またまたしばらく談笑していると、そんな話を話し始めるヴォルケ  
ンズ。

「マジか…orz」

馴れてますけどね。ダメージは喰らいますよ。

「あ、でも落ち込む所じゃないわよ?」

シヤマルが慌ててオレをフォローしてくるが…正直フォローではないだろ…それ。

「まあいいじゃねえか。ケーキいっぱい食えるんだし！」

ヴィータが落ち込んでいるオレの肩を組んできた。

「お、ヴィータがここまで懐くなんてな。よかったなあ劉ちゃん。」

はやてが手をぱちぱち叩く。

コンコン

そんな時、病室のドアを叩く音がした。

「はあい？」

それにはやてが答えると……

「はやてちゃん。そろそろ検査の時間よくなって、お見舞い来てたのね。後にする？」

石田先生がはやての検査の為にやってきたようだ。

「あ、オレ達もう帰りますんでいいですよ。」



オレはフィオネとタマモをつれて、外に出ようとした。

「あ、だったら、シグナム、みんなで劉ちゃん達を送ってそのまま帰ってかまへんよ。」

オレ達が病室から出ようとした時、はやてがヴォルケンスにそんな事を言い始めた。

「え？もう帰っちゃうのか？」

ヴィータがシグナムの方を見る。

「よろしいのですか？」

「ええって、ええって。ウチも検査が終わったら寝よ思ってたしなあ。」

はやてがそこ小さく欠伸をする。

「そっか。じゃ、じゃあ！明日も来るよ！」

「ありがとうな、ヴィータ。」

「えへへ／＼／」

ヴィータははやてに撫でられてうれしそうな顔をする。「  
本当にはやてに懐いているのが、見ていてわかる。」

「そうですか。では、これで失礼します。」

シグナムが一礼してオレ達のところに来る。

「そういう訳だ。私たちが送ろう。」

なぜかその時のシグナムの顔が少し…ほんの少しだがニヤリと笑ったように見えた。

「おお！ここが本当に劉の家なんだな！」

ヴィータがすごい興奮した様子でオレに聞いてくる。  
時間はもう夕方。

思ってたより、はやての所にいたようだ。

「そうだよー！ここが私と劉ちゃんの愛の巣なんだから」

『ちょっとアンタはまた何を言ってるのよー！』

「あ…！」

フィオネの言葉にクリスが大声を出すか…

『……………あ、やっぱ』

いや遅いよ…

まあたぶん普通にバレていると思うけどさ……………

「ふっ…お前が魔導師だというのは分かっていた。だから今更デバ  
イスが出てきたとしても何も思わんさ。」

…やっぱり？（汗）

「じゃ、じゃあなんでオレの事を？」

普通のこの四人ならオレの事を蒐集するはずだ。

「さあな〜？」

が、返ってきた言葉はそんなのだった。

「ん〜、なぜか劉ちゃんからリンカーコアを蒐集するのはなんだか気が引けるのよね。」

シヤマルが困った顔をしながら頬に手を当てていた。

「お前は我等の存在と…主はやての事を知っているのだろうか？それでもお前は普通に接してくれて、その間も何かを企んでいたりする目をしているわけではなかったからな。我等はお前の事を信じてみようという事にしたのだ。」

「それにだ…」

と、ここで初めてザフィーラが口を開く。

「その…タマモと言ったか？劉に手を出したらヤバそうなおーらを終始放っかけていな。」

「え？」

オレは慌ててタマ王を見る。

「あらあら？何の事ですか？」

タマ王はしらを切るようだが……。

絶対にやっていたな。まったく気がつかなかったぞ。

「まあなんにせよ。お前の事だけは信じてやるよ！」

ヴィータはそういって、歩き始めた。

「じゃ、我等は帰る。…そうだ。明日にでも家に招待しよう。」

「じゃあな。」

「待ってるわね！」

シグナムとザフィーラ、シャマルもその後が続いていった。

え……？オレ、明日八神家に行って何すんの？

第62話：あれ？ヴォルケンスってこんなだっけか？（汗（後書き））

マコでは、感謝コーナー！ユタ様、Arisshia様、龍賀様、空言天狐様、光闇雪様、畏無様、月光閃火様、夜神様、毬藻様、バラランシヤ様、仮面ライダーディケイド様、メガネ様、マサ様、リオン・マグナス様、感想ありがとうございます！！」

キャ「お土産コーナー！空言天狐様からは、エロトリンチ用に悦楽封じの手錠

畏無様からは、チョコけんぴ

マサ様からは、ひなあられと和菓子のセット、劉にアトロポスの剣、ネクロノミコン

リオン・マグナス様からは、瑠璃と劉に浴衣、聖骸布の男物のコート、マーボーにジェネシックガオガイガー、ダブルオークアンタ、エロトに性転換薬（強制使用）と天地乖離す開闢の星をエヌマ・エリシュ参十発、リオン・マグナス様の所の招待券を頂きました！ありがとうございます！

瑠「今日はひな祭りだね！」

ゼ「そうだな。よしッ！瑠璃にお雛様を買ってあげよう！」

ク「そうね。アンタはいつもどおりね。」

フィ「え〜今回のゲスト様は…月光閃火様と輝刃&…エロトです。」

月「…よう。」

輝「つれてきたぞ。」

エ「……………どうも…／＼／＼」

マ「…誰…いつ？」

フィ「私は知らないわ。こんな女の子。」

瑠「可愛いね／＼／」

ゼ「る、瑠璃もかわいいぞ！」

ク「いい加減にしろこのロリコン…！で、コイツはどっしてこんなったのよ？」

月「コイツの欲望をすべて抜き取ってみた。」

輝「…たいへんだった…」

マ「そりゃそうだよ。あんな欲望をすべて抜き取るとか…。」

キャ「でも欲望はすぐ溜まりますしね。この状態になる性転換アメを今作りました。これでエロトが暴走した時にこれを食べさせれば、この状態になるはずですよ！」

ク「アンタも相変わらずね。」

月「よくやった！」



輝「……よかった。」

フィ「なんか本当にお疲れね。」

瑠「お疲れ様です。」

輝「ありがとう（涙目）」

マ「…で、この状態のロイツはどうする？」

エ「?????」

フィ「名前は？」

ゼ「エロトじゃ…まずいよな（汗）」

ク「つか、エロトも名前じゃないわよ…」

キャ「木下エロトですよね！」

マ「木下タカトな。」

瑠「タカト君だよ。」

マ「だからそれは俺が言ったろ！？じゃ、エロ子なんてどうだ？」

フィ「馬鹿じゃないの？一回死ねば？」

キャ「ではアタシが介錯を…」

マ「いやなんでもないです。ごめんなさい。」

月「じゃ、募集してみてもどうだ？」

輝「そうだな。それが一番かもな。」

エ「な、名前……ですか？……よろしくお願いします。」

瑠「お願いします。」

フィ「でも本当に変わったわね」なでなで

エ「……んっ……／／／／」

キヤ「本当ですね」なでなで

エ「……はう……／／／／」

瑠「可愛いね」なでなで

エ「……ユ……」

全「……ユ？」

月「まずいつ！」

輝「ああ！俺の苦勞がッ！！」



月「さ、帰ろう。」

輝「ええ！？あの状態を放置！？」

月「俺にはどうにも出来そうにない…それとも？（ちらっ）」

輝「……帰ろう。」

マ「あれ？あのお二方は？」

フィ「帰ったわよ。」

キャ「じゃ、お土産を送つときですか。苺シュークリームをお送りします。」

マ「今回はエロトが大変お世話になりました。ありがとうございました！」

ゼ『それとこのエロト(女性ver)の名前を募集する。』

ク『ま、適当にいい名前をあげてね。』

フイ『適当にいい名前って…結局どっちよ？(汗)』

マ『皆様よろしく願います…!』

瑠『次回もよろしくね』

第63話：クラス仲良く一致団結！……する方向がかなり歪んでいるけど……o

皆様、アンケートご協力ありがとうございました！！

イイ名前がありすぎて決めるのに本当に苦労しましたよ（汗

瑠璃の時もそうでしたが、皆様の発想力には脱帽です。

では、63話はじまります！

あ、今回は前にコダイ君に教わったある方法を使わせてもらっています。

第63話：クラス仲良く一致団結！……する方向がかなり歪んでいるけど……

「はあ〜やつと最後の授業が終わったよ〜。」

オレは机に垂れながら伸びを軽くする。

「ん〜〜つ！！はああ。…今日は来なかったなあ。」

ちらつと窓際の席に目をやる。

いつもはその席にいるであろうソイツは今日学校を休んでいたため、今はいない。

先生も欠席理由は分からないとのことだ。

まあ理由なんて……

「未だに気絶でもしてんのかな？」

そう。

皆様はお気づきかもしれないが、ソイツとはエロトのことだ。

そして気絶とは、一昨日オレとエロトが戦闘を行った時に気絶したエロトを放置してきたことだ。

まあアイツも無駄にチートだから死んではいないだろう。

「はああ。」

すごいや。授業が終わってホームルームが始まるまでもう三回もため息をついちゃったよ。

「お、おい。今の見たか？」

「ああ。信じられないぜ……。」

「私の劉ちゃんが木下の席を見てため息をつくなんて……。」

「これってもしかや私の劉ちゃんが木下……エロトのことを……!?!?」

「いやーっ!!戻ってきて!私の劉ちゃんんツツ!!」

…なんかオレがため息ついただけでこの騒ぎとか……。  
しかもエロトって呼び方浸透し始めているし。

あ、なのは達が今の男女のグループに向かっていったな。

…そして廊下に連れ出してっつたよ。

何する気だ?あいつ等は。



「劉くん!」

そんななのは達の様子を見ると、そこから戻ってきたアリシアがオレの机の向かいで中腰になって、オレと目線を合わせる。

「今日この後ヒマ?」

『…っ!…!』

アリシアの言葉にクラスの皆がこっちを向くのがわかった。

「むむむ、許せないのっ!」

「ちっ!先を越されたわね。」

「ふふっ。まだまだ戦いはこれからだよ。」ゴロゴロゴロゴロ

「姉さん…帰ったら…どうしようかな?」ゴロっ

その中には何やらとんでもない視線が四つほど加わっているけど(汗

「ねえねえどう?私と一緒に遊ばない?」

アリシアはそんな視線を気にも留めずにオレに話しかけてきた。  
強いな…アリシア。

「いや。今日は少し用事があるんだ。ごめんな。」

「え？」

「ほ、ほら！先生が来たみたいだよ。」

アリシアに何かを聞かれる前にオレは丁度よく来た先生の事を教えて席に座らせる。

といつても、アリシアの席は隣だけだよ。

「……………」

うっ…なんだか周りの女子&男子から視線が……

「劉ちゃんが放課後に用事なんて……」

「今までそんな事なかったわよね？」

「そうよ。きっと悪い女に引っかかっているんだわ。」

「悪い男って可能性もあるわよ？」

「……………それだツツ！！！！……………」

「そっちの方も捨てきれないわね。」

「最近は幼女を襲う変質者も現れているらしいから……」

「ひどいわね。」

「ホント……世の中どうなっているのかしら……」

「「「「はあめ」「」」」」

「……………」

なんか話が脱線しすぎていてよくわからなかった。

その間、なのは達五人娘はただじっとオレの事を見るだけだし……。

「起立、礼。」

「よしッ！！！」

帰りの挨拶が終わった瞬間、オレはダッシュで教室を出る。  
が、なのはやその他クラスメイトがオレの行く先を塞ぐ。

「な、何のつもりだよ！？」

「ここは通さないの！」

「悪い男のいう事は聞いちゃだめだよ！」

なんかなのはと女子Aが言ってくるが…

「な、何を言っているのかわからない……（汗）」

さっぱりだ。

この後は八神家に行くだけだし、悪い男って……ザッフィーの事か？

「みんな勘違いしてるよ？アイツは寡黙なだけで悪い奴じゃないよ  
！！」

この言葉がいけなかったのかな？  
なんか皆の雰囲気がざわつき始めた。

「や、やっぱり…劉ちゃんを…劉ちゃんを助けないと…！」

「劉…私が助けてあげるから！」

「鮫島、今すぐここに腕利きの催眠術師を。ええ今すぐよ！」

「お姉ちゃんにいい薬貰ったんだけど…役に立ちそうかな？」

「むう、劉君は渡さないんだからーッ！！」

そして五人娘の反応である。  
殺気が増していた。

「くっ…」

ここはそう簡単には通れそうにないな…  
バレないように【アレ】を使うか。

「み、みんな…オレを…ボクを通してよ…！（涙目&上目遣い）」

『うつ…！／／／／』

「み、みんなあ／／／／（涙目&上目遣い）」

『うつ…／／／／』

皆が徐々に道を開きかける。

よし！これなら！！

「…<sup>超加速</sup>アクセルターン！！（ボソツ）」

『……………つ…！！』

オレはその空いた道を一瞬の加速で追いぬく。

「し、しまったの…！」

「やられた！劉がここで使っなんて…！」

「い、今の何！？」



「このまま学校を出て八神家まで行くか。」

アクセルターン（超加速）を持続させてまま学校を出ようとする……

が……

「あれ？劉ちゃん、久しぶり〜！」

「…っ！！」

校門を出ようとしたところで久しぶりの人物に会う。

「休学してたんだよね？もう大丈夫なの？」

オレに声を掛けてきた人物の正体はまなみだった。

「で、大丈夫なの？」

まなみはオレの事を心配そうに見つめてくる。

こっちとしては早く八神家に行かないといけないんだけどなあ……。

「だ、大丈夫だよ。それじゃ。今日は先を急いでいるんだ！」

まなみに手を振り、その横を走りぬけようとする……



が……、

ガシッ！

「久しぶりに会ったんだから少し話せないの？」

まなみに腕を掴まれ、顔を覗き込まれる。

「うっ／＼／」

昔、といっても半年ぐらい前だけど、まなみにやられた事を思い出  
し、顔を赤くさせるオレ。

《ど、どうしよう…？》

クリスとゼロに念話を送ってこの危機を脱する方法を問いかけてみ  
るが……

《すまん。俺にはわからない…。》

唯一の良心のゼロはの返答はわからない。

(ゼロが答えられないとなると……あとは、クリスか…orz)

正直、クリスには少し期待できない自分が居る。

そう思ってた。

《それだったら、もう振り切って逃げるしかないんじゃない？》

《……っ！！！》

クリスからの返答にびっくりするオレ。

なんてゆーか、クリスが普通に返答すること自体に驚いてしまう。

《まあ普通すぎるがな。》

《なによ！？何にも答えられないよりはマシでしょう！？》

ゼロの言葉に噛み付くクリスを放っておき、さっそくクリスの案……

(無理やり振りきる作戦の開始だ！)

「い、ごめんツ！今日は本当に急いでいるんだ！また今度ね！！」

「あっ！……もう……！！」

案外あっさりと振り切ることに成功したこの作戦。

『どう？私の見事なまでの作戦は？』

ああ、きつとデバイスにも顔があればドヤ顔をしているだろうなあ。

『…まあ、お前らしくていいんじゃないか？』

『今が私らしいってどういう事よ！？』

キレルクリス。

見事なまでの作戦じゃなかったのか？（汗

「やっつと…」

学校を抜けて、近くの公園に着く。

こちら辺でいいかな？

「フィオネ、タマモ〜！！」

二人の名を呼ぶと……

「はいはい！呼ばれて飛び出て……っつとっつとでやめとっつ。」

「そうしたほうがいいですよ〜」

オレの前に転移してきた。

「あ、アレ、持ってきてくれた？」

オレは朝のうちにあるモノをフィオネとタマモに頼んでおいた。

「あ、コレでしょう？」

「シュークリーム20個とチョコケーキ1ホール。」

「そうそう。二人とも、ありがとう。」

二人から荷物を受け取り、ゲイト・オフ・バビロン王の財宝にしまった。  
ホント便利だね。王の財宝ゲイト・オフ・バビロンつて。

「これだけ持って行けばヴィータも喜ぶかな？」

『十分なんじゃない？』

「むしろ食べきれるのかな？」

と、クリスとフィオネ。

まあ皆もいることだし、それに何日かに分けて食べれば問題ないはずだ。

「周りに人はいないな。じゃ、転移よろしく！」

「えっと、ああ。八神家のマンションね〜！」

フィオネが魔力でオレ達を包み込み、八神家に向けてオレ達は転移した。



第63話：クラス仲良く一致団結！……する方向がかなり歪んでいるけど……o r

マ「感謝コーナー！madao様、畏無様、仮面ライダーディケイド様、メガネ様、Arishia様、バラランシヤ様、光闇雪様、White Seal様、マサ様、ルル様、三浦一平様、作者月詠様、月光閃火様、紅 幽鹿様、夜神様、毬藻様、感想ありがとうございます！」

瑠「お土産コーナーだよ。畏無様からは、チャーハン

仮面ライダーディケイド様からは、エロトにオカマだけの世界に強制的に行かせるチケット、劉に女装を否定できる程度の能力、チーズバーガー

マサ様からは、ちらし寿司、劉と瑠璃にお内裏さまとお雛様の衣装、タマモに本物の劉と見分けが付かないほどよく出来ている人形と運命を自在に操るラケシスの天秤、某神父作マーボ、ペルソナ3のスキルハルマゲドン、マーボに春人との戦闘に備えて森羅万象と多<sup>アカシックレコード</sup>ルチタスク<sup>マ</sup>重思考

作者月詠様からは、全員用『（いつの間にか誘拐してきた）エロト（女）の涙目写真集』（裏表紙に『勝手に使用ごめんなさい』と書いてある）、全員用『マーボオリジナルキャラの【ねんどろいどぷち】』、瑠璃用『東方projectの橙のコスプレ』、マーボ用『とある魔術の禁書目録の一方通行の服』

夜神様からは、カナタ特製、稲荷寿司の山盛りを貰いました。ありがとうございます！／／／

ク『それで瑠璃ちゃんと作者はそんな格好をしていたのね。』

フィ『可愛いじゃない！』なでなで

瑠『えへへ。ありがと／＼私もうれしいな／＼／＼』

マ『ああ。俺もこの服は気に入ったよ！』

キャ『よかったですねえ！では本日のゲストさんの紹介です』

フィ『バラランシヤ様の作品『神に何度も殺された青年』から春人の登場です！』

マ『あれ？いないじゃないか？』

フィ『…？おつかしいわねえ？』

ク『寝坊でもしてんじゃないの？』

ゼ『お前じゃないんだから…』

ク『私が寝坊なんてするわけないじゃないッ！』

フィ『嘘はやめようよ…』(汗)

マ「つて今はどうでもいいだろ？それより春人がいないぞ」「ここだッ！この布野郎がああ！！！！」「…え？くほえッ！？」

瑠「あ！春お兄ちゃん！！！」

春「おっと。いきなり抱きつくと危ないぞ？」なでなで

瑠「ごめんなさい。（涙目）」

春「……っは！い、いや、大丈夫だ／＼／／」

フィ「……ロリコンね。」

春「あゝあゝ！？」

フィ「なんでもないです！」

マ「つつつう…いきなり何なんだよお前は！」

春「てめえが俺の事をロリコンなんて言うからだろうが！！！」

瑠「ひう…春お兄ちゃん、怖いよ？（涙目）」

春「わ、悪い。だから泣くな。な？」なでなで

瑠「う、うん／＼／／」



春「／／／／／」

ク『……で、ロリコンがなんだって？』

春「だからその布野郎が俺の事をロリコンっていつから……」

ゼ『それをやめさせに……か？』

春「ああ！！」

ク『アンタら二人とも真正銘のロリコン（笑）じゃない。』

キヤ「そうですねえ。変態さんですねえ」

春「その狐も何か言ったか？」

キヤ「へ・ん・た・い・さ・ん！ですねえ」

春「いい度胸じゃねえか！！おらあッ！！」

キヤ「ふふっ……」

春「……っ！！消えた？一体どこ……っ！そこかあ！！」

キヤ「あらあら？アタシの居場所が分からないんですか？」

春「ふん。こんなもの……」

マ「タマモに気を取られていいのか？」

春「なっ!?!」

マ「久しぶりだな。マーボー武器庫展開!無駄なしの弓」  
『フェイル  
ノート』!?!」

キヤ「さらに呪符・大炎天」

春「んなの知るかあ!!神殺しの魔槍!!」  
ロシギヌス

フィ「うーわー、なんか力任せにすべての攻撃を防いでいってるわね。」

ク「あ、作者が白銀を出し始めたわよ。」

ゼ「でも春人もそれを受け流していつてるな。」

瑠「春お兄ちゃんカッコいい////」

エ「……うん。かつこいい////」

フィ「あれ?エロトがまた女の子に?」

キャ「それはアタシがこの前作った飴をあげたんですよ」

エ「あの…私の名前は？」

フィ「あゝそうだったわね。」

キャ「でもあつちもなんだかそんな余裕はないみたいですね。アタシ達が勝手に発表しちゃいましょう！」

ク「では、発表するわ！この娘の名前は…」

フィ「紅 幽鹿様の【雫】に決定しました！」

雫「これが私の名前…ですか？」

キャ「そうらしいですよ。」

雫「あ、ありがとうございます。…うれしいです／＼／＼／

瑠「よろしくね、雫ちゃん。」

雫「よろしくお願いします、瑠璃ちゃん。」

フィ「その他にも素敵な名前候補がありすぎてこの駄作者は更新前まで決められずかなり悩んでいました。」

キャ「でもデイシジアはやってましたよね？」

フィ「……………あ、なんかバトルが終わったみたいよ？（汗）」

ク『まあ悩んでいたのは本当だから許してやりなさいよ。』

春「つたく。服は汚れるは血が取れねえわで最悪だ…ん？こいつは誰だ？」

瑠「栗ちゃんだよ…！」

栗「よ、よろしく願います／＼／＼」

フィ「ちなみにエロトの女verよ（ボソッ）」

春「なるほどな。」

栗「／＼／＼／＼／＼」

春「???？」

栗「……ん／＼／＼」（瑠璃の腕に抱きつく）

瑠「どうしたの？／＼／＼」

栗「…は、…恥ずかしいです／＼／＼」

春「っ！／＼／＼／＼／＼」

ゼ「おお！…瑠璃と栗があんなに密着しているぞ！…しかも顔が赤い…！」

フィ「ゼロは放置ね。それで春人？」

フィ「い、いない？」

キャ「一瞬で転移しましたね。ゲストが帰ってしまったことですしそろそろしめましょうか？」

ク「そうね。あ、バラランシヤ様のところにはさっきの瑠璃&雫……って面倒くさいわね。しずるりの写真を送るわ！」

キャ「では皆様、アンケートありがとうございましたー！」

フィ「次回の更新もなるべく急がせますんで、よろしくお願ひしますねー！」

瑠「ばいばい！／＼／＼／＼」



第64話：いざ、八神家へ！！…お邪魔します b y 劉（前書き）

今回は短いです

それでもいいという方だけどうぞ！

第64話：いざ、八神家へ！！…お邪魔します by 劉

「おう。よく来たな劉。上がれよ。」

八神家の部屋の前まで転移すると、それを感知していたのか、ヴィータとザフィーラが部屋の前でオレ達の事を待っていた。

「お邪魔します…っとその前に、はいこれ。」

オレはフィオネとタマモに持ってきてもらったお菓子類をヴィータに渡した。

「おお！！おまえ、これって…翠屋のシュークリームとケーキじゃねえか！！！！」

「そ、そうだけど。」

「よっしゃー！ツ！！！！お前はイイ奴決定だあ！！シヤマルーツ！！このケーキを切ってくれ！！」

ヴィータがオレからケーキを奪い取ると、ドタドタとリビングに走っていった。

「……………」

「あ、あんなに喜んでもらえるとは…（汗）」

「そ、そだね。」



タマモとフィオネがヴィータのテンションに若干引いていた。

「…スマンな。さ、上がってくれ。」

大型のザフィーラに案内されてオレ達もリビングに通してもらった。

「よく来たな、天道。」

「もうヴィータちゃんったら。」

「うう…、ごめん…。」

リビングではヴィータがシャマルに怒られていた。

「ああ。ヴィータの事は放っておいてかまわない。それより今日は招待したのはこっちなのにあんなにたくさんのお土産を貰って…。」

「ああいいよ。母さん達も友達になら別にいいって言ってたし。」

「友達？」

「うん。だってオレ達もう友達でしょ？」

シグナムが不思議そうに聞き返すが、なんだか今度は目を丸くしていた。

「我等が…天道とか？」



……とりあえず言いたい事は山ほどあるけどさ……  
シャマル、そういう事は本人の前以外でも言わないでね。

「そ、それでエロトは？今日学校に来なかったみたいなんだけど？」

オレはこれ以上この事には触れないようにするためにエロトの話題をふる。

「木下か？アイツならまだ帰ってきてないぞ？」

「ハッ！どっかでくたばってるんだろうよ。」

ヴィータがシュークリームを一つ頬張りながら鼻で笑う。  
アイツ、どんだけ嫌われてんだ？

「でもさそれって私達のせいじゃない？」

フィオネもシュークリームを一つ貰いながらオレに聞いてきた。

「そうだな。まだ気絶でもしてるんだろ。」

迎えに行く気はないけど。

「え？気絶ってどういうこと？」

オレ達の話聞いていたシャマルは手を挙げて聞いてきた。

…手を挙げる必要ないんじゃないかな？（汗）

「ご主人様マスターがエロトと戦ってぶっ飛ばしたんですよ」

タマモがパンチのモーションをしながら説明する。

が……、

どうやらそれがいけなかったらしい……。

「あの木下を倒したのか!？」

「うそ。木下君は私達よりも強いよ?」

「劉!おまえよくやった!!アイツの気絶しているところを見てもたかったぜ!」

「あの木下をな……」

なにやらヴォルケンスは木下を倒したことに驚いたり、……一部喜んでいた。

「シグナム達もエロトと戦ったの?」

「ああ。といつても一対一だ。」

「でもアタシ等は完敗。その時の条件でアイツを蒐集の手伝い&ここに住まわせているんだ。」

ヴィータがその時のことを思い出したのか、少し顔を歪ませる。そういうことだったのか。

それでエロトがここに住んでいると。

「それでアイツはほかに何か言ってたか？」

「木下か？アイツは闇の書を救うとか何とか訳の分からないことを言っていたな。」

闇の書を救う…か。

「具体的な方法とかは？」

「いや。そこまでは聞いてない。」

だとすると、本当にアイツはまだ何も考え付いていないのかもしれない。

「木下のことはどうでもいい。それより天道。」

シグナムは一度目を瞑り、間を空けてもう一度目を大きく開く。

「この私と模擬戦をやるう！」

……………はい？

「な、なんで…？」

「あの木下に勝ったのだらう？私はお前の力に興味がある。だから模擬戦だ！シヤマル！」

「はあ、そう言つと思つたわよ。」

シャマルがなんかため息をつきながらも魔力をクラールヴィントに通し始めた。

「え？ちよっ！！！」

オレが止めると同時にシャマルの手によってオレ達はまたもや無人世界に転移させられた。

第64話：いざ、八神家へ！！…お邪魔します by 劉（後書き）

マ、さて感謝コーナー！！ m a d a o様、A r i s h i a様、三浦一平様、畏無様、光闇雪様、けーくん様、ユタ様、仮面ライダーデイクライド様、メガネ様、バラランシャ様、紅 幽鹿様、月光閃火様、空言天狐様、マサ様、感想ありがとうございます！！」

キャ、お土産は… m a d a o様からは、ロールケーキ（プレーン、抹茶、チョコ）

三浦一平様からは、雫にシュークリームセット

畏無様からは対春人用装備《雷神》：刀の《雷切》と盾の《秘雷》、鎧の《雷壁》に靴の《雷光》の計4つ

光闇雪様からは、自家製紅茶（信慈作）

ユタ様からは、雫に世界のケーキ全セット

仮面ライダーデイクライド様からは、オーズドライバーと、全コアメダルと p s p のソフトの遊戯王 タッグフォース2と仮面ライダークライマックスヒーローズオーズ

メガネ様からは、イチゴをたっぷり使ったピンクのバースデーケーキ

紅 幽鹿様からは、マーボに魔眼レンズ、劉にスラッシュユ・ブレス、瑠璃にくまさん人形、雫に変態撃退用スタンガン（25V）

マサ様からは、あとがき限定でゼロとクリスに擬人化でできるシス

テムをいただきました。皆様、ありがとうございました。」

マ「今回はすいません！ここまでです！」

キヤ「この話は三日前から書き始めたのを今日投稿しただけですよ  
ねえ？」

マ「……言っな。」

雫「あう……わ、私の……誕生日……」（涙目）

マ「あーごめんな。今回は許してくれ。だって俺の部屋が……。」

キヤ「詳しくは活動報告で」

マ「では、次回もよろしくです！」



第65話：ヴォルケンスとの戦い。…うん。頑張ろう！（遠い目）（前書き）

今回はいそいで書いたため、まちがいがたくさんありそうです。

すみません！

では、65話はじまります！..!

第65話：ヴォルケンスとの戦い。…うん。頑張ろう！（遠い目

「ハアアアツ！！！」

「……………っ！ゼロ！」

『OK！ 発動！！』

ゼロが を発動して時を止める。

なんでこんな事になっているのか…。

前回の話を読んでくれたら分かっていると思うけど、今はヴォルケ  
ンズと模擬戦をしています。

あ、皆さん勘違いしないでくださいね？

シグナムとじゃないですよ？

【ヴォルケンス】とです！

理由は簡単。

オレがエロトより強いから。

ちなみにタマモは観戦中です。

はああ。

本当に不幸だ…。

『劉、そろそろ。』

「ああ、わかったよ。」

ゼロの合図とともに が解除される。

「よそ見している暇あんのか!？」

「ヴィータか!」

後ろからヴィータがラケーテンハンマーでこっちに近づいてきている。

「そんな直線的な動きじゃあ避けられるよ?」

オレはヴィータの攻撃をかわそうとする……

「…なっ! バインド!？」

…が、

それをさせまいと、シャマルのバインドがオレの動きを封じた。さすがは補助のエキスパートだ。さっきから回復やらバインドのタイミングがかなりうまい。

「まかせて!」

フィオネがオレを縛っているバインドに手をかざすと一瞬光り、バインドが碎け散る。

「そんなあ。」

シヤマルが少し涙目になっているのが見えた。

「くっそがああッ！！！」

その後、突っ込んできているヴィータを避ける。

「トリースオン ミネルバクライム投影開始罪の闇に犯される剣！」

一本の禍々しい形をした剣を片手に投影した。

「ふんッ！！」

シグナムがオレに近づいて、レヴァンティンで斬りかかってくる。

オレはそれを罪の闇に犯される剣で受け止めた。ミネルバクライム

「なんだその剣は？」

シグナムが押し切ろうとレヴァンティンに力を込めながら言う。  
る。

「この剣の名は罪の闇ミネルバクライムに犯される剣。今の形状はこんなに歪んでいるけど…」

オレは罪の闇ミネルバクライムに犯される剣に魔力を注ぎ込む。

すると…

「な、なんだそれは！！」

シグナムがオレから一気に離れた。

「【オレ】の魔力を通すと、こんな事もできるようになる。」

罪の闇に犯される剣ミネルバクライムの剣先は広がり、シグナムを追いかけていく。そう。これはオレが創り出したオリジナルの剣。

オレ限定の魔力を注ぎ込んで初めて起動する。

そしてその効果は……

相手に接触した全てのものを一時の間、制御不可にする。

「…捕まえた。」

「くっ…ああああああ！…！」

罪の闇に犯される剣ミネルバクライムはシグナムの足に絡まり、力を奪いつくす。

「あ、足が…動かない？」

シグナムが絡まれたほうの足を動かそうとするが、その足は見事に反応しなくなっていた。

「シグナム！」

シャマルがシグナムに近づいて何やら回復魔法を掛け始める。

「大丈夫。しばらくしたら動けるようになるから…っさー！」

いつのまにか後ろに来ていたザフィーラのパンチを避け、空いたボディに思いつきり回し蹴りを入れる。

「がああああッ!!」

ザフィーラはわき腹を押さえながら吹っ飛ぶ。

「テートリヒ・シユラーク！」

その間に接近していたヴィータの連続攻撃を避けるも、いくつか受けてしまう。

「劉ちゃん！」

「マスターご主人様！」

「心配すんな。オレは平気だ！」

攻撃を喰らった腕を抑えながらヴィータを見る。

「さすが劉だな。今の攻撃を避けられるとは思わなかった」

ヴィータはアイゼンにカートリッジを入れる。

「さすがにこのままじゃきついな。クリス起動！」

『はいよ〜！ファーストモード！』

クリスをここで起動し、罪の闇に犯される剣を消す。ミネルバクライム

「へっ、やっとデバイスの起動かよ。」

ヴィータの赤色の魔法陣を出し、ラケーテンにする。

「つつてもゼロを起動してたる？」

「武器特化のデバイスって事だよ。アイゼン！！」

「…っ！！な、なんて魔力を注ぎ込んでんだ！？模擬戦だろ！」

「これぐらいやっても劉には効かねえだろうがっよ！」

ラケーテンの噴射を利用したスピードはさらに加速していた。

「速い…けど…！」

ヴィータがオレに近づいてアイゼンを振りかぶる。

オレはその隙をついて、クリスでフェイツs t s s がやったホームランバットの要領で思いつきり腹を叩いた。

「…はッ…！」

「ごめん！」

腹を押さえて膝をつくヴィータの後ろに回り、首に手とつをして気絶させた。

「ヴィータ！」

ザフィーラがさっき攻撃を受けた所を押さえながら起き上がってくる。

そして…

「ザフィーラ！下げれ！！」

「シグナム…！わかった！」

シグナムが座った状態でシュツルムファルケンの発射準備をしていた。

「さすがだな天道…だが、ここまでだ！」

シグナムの顔がニヤリと怪しい笑みを浮かべる。

「シュツルムファルケンと相打ちできそうな魔法って何かな？」

『さあ？意外とあの魔法の突破力はバカにできないと思うわよ？』

たしかに。

「劉ちゃん！」

「…っ！しまった…！！」

どの魔法で相殺するか考えていると、またもやシャマルにバインドを掛けられた。

しかも……

「さ、三重バインド…！？」

「念には念をつてね。劉ちゃんはこれでも壊しそうだけど。」



シャルルがウインクしながら言ってきたのを見て、正直可愛いと思  
ったのは…内緒だ。

『「<sup>マスター</sup>劉ちゃん、そんな事思っている場合じゃないでしょ!？」』

……オレにプライバシーはないみたいだ。

『そのネタは前にもやったんじゃないか?』

ゼロ、お前の言いたい事もわかるが……オレはネタのつもりは一切  
ないんだよ? (涙目)

「翔けよ!隼!」

シグナムがオレ目掛けて弓を発射する。

「やばいやばいやばい……フィオネーーーーッ!……!」

「まかせて!ユニゾン……」

「……イン!……!」

フィオネがオレの胸の前に飛んできて触れる。

瞬間……

オレに放たれたシュツルムファルケンが衝突し、爆煙があがった。

「けほ……っ……さすがシグナムだね。」

《結構危なかったわ》

間一髪フィオネとユニゾンを成功させたオレはシュツルムファルケンを片手で受け止めていた。

「う、受け止めた…だと？」

「まさか…」

ジグナムとシャマルはオレを見て驚く。

「さて…これからどうする？」

シュツルムファルケンを折り、消滅させて二人に聞く。

「……ふう…。我等の完敗だな。」

「そうね。さすがだわ。」

「《ユニゾン・アウト》」

オレはフィオネと分かれ、ヴィータとザフィーラを回収する。

「二人とも問題ないな？よし、帰るか。タマモ〜！」

「はいはい〜！」

観戦していたタマモがオレの所までやってくる。

「お疲れ様でした。ご主人様。<sup>マスター</sup>ただいま転移を開始しますね！」

タマモはそう言うと、オレ達全員を八神家に転移させた。

「足の状態はどう？」

「ああ。もうすっかり平気だ。」

夜。

オレ達は八神家にて夕飯をご馳走になっていた。

「劉！お前のメシははやての次にギガうまだなあ！！！」

ヴィータが頬にご飯粒をつけた状態で言ってくる。

夕飯はオレとフィオネ、後はシャルで作った。

シャルも一緒に作ると言った時のヴォルケンスはすごい焦っていて面白かったけど、さすがにシャルが可愛そうだったので、オレの全監視を条件にお手伝いを許可された。

「ほら、ご飯粒ついているぞ？」

オレはそのご飯粒をとり、口に運ぼうとする……

「さ、させませんッ！……あむっ！」

が、

それはタマモがオレの指を啜えた事により防がれた。

「タマモ!?! な、何やってんのさ?」

「そうよ! アンタ死にたいの!?!」

『フィオネ、私を使う事を許可するわ。』

いやいやそういつ問題じゃないでしょ?

タマモはそのご飯粒を食べると、そのまま指を舐め始めた。

「ちゅ... れる... ぷちゅ...」

「~~~~っ / / / / /」

オレはタマモの口から指を引き抜く。

「あら? もうよろしいんですかあ? (にじじ)」

タマモの笑みがとても妖艶だった。

「い、いいのっ! / / / /」

オレはそっぽを向く。

「「「「.....」」」」

その光景をヴォルケンスはポカーンと呆気にとられている様子だった。

「す、すげえのを見たな。 / / / /」

「そ、そうだな。 / / /」

「いいなあ / / / /」

「……シャマル？」

それぞれ反応していたが…なんか反応の仕方がおかしい人がいるな。

「ん？そろそろ時間だな。」

時計を見ると、もう夜の8時を回っていた。

「じゃあね。今日はごちそうさま。」

「いや、こっちの方がだな。うまかったぞ。」

シグナムに褒められるとなんだかうれしいと思うのはオレだけじゃないはず。

「劉、また来いよ!」

「ああ。待っている。」

「いつでも大歓迎よ!」

「ありがとうございます!」

「じゃあね!」

オレはフィオネに頼んで、高町家に転移してもらった。





オレが帰ると高町家はカオスでした…。

第65話：ヴォルケンスとの戦い。…うん。頑張ろう！（遠い目（後書き））

マ「はい感謝コーナー！」

キャ「White Seal様、龍賀様、メガネ様、madao様、月光閃火様、光闇雪様、空言天狐様、畏無様、黒龍様、紅 幽鹿様、けーくん様、リオン・マグナス様、バラランシャ様、感想ありがとうございます」

ク「お土産は、黒龍様からは、修学旅行のお土産の八つ橋と紅葉まんじゅう

紅 幽鹿様からは、劉に慈悲を持ち氷の刃「アルマス」

リオン・マグナス様からは、劉に魔剣グラム、みんな（エロトを除き）にマーボーカレー、エロトに悠二の世界の音夢が作った殺人料理バラランシャ様からは、春人特性ロシアンシュークリーム（人数分）（どれか一つに当たりの超激辛ハバネロクリーム）、瑠璃と雫に春人特製ショートケーキ×2を貰ったわ。ありがとう。」

瑠「春お兄ちゃんからホワイトデーだつて。／／／／」

雫「うれしいです…／／／／」

フィ「アイツ、ちゃっかりこういう事にはしっかりしているのよね」

ゼ「そこがモテるんだろうな。まあ瑠璃と雫は渡さないが。」

ク『娘が二人に増えて大変ね〜。』

マ『それと、八つ橋と紅葉まんじゅう、マーボーカレーもあるぞ〜  
!』

瑠『八つ橋大好き!』

雫『あむ…ん〜おいしいですね!』

フィ『私はこのマーボーカレーもイケると思うわあ!』

ク『アンタの名前のカレーって…』

キヤ『食欲失せますね』

マ『こらー! ツー!! そのドSコンビ!! せっかく貰ったのに失礼  
だろ!?!』

キヤ『貴方のせいですよ?』

ク『そうね。謝りなさい!』

マ『え? ああ。本当に俺のペンネームのせいで…申し訳ございません  
ん! …… ってこれは何かおかしくないか!?!』

ク『そんなことないわよ。』

キヤ『ですね〜』

ゼ』……哀れだ……』

瑠「ねえねえ。これも食べていいの?」

フィ「そうね。ロシアンだからみんなで一斉に食べましょうか?」

キヤ「そうですねえ。皆さん手にとってください。い。」

マ「皆いきわたったか?じゃ、いっただっきまゝす!とその前に、  
雲、これと交換してくれ!」

雲「???いいですよ。」

マ「ではいただきます!…あんむ……うまいなあ。」

フィ「そうね〜!これも手作りかしら?」

キヤ「そう書いてありましたよ?」

瑠「お、おいひい／＼／＼／」

雫「……………」

フィ「どうしたの雫ちゃん？俯いちゃって。」

ク「これってもしかして…」

雫「……………！！！」（涙目）

ゼ「…当たったみたいだな。」

マ「はっ。俺は運が悪いからな！今回はこのよつな手を使わせてもらった。ごめんな、雫。」

雫「……………！！！」（涙目）「ブンブン」

キャ「すごい勢いで首を横に振ってますねえ。」

瑠「だ、大丈夫？」

ゼ「こんな雫を見るのは初めてだな。」

マ「まあドンマイだっつぷうう！！！！！！」

フィ「はあはあ…アンタのせいでしょうが…！！」

ゼ「と、とりあえず水だ！水と…あ！唇が腫れないように薬を…」

ク「るっさいわよ！このロリコン…！！」

キャ「はああ。なんだかすごい事になってますねえ。では、今回は

「この辺で！感想たくさんお待ちしてますね！では、次回もよろしく  
お願いします」

「マ……っく。ま、まだまだ余震は続くそうです。皆様、どうか気を  
つけてくださいね！………がはっ……」ガクッ

第66話・最近悩みが増えてきているオレですが…なにか？（前書き）

今回もちよっと…いえ、まったく何を書いているかわかりませんが、どうぞです…！



第66話：最近悩みが増えてきているオレですが…なにか？

「みんな、おはよう！」

「お、昨日は大丈夫だったか？」

「変な男に何かされたのか？」

「私、心配してたんだよ？」

「私だって！！！」

「俺達もだぞ！」

朝、教室に入ると昨日の続きなのか、みんながオレに言ってきた言葉だ。

「あ、あのさオレ男なんだけど……」

オレはみんなの言葉に突っ込みを入れつつ、自分の席に座る。

「ん？」

席について一息つくこうとすると、後ろから誰かがオレの背中を突いてきた。

「誰…ってすずか？それに……」

そこにはさすがとアリサ、フェイト、アリシアがいた。

「劉君ひどいよ！私の誘いを断ってほかの男の人と…！！」

アリシアがオレの肩を揺さぶりながら涙目にオレに訴えてくる。

それに続き……

「劉！アンタ、何か困っていることでもあるんじゃない？男の人とか、男の人とか…。」

「私、劉の助けになるよ。が、頑張るから！！」

「うん。私もお姉ちゃんと相談して護衛とかに使える爆弾を作ってもらっているんだ。（にこっ）」

いや…。何度も言うけど男の人には困っていないし。

つか、すずかさん。お姉さん…忍さんにその話をしないでくれる？  
恥ずかしいのもあるんだけどさ、その話が恭也さんの耳に入ったら  
誤解だとしても解くのにすごい時間がかかるんだよ？

オレは以前、恭也さんの誤解を解くときに、一晩抱き枕になる条件  
を呑んだ事を思い出し、涙が出そうになる。

「ん？どうしたんだ？」

オレが必死でトラウマを心の中に押し込もうとしていると、なにやら廊下から騒がしい声が聞こえてきた。

「ちょっと見てくるよ。」

オレは四人にそういい残し、廊下に出る。

「…げ。」

「あ？」

そこにいたのは昨日までは気絶していたんじゃないか説のエロトがいた。

「お前…何してんの？」

が、やっていたことが気になったオレはエロトに聞く。

だって、エロトは一人の女子生徒に詰め寄っているところだったから。

数日振りに学校に来てそりやないだろって思うぐらいの光景だ。

「何って…コイツから迫ってきたんだよ。まあ、俺ぐらいのカッコよさなら日常茶飯事なんだけどな。」

エロトはオレの方を振り返りながら何故か誇らしげに胸を張ってそう言った。

「ち、違います！わ、私は貴方が落としたハンカチを拾っただけです。」

女子生徒はエロトの言葉を違うと否定する。

「…だってよ？」

「いや。これは俺が編み出した運命の相手を見つける方法なんだ！」

エロトは女子生徒の否定を聞いていないのか、涼しげな顔で答える。  
コイツ…ついに頭でもおかしくしたのか？

「俺がハンカチを落とし、それを拾った女性。それは俺の事が気になるから俺の事を見ていて、ハンカチが落ちたのにも気づく。それを態々届けてくれる女性はまちがいに俺の運命の相手だ。」

うわ〜……

とうとうそこまでキタか。

正直脱帽ものの作戦だよ。

いつのまにかオレの隣に来ていたのはやフェイト達も顔を引きつらせていた。

「あ、一応言つとくがな。俺の本妻はお前らに決定しているんだぜ？」

エロトがなのは達にウィンクしながら指を指していた。  
それになのは達は一斉にオレの後ろに隠れる。

「お、おい。劉！邪魔だ。どけ！」

いや、そう言われましても…

オレがそこから一步隣にずれる。

「そ〜れ喰らえ！オレの愛を！！」

エロトが今度は投げキッスしてきた……。  
なんだろ？

容姿はF Aの伊織のまんまだから美形なんだよな。  
妙に投げキッスが似合っているのが癪だ。

そしてその投げキッスを避けるためにきゃーきゃー言いながらオレの後ろに隠れるのは達。

その光景を見ていた周りの反応もひどいものだった。

……が、

中には……

「さすが隊長ー!!」

「俺達にできない事を平然とやってのけるッ!!」

「そこにシビれる!あこがれるウー!!」

「アンタ…最高すぎるよ!!」

という、エロトを支持する変わり者?もいるみたいだ。  
どうやらエロトを隊長としたFFF団なるものが存在していたらしい。

オレが半年学校に居なかつただけでこんな組織が出来上がるなんて

……。

「あ、あのさエロト。」

「あ？」

エロトは再び女子生徒に迫ろうとしていたのか、不機嫌そうにこつちを振り返る。

「少し…話がある。」

「なんのだよ？俺は今いそがしいんだ。」

エロトはそう言うと再び女子生徒の方を向くが…

「……闇の書の事についてだ……」

「……」

一瞬ピクツッと体を反応させ、その場で固まる。

「……屋上でいいか？」

すると、エロトは屋上に向かって歩き出した。

みんなはエロトが居なくなっただけからなのか、徐々に教室に戻り始めたといった。

そこにはなのはとフェイトとオレだけ残る。

「そういう事だからさ。オレはエロトに闇の書について聞いてくるよ。」

二人の頭を撫でながら言うと、

「劉…闇の書のこと…知ってたんだ。」

フェイトは少し不安そうに言ってきた。

「あ、あのね。隠し事をしてたわけじゃないんだよ？その…劉には無茶してほしくなかったし、それに今は体を休めてほしかったから…」

オレの怒られるのを心配しているのか、フェイトはオレから目を逸らしながら言ってくる。

「分かっているから。それに、遅かれ速かれ、この事は知っていたさ。魔力感知とかだな。」

「そ、そっか…そうだよな。」

フェイトはオレの言葉にえへへと笑う。

「劉ちゃん、もう無茶しちゃダメなの。」

なのはもオレに言ってくる。

「分かっているって。じゃ、言ってくるよ。」

オレはもう一度二人の頭を撫でてからエロトのいる屋上に向かった。

「で？話ってなんなんだよ？」

屋上に着くと、エロトが町を見下ろしながら聞いてきた。

「もうAsが終わる…クリスマスが迫ってきているからな。お前は  
どうするのかって事だ。」



「クリスマスか。たしか三日後あたりだよな。」

「そうだ。やっぱり覚えてたか。」

「あたりまえだろうがよ。」

エロトはこつちを振り返りながらため息をつく。

「……正直、俺は未だにどうすれば闇の書を救えるのかわからねえ。」

「え？」

エロトの言葉に驚くオレ。

あのエロトがオレにこんな事を言うなんて思わなかった。

「ガツシュの術にはそういう術はねえしさ。応用しようもない。」

エロトは顔を悔しそうに歪める。

「……お前、闇の書を救えるつってたよな？」

「……ああ。」

「それは確かか？」

「……………」

正直この魔法。因果の引き金で救えるのかはどうかは分からないが  
…今オレが持っている魔法でこれが一番有効だと思っ。

カウサリテイ・トリガー

「…確かだな。まあ成功するかはその時だが、オレが持っている魔法の中ではコイツが一番有効だ。」

「…ふん」

エロトはそれを聞くと…

「それってさ、どんな魔法なんだ？」

…と聞いてきた。

言っ方がいいかな？

教えた所で何も出来ないだろうけど。

「簡単に言えば因果を操作する魔法だよ。」

「……………っ！！！！」

オレの言葉に目を見開いて驚くエロト。

「そ、そんな事できんのかよ！？」

「出来る。これを使えばたぶん、闇の書を救うことは出来ると思っ。

」

エロアはそこで黙り、再び後ろを向き、町を見下ろす。

「……今回だけだ……」

「…ん？」

それからしばらくたった時、エロトが何かをつぶやくのがわかった。

「…今回は譲ってやるよ………！！！」

エロトはそう言うと、こつちを振り向く。

その目は今まで見たことのないくらい真剣だった。

「だから、絶対に救えよ。闇の書を……！！！」

「おまえ……」

エロトは心の底からきつとそう思っているんだろう。

やっぱりこの世界に来たって事は、この世界が好きで、この世界の悲しい出来事をどうにかしようと思ってるんだろ。

だからこそ出る言葉だった。

「ああ。まかせとけよ……」

オレはエロトに笑い返す。

すると……

「お前が救わないと、俺のハーレム計画がおじゃんだしな！ハツハツハツハ〜！！」

と、急に高笑いしだした。

コイツは……。

こういう事を言うからすべてが台無しなんだ。

せっかくエロトに対する認識を改めたのに……。

はあああ。

「ああ、あとな。闇の書に俺のリンカーコアを蒐集させたから。」

「……は！？」

エロトの言っていることに本気で驚くオレ。

「だってなあ。よくSSとかでオリ主が蒐集させているのを読んでいたから……」

エロトはそこまで言うと、親指で自分の胸を指して……

「俺、この世界のオリ主だろ？」

と、すんげえ笑顔で言ってきた。

「……………蒐集した際にされた側の技を使えるのは知っているか？」

「…えゝ！？」

「それだけじゃない。お前は一応魔力ランクがEX…その強さも加わるんだぞ？」

「……………」

エロトはそこまで聞くとまた振り返ってしまった。

「…今回はお前に譲ってやるよ。」

「おい！…！」

さっきのはお前の数少ない見せ場というか、少しは好感度上がるところだぞ…？

そこのセリフを使うとか…

「ふん！そんなのは俺がなんとかする！なんせ、俺はオリ主だぜ？  
そんぐらい造作もない…！」

エロトはそう言つとセットアップして…

「じゃあな！俺は今から蒐集してくるからよ…！」

そのままどっかに飛んでいった。  
たぶん、八神家に行ったんだろう。

「……………戻るか。」

新たに増えた悩みに頭を抱えながらオレは教室に戻り…………

「劉ちゃん、もう授業始まってますよ?」

「……………めんなさい……………」

そして、普通に先生に怒られた。  
エロトについては早退と伝えておいてやった。

第66話：最近悩みが増えてきているオレですが…なにか？（後書き）

マ「66話ということですよ！」

フィ「一瞬エロトの事見直しちゃったじゃない。」

マ「アイツへの批判がマジですんごいんだ。メッセとかで何通きていることが…。」

ク「それで今回は少し見せ場を作ったって事？」

マ「まあね。でもアイツ無駄なことするんだもん。」

ゼ「ま、今回のこれで少しは見直してくれる読者様も現れるだろう。」

瑠「では感謝コーナーです。紅 幽鹿様、錬金術師？様、バラランシヤ様、メガネ様、三浦一平様、光閻雪様、毬藻様、月光閃火様、Arishia様、感想ありがとうございます！！」

雫「続きまして、お土産コーナーです。錬金術師？様からは、「青眼の饅頭」、博多明太子

メガネ様からは、宝石の様な綺麗なキャンディーの瓶詰め（イチゴやグレープなど色んな味が入っている）

光閻雪様からは、信慈とはやての合作「レインボーパフェ」

Arishia様からは、トリユフ



月光閃火様からは、フルーツキャンディーケーキを頂きました。たくさんのお土産をありがとうございます。」

マ「今回はホワイトデーだったという事でお菓子のお土産が多いな。」

瑠「うれしいね！」

雫「そうですね。」

マ「よかったなあ！瑠璃！雫！」

瑠「うん！」

雫「……………」

マ「…おい雫。目を逸らすなよ。」

雫「前回……………」

マ「え？」

雫「…前回、あんな事をしておいて……………」

ぜ『おい作者！雫に何をした！？』

マ「何にもしてないよ…！」

フィ「あのロシアンシユューでの事でしょ？」

雫「……………（じくじく）」

マ「その事か。いや〜スマン。」

キヤ「貴方はまだ懲りないんですか？」

マ「うおわ！いきなり現れんなよ！」

キヤ「作者がここまで書くのを忘れていたからでしょうっ？」

フィ「…サイテーね。」

ク「アンタ、誰に許してもらって息吸ってんのよ？」

マ「そこまですか!？」

瑠「えつと今回は紅 幽鹿様の作品『魔法少女リリカルなのは』紅  
く から、幸夜君と美鈴お姉ちゃんが来てくれましたあ！」

幸「こんにちわ〜」

美「はじめましてね」

マ「よう！ま、ゆっくりしていつてくれな〜」

キヤ「いらっしや〜いです」

幸「うわ、なにこのお菓子の山は？」

雫「ホワイトデーにと貰いました。」

美「ああ！雫ちゃんだあ。」

雫「え？」

フィ「貴方の名前は幸夜達が考えてくれたのよ。」

ゼ『そうだぞ。』

雫「え、えっと、素敵なお名前ありがとうございます。大事に使わせていただきますね／＼／＼」

マ「その言い方は少しおかしくないか？（汗）」

美「そうよ。」

幸「でも…可愛いね。」

雫「／＼／＼／」

瑠「よかったね。雫ちゃん。」

幸「瑠璃ちゃんも可愛いよ？」

瑠「ほえ…？／＼／＼／」

ゼ『おい！貴様、瑠璃たちは渡さないぞ？』

幸「え？」





フィ「え〜、今回はこの作者がご迷惑をおかけしました。」

キャ「これから、この作者に処刑を行いますので…。」

ク「じゃあ、次回もよろしくね!」

瑠「感想いっぱいちょうだいね〜!」

雫「ばいばいです。」

第67話：久しぶりの登場！…忘れていたわけではないですよ？（汗）（前書き）  
えゝ内容がごっちゃになっているマーボーです。

今、ある偉大な作者様にひかれて自分もノクターンで書いてみたい  
という欲求が…！

でも、ウチのキャラで書けるのって……いなくね？

では、67話はじまりまゝす…！

第67話：久しぶりの登場！…忘れていたわけではないですよ？（汗

クリスマスまで日数がない。

そんな中、アテネから念話で呼び出された。  
場所は公園。

なにやら声が暗かったから嫌な予感しかない。

「…あのさ、待ち合わせの時間って……」

「うん。軽く一時間を越えているわね。」

待ち合わせ時間は13:00

現時刻：14:06

とまあ、完璧に時間は過ぎていく。

『劉、念話はどうなんだ？』

「いや。さつきから試しているけどつながらないんだ。」

ゼロに言われてからもう一回試してみるが……

《「いめんね」。今の私は念話に応じることができません。しばらく待ってからもう一度お願いね……！》



「……………」

なんか妙にイラっとくる留守番？だった。

つかこれって向こうとつながっていないのかな？

念話に留守番ってあるのか？

そんなくだらない事がオレの頭の中をぐるぐる回る。

「ん~~~~」

「さ、さっきからどうしたの？」

アウトフレイムver  
ファイオネが心配そうにオレの顔を見て聞いてくる。

『ふふつ。きつと私のこの魅惑なボディに劉ちゃんの性欲が抑えられなくなりそうになっているのね！いいのよ？悩まなくて。私はいつだって劉ちゃんならウエルカムなんだから~~~~ッ！~!~!』

最近はおとなしかったクリス。

少しは成長したのかな？

そう思っていた時期がオレにもありました……………。

『お前の魅惑なボディって…劉の腕に貫かれているじゃないか。』  
汗

「そうよね〜。」

ゼロの突っ込みにファイオネもうなずく。

『はう。いあ、いやね〜！そんな大胆なことをこんな真昼間の…しかも公園で言うなんて…／＼／＼劉ちゃんの腕が…私を…つ、つつ貫く…？？／＼／＼ア〜〜〜〜ンツ！！！！／＼／＼／＼／＼／』  
クリス……。

「劉ちゃん、このデバイスは…もう…」

フィオネは顔を俯かせながら言う。  
…そうだな。

「今日アテネが呼び出したのは…クリスを受け取りに来るためだったんだな。」

『え、！？』

オレの言葉に固まるクリス。

『な、なんでよ！？』

「クリスの壊れっぷりがひどいから…その修理のために？」

フィオネが笑顔で聞き返す。

『私のどこが壊れているのよ！！つか、疑問を疑問で返すなああッ  
！……！』

『お前は十分に壊れているよ。』

『るっさいわよ！このロリコンが！アンタは人としても壊れている

くせにい！！！！！！」

『なッ！だ、誰がロリコンだぁ！！それに俺はデバイスだ！そしてなんでロリコンなんて単語が出てくるんだッ！？』

『はて…？なんでかしらね？』

「お前は本当に修理に出すか？」

なにやらクリスの中ではゼロはロリコンらしい。

一体なぜだ？

それと全国の小さい娘好きの皆様すいません。

『ゼロがロリコン…略してゼロリコン……ぶ…、ゼロリコン……っ  
くりくるわね！』

その後、クリスは何やら一人でずっとツボにはいったらしく、何度ももつぶやいては笑っていた。

「…ねえ。今の時間って……」

「うん。15:35だな。」

フィオネの言葉に時間をもう一度確認する。  
季節は冬。

「一応寒さは薄い結界みたいなのを張ってもらっているから問題はな  
いけど…」

「退屈だよな。」

そろそろ帰らないとタマモが寂しすぎて泣くかもしれない。  
たぶん皆、子供か！って突っ込みをいれるだろうけど、事実だから  
困る。

なにもおおお泣きするわけじゃない。

オレがいつのまにか居なくなっていると…

「ご、ご主人様？…ご主人様？……」

と、尻尾をたらしながら、だんだんと涙目になっていくぐらいだ。  
泣いている部類に入るかどうかは微妙だけどさ…。  
タマモならオレのことを神の力とかで探せそうなのに、こついう時  
は頭が真っ白になるらしく、まったく使えないらしい。

「はふう…お、おまたせ〜!」

急に目の前にアテネが現れ、それまで考えていたタマモのことは  
気に四散する。

「ちょっと!今何時だと思っているのよ!」

「ん?15:40ね。」

アテネは時間を確認するときよんとした顔で返す。

『約束の時間は13:00のはずではなかったのか?』

「え?」

ゼロの言葉に?を浮かべるアテネ。

「私は劉ちゃんにちゃんと午後3時に待ち合わせって言ったんだけ  
ど…?」

『『『はい…?』』』

「ご、午後…3時……？」

アテネの言葉にオレの方を向くフィオネ。

それと目はないはずなのに、何故かデバイスからとんでくる視線。

「お、オレ…てつきり13:00かと…」

穴があつたら入りたいぐらい恥ずかしい…// // //

「劉ちゃんって意外とドジツ娘よね。」

「こら！その娘の字は違つだろ？」

『やっぱり私がいなくちゃダメねえ。』

今回のクリスには何も言い返せない。

…あ。クリスが居ても遅刻したことあるじゃん。  
フェイトの時とか…。

「にしたつて、40分遅刻しているじゃない！！！！」

フィオネが再度アテネに言う。

「あ〜〜ごめ〜ん？」

そのフィオネにアテネは軽く舌をだして謝る。

「あ、アンタね〜。」

フィオネの怒りのボルテージアップ。

「あ、そうそう。今回呼び出した件なんだけど〜」

それをアテネは余裕のスルー。

さすがはフィオネ達を作った張本人。

アテネからしてみれば娘がプンスカ怒っているぐらいの感じなんだろう。

「実は〜」

「なんだよ、歯切れが悪いなあ。」

めずらしく歯切れが悪いアテネ。

「今回の闇の書事件なんだけどさ……」

アテネはそこで区切ると、決心したように一回つなずいてオレの目を見て口を開く。

「この事件が終わったら、劉ちゃんがまた違う世界線に行くことになっちゃったのよ。…ごめんー!」

……はい？

「ど、どついつ事よ!?!」

フィオネが大声でアテネに聞き返す。

「それがね。この先の未来をすくしばかり覗いてみたのよ。」

「それってアリなの？（汗）」

「うん」

なんかすごいイイ笑顔で返されたけど…  
普通にダメだろ。

「それでね。劉ちゃんはそのまま違う世界線に跳ばされちゃうの。」  
説明になってくない？

「はあ。闇の書事件が終わってからか…。で？どこの世界に？」

「ごめん。そこまでは見れなかったわ。」

そりゃそうか。

『その世界に跳ばされる前に因果の引き金カウサリテイ・トリガーを使えばいいんじゃないか？』

『そうね。その手があるじゃない。』

確かに。

跳ばされる前にその因果を書き換えれば…

「それは少し難しいわよ？」



が、アテネはそれを否定する。

「劉ちゃんは闇の書を修正するのにその魔法を使う気でしょ？」

「うん。」

「だったら、その魔法を跳ぶ時までには持続させることが出来るの？」

「う…」

「初めて使った時だって約三回使っただけで半年眠ったのよ？今回の戦いで三回以内で抑えられる自信はあるの？」

そ、それは……

「劉ちゃんなら平気だもん！」

フィオネがオレの代わりに答える。

「エロトの魔力が加わっているの？」

「うっ……」

原作ならまだしも、エロトの魔力&技が加わっている状態の闇の書の闇を倒すのは……

「…無理だな。」

まずは闇の書の意志との対戦。

フエイトが取り込まれるだろうからその救出はやての意識の覚醒。

そのために与えるダメージ。

闇の書の闇のコアを露出させる。

これだけの事を三回以内の因果操作でできるのか…。

きつと原作ならできただろう。

でも今の状態では絶対に無理だ。

今から因果の引き金を使ってエロトがリンカーコアを蒐集させる因果を消すか？

そしたらオレは意識を失い、明後日のクリスマスには目を覚ませないだろう。

それだけはダメだ。

「そんなあ。」

フィオネがアテネに詰め寄るのをやめる。

「んまあ、違う世界にいったその時は私がまた戻してあげるわよ。」

アテネはそう言うと、オレにニコツと笑いかけてくる。

「きつと、これも運命の収束なんだろうな。」

以前アテネに言われた言葉を思い出す。

「オレがその世界に跳ぶって事はきつと…その世界に必要とされているから……。あの世界線での事みたいに。オレにしか出来ない事があるのかもしれない。」

前に跳んだあの最悪な世界線。

アレは最終的にはオレが世界修正させたけど、今回もそんな感じなのかも。

「……ごめんなさいね。でも絶対に見つけ出すから。」

「ああ。期待してるよ。アテネ」

オレはそこまで話した後、アテネと別れ、公園を後にした。

「……絶対に、絶対にオレがすべて救ってみせる……!!」

「<sup>マスター</sup>ご主人様？？？」（涙目）

その頃の高町家では、一人の狐娘が崩壊しそうになっていたらしい  
……（汗）

第67話：久しぶりの登場！…忘れていたわけではないですよ？（汗（後書き）

マ「どうも〜！では感謝コーナー！光闇雪様、バラランシヤ様、龍賀様、仮面ライダーディケイド様、madao様、けーくん様、Arishia様、メガネ様、空言天狐様、AIRS様、三浦一平様、畏無様、マサ様、毬藻様、紅 幽鹿様、感想ありがとうございます！」

雫「続いてお土産コーナーです。」

ゼ「光闇雪様からは、『七色素麺』

バラランシヤ様からは、春人特製の激辛キャンディ、雫にチョコシユー

龍賀様からは、苺のケーキを人数

仮面ライダーディケイド様からは、rpgとパトリオット（無限の弾の銃）

空言天狐様からは、フルーツロールケーキ、ショートケーキ、チョコレートケーキ、抹茶と栗のショートケーキ、苺のミルクレープ（ミルクフィユの生地をクレープで作ったケーキ）

畏無様からは、瑠璃と雫とフィオネに『けいおん！』の制服

マサ様からは、フォンダンシヨコラと付け合せのコーヒー 紅茶  
ココアのセットを全員分（エロトを除くまた万が一ゲストが来てもいいようにゲスト用もある）を頂いた。ありがとう！『

ク『なにこれ？一杯貰ったじゃない。』

フィ「ひえ〜お菓子の山の出来上がりね。」

キャ「アタシはこの素麺を食べたいです〜」

瑠「コ・コ・ア〜 ココア！」

マ「…なんて歌を歌っているんだ？（汗）」

栗「…コ、ココア〜（ボソッ）」

ゼ『ん？何か言ったか？』

栗「い、いえ。何にも！（汗）」

ク『そう？』

フィ「ねえねえ。早く食べちゃわない？」

キャ「そうですよお！早く食べましょうー！」

マ「それもそうだな。それと今回はここまでに。」

ゼ『いつも貰っているばかりでは悪いからな。今回は俺達からも読者様にプレゼントを。』

ク『ずいぶん久しぶりね〜。』

マ「ああ。内容は…瑠璃&雫の二人のお風呂に入っている写真だ。湯気？そんなものはないッ！！」

ゼ「なッ！！そ、そんなの俺は聞いてないぞ！？」

マ「それと、劉&エロトのケーキの食べさせあいの写真だ。エロトが劉に膨れ面で差し出しているフォークを劉が喜んで食べようとして口を開けている写真だ。まあエロトは一応美形だからな。絵にはなっているよ。」

キャ「それは…」

ファイ「私達も…」

ク「聞いてないわよ？」

マ「……………」

瑠「こ、こんなの…いつ…／／／／」

雫「…ぜ、全然気がつかなかった…です／／／／」

マ「…では、ほしい人は感想などで教えてください！次回もよろしく〜！！」ダッシュ

「フィ、次回は春人が来るらしいわ。」



第68話：私の日常。…興味ありませんか？（前書き）

今回は久しぶり？にあの方のお話です。

自分はただこの方にO H A N A S H I Iされて無理やり書いた  
だけなんで内容のほうは責任もてません。

ではござ〜！

劉「それでいいのか作者…」

第68話：私の日常。…興味ありませんか？

みなさん、どうもお久しぶりです。リニスです。

最近出番がなさ過ぎてみなさんに忘れられたんじゃないかと思って、作者さんに私に丸々一話をくれるようお願いしました。

結果、今回は私の日常を紹介することになりました。  
ではまず……

私は基本テストタロツサ家に住んでいます。  
なので当然寝泊りもこちらでしています。

朝、目を覚ました私は速攻で台所に向かい、朝食の用意をします。  
時間は6:30

フエイト達を起こすのは7:00

その30分の間で私はトーストにハムエッグにサラダ、あとは私特  
性の野菜スープを作ります。

私が朝食を作っていると…

「ふわぁ…リニス、おはよう。」

アルフが目を覚ましてきました。

どうやら朝食の匂いで目を覚ましたようですね。

「おはようございます。さ、洗面台に行って顔を洗ってください。」

「…お〜う。」

アルフは眠そうに目を擦りながらも、言われたとおりに洗面台に向かっけていきました。

「アルフが起きたってことは時間は……そろそろですね。」

時間は6:55

朝食も五人分といっても簡単なものが多いのである程度の事はもう終わっています。

ただ問題はここから。

「まったく。毎朝起こす身にもなってほしいですよ。」

私が毎朝の習慣となりつつある、この行事。

シリシリシリッ！…！

プ〜プ〜プ〜…！…！

~~~~~

ほら。そんな事を考えていると丁度その本人達の部屋から騒音といつてもいいぐらいの目覚まし時計の音が…。

「り、リニス！結界は！？」

この音を聞きつけたアルフが洗面台からドタドタと走ってきて私に尋ねてきました。

「大丈夫です。もうすでに結界は張っていますので。」

そう。

私は毎回この音になる少し前にはこの部屋に防音結界を張って、近所迷惑を防いでいるのです。

その近所迷惑にもなる程の音になっている部屋で、私達の主達は……

「んん…んふう…zzz」

「~~~~zzz」

「劉く〜ん……ムニヤ」

平和な顔して絶賛爆睡中です。

「ま、毎度の事だけどさ、フェイト達はよくこの中で寝ていられるよね。」

「それはもう言わない約束です。」

テストロッサの血筋なのか、このお三方は一回寝ると死んだかのごとく起きる事をひたすら拒むのです。

なので、こういった空間でも平気で寝ています。

それを私たち使い魔は毎朝全力で起こしにかかるのです。

「アルフ、準備はいいですか？」

「お、おう！」

アルフはこれから戦争に行く兵隊の顔つきをしながら、手に私の元マスター、劉のハンカチを持って頷く。

「そろそろ劉の匂いもとれる頃だから今日で最後かもしれないよ。」

「問題ありません。私があとで入れ替えてきます。」

このハンカチは私が高町家へ行った時に劉の部屋から抜き取ってきたものです。

「では、いきますよッ！」

私も気を引き締めて…いざ寝室へ！

「起きてくださーいッ！！！」

私は部屋に入るとまず、けたたましい音を鳴らしている目覚まし時計すべて、計12個を止めます。

「フェイト〜！朝だぞ〜！！！」

アルフもフェイトの肩を優しく揺すって起こそうとしますが……

「それじゃあ一生起きませんよ！」

私はフェイトの肩を強く揺さぶった後に、顔に先ほどのハンカチをのせて放置します。

「これでフェイトは起きますね。あとは…」

最大の難関とって言い…

「アリシア…」

プレシアは力づくで起こせば問題ないのでそこまで起こすのに手間はありませんが、アリシアは正直言って無理です。

プレシアと違って無理やり力づくで起こすのは気が引けますしね。

「早くフェイトが起きてくれれば…！」

フェイトが起きればそのハンカチを使ってなんとかかできるのに…。

「仕方ありません。フェイトが起きるまではいつも通りにいきますか。アルフ！」

「よ、よしッ！」

アルフも起こすのに備えて腕をまくり…

「アリシア！起きてくださーいッッ！……！」

「起きろー！……！」

私たちはアリシアを全力で揺さぶりました。

「んんんんまだ…むり…zzzz」

あら？一瞬だけ意識が覚醒したような……？
すぐに寝てしまいましたけど…。

「でも今回はラッキーですよ。」

一発目でこの反応はここ半年で二回目です。
ちなみに一回目は劉が帰ってきた時の事ですよ。

「作戦、第二段階に移行します！」

私も腕をまくり、今度はアリシアを全力で搦りました。

「~~~~zzzz」

「リニス！アリシアの顔が段々とニヤけはじめたぞ。」

それでも眠り続けるアリシア。

「んん劉の匂いだんん」

フェイトの意識が少し覚醒したのか、体を起こして劉のハンカチを
鼻にあてて悦惚な表情をさせていました。

「アルフ！今すぐにフェイトを洗面台に連れて行って、顔を洗わせてください！！」

そうすれば意識は完全に覚醒するはず。

「わかった。ほらフェイト。顔を洗いに行くよ。」

「わかったあ。」

フェイトがベッドから立ち上がると同時にハンカチを回収。

「これなら…いけます！」

私はアリシアの鼻の付近にハンカチを近づけ、

「アリシア〜。今、劉が来ているんですけど〜こんなにもはしたない寝相を見られてもいいいで〜うわああああッ！！！！」……や、やっと起きましたか。」

ふう。これで一番大変な行事も終了です。

…まあ今日は楽なほうでしたが…。

「さ、早く顔を洗って朝食を摂ってください。」

「リニス〜。劉君は〜？／／／／」

未だに信じているのか、アリシアが顔を赤くさせながらたずねてきました。

ここでいえないと言えばきつと…いや、絶対にまた寝てしまいますね。

時刻は7:30

「ほら、もう時間がないんですから!」

「もう!なんでもっと早く起こしてくれなかったの!」

アリシアはいそいでトーストを頬張りながら私に聞いてきました。
というより、逆ギレしてきました。

こゝこの娘は…!

「私とアルフは何回も起こしましたよ。」

「それに劉君もいなかったし……。」

「う……っ……」

アリシアのジト目にまた罪悪感が生まれてきて、何も言い返せない私。

「ね、姉さん。早く食べないと遅刻しちゃっよっ。」

フェイトはもう食べ終わって、食器を片付けていました。
今の時刻は7:50

幸い学校からは近いので、まだ走れば間に合う時間です。
ですが……

「わー！うわぁ！！もうこんな時間！！」

それは走ればの話です。

「あむ……うぐっ……」

いそいで飲み込もうとしたアリシアはパンをのどに詰まらせながらも、スープでそれを無理やり押し流し……

「ぶはぁ……ご馳走様……！！」

と、食器もそのまま歯を磨きにいきました。

「ホント。フェイトとは正反対ですね。」

でもそこがアリシアのいい所？なんですかね。

「ほら。プレシアも！いつまでテーブルに顔を伏せているんですか？」

私の視線の先には耳を押さえながら涙目でテーブルに頭をのせているプレシアが…。

「くっ！リニス！貴方の大きな声のせいで朝から耳が痛いじゃない！！！」

「仕方ないじゃないですか！それでもしないと起きないくせに！」

この方は一体何を言っているのでしょうか？

これではまるで私が悪いみたいじゃないですか。

「それに見てみなさいよ！」

今度はプレシアが前髪をたくし上げておでこを指差す。

そのおでこは赤く腫れ上がっていました。

「どこの世界に起きないからって、毎朝魔力強化したデコピンで起こす使い魔がいるのよ！？」

「ここにいます！…！」

それからプレシアは朝食を食べながらもずっと…

「リニスのバカ！」

…など、眩いていました。

「じゃあ、行って来るねー!!」

「母さん、アルフ、リニス行って来ます。」

「あら？もうこんな時間なのね。気をつけて行ってらっしゃい。」

玄関から声がして、プレシアとアルフ、私は二人を見送ります。

「…ふう。これで少しは一息つきますね。」

私もアルフと一緒に少し遅い朝食を食べながらため息をつきます。

「お、お疲れ様だな、リニス。」

アルフは大量の朝食をかきこみながらも私に労いの言葉をかけてきてくれました。

「毎朝飽きもせずによくもまあ、アレだけ寝ていられますよねえ。」

「……………」

横でまだ朝食を摂っていたこの家の主に視線を向ける私。

「しゅ、しゅちそじつさま〜」

プレシアはそこから今までと違う速さで残っていた朝食を食べ、自分の部屋：研究室に籠もってしまいました。

「リニス〜。そろそろ時間だぞ〜?」

「んっ、そうですね。では、後はお願ひしますよ。」

私は時計を確認して、アルフにお願いする。

「わかってるって！プレシアにも伝えとくよ。まあ毎日のことだから知っていると思うけどさ。」

苦笑するアルフに掃除などの指示をして私は高町家へ向かいました。

「おはようございます。」

「おはよう、リニスさん。毎朝悪いわね。」

高町家に行き、出迎えてくれたのはお母さんの鏡の桃子さん。実質、この家の最高権力者です。

「いえいえ。私が好きでやっている事ですから。」

そう。

私は毎朝高町家に来て、お店の用意をしなければいけない桃子さん達にかわって、家事をやっています。

まあこれは私がお願いしてやらしてもらっている事なので不満など

はありません。

私はどこかでまだ劉の使い魔でいたいと願っているんでしょうね。

「じゃあ行ってくるわね〜」

桃子さんが身支度終え、お店に出かけました。
出かけ際、

「あ、今朝は劉ちゃん【だけ】お弁当を作るのを忘れちゃって、劉ちゃんも今朝は【何故か】寝坊をして慌てて出て行ったから、お弁当を忘れてた事も気づいてないかもしれないから作って届けてくれるかしら?」

と桃子さんが笑顔で教えてくれました。

「ありがとうございます、桃子さん。」

私は桃子さんにそつとお礼を言いながら、高町家のリビング格に向かいます。

そこには……

「あ、リニスおはよう。」

「おはようございます〜」

二人で仲良くソファに座ってテレビを見ているフィオネとタマモ。

「貴方達は……はあ。おはようございます。」

この光景も毎朝のことなので私はなるべく気に留めないようにして、まず洗面所に向かいます。

「さすが高町家ですね。」

人数が人数なので洗濯物が山になっていました。

「ん？」

その山の中から私はある物を見つける私。

「こ、これは……!」

手に取ったのは一枚のTシャツ。

まちがいなく今朝の訓練で劉が着ていたであろう代物です。

「……………」

私は周り確かめ、誰も居ないことを確認します。

「……………いいですよね？」

私は私自身に了承をとり…

「……………ん、はあ、劉の匂いがします……／＼／＼／＼／」

しばらく私はその場で劉の匂いを楽しみました。

「さ、さて。洗濯物は済んだことですし、次はお掃除ですね！／／
／／」

気がつけば20分もの間、私はあのような行為を…／／／

「しょうがないですよ。劉の匂いは人を癒す力があるのですから
！／／／」

たしか前に劉のクラスメイトもそのような事を言っていたと聞きました。

私も劉を抱き枕にしたいですツ！

「……これじゃ私…ただの変態さんみたいじゃないですか…」

そこからは名誉挽回のために私はただ一心不乱で掃除を始めました。

「はい！その二人はそこから退いて下さい！！」

「わ、わかりました〜!!」

「今日のリニスは纏っているオーラが違いますっ!!」

そりゃそうです。

せっかくの私のお話なのに、読者の皆様が私を変態だと思っただけの話になったら…報われませんからね!

「とりゃあああ!!!!」

「り、リニスが壊れた〜!!!!」

「はぁ…はぁ…どうです…?」

高町家の部屋&道場の掃除…これ等を2時間で終わらせました。

「ど、どうしちゃったんですか?」

「今日のリニスは気合の入りがおかしいわよ？」

「う…わ、私にも色々あるんです！／／／／」

二人を軽く受け流し……

「それより少し汗をかいてしまったのでお風呂に入らせていただきますね。」

私はお風呂を借りることにしました。

別にお風呂は毎回借りていることなので何の問題もありません。というより、これは桃子さんからのご褒美みたいなものです。

「~~~~」

今着ている衣類を脱ぎながら、少しお腹を確認。

「ん〜、ちょっとは引つ込みましたかね〜？」

お腹をさすって確認してみるがたいして変わっているようには見えない。

「ま、まあまだまだこれからですね！」

私はそこで浴室に入り、顔、頭、体の順に洗い…

「ふうう。極楽ですね〜！！」

一気に体を浴槽に沈めました。

「昼間からのお風呂っていうのも贅沢ですね。」

ちやぶちやぶとお湯で遊びながら考える。

「あの時…劉が私と契約してくれなかったら、今この幸せはなかったんですよね…」

プレシアに契約を切られ、私はもうフェイトを見守ることしか出来なかった。

プレシアに傷つけられ、ボロボロになりながらも頑張るフェイト。最初は私も見守っていましたが、ボロボロになっていくフェイトを見ていくうちに段々と見守ることが…つらくなっていった。

誰かあの娘の事を助けてほしい。

誰かあの娘の力になってほしい。

私はいつしか願うようになっていた。

そんな時だった…彼が現れたのは……。

そう。私の元マスターの天道 劉。

女の子だと思っていた私は劉が男と知ってかなり驚いたのを今も覚えてる。

だが、そんな劉はフェイトを救ってくれた。

フェイトを手伝ってくれて、プレシアの目を覚まさせ……なにより、フェイトに笑顔を与えてくれた。

劉は本当の意味でフェイトを救ってくれた。

そんな劉に私は本当に感謝している。

そしてそんな劉だから…私は彼の事を好きになってしまったんだろ
う…／／／

彼が与えてくれたこの幸せ。私はこの幸せを大切にしていきたい。

「リニス〜！お腹すいた〜！」

「アタシも空きました〜！！」

私が湯船に浸かって考え事にふけていると、フィオネとタマモが私にそう言ってきた。

はああ。まったく、あの娘たちは…

「はいはい。わかりましたから少し待っていてください。」

すっかり腹ペコになっている二人のために私は急いでお風呂から出て、リビングへと向かいました。

「今から余りものですが、素麺を茹でるので待っていて下さい。」

「はい！！！！」

返事だけは立派なんですから。

私はお湯を沸かして素麺を茹で始め、その間にみりん、しょうゆ、だし、素でつゆを作ります。

「しそやねぎもあつたほうがいいですね。」

それらの食材を切っていく、季節外れの素麺の完成です。まあ余りものと言っているわけですし……いいですよ？

「はい。お二人ともできましたよ。」

「わ〜い！ いったただつきま〜す」「

ホント。

こういう時は息があっついていて姉妹みたいですね。

「ゆっくり食べるんですよ〜」

時計を見ると、時刻は12時を少し過ぎたあたり。

「もうすぐ劉もお弁当の時間ですね〜……………」

あれ？

私：何かを忘れていませんか？

今朝、玄関先で桃子さんの言われた事を思い出す。

《あ、今朝は劉ちゃん【だけ】お弁当を作るのを忘れちゃって、劉ちゃんも今朝は【何故か】寝坊をして慌てて出て行ったから、お弁当を忘れてた事も気づいてないかもしれないから作って届けてくれるかしら？》

「……………」

私は嫌な予感がして、いつもお弁当箱が置いてある棚を見る。

「……………大変です。」

そこには劉だけのお弁当箱がしっかりと置いてありました。

「私とした事が……………!!」

いそいで冷蔵庫の中を確認。

お弁当に使えるそうな材料はたくさんありますね！

よかったです。

「では私の愛情を込めたお弁当を作りましょうか。」

目標は約20分。

「あ、案外やれば出来るものですね。」

私の目の前には劉への愛妻弁当。

「さっそく届けましょうか。二人とも、私は劉にお弁当を届けてくるので！」

二人は聞いているのかどうか分からない様子で素麺を食べていました。

「転移：聖祥大学付属小学校屋上！」

速攻で転移魔法の術式を組み、周りの目を気にせずに私は転移した。

「まだ授業中でよかったです。」

転移した後、冷静さを取り戻した私はその場で深く反省しながら、チャイムが鳴るのを待ちます。

しばらく待ち…

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、お昼休みの開始を知らせてくれました。

「急がないと、購買に行ってしまうかもしれません！」

劉の魔力をたどり、劉がいるであろう教室に神速で駆け込みました。

「劉！！お弁当を届けにきましたよ！」

「うおー！、リニス…！？」

おっと。劉が驚いてしまいましたね。

「コホン。劉、忘れたお弁当を届けにきましたよ。」

劉に近づき、机の上に作りたてのお弁当をのせる。

「ありがとうりニス。でもそんなに急がなくても念話で知らせてくれればよかったのに。」

「え、！？」

…固まりました。

「ふふっ。どうです？」

今回は私から劉への愛を形にしようと思い、ごはんに上に桜でんぶでハートを作りました。
ありきたりですが、ストレートでいいと思って、あえてこれにしましたが…どうやら効果は抜群のようですね！

「劉ちゃん…」

「…これはどういふことなの？」

「私たちがいるのに…」

「ま、まさか…」

「リニスさんと…？」

ん？どうやらなのは、すずか、フェイト、アリシア、アリサの様子が変ですね。

「ち、ちがうよ！誤解だよねリニス？」

あらあら。

劉が慌ててこちらに話を振ってきましたね。

第68話：私の日常。：興味ありませんか？（後書き）

マ「はい。感謝コーナーです！仮面ライダーディケイド様、三浦一平様、Arisshia様、光闇雪様、バラランシヤ様、畏無様、マサ様、けーくん様、龍賀様、毬藻様、ばっど様、メガネ様、mad a o様、月光閃火様、錬金術師？様、感想ありがとうございます！」

ゼ「お土産コーナーだ。仮面ライダーディケイド様からは、シヨコラケーキと遊戯王の黄金の卵パン

光闇雪様からは、七色シリーズの『煎餅』

バラランシヤ様からは、激辛ブート・ジヨロキアスープ99 & マーボーに激辛キャンディ100個を口の中に直接転送。マーボー以外にはチョコレートパフェ。クリスマス&ゼロには擬人化プログラム。

畏無様からは、ホットミルクココア（人数分）

マサ様からは、マシユマロとプリン&エミヤの英霊召喚カード

龍賀様からは、アルクの五千倍以上の月落とし

錬金術師？様からは、エロトに殺人料理、劉達には咲夜の作った料理（アイス等菓子類が主）を頂いた。ありがとう。』

フィ「そしてゲストの紹介です！」

キャ「バラランシヤ様の作品『神に何度も殺された青年』から春人と夏奈ちゃんが来てくれました〜」

春「喰らえ！絹ごしーツ！〜」

マ「うおっと〜！」

夏「い、今のをよけれりゅ〜あう〜噛んじやいました〜。」

雫「あ、あの…」

夏「雫ちゃん？」

雫「わ、私も…一緒に…いいです、か？／／／」

夏「もちろんだよ！一緒に遊ぼう。」

雫「…はい／／／」

フィ「こっちはこっちで楽しそうね。」

キヤ「お土産のケーキがものすごい勢いでなくなっていますね！」

ゼ『可愛いから許す！』

ク『私たちが擬人化プログラム貰ったんだから後で食べましょう。』

マ「らああ…！」

春「…っ！効かねえよ！」

マ「『対春人用装備《雷神》』！」

「!」

春「ちっ…」

マ「……な、なんとか秘雷と雷壁のおかげで…い、命だけは助かった…」

春「ったく。しぶとい野郎だな。G並の生命力かよ。」

マ「うるせ。」

春「まあいい。これでお前を殺せば終わ」「春お兄ちゃん!ここに来てよ!」「…ちっ……しょうがねえな。／＼／＼」

マ「え……?」

瑠「ねえこれおいしいよ!」

夏「この世界のなのはちゃんがつったんだって。もぐもぐ」

春「どれ…もぐ…うん。俺が作ったほうがうまいな。」

雫「は、春人さんは料理を作れるんですか？」

春「まあな。じゃ、今度何か作ってやるよ。」

瑠「ホント!?ありがとうございます!!」（春人に抱きつく

春「お、おう///」

雫「あ、ありがとうございます///」（春人に寄り添う

春「//////」

夏「ジーーーーー」

春「な、なんだよ?///」

夏「……なんでもないよ。」

マ「だーーーーッ!!!なんだあの空間は!?フィオネ!!!」

フィ「はいはい。では強制転移!場所はバラランシヤ様の所ね」

キヤ「あと、今回はお土産瑠璃ちゃんと雫ちゃんで作った【失敗作】のクッキーと【成功】したクッキーです。成功したのは皆様で。ただし!春人は失敗したほうを。これを食べて、「俺のほうがうめえ

な「つて言えますかね？」

春「な…っ!」

夏「今回はありがとっございました〜!」

ク「また来なさい。」

ゼ「待ってるぞ!」

マ「アイツはよお…」

フィ「まあまあ。(汗)」

キャ「では、今回はここまでです」

瑠「そうだね。感想いっばいください!」

雫「では、次回の『どうしてこうなった?! 廻物語』もよろしく願います。」

神による転生者の輪

第69話：たまにはいいよね、動物園！…でも何かがおかしい…（汗）前書

さて、69話です！

この小説も次回で70話ですよ？

こんなにも続くなんて…

信じられませんね。

いや、ただグダっているだけなのか。

…そう思えてきた。

もっと更新速度を上げないと…！！

では、始まります。

第69話：たまにはいいよね、動物園！…でも何かがおかしい…（汗）

フェイトside

こんにちわ。フェイト・テスタロッサです。

いきなりですが、今日私【達】は劉とデートします。

そう、私【達】です。

「フェイト〜！今日何を着ていこうか決められないから助けてー
ッ！〜！」

姉さんがドタドタと私の部屋に向かってくるのが音と声でわかりました。

「うん。いいよ。」

私が部屋のドアを開けると姉さんが大量の服を持って飛び込んで来た。

…そう、文字通り。

「うわっ姉さん！」

「あれ？ちよっ！〜！」

ゴッソッ！

「いって〜。ごめんね、フェイト〜（泣）」

「う、うん。私は大丈夫……姉さんこそ大丈夫？」

私は涙目になっている姉さんに聞く。

「うん。私も平気。いや、フェイトの部屋に飛び込んで受身を取りながら決めポーズをとろうかと……。それでいざドアを開けようとしたら急に開いて、フェイトがすぐ目の前にいるじゃん。本当に焦ったよ。」

姉さんは頭を掻きながら「まいった」と笑っていた。

「なんかどこかの軽音部の部長さんみたいだね。それで、どれほどの服で迷っているの？」

「ん〜とね〜。」

姉さんは持っていたその大量の服を並べ始めた。

「わあ！すごい服の量だね！」

「ホントね。アリシア、こういう物は昨日のうちに決めとくものよ？」

私たちが服を広げて悩んでいると、アルフと母さんが入ってきた。

「だって、昨日は今日のためにすぐ寝ちゃって。」

「まったく貴方は。そのために早くチケットをあげたのに。」

そう言うと、母さんは笑顔ながらため息ついた。

そう。今回のデートは母さんがリンディさんから動物園のチケットを四枚貰ったことから始まりました。

チケットは四枚ということで、私はアリシア姉さんはもちろん、後にはなのはを誘いました。

デートの相手？

もちろん劉だよ！

劉以外の相手なんて考えられない。

もうデートというよりお出かけみただけと、今日はいっぱい楽しもうと思います。

「ほら姉さん。この服なんていいんじゃない？」

「うん！似合うよ！..！」

私の意見にアルフが賛成してくれる。

「どうかな、お母さん？」

姉さんが母さんに聞くと.....

「とっても似合ってるわよ！フェイトはセンスがいいわね！」

「あ、ありがとうノノノ」

母さんに褒められてしまった。

「じゃあ姉さん。早く着替えて！」

「.:!.. ちょっと待っててね、なのは〜」

「.:!.. 劉ちゃん、早くするの〜」

劉 side

side out

「.:!..」

オレは今、なのはと一緒にテストロッサ家に向かっている。
なんでも、プレシアさんが動物園のチケットを四枚買ったというこ
とで、オレとフェイト、アリシアとなのはの四人で行くことになっ
た。

待ち合わせはテストロッサ家。

だから向かっているってわけだ。

ちなみにフィオネとタマモはお留守番だ。

一応、クリスとゼロは連れてきている。

基本今日はスリープモードだが…。

「劉〜!!」

テストロッサ家に着くと、すでにフェイト、アリシア、プレシアさ
ん、アルフ、リニスがマンションの前に居た。

「ご、ごめん。待たせたかな？」

オレが聞くと……

「ううん。私たちも今出てきたところだよ〜！」

と、アリシアが答えてくれた。

「なんかセリフが男女逆になっているわね。」

「うん！劉が彼女みたい！」

「そうですね。劉は立派な彼女さんみたいです。」

「う…」

プレシアさん、アルフ、リニスの言葉にオレはその場でorz状態になる。

「私は…劉が彼女でも別に…／／／／」

「うん。劉君ならお嫁さんでも…アリかな？／／／／」

「私も劉ちゃんなら全然OKなの～／／／／」

と三人娘はオレのことは目に入っていないかの如く体をくねくねさせながら言っていた。

「……じゃあオレは帰るんで。アルフかりニス。後はよろしく。」

オレは自分のチケットをアルフに渡して、なのは達に背を向ける。

すると…

「ちょっと待ってなの!!」

「劉ごめんね?」

「もう言わないから〜!!」

三人がオレの服を掴んできた。

「わかった。わかったから!服がのびちゃうよ。」

オレが言つと三人は服を放してくれた。
少しやりすぎたかな？
でも、これぐらいは許されるよね。

「それにしても、三人とも今着ている洋服。すっごい似合ってるね。
可愛いよ！（にこっ）」

「こっえ！？／＼／＼／＼／＼／＼／」

ん？

オレが服を褒めたら三人が俯きだした？
なんかまずったかな？
オレはただ、素直に褒めただけなんだけど…

「あらあら、劉は分かつてるわね。」

「そうですね。さすが劉です。」

「やるなあ劉！」

そしてこっちの三人は何やらオレ達を見て笑っていた。

「????じゃ、行くっか？」

「こっうん！！！！／＼／＼／＼／＼／」

「では、行って来ます。」

「はい、いつてらっしゃい。」

「フェイト〜アリシア。お土産お願いね〜！」

「みんな、気をつけていくんですよ？」

少し遅れながらも、オレ達は三人に見送られながら動物園に出発した。

「やってきたね！動物園！！」

「どうしたの劉？」

「…いや、なんでもない。」

なんだかんだでテンションが上がっていたオレは、動物園に着くな

りそんな事を言っていた。

…恥ずかしい／＼／

「ほら！劉君早く行こう！」

「行こうなの～！！！」

アリシアとなのははオレの両腕を拘束すると、園内を走り出し…

「あ、待って！姉さん！なのは～！！！」

それをフェイトが追いかける形になった。

初っ端からこんなんで大丈夫かな？

オレは二人に引っ張られながらこんな事を考えていた。

「で、何から見る？」

フェイトが二人の足に固定バンドを作り、二人を盛大にこけさせる事でようやく落ち着かせることに成功させた。

フェイト…ナイスだ。

「うーんとね〜…」

「迷うの〜。」

なのはとアリシアは貰ったパンフレットを見ながら悩んでいる。

…って、何が見たいか決めていないのにあんなに走り回っていたのかよ……（汗）

二人が悩んでいると…

「劉。私、あの動物が見たいな。」

フェイトが一つの檻を指差す。

その先は…

「キリンかぁ。いいな。」

悩んでいた二人もその提案に賛成したところで、オレ達はキリンがいる檻に向かった。

キリンの檻

「うわ〜大きいね！」

「すごいの〜！」

「首なが〜い〜！」

三人はキリンを見てそれぞれ感想を洩らす。

「フェイトとアリシアは地球の動物は詳しいの？」

「うん。そんなに詳しくないよ。」

「うんうん〜！」

フェイトの言葉に何故か胸張って頷くアリシア。

「じゃあ今日はたっくさんの動物さんを見ていくの！」

「そうだな。なのはの言つとおり、今日はここの動物達を見つくるだけ見つくそうか？」

「」「」「お〜〜！！！」「」「」

そこからオレ達はほとんど手当たり次第で檻を見ていった。

サルの檻

「これはおサルさんです。」

なのはが檻の前で二人に説明する。

「あ、テレビで見たことがあるよ。」

「うん！私も知ってる〜！！」

檻の中ではたくさんのサルがいて、それぞれ別の行動をとっていた。

「ん〜。あ！あおそこに小っちゃい子ザルがいるよ！」

アリシアが指指して言う。

「わあ！本当だあ！」

「小さくて可愛いの〜！…あ！あっちにもいるの〜！」

と、今度はなのはも見つけた様子。

「え？じゃ、じゃあ私も……」

二人に負けないようにと、フェイトも子ザルを探し始める。

……

なんだか子ザル探しゲームになっているな。

シロクマの檻

「ここは…シロクマだな。」

サルの次は近くにあったシロクマの檻がある小さいドームの前に来ていた。

「クマがシロいの？」

フェイトはまったく想像がつかないのか、難しい顔をしていた。

「そっか。想像しにくいよね」

「私も知らない。」

やっぱりアリシアも知らないらしい。

「シロクマさんはね、すっごく可愛いの!」

なのはがまたもや笑顔で説明するがさっぱりだ。

しかもシロクマ…可愛いか?

オレは怖いんだけど…。

「なのは。それじゃ分からないよ。いいか?フェイト、アリシア。

シロクマは白いクマで怖いんだ。」

「それも分からないと思うの。」

横でなのはがジト目で言ってくるが気にしない。

オレはどうだ!と言わんばかりにフェイトとアリシアを見るが……

「「?/?/?/?」

まだ分かっていない様子。

「はあ。そっだよ。早い話見に行こうか。」

「うん!」

「見た〜い！」

オレとなのはは二人を連れてドームの中に入っていった。

「す、すごかったね。本当に白かったよ。」

「うん！でも劉君が言ってたみたいに怖くなかったよ？」

「いやいや実際にあんなのが目の前にいたら怖いって。戦っても勝てないって。」

シロクマを見たフェイトとアリシアの反応は可愛いの一択だった。

「劉ちゃんはシロクマさんの可愛さが分かってないの！」

と、なのはからは何故か理不尽なお叱りを受ける始末。
…ひどいぞ。

ゾウの檻

「えっと、ゾウさんはお鼻が長いの！」

「見れば分かるよ。」

なのはの説明に対して突っ込んだオレは、またもやジト目で睨まれる。

「たしかにお鼻が長いよ〜！」

「なんだか面白いね！」

ん〜。ゾウみたいな動物はそういないだろうっからな。

「あの鼻を使って水浴びとかもできるんだぞ。」

「そ、そんな事もできるの!?!」

フェイトはびっくり。

「い、意外と高性能なお鼻なんだね。」

アリスアは顎に手をあてて、ムムムツと何やら悔しがっていた。そんなところで張り合うな…。(汗)

「ねえ劉ちゃん。そろそろお昼の時間なの。」

「ん？」

なのはに言われて時計を見てみると、ちょうどお昼にはいい時間だった。

「そうだね。じゃあ、あそこのお店でお昼でも食べようか。」

少し先に行ったところに飲食店があった。

「うん。私もあそこでいいよ。」

「もうお腹ペコペコだよ。」

二人もあそこで賛成みたいだ。

「よい、行ってみようか!?!」

今思えば、この時のオレは楽しそうだったな…

「なんか…シュールな店だったなあ。」

「……うん。」

「動物の顔が…ね。」

「怖かった……」

なのはとフェイトとアリシアもあの店には驚いていた。
オレ?

もちろん!…ビックリするぐらいに食欲が無くなったよ。

「…どっかの軽音部の勧誘で使われていた着ぐるみが店内をウロウロしているとか……。うん。怖かった。」

「今日は軽音部ネタのオンパレードだね。」

フェイトが呟いたのが聞こえたが…なんのことだ？

「…ん？ああ！！」

アリシアがある看板を見て大声を出した。

「どうしたんだよ急に。」

「ふれあい広場だつて〜！！」

その看板には大きくそう書いてあるのが見える。

「なになに…うさぎやモルモットに餌をあげたり、抱っこしたりで
きるらしいよ?」

「」「」「…」「」「」

オレの言葉と同時に三人の目が変わる。

「今すぐ行こうなのッ!」

「うん!行こう!」

そう言うやいなや、三人はさっきのテンションをどっかに投げ捨て、ふれあい広場に向かってダッシュしていった。

……オレをおいて…

「ふう…やっと追いついた。」

広場についてみると…

「」「可愛いわ！」「」「」

三人のテンションは最高潮に達していた。

「「のじやきちゃん、ふわふわするの〜！」

「にんじん食べるの〜？それともキャベツ食べるのかな〜？」

「それにあつたかい。」

撫でては頬擦り、餌をやっては頬擦り…この繰り返しだ。（汗

「まあ、楽しそうだし…いつか。」

オレも近くのうさぎを抱っこして、一人で撫でたりして和んでいた。

「ふう、満足したの。」

「まだ温もりがあるよ。」

「私はまだ触りたかったなあ。」

アリシアよ、まだ触り足りないのか…？

「もう一時間も色んな動物に触れたんだ。これぐらいでいいじゃないか。」

そんなに触りすぎるとストレスたまっちゃうよ。

「え、それ劉君が言えるの〜?」

アリシアに服の裾を引っ張られながら言われる。

「な、なんでだよ?」

「うさぎ触っている劉君、楽しそうだったよ?」

そ、そりゃね…だって、可愛いもん／／／

「でもその時の劉ちゃんも可愛かったの…／／／／」

「え、?」

「うん。私も!あの時の劉は…可愛かった／／／」

そ、そんなあ…orz

「オレも見るのは始めてだったりするんだな。」

「私もなの〜！」

アレから他の檻も見て回り、そろそろ終わりも近づいてきた。

「へえ、劉達も見たことないんだ。」

「まあテレビでは見た事あるんだけどな。」

オレは内心ワクワクさせながら、その檻の前に行き……

「…わあ〜」

これ以外の言葉を失った。

「き、きれいなの〜！」

檻の中には4羽のクジャク。

そのクジャクが羽を広げていた。

「す、すごい。すごいよ〜！」

「クジャクはオシャレなんだね！」

アリシアの言葉にオレは苦笑しながらも、クジャクの姿を思い出し…

「きれいだ…。」

と呟いた。

なぜか、三人に向けて……

「『『えっ!!!』』』』』」

すると、三人は顔を赤くさせながらオレを凝視してきた。

「いや、クジャク。きれいだよな?」

「え?あ、ああうん。き、きれいな。』』』』」

「そ、そうだね。』』』』」

「うん。きれいだね。』』』』」

「??.??.?」

三人の様子が気になったが、オレはまたクジャクに目を戻した。

ライオンの檻 フェイトside

「うっわあ！！カッコいいなあ！！！！」

劉がライオンを見ると目をキラキラさせていた。
これが最後の檻らしい。

「へえ、たてがみ…やばッ！！」

いつもはこんなに可愛いのに、魔法を使う時はどうしてあんなにカ
ッコいいんだろう。

私は間違いない劉の事が好きだ。

最初は一目ぼれ…だったのかな？

私が守ってあげなきゃっていう保護欲もあったんだと思う。
でも実際は違って…。

いつも私は劉に守れられて、その守ってくれているカッコいい劉を見
てさらに好きになっていった。

たぶん、なのはや姉さん、アリサやすずかにフィオネとタマモ、リ
ニスもそうなんだと思う。

ライバル多いなあ…。

私は劉の笑っている顔を…あの時の、劉が私に「生まれてきてくれ
てありがとう」と言ってくれた時の顔を思い出す。

あの優しくて、私を受け入れてくれた時の顔を。

「うう／＼／／／」

今でも思い出すと顔が赤くなる。

私は、決めたんだ。

劉はたとえ、なのは達でも絶対に渡さないって！

「フェイト／＼、どうしたんだ？顔が赤いぞ？」

「え？ええ？？／／／／」

劉がいきなり私の顔を覗き込んできた。

「大丈夫か？」

「う、うん！大丈夫だよ！／／あ、そうだ。アルフ達にお土産買わなくちゃ！そこのお土産屋さんに行こうか？うん！行こう！！」

照れた私はとつさに理由を考えて、劉の手を引っ張ってそのお土産屋さんに逃げ込んだ。

…って、なんで照れて逃げるのに、その劉の手を引っ張っているんだろ、私／／／／／

side out

劉side

最後の檻を見てみるとフェイトの様子がおかしかった。

けど、それはお土産を何にするのかで悩んでたみたいだけど……
今フェイトは色々なお土産を見て、またもや悩んでいる。

「ま、まっつてよ〜！劉ちゃん！フェイト〜！」

「なの〜〜！〜！」

そこでアリシアとなのはがやっと追いついて、お店に入ってくる。

「フェイト…（ボソッ）」

「抜け駆けなの。（ボソッ）」

「う、ごめん（ボソッ）」

二人はフェイトを挟んで何かを話し始めた。
オレは三人を放置して、フィオネ達にお土産を選び始める。

「ん、高町家にはこの『せとくんまんじゅう』でいいよね。」
なんでここにまったく関係ない『せとくん』のおまんじゅうがあるのかわからないけど…

「フィオネとタマモは、この『地デカのぬいぐるみ』でも買って
いこうかな。」

いやだから、なんでここに『地デカ』が（ry

「フェイト！何にする？」

「アルフは食べ物がいいね。母さんとリニスには、この『あず
んティーカップ』でいいかも。」

「うん。それでいいよ。」

二人も決まったみたいだ……って、そんなものまで！？
そうだ。

八神家にもまんじゅうを一個買ってくか。
オレは買うものをレジに持っていこうとするど…

「ジーーー」

ストラップを見ているなのはを見つけた。

「なのは？」

「あ、劉ちゃん。もう決まったの？」

なのははオレが持っている物に気がついて聞いてきた。

「まあね。それより…」

オレはなのはが見ていたストラップを手取る。

「これほしいの？」

それは小さい動物達がチェーンみたいに繋がっているストラップ。

「劉、なのは。どうしたの？」

と、そこにフェイトとアリシアがすでに買ったお土産を手にとってきた。

「ん〜っとそつだー！」

オレはそのストラップとさらに色違いのを全部で二つ手にして、レ

ジに向かった。

「はい、三人とも。」

夕暮れの動物園。

オレは店を出て、さっき買ったストラップをそれぞれ三人に渡す。

なのはははピンク色

フェイトは黄色

アリシアは黄緑色

そこでちょうど、閉園のアナウンスが流れてくる。

「さ、みんな。帰ろうか？」

「うん！！（にこっ）」

「……っつ！！！／／／／／」

その時の三人の笑顔を見て照れたのはオレだけの秘密だ。

「……………」

オレは三人の後ろを歩きながら空を見上げた。

明日はいよいよクリスマス・イブ。

Asクライマックスの日。

そして、オレがこの世界に居られる最後の日。

絶対にはやて達を救って違う世界戦にいつても戻ってきてやる！
オレは心の中でそう思い、拳を静かに握った。

「…あ。ユニーにお土産…忘れてた。」

第69話：たまにはいいよね、動物園！！…でも何かがおかしい…（汗）後書

マ「やっと書き終わった〜！！！！」

フィ「では感謝コーナーです。バラランシャ様、空言天狐様、けーくん様、光闇雪様、メガネ様、madao様、畏無様、フリスト・クアンタ様、龍賀様、マサ様、月光閃火様、三浦一平様、感想ありがとうございます！」

ゼ「お土産は…光闇雪様からは、『七色きりたんぽ』

メガネ様からは、春人の女事情を纏めた物

畏無様からは、『対春人用訓練室』、瑠璃と雫とフィオネとタマモには、ケーキバイキングセット

龍賀様からは、この世に存在する全てのケーキ（カロリー0）

マサ様からは、全員分の特性ビーフシチュー

月光閃火様からは、閃火様と輝刃の入浴シーン写真数枚を頂いた。いつもありがとうございます！」

キャ「と、いうわけで作者は強制転移！！」

マ「え？さつそk…」

瑠「あれ？作者はどこにいったの？」

ク「訓練室だつて。」

雫「そ、それと、今回もゲストの方々が…」

月「…よう。」

輝「またお邪魔する。」

雫「はい。『WOLFANG - ウルフアング - 』狼男は不良青年
くから輝刃さんとその作者の月光閃火様です。」

月「ん？マーボーはどうした？」

ゼ『アイツは今訓練室にて死んでいる。』

輝「どうしてそうなった？」

ファイ「こっちにも色々と事情があつてね。」

雫「ふふっ」

輝「お？そういえば雫の表情が少し柔らかくなってるな。」

雫「え？」

月「そうだな。最初よりはな。」

雫「あ、ありがとうございます／＼／＼」

キヤ「雫ちゃんはそちらで生まれたんですね。」

月「まさかああなるとはな…」

輝「俺も驚いた。」

瑠「びつくりだね。」

ゼ「二人とも!…よくやってくれた!!!」

ク「ロリコンは放っておいて。雫の表情が柔らかくなったのは、きっとほかのゲストに来たりする人達のおかげもあるかもね。」

フィ「ああそれ納得。」

キャ「皆様騒がしい方々が多いですからね。」

瑠「でも楽しいよ?」

雫「……………(コクコク)」

月「そうだな。」

フィ「まあその通りよね。」

キャ「楽しければすべてよしッ!!!」

ク「それはわかったわよ。それと一つ聞きたいんだけど…」

ゼ「どうしたんだ?」

ク「アンタ等二人はどうしてこの写真を?」

輝「それは閃火が勝手に…」

月「…俺は知らない。」

マ「……………あれ？俺…死んだはずじゃあ…？」

ゼ『お前はどんな訓練を受けてきたんだ…（汗）』

第70話：ついに始まる！VS闇の書の意味！（前書き）

はい、70話です。

最近后感想も少し減ってきました…orz

やっぱ、地震のせいかな？

それとも…飽きた？（泣

今まで通りに感想をくれる読者様の方は本当にありがとうございます！

作者は寂しがりやなので、これからも感想をいっぱいくれるとうれしいです…！！

では、70話はじまります…！！

劉「コイツは何を言ってるんだ？（汗」

第70話：ついに始まる！VS闇の書の意味！

「今日みんなでお見舞いに行かない？」

「…ん？」

オレが机の上に顔をのっけて寝ていたら、そんな話し声が聞こえてきた。

なのはやフェイト、アリシア、アリサ、すすか達だ。

そう。今日はあのAs最後の日。

闇の書の闇と闘う日。

つか、本来なら今日って学校ないよね？

クリスマスイヴだし…。

これもオレ達の介入のせいなのかな？

「あ、劉ちゃん起きちゃったあ。」

「ごんね〜ん。」

そして目の前にはクラスの女の子達がいた。

「…な、何してるの？」

「え？い〜や〜」

「少しお化粧を」

そして何人かの顔は赤い。

「…え？」

オレはその女子に鏡を借りて自分の顔を見る。

「な…!？」

本当にこんな言葉が出たオレ。

だってその鏡に写っていたのは……

「だ、…誰？」

なんか知らない女の子。

「何言ってるの。」

「劉ちゃんに決まってんじゃん。」

「可愛い〜なあもう!」

オレはその言葉を無視し、鏡を返してトイレにダッシュ!

「…え?これ…オレ??？」

何度も自分?の頬をぺちぺちと叩く。

「け、化粧って…。」

女は化けるって聞くけどどこまでだなんて…

「うわぁっ！なんで男子トイレに女子がいるんだよ!?!?」

と、そこに三人の男子が入ってきて、その先頭のヤツがオレを見て驚く。

「え?」

その声の大きさに驚いたオレはソイツ等の方を向く。

「「「え!!!」」」」

瞬間、オレに悪寒が走る。

な、なんだよその反応は!?!?

オレは男だぞ!?!?

「き、君…なんでこんな所に?」」」

「もしかしてソッチの趣味があるの?」」」

「でもなんで制服は男物?ま、まあそこがまたいいや」」」

三人はそついいながらオレに近寄ってくる。

「お、お前等…オレにそつちの趣味は……」

後ずさるオレ。

力なら負けないけど、なるべく使いたくないしなあ…

…どうしよう？

「おい、てめえら！何やってんだ？」

「「「!?!?!?」「」「」

そこにまた一人の男子がトイレに入ってきた。

「おめえらにどんな趣味があるかは知らねえけどよ。ソイツは男だぜ？」

そいつは…エロトはそう言いながらオレに近寄り、オレの腕を取る。

「おら、いくぞ。」

「あ…」

腕をとられたオレは無事トイレを出て、そのまま何故か屋上へ。残された男子は何を言っているのか分からない様子で立ち尽くしていた。

「ちっ！…せつかく可愛い娘がいると思ったのによ…。」

「ん？」

エロトが何かを呟いたようだが…

「な、なんでもねえよ。ほら、そのハンカチで顔拭けよ。」

エロトがハンカチを貸してくれる。

「あ、ありがとう。」

オレはそのハンカチを借りて化粧を落としていく。

「あ、あれ？」

けど、化粧つて拭くだけじゃ落ちないもんで…

「ぜ、全然落ちないんだけど…」

あたふたするオレ。

「ぶっ…少し待ってるよ。」

その様子を見ていたエロトは、そう言つと一旦校舎に戻っていった。

「????？」

それから少しすると……

「ほれ。これでも使えよ。」

濡れタオルを持ってきてくれた。

こいつ、こんなに面倒見よかったんだな。

なんだか知らないエロトの一面を見た気がする。

「お、おう。」

濡れタオルを受け取り、今度こそ化粧をおとしていく。

「ふう……さっぱり。」

化粧を綺麗さっぱりおとし終えたオレはエロトを見る。

「……………なんだよ？」

そのエロトはムスツとした感じでオレの事を見てきた。

「いや……ありがとつって……………」

「それはさっき聞いた。」

エロトはそう答えると、オレを置いて校舎に戻っていきつとする。

「本来俺は男は助けないんだがよ…今回はお前には頑張ってもらわないとだしな。」

そう言い残すとエロトは屋上から出て行った。

「……………どう思う?」

オレはデバイスのスリープモードを解除して聞いてみる。

『アイツもそこまで悪い奴ではないのかもしれないな』

『まだ分からないわよ。…まあ今回は助かったみたいだけど。』

クリスとゼロからそれぞれ返事が返ってくる。

実際オレも、前回の屋上での出来事からエロトの事をそこまで悪い奴には見えなくなっていた。

…まあ女子生徒に色々やってはいるけどさ。

これってオレがおかしくなっているのかな?

「ん〜、何がなんだか分からなくなってきたやつだよ。」

オレは少し混乱している頭の中を整理させてから教室に戻った。

「みんな、お見舞いには行けないんだ。ごめん。」

「『『『『『え〜〜！！！！』』』』』」

放課後、いつもの五人娘がオレに近づいてきて一緒にお見舞いに行こうと言ってきた。

が、オレがそれをやんわりと断ると五人は不満の声を洩らす。

「ま、まあまあ。今度はオレも一緒に行くからさ。」
なるべく笑顔で五人を宥め…

「さ、エロト。早く行こう！」

「あんだよ、気持悪いいな!!！」

嫌がるエロトの腕を無理やり組み、一緒に教室を出て行った。
その時の教室のみんなは啞然としていたという。

「…で、なんで俺はお前と一緒に病室に行くことになってんだよ。」

「だって目的地は一緒でしょ？だったら一緒に行けばいいじゃん…
ね？」

「…ちっ。」

エロトがそこまで悪いヤツではないという考えが正しいのか判断するべく、なるべく一緒に行動することに決めたオレは、さっそく念話でエロトを誘ってみることに……

断られると思っていたオレはエロトのからの了承を得た事に誘った側であるにもかかわらず若干驚いた。

「つかよ、いつまで俺と腕を組んだよ。」

「え？あ、ああ。」

エロトの言われて気づいたオレは腕を放し、沈黙の状態で病院まで歩いていく。

エロトが少し先を歩き、オレがその一步後ろを歩く形だ。す、少し無理やり過ぎたかな？

「あらあら、彼女さんと喧嘩でもしたのかしら？」

「あんなに彼氏の後ろをしおらしく歩いているなんて、可愛いわね」。

「最近の小学生はすすんでるわ〜」

「……………」

そんな会話が聞こえたのは…オレの気のせいだろう。

「よう、はやて。」

「あ、劉ちゃん。いらっしゃあい…っと、エロトも来てくれたんやな。」

「誰がエロトだッ!!」

病室に入るとこのやり取りが行われた。

「ん、天道も来てくれたのか。」

「おお！劉じゃねえか!!」

「いらっしゃい。」

「……ゆっくりしていくといい」

そして、ヴォルケンズも全員揃っていた。

ザフィーラってこの時いたっけ？

「なんだ？劉はこいつ等と会ってたのか？」

隣にいたエロトがオレに聞いてくる。

「ああ、一応な。」

「へへッ。俺、こいつ等と戦ったんだけどよ。楽勝だったぜ〜！」

エロトの言葉に額に血管を浮かせるヴォルケンス。

「まあ俺はこの世界の主人公だからなあ！！ハーツハツハツハツハ
ア！！！！！！」

個室とはいえ、病室で高笑いをするエロト。

「うるさいぞ、木下！！」

ドゴッ！！

「ぐっ…：…おおおおおお！！！！！！」

頭に拳骨を喰らったエロトはその場で頭を押さえて蹲る。

「ふんッ。てめえが主人公だったら、劉はなんだよ。アタシ等と四
対一で戦って勝ったんだぞ？」

「…あゝ！？」

エロトが蹲りながらオレの事を見上げる。

「え、えつと…ぶい？（にこっ）」

そんなオレはエロトに向かって、苦笑いで小さくブイサインをしてみる。

「クロス」

エロトがオレに何かしらの術を発動しようとする…

「ちょッ！ばかっ…」

が……

「や・め・ろッ！…」

ガンッ！

「ぐぐおおおおお！…！」

またもやシグナムに拳骨を喰らっていた。

「な、なんや。劉ちゃんがシグナム達と戦ったって…劉ちゃんは何

も知らんは？…」

コンコン

と、はやてが言いかけた所で病室がノックされた。
お？やつと来たのかな？

「はあい。どうぞ〜」

はやてが入るように促がす。

「……………失礼しま〜す。……………」

病室に入ってきたのは想像通りの五人娘。
そしてオレやヴォルケンスを見て固まるのは&フェイト。

「あ、すずかちゃん…と、お友達さんやな？はじめまして〜」

ここでははやてが軽く自己紹介をして、それにつらてれ五人も挨拶をする。

「って、なんで劉ちゃんがここにいるの？」

「それに……………」

「そ、そうやで〜。でもそらすずかちゃんもや〜。こんな可愛え娘だなんて聞いとらんかったでえ?」
「コッコッコッコッコ」

「ちょ、ちょっと二人とも?」

な、なんだろう。

すずかとはやてが大変な事に……。

あのアリサが止める側になるなんて……。

「はああ。まったく……」

オレは近くにいたザフィーラをモフモフする。

「……どうした?」

「頼む。何も聞くな。」

「……そうか。」

「じゃあね〜」

「うん。また来てなあ。」

その後、なのは達は原作でもあった通りプレゼントを渡したり、話したりして解散した。
この後あの二人が戻って来るんだよな。

「…シグナム。」

「天道……分かってる。…では主。私たちは…」

「あーそやな。劉ちゃんを送って、そのまま帰ってもええよ。」

シグナムはその場で一礼し、シャマルとザフィーラがそれに続く。

「はやて。明日も来るからな。」

「そんな毎日来んでもええよ?」

「いや、絶対に来る！」

「あ、俺も!！」

「あーエロトはホンマに結構や。」

「俺はエロトじゃねえ!！」

「やっ……」

病室の屋上。

この場にはヴォルケンスとなのは、フェイト、エロト……そしてオレがいる。

構図としては、ヴォルケンスの横にエロト。

対立して正面になるのは、フェイト。

その中央にオレ。

「どこから話そうか。」

エロトが額に手をやり、クククと笑いながら一歩前が出る。

この辺のキモさは変わってないな……。

「まあ落ち着けエロト。」

そんなエロトを手で制すオレ。

「りゅ、劉ちゃん……」

なのはが心配そうな目でオレを見てくる。

「大丈夫、心配しないで。」

さてさて、これから本当にどうしたものか……。

まず、闇の書。

あれはなんでEXランクも持つエロトのリンカーコアを蒐集しとい
て一気にページが埋まらないんだ？

もしかして一気に埋めれるページ数って決まっているのかな。

だとしたらこの後、間違いなくヤツらが来るだろうな……。

《…エロト！》

《ちっ…わーってる。》

エロトと念話で確認し、オレはなのは達の方に、エロトはヴォルケ
ンズの方に一気に近づき……

「らあああ……！」

「おらよッ……！」

「……っ……っ……！」

気づかれないように近づいてきていた仮面の男二人に攻撃する。

「な、なんで分かった？」

二人のうちの一人がオレに聞いてくる……が、

「愚問だね。オレには全部分かるんだな……これがッ！」

「くっ……！」

オレはもう一発攻撃を繰り出すが今度は簡単にかわされる。
エロトの方も追撃するもかわされ、距離をとられていた。

「てめえらも邪魔…すんなよ。」

つと、こつちではヴィータ達も臨戦態勢に。色々とまずい状況になってきた。

「ゼロ！set up！！」

『OK！set up！！』

ゼロを起動してバリアジャケットを展開させ、みんなを止めようとする。

「ぐがあッ！！」

「な…ッ！！」

声をしたほうを見ると…

「エロト！…！！！」

なんと、あのエロトが仮面の男に圧されていた。

「何やってんだ！？」

仮面の男の持っている物が目に入る。

「あ、あれは…！！！」

その手に持っていた物……

「は、はやての……入浴写真か……？」

なんかあまり見えなかったが、たぶんそうだ。

「おい！一回攻撃を受けたらそれをくれるって約束だろ！？」

「貴様は馬鹿か？」

仮面の男は攻撃しつつもエロトに呆れている様子。
うん。もっと呆れていいと思う。

『劉……！』

「遅いな！」

「……っ！しまった!？」

ゼロからの警告。

瞬間、何重ものバインドがオレの体を縛り、何重にも分厚いクリスタル状の結界がオレの周りに張られる。

「お前には特別製のプレゼントしてやる。」

仮面の男はそう言うと、なのは達の所に向かった。

「…っ！……ち、力が…はいら…ね…え…」

なんなんだこれは？

どんだん魔力が吸い取られていく。

しかも……

「念話も…出来ないのかよ…」

くっそ…なのは達もクリスタル状のに捕まった…。

エロトは…？

「ぐっ…くっそ…があー！！」

仮面の男と交戦中。

アイツ等ってロツテとアリアだよな？

どうしてあんなに強くなってるんだ？

『きつとお前達に合わせた戦闘をずっと訓練してきたんだろうな。』

ゼロが二人の戦闘方法を分析して出した答え。

無印で少し目立ちすぎたか…。

「でも…こんな所で…負けて…られないんだよね。投影開始！」
トレイスオン

オレは縛られたままの状態で一振りの剣を投影する…も、

「くっ…すぐに碎け散った!？」

投影もできないこの状態。

「どうすれば……って、そ、そんなッ！」

オレの視線の先。

そこにはすでに蒐集されたヴォルケンスの跡が……
そして転移してきたはやての姿があった。

「まずい……本気でまずい……!!！」

オレはありったけの魔力を手に集中させる。

「頼む。一振り……それだけでいいからもってくれ……!!！」

オレの周りに銀色の魔力が噴き出す。

『劉！お前、大丈夫か!?!』

ゼロが心配してくれる。

まあ少しきついけど……これぐらいしないと……。

「トレスオン 投影開始……ミネルバクライム 罪の闇に犯される剣!!！」

その魔力であるオリジナルの剣を投影して、オレの動きを封じているバインド、結界を制御不可にして、抜け出す。

「……っはあ……はあ……」

くっそ……今ので大分無駄な力を使ってしまった。

「…我は闇の書…我が力のすべては…」

『Diabolic emission』

「くそ…!!」

はやての静止に一步間に合わず、はやては闇の書の意味に呑み込まれてしまった。

「おい！劉！！」

「わかってる。」

今から闇の書の意味はデアボリック・エミッションを撃つ気だろう。原作ではなのはがフェイトを守ったが…今回は……

「…って、まだあのゲージの中だと！？」

二人は未だにクリスタルゲージの中から脱出できていなかった。

「エロト！一旦引くぞ！」

「しょうがねえな。わかった！」

オレとエロトはなのは達の所に向かう。

「待ってて。今出してあげるから。」

投影した罪の闇に犯される剣で軽く触れ、そのゲージの制御を不可ミネルバクライムにさせ、二人を脱出させる。

「劉、はやてが！」

フェイトが言おうとしている事は分かっている。

「でもその前にあの攻撃を防がないと…。」

「デアボリック・エミッション。」

オレが言うのと同時に闇の書の意味は広域魔法を放った。

「みんなオレの後ろに下がって！^{トレスオン}投影開始！^{アイギス}絶対守護の盾！！」

オレの言葉におとなく下がり、オレは迫り来るデアボリック・エ
ミッションを絶対守護の盾^{アイギス}で防ぐ。

「きゃあああ！！！！」

「くう…劉…！」

なのはとフェイトは魔力同士の衝突に叫ぶ。

そしてエロトは……

「ハア…ハア………」

こんな時でも二人に密着できてうれしいみたいだ。

「まったく。やっぱりヒロトはヒロトね!」

「ん!？」

オレが絶対守護の盾アイギスで防いでいると、そんな声が響いた。

「この声は……」

声の主の名を言おうとした瞬間、オレ達はその場から強制転移させられた。

「やっぱり!」

「やっぱりさっきのはフィオネか。」

転移した先には予想通り？フィオネとタマモとユーノとアルフがいた。
ユーノ久しぶりだな。

「あ、今この辺りにものすごい結界を張りますね」

タマモはそう言うと結界を張る作業に入る。
てか、ものすごいってどんなんだ？

まあタマモが言うならまちがいないけどさ。

「…隠れたか。」

闇の書の意味の音が響く。

「なのはとフェイトは大丈夫か？どこか怪我とかは…」

「私は平気なの。」

「私も。」

フェイトはソニックフォームを解除する。

「エロト、お前は平気か？」

「こんなもん大した事ねえよ。」

そう言うとジオルグで回復していくエロト。
と言ってもそこまで完璧には治っていなかった。

「ちっ…これまだちゃんと使いこなせねえんだよな。」

でも術の練習はしているみたいだ。

「おい劉。闇の書の意味が上空に上がったぞ。」

エロトの言葉に皆が上を見る。

どうやらオレ達を探しているみたいだ。

『劉ちゃん…』

「…そうだな。」

今頃はクロノがあのだ二人を捕まえに行っている筈だ。
でもあの二人は相当強くなっているしな。
きつと捕まえられないだろう。
だったら……

「タマモ。」

「はいはい。」

結界を張り終えたタマモがオレの傍にやってくる。

「今からクロノの所に向かって援護してほしい。」

「わかりました。ご主人様のご命令とあらばッ！」
マスター

そう言うと、すぐにタマモはクロノの元へ転移していった。

これでクロノの事は安心だな。

「ユーノとアルフはサポートを頼む。なのはとフェイトは闇の書の意味を覚醒させるためにひたすら呼び続けるんだ。」

オレはそれぞれに指示する。

「オレとエロトは闇の書の意味を全力で止めにかかる。フィオネ。」

「うん！」

「「ユニゾン・イン！！」」

フィオネとユニゾンを済ませ、エロトを見る。

「…なんだよ？」

相変わらずオレと話す時…いや、男と話す時はムスツとしてるな。
…屋上の時は少しだけど笑顔を見せてくれたのに……。
まあしょうがないか。

「止めるぞ。タカト。」

「…っ！！……へっ、誰に言ってるんだ？俺は主人公なんだぜ？絶対にバッドエンドにはさせねえよ。」

エロトも魔力を溜め、戦闘態勢に入る。

「よしッ！クリスファーストモード、ゼロは【炎】だ！」

『了解!!』』

「みんな絶対にはやて達を助けるぞ!」

「うん!!」

みんなの返事を聞いたオレはクリスに【炎】の魔力を纏わせ…

「いくぞー!」ブレイジング・ボルケーノ!!」

その魔力を、上空にいる闇の書の意味に思いっきり放った。

信「少しは落ち着きなよ。」

ク『いや〜ホント、待たせたわね。』

ゆ「本当なの！」

信「まあ俺は気にしてないさ。そういえば作者は？」

フィ「えつと〜旅立ったわ。」

ゼ『強制的にな』

ゆ「なんだか楽しそうだね」

劉「いや、それは違う気がする。」

雫「……………」

劉「お、おい。オレの後ろに隠れるなよ。」

信「ん？どうしたんだ？」

キヤ「ん〜人見知りでしょうか？」

ゆ「可愛い！〜！」

雫「うう〜／＼／＼／＼／」

劉「まあいいか。そのうち慣れるかも。」

フィ「そして信慈は今回はお爺ちゃんじゃないのね。」

信「まあ。今回は一応招いてもらっておるからの。」「ねぐらい
礼儀じゃ。」

ゆ「言ってるそばからお爺ちゃんになってるの。」

信「おっと…コホン」

ク『そのうち、本当にお爺ちゃんになっちゃわよ?』

ゼ『大丈夫だ。いずれなるものさ。』

劉「いやいや、にしても速すぎるからね。」

キヤ「それとゆきちゃんはどんな感じなんですか?」

ゆ「???」

フィ「えつと中々なのはちゃんの双子って見ないからって事よ。」

劉「そうだね。オレも少し気になったかな。」

ゆ「ん〜どつって言われても……お姉ちゃんとずっと一緒に入れて
うれしいです!」

劉「そうか。お姉ちゃん第一なんだね。」

ゆ「うん!」

信「で、そっちはどうなんだ劉？」

劉「ふえ？」

信「この前、動物園に……わーわー！……どうしたんだ？」

キャ「……いいですよ〜」

ファイ「私も行きたかったなあ……」

ク「なんで行ったのにずっとスリープのまんまなのかしら？」

ファイ・キャ・ク「『結論、作者のせいね！少し……殺ってくるか』」

ゼ『……………』

信「あゝ禁句だったみたいだね。」

劉「まあ仕方ないか。」

栗「そ、そうですね。」

ゆ「あ、栗ちゃんがしゃべったの〜！」

栗「……………／／／／／」

劉「ほらお前もいつまで恥ずかしがってんのさ〜！」

雫「え？ちよ、ちよっと!？」

ゼ『雫が無理やり劉の後ろから出されたな。』

ゆ「はじめまして!」

雫「……は、はじめまして……です。雫です／＼／＼」

信「よろしく。」

雫「……はい／＼／＼」

ゼ『ふむ……最高だ。』

劉「ゼロ……お前はいつからそんな性格に……？」

信「さてそろそろ帰ろうかな。」

ゆ「そうだね」

劉「じゃ、みんなで見送るよ……ってあれ？フィオネ達は？」

ゼ『なんか作者の所にいったみたいだぞ？』

信「……スマンな。」

劉「気にしないでいいよ。あ、あとお土産に。」

雫「こちらは劉の作ったフルーツゼリーですね。」

ゆ「うわぁッ！おいしそうなの〜！〜！」

信「ありがとうな。」

劉「はやてにもあげてね。」

ゼ『じゃあな。』

信・ゆ「ばいばい！〜！〜！」

雫「えっと、今回はここまでです。」

劉「そうだね。感想いっばいください。」

ゼ『前書きにも作者の泣き言が書いてあったな。』

劉「アレは別にスルーしてもいいよ」

雫「では、次回の更新も楽しみにしていてください。」

第71話…いやいや…チートすぎるでしょ？ b y 劉(前書き)

だいぶ間が空いてしまいました。

すみません。

では、71話はじまります。

第71話：いやいや…チートすぎるでしょ？ by劉

オレは闇の書の意味に向かってブレイジングボルケーノを放つ。

……が、

それは闇の書の意味が手を払う事によって簡単に消し去られてしまった。

「アレを片手でって…。」

「あー」

オレは自分の魔法が簡単に敗れた事に少しショックを受け、エロトは横で何やら気まずそうに目を逸らしていた。

「へっ！だがここは俺にまかせれば なんとかなる…！」

と、今度は開き直ったエロト。

「ラウザルク！」

自身に身体強化の術を掛けて闇の書の意味に接近し、

「おらおらあッ…！…！」

高速で打撃系の攻撃を繰り返していく。

「……………」

それを闇の書の意味は無表情…何のリアクションも取らずに淡々と避けていつてる。

まあコピー元の攻撃だからな…。

「デイベイイイイ…バスター…!!!」

「プラズマスマツシャー…!!!」

そしてその隙をついて、なのはとフェイトも砲撃する。

「おい、二人は呼びかけてって言ったでしょ？」

「ん？」

「だから、こうやってO H A N A S H Iを…」

フェイトは不思議そうな顔をして、なのははオレに説明をする。
いや、それは……なんでもない。

これがなのはなんだ。

まあ今回はフェイトもなんだけどさ。

「む……劉。なんだか今私、とんでもない共犯にされたかもなんだけど…」

「大丈夫だよ。気にしないで(にこっ)」

不安そうなフェイトに笑いかけ、再び闇の書の意味に視線を向ける。

「くっそ……なんで当たらないんだよ……」

「……………」

エロトが未だに攻撃を続けるも、すべてかわされてしまっていた。

「…フィオネ。闇の書の意味攻撃パターンって読める?」

《うん。エロトの術を使われるのがねえ…》

フィオネはなんとか攻撃パターンを掴もうとするが、やはりそれが一番のきついらしい。

「ちっ…コイツ、俺の攻撃を全部避けやがる。」

エロトが悔しそうに顔を歪める。
そりゃそうだ。

コピー元の攻撃ぐらい避ける事は容易いだろう。

「はあ。いくぞ。フィオネ!」

《りょくか〜いッ!》

フィオネの気の抜けた返事とともにオレはクリスを構え、闇の書の意味に向かつて一直線に跳ぶ。

「……………」

「らあああッ!」

エロトが未だに引き付けている間にオレは、闇の書の意味の背後を
取り……

「喰らえッ!火龍連撃!」

「ぐう……!」

【炎】の魔力に覆われているクリスで連続斬りを喰らわせる。
この瞬間、闇の書の意味に大きな隙が出来た。

「今だ!テオ……」

「……っ!」

「ザケル!」

その隙を逃さずに。エロトが追撃を繰り返す。
闇の書の意味はエロトが放ったテオ・ザケルに呑み込まれていった。

「よし!ナイスだエ!」
「デイバイイ……」
「……え?」

「……バスター……!」

オレがエロトの見事な追撃に対し誉めようとすると、背後から声が聞こえ、次の瞬間にはオレの真横をピンク色の魔砲が通過して行く。そして、タカトの方では黄色の閃光が頬をかすめたようだ。

「お、お前らは鬼畜か…?」

闇の書の意味が呑み込まれていったのを見たでしょ?

それなのに二人してさらにダメージをおわせにいくなんて……

『劉!』

「なに!?!」

ゼロの警告とともにオレは闇の書の意味の方を振り向く。

「…おいおい。嘘でしょ…?」

そこには多少はダメージを受けているも、なのはとフェイトの攻撃を両腕で片方ずつで防いでいる闇の書の意味の姿が……

「ちッ!なのは、フェイト、回避しろ!」

「「え!?!」」

二人はどうやら何も分かっていない様子。

「「「エロト!」」」

「おっー！」

オレはエロトの名を叫ぶ。

すると、フェイトの方へと跳んで行った。

どうやらアイツも闇の書の意味の意図が分かっていたようだ。

「お前たちは…大事な守護騎士を…家族を消した。…そのようなヤツは自身の攻撃で…滅べばいいッ！…！」

闇の書の意味は言い終わると、その片手で受け止めていた魔砲をそれぞれ、なのはとフェイトに向かって投げつけた。

「「させるかああ…！」」「

「トレースオン 投影開始！アイキス 絶対守護の盾！…！」

「マ・セシルド…！」

オレとエロトは二人を護る盾を出し、闇の書の意味の攻撃を防ぐ。

「なんてヤツだ。」

《まさか投げ返すとはね》

防ぎきり、闇の書の意味を睨み付ける。

「だが、こんな序盤で押し切られてちゃ話にならないだろ。」

オレは超加速アクセラターを発動して一気に闇の書の意味に近づく。

「ふんッ!!」

近づいたオレはクリスで斬りかかるが…

「……………」

それを素手で受け止められた。

「なに!?!」

「……………ふんっ。」

クリスを捕まれたオレはそのまま振り回されながら、腹に蹴りを入れられ、地面に落下していく。

「……くっそ……」

上空ではなのはとフェイトが心配そうにオレの事を見てくる。

「……………」

と、その横で闇の書の意味は手を上に掲げ始める。

「……咎人達に、滅びの光を……」

「「……っつっ!!!!」」

瞬間、オレとエロトの顔が強張る。
闇の書の意味の掲げた手の先にどんどんピンク色の魔力が集束し始める。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ……」

「まずい！みんな逃げろーッ!!!!」

「「え!?!?!?」」

オレのいきなりの大声に驚くのはとフェイト。

「ちッ…エロト！」

「ああー！」

エロトがすぐになのはとフェイトを両脇に抱える。

「きゃあああああああー！！！！！！」

それになのはとフェイトが叫び声をあげる。

いや、気持ちは分るんだがな……。

「なのは！フェイト！！今はそれどころじゃないんだ！！」

オレの言葉に静かになる二人。

あとは……

《エロト、アリサとすずかも頼めるか？》

《いいけどよ…お前はどすんだ？》

《オレは……》

未だに集束準備に入っている闇の書の意味を見る。

《オレは、あのスターライトを相殺させる》

《な、！？》

オレはそこで念話を切る。

きつと、このスターライトはエロトの魔力で原作の何倍も範囲が広がっているはずだ……。

だったら、ここでオレが喰いとめる！

「クリス！」

『あいよ〜！ Load Cartridge』

四発カートリッジをロード。

そして銀色の魔力を一気に放出させ、さらに……

《「創造神の目発動！！」ジェネシスアイズ》

目に不思議な模様が浮かび上がり、血が垂れる。

「う……この血が出る違和感はどうにかなんないのかな……。」

《痛そうだよ〜？》

血は拭いても拭いても流れ出る。

「諦めるしかないのか……。」

血を拭き取るのを諦め、クリスを握りなおす。

世界終焉の覇者とスターライトブレイカーは衝突すると同時に周りに衝撃波のようなものが弾けとんだ。

「……………」

闇の書の意味は相変わらず無表情。

まるで、淡々と義務を果たすだけのような顔で、人を傷つけるのに何のためらいもないみたいだ。

《りゅ、劉…ちゃ…ん……！》

フィオネも最大限にオレの魔力を活用できるように調整してくれる。

「…大丈夫だよ、フィオネ。」

そのフィオネの頑張りを無駄にしないためにも…
オレは……

「クリス！！耐えてくれ！！」

この魔法で一度、クリスとゼロは大破している。
今回もこれ以上全力でやったらどうなるか分らない。

『ふふッ。マスターの願いを叶えるのもデバイスの役目よ。』

それでも、クリスは何でもないかのように答えてくれた。

『そつだな。俺たちは負けない。』

「はあ……はあ……やった……！」

《そ、そうね……》

結構今ので魔力を消費してしまった。
クリスマスにもだいが負荷をあたえちゃったし……。

「……………」

「……くっ……」

いまだに無表情で上空からオレ達を見下ろす闇の所意思。

「まだ……消えないのか……？」

「あたりまえだろ。お前を倒して……はやてを助けるまではな……！！！」

「理解できないな。」

闇の書の意味はオレに両手を向ける。

「主の大事な家族を奪いながらも、己は生き残ろうとしている……
主が受けた痛みを知れ。」

「な！？」

《う、うそでしょ？》

両手には次々と魔力が集まっていくのが分る。

そしてコイツはエロトのリンカーコアを蒐集している。

「…まいったね、これは……」

「…ディオガグラビドン……ダイバラビランガ……エクセレス・ザ
ケルガ……ディオリグノオン……」

闇の書の意味はオレに向かって、いくつものガッシュの上級の呪文を放ってきた。

第71話：いやいや…チートすぎるでしょ？ by劉（後書き）

マ「遅れてしまった申し訳ございません！では、感謝コーナー！」

キヤ「メガネ様、ユタ様、光闇雪様、madao様、Arishia様、けーくん様、紅 幽鹿様、黒龍様、月光閃火様、畏無様、バラランシャ様、暇人様、夜神様、感想ありがとうございます」

ぜ「光闇雪様からは、信慈特製七色シリーズ第六段『七色ケーキ（ホール）』」

紅 幽鹿様からは、雫と瑠璃に、ジャンボチョコレートパフェ、劉にISS【紅椿】

畏無様からは、マーボーに『回復薬グレート』を混ぜたパン、『破魔の暴食』、『必滅の憤怒』を頂いた。いつもありがとうございます。』

ファイ「そしてゲストの登場よ。」

ク『え〜っと…あ〜ロリコンと…ロリコンが来たわ〜。』

ア・春「ちよつとまてえ！…！」

瑠・雫「〜〜〜！！」「ビクッ

ク『ほら二人とも驚いちゃったじゃない。』

ア「あ、ごめんね？」

春「す、スマン」

マ「え〜、という訳で、『神に何度も殺された青年』から春人とアリシアが来てくれました〜!!」

春「そ、そうだ。今回は何でも好きな料理を作ってやるぞ。前に約束したしな。」

マ「マジか!?!じ、じゃあお」「お前は論外だ、絹ごし!!」……
ですよね〜」

瑠「ホント?じゃあホットケーキが食べたいな。」

雫「わ、私は苺大福が食べたいですノノノ」

春「よしきた。」

フィ「やっぱりこの二人はお菓子系みたいね。」

ゼ『そうだな。可愛いからよしだッ!』

ク『アンタ、そろそろ通報するわよ?』

キヤ「通報されるのはクリスマスも同レベルですよ?」

春「ほら出来たぞ。」

瑠「わ〜!!」

雫「い、いただきます。あむ。」

ア「~~~~~!!! / / / /」

マ「…ん？なんかアリシアの反応が変だぞ？」

フィ「そうかしら？」

雫「モチモチですね」

瑠「ふわふわだよ」

ア「そう？よかったわね…‥‥‥じゅるり…‥‥」

ク『その作者？そんな緑色のパンなんか食べてないで…』

マ「いや、さつきバラランシヤ様の忠告を思い出したんだけどさ…‥‥
どうでもいっか。」

キヤ「いや、よくはないですよ。」

春「そうか。うまいか / / / /」

瑠・雫「うん（はい）! / / / /」

春「そうか / / / /」
「デレデレ

ア「~~~~~!もうたまんな〜い!!! / / / /」

ク『こうして人は大人に成長していくのよ。』

ゼ『二人が穢された……』

マ『まあ男相手はまだなんだからさ。』

フィ『しかも中々終わりそうな気配がしないんだけど。』

キャ『じゃあ、もうこのまま終わらせちゃいましょう。』

ク『そうね。そこで倒れている春人と暴走しているアリシアは後で
転移するわ。』

ゼ『そうだな。』

マ『まあアリシアを転移したらあの二人のうち一人が消えているっ
て事は……ないよな?』

キャ『が、頑張ります。』

マ『さて、では今回はここまで。あ、ついだとっては何ですが、
短編を二つあげてますので、そちらの方もよろしくお願いします。』

フィ『では、次回……!』

第72話：一気にせめる！vs闇の書の意味！！！（前書き）

今回も遅くなってしまいました。

では、さっそく。

72話スタートです！！

第72話：一気にせめる！vs闇の書の意味！！！！

まずい。

目の前にはディオガ級の術が連発でオレに迫ってきている。

こっちも防御をとろうにも、さっきの魔法の反動でか、体が言う事をきかない。

なにやってんだ、オレは。

やっぱりこの魔法は簡単に使うべきではなかったのか。

オレは攻撃を迫ってきたながらも、そんな事を考えていた。

《劉ちゃん！！》

あゝフィオネが大声で叫んでいるけど…どうしようもないんだよ。オレはそこで痛みに備え目を閉じた。

あれ？

痛みを備えて目を閉じても一向にその痛みはこない。
きつと感覚が麻痺したのか？
と、思いつつゆっくり目を開けていく。

「…え？」

そこにはすべての術を防いでいるエロトの姿があった。

「…てめえ…何してんだよ。」

エロトは防御しながらもオレに言うてくる。

「ぶ、ぶっし…て？」

エロトはなのは達と遠くに離れてたはずだ。

「ハッ、それはさっきまでの話だ…っぜ！」

エロトはすべての術を防ぎきると、一本の雷で出来た剣を出し……

「ほら、立てよ。」

もう片方の手をオレに差し出してきた。

「 あ… 」

オレはその手を慌てて握る。
なんだろう？

一瞬エロトがカッコよくみえた。

《劉ちゃん、その道には絶対に行かないでね！？》

フィオネが何か慌ててる……けど、どうでもいつか。

そんなのオレとエロトには関係n……いやいや！…！！

何を考えているんだオレは！！

あ、危ない…危つくオレはそっち系の道に走るところだった…。

「おい…どうしたんだ？」

エロトが手を差し出したまんまオレを見てくる。

「べ、別にお前がカッコよかった訳じゃないんだからなッ！…！！ノ
ノノノノ」

「はあ？？」

オレの言葉にエロトは怪訝な顔をする。

「俺はカッコいいに決まってるんだろ？」

そしてこの言葉である。

『劉ちゃん。そろそろアイツをどうにかしない？』

「うゝ…そ、そうだな。」

クリスに促されて、オレも片手にあるクリスを握りなおす。

「とりあえず二対一だ。こっちから一斉に反撃して、闇の書の意味に反撃の隙を与えないようにしよう。」

「ああ。それでいいか。」

オレは再び魔力を放出させ、身体強化をした。
エロトもどうやら同じ事をしているみたいだ。

「……………」

それを闇の書の意味はただ上空から見下ろしている。

「その目が気にいらねんだよお！！！！」

エロトが最初に闇の書の意味に斬りかかった。

「…ふんっ」

「なッ！？コイツ…！！」

闇の書の意味はエロトの攻撃を素手で受け流していく。

「オレもいるぞ！」

その後ろからオレの闇の書の意味に斬りかかる。

オレに気がついた闇の書の意味はオレに向けてザケルガを放つてきた。

「…ちッ!」

そのザケルガをクリスで叩き斬る。

その間にもエロトは闇の書の意味に攻撃を受け流されていた。

「ど、同時に相手をしている…?」

しかもほとんど動かずに。

「くっそお!」

エロトが強めに相手の腕をめがけて剣を振り下ろす。

ズンッ!!

「……………ッ!」

闇の書の意味はそれも受け流そうとするが、剣が腕に触れた瞬間鈍い音をたて、顔を歪ませた。

《い、今のは?》

フィオネはその光景に驚く。

オレは分るが、今はこの好機を逃す手はない。

「エロト! いますぐ離れるお!」

「お、おお。」

自分でも何をやったのか分っていないエロトは剣を引き、その場からいったん離れる。

闇の書の意味は未だに身動きが取れないみたいだ。

「フィオネ！」

《う、うん！》

フィオネに魔力運用のすべてまかせる。

あとは、無詠唱で一気に……！！

《「いくぞ！マーヴェラス・クリスタル！」》

クリスタル状の氷は身動きが取れない闇の書の意味の自由をさらに奪う。

『命中だ！』

《「よしッ！このまま一気に決める！」》

オレはさらに魔力の放出を爆発させていく。

《「インブレイスエンド！フィアフルストーム！グランヴァニッシュ！エンシエントノヴァ！インディグネーション！エクセキューション！！！」》

六つの上級唱術を一気に繰り出し、闇の書の意味に命中させる。

《「まだだ！」》

クリスを媒体にエクスカリバーを投影。

《「真名開放！【約束された勝利の剣】！！！」》

瞬間、クリスが黄金の光に包まれた。

「もう一つ投影だ！必滅の憤怒ゲイ・ツォーン！！！」

相手の防御とは関係なしに絶対必中する槍。

《「同時に喰らえッ！！！！！」》

投槍した後にその軌道に合わせて黄金の剣を振り切り、黄金の色をした光を放つ。

「ついでにコイツも喰らいやがれッ！！バベルガ・グラビドン！！」

そしてとどめに、エロトは超重力で闇の書の闇を海に叩き落した。

「それで、さっきのはなんだったんだ？」

闇の書の意味を叩き落したエロトはオレに近づきながら聞いてきた。

「お前、『家庭教師ヒットマンREBORN!』は知ってるか？」

「まあな。」

だったら知っているはずだ。

「お前は無意識にアタック・デイ・スクアアロ鮫衝撃を使っていたんだよ。」

「は？マジかよ。」

アタック・デイ・スクアアロ
鮫衝撃…渾身の斬撃を相手に受けさせることで、剣から発する振動波を剣を通して相手に伝え、相手の神経を麻痺させる技だ。
それを真正面から受けた闇の書の意味は一時的に体の自由を奪われて、身動きが出来なかったってことだ。

「ハッ。やっぱり俺は主人公だな。」

オレの横でエロトは満足そうに頷く。

「そういえば、なのは達は？」

さっきからのあとフェイト、ユーノ、アルフの姿が見えない。

「あ。すずかと、アリサを助けに行ったらよ。そこにアリシアもいてさ。アリシアは魔法の事知っていたから平気かな」と思ってたんだけど、すずかもアリサも魔法の事知っても何にも驚かなかつたから、その理由を聞いてると思う。まあ今のなのはとフェイトはここにいっても…と思って、俺だけ来た。」

エロトはオレに説明する。

「あの二人が手を出せないほど闇の書の意味を強くしたのは何処の誰だよ?」

「……………さあ?」

オレはジーンつとエロトを見る。

それにエロトはたっつぶりと間を空けてから答えた。

《あのさ、さっきので闇の書の意味は倒せたのかな?》

そこでフィオネが話に入ってくる。

「いや、さっきのではまだだろうな。」

ダメージは与えれたと思うけど、さすがにあれだけじゃあ倒れてはくれないだろう。

「さて、そろそろ原作ではフェイトが呑み込まれるはずなんだけど……思いっきり原作ブレイクしちゃったな。」

「……………だからそんな目で見んな。」

エロトはオレから目を逸らす。

まあこのままの状態でダメージを与えていけば、はやての意識は覚醒して、闇の書の闇が出てくるだろう。

『劉ちゃん、アイツが海から出てくるわよ。』

クリスがオレに知らせると同時に大きな水柱が上がる。

「随分と派手な登場だな。」

拳をパキパキと鳴らしながらエロトは顔をニヤリとさせる。

たぶん、今コイツの中では本当に主人公をやっているという充実感があるんだろう。

でもそれは油断を生む、とっても危険な状態だ。

「おいエロト。楽しむのは勝手だ。けど、油断はするなよ。」

一応忠告する。

「あ？わかってるよ。ただ俺はアイツの目が気に入らねえんだよ。」

そのセリフは気に入ってるのか？

まあ今のエロトは一応戦力になっているからそれ以上は言わないでおく。

「クリス。モードセカンド。」

『いいわよ、&Load Cartridge』

クリスをセカンドのツインガン型にする。
魔力は【暴風】

「エリアルランサー！ シュート！！！」

水柱に浮き出ている影に向かって10個のランサーを放った。
…が、

「ベルドグラビレイ！！！」

瞬間、オレが放った攻撃はすべて叩き落された。

《「まだあんな力が残ってるのかよ！？」》

「これ…無理ゲーじゃねえか？」

オレも段々そんな感じがしてきた。
上がっていた水柱はようやく収まり、そこから少しボロボロの姿の
闇の書の意味が現れた。

《「うん。ダメージは通ってるね。」》

『「じゃなきゃやってられないわよ。」』

うん。

クリスの気持ちも痛いほど分る。
闇の書の意味はその傷を魔力で覆っていく。

《「 つつ！！回復させてたまるかあッ！！！」》

せつかくここまで追い詰めたんだ。
それをチャラにされたらコツチの魔力が無くなって、それこそこの
戦いは終わってしまう。

《「クワトロフルアクセル4重加速！！！」》

オレはすぐに神速で闇の書の意味に近づく。
近づきながらも心の中で瞬時に罪の闇に犯される剣を思い浮かべ、
手に出現させた。
ミネルバクライム

「 つつ！！」

オレが目の前に来ると闇の書の意味はようやく気がついたのか、片
腕を突き出してくる。

それを横に避け、突き出してきた片腕に向かって罪の闇に犯される
剣で斬る。
ミネルバクライム

すると、その斬られた腕はダランと力を無くし、動かなくなった。
それによって魔力の集中が途切れたのか、回復しようと魔力で傷を
覆った部分の魔力はすべてなくなった。
悔しそつに顔を歪める闇の書の意味。

「よおし！よくやったぞ劉！！」

そこに、エロトが腕を組み上空から下りてくる。
なんだかその偉そうな態度にイラッときたのは…オレだけじゃない
はずだ。

「……………（ニヤッ）」

闇の書の意味はその光景を見て一瞬顔をニヤけさせる。

ん？今は……？

なんでニヤけたのか分らなかったオレ。

…が、

その答えはすぐにわかった。

闇の書の意味はニューボルツ・シン・グラビレイでエロトを引き寄
せる。

片方の手にはシン・バベルガ・グラビドンの重力を圧縮させた球体。

《「　　っ！！！！エロト！今すぐ……！！！」》

防御をとるように言おうとするが、一瞬の事で舌が回らない。

そのエロトも完璧に油断していたのか、防御どころか、それに反応
すら出来ていなかった。

いくらエロトでもアレをまともに喰らったら……

オレは創造神の目に魔力を注ぐ。
ジエネシスアイズ

『劉ちゃん！こんなところで使っているのー！？』

しょうがないだろ。

じゃないと…じゃないと、エロトが死んじゃう。

それだけは嫌だ。

何でこんな事を思ったのか分らなかつたが、オレはエロトがやられ
そうになっている所を見てまっさきにそう思った。

ここ数日でエロトの行動を見て、見直したからなのか？

わからない。

でも、ここで見殺しになんかできない。

そう思った。

《「間に合えッッ！！！！」》

オレは因果の引き金カウサリテイ・トリガーを発動した。

第72話：一気にせめる！vs闇の書の意味！！！（後書き）

ファイ「ねえ、因果の引き金で闇の書の闇を一気に引きずり出して、カウサリテイ・トリガーハッピーエンドにする因果に書き換えれば…」

マ「はい！！さっそく感謝コーナー！！」

キヤ「……え、ユタ様、光闇雪様、バラランシャ様、メガネ様、空言天狐様、畏無様、龍賀様、月光閃火様、madao様、紅幽鹿様、黒龍様、感想ありがとうございました！」

ゼ「お土産もユタ様からは、IS【ブルー・ティアーズ】

光闇雪様からは、七色シリーズ第七段『七色カレー』

空言天狐様からは、『破滅に狂う戦場』、興奮剤を混ぜたホレ薬

紅幽鹿様からは、雲にISMステリアス・レイディ、瑠璃にIS

ラファール・リヴァイヴ・カスタムIE、劉にIS甲龍とISシユ

ヴァルツエア・レーゲン、マーボーに飛龍刀【楓】

黒龍様からは、混沌物質とハンバーグを頂いた。ありがとうございました。』

ファイ「ねえ、それでさ。なんで「さあ！今回もゲストが来ているぞ
！！」…むうう！」

ク「つつても保護者なんだけどね。』

ア「ちなみにまだ私もいるよ。」

キヤ「あ、アタシの強制転移から逃れるとは……やりますね。」

瑠「／／／／／／／／」

雫「／／／／／／／／」

ア「ではでは続きを…」「ア〜リ〜シ〜ア〜っ！…！」「…え？」

リ「〜〜〜！…！」

マ「あ〜こっちのイライラしているお方が…今回のゲスト様です、はい。」

リ「えっと、ご紹介が遅れました。『神に何度も殺された青年』のリニスです。」

フィ「今回はアリシアを連れ戻しに来たと？」

リ「はい。まったくこの娘は。さ、早く帰りますよ！」

ア「え〜〜！まだ居たいよお！…！」

瑠「／／／／／／／／」

雫「／／／／／／／／」

リ「ほらこの娘達もこんなに…。はああ。どこでアリシアの教育を間違えたことやら…。」

ア「ちよっ！まるで私が道を少しズレた変態さんみたいない方やめてよ！」

マ「いや誰もそこまでは言っていないぞ？」

リ「さつきから聞いてれば…皆さん似たり寄ったり…五十歩百歩じゃないですか！」

マ「そ、そうく」そうなんですッ！」「…はい。すみません。」

リ「はい、皆さん正座！！」

キヤ「え、えつとオ…そこまで本気にならないでm」せ・い・ざ！…はい。」

ク「り、リニス？」

リ「なんですか？」

ク「わ、私、正座できないんですけどお…なんでって？私、デバイスですから！体ありませんから！…な、なんちゃってえ。アッハハハハハハッハハハハハ」

リ「……………」

ク「ちょっと、今の私のギャグ…ぷくく…よ、よくない？…アーツハハハハハハッハハハハ。」

リ「……………」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

ク「アッハハハハハ…はあ……………私…やちゃったかしら…？」

リ「この中で一番の変態が何を言っているのやら。大丈夫です。デバイス陣の方々にはこの擬人化プログラムを使っていたきます。」

ゼ『よかつたな、変態。』

ク『うっさいわよロリコン。』

マ『どっちもどっちだな。』

フィ『その中に今の私達もいるのよ。』

リ『はいそこッ！私語は慎んでください！…！』

ク『え？死後は誰もしゃべれないわよ？』

リ『何か…言いましたか？（にこっ）』

ク『私…しばらく黙るわ。』

キヤ『それが賢明ですよ。』

ア『はああ。あそこに二人がいるのに今回は手をだせないなんて…』

マ『まだそんな事言っているのかよ。』

フィ『バラランシヤ様も大変だわ、これは。』

マ『おゝい。瑠璃と雲〜。二人でもうしめてくれ〜。』

雲『え？私達ですか？』

瑠『だって。では、え〜っと感想をいっぱいくださいね。』

雫「え、えっと…あう…な、何を言えば…？」

瑠「コレを読めばいいよ」

雫「か、感想をいつぱいくれにゃい、あう…ないとお、おしおきですからねッ！／／／／／」

瑠「では、次回もよろしくお願いしますね。（にこっ）」

雫「お、お願いします／／／（にこっ）」

第73話：終わった……かも？この術って最強だよな？（前書き）

え〜今回は更新が遅れてしまいました本当に申し訳ございません！

しかも、今回は…いえ、今回も文章が迷走しています（汗

こんな駄文でもイイという心が広い方だけどうぞです!!!

では、73話はじまります！

第73話：終わった……かも？この術って最強だよね？

《「間に合えッッ！……！」》

両目に魔力を集中させる。

同時に流れる血の量も増えた。

この血は使う魔力に比例しているのかもしれない。

「ぐ…っ…あゝあゝあゝ！……！」

闇の書の意味はエロトに向けていた手にあつた重力球を消し、その場でエロトから距離をとる。

2204

「劉、おめえ何をした？」

闇の書の意味から解放されたエロトはオレに聞いてきた。

「いや、アイツが…闇の書の意味がエロトにやろつとしていた因果を消させてもらった。」

いまだに流れてくる血を拭いながら説明。

「い、今のがお前が言っていた…」

エロトは信じられないというような顔でいる。
まあ普通はそうだろうな。

「本当はギリギリまで使いたくなかったんだけどなあ」

こうなったら闇の書の意味がガツシユの術を使える因果を消して、
一気に終わらせる！

《劉ちゃん！前ッ！！》

「え？」

フィオネの叫び声につられて前を見る。

そこには何かの術を発動している闇の書の意味がいた。

「なんか発動しているっばいけど…」

別に闇の書の意味の姿には何の変化もなく、何かを放ってきている
わけでもない。

ただ、魔力が周りに四散しているのがわかったからだ。

「…ははっ……やっちゃまったよ…」

そこでエロトが額に汗を浮かべながら言ってくる。
しかも少し顔色が悪い。

「どしたんだ？」

その様子に不安を覚えたオレはエロトに聞く。

こんな様子のエロトは中々見ないから本当に不安になる。

瞬間、

「…っ！」

エロトが身体強化のために纏っていた魔力が消滅した。
何してんだよ？

オレはエロトに向かって言おうとするが…

「え？あ、あれ!？」

今度はオレとフィオネのユニゾンが解けてしまった。

もちろん、自分から解くはずもない。

強制的にだ。

オレとフィオネユニゾンを強制的に解けさせるほどの術……

「シン・ポルク…か。」

シン・ポルク…光や音で相手の術を消し、触れる事でダメージを与え、それらを幻覚で事実と錯覚させる事ができる。接触の命令では相手の動きを止める事もできる。但し自動ではないので術者自身が直接命令を送る必要がある。背景や姿は幻ではないので自己暗示で解ける事はない。また長時間この術の影響下にあると精神が崩壊する危険性がある。

ようは何でもあり。

この術を発動している間の術者は無敵と言っても過言じゃない。事実、ガツシュの原作ではキャンチョメがこの術を使った際に、ガツシュに『バオウ・ザケルガ』を発動させた上でほぼ無傷の勝利を納めている。

「ちっ、面倒くせえことになっちまった。」

エロトが苦い顔をする。

そりゃそうだ。

今この舞台ではオレ達には何にも出来ないだろう。

「ソルド・ザケル！」

エロトが試しに雷で出来た剣を出そうとするが…

「ダメだ。何にも現れねえ。」

予想通り剣は出てこなかった。

「じゃあ、コツチからも。」

「あ、おいッ！」

エロトが何か言ってきたが、オレはクリス片手に闇の書の意味に向かって跳ぶ。

「…もう、お前達に勝ち目はない……おとなしく……消えるッ!!」

闇の書の意味がクリスに向かって手を伸ばす。

オレはその手をクリスでそのまま叩き斬ろうとするが…

「なッ!？」

『ちよっ、ちよっと!？』

クリスが強制的に解除された。

強制解除された今のオレは武器も何も無い、無防備な状態だ。

そして闇の書の意味との距離は1mもない。

「まずっ!」

オレはすぐに顔の前で両手をクロスさせ防御の姿勢をとる。

それと同時に闇の書の意味がオレとの距離を詰め、振り上げた右拳をオレの構えている両腕めがけ振り落とした。

「ぐッ…!!」

それをオレはなんとか耐える。

一応常時体力等EXだから。

それでも伝わってきた衝撃は強かった。

最初の一撃は耐えるも、次に闇の書の意志はオレの頭めがけて回し蹴りをしてくる。

オレはその攻撃も腕でガードするが…

「…っ!しまッ!」

がら空きになったボディに手のひらを押し付けられ……

「ガルバドス・アポロディオ!!!」

いくつもの巨大な斬激を喰らう。

「~~~~っつ!!!」

意識が飛びそうになるオレ。

「ふんッ!!!」

追撃に闇の書の意思はオレの頭を引っつかみ、エロトめがけて投げられた。

投げられたオレはそのままエロトにキャッチされる。

「おい!劉!!」

キャッチされたオレはエロトに肩を揺さ振られ、フィオネはオレに

回復魔法を使おうとする。

…が、

「そ、そんな…」

フィオネの回復魔法は発動しなかった。

あーこれからどうしよう…
ぼんやりとした頭でオレはこれからの事を考えた。

第73話：終わった……かも？この術って最強だよな？（後書き）

マ「すみませんすみませんすみません」（土下座中

リ「それだけですか？」

ア「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ク「私たちまでとぼつちりじゃない。」

キヤ「うえええん。足が痺れました〜！」

フィ「いやいや、アンタ普段から着物っぽいので着てんだからこれぐらい耐えられるでしょ!？」

キヤ「服は関係ない!!偏見ですよ!!!!」

ゼ『……瑠璃、雫進めてくれ。』

瑠「はい。まずは感謝コーナーだね。」

雫「光闇雪様、バラランシヤ様、メガネ様、龍賀様、たまご様、Arishia様、ユタ様、けーくん様、夜神様、畏無様、Madao様、空言天狐様、黒龍様、紅 幽鹿様、感想ありがとうございました。」

瑠「お土産は、龍賀様からは、瑠璃や雫に相手にトラウマを見せる魔法具

たまご様からは、劉に媚薬入り性転換薬

紅「幽鹿様からは、バーサーカー（アルクエイド）を貰いました。
ありがとうございます！」

雫「…お、終わりました。」

リ「まったく更新が遅いわ。書いてもこんな内容だわ…やる気ある
んですか？」

マ「は、はい…」

ア「り、リニス〜そろそろ「なんですか？」…何でもありません。」

リ「アリシアもそうです。何度私のバインドを破壊していたずらを
すれば気が済むんですか？」

ア「ち、違うもん！これはいたずらじゃなくて私の純粋な愛だもん
！」

リ「そんなのは知りませんッ！」

ア「り、理不尽すぎるよーっ！…！」

マ「……おい、瑠璃、雫。もうしめていいよ。」

リ「何勝手にしゃべっているんですか…！」

マ「…ごめんなさい…！…！」

零「……はい。」

瑠「じゃあ。次回もよろしくお願いしますね！」

第74話：この作戦は……ご愁傷様だ。（前書き）

遅れてすみません!!!

そして、短いです！

では、はじまります！

第74話…この作戦は…ご愁傷様だ。

「どつする……か。」

エロトに受け止めてもらったオレは起き上がり、考える。
きつと、オレ達の攻撃は消させるだろうな。

だったら外部から闇の書の意味の攻撃を一瞬でも崩せれば……

「あ、そうだ！」

フィオネが何か閃いたようだ。

まあオレも今考え付いたところなんだけどさ。

オレはエロトの近づきある作戦を耳打ちする。

「はああ！？おま、それ本気か！？」

……まあ、下手したら一気に戦闘不能になるだろうけどさ。
それでも……

「本気だ。と、いうよりこれしか手は無いだろ？」

「……っ。そうだけどさあ。」

エロトは苦い顔をして上空の闇の書の意味を見上げる。

「今この瞬間、本気で後悔したよ。」

エロトは一度大きいため息をつき

「っしや！いつちよやってやる！！！」

目つきを変え、真剣な顔になる。

よし、そうと決まれば……

「フィオネ。後のことは任せた。オレ達は時間を稼ぐ。」

「了解！」

その場で敬礼のポーズを取るとフワリと浮かんで安全な場所に隠れた。

まあシン・ポルクの発動中は安全な場所なんてないんだけど。

「クリス、起動。」

『ッハ！わ、私は一体……？』

どうやら強制的にスリープモードにさせられたから、記憶が途切れているのかもしれない。

「大丈夫か？今からある作戦を開始する。内容は」

『ええええ！?!?!?な、何考えているのよ劉ちゃん!?!』

クリスもこの作戦にかなり驚いているようだ。

うう……そんなに驚かれるとオレも不安になってくるじゃんか。

「でもこれしか手はないんだよ。ほら。」

『わかったわ。劉ちゃんの言うことは何でも聞いてあげちゃう。フ
アーストモード。』

クリスを再び起動して握る。

「いくぞエロト!……って、あれ?」

『劉ちゃん、あそこにいるのって……?』

「ん?……あッ!……!」

エロトはすでに闇の書の意味に接近して行っていた。

「オレ達も行くぞ!」

アクセル・ターン（超加速）を発動して闇の書の意味との距離を一気に縮めていく。

「まだ……続けるのか？ デイガン・テオラドム！！」

闇の書の意味はオレ達の存在に気がつく、すかさず攻撃を開始してきた。

「そんな術ツ……ニューボルツ・マ・グラビレイ！！」

こっちに放たれた術をエロトが発動した術で撃ち落とす。

どうやら、闇の書の意味が反応できない速さだったらシン・ポルクの効果は発揮できないのかもしれない。

これなら充分時間稼ぎできる。

「クワトロフルアクセル4重加速！！」

オレはそこで神速を発動してクリスの刃先を魔力でコーティングする。

「つつ！！！！！！」

歯を食いしばり、思いっきり力を込めながら闇の書の意味に向かってクリスを振り切った。

「……ちっ！！」

けど、そのクリスはまたもや強制スリープにさせられる。

「お前には学習能力が無いのか？」

闇の書の意味は今度はエロトに攻撃しようとする。

「はっ！学習能力が無い？んなことねえってのッ！！！！」

クリスを消された後もオレは闇の書の意志の背後からそのままの勢いで拳を振り下ろした。

「がはッ！！！！」

振り落とした拳は闇の書の意味の後頭部にヒット。

ここで一瞬だが、シン・ポルクが解けた。

「今だ！創造神の目……っ！！！」
ジエネシスサイズ

すぐに因果の引き金を発動しようとするもそこで頭に痛みが走った。
カウサリテイ・トリガー

「あ………がっああああああああ！！！！！！！！！！」

あまりの痛さにそこで動きを止めるオレ。

「貴様あ！！！！」

闇の書の意味はオレに向かって何か術を発動しようとしているが、今のオレには何も出来ない。

ただ、痛む頭を抑えているだけで精一杯だ。

「おい、闇の書の意味。」

「……………」

「俺の事を忘れてんじゃねえよ!!」

エロトの腕に業火が纏わりつく。

それは近づくだけですべてを焼き尽くす勢いのある炎。

「ディオエムル・ゼモルク!!!」

その炎を纏った腕で闇の書の意味を殴りつけ、殴られた闇の書の意
思は業火に焼かれながら吹っ飛んだ。

「はぁ…はぁ。おい、てめえ……………」

エロトが術を解くと、オレに何か言いたそうな顔をする。

「……………なんでもないよ。」

だが、オレはそれ以上追求されないように遮り、エロトに近づく。

「……………」

まだ何か言いたそうなエロト。
「たくこいつは……、本当に……。」

「なんでもないって。それよりも先にアイツをどうにかしないと。」

そろそろ作戦が実行されると思うんだけど……。

そこで、少しバランスを崩しかけるオレ。

そのままエロトの肩に寄りかかる感じになる。

……まあ空中だけだよ。

「お前……やっぱりあの魔法はそれだけのリスクがあるんだろ？」

「だから、平気だってば。」

エロトから離れる。

『りゅ、劉ちゃん。』

クリスがオレの心配をしてくる。

こいつもだったな。

いつもはぶざけているのに、こういう時は本気でオレの事を心配してくれる。

「ああ大丈夫。ありがとな。」

『あーやだ』

クリスからの返事と同時に……

オレはエロトを抱え、4重加速で距離をとる。

クワトロフルアクセル

『劉ちゃん！早く！もつと！！！！』

「わかってるつつうのツ！！！！」

なんでここまでいそいでいるのか。

それはシン・ポルクの術を破るため。

あの術は無敵な反面、一つだけ弱点がある。

それは、遠距離からの攻撃だ。

術者が気づかない範囲からの攻撃が直撃したら……

そこでオレは考えた。

長距離魔法が得意で、この術を破れるほどの威力がある魔法を持っているアイツのことを。

「いっくよ~~~~！！！！！！全力全開！！！！！！」

第74話：この作戦は……ご愁傷様だ。（後書き）

マ「本当にスイマセン!！」

零「では、感謝コーナーです。バラランシヤ様、光闇雪様、m a d a o様、畏無様、メガネ様、黒龍様、空言天狐様、夜神様、けーくん様、紅 幽鹿様、毬藻様、感想ありがとうございます!！」

フイ「お土産は、光闇雪様からは、はやてがスイーツで作った『なのはの家』、『すずかの家』、『アリサの家』、『フェイト・アリアの家』、わしが作った『はやての家』…それぞれの家の中には『夫』の劉がいる

m a d a o様からは、ケーキ

紅 幽鹿様からは、BBQセットとお肉、野菜を貰いました。ありがとうございます!！」

マ「え〜、ゲストの予約もなくなったのと、ちょっと時間がないので今回はここまで!！」

瑠「感想いっばいください!！」

ク「なるべく早く更新させるから。」

マ「本当にスイマセン!！」

ゼ「じゃ。、次回もよろしくな!！」

マ「感想いっばいください!！」

全『それはもう言った（お）！……！……！』

マ「……お（泣）」

「危なかった……」

「もうあんな作戦は絶対にやらねえぞ。」

「う、う、ごめん。」

オレは何とかエロトを抱えたままなのは特大SLBから逃れる事に成功していた。

あの規模のSLB……いくら非殺傷設定でもまともに喰らったらどうなっていた事が……。

「そこで、闇の書の意味は？」

まだ煙が晴れないなか、エロトは目を細めて闇の書の意味を見つけようとしていた。

まあアレだけのを喰らったんだから気絶くらいはしてくれているだろう。

「おーい！劉ちゃんー！！」

「なのー！！」

オレも闇の書の意味の確認をとろうと思っていたところで、なのはとフィオネがやってきた。

なのはの方はさすがに三ケースはやりすぎたのか、魔力切れのせいでふらふらだ。

「お疲れ、なのは。」

そんななのはの頭を軽く撫でてあげ、回復魔法をかけてあげる。

なのははオレに一言ありがとうと言つと、オレによっかかるようにして目を閉じた。

きつと、体力も限界だったのだろう。

「……本当にお疲れ様、なのは。」

誰にも聞こえないくらいの小さい声でそつと告げ、なのはをエロトに預ける。

「お前はどうすんだよ?」

「今のうちにとつと改変しようと思う。フィオネ!」

オレはフィオネとユニゾンし、闇の書の意味を探す。

まだ煙が邪魔で視界がはっきりしない。

オレは魔力変換【風】をつかって、周りの煙を晴らす。

すると、その中央に闇の書の意味が空中に浮きながら気を失っていた。

その闇の書の意味にオレは近づく。

《「やっぱ、アレをまともに喰らったんだな。」》

……うん。ご愁傷様だ。

シエネシスアイズ
創造神の目を発動し、因果の引き金の準備に入る。

因果の書き換え、まずは カウサリテイ・トリガー ガツシュの術の使用抹消からだ。

目に魔力を込める。

込めると同時に、それに比例して血が流れてく。

《「~~~~~つつ!!!!」》

魔力を込めた途端、頭に激痛が走る。

この痛みはさつき受けたのと同じ痛みだ。

たぶん、この魔法は本当に使いすぎはよくないんだろう。

《ちよっ…!この痛みって……?》

フィオネがこの痛みに声を震わせる。

まずい!

この魔法はフィオネの魔力運用能力が絶対に必要だ。

持続させるのに、ここで集中力を切らさせるわけにはいかない。

「デバイスとの全神経系カット。」

オレの周りに魔方陣が浮かび上がると同時にそれはオレの周りを回り、消えていった。

《え?痛みが……って何してんの!?》

痛みを感じなくなったフィオネは一瞬不思議な顔をするが、すぐに気づく。

けどその事は今は置いておく。

「ほら、今は集中してくれ。」

《……う、うん。》

しびしびといった感じでフィオネはオレの指示に従ってくれる。

『あ、フェイト達も来たみたいよ?』

クリスがフェイトたちの魔力を感知したみたいだ。実際、その数秒後にはタマモがフェイト、クロノ、ユーノ、アルフを連れて転移してきた。

転移してきた組はエロトがなのはを支えている事に驚いているようだ。

そこからはなんだか騒がしくなっているし……。

オレは一瞬そっちに目をやるが、すぐに闇の書の意味のほうに意識を集中させる。

《「次は……」》

次はどうしよう?

このまま直接バグを取るか?

まあそのためには一応はやての意識を覚醒させるか。

《「八神はやての意識の覚醒」》

オレは再び魔力を込め、はやての意識覚醒が成功する因果に書き換える。

《……ん……あれ？こじは……？？》

成功だ。

闇の書の意味の中からはやての声が念話で聞こえてくる。
どう説明するかな……。

《「えっと、は、はやて？」》

《　っ！？そ、その声は……劉ちゃん！？》

おお？

なんかはやてがオレの声を聞いて驚いて……っていつよりも焦ってる？

《あ、あの、えっとな……じ、これは……》

何かを説明しようとしているはやて。

……あーそういうことが。
なんとなく察したオレ。

《「はやて落ち着いて。」》

《で、でもウチ、劉ちゃんを騙してて……その、魔法の事とか……》

《「知ってたよ。」》

《……え？》

オレの返答に予想しなかったのか、はやてはオレの言葉にさっき
までとは違い、いきなりおとなしくなる。

《「知ってたよ。はやてが闇の書の主だって事は。それにシグナム
達ヴォルケンリッターの事もさ。」》

はやては何も言い返してこない。
オレはまた話し出す。

《「魔法のことだって。はやてだけじゃない。オレだってはやての
事を騙してた事になるしさ。」》

まあ今回の場合はしょうがないと思う。
だっていきなり友達に、オレ魔法使えるんだ！……なんて言ったの
を想像してみてよ？

次の日からオレの半径2mからは人が消えると思う。

《で、でも！》

まだ何か言おうとするはやて。

まったく、まだわかんないかな。

《「何も言わなくていいよ。オレは、はやてのすべてを知った上で
助けるんだ。そのために今はいるんだからさ。だからはやては
何も言わないで。おとなしくオレの事を信じて待っててよ。」》

《あ……／／／りゅ、劉ちゃん／／／／》

どうやらやっと理解してくれたみたいだ。

フィオネがなんかぶつぶつ言っている。

人の中でぶつぶつ言うのはやめてほしいな。

《「さつてと、次ははやて達の救出だね。」》

闇の書の意味に手をかざす。

《「因果の引き金カウサリテイ・トリガー！！！」》

オレははやてと闇の書の防御プログラムを切り離しにかかる。

この後ははやてにヴォルケンスを復活させてもらい、オレが直接闇の書の防御プログラム　　闇の書の闇の因果そのものを消す。

そして、アインスの生存する因果の修正。

まだやる事が結構あるなあ。

《よしよし！これで完了！！》

フィオネが最後に魔力を一気に送り込むと同時に、はやてを闇の書の防御プログラムから切り離すことに成功した。

「はあはあ……つ、次は……。」

『ちよっ大丈夫なの？』

『さすがに無理して使いすぎじゃないか？』

「大丈夫だよ。ね、フィオネ？」

《全然大丈夫じゃないもんツ！！！！》

オレの言葉にフィオネが怒鳴り返す。

はやてはヴォルケンを復活させると、タマモの所に行った。なんでもタマモが最終チェックしてくれるとの事だ。

「あとはこの、闇の塊っぽいコイツの因果を消せば……っつ！?!
?くっ……!!!!!!1」

またもや頭に激痛が走る。

しかもこの痛みは今まで以上だ。

「うう……くっそおお!!」

頭を押さえながら回復魔法をかけていき、痛みを抑えようとするが、今度は吐き気もしてきた。

「ん？おい、どうしたんだ？」

オレの様子に気がついたエロトがこっちにやってくる。ほかの連中はエロトから預けられたなのは様子を見ている。なのははまだ目を覚ましていない。

「あ、ああ。エロトか……なんでもない……よ。」

「嘘つけよ。ぜってえ無理してんだろ？」

エロトはオレの言葉には耳をかさないつもりらしい。
最初ツからオレの言う事を信じていない。

……ったく。

「いや悪い。さすがにちょっと無理しちゃったかも。」

ここは素直に言っておく。

「やっぱりな。それで？その状態でお前はどつするつもりだったんだ？」

「あの塊の因果を、消そうと。」

オレはまだ暴走していない防御プログラムの塊を指差す。
そろそろ何とかしないと覚醒するかもしれない。

「なんだ。だったら最後はフルボッコで決めるぞ。まあなのはまだ寝ているが。」

「……は？」

エロトはそんな事かと言う様な顔でオレに言うてくる。
だけど

「今はなのはの魔砲がないんだぞ？そんな状態でどうやって……」

「んなモン。俺がカバーしてやる。それにお前だっているんだしな。簡単な事だろ？」

暴走前に消すのが一番手っ取り早いのに……。

コイツはリスクが大きい方を簡単に選択してくる。

《私は今回だけはエロトの意見に賛成だな。》

『そうね。私も今回だけは。』

『今回だけ……な。』

つと、今度はデバイス陣もエロトの意見に賛成する。理由は大体察するけどさ。

はああ。

しょうがない。

もしフルボッコを失敗すればたぶんこの物語が幕を閉じるだろうけど……

「いいだろう。みんなで全力全開のフルボッコだ。但し、失敗したら後はすべてオレ任せしてもらおう。いいな？」

「失敗はしないさ。」

エロトがオレに向かってニカッと笑ってくる。

「じゃ、あそこ^{この}の連中にも伝えに行こうぜ！」

エロトはオレの腕を強引に取り、タマモたちの所へと向かった。いつのまにか、さっきまでの頭痛は消えていた。

マ「遅れてしまいました……どうもすいませんでした……!!」

エ「はい感想コーナーいくぞお。」

フイ「え……!? エロト!?!?」

劉「蒼影様、紅 幽鹿様、光闇雪様、バラランシャ様、龍賀様、畏無様、毬藻様、m a d a o様、混沌の魔法使い様、メガネ様、雨季様、たまご様、黒龍様、けーくん様、感想ありがとうございました！」

ゼ「そして今回は劉なんだな。」

ク「アンタ、少しがっかりしてるでしょ？」

キヤ「お土産は…蒼影様からは、デフォルト劉の刺繍入りハンドタオル10枚と翠屋のケーキ詰め合わせ

紅 幽鹿様からは、雫に幸運のルーンを刻んだ指輪

光闇雪様からは、はやてとのスイーツ合作『聖祥小学校』（劉たちが全員、中に隠れている）

バラランシャ様からは、夏奈からスターライトブレイカー（追尾機能付加）を100発

龍賀様からは、マーボーの特訓相手にアーカード（通常、ロリ、伯爵）とアンデルセン（通常、エレナの聖釘使用）、ウォルター（老若）、瑠璃と雫にクレープ全種（龍斗作）

m a d a o様からは、『チアリーダーの服』と『ポンポン』

混沌の魔法使い様からは、龍也特製、ケーキと紅茶の葉っぱをいた

いただきました。ありがとうございます」

マ「なんだか皆様のお土産のクオリティが上がってきてる気がする……」

フィ「実際にとんでもないくらいに上がってるよね。」

劉「すごいなあ。オレも何か皆様にあげないと。」

マ「じゃあ、劉の入浴シーンの写真でも。」

劉「えっ?」

マ「ほしい人に届け!この写真!」

劉「な……ッ?!?!」

マ「ではでは今回はここまでです!」

フィ「次回から予約をいただいたゲスト様を招待させていただきますー!」

ク『感想もどしどしちょうだいな。』

キヤ「次回もよろしくおねがいしますねえ」

第76話：やっとAS終結。オレって毎回ポロポロになるけど本当にチートなの

………すいませんでした………。

エロトが胸を張りながら言った。

その様子を見て、各面々は渋々ながらも納得していった。

普段はどうしようもないコイツでも力があることだけは皆理解しているんだろう。

だからこそ、皆は何も言わずに納得したんだ。

『ほら、納得したんなら劉ちゃんから離れなさい。ったく、これだから油断できないのよ。』

クリスが大声でフェイトたちを怒鳴る。

その大声にびっくりしたのか、フェイトとヴィータは一瞬で離れていった。

何にもそこまで大声で言わなくても……つか、別にいいじゃん。

《ふん。》

フィオネから何か怖いオーラが……。

まあたしかに若干顔は近かったけどさあ。

はああ。

なんかもう……疲れたよ。

「よし劉、準備に入るぞ。」

エロトがオレに肩を貸してくれる。

「ああ。ありがとな。」

「気にすんな。おら、てめえらもさっさと準備には入れや！」

オレ達のことをボーっと見ていたほかの面子に指示するエロト。クロノがそれに続き、フェイト達に指示を出していった。

「よしっ！これで準備は完了だな！」

なのはを抜いた面子でAsのフルボッコのシーンの配置につく。すでにシャマルに回復の魔法はかけてもらっている。これで少しはもつだろう。

《本当に大丈夫なの？》

『無茶しすぎよ。まったく、そんなに私に癒されたいのかしら。…ま、まあ私としてはいつでも大歓迎なんだけどね。でも心の準備

というものがあるわけで……いやいや、拒んでいるわけじゃないのよ？

それは本当。ただ……ただ、ちょっとだけ私に……勇気を与えてくれる時間がほしいの／＼／＼』

『……………』

ウチのデバイス陣は今日も絶好調！

「さ、ふざけてないで始めようか。」

『ひどいッ！私はふざけてないわよ！？でも悔しい！感じちゃう。さすが魅惑の劉ちゃんボイス！！』

「……………」

「……………まあなんだ。」

「君も本当に苦労しているんだな。」

おい、エロトとクロノ。

慈愛に満ちた目でオレの肩を叩くなよ。

泣いちゃうよ？

「おい、わかつてるなッ？」

みんなの顔を見る。

既にみんなはカートリッジをロードしたりと、準備に入っていた。

「まずは、あの五層バリア。俺が一気に破壊してやる!!！」

エロトがみんなの前に出ながら足元に巨大な魔方陣を生み出す。

あのバリアはたしか魔法と物理を交互に含んだバリアのはず。

エロトはどうやって破壊しようとするんだ？

「喰らえッ!!!強化版バオウ・ザケルガーーーーーッ
ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

自身の魔力で作り上げたバオウを一気に放出させるエロト。

そのバオウは原作のガッシュよりでかいかもしれない。

つてか、そんな術使えるんならさっきの時も使えよ!

『ふっ、まだまだね。』

『お前は何に張り合ってるんだ?』

ダブル・アクセルターン
《「二重超加速」》

途中、闇の書の闇がオレに向かって触手を伸ばして阻もうとするが、二重超加速で回避していく。後ろではほかに伸びた触手をザフィーラやアルフ、ユーノ達が防いでいた。

「君達がこの触手の包囲網を突破できるようにしてやる！八神はやて！..!」

「了解。劉ちゃん、頼むでえ！彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。」

「いくぞデュランダル。悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ。凍てつけ！」

二人がデバイスを闇の書の間に向ける。

「ミストルティン！！」

「エターナルコフィン！！..!」

詠唱を終え、放たれた魔法は闇の書の間に着中する。

魔法を受けた闇の書の闇は最初に右になり、後にその上が凍っていく。

オレは自身の魔法の衝撃に耐えながらもクリスを闇の書の間に叩き付けたまま、攻撃を持続させる。さつきまで凍って石化していた闇の書の闇の周りは一気に何もなくなり、その真ん中にコアを発見した。

《あつたわ！アレを利用しましょ！》

「ああ！」

クリスを闇の書の間に突き刺し、露出したコアに手を伸ばし手に入る。

そのコアを両手に包み込み自分の胸に近づける。

「はあはあ……くっ……」

《そんな……、もう時間がないわッ！》

フィオネの叫び。

その正体はオレの異世界への転移。

その証拠に段々とオレの体が透けていくのがわかった。

こんなにも早いのかよ……。

一瞬だけ皆の方を見る。

フェイト達は異変に気がつき、オレの方に向かってきていた。

来ちゃだめだ……危ないよ。

「くうっ……因果の引き金……！！！」

カウサリテイ・トリガー

両手で包んだコアにオレの余っている魔力を盛大に流し込む。
どうせこの後眠るんだ。
だったら、最大に使ってやろうじゃないか。

「闇の書のバグを……初代となるリインフォース・アインスを救う
未来をオレに……見せてくれ……!!」

オレの思いは通じたのか、今使える最大限で最後の魔法は発動した。
包んでいたコアは形状を変え、小さなチップへと変化する。
これを使えば、本当に闇の書は修正できるのだろうか……。

《大丈夫なはずよ、劉ちゃん。》

オレの中にいるフィオネは涙目になりながらオレに言うてくる。

そっか……。

「やり遂げたか……やっと、終わったね……」

なんだか、無印の時よりも何倍も疲れた気がする。
これが、バトルメインになったA Sの力なのか。

なんて、メタ発言してみたり。

だって、元々はユーザー側だったんだからいいじゃないか。

「フィオネ、これを……」

《分ってるわ。フェイトちゃんていいかな?》

ちようどこつちに近づいてくるフェイトにフィオネは修正チップを
転移させた。

いきなり目の前に現れたチップに飛ぶのを止め、びっくりしながら
も手に取るフェイト。

その横を猛スピード、それこそ神速で何かが通り過ぎた。

タマモだ。

「ご主人様マスター！……！」

クロノ達は後ろを振り向き、さっきまでそこにいたタマモの姿を探している。

やっぱり、コイツも一緒に行く事になってんのかな？
まあいいや。

最後になのはの姿を見ようと目をやるが……。
あ、そっか。
アイツは今アースラだっけ？

「ははっ……じゃあ、いこっか。……みんなあ……！」

オレの声に振り向く面々。
そんな皆に向かってオレは笑顔で手を振る。

「ちょっとだけ出かけてくる！でも絶対に帰ってくるからなッ！それとエロト……！」

タマモがクリスを手に取り、オレの事を包み込むように抱きつく。

「ひとまず後の事は……………お前にまかせたッ!！」

「なッ!劉!！」

エロトがオレに向かって何か叫んだように見えたが、オレはそれを聞く前に神界へと消えていった。

第76話：やつとAS終結。オレって毎回ボロボロになるけど本当にチートなの

マ「やつほおおい！AS完結〜〜！！！！」

瑠「わぁ〜い！」

雫「お祝いですね。」

その他『……………』

マ「ですよね。本当に申し訳ございませんでした。」

瑠「?????」

雫「更新が遅くなって事にですね。でも作者さんも忙しかっただけで…………（汗）」

フィ「コイツを甘やかしちゃダメよ。雫ちゃん。」

ク「まったくよ。」

キヤ「最低ですね。」

マ「タマモさん怖いよ…………」

ゼ「久しぶりに瑠璃と雫に会えた…………（泣）」

マ「はッ。このロリコンが。」

瑠璃と雫以外「あゝ!?!」

マ「本当に申し訳ございません。(土下座)」

フィ「今回だけはアンタにゼロを責める資格はないわ。」

ク「だから代わりに私が責める。こんのロリコンッ!?!」

ゼ「ぐっはあ!?!」

瑠「あはははっ」

雫「大丈夫ですか?」オロオロ

キャ「代わりって言ってましたけど、別段いつもと変わってませんでしたね。」

マ「だな。」

フィ「はああ。じゃ、感想コーナー。White Seal様、メガネ様、毬藻様、空言天狐様、光闇雪様、月光閃火様、畏無様、m ada o様、雨季様、黒龍様、たまご様、けーくん様、夜神様、紅幽鹿様、たくさん感想ありがとうございました。」

ゼ「続いて、お土産コーナーです。空言天狐様からは、水天日光天照八野鎮石

光闇雪様からは、『なのはとゆきの鏡文字のような寝姿の写真』と
『はやて&信慈合作・等身大劉君飴』

madao様からは、『十二単』と『浴衣』

黒龍様からは、あんばん千個

たまご様からは、劉に幼児化する薬を、エロトに幼児化&心が純粹
になる薬、その他に大人化する薬

紅 幽鹿様からは、マーボーに【東方project】の【風見幽
香】の持っている日傘（マスパが撃てる）、雫と瑠璃に脇巫女服（
赤色、緑色）を頂きました。みなさんありがとうございます！』

キャ「ではでは、ゲスト様をお呼びしましょうか」

ク『いるの？』

マ「ああ、大変申し訳ないことにな。」

キャ「え〜、蒼影様の作品『リリカルなのは〜夜天を受け継ぐもの
』からハヤテさんが来てくれました〜」

ハ「どうも〜」

マ「お、来たな。今回は申し訳ございませんでした。」

ハ「あはは。それならゆるす……」

マ「ありがとうございます（泣）」

ハ「と、おもっとんのか？」

マ「……え？」

ハ「なんてなあ。」

マ「……………（ガクブル）」

キャ「まあアタシ達がボツコボコにしますよ」

マ「は、はははははっ……………」

瑠「ハヤテお姉ちゃん、あそぼ〜！」

雫「こ、こんにちわ。」

ハ「おお、初めましてやな。そして瑠璃ちゃん是人懐っこいなあ。」

瑠「えへへ／＼／＼／＼」

ゼ『可愛いだろう？』

ハ「アンタからはロリコン臭がプンプンするわ。」

ク『でしようねえ。』

マ「まあ本当のことだしな。」

ハ「それで、なんでこんなに更新が遅くなったん？」

マ「それを今聞きますか!？」

フィ「言え。」

マ「はい。」

キヤ「今の殺気……尋常じゃなかったですよ。」

マ「専門学校が忙しくって更新できなかつたです。」

ハ「へえ、何の専門学校？」

マ「アニメやゲームツス。自分はシナリオを書いています。」

ゼ「今は出来ればだが、週一でシナリオを一本あげてんだっけか？」

マ「ああ。もうね、ネタが……」

ハ「まあがんばりゃあ。」スタスタ

マ「って、アイツ瑠璃たちの所に行きましたよ!？」

フィ「だって、貴方の話を聞いたら終わりじゃない。」

ク「そうね。」

マ「ひどッ!」

ゼ「じゃあ、今回はこの辺でしめようか。」

キヤ「そうですね。次回はご主人様マスターが別世界に行くんですよ。」

マ「ああ。皆様知っているか分らんが、……ヒントは機巧魔神だ。」

瑠璃、雫以外『モロネタバレ!?!?!?』

マ「では、今回は本当にこの辺で。百合モノですが短編の『私と貴方は女の子』の方もよろしくお願いします。」

フィ「今回の話の批判でも何でも受け付けるわ。」

ク『まあ感想を頂戴。』

マ「本当に批判でも何でもいいんで。つか批判をください。」

キヤ「Mですか?」

マ「ちやうわいッ!?!?!」

ハ「ほな、次回もよろしゆなあ。」

瑠璃「ばいばい!?!?!」

雫「また次回です!?!?!」

今回は約一ヶ月の間投稿できずに本当に申し訳ございませんでした。これから一層、学校の方が忙しくなりそうなので、不定期になると思いますが、これからも読んでいただけると幸いです。

ではではあ

第77話：キタ！新世界！……え、それは違う？（前書き）

はじまりまっす（ニヤリ）

第77話：キタ！新世界！！……え、それは違う？

「……………（むすっ）」

「りゅ、劉ちゃん、機嫌直して？（汗）」

『ほら！アンタのせいで劉ちゃんが拗ねちゃってるじゃない！…！』

「わ、私のせい！？……まあそんなんだけどさあ」

眠りから覚めたオレ。

今回は約一年くらい眠っていたらしい。

オレは目覚めると、約一年前の記憶を蘇らせる。

……………うん。

そこで一つの後悔。

「早くご主人様マスターに謝って下さい。」

「い、ごめんなさい……………」

「むう……………」

何をこんなにもオレが拗ねているのか？

それは……………

「Asのトリプルプレイヤーが見れなかった……………」

「だ、だから、ごめんね……ね？」

アテネが両手を合わせてオレに謝ってくる。
だって、楽しみだったんだもん。
トリプルブレイカー。

……まあオレにもっと力があればよかったんだけどさ。

『劉、もうそろそろ許してやれ。』

「……うん。わかったよ。ごめんねアテネ」

オレに土下座の勢いで謝っているアテネに向かって謝る。

「う、ううん、いいの！！今回は私が悪かったんだもんね。」

涙目になっているアテネ。

……なんだか罪悪感。

「ふう……さて、これからどうするの？」

アテネの顔を見ながら聞く。

「これから劉ちゃん達は………なんだっけ？」

アテネは人差し指をこめかみにあてながら思い出そうとするが、ダメだったようで、部屋の奥に行ってしまった。

「ああ、アスラクライン？っていう世界よ」

そして戻ってきたアテネの手には一冊のラノベ。

それはまぎれもなく、アスラクラインの11巻だった。
つか、なんでその巻？

「この巻が一番好きなのよ」

……人の心を読まないでほしい。

『その世界で私たちは何をすればいいのよ？』

「そうね。具体的な理由はあるんでしょうね？」

「さあ？」

問い詰めるデバイス二機に対してしれっと答えるアテネ。

……っつて、

「知らないの!?!」

「だってえ、あの世界には劉ちゃんが必要だっていつてるんだもん
!?!」

「一体誰がですか？」

「私の予知&勘！！！」

「貴方はここでブツコロコロしちゃいましょうか？」

額に青筋をたてるタマモ。

「お、落ち着いて！」

タマモが胸元から呪符を取り出したのを見て、慌てて止めるオレ。しびしびといった感じでタマモはまた胸元に呪符をしまった。

「はああ。とりあえずその世界に行けばいいんだね？」

「うん。大体……一年位だっけ？」

たしかにこの世界は一年ぐらいだけど……。

「それですむの？」

「ん〜……わからないわ」

……だろうね。

「少なくとも、なのはたちが中学を卒業する前には戻ってきたんだけど……」

だって、なのは達は高校に行かないだろうし……。その前に帰って、土郎さん達にも今回の事を謝って。

「大丈夫よ。なのはちゃん達が卒業するのは今から約六年後。それ

までには帰せると思っわ」

アテネが笑顔でオレにサムズアップしてくる。

「……わかった。アテネのこと信じるよ」

オレもアテネにサムズアップし返す。

「ありがとう。じゃあご飯にしましょうか？」

「うっ……お、おなかすいた」

丸々一年は点滴だったらしいからなあ。

「そうね。じゃあ食堂に案内するわ」

オレ達はアテネにつられて、食堂へと向かった。

「もう……食べない……」

「劉ちゃん食べすぎよ〜?」

フィオネに注意される。

「まさか食堂にある食材がなくなるなんてねえ。今までこんな事なかったわよ」

「う、ごめん」

「あ、いいのよ。劉ちゃんだったら……これがほかの転生者だったら……殺してたわね。と、いうより食堂になんて行かせないわ。(ボソツ)」

なんだか怖いつぶやきが聞こえて気がする。

「それより、なんでアタシの大好物の油揚げがないんですか!?!」

「それは貴方に対する嫌がらせに決まっていますでしょ?」

「へええ……………そうだったんですかあ (にこっ)」

またもや不穏な空気が広がり始める。

「ああもう!そういう事はやめなればあ!?!」

こうして、オレが約一年ぶりに目を覚ました日は終わっていった。

「……もう行ったちゃつねね。」

「いやいや、行っちゃうのねって……」

オレ達が「アスラクライン」の世界に旅立つ日。

アテネがオレ達に泣きながら言ってきた。

ここには五日ほど居て、その間にオレは体を動かしたりと、少しだけリハビリをしていた。

「体のほうは平気だけど……」

魔力の方はまだ回復していない。

「んまあ、それでも充分なほどあると思うわよ」

『ああ。今の魔力でもなんら問題ない』

ゼロがそう言うなら安心だな。

「じゃあ、行ってくる」

「ええ。頼んだわよ」

アテネがオレ達に手を振る。

……と、同時にオレ達の足元に大きな黒い穴が開いた。

ああ、そういふこと……。。

「また、こんな展開なんだね」

「……」めんなさい（泣いっ）」

アテネが舌をちよこつと出して可愛く謝る。

オレが神界で見た最後の光景だった。

「はふう……ありえ？」

視線が低い。

しかもここは……？

周りを見回す。

立っているのは畳の上。

空間を仕切っているのは襖。

どうやらここは屋敷？のようだ。

覚束ない足を動かし、襖を開けようとする……が、

「にゃあっ!？」

自分の足を踏んでバランスを崩すオレ。

バタンツ!!

「あうっ!」

襖に突っ込んで音を立てながら倒れ込む。

「くっつたあ」

どうしよう。

人の家の襖を倒しちゃったよ。

和室の外に出ると長い廊下が続いていた。

「……ん？」

なにやら屋敷の奥のほうから賑やかな声が……。オレはその声のする方へ向かっていった。

そこで見たものは……

「もっと油揚げを持ってきてくださいな」

「私もお腹すいちゃった。」

『そうねえ。私のようなカリスマ性があるのは天の運命なのよ。だからあきらめなさい』

『……………』

黒いスーツを纏った男達を扱き使っているタマモ、フィオネ。それに何故か威張っている？クリスと黙っているゼロがいた。

「な、何してんの？」

「『『』 ツツ！……！』』』』」

オレの声を聞き、体をビクッとさせる面々。

「お前ら……………」

何してんだ？と言おうとした所で、オレの周りに黒いスーツを纏った男達が駆け寄ってきた。

「おお！若、お目覚めですか。」

「すぐに八木さんをお呼びしろっ！」

そして何故か騒がれた。

「劉ちゃ〜ん！違うのよ？本当の私は尽くす方なんだからっ！〜！」

「アタシだってそうですよ〜！〜！」

『そつよそつよ〜！〜！』

『お前は絶対に違うだろ……………』

オレはため息をつきながら考えを纏める。

ここは「アスラクライン」の世界。

やってきた場所は和風の屋敷。

そして八木さん……………嫌な予感がする。

オレの体から嫌な汗が出る。

「若。お目覚めですか、おはようございます」

そこで八木さんがやってくる。

俺を見下ろして。

……見下ろして……？

「劉ちゃん、まだ気づかないの？」

フィオネがしょうがないなあといった感じで手鏡を渡してくれる。

「……あー………やっぱり。」

そこには幼いころのオレが写っていた。

「なんかそんな感じはしたんだよなあ」

オレはその手鏡を返しながらフィオネに念話をする。

《あのさ、これってどんな状況なの？》

《えっとねえ、劉ちゃんはここの親族で唯一生まれた長男で、その一族がつい先日壊滅したとかでここに預けられたらしいわ。》

《……マジで？天道家？？》

《そそ。ここでも劉ちゃんは天道 劉だから……天道家が壊滅しち

「やったって事ね。」

「どうやら、オレの知らない間に天道家は壊滅してたらしいです。」

「さよなら……見知らぬこっちの世界の母さん、父さん」

「若、お加減はいかがでしょう？」

八木さんがオレの顔を覗き込みながら聞いてくる。

「にゃあっ!!」

それにびっくりしたオレ。

我ながら変な声で驚いてしまった。

「ッ!!!!……す、すみません、若」

八木さんは肩を落としたながらほかの部屋へと向かってしまった。

「え？お、オレ、何かした？」

出て行った八木さんから皆の方へと視線を向ける。

何故か、皆はオレと目を合わせてくれなかった。

「オレって悪魔なのかな？」

「いや、天道家って悪魔と契約するための人材を輩出していた名家で、それで高月家とは親戚の関係らしいわ。」

高月奏の親父さんがいる部屋に向かいながら、オレはこの事を聞いてみる。

ちなみにオレはここに運ばれてからしばらく眠ったままだったそうだ。

「じつよ〜」

フィオネに連れられてやってきた一室。

この屋敷の当主、高月奏の親父さんがいる。

すごい。

部屋の外からでも分るぐらいのオーラがその空間を支配していた。

オレはつばを飲み込み。

手には汗が……。

「入るわよ〜」

「ええ!?!」

が、フィオネは何のお構いもなしなようで、襖を乱暴に開けた。

「ん?おお、目が覚めたか。色々大変だったようだな」

高月の親父さんはフィオネの失礼な入り方に怒りもせずにおれを迎え入れてくれた。

「いやあよかった、よかった。劉君が無事で」

座布団に座らされたオレ達。

うう……あ、足が……

「劉君、足を楽にしてもいいんだぞ」

そんなオレの様子に気づいてくれた高月の親父さんはオレに笑顔で言うてくれる。

なんだ、ラノベやアニメではもっと怖い人かと思ったよ。

「まあ私たちは最初っからそうしているけどね」

隣ではフィオネ達は横で寝ながら言う。

タマモは尻尾の手入れをしていた。

本当に……ひどい。

それでも高月の親父さんにはこやかに笑っている。

「あ、あの、フィオネたちがごめんなさい」

「いやいや、気にせんでいいぞ。劉君たちは今日から家の一員なんだから。寛いでくれ」

なんかオレって、親父さんになんかかなり気に入られている？
それとも……

《なんかね、私たちって昔この高月家とかなり親しいらしいわよ。》

フィオネからの念話。

なるほどね〜。

だから、こんなにも親切なのか。

「む。どうやら奏が来たようだな」

親父さんが襖に目を向ける。

……すると、

「こ、こんにちわ、りゅ、りゅりゅりゅ劉……君／＼／／」

襖をそつと開けて、オレに挨拶してくる女の子。

彼女は高月奏でまちがいないだろう。

年は……小学生ぐらいかな？

今のオレと同じぐらいか。

『「「ちいいッ……！」「」』

奏の姿をみたフィオネたち女性デバイス陣は舌打ちをする。

「あう……」

その様子に奏は落ち込んでしまった。

「おい、お前達どうしたんだよ」

『「」なんでもないでっす」「」』

そう言っつてそっぽむく面々。

『私はそっぽ向けないけどね……ぶぶつ。い、今の面白かったわよね？』

クリスの放つておく。

『ひどい！放置プレイ？でも、感じちやう……！』

……放つておく。

「え、えつと……かな、奏……？」

「つう、劉君」

奏は涙目でオレに駆け寄ってきて袖を握り、

「……はう／＼／／」

なんかホツとした顔をする。

「ガツハツハツハツハア……奏は劉君一筋だなあ……！」

「ぱ、パパ／＼／／」

この頃の奏は「お父さん」ではなく「パパ」なのか。

「はあゝ」

この先、どうすればいいんだろ……。

こうしてオレは高月家でお世話になる事に。
次の舞台は早くも洛芦和高校となる。

第77話：キター！新世界！！……え、それは違う？（後書き）

マ「どうもです！」

劉「さつそくだけど、感謝コーナーいつくよお！！Rain様、竜王&竜姫様、メガネ様、ユタ様、White Seal様、畏無様、バラランシャ様、光闇雪様、けーくん様、龍賀様、空言天狐様、madao様、月光閃火様、夜神様、紅 幽鹿様、毬藻様、黒龍様、感想ありがとうございます！！」

キャ「お土産は……光闇雪様からは、女性陣に『劉にお姫様抱っこをされている（している）自分』のジグソーパズル

紅 幽鹿様からは、マーボーに緋々色金『シャルラツハロート』、雫と瑠璃に猫耳と付け尻尾
黒龍様からは、宇治銀時井、最高級のワインを頂きました！ありがとうございます
とっございます」

マ「今回はこの二人というメンバーでゲストを呼んでみようと思います。」

キャ「ほかの方々は……寝かせました（ニヤリ）」

劉「黒いッー！」

マ「では、今回のゲスト様、紅 幽鹿様の作品『魔法少女リリカルなのは〜クリームゾンデビルゴット〜』から幸夜と美鈴が来てくれました」

幸「どうも」

美「あれ？今回は少ないんですね」

キャ「はい！アタシとご主人様と……作者もいますけど、基本は二人つきりです！！」

マ「ひどいや……」

幸「あはは」

劉「にしても、久しぶりだね」

幸「うん！」

美「私とは……初対面でしたっけ？」

マ「あれれそうだったかな？」

劉「まあお互い存在は知ってたよね」

美「まあね」

幸「ね、ねえねえ。」

劉「ん？」

幸「た、タマモの尻尾触っていいかな？」

マ「いきなりどうした？」

キャ「はい？何をドサクサにまぎれて？（にじり）」

マ「サーセンっしたあ！！！！！！」

キャ「よしです」

美「不憫ね」

幸「……可愛いそう」

マ「そ、そんな目で見るなあ！！！！！！」

劉「いつもどおり……かな。」

マ「うっ……」

美「さて、そろそろお暇しましょうか」

幸「そうだね。」

劉「ええ、もう帰っちゃうの？」

幸「また来るよ」

美「そうですね。」

劉「う、うん。楽しみにしてるよ！」

マ「お土産に、劉の使用済みハンカチでも……」

第78話・自己紹介はいつだって、どっぴだっぴで…… orz (前書き)

ゲスト様は次回にお呼びさせていただきます!!

第78話：自己紹介はいつだって、どこでだって…… orz

「奏お嬢様、若、いつてらっしやいませ」

八木さんが挨拶すると同時に他の組員が頭を下げながら言うてる。
なんか、こんな怖い花道嫌だなあ……。

オレは前の世界での卒業式でやった花道を思い出す。

まあ今回は悪魔がやっているから、正真正銘の悪魔の道なんだが

……。

……何が、正真正銘なんだろ？

「劉ちゃん、いつてらっしやい」

「いつてらっしやいませ、ご主人様^{マスター}」

オレが懐かしんでいると、フィオネとタマモの声で一気に現実に戻される。

「いつてらっしやいませ!!」

「うっ……」

威勢のいい声に奏が怯えながらオレの袖を掴む。

奏は原作どおり家業が嫌いみたいだ。

「はあ。ホント、どうなるんだろ……」

これが原作開始の朝の出来事だった。

「一緒に教室でよかったね」

「はい。りゅ、劉君と一緒に私も……その……うれしいです／＼／

朝、家を出てから教室にくるまでずっと袖を掴まれている。
いくら人見知りでもなあ。

この袖を掴むのは殆ど癖になっているのかも。
その事で、少し前にフィオネたちが荒れてたけど、オレが抱き枕に
なるという……なるという……いう……。

「う、うう……」

何か涙が出てきた……。

「え、劉君？ど、どうしました？」

奏がオレが急に泣き出した事にオロオロとする。

「いや、なんでもないよ」

目元の涙を拭いながら教室を見渡す。

そういえば、原作なら昨夜に奏が夏目智春と接触するはずだったん
だよなあ。

昨夜の奏は……うん。普通に寝てたな。
いきなりブレイクしちゃったよ。

「お、い、そこの彼女……!!」

「ん？」

オレの背中を叩いて呼ぶヤツ。
しかも結構強めに……。

「君、もしかして天道……劉ちゃんだよな？そしてこっちが高月奏
さん？」

「えう……はい」

「そだけど？」

オレ達の言葉に樋口の目が光る。
そもそもキラツキラに……。
あゝなんか嫌な予感がするよ

「やつふううう！！！！君たちと同じクラスになれるとはなあ！！
！！！！」

その場で飛び上がる樋口。

まあ、説明しなくても分ると思うが、コイツはこういうやつだ。

女が好き……って言い方は変かな。

一番好きなのは「オカルト系」。

顔はそこそこのいいから女性にモテる。

だから、コイツの事を何も知らない女性はコイツとデートするわけ
だが……。

コイツのオカルト好きがでて、デート先に廃墟となった病院を選ん
だりという事をしていて、その恋が突った事はない。

馬鹿なのか？と聞かれてもそれも違う。

コイツはそこそこ頭もいい。

まったく、訳がわからないヤツだ。

「で、なんでオレ達の事知ってるのさ？」

オレはジト目で樋口に突っ込む。

「そんなの、君たちが中学時代から有名だからに決まっているじゃ
ないか。美人姉妹だって」

なるほど。

たしかに原作では奏は中学時代から有名だった……けど、

「なんで姉妹なの？」

「そりゃあ、劉ちゃんいれるからでしょ？」

「……………」

何も言えない。

オレが姉妹のうちの一人？

って事は女性…………だと!?

くう、身長だってもう少して奏を抜かせるのに…………!!

「あのさ、オレは男だよ？」

「知ってるって!男の娘だろ？」

「いやだから…………」

「まあいいじゃんか、男の娘！」

……………。

コイツには話が通じない事がよく分った。

「はああ」

オレがため息をつくと同時に教室内に担任らしき先生が入ってきた。

あれ？

まだ智春が来てないぞ？

遅刻だったけ？

そして樋口はいつのまにか自分の席に戻っているし。

ホント、見た目に反して真面目なんだから。

「はああ。……つたく、操緒のせいだぞ？」

『なんでそうなの！？』

入学式を終え、教室に戻るためにオレと奏と樋口の三人で廊下を歩いていると、そんな話し声がかすかだが聞こえてきた。
この声ってもしかして……

「お、智春じゃないか！おい、智春！……」

樋口が話し声の主である智春の姿を見つけると、大声で呼びながら智春の所へ向かっていった。

「おいおい、どうしたんだ？今日は入学式だったんだぞ？」

「そうだったんだけど……はぁぁ」

『何？まだ操緒のせいにする気なお！？』

智春が天井を見ながらため息をつく。

その視線の先には何も無い。

本当ならそこには何も無いはずなんだが……。

オレの目にはつきりと、一人の少女の姿が写っていた。

その少女はオレンジ色の髪をしていて、肌は透き通るほど白く……
つていいか。

とにかくその少女はまちががなく美女なんだが、明らかに普通の人は違っていた。

なぜか？

そんなのは簡単だ。

彼女は空中を浮いているからだ。

そう、まるで幽霊みたいに……。

その少女、操緒が空中を浮いているのに、周りの誰も騒がないのは彼女が周りに見えていないからだ。

でも、オレや奏には操緒が見えている。

操緒はちよつと普通の幽霊とは違って射影体と呼ばれ、アスラ・マキーナ機功魔神の

原動力として生贄になっている。

本体はアスラ・マキーナ機功魔神の中で眠っているが、智春の脳の一部を借りる事によつて、射影体として存在できる。

その射影体を連れているのがハンドラー演操者と呼ばれ、アスラ・マキーナ機功魔神を召喚する

ことが可能。

そして、射影体はこのハンドラー演操者と悪魔以外には認識できない。

だから、悪魔である奏は射影体である操緒を認識できるが……

オレは……なんでだろ？

転生者だからとか？

……まあいつか。

とにかく、オレ達にしか認識できない理由は終了！

それに今は、この後にどうやって物語を運んでいくかを考えなくちゃ。

「おい、劉？」

「……ん？あ、あえ？」

樋口がオレに声を掛けてくる。

「なに、ボーツとしてんだ？」

智春と操緒も怪訝な表情で見つめてくる。

「劉君、何か考えごとですか？」

「いや、何でもないよ。」

オレは奏に伝えると、奏は何故かホッと息を吐き、射影体である操緒の事を見つめ始めた。

「じゃあ、もうすぐホームルームも始まるし、教室に行こうぜ！
お互いの自己紹介はそこでやるだろうしなあ！」

何ともアバウトな感じなんだろう。

樋口はそれだけ言うと、教室に走っていった。

「……疲れるヤツでしょ？」

「ま、まあ……ね」

智春と少しの気持ちの共有。

お互いに樋口の友達として何か通じるものがあつたのかもしれない。
……つか、オレと奏つてもう樋口達と友達つて事でいいのかな？

『何言つてんの？操緒達はもう友達でしょ？』

操緒は笑顔で言ってくる。

つか、心を読まれた？

……まあ心を読まれるのは慣れてるけどさ。

にしても、友達かあ。

やっぱりいい響きだなあ。

「そつか。じゃ、これからよろしくね」

『「……………え？」』

智春と操緒は目を見開き、驚く。

何をそんなに驚いてるんだ？

……ああ、智春達はオレが操緒の事を認識できることは知らないんだつたつて？

「えつとお……………」

「い、行きましょう、劉君！」

「はい？ちよつ、ええ！？」

オレは操緒が見えている事を説明しようとしたが、奏がオレの腕を掴み、そのまま引つ張られる事で阻止された。

ち、力強いんですね、奏さん……………。

「……………」
『ジーーーーー』
「……………」
『あう……………」

教室内。

ただいまオレ達のクラスでは自己紹介をしている。
しているのだが……………」

『ジーーーーーッッ』

オレの机から操緒が頭だけを出して、ずっと睨んできている。
怖いよ……………」。

「づう~~~~」

その様子を奏が小さい唸り声を上げて見てくる。

「はああ。……あ、あほう……」

オレはその何とも言えない空気に我慢できず、操緒になるべく小さい声で問いかける。
すると……

「あー！ツツ！……！智春^{トモ}！……！やっぱり操緒の事見えてるよ、この娘！……！」

操緒が智春に向かって大声を出した。

その大きな声にビクッと体を反応させるオレと智春と奏。
いやだって……ね。

オレ達からは操緒の声は普通に聞こえるわけで……。
そんないきなり大声を出されたら反応しちゃうでしょ。

あ、智春が頭を抱えてる。

オレは後ろにいる智春のほうを向くと、智春は机につっぱしながら、頭を抱えていた。

ちなみに席順は前から、奏、オレ、智春ときれいに並んでいた、
高月 天道 夏目、だからね。

「高月 奏です。……嫌いな物はカガク、です」

原作どおり、奏は簡潔に自己紹介を済ませると静かに席に着く。
この辺は変わらないみたいだ。

奏が自己紹介を終えると、周りからヒソヒソと会話が聞こえてきた。
主に、可愛い、きれい、胸でかい……うん。

男なんてこんなもんだよね。

「え〜次は……」

先生がオレの方を見る。

あ、そうだった。

周りの会話を聞いていて、自分の自己紹介の番を忘れていた。

オレは軽く深呼吸をしてから立ち上がる。

うつ……なんか皆からの視線が……

さっきまで話していたはずの皆はオレが立ち上がると、話をやめ、オレの事を一斉に見てきた。

「え〜っと、名前は天道 劉です。趣味は料理、かな。特技は……特にはないです。性別は【男】です！！！よろしくお願いします」

オレは性別の所をはっきりと言い、席に座る。

……あれ？なんか周りから奏の時みたいなのヒソヒソ声が聞こえる。

「マジかよ。アイツ男だったのかあ」

「オレはてっきり男装が趣味なんだと……」

「でも可愛いからアリだ」

「よかったあ。私、女の子の事が好きになったのかと思っちゃったわ」

「あれが男の娘なんだね！可愛い！！」

「え〜……」

なんでそうなる？

オレは会話を聞き、涙目になる。
やっぱりここでもそうなのかあ。

しかも、オレが涙目になっても周りには可愛いとか言ってるし……。

『うわあ……あの娘、男の娘だったんだあ』

操緒さん、それじゃあ何も変わってないよ……。

オレはため息をつきながら、『リリなの』の世界にいた時のことを
思い出す。

……あつちでもこんな感じだったなあ。

その後に、智春がボーっと奏を見ていた事で、先生にからかわれた
のは原作と一緒に。

ただ、その見ていた対象にオレも追加されていたのは……なんでだ
ろう？

悪寒が走ったのは言うまでもない。

第78話：自己紹介はいつだって、どこでだって……orz（後書き）

マ「感想コーナーです！」

キャ「Rain様、メガネ様、バラランシャ様、AIRS様、コウ様、畏無様、光閻雪様、月光閃火様、madao様、夜神様、空言天狐様、けーくん様、紅 幽鹿様、黒龍様、感想ありがとうございます」

マ「お土産は、光閻雪様からは、女性陣に『ジクソーパーズル（自分の理想）』」

空言天狐様からは、リラックス効果のある芳香剤
紅 幽鹿様からは、劉に隊長格が持っている斬魄

黒龍様からは、A・S完結のお祝いのシャンパンとケーキを頂きました。ありがとうございます！」

キャ「ゲスト様は次回ですか？」

マ「本当に申し訳ございません！次回は、光閻雪様の所から信慈（爺Ver.）が来てくれます！」

キャ「あの爺様ですかあ。強敵ですね」

マ「いやいや、戦わないよ」

キャ「では、次回もよろしくです」

マ「次回はなるべく早く更新できるように頑張りたいと思います！」

第79話：やっぱり原作通りにはいかないか……。

「はああ、今日も疲れたよ……」

入学式を終え数日後、オレは帰りのホームルームが終わると速攻で帰り支度をする。

そして智春……主に操緒がオレに何か話しかけてきそうな雰囲気だったから、オレは奏の腕を引っ張りながらいそいで帰宅した。なんかオレ……操緒の事が少し苦手かもしれない。

「はああ」

「もう、ため息ばっかついて。どうしたの？」

フィオネが小人型？でベッドに腰掛けたオレの頭の上に乗ってきた。

「その形態、久々だね」

「うん。この方が実際は楽なんだよね」

そう言いながらオレの髪をいじり始める。

フィオネはなんだかご機嫌だった。

鼻歌まで歌い始めるし。

「そういうフィオネこそなんだか機嫌いいみたいだけど？」

「ん〜？だって、久しぶりに劉ちゃんと二人きり、なんだもん」

二人きり……ねえ。

オレは今スリープモードの指輪と腕輪を見る。

この世界は戦いが主になるから、デバイスはなるべく休ませるためにスリープモードにしている。

いざって時に使い物にならないとしようがないし。

それとタマモは今、お使い中らしい。

なんでも、お使いのご褒美に好きなものを買っていいと言われたとか……。

よくよく考えると、神が悪魔のお使いをするって……少しおかしいよね。

と、いう訳で、フィオネの言うとおり二人きりなのだ。

「ま、たまにはいいんじゃないかな。オレはフィオネと二人きりだと落ち着くし」

「えへへ。あ、ありがとう」

表情は見えないが、フィオネが笑顔な事は100%わかった。

オレはそのままフィオネに好きに髪をいじられるながら、この空間の雰囲気を楽しんだ。

「今日の夕食もおいしいね」

「ありがとうございます、若」

オレの言葉に深々と頭を下げる板長。

これはもう毎回の事だから気にしないようにしている。

……馴れって怖い。

「じゃ、じゃあ私のこのお刺身、劉君に少し分けてあげますね」
奏はオレのお皿に自分の分のお刺身を乗せると顔を赤くさせる。
なんで赤くなってるんだ？

「あ、ありがとね」

オレは皿に乗せられた刺身を箸で掴み、口に放り込む。

「あ、あう」

その様子を見てより一層顔を赤くさせ、またそれに対して険悪なオラを出すフィオネとタマモ。

「ど、どうしたんだよ、二人とも？」

「え？な、なんでもないわよ」

「うゝアタシもご主人様^{マスター}に尽くしたいですゝ！！」

いやタマモ。

十分にオレに対して尽くしてくれていると思うよ？
だって、お風呂の時だって寝る時だってずっとオレと一緒にいようとするんだもん。

マジで恥ずかしい……。

「もぐもぐ……んっ、ごちそうさま」

オレは最後の一口を食べ終わると部屋に戻った。

「さて、今日って本来なら奏を助け出すんだったよな？」

オレは頭の中に微かにある『アスラクライン』の原作を探る。
実は、あんまり重要なところ意外は覚えていなかったり……。

……その辺は何とかが出来ると……いいな。
そして、今回は高月組はそれに参加しないと……、

「第一生徒会か」

洛芦和高校には公認されている生徒会だけで三つはある。

そのうちの一つの生徒会、『第一生徒会』は奏のような悪魔の存在を許さない。

原作では悪魔である奏に近づき、ハンドラー演操者である智春を第一生徒会に勧誘して、奏を消そうとしていた。

「あー、でも今のところ奏は智春とそこまで接触してないから鳴桜

邸に襲撃するのかな？」

「どうだろうね。もしかしたら智春が演操者^{ハンドラー}って事でおしかけるんじゃない？」

フィオネが部屋に入ってくるとオレの疑問に疑問系で返してくる。
オレのひとり言を聞いていたのか。
でも……、

「それはあるかもな。ちょっと鳴桜邸を覗いてみようか？」

「そうしょ！ユニゾンは？」

「まだいいや。そうと決まれば……」

オレは指輪と腕輪に魔力を通す。

すると、指輪と腕輪であるゼロとクリスが銀色に光り、起動した。

『や~~~~っつと!!私の出番ね!!』

『久しぶりだな』

ゼロはともかく、クリスは起動したと同時にうるさかった。
相変わらずのテンションで安心するけど、なるべくなら静かにしてほしいと思うオレは正しいだろう。

「じゃ、鳴桜邸にちょっと顔を出してみるか」

オレは足に魔力を集中させ、部屋から出ると、庭に出た。

「この身体強化も久しぶりだね」

夜中に浮ぶ月を見上げる。

今夜は満月だ。

オレはその満月に向かって力いっぱい跳ぶ。

……まあ、なんか格好良く表現したけど普通に鳴桜邸に向かいました。

屋根伝いで。

「それって普通じゃないと思うな」

「う、うるさいな」

「あーこりゃ派手に……」
「すごいわね」

鳴桜邸に到着すると、すでにそこは戦場になっていた。
第一生徒会に……ってか、高月組もいる！？

ま、まさかさつきまで一緒にいた高月組以外は全員こっちに来てたのか！？

オレは驚きながらも怒声と銃声が響く中を歩く。

本来ならたぶん校内にある教会なんだけどなあ。

やっぱオレが介入する事によって変わっちゃったんだ。

そんな事を考えながらもオレは智春の位置をハンドラー演操者から出る微弱な電波を魔力で探る。

「あ、見つけ！」

智春の電波を捉える。

近くにはもう一人、これはたぶん第一生徒会長のさえき佐伯 玲れいしろう士郎のだらうな。

ホント、こんな時はこのチートな身体は便利でいいや。

「トレスオン ツ！アイギス 投影開始！絶対守護の楯！！」

瞬時に何かが飛んでくる気配を感じ、オレはアイギス絶対守護の楯を投影して弾き返す。

「な、何今の！？」

「いや、ただの流れ弾だったんじゃないかな？」

慌てるフィオネにオレは冷静に答える。

まあ、こんな戦場地帯みたいところだったら流れ弾がきてもなんら不思議じゃない。

「あ？お前も黒崎くろさき 朱湮しゆいの仲間か！？」

白いコートっぽい服装を纏った男がオレを見つけ問いかけてくる。この服装って事は、第一生徒会だろう。

その男は誠実そうな服装とは裏腹に、手には拳銃が握られている。しかもその男はその銃先をオレに向けてきた。

「くっ……何も言わないとは。だったらお前は敵と見なす！ここで死ねええっ！！！」

おいおい神に仕えるヤツが簡単に死ねとか言ってもいいのかよ。

と、心の中でツッコミつつもオレはその銃弾を絶対守護アブソリュートの楯で防いでいく。

「ひいつ、さ、さすが黒崎朱湮の仲間だけな事はあるな。こ、ここは一旦、戦略的撤退だ！」

男は使いきった拳銃を投げ捨てるとオレの前から走り去っていった。

「……………」

「あ、あのさあ……………」

フィオネが笑顔を引きつらせながら何かを言おうとする。

まあ、わかるけどな。

「これでいいのかよ、第一生徒会……」

オレは第一生徒会の未来がただただ不安になった。

「
来い、アスラ・マキーナ機巧魔神！」

オレが智春がいると思われる部屋に入ると、智春の声が聞こえてきた。

……って、馬鹿！

「こんな狭い部屋で操作に慣れてないのに!？」

玲士郎の方を見ると、操作に慣れている玲士郎はアスラ・マキーナ機巧魔神を一部だけ召喚して戦っていた。

つか、この技術は【アイツ】しか出来なかったはずだろ!？」

この世界も前に行った世界線みたいに強化されているのか!？」

『闇より深き深淵より出でし 其は科学の光が落とす影』

「こ、これが、アスラ・マキーナ機巧魔神!？」

智春は突然出現した? 鐵に驚く。
無理もない。

すでに鳴桜邸は半壊していた。

「まずいな。近所にはれるぞ」

オレは鳴桜邸が半壊した事によって? 鐵が外に露出した事に気づき、
周辺に結界を張る。

正直、いそいで張ったヤツだからそこまで持つ自信はない。
その間に終わらせなきゃ……!!

「フィオネ!」

「了解!」

「「ユニゾン・イン!」!」

フィオネとのユニゾン。

オレの髪の色は白銀に、目は赤くなる。

そして、体からは銀色の魔力が溢れ出した。

「凍らせる、翡翠! お前が素人が操るアスラ・マキーナ機巧魔神に負けるはずがない
!」

オレがユニゾンを終えると同時に、玲士郎は叫びながら翡翠に命令する。
命令を受けた翡翠は禍々しい音色を奏でながら？鐵を圧倒的な氷の質量で氷塊の中に閉じ込めた。

が、閉じ込められて身動きが取れないはずの？鐵からギシギシと齒車が動く音が聞こえる。
無数の亀裂。

次の瞬間には氷塊はきれいに砕け散っていた。
そのまま？鐵は翡翠に拳を繰り出していく。
それはただの力任せだけの攻撃。
だが一撃のひとつひとつが重い？鐵の拳。
喰らっている翡翠の腕が異様な音を立ててへし折れた。

「なッ、翡翠！！」

その光景を見ていた玲士郎は信じられないといった顔をした。
ズドンと音を立てながら沈む翡翠に？鐵は追い討ちをかける。
翡翠の胸部の装甲が剥がれ落ちた。
そして、剥がれ落ちた胸部には……

「哀音……さん？」

智春の口から掠れた声が聞こえた。

「や、やめろ……」

玲士郎からも悲痛な声。

「やめてくれ　　哀音が死んでしまう」

震えている声。

智春も？鐵にやめるように命令するが？鐵は動きを止めない。

《劉ちゃん！！》

「わかってる！クリス起動、ソードモード！！」

『了解！ソードモード！！』

このままではまずいと思ったオレはクリスをソードモードの槍にして、？鐵に飛び掛る。

「え？りゅ、劉！？」

オレにまったく気がついていなかった智春はオレの姿にまた驚いていた。

……つか、よくオレってわかったな。

まだ動きを止めない？鐵の足元に着地と同時にクリスで地面を抉る。

地面はすぐに音を立ててひび割れ、？鐵はバランスを崩した。

「とりあえず、動きを止める！！」

？鐵に向かって片手を差し出し、魔力を圧縮するオレ。

《「ゼロ！魔力変換【氷結】！！」》

『了解！【氷結】！！』

手のひらに氷結の魔力を溜めていき、段々と手のひらが冷たく、少し凍っていく。

《「凍れ！それは刹那のごとく過ぎ去る時がもたらす奇跡！！」》
溜めに溜めた魔力を開放。
放たれた魔法は？鐵全体を覆い、クリスタル状に凍っていき、動きを完全に停止させた。

《「マーヴェラス・クリスタル」》

口から白い息が出る。
ちよつと、全力を出しすぎたのか、半壊した鳴桜邸が凍りかけていた。

『……………劉？』

『ちよつとやりすぎじゃないかしら？』

いやいや、何を言ってるっしょいますかクリスさん。

これは……………翡翠の技のせいでしょう？

「いいや。これは翡翠ではなく、すべて君のせいだ」

玲士郎がため息をつきながらオレに近づいてくる。

「いったい、どうすれば翡翠以上に高密度な……………」

部屋の惨状を見て、もう一度ため息をつく玲士郎。
その彼の横にふわりと質量を感じる事のない動きで哀音が現れる。
玲士郎は哀音の姿を確認すると、ホッと一息をつき、オレ達の前を
あとにした。

「ああ。哀音を救ってくれた事には感謝する」

そう一言だけ言い残して。

「ねえねえ君い」

オレがユニゾンを解き、智春にどうやって説明しようか考えている
と、ボロボロの女性から声をかけられる。

黒崎 朱湮だ。

「君、^{ハンドラー}演奏者でも元^{エクスハンドラー}演奏者でもないでしょ？なんでそんな娘が^{アスラ・}機巧
^{マキナ}魔神を追い返せたのかな？」

笑顔で、だけど答えるまで帰さないといった本音のオーラが滲み出ているのがわかる。

……どうしよう。

オレは智春に視線を向ける。

返ってきたのは……

「あ、諦めたほうがいいよ」

智春もこの朱淫には敵わない事がすでに理解しているみたいだった。

「はああ。とりあえず……今日中には帰してくださいよ」

こうして、オレにとって長い夜が今、始まった……。

第79話：やっぱり原作通りにはいかないか……。 (後書き)

マ「では、感謝コーナーでええつす!!!」

全「……………」

マ「ユタ様、月光閃火様、光闇雪様、夜神様、m a d a o様、畏無様、R a i N様、メガネ様、紅様、龍賀様、紅 幽鹿様、バラランシャ様、空言天狐様、n a o様、黒龍様、感想ありがとうございます!!!」

ファイ「はああ。じゃ、お土産コーナーね」

キヤ「え〜光闇雪様からは、「飴細工：十年後の劉（想像）」

畏無様からは、祝い酒とパーティーサイズのフライドチキン

紅 幽鹿様からは、マーボーに、クリフォート・パチカル聖遺物・闇の賜物、劉に、エリザベート・バートリー聖遺物・

血の伯爵夫人を頂きました。ありがとうございます!!!」

瑠「そして、今回のゲスト様は……………」

雫「光闇雪様の作品『魔法少女リリカルなのは〜ツインズ〜』（改訂版）』から主人公の信慈さん（爺v e r）が来てくれました」

信「ほっほっほ。ようやくワシの出番じゃの」

瑠「あ、お爺ちゃん！」

キヤ「で、でしたね……………」

ファイ「前は負けたけど、今回は勝つわよ！」

ク「そうね。私たちが本気を出せば……」

信「ふむ……まだわかってないようじゃ、の？」

キャ・ファイ・ク「」 ツツ！……！！」

マ「まったく。実力差を考慮しろよ（もぐもぐ）」

瑠「あ、いいなあ！私も食べよう！」

雫「で、では、私も一緒に」

信「今日は戦いに来たわけではない。遊びに来たんじゃ」

マ「あのさあ、なんでいつまでたっても爺なの？」

信「なんでもじゃ（にこっ）」

マ「……なんだろ。今の笑顔に何故か殺気が込められていたようなあ……」

キャ「いえ。今のはたしかに殺気が込められていましたよ」

信「ふむ。このフラドチキンはおいしいの」

瑠「おいしいね」

雫「はい（もぐもぐ）」

ゼ「うん。そうか、それはよかった」

ク「アンタが差し入れたわけじゃないでしょ（汗）」

マ「さて、俺はこの酒でも飲むかなあ」

フィ「え、ちよっ！あとがきはどつするのよ!？」

マ「あ？え〜〜うん。あとはまかせた！じゃ、信慈、一緒に飲もうぜ〜!〜!」

信「よいぞ。まあほどほどにな」

フィ「と、とりあえず、長い間更新できずすみませんでした!〜!」
キャ「次話もはやく更新できれば……いいんですけど」

ク『まああの作者のためにも感想なんでもいいから頂戴!』

ゼ『批判、アドバイス、俺ならこうする!などの意見でも構わない
そっだ!』

瑠『じゃあ次回もよろしくね〜!』

雫『よ、よろしく願いますノノノノノ』

番外編：皆様お久しぶりです！今回は軽〜い雑談ということだ

マ「え〜、皆様お久しぶりです。今回はちょっと息抜きがてらあとがき形式で雑談でもと思いましたが、このような形でお送りしていききたいと思います。」

ク「ちょっと、本編も書かずに何やってんのよ？」

マ「いや、そろそろこつこついう形でも投稿しとかないと、忘れられると思うて……」

キャ「どうせ、アタシたちの事なんかもう忘れられてますよ」

フィ「そうね。まあそもそもこんな駄作自体人気もなかったわけだし」

マ「……なに？なんかストレスとか溜まってんの？」

キャ「え〜？そんな事ないですよ」

フィ「ええ。ただ、どこぞの作者が投稿しないおかげでこっちはその間、暇で暇で」

ク「なんで、この私たちの苦痛は何かしらの形で返してもらおうわよ？」

マ「す、すいません……」

ゼ『おい。その辺にしろいてやね』

マ「ぜ、ゼロさん……!」

ゼ『そもそも、コイツの課題を早く終わらせて執筆をするという気持が足りないから投稿できていないわけで、それを今更』

マ「うん。なんか……本当にごめんね?」

エ「ったくよお。いつになったら俺のハーレム祭りが始まるんだよ」

キャ「安心してくださあい?そんなのは一生始まりませんからあ」

ク「つか、アンタの居場所はそこにあるゴキブリホイホイでしょ?とつとと帰りなさい』

エ「おい!俺はどんな扱いだよ!?!」

劉「まあまあ。たまの出番なんだし。こんな時ぐらい仲良くしなよ」

フィ・キャ・ク「は、はい!」「」

エ「……納得いかねえ……」

マ「まあそれがお前のポジションだ」

ゼ『そうだな』

ブチッ！

マ「貴様にだけは言われたくないわあッッッ！！！！！！！！！！」

ドゴッ！

エ「かつはッ！？」

マ「はあ、はあ……………」

劉「エロトって、一応チートなんだよね？」

ク『…………たしかそうよ』

フィ「この作者はどれだけ日ごろの鬱憤が溜まってんのよ」

マ「あゝあゝ？」

全『いえ、なんでもありません』

マ「ちつ。今回はこの辺で許してやるよ」

劉「うう…………さ、作者がだんだん怖くなって……………」

フィ「そ、そうね」

キャ「あらあら、ご主人様泣かないでください」
マスター

ゼ『劉はだんだん女の子になってくな』

劉「わああッ！とうとうゼロにまで言われたああ！……！」

フィ「ちよつと！なんて事言うのよ！？」

ク『アンタ、自分のロリコンを棚に上げて……』

ゼ『なッ！お、俺はロリコンじゃないぞッ！？』

マ「いや、それも今さらだろ」

エ「ああ。お前はロリコンだよ、このエロ野郎」

キヤ「……それは貴方ですよ」

……

……

……

マ「さて、こうしてこの場を設けたがやる事ないんだよなあ」

ク『じゃあ、もう帰る?』

フィ「いやいや、なんでそうなるのよ?」

キヤ「さすがに帰るには早すぎませんか?」

劉「そうだよなあ。エロト、なんかやりたい事とかある?」

エ「あ?やりたい事って……やりたい事か?」

劉「あ、ごめん。何でもないよ」

ゼ『……じゃあ、今までのあらすじでも』

マ「え、それ長いから面倒くさい。パス1」

エ「じゃあ俺がハーレムを築いて、なのはやフェイト達と」

マ「はい、パス2」

エ「……おい」

ク『ん、じゃあもうさっきの出た案だけど、今までのあらすじで
もやりましょう?』

マ「ん、……そうすつか?」

ク『面倒くさいけど』

ゼ』どつちだ』

フィ「まあこんな展開になると思って、私は独自でここまでのあらすじを書いてきたわ！」

キヤ「仕事速いですね〜」

フィ「ふっふっふ。これでも私、すごいユニゾンデバイスなのよ？」

マ「あ〜、すっかり忘れてたわ」

劉「せめて作者は忘れないで上げて……」

フィ「それじゃあ、劉ちゃん以外の愚民共！とくと見よッ！！これが『どうしてこうなった？！神による転生者の輪廻物語』よッ！！

~~~~~

劉ちゃん現世で死亡、

アテネに転生してもらっ、

数年後、私との運命の出会い、

無印編、私と劉ちゃんのラブラブな力で乗り越える、

暗黒次元のハイド編、狐に出会うが、劉ちゃんは私を選ぶ、

AS編、エロトなんていなかった、

アスラクライン編、私と劉ちゃんが…… 現在

~~~~~

全『……………』

フィ「え、あれ？なにこの反応は……………」

マ「い、いや…………いやいや、これはないだろ……………」

ク『さすがの私でもこれは引くわ〜』

フィ「え〜ッ！……！」

劉「ん〜まあフィオネの面白い部分も見れたことだし、今回はこの
辺にしとこうか？」

マ「だなあ。じゃ、あとはあとがきで……！」

番外編：皆様お久しぶりです！今回は軽〜い雑談ということで（後書き）

マ「はい。さつそくですが、感謝コーナーです！！」

キャ「A r i s h i a様、ユタ様、光闇雪様、龍賀様、月光閃火様、ひらがな3つでことみちゃん（笑）様、m a d a o様、畏無様、畏無様、メガネ様、夜神様、空言天狐様、感想ありがとうございます！！」

ク「これからもドシドシ頂戴ね！」

ゼ「お土産は、光闇雪様からは、劉と女性陣のウエディング写真入りケーキ、キャスター達とお爺さんの戦いのDVD
龍賀様からは、マーボーカレー

メガネ様からは、コダイ手作り水饅頭を頂いた。ありがとう」

マ「うん。カレーは最高だね」

劉「水饅頭もこの季節に食べるとおいしいね」！」

キャ「アタシ餡子も大好きなんですよ」

フィ「こっちは写真ね！」

劉「なんでオレまでドレス！？」

エ「……俺、いなくね？」

マ「まあお前だしな」

ク『まあとりあえず、皆、いつも私のためにこんなにお土産をくれるなんてうれしいわ。ありがとう』

フィ「出た！女王様モード……」

ゼ『……腹立つな』

マ「さて、お久しぶりというわけで、今回は感想にて、『マーボー最高』と送ってくれた方々に、劉の浴衣写真をプレゼントしましょう」

キャ「あ、その横には雫ちゃんがありますね」

劉「い、いつのまに……」

マ「まあほしい方々だけでいいので。……どうせ、誰もこの記事よんでないだろうけど（ボソツ）」

エ「コイツはどうしたんだ？」

フィ「さあ？」

マ「うっ、な、なんでもないよ。とまあ、自分達はこんな感じで元気にやっています。』どうしてこうなった?!』の方が中々投稿できないと思いますが、たまには思い出してやってください。よろしくお願いします！」

劉「そうだね。思い出してね」

ク「つか、アンタが早く書けばいい話じゃん！」

マ「うぐっ……正論だけど、夏休みの課題で企画書30、映画レビュー5、ゲームレビュー5、読書感想文5が出るからそれをやらなにと。それに魔法少女の萌えるキャラ設定を作ったのシナリオ20kbもあるし。……やる事だらけなんです！」

キャ「まあその間をぬって執筆はしてくださいね」

マ「……は、はい」

フィ「では、次回もよろしくね〜!~!~!」

第80話…これは悪夢ですか？　いいえ、現実です

「ここは……？」

「何もない空間……。」

「オレ以外の生物の気配がしない。」

「まるで、オレがあの日……初めてアテネに会った時みたいな空間。」

「オレはそこで横になっていた。」

「……なんでこんな所に……。」

「上半身を起こし、もう一度周りの様子を見る。」

「けど、やっぱりそこは白いだけで、何もない空間。」

「オレ……アスラクラインの世界にいたはずなのに……。」

「立ち上がり、自分の腕を見る。」

「いつもは付けているはずの、指輪も腕輪もない。」

「そう。クリスとゼロがない。」

「ますます、何がどうなっているのか分からなくなっていくオレ。」

「お〜い！　劉〜！！！」

「　　ツツ！！！」

「何も無い、何も居ないはずの空間からオレを呼ぶ声が聞こえた。
オレは呼ばれた方を向く。」

「……え？ し、土郎さん？」

「劉……！！！」

「ちよッ……！！！」

振り向くと、目の前まで土郎さんが迫ってきていて、オレに向かってダイブしてきた。

オレは避けることも出来ずに、ただそれを受け止める。

「ん〜！ 劉は本当に可愛いなあ……！」

「い、いやいや。なんでここにいんのさ!？」

無理やり頼ずりしてくる土郎さん。

両肩を掴み、なんとか引き剥がそうとするも、力が強くて難しい。

「だ、誰……か」

抱きついてくる力も強くなっていき、息が出来ないほどまでになっ
ていく。

意識も朦朧としてきた。

(……次死んでも……転生できますよう、に……)

半ば諦めたオレは、心の中でアテネをお願いする。

それにしても、なんでデバイスがないんだ……？

そしてこの空間……。

本当にどうなっているんだよ……。

土郎さんに抱きつかれたまま、天井？を見上げ、ゆっくりと目を

閉じ……

「待ちなさい！ 貴方！！」

「も、桃子！？」

……なんだって？

士郎さんにいきなり解放され、力なく倒れこむオレ。

それをうまい具合にキャッチして体勢を直してくれたのは、桃子さんだった。

「な、なんで……？」

「あら？ 私は劉ちゃんのお母さんなのよ？」

そういうと、桃子さんはオレの事をそつと優しく、抱きしめてくれる。

「むぐつ……も、桃子さん、苦しいよ！」

「ふふつ。お顔が真っ赤ね。本当に可愛いんだからあ……ね？ 貴方」

「……っ！！ そ、そうだな。あ、はは、あはは」
さつきまで優しくかった桃子さんだったけど、士郎さんに向けた笑顔からは優しさの欠片

も見当たらなかった。

「あ、あの……桃子さん？」

「ん〜？ 劉ちゃんは何にも心配要らないわよ〜？」

そう言つと、桃子さんはまたオレをその豊富な胸に抱き寄せてくる。
正直、死ぬ。

「ちょっと桃子さん？」

と、そこでまたこの広く白いだけの空間に声が響く。
しかもその声に、オレは聞き覚えがあった。

「劉ちゃんが苦しがつているわよ？」

「か、……母さん……？」

そこにいたのは、この世界に転生し、オレの事を育ててくれた両親。
オレがこの手にある魔法を使って皆を護っていくと決意したきつかけである方たち。

「な、はへ？　なんでここに……？」

俺は何度も瞬きさせ、母さんと父さんを見る。

けど、そこには変わらずに笑顔でオレを見守ってくれている二人がいた。

「んもう！　私もずっと劉ちゃんの事抱きしめたかったんだからあつ！！」

「それは俺だって同じだぞ！　俺の可愛い娘よおっつ！！」

そして、笑顔だった二人の表情が一変。

慈愛の目から獲物を狩る肉食獣のように目をギラつかせ、オレに飛び掛ってくる。

「え、え、え！？　二人もなのおっ！？」

「「それでええっす！！」」

オレはそのまま二人にも抱きしめられる。
前は桃子さん後ろは母さん。
そして左右には父さんと土郎さん。

「も、もう……ダメ、かも……」

何がダメって。

こんな大の大人四人に抱きしめられて、しかも顔は桃子さんの胸に埋められて。

顔を上げようにも、後ろから母さんが胸で押さえつけているし。

(う……っ……あう……)

そこでオレの意識を完全に途切れた。

「ん……ふう」

なんだか甘い香りがする。
しかもすぐ近くから。

オレは閉じていた目蓋をゆっくりと開ける。

(……え？　なんで目を開けたのに、暗いままなの？)

そういえば、なんだか息苦しさもある。

(くそッ！)

オレは手を前に突き出す。

すると、さっきまで暗かった世界は、一気に明るくなり、朝を迎えた。

「はあ、はあ………なんで　ッ!？」

知らないベッドの上、そこにはオレの横で寝息を立てて気持ちよさそうに眠っている朱

湮さんの姿があった。

(さっきまで暗かったのも朱湮さんの服のせいか)

見れば、朱湮さんは黒いタンクトップに薄そうな下着のみの姿で眠っていた。

そしてさっきの暗かった世界はあのタンクトップを押し付けられていたのが原因だった

わけで……。

「ん〜っ」

「はうっ!?!」

朱湮さんがいきなり伸びをするのに体を硬直させるオレ。

が、朱湮さんは起きることなく、そのまま豊かな胸を揺らしながらリズムよく寝息を立てる。

てる。

「……あの胸にオレ、顔を……」

あの時の甘い香りを思い出す。

それに意識した今だから顔全体を包んでいたあの柔らかい感触も甦ってくる。

「……はあ。オレ、何してんだろ」

頭から煩惱を振り払い、そのままベッドに横になり、天井を見上げる。

するっ……

「〜っ〜っ!?!」

『あれえ？ 何そんなに焦った顔をしてるのかなあ？』

頭上ではニヤニヤオーラ全開のパジャマ姿の操緒がオレの事を見ていた。

『ねえねえ。どうだったあ？ 胸柔らかかった？ なんかすんごい

押し付けられていた

けどお？』

「……………う、うう……………」

きつとあんな夢を見たのも朱湮さんのせいだ。

恥ずかしさから自分の顔が赤くなっっていくのが分かる。

それを操緒は見逃してくれなかった。

『ほ〜ら、顔なんか赤くしちゃってえ。ホントに男の子なの？』

「お、男だもん！！」

オレは朱湮さんとは反対方向に向く。

「すう、すう」

「って、そっか。智春もいたんだ」

何かに魘されながらも、静かに寝息を立てている智春。

そう。昨日は半壊しかけた鳴桜邸で、朱湮さんにオレの事を説明した。

転生者だという事は抜きにして、高月家の親戚でオレの場合は昔から不思議な力が使える

るということ。

これは天道家では稀に起こる遺伝性の物だということ。

「ふ〜ん。それで女の子の容姿なのね〜」

「オレのどこがですか!？」

オレの説明はちゃんと伝わったんだろうか……。少し……いや、かなり不安ではあるけど、一応説明はした。聞くも聞かないもあの人の責任だ。

「はあ。ねえ操緒。なんでこの人達は人の言う事を聞かない人が多いんだろうね？」

『さあ？ 操緒もよく人の話を聞かないって言われるし』
「そうだったね」

ここでの味方、唯一の良心は常識人の智春だけか。

「もうオレには智春しかいないよ」

『うわっ。なんか告白みたいだよ？』

なんか上で騒いでいる幽霊モドキがいるけど、この際シカトだ。

「ん、んうっ！ ……っはあ。あ、りゅうっ」

オレが智春の寝顔を見てみると、軽く伸びをして目を覚ます智春。でもまだ寝ぼけているみたいだ。

その証拠に舌が回ってないみたいだし。

「なんだよお。そんなに可愛い顔して」

「え？」

そして寝ぼけている智春は何故かオレの背中に手を回し、抱き寄せ
てくる。

『あッ！ ちよつとモ！？』

操緒が智春の様子に気がつき、声を荒げる。

オレも抵抗しようとするが、智春の抱き寄せる力に負けてしまう。

(う、嘘だろ？ オレが力負けしている？?)

寝起きだから力が入らないのか。

だとしたら智春だって同じはず。

でも、智春は今オレの事を可愛いとか言って女の子？だと思っ
てるのかもだし……。

「そっか……」

そこで一つの解が導き出される。

『劉ちゃん！？ ど、どうしたの？』

「いやね。男子のエロパワーは無限大って事だよ」

『自分がその標的だって事忘れないでえッ！！』

オレは半ば抵抗するのを諦める。

まあ抱かれる事には不本意ながら慣れてるし。

そりゃ、少しはドキドキするけども……別に実害があるわけじゃな
いし。

オレはゆっくりと目蓋を閉じる。

このままもう一眠り……っつと。

そのまま意識を放り出そうとする。

『あーッッ!!! トモ! それはダメええ!!!』

が、いい所で操緒に邪魔される。
再び意識が覚醒してしまうオレ。

「もう。なんだよ操緒。別に智春の事は放っておけば大丈
ッ
ッ!?!?」

目蓋を開けながら操緒に抗議するオレだったが、その抗議を無理や
り遮られてしまう。
なんでって……?

「ん! ん 〰〰〰〰!!!」

正解は、オレの唇が智春の唇によって塞がれるからでした……。

「ん〰ッ!!! フーツ、フーツ……ん ーッ!!!」

強引に押し当てられた唇にオレは絶叫しようにも声が出ない。
出るのはフーツフーツと荒い鼻息だけ。

両手も押さえられ抵抗することもできなくなるオレ。

そのままオレの上に押し掛かってくる智春。

こいつ、本当に寝ているのかよ?

しかも口をもごもごと動かし始めてるし……

『ぎゃあああ!!!! トモ〰〰ッ!!!』

操緒はそこで顔を真っ赤にして涙目になりながら沸騰。

その操緒の声で目を覚ましたのは……

「何よ、騒がしいわね〜って、あらあらあ?」

最悪なことに朱湮さんだった。

「ん~~~~!!!! ちゅっ……つぶはあ。ち、ちがつ……!!」

顔を横にする事で押し付けられた唇を離す事に成功。けど、智春はそのままオレの頬に吸い付いてくる。そしてオレは慌てて朱湮さんに説明しようとするも……

「やっぱり、劉ちゃんは女の子なのね〜」

つと、オレの話を聞いてくれない。

「も、もう……最悪だ……お婿に、行けない……よ」

泣くしかないオレだった。

『トモ……操緒と同じ体になる覚悟はある?』

「……すみません」

あれから朱湮さんが智春の頬をビンタする事で起こすと、智春は自分の状況が掴めずに

混乱していた。

上には怒り狂っている幼馴染。

いきなりビンタをしてくる高校の先輩。

そして、自分の下には唾液まみれの顔をして、泣き崩れているオレ。そんな智春が不憫に思えたのか、それともさらに面白い光景を期待したのか、朱湮さん

が笑いを堪えながら智春にことの始終を話す。

「へえ……私が寝ている間にそんな事が……」

その話を一緒に聞いたフィオネは黒いオーラを纏いはじめる。

お前はずっと呑気に寝ていただろ……。

そして、その話を聞いた智春はだんだんと顔を赤くさせ、最後にはオレに土下座してき

たのだった。

「う、ごめん、劉……」

「もういいよ。あれはお互いになかった事にしよう？」

お風呂を借りて、べたべたした顔と、掻いた汗を洗い流したオレは、智春の少し大きい

Yシャツを着て、髪をバスタオルで拭いていた。

よかったよ、昨日風呂が壊れてなくて。

その土下座をしてくる智春の事をオレは許すが、姿を直視する事は出来なかった。

だって、なんか気まずいじゃん。

「劉ちゃん。それ、乙女の反応よ?」

「しゅ、朱湮さん!」

朱湮さんにもう一度オレが男である事を説明しようとする。
と、同時に……

ピンポーン

鳴桜邸のチャイムが鳴った。

「は、はいはい!」

智春は居心地が悪くなったのか、すぐに玄関へと向かう。
オレだって、この空間には居づらいよ。

説明を諦め、ソファに座りながらドライヤーで髪を乾かす。

『劉ちゃんの髪ってきれいだよね』

たっぷりと発散させたからなのか、すっきりした顔つきでオレに話しかけてくる操緒。

「ん〜そうかなあ？ あんまり意識したことないんだけど」
『え〜、勿体無いよお？』

そんな他愛のない話。

あ〜なんかやっつと平和って感じたな。

さっきの事は、早く何とかして忘れてしまおう。

「え？ 月？ それに、……と！？」

ん？

なんか玄関の方が騒がしいな？

『なんか玄関の方が騒がしいね』

操緒も同じ事を思っていたみたいだ。

オレは玄関に向かおうと立ち上がる。

その時だった。

玄関の方から二人組が勢いよく入ってくる。

その動作にあわせて朱涅さんも何処からか出した銃を構え臨戦態勢をとる。

なんで朱涅さんはいきなり臨戦態勢をとるんだよ！？

そのまま睨み合う二人組と朱涅さん。

……って、この二人組み……。

「ちょ、ちょっと待って！」

慌ててその睨み合いの中に入って仲裁をとろうとするオレ。

「はああ。やっと平和が訪れたと思ったのに……。で、そんなに怖い顔してどうしたの

さ？ 奏、タマモ」

勢いよく登場した二人組み。

それと奏とタマモだった。

顔がなんか怖いけど。

大事なことだからもう一度。

顔がなんか怖いけど。

「りゅ、劉君。昨夜からいないと思ったらここにいたんですね……

それに、その格好……

……」

奏の目からハイライトが消えたと思ったら、その視線を後からやって来た智春に向ける

。

「ご主人様^{マスター}、心配しないでください。ご主人様^{マスター}を汚した害虫

はアタシが始末しますから」

「そうねえ。それには私も参加させてもらっわ」

そして、奏と一緒に智春へ殺さんばかりの視線を投げつける。
いつかその前に……

「た、タマモはなんで今朝の事知ってるのさ!？」

今朝の事はこの二人は知らないはず。

「そんなのアタシが神だからに決まっているじゃないですか!」

「私はタマモさんに劉君がここにいると聞いて、一緒に来ました」

各々に答える二人。

そっか。

タマモは神様だからかあ。

それじゃあしょうがなによねえ。

オレは智春を同情の目で見る。

「りゅ、りゅりゅりゅ劉……」

涙目でガタガタと震えるその姿にオレは何が出来るだろうか……。

・
・
・
・
・

何も出来ないよね。

だって、この三人組。

フィオネとタマモと奏を止めるなんて……オレには無理だよ。

(智春……本当にごめん)

今から散り逝く友のために心の中で合掌したオレは、智春からそつと視線を外して、ド
ライヤーのスイッチを入れる。

『まあ今回はトモが悪いんだし……』

いつのまにか制服姿に着替えていた操緒も、苦笑しながら言う。

「そ、そんなぁ……」

その日、朝から鳴桜邸では一人の少年の叫び声が響き渡ったという。

第80話：これは悪夢ですか？ いいえ、現実です（後書き）

マ「ささ、ぱぱつと感謝コーナーだ！畏無様、光闇雪様、月光閃火様、メガネ様、龍賀様、黒龍様、空言天狐様、マサ様、感想ありがとつございます！」

ゼ「お土産は光闇雪様からは、空飛ぶ饅頭&黄昏饅頭
龍賀様からは、劉と瑠璃と雫に過去&現在を撮れるカメラとニバン
ボシと天狼

マサ様からは、夏野菜カレーと白玉ぜんざいを頂いた」

劉「いつもありがとうございますね」

フィ「この過去と現在が撮れるカメラってすごくない？」

キャ「でも未来は撮れないんですね」

エ「そりゃ、未来が分かっちゃったらつまらねえだろ」

ク「あら、珍しくエロトがまともな事言っているわね」

エ「め、珍しくってなんだよ……」

マ「まあ本当の事だしさ」

キャ「ん〜。あ、じゃあ、エロトはハーレムな未来が覗けるとしたらどうですか？」

エ「覗くに決まってるだろ！！」

フィ「だ〜めだ。やっぱりさっきまでのエロトは偽りだったんだわ」

ク『そうね。それでこそ下衆野郎ね』

ゼ『そうだな』

エ「て、てめえら……いい度胸してるじゃねえか」

劉「ま、まあまあ」

フィ「少しは落ち着きなさいよ」

マ「そうです。それに今回の話を見ても。劉の唇が汚された話だぞ？」

キャ「あ、そうでした。それで作者様を殺そうと思ってたんですよ」

マ「え………？」

フィ「あ、私も私も〜！」

ク『よくも私が眠っている間に………!!』

ア「どこからともなくアテネさん登場! さあ………殺りましょうか?」

な「あ、私も参加するの〜!」

フェ「そうだね」

劉「……その、ありがとう。エロト」

エ「う、うるせ……」

ゼ『仲良くする事はいい事だな。じゃ、今回はここまでだ。感想たくさん頼むな。では次回もよろしく!!』

第81話：少し、本気になってみようか？

「よう！ 学校はもう慣れたかあ？」

「樋口か。おはよ〜」

あの騒がしい朝から数日。

オレはなるべく科学部には関わらないようにしている。別にあそこに入らなくても原作には介入できるわけだし。

ここ最近は『リリなの』の世界も含めてドタバタしてたから、いい加減こういう日常では休みたかった。

まあ智春は捕まったみたいだけど……。

そのおかげ？なのか、あまり朱理さんには目を付けられなかったみたいだ。

これに関しては本当によかったと思っている。

オレの力について説明した時は失敗したと思ったけど。

「なあなあ。頼んでいた高月の写真は撮ってきてくれたか？」

「んな事するわけないでしょ？ なんでオレがそんな事を……」

「いいじゃんかよお！ 劉ちゃんとオレの仲だろ？」

「やだ」

とまあ、こづして日常を満喫しているわけだが……。

「あ、劉くん。今日のお昼はどうしますか？」

「普通に購買とかで買うよ。奏もでしょ？」

いつも一緒に買って食べているのに、今日の奏はそんな事を聞いてきた。

「あ、あの、ごめんなさい。今日は少し用事があって……その、だから……」

と、奏は涙目で申し訳なさそうに謝ってくる。
何も泣くことはないだろ。
いきなりの事に焦るオレ。

「い、いや別に今日ぐらいいいって。だから泣かないですよ？」
「ううっ……劉君は私が居なくても……平気なんですね……？」
「そ、そういう事じゃないってばあ」

何故かオレが悪いみたいになっちゃってしまっているこの状況。
おい、周りの連中。何が姉妹喧嘩だ？
常々オレは男だと説明してるじゃんかよ。

「か、かなで〜」

いい加減どうしたらいいものか、本気で頭を悩ましていると、

「……くすっ。冗談ですよ。これ、クリスさんに教わっちゃいました」

と、さつきまで涙目だった顔は太陽に負けなくらいの笑顔に変わっていた。

「……………」

まあこんな笑顔な奏を見れるのはレアだけどさ。

周りを見たら樋口をはじめ、男子連中はバツタバタと倒れていた。
これだから男連中は……って、これだと丸つきり乙女思考じゃん！！

「あ、あの……怒ってます、か？」

「そ、そんなわけないよ！ そっか。クリスに教わったのか。騙されたよ、は、はははっ」

今度は本気で泣きそうな表情をした奏にオレは両手をぶんぶん振り、慌てて笑顔を作りながら対応する。

「お、オレ、トイレ行ってくるよ！！」

そして、オレは教室をダッシュで抜け出し、男子トイレの個室に駆け込んだ。

「ふう……さてと。デバイス・スリープモード解除」

自身の魔力を通し、指輪と腕輪状のデバイスを起動させる。

『ん〜、まだ眠いんだけど……？』

『どうしたんだ、劉？』

二つのデバイスの反応は、一発で性格が分かるくらいに偉い違いようだった。

「いや、ちょっとクリスにお話があってさ……何のことか……分かるよね？」

『……………私への熱い告白かしら？』
「んな訳あるかああッツ！！！！！」

オレは腕輪を外し、クリスを便器の中へと叩きつける準備に入る。

『あ、あわわわ。ご、ごめんなさいい！』

その行動にクリスが慌てて謝罪してくる。

別に本気で叩き付けようとしているわけじゃない。

けど、これぐらいしないとクリスを謝らせる事は出来ないと判断したオレの行動だ。

この世界に転生してからというもの、クリスはオレに隠れて奏に、
こういうオレが反応に困ることばっか教えている。

そして、その反応を見て楽しむという……………。

何故か知らんが、それが大層気に入ったようで、何回注意してもクリスはやめない。

一回本気で修理しなきゃまずいのかな？

『ふう……………今日はちょっと危なかったわね。でもぞくぞくしたわあ』

……………『リリなの』の世界に戻ったら修理は決定だな。

「はあ。もういいや。毎度の事で疲れたよ」

オレはデバイスに意識を集中させ、スリープモードにする。

トイレから出て、教室へ向かいながら外した腕輪を装着した。

「って、廊下がかなり静かだと思ったら、もう授業が始まっている
！？」

こつこつとオレの足音だけが響く廊下。
ほかの教室ではすでに授業が始まっていた。
道理で静かなわけだ。

オレは少し急ぎながらも、けっして走らないように、早歩きでクラスへと足を速める。

「す、すいませ〜ん。遅くなりましたあ」

教室のドアをそ〜っと開けながら、遠慮気味に入る。
もちろん中ではすでに先生が教卓に立って授業を開始していた。
その先生がオレを見て、気まずそうに聞いてくる。

「なんだ。もう平気なのか？」

「え？ あ、ああ遅れちゃってごめんなさい」

「無理そうなら保健室に行ってもいいんだからな？」

「いえいえ。大丈夫ですから」

「ふむ、そうか。いやあ、先生は男だから、あまりそういう事は分
からなくてだなあ」

そして、その先生のセリフに周りの女子生徒は「セクハラ」だとか
らかう。

い、いったい、何がどうなってるんだ？

なんか先生とも会話がかみ合っていない感じがする。

「劉ちゃん。ちょい、こつちに」

オレが教卓前で困惑していると、後ろのほうから樋口がオレを呼ぶ

声が聞こえてくる。

なんだか、普段はただの変態な樋口がこういう時は限定で頼りになるお兄ちゃんな印象になるから不思議だ。

「な、なあ。これってどういう事なの？」

オレはすかさず、そんな樋口に耳打ちして聞き出す。

すると、樋口は待ってましたと言わんばかりのどや顔で胸を張りながらこう言った。

「ああ。その事なんだけどな。オレが劉ちゃんがないのは、女子特有のあの日だと伝えておいたんだ。ナイスフォローだろ？」

「お、お前は………」

本当なら顔の原型が分からなくなるまで殴り飛ばしたかったが、これが樋口だと思うと……

「はあ……もう、どうでもいいや」

と、脱力してしまう。

「よし。劉ちゃんポイントゲットだな」

「なんだよそれ………」

精神的に疲れたオレ。

これってまだ一時間目だろ……？

オレは樋口を無視して自分の席に座り、机に突っ伏す。そこから昼休みになるまで、オレは意識を手放した。

結局は日常でも疲れるオレだった。

こうして、なにごとくなかった日常。

だけど、目を覚ましたオレを待っていたのは、その日常からは少し、いや、かなりかけ離れた光景だった。

「……………え？ な、なにこれ…………？」

目の前に広げられていた光景は、どこの異世界に跳ばされてしまったのかと誤解させるような物だった。

部屋は闇にも負けないかのような漆黑に包まれた空間。

唯一の明かりは蝋燭が何本か、傍から見れば幻想的なのだが、周りの雰囲気の問題があった。

その蝋燭がドア、なのか？そこから吹く隙間風に揺られるたびに、真っ暗で何も

見えない床を照らす。

一瞬だけ明るくなつた床には、何やら日本語ではない、むしろ、この星の言葉ではない、けども不思議とそれが言葉だと分かるような文字で、色々な形を描いているのが見える。

まるで、何かの儀式の途中のような。

そんな空間で目を覚ましたオレは、もちろん不安を覚えないわけがなかった。

すぐさまオレは魔力を開放させてデバイスを起動させた。

『な、なによ、これ。』

『おい。俺たちが眠っている間にどうなってしまったんだ？』

起動したクリスとゼロはその異様な空間の雰囲気ですぐさまに感じ取ったのか、震わせた声でオレに問いかけたきた。そんなのはオレだって知りたい。

「いやね。オレもさっきまでは教室で眠っていたと思うんだけど」

たしかに、オレは教室で眠っていたはずなのに。気がつけばこんな空間に放置されていた。

それも……

「こんなおまけつきなんだよなあ……」

腕に違和感を覚えていたオレは、軽く振ってみる。それと連なって聞こえるジャラジャラとした質量を感じさせるその音色は、動かして音を聞きたびに少し錆び臭いものが鼻腔をくすぐった。

「どうやら、オレってさあ、十字架にはりつけられているみたいなんだ」

『劉ちゃんって、意外と呑気なのね』

クリスがオレを呆れたように、だけどさっきの震わせた声とは違って、今回は含み笑いを込めた声でオレに言う。

そのクリスの雰囲気伝わってきたオレの心に、いつものような平常心が戻ってき、不安に思っていた物は、すぐにオレの心から出て

行った。

「呑気ってわけじゃあないんだけどさあ」

オレはクリスに語りかけながらも、体全身に雪原を連想させる銀色の魔力を纏いはじめ、

「でも、これ以上好き放題させるほど、のんびり屋でもお人好しでもないよ」

その言葉と同時に魔力を一気に開放させたオレは、腕に巻きついていた鎖を難なく引きちぎった。

「ったく。どうしてこんな目に……」

鎖から開放されたオレはさっきまで鎖が巻き付いていた腕に鼻を近づけてすんすんと匂いを嗅いでみることにした。

「うっ……これは買い換えないとダメかな」

独特の鉄の匂いに顔を歪ませるオレ。

まあどつちにしろ、錆の色が制服に移ってしまっている時点で匂いとは関係なく買い換えなくてはならない。

「ふう、で？ オレはこれからどうすればいいのかな？」

空間を見渡すが、視界が悪い。

だが、この空間はそれほど広くはないと思えた。

「ふむ。じゃあとりあえずは……日ごろの鬱憤を発散させてもらお

うか」

『『え、？』』

そんな二台のデバイスの声が重なるの聞きながらオレは手に魔力を溜める。

「いつだってそうだ。皆はオレの事女扱いして、オレはこんなにも男らしくしているのに……！」

『いやいや、劉ちゃんは相当可愛い部類よ？』

『こんな時でも劉にそういう事言えるのか……』

クリスの戯言を聞き逃し、目に直死の魔眼を発動。オレの脳が死を理解すると同時に世界は豹変した。

目に付くものすべてに、『存在の寿命』が黒い線や点といった情報として現れる。

部屋は真っ暗なものにもしつかりと目視できるこの線と点。

見ている正直気持ちのいいものではない。

今すぐにもこの眼を使うのをやめたかったが……

「……もう我慢の限界なんだー！ーッ！ー！！！」

なんでこんな目にあっているのか、それと曰ごろのストレス解消をしたいという欲望を抑えられなかったオレは、ひとつの線に向かって走り出す。

その時に起きた疾風によって蠟燭の火は簡単に消え、より一層暗さに拍車がかかったが、今のオレには正直関係ない。

『ぎゃー劉ちゃんのご乱心よおおツ！ー！』

『まあその気になればこんな世界なんて劉一人で征服出来るわけだ

しな』

『ちょッ！ アンタまで、なんでそんなに呑気なのよッ！！』

「うらあッ！ 全部壊れちまえッ！！！！」

『ぎゃああああ！！！！！！』

そのデバイス陣の悲鳴とも取れる叫びが聞こえた瞬間、オレは背後から得体の知れない殺気を感じとった。

瞬時にその殺気に体を向けるが、暗くて何も見えない。

「ッ！」

今度は横方向からの衝撃。

その衝撃を魔力の壁で緩和させながら距離をとる為にバク宙して引きさがる。

『劉ちゃん、無数の殺気を感じるわ』

焦りやさつきまでのふざけていた感情を消した機械のような声でオレに警告を発するクリス。どうやら本気でやばい状況らしい。

改めて状況を理解したオレはすぐさま戦闘態勢から命を賭けた殺し合い用の態勢に切り替えた。これは今まで何度も死線を切り抜けてきた賜物だ。

すぐに直死の魔眼を切り替え、自分の眼に魔力を通し、視力を強化。何も見えなかったその暗闇にいくつかの影が現れる。

「見つけた！」

それぞれの影にはオーラのような物を纏っていたが、その中でも一際弱く放っている周りの黒さとは違った？さを放っている者を見つめる。

「　っ！」

そいつに向かって手に投影したいくつかの切れ味の抜群のナイフ。影を直視できないこの空間でもオレの僅かな魔力で照らされ、ギリと魔力光より鋭さを持った光を放つそのナイフを見たそいつは、小さく「ひいっ！」と短い悲鳴をあげる。

今更びびっているのか？

オレはそいつの周りにそのナイフを複数投刀する。

見事に壁に突き刺さったナイフはそいつの服に刺さったのか、身動きを封じさせていた。

「　捕らえた」

足を強化させたオレはこの狭い空間でも構わずに神速でその影に向かって、

「クリス、ファースト！！」

『了解！　ファーストね！』

機械的な音色を放つクリスの声とともに手に出現させたひとつの剣。それを振りかぶる。

「ま、まずいわッッ！！」

背後から聞こえる仲間であろうその切羽詰った声。

普段のオレなら躊躇するような絶望に染まったそれを、オレは……

「殺し合いをなめるなよ」

無視して振り切った。

『ダメーーーーーッッ！！！！』

そいつにクリスが振り切る僅か数cm、その一帯を震撼させるような悲鳴がオレの鼓膜を刺激した。

ギンッ！

そして追加して聞こえたのは、クリスが何か硬い物に阻まれる独特な硬さを持った何か。

「ちっ。……まさか」

オレはそれに似た感触に覚えがあった。

それは今でも思い出したくもなく、だけでも決して忘れてはならない『あの世界線』での出来事。

オレの目の前に現れた？鉄を操るプレシアさん。

相対し、鏝迫り合いになった時のあの感触にも似た物を思い出しながらある一つの解を瞬時に導き出す。

そういう事かよ。

「ゼロ、だ！」

『発動！』

一定の時を止めたオレはその数十秒の時を一人動く。
オレの考えが正しければ……

「……っはあ、見つけたよ……」

見つけたしてしまった物に盛大なため息をついたオレは、
を解除すると同時にその見つけた物を押す。
すると、さっきまで暗くて何も見えなかった視界に光が満ち溢れる。

「うっ、まぶしっ」

暗さに慣れ始め、尚且つ視力を強化していたオレの眼を襲う光から
眼を瞑ることで逃れようとする。

それはそいつらも同じようで、背後からは口々に眩しいなどという
声がちらほら聞こえてきた。

「で、アンタ……じゃないか、アンタ等はいったいどうしてこんな
事をやっているのかな？」

そのオレの質問に空間全体が一気に静まり、湿度も下がる。
当然だ。今のオレは結構本気でキてる。

「ねえ答えてよ」

振り返り、オレの言葉に固まる面々。

「さあ早く」

科学部の皆さん」

オレがこの世界に来て、初めて本気で殺し合いをした相手、それは
洛芦和高校にあるとある部活の面子だった。

第81話：少し、本気になってみようか？（後書き）

マ「どうもお久しぶりです！感想版にて今回のみ時間がないため、劉たちには退出させていただきました。すいません！」

劉「本当だよ！」

マ「いやまあ少し落ち着いて、な？」

劉「それに今回の話は個人的に嫌いだ」

マ「ああ。そう思って書いたんだよ。それと、今回の話しは、劉が寝るまでの前半と、劉が起きた後の後半で書いてまして、その前半と後半を書くのに役一ヶ月近くのインターバルがありました。なので、この二つの文章に若干を違和感を感じると思いますが、ダメだめなマーボート、少し勉強してやっと一般的なダメになったマーボート、両方を楽しんでいただけたらなあと思います。はい、言い訳終了です。本当に下手ですいません！！！」

劉「長いいいわけだったね」

マ「うるさい！では感想コーナーです！空言天狐様、メガネ様、光闇雪様、黒龍様、月光閃火様、Arishia様、畏無様、龍賀様、AIRS様、マサ様、紅幽鹿様、神夜晶様、ガスキン様、感想ありがとうございます！！！」

劉「今回は新規で感想を書いてくださった方が二名もいらっしやいました！」

マ「自分がこの夏を乗り切ったのは皆様の感想おかげです!!」

劉「作者……………」

マ「次はお土産コーナーです！空言天狐様から水羊羹、外郎、葛餅。
光闇雪様からは、空飛黄昏饅頭、老舗のどら焼き。

黒龍様からは、高いシャンパンと嫌な事は全部忘れられる薬。

畏無様からは、女性メンバー全員に拷問器具一式と、マーボーに
痛みを快楽&疲労回復する薬。

龍賀様からは、智春に「鮮血の結末」。

マサ様からは、バケツプリン。

紅 幽鹿様からは無差別日記。をいただきました。ありがとうございます
います!!」

劉「なんだか、すごい事になってるな」

マ「あいも変わらずに、一段とクオリティが増してること驚嘆し
ましたよ」

劉「それと、関係ない話ですが、ただいま作者は乙女ゲーにはまっ
てます」

マ「その言い方は誤解を招く!!!会社のほうから女性の心理描写
の勉強としてやるように言われたんです!!!そして気がついた。
乙女ゲーの主人公、ヒロインですね。ヒロインは可愛い!（キリッ」

劉「今やってるのは?」

マ「薄桜鬼をやり終え、ただいまはうたぶりを」

劉「大変だねえ」

マ「まったくです。でもかなり勉強にはなりますよ。それに乙女ゲーってエロゲーなどと違って、話が重視されているわけではないんですよ」

劉「結構淡々とすすんでいく感じ？」

マ「ああそうなんだよ。それに　　っと、もう会社に行かないか！」

劉「それに急いでいたのか」

マ「そういうこと！！　とまあバタバタしちゃいましたが、今回はこの辺で！」

次回もよろしくお願いしますね！！！！」

劉「感想もどんどんください！　お待ちしていますよ！！！！」

第82話：ん？ なんか話が妙な方向へ……でもまあ丁度いいか。(前書き)

なんか寝起きでいきなり課題もきつかったんで、気分転換に書いてみました。

もしかしたら今日はこのままもう一本書くかも……ではどうぞ！

第82話：ん？　なんか話が妙な方向へ……でもまあ丁度いいか。

「で、これはどういう事なのさ？」

オレの何度目かの質問。目の前には朱湮さん、智春、奏、空中には何故かオレの事を終始鬼にも負けない形相で睨み続けている操緒が。オレ何かしたかな？

『劉ちゃん、トモの事狙ったでしょ？』

「ああ、その事が」

オレは何でもないと感じた感じで軽く返す。

その事が気に入らなかつたのか、操緒はさらに怒気を込めた声で言い返してきた。

『ちょっと！　トモを狙った事を謝りなさいよ！！』

「……なんで？」

『は、はあっ！？　普通謝るのが当然でしょ！』

「み、操緒……」

『トモは黙ってて！！』

さわらぬアテネになんとやら。

智春も黙って操緒に言わせとけばいいのに、そうやって止めようとするから巻き添えを喰らうんだ。

『ねえ、私の話聞く気あるわけ？』

「ないよ。最初っからね」

『な　ッ……』

原作ではもう少し賢いと思っていた操緒が、ここまで過保護だとは知らなかった。

横では智春がアタフタしているし。

絶対将来はお嫁さんに尻にひかれるタイプだな。

「智春、オレは謝る気はないからね」

「え？ あ、ああうん。こっちこそごめん。あんな事を……」

智春はさっきの事を思い出しながら言っているのか、目線をきよろきよろとさせている。

その先には、さっきまではよく見えなかった儀式でありそうな小物の類。

たぶん、元々部屋にあったやつや、樋口が持ってきたのなんかも混じっているんだろうな。

そして、未だにギヤーギヤー騒いでいる操緒を無視して、気まずそうにしている二人に視線を投げつける。

「うっ、や、や〜ね〜。あたしはただ君の力量を再確認したかっただけよ、ね、ねえ奏っちゃん？」

「え？ あ、あの……劉君、私は……」

いきなり話を振られた奏は今にも泣き崩れそうな顔でオレに視線を送ってくる。

うっ、こんな状態の奏になんて言えばいいんだよ……。

『とりあえず、泣かせないようにしなくてはな』

と、我が家の紳士であるゼロからのアドバイス。

オレはそれを有難く受け取り、操緒や智春、朱湮さんには向けなか

った精一杯の笑顔でこう言った。

「きよ、今日は奏の好物なおしるこがデザートに出るんだって！」
「ぐすつ、私、そこまで好きじゃないです……」

「そうだったね。それにおしるこが出るって言うのも間違いだった」
オレは念話でクリスに助けを求めろ。

普段なら絶対にこういう時は助けを求めない相手だが、ゼロの案が駄目だった今となつては、背に腹は変えられない。

『そうね。じゃあ、劉ちゃんが何でも言う事を聞いてあげるの？』

「なんだよそれ……」

やっぱり、クリスでは当てにならな　　って、奏の目がすっごいきらきらしてる!?

「あ、あの！ 私もう泣きませんからっ！」

奏は涙が決壊しそうだった目元を袖で押さえると、近寄ってきて、オレの制服の裾をきゅっと小さく握ってきた。

その様子はとても愛らしい小動物を連想させる仕草で、その場の空気が一瞬だけほわっと和む。

『って、しまったああっ!!! 敵に塩を送っちゃったわよ!?!?』
『自業自得だな』

「オレの力量を測るってどういう事なの？」

オレは朱湮さんに再度問いかける。

すると、さっきまでは半分ふざけていた態度を一変させた顔つきになる朱湮さん。

「それはね……単刀直入に言うわ。天道劉、改め劉ちゃん。貴方の力を見込んでお願いがあるわ」

「科学部の入部、ですよな？」

「……そう。話が早くて助かるわ」

オレに先回りされたのが気に食わなかったのか朱湮さんは子供みたくに拗ねる。

この人ってたまあにこう一面を見せるから放っておけないんだよなあ……でも、

「それは少し考えさせてください。正直、生半可な覚悟で殺気なんて出し、殺し合いで弱者を真っ先に狙ったのに対して咎めてくるよな方がいる部活に入ろうなんて……」

操緒に一瞥。

まだ操緒は納得していない顔だった。

むしろ今の言葉で火に油を注いってしまったかもしれない。

「りゅ、劉。もうそろそろその辺に」

智春が場の雰囲気察してオレを止めようとしてくる。

まったく。いつも苦労するのは智春なんだね。

同情の色を浮かべた視線で智春を見つめていると、今度は朱湮さん

がひとつの提案をしてくる。

「じゃあ、こつというのはどう？ 殺し合いではなくて純粹な模擬戦形式での対決。」

こちらからは、私か智春&操緒^{サオ}ちゃん。奏^{ソウ}っちゃんは審判」

なんだ、その提案は。

どうしてどの世界にも一人はこつという力で解決したがる人がいるんだよ。

オレはとある世界の魔砲を使う、なんとかさんを思い出す。

そういえば、あいつはあの後目を覚ましたんだろつか。

オレがこつちに来るときは、力を使い果たして眠ったままだったな。

「で、どうなのかな？」

朱涅さんがオレに向かって再度聞いてくる。

まあこの模擬戦とやらで、戦う意味を教えればいいか。

「その提案、受けてたちます。模擬戦とはいえ、全力全開でいくのでそのつもりで。そして、相手は……」

ちらつと一人の少年と浮遊している幽霊。

「智春と操緒の？ 鐵ペアでお願いします」

その宣戦布告に智春、主に操緒が乗ってくる。

そして智春も目付きを変えて、オレに宣言してきた。

「劉、さっきは僕の事を弱いつて言ったよね。僕がそうじゃないっ

て事、証明してみせるよ。」

どうやらこの世界線での智春は結構熱くなるタイプっぽいです。

「……じゃあ、その模擬戦の日には」

「ん？ 早いほうがいいからさっそく今から神社を借りてやるわよ」

『「はっ……？」』

これから戦う予定の操緒と智春と声を重ねながら朱湮さんの言葉を脳内で反復させるオレ。

この人、今なんて言った？

「じゃあそうと決まれば、さっさと行くわよ！！」

そう言うと、朱湮さんは一人で先を歩き始める。

いやいや、別に決まってるじゃないし、誰も納得してないから。それに授業は？

「劉君。もう放課後ですよ？」

オレの心を読んだのか、奏がオレの手を握りながら疑問に答えてくれる。

その横顔が熟れたトマトのように紅潮しているのは夕日のせいだろうか？

さっきまでは閉ざされていた黒いカーテンを開けて、改めて時刻を確認すると同時に、奏にそんな疑問を抱いたのだった。

そんなこんなで、こうなったら止める事は出来ないと知っているオレと智春、奏が神社に着くと、朱湊さんが律都さんと立ち話をしていた。

こうしてみると、二人とも普通の女学生に見える。

じやりつと散らばっている石を踏んで境内を歩いていると、オレ達に気がついた律都さんは、にこにこ不気味なくらいに満面の笑みで近づいてきた。

オレ、少しだけこの人苦手なんだよなあ。

その笑顔に過去何度騙された事か。

いや、オレだけじゃない。きつと何人も被害者がいるはずだ。

「いやあ、私がちよっかい出すのは劉ちゃんだけだよ」

例によってオレの心を勝手に読んだ津都さん。

なんでだよ、どうしてオレの心つてこんなにも無防備なんだ？

『顔に書いてあるのよ、全部ね』

そしてクリスに指摘されたオレは奏に手鏡を借りて確認。

ふむ、どこにも書いてないじゃないか。

「ふふつ。そんな確認をしている劉ちゃんはやはり男の娘ね」

本気で意味がわからない。

口では何を言っても無駄な事は重々承知しているオレは律都さんに境内を少し借りる事を伝える。

「ええ。話は聞いてるわ。ただし……………本気を出しちゃ駄目よ」
オレの耳に顔を近づけて最後のほうをボソッと呟く律都さん。
そう。この人はオレが転生者だって事を知っている。
理由は……………また今度。

「それじゃあ、さっそくですけど始めましょうか」

いつも通りなのか、勝手な朱湮さんの言葉を受けて境内の中心へと歩いていく智春たち。

オレもその後を続いていく。

お互いが向き合い、相手を見る。

「それじゃ、模擬戦はじめっ！」

朱湮さんが開戦の合図を出した。

「よし！ じゃあ今からアスラマキナー機巧魔神を

……………それをオレが待つとでも？」

「え？」

合図が出された直後、オレは智春の喉に投影した短剣を突きつけながら言う。

「今ので一回死んだからね」

第82話：ん？　なんか話が妙な方向へ……でもまあ丁度いいか。（後書き）

マ「はい、どうもです。さっきまで寝てました」

瑠「私も寝てたんだよ？」

雫「……ZZZ」

マ「つかさあ、今日ってなんでこんなにも眠いんだろうなあ」

フィ「いや、知らないわよ」

マ「まあとつとと終わらせるかあ」

キャ「ホント、この作者ってサイテーですね」

マ「え）、Rain様、光闇雪様、畏無様、神夜、晶様、ユタ様、メガネ様、紅、幽鹿様、黒龍様、龍賀様、空言天狐様、Arishia、感想ありがとうございます！！」

ゼ「久しぶりの瑠璃をありがとう。そしてお土産はRain様からは、狐耳&短い袴の巫女服

光闇雪様からは、科学部のみんなに絆創膏

ユタ様からは、「キング・クリムゾン」
「完全なる墨染の桜」
「開花」

紅「幽鹿様からは、スペルカード剣符【アンリミテッドブレイドダ
ンス】（スペル発動時、聖剣、魔剣、神剣、妖刀などの剣が無限の
数で相手に向かって放たれる）

劉に龍の牙、女性陣にシュークリーム三十個

空言天狐様からは、医療セットを頂いた。ありがとうな』

ク『ロリコンって犯罪にならないのかしら?』

マ『まあこいつは放っておきなさい』

瑠『ん?』

フィ『なんでもないわよ』

マ『お土産の医療セットは科学部みんなってことにはならなかったなあ』

キャ『そうですね。まあアタシには関係ありませんけど』

マ『ゲストは次回にお呼びしたいと思います』

瑠『え、私もゲストさんに会いたいよ!』

栗『ん?.....おはよ.....!じゃいます.....?』

マ『あ、おきた』

ゼ『寝起きもかぁいいなあ...』

フィ『通報しましょうか?』

ク『.....これでも同期だからやめたげましょうよ』

マ『ふん。会いたい?どうしようかな?』

瑠「あ、会いたい相対合いたい〜!!」

フィ「る、瑠璃ちゃん。興奮しすぎて意味が変よ?」

瑠「だって、最近はおとがきの出番もないんだもん……」

雫「え? 今ってあとがきの時間なんですか……?」

ク「そうよ? 何寝ぼけてんの?」

雫「わ、私……寝顔……撮られました?」

キャ「そうですね〜バッチリです」

マ「まあそんな事はどうでもいい!」

雫「よ、良くないですっ」

ク「今の発言は女の敵よ?」

フィ「じゃ、今回はこの辺で!」

瑠「皆さんも私がいいですよね!」

マ「……読者のみが知る」

フィ「私も瑠璃ちゃんがいいし、でも劉ちゃんだってOKだし……
うっん……」

マ「そうだ。感想のほうもどしどしください！ アドバイスや、この辺はこうしたほうがいいなどの意見もください！！ 絶対に参考にしますし、むしろそういった感想は作者側にとっては本当に有難いものなんです。

なので、そちらの方もお願いします！」

瑠「うう〜じゃ、次回もよろしくね？」

第83話：オレの役目……え？ 女装じゃないよっ！！（前書き）

やばい、寝落ちしてた……いそいで仕上げたので、誤字がひどいかも。

それとゲスト様は次回にさせてください。

本当に申し訳ございません！！！！

第83話：オレの役目……え？ 女装じゃないよっ！！

「今ので一回死んだからね」

オレは喉に突きつけていた短剣を消しながらゆっくりと智春から離れる。

その智春はオレに短剣を突きつけられたままの格好から動けずに、ただ固まっていた。

『ちよ、ちよつと！ いきなり危ないじゃない！！』

少しして、我に返った操緒がオレに文句を言う。

まだ何にも分かってないのかな？

オレは軽くため息をつきながら、操緒に視線を合わせ口を開いた。

「あのさあ。それ、本気で言っているの？」

「……………え？」

その言葉に反応したのは操緒ではなく、智春の方だった。操緒はここにきて何かを勘付いたのか、口を閉じている。

「オレだって、模擬戦でここまではする必要はないと思ったんだけど……………」

目を瞑り、オレは語る。

原作で智春が戦うことに躊躇してしまう事を。

それだけ、戦うことにはとてつもないリスクがある事を。

赤く染まっている空が段々と暗くなっていく。

それにともなつて、風が吹き、木々が一斉にザアツと揺れるのを感じながら、次の言葉を発した。

「どうしても、君たちには戦う意味を知ってほしいんだよ。……それは何故か。本来なら言いたくはないんだけど……君たちにはこの先、辛く、そして死にたくなるような戦いの日々が訪れることになる」

オレの言葉が理解できないのか、この場では律都以外の人物は思案の表情を浮かばせていた。

だが、オレはそれらを見殺しして口を閉じずに、続ける。

「今は分からないでもいい。だけど、オレの話は聞き漏らさずに最後まで聞いてくれ」

智春に視線を投げ掛け、それにしっかりと頷く智春。

目には真剣さが満ち溢れていて、話を聞く体制を雰囲気伝えてくる。

改めて智春の意志を確認したオレは口を開いた。

「お前のその？アスラマキナ 鐵、機巧魔神の原動力。それがもし、ベリアル・ドール 副葬処女の感情だったら？」

「操緒の……感情……？」

自分の頭上にいる操緒を確認するために見上げる智春。

その姿に朱湮さんの表情が若干だが、歪むのに気がついたが、オレは無視した。

「それに、もし、この先ひどい裏切りで自分だけではなく、他人を巻き込んで傷つくことがあったとして、そのせいで大切な人を無く

しそうになつたとする……それらの物を背負い込んで戦う覚悟はあるのかな？ たぶん、今の智春には無いと思う。今の君はまだ幾つもの岐路に立つただけの存在で、何も考えていないし、それに対して悩んでもいない」

ますますオレの言葉に思考がこんがらがったのか、頭を抱え始める智春。

あーそうだった。こいつは智春だった。

こうして一気に説明しても意味は無かつたんだ……。

「い、今はそこまで無理して理解しなくてもいいよ。……ただ、いつか、この言葉の意味を理解する日がそう遠くない未来に絶対にやってくる。その未来を迎えた日には手遅れだったって事にならないように、日頃から少しずつ頭の中でも意味を反復させて考えてくれ」

口を閉じたオレは、自分の手にひとつの剣を投影して構える。

「さあ、今回だけは時間を与える。黒鐵を出していいし、逃げてもいい。ただその場合は戦場で背を見せる意味をよく考えて。そしてここから先は……」

オレの言葉を待たずに、智春は黒鐵を召還する準備に入る。

辺りが暗くなってきた中、オレの目の前に現れた漆黒の体を持ったアシラムキナ機巧魔神は暗闇の中で緑色に光らせた瞳でオレの事を睨んでくる。

その瞳には明らかな殺意が混じっていて、オレの体の自由を奪おうとしてくる。

「劉、今の君の言葉は僕には理解できなかった。でも、それを理解しようとする事は僕には出来る。まだ本当の答えは見つけられていな

いけれど、今考え、掴み掛かったその答えを君に見せるよ」

智春からの言葉に全身を震わせる感覚を覚えた。

このわずかな期間の間に、智春はオレの話を聞いて、すでに理解し始めている。

まだすべてではないが、一歩ずつ歩み始めている。

オレはその感覚を楽しむように味わいながらも、震える体を抑え、黒鐵を見上た。

「いいね。じゃ始めようか。ここから先は　　本気だっ！」

黒鐵の咆哮。

空間を支配するようなその音色に動きを奪われるかのような錯覚を無理やり弾き飛ばしたオレは、手に持った剣、アスカロンで黒鐵に斬りかかる。

「黒鐵！！」

智春の指示に従ったかのように、機敏な動きでオレを弾き返す黒鐵。その特殊な硬さを持った鎧はガードしたアスカロンを一撃で粉碎した。

「…………なるほど」

改めて、全身が凶器である事を認識したオレは、自身のデバイスを起動させる。

黒鐵と同じく、漆黒のバリアジャケットを装着して、右手にはファーストモードのクリスを握り締める。

久々の全開に近い状態での戦闘だ。

「いくよ智春!！」

暗く染まりつつあった空間はオレの白銀の魔力光に照らされ、さつきとは打って変わり、明るくなる。

クリスを片手に駆け出したオレの動きに合わせて、周りの重力を支配してくる黒鐵は自身の腕に重力を乗せ、それをオレに放ってきた。

「お、おいおい。それってに序盤に出来たっけか!？」

魔方陣を形成していないから、黒の拳撃ではないにしても、この攻撃だけでも足止めとしては十分な威力がある。

「いいね。本気っていうのはこういう事だよ」

が、それは相手の動きについていけない者の考えであって、今のオレには身体強化の魔法なしでも避けられる攻撃だ。

自分の身体能力だけを頼りに、あとは放つタイミングを計って一つ、また一つと回避していくオレにその場にいたみんなは目を見開いて呆気にとられる。

「……なんか、そんな目で見られたくないなあ……」
『劉ちゃんって我俣よねえ』

クリスにはどうせ分からないよ。

心の中で拗ねたオレはどんどん黒鐵との距離を縮めていく。その様子に焦ったのか、智春はとんでもない指示を黒鐵に出した。

「く、黒鐵! 劉に向かってジャンプしろっ!！」

『『「……ゑ？」』』

デバイス陣と声が重なりながら、宙を舞った黒鐵に目を奪われる。

……マジかよ……。

その反則じみた裏技にオレは一瞬動きが止まる。

まずい……まずいまずいまずいッッッ！！！！！！

それだけがオレの頭をいつぱいにして、思考をごちゃ混ぜにさせる。

「くっ……っっ！？」

回避行動をとろうとするオレに何かが飛んできた。

これは……境内のじやり？

その飛んできた先には、唇を微かに吊り上げている智春がいた。

なるほど。オレの「ここから先は本気」という意味をつまく理解した上での行動か。

「けど、まだまだ甘いねっ！ クリス、リミッター解除！」

『ええっ！？ そ、そこまでするの！？』

「あたりまえっ！ 全力には全力！ つか、じゃないとオレたちに

明日は無いよ？」

『だろっな』

驚くクリスに、オレとゼロが早くしると促がす。
それに渋々と応じたクリスは、馬鹿にならないような膨大な魔力を
開放し、形態もごつごつしく変形させていく。

「さつてと、ユニゾン無しはきついけど、これぐらい耐えてくれよ
オレ体！」

刃先に黒鐵の重力にも似た魔力を圧縮させていく。
その魔力に智春が息を呑むのを感じたオレは、自身の魔法を解き放
つた。

「喰らえっ！ ケラビティ・エンド 超重力の果て！！！」

刃先に乗せた魔力で迫りくる黒鐵に斬りかかる。

「ぐっ………おおおお！！！」

こっちの力も負けてはいないはずの重力同士の対決。
だがしかし、上空から降ってくる黒鐵の重力の付加はとんでもない
ものだった。

自分の足が重力に負けて地面に埋まっていく。
耐えろっ………ここは耐えるんだ………！！

自身にそう言い聞かせるも、そのデタラメな威力を持った攻撃に、
戦闘意欲が押しつぶされそうになる。

「劉君！！！」

「劉！？！」

それを見ていた奏と朱湮さんはオレを心配そうな表情を心配しながら

ら叫んできた。

奏なんか今にも泣き崩れそうな勢いだ。

そんな顔をしないでくれよ……オレは【あの時】に誓ったんだ……
もう君にあんな顔はさせないって。

「だから……ゼロ！　を使う！」

『了解！　タイムリミットは10秒だ』

「ん、十分！」

オレは10秒という限られた時間を静止させ、黒鐵の懐から緊急回避をした。

『あと五秒！』

「よしっ！　今のうちに！」

黒鐵ののしかかりを回避したオレは、ゼロに魔力変換【暴風】を頼む。

荒々しく放出させた魔力を一つの槍に形成し、それを空中で停止している黒鐵の腕に投槍。

凄まじいスピードで投槍した暴風槍はけたたましい音を立てながら黒鐵に衝突する。

そしてもう三つほど形成した槍を片方の腕、両足へと投げつけ、動きを封じた。

「なッ！　く、黒鐵！？」

時が刻みだし、少し経つと智春の悲鳴が聞こえてくる。

オレはその悲鳴の元へ突き刺すような視線を向けながら、神速で接近する。

「ひっ……!!」

その視線に智春は全身を震いあがらせ、恐怖によって顔を歪ませるが、いい表情だ。

本気の勝負だと理解していなければ、こんな表情は出せない。

「さっきの攻撃はよかったね。オレも本気で焦ったよ」

オレは智春の背後に立つ。

「そして、よくこの短時間でここまで辿り着いた。けどまあ、まだオレは負ける訳にはいかないんだ」

「りゅ、劉　　っ!!」

振り向こうとする智春にオレは手とついで意識を奪う。

そのまま系の切れた人形のように倒れた智春を、オレは優しく抱き支えてあげた。

「……お疲れ智春」

第83話：オレの役目……え？ 女装じゃないよっ！！（後書き）

ゲスト様の件、本当に申し訳ございません！！

もう今日はこのまま倒れそうな勢いなので、ここできろつとおもった次第です。

なので、誤字などが多いでしょうが、勘弁してください。

そして、内容もおかしいところがあれば、報告してください！すぐに修正します。

……今日だけで、100KB以上は執筆しましたよ。

シナリオ形式込みの短編を二つに、本作一話。

そして課題のシナリオを六つ。

軽く指が死んだ……。

次回こそはゲスト様をお呼びします。

では感謝コーナーです。

月光閃火様、畏無様、光闇雪様、バラランシャ様、空言天狐様、夜神様、感想ありがとうございます！

なんか投げやりな感想返しに見えてしまうかもしれませんが、そんな事はないのでご安心？ください！！

では、感想、やアドバイス等よろしくです！！

第84話…じじいじいさんってあるまんなんだね〜(前書き)

今回は短めです……。

第84話：こついう事ってあるもんなんだね

「智春！」

「夏目君！」

境内から戻ると朱湮さんと奏がオレの元へやってきて、気絶している智春の様子を覗き込んでくる。

「大丈夫だよ。ただ眠っているだけだし」

オレはその智春を朱湮さんに預けると、奏にも智春の看病を頼み、少し離れた所で一人突っ立っている律都さんの所へ向かった。

オレに気がついた律都さんは額に青筋をたてながらピクピクさせて、こつちに微笑んできた。

「どうしたのかなあ劉ちゃん？」

なんだろう。

顔は笑顔なのに、目が笑っていない。とかではなく、ちゃんと目も笑ってはいるんだけど体から発している雰囲気と言う名のオーラが怒気に満ち溢れていた。

なんだこれ？

例の世界線で、死にそうになった時とは別の悪寒がオレの背筋を走っていく。

「私い、模擬戦前になんて言ったか分かるかなあ？」

あー、なんか知らないけど指をパキパキ鳴らしているよ。

女性がやる仕草じゃないし、女性である律都さんがすると何故か余

計に怖いよ……。

ガタガタ震える自分の体を抑えようとするも、それが出来なくなっている自分にびっくりする。

黒鐵の咆哮や殺気は難なく弾き返したっていうのに、この人は返せないでいる自分が居たのだ。

これが弱肉強食の世界。所詮オレは弱者ですよ……。

「う、ごめんなさい……」

目から溢れようとする涙を必死に耐え、オレより背の高い律都さんに見上げながら謝る。

しかし律都さんのにこにことした笑顔は消えない。

つか、もう辺りが暗くなっているのに、どうしてこんなにも笑顔がはつきりと見えるんだ？

……あ、オーラのせいか……。

「劉ちゃん……」

「は、はひっ！　なんででしょう!？」

いきなり呼ばれたオレは呂律の回らない舌を何とかして動かしながら律都さんに答える。

自分でも情けなく裏返ってしまった声に違う意味で涙が零れそうになった。

「……はあ。今回はその可愛い仕草に免じて許してあげるわ。でも、次はあまり未来の事を話しちゃダメよ？」

と、さつきとは打って変わり、今度は本当の笑顔を見せながら言う律都さん。

今までの雰囲気からは想像できない。むしろ、こっちの笑顔からは

想像できないさっきの雰囲気とはま逆の大人のお姉さんを感じさせる仕草で、オレの頭をまるで自分の娘のように優しく撫でてきた。

「へっ……あ、あう……」

そのいきなりの事に全身の体から力が抜けて、その場に座り込んでしまう。

そんな様子のオレを律都さんは笑い飛ばした。

「どうしたの？ さすがに全力での戦闘は疲れちゃったのかな？」

全力での戦闘？とんでもない。

今までの戦ってきた中で五本の指に入るぐらいの殺気を受けながらの威圧のみの説教にオレの体がもたなかっただけ。

そして今のオレは……

「は、ははっ。律都さん……腰が抜けちゃったよ……」

『劉、立派な女の子になったな』

ゼロ、それはフォローのつもり？

そして、なんで今になって助け舟？その助け船もオレにとっては泥舟だし……。

「劉ちゃんには女神が憑いているんだから女の子なのは当然よ」

そして、いつものほんわかお姉さんに戻った律都さんは意味不明な事を言っただけで微笑んでいる。

オレはそんな律都さんの事を無視しようとするが、いまだに足に力が入らない。

「うっ……うっ……」

「もう仕様が無いわね。私にまかせなさい」

律都さんはそう言つと、オレの事を抱き上げる。

「つて、なんでお姫様抱つこなの!？」

「むっ。劉ちゃん、しっかり食べてる？ 奏ちゃんカナが小さい頃と同じくらい軽いわよ？」

「そ、そんなの知りませんっ!！」

女性にお姫様抱つこされた拳句、同級生の女子の小さい頃と同じくらい軽いつて言われるなんて……。男として何か大事なものを失った気がするよ……。

『この娘は今更何を言っているのかしらね』
『だなあ』

うるさいよ、そこのデバイス陣は！

「奏お嬢様、若、お迎えにあがりました」

律都さんの部屋で休ませてもらったオレたち。しばらくすると、律都さんが連絡を入れたのが、八木さんが車で迎えに来てくれた。

ホント、見た目に反して優しい方だ。

オレはそんな八木さんに笑顔でお礼を言う。

「……………い、いえっ」

すると、八木さんはそわそわと、少し慌てた様に一人で車に戻ってしまっただ。

……………どしたんだろう？

「この娘はまだ自覚ないのか」

横で律都さんがそう言っていたけど、よく分からない人だ。

「ん〜っ！ ……はあ、昨日は少しやりすぎたかなあ。体がダルいや」

『どうしたの劉ちゃん？ とうとう生理でもきた？』

「お前は樋口かっ!？」

翌朝、昨日の戦闘せいか、体がやけにダルく感じるオレはさらに気を重くさせる一言に余計に滅入ってしまう。

「はあ……………疲れたよ」

来週は例の新生オリ合宿がある。

という事は、今週末にはUMAの捜査をするために科学部は先に湖に行くはず。

オレは科学部には入ってはいないけど、奏は行く事になるのだろう。

なんだかなあ。

オレも一応行ったほうがいいのかなあ。

「うん。行きたいけど、科学部にはなんとなく入りたくない」

それにホントに体がだるい。

きつと調査に行ったら休む暇なんて無いはずだ。

「ん？ ちょっと劉ちゃん」

「おい。お前、熱ないか？」

「え？ そんな訳ないじゃないか」

まったく。

やっぱりウチのデバイス陣はおかしいな。

いきなりこんな事言うなんて……。

「じゃ、学校に行く……か、あれ？」

急に視界がぐらつき、反転する。

まるで天変地異が起こったんじゃないかと思っただけだと言っ事をすぐに理解し、自分の額に手を当てる。

「あ、あれ……なんかちょっと熱いかな……？」

「ちょっと所じゃないわよ！」

「そうだな。完璧に熱があるぞ」

あはは……どうしよ……。

第84話：こういう事ってあるもんなんだね〜（後書き）

マ「感謝コーナー！！ メガネ様、光闇雪様、夜神様、龍賀様、畏無様、紅 幽鹿様、鏡様、けーくん様、感想ありがとうございます
！！」

ぜ「光闇雪様からは劉に写真を三枚（巫女、レースクイーン、スク水）、ほかには抱き枕（劉&瑠璃）

紅 幽鹿様からは、マーボーにスベルカード、魔符【時よ止まれ、
汝は美しい】（スベル発動時、数秒間だけ時間を止められる）、劉
に【七夜】と刻まれたナイフ、瑠璃に薔薇乙女ローゼンメイデンの水銀橙、雫に薔薇
乙女メイデンの真紅。を頂いた。いつもありがとう！」

劉「今回はゲスト様をお呼びしたいと思います」

キャ「あ、ご主人様マスターなんですね」

マ「まあ今回はな。では長らくお待ちせしました。どうぞー！」

幽「ここでははじめまして！」

幸「劉君久しぶり！」

美「お久しぶりですね」

エ「私もはじめましてですね」

マ「今回は紅 幽鹿様の作品『魔法少女リリカルなのは〜クリムゾンデビルゴット〜』から幸夜、美鈴、新デバイスのエターナルに作

者様である幽鹿様が来てくださいました！」

幸「やっと来れたよ」

劉「ホント、こっちの作者がぐうたらだから……ごめんね？」

美「劉君は悪くないですよ」

幽「ま、まあそこまでに……」

エ「でもここには男性が作者さんしかいないんですね」

劉「え……？」

キャ「えつとお……あ、エロトが来ましたよ！」

エ「そうだ！ ここにはこのオレ、ハーレム王がいるだけで十分じゃないか」

美「……………」

幽「うわゝ生で見たのは初めてだけど、黙っていればもてるんだろ
うなあ。黙っていれば……………」

エ「おい！ どういう事だよー！」

エ「とありますが、私と若干表記が被りますね」

幸「そうだね。そしてエロトは女の子の敵だね」

エ「お前、幸夜と言ったか？ ……うん。その蔑んだ目、中々に入った。もつと俺の事を蔑んでくれ！！」

マ「真顔で何言っちゃってんの！？」

キャ「その前にご主人様マスターが固まっちゃっているんですけどー！！」

劉「……………」

エ「劉さん、さっきのは冗談なので復活してください」

マ「そ、そうだぞ？ だから早いところ戻って来い」

劉「 ……っは！ お、オレは一体…………？」

幽「よ、よかった……………」

幸「まったく。ダメだよ、劉君にそういう事言ったら」

エ「すいません……………」

美「劉君は立派な男の子ですから安心してください」

劉「オレの事を男って言ってくれる数少ないゲストさん達だよ」

マ「泣くな。まあエロトだってお前の事は男だと言ってってくれるいるだろう？」

エ「お前は女じゃないしな」

劉「こんなのになんか言われてもしょうがないでしょ！」

キャ「ですよ〜」

幽「さて、俺たちはこの辺で帰りますか」

マ「え？ まだ何もしてないじゃないですか！」

美「……………」

劉「ん？ 美鈴さんが黙っちゃった…………？」

幸「えっと、今から作者に『B級映画』を見せられるんだよ」

キャ「そうなんですか？」

美「……………」

マ「なんかあったのか？」

エ「まあ触れないであげてください」

劉「じゃ、じゃあまた今度来てくださいね！」

キャ「いつもコスプレありがとうございます」

マ「お礼といっってはなんですが、今回は来れなかった瑠璃と雫がケ
ーキを食べている写真でも」

エ「うひょ〜！ 俺にもくれっ！」

マ「世迷言を」

幽「ありがとうございます！ ではこの辺で！」

エ「失礼します」

美「また気が向いたら来ますね」

幸「ばいばい」

キヤ「あれがお土産でよかったのでしょうか？」

マ「……さあ？」

劉「つか、瑠璃ちゃんってあの世界線の娘じゃん」

マ「そうだな……まあ気にスナナ」

キヤ「えっと、今回のアスラクライン編で分からない事がありましたら感想で一気に答えしているのがありますのでそちらを見てください！ それと、質問してくださいればお答えします！」

マ「その他の感想もどしどし募集中です！」

劉「では、次回も『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪

廻物語』をよろしく〜!」

第85話…たまにはいいよね？。(前書き)

遅くなってしまった……。

まさか寝落ちするとは……。

では、始まります！

第85話：たまにはいいよね。

「い、いいですか！ 私の言う事を聞いて、しっかりと療養しててください！」

「奏、顔が近いよ。それにちゃんと奏がない間も休んでるからさ」
奏が調査に行く日の朝、オレは自分の布団で寝た状態で奏に釘を刺されていた。

結局オレはあの後に熱でぶっ倒れ、八木さんの看病を受けていた。
常に奏も八木さんと一緒に看病してくれて、フィオネやタマモも普段はあまり見せない真剣な表情でオレの世話をしてくれている。

けど、その看病も虚しく、今日で四日間は熱が出っ放しのオレは今更慌てたり焦るのも馬鹿らしく思え、おとなしく家で療養する事にしたのだった。

「私は保険委員なんですからちゃんとと言う事は聞いてください」

「はいはい。分かっているよ、そろそろ時間じゃないの？」

原作と違って各自の家に佐伯家が車で迎えに来るという事になっている。

時間はもう間もなくのはずだ。

奏はちらっと壁に掛けてある時計に目をやり、ため息混じりにオレの顔を見てくる。

「で、では行ってきます、ね？」

どこかオレ一人を残していくのが不安なのか、表情が全体的に暗い奏。

オレはそんな奏に笑いかけてあげる事にする。

「心配しないで。もし奏がそのUMAに襲われそうになったらオレが助けに行くからさ」

まあ今のオレは魔法もろくに使えないんだけどさ……。

熱が出た時、魔法で回復しようとしたオレは実行するも何故か魔力が反応しなかった。

いや、正確には扱えるのだが上級クラスの魔法が使えなかった。

もちろん、下級の回復魔法を発動してみるも、集中できずに中途半端に終わってしまう。

たぶん熱で体力や精神力なんか低下している時は能力は全開には使えないのだろう。

まず転生してから無駄に体力なんかEXなため、発熱したのなんか初めてだったからその辺がよくわかっていなかった。

「はい！ 劉君は私の、王子様ですね」

そんなオレが思案している間、奏はオレの言葉に元気が出たのか笑顔で立ち上がる。

なんだろう？

雪解けを迎えた春のようなその雰囲気におれの心まで温かくなってくる。

やっぱり奏にはこういう笑顔が一番似合うと思うのはオレだけだろうか？

『いや、俺もそう思うぞ』

ゼロが口を開き、俺に賛成してくれるもすぐにスリープモードになる。

これはオレの魔力を少しでも節約するためらしい。
別にこれぐらいだったら構わないのに。

「では、行ってきますね!」

「うん、気をつけてね」

笑顔の奏を見送り、部屋に一人残されるオレ。

さっきまで隣に奏が居たからなのか、急に一人なったオレは無駄に
広い和風な自分の部屋に寂しさを感じてしまう。

「……………あう……………」

掛けられた毛布を顔まで被り無理やり意識を手放そうとする。

「なあに? 甘えモードの劉ちゃんになっちゃったのかなあ?」

「…っ!」

襖の隙間から聞こえた声にオレは一瞬体を強張らせ、視線を投げかけた。

「……………フィオネ」

「おかゆ作ってきたよ」

アウトフレームのフィオネが小さい土鍋を持って部屋に入ってくる。

「足で襖を……………行儀悪いよ?」

「しょうがないじゃない。両手が塞がっているんだし」

鍋ひきの上に土鍋を降ろし、指をパチンと鳴らしたフィオネの手の
ひらにお碗やら箸やら調味料なんかが出てくる。

「……………」

いやまあ、フィオネだってオレと一緒に普通ではないにしろ……つか、土鍋もそうやって運びなよ。

「運んでいる間も私の愛を注入しといたのよ」

「また心を読むんだよね!？」

もう何も隠し事が出来ないよこれじゃあ!

「何か隠したい事でもあるの?」

「……………ないです」

今、フィオネの視線に圧倒されたよオレ。

これじゃあ智春の事何も言えないなあ。

「それって劉ちゃんが私とそういう関係になってくれるって事!？」

また心を読んだフィオネは顔を迫らせ、オレに聞いてくる。

いやいやそうという訳じゃないよ。

「それに、顔が近い!」

本日二度目の注意にオレはため息が出る。

奏はすぐに退いてくれたし、フィオネだってすぐに退いてくれるだろう。

「う、うん。そうだね、ごめん」

フィオネも若干恥ずかしかったのか、顔を赤くさせながらオレから退く。

そしてお互いに少しだけ気まずい空気が室内に流れた。うっ、なんだかフィオネとの間にこっという空気が流れるのは慣れていないから対処に困る。

「あ、あゝ、さっきの話なんだけど。劉ちゃんはお嫁さんだから智春とは立場が違うんじゃないな？」

「いや、そういう問題なの!？」

空気を和ませようとしてくれたフィオネがオレに出した話題が最悪だった。

たしかに空気は和んだが、決してオレの心の中は和んではいなかった。むしろ涙の雨で満たされていき、荒れ狂いそうになる。

「まあそれは置いて〜」

そして勝手にオレの気持ちをどん底に落とした話題を置いとかれる。やっぱり智春の事言えないかもしれない。

ごめんね智春。

「さあさあ、これ食べて元気になってよ〜!」

お碗によそわれた卵粥を見てオレは感嘆の息をつく。

光の反射で綺麗に輝く卵粥は食欲をそそる香しい香りを放ち、オレの鼻腔をくすぐる。

部屋中に広がったその香りにオレの腹の虫は元気よく鳴る。

「あ、ありがとう」

実際こういう熱いものを食べる時は冷ましてから口に運ぶのが普通なのに、オレは腹が減っていたのもあってか、そのまま食べてしまった。

でも、それぐらいフィオネの料理には食欲をかきたてる物があつたのだ。

「そ、そうよね……このままじゃ熱いわよね……」

「フィオネ？」

急にオレに背を向けたフィオネは頭から湯気を発しながら呪詛でも呟いている様にぶつぶつ言い始めた。

その光景に恐怖を覚えながらもオレは何度か呼びかける。

「こ、これはしょうがないわよ　　っは！　え、つとお何かしら？」

我に返ったフィオネは額に尋常じゃない汗を浮かべながらオレの方に向き直る。

その様子は何かいけない事を思いついた子供が親にばれてしまった焦っているようだ。

「……何を企んでいるの？」

「べ、べべべべっつにい！　あ、これ熱いのよね？」

畳に置いたお椀を手に取り、オレに聞いてくるフィオネ。

「ま、まあそうだけど……」

そのわざとらしい様子に疑問を抱くオレだったが、その疑問を一旦心の奥底に押し込み、オレは答える。

すると、フィオネはスプーンで一口すくい、ふうふうとお粥を冷ましはじめた。
ま、まさか

「ふう、ふう……はい、劉ちゃん！……あ、あ〜ん……！！」

スプーンを持つ震える手を何とか押さえようとすするも、決してオレとは視線を合わせない様になっているフィオネ。

時折その熟れたトマト顔負けの真っ赤な顔を視線だけこちらにちらちらと向けてくるその様子にオレは鼓動が早くなっていくのを感じる。

「あえ？あ、ああ！う、うん……？」

それにオレもつられながら顔を赤くし、口を開く。

「あ、あ〜ん……もぐ」

口に運ばれたお粥は冷めすぎず、かといって熱すぎる事もない。

さつきよりも味は鮮明に分かるはずなのに、緊張と恥ずかしさでいっぱいのおれの頭は味を理解しなかった。

いや、出来なかった。

「ど、どうかな？」

「お、おおおいしいよっ！！」

首をかしげながら聞いてくるフィオネに反射的に答えてしまうオレ。ただ、オレの言葉を受けたフィオネは満面の笑みを咲かせて喜んだ。

「じゃ、じゃあたくさん食べてね！」

そう言いながらも次の準備にはいるフィオネ。

オレはその光景を見て前世で母親に子供のころ看病してもらった時の記憶を呼び起こす。

(まあたまにはこういうのも、いっか)

オレはどぎまぎしながらも、フィオネとの二人きりの時間を満喫したのだった。

第85話：たまにはいいよね。(後書き)

マ「感謝コーナー！ 光闇雪様、タケ様、畏無様、m a d a o様、
紅 幽鹿様、龍賀様、感想ありがとうございます！」

ゼ『お土産コーナーだ！ 光闇雪様からは、静岡茶（静岡県）、宇
治茶（京都府）、狭山茶（埼玉県）をそれぞれ3パック
キャスター達には劉の絵（写真と見間違うぐらい）が彫ってある湯
呑。

龍賀様からは、龍斗の女装写真（消滅不可）をアルバムで（9歳の
時の姿）と、禁書（10万3000冊の）、カロリーゼロのケーキ
をいただいた！』

瑠「すみません。作者の都合であとがきはここまでです」

マ「すみません！ ひたすら眠いです」

ゼ『感想をどんどんくれ！』

瑠「作者もきつと喜ぶから！」

マ「では、次回もよろしくお願いします！」

第86話：アタシの出番（前書き）

遅くなりました……！

眠気眼で約一時間半で書いたものなので、内容の崩壊、誤字脱字がかなり多いかもです……！

それでもいいと言う方だけお読みください！！

第86話：アタシの出演

フィオネとの二人きりの時間を過ごしていたオレ。

いつもならばオレのそばに居ようとする彼女の存在を皆さんは覚えてるだろうか？

そう。この時、オレは彼女にあるお願いをしていたのだった。

奏達が出かける前夜……。

~~~~~

「タマモ。明日は奏たちがUMAの調査に行くはずだ。オレの代わりにあいつらの護衛を頼めないかな？」

「了解です!」

本当ならこつそりと着いて行くはずだったんだけど、今のオレだと何も出来ないから今回はタマモに頼んでみる。

するとそんなタマモはオレに二つ返事してくれた。

さっきまで畳に寝そべりながらせんべいを食べていたのを止め、その場で正座をして。

「いや、何もそんなに気を張らなくてもいいからね？」

「いいえ。ご主人様マスターのお願い事です。しっかりとアタシはやり遂げ

て見せますとも!!」

オレのお願いを命令と変換しているのか、タマモは何故か目をキラキラとさせていて、黄金色をしたふわふわの尾っぽをふりふりと動かしてご機嫌な様子だった。

「……なんか機嫌がいいみたいだね？」

そのタマモの様子が気になったオレは、理由を聞いて見る。

「え？ だって久しぶりのマスターご主人様の命令ですもん！ 嫌でも張り切っちゃいますよぉ」

「でも護衛といつても、あくまで監視だからね？」

「はい！ アタシはしっかりと護衛しますよ！」

「いやまあ……監視」

「はいっ！ しっかりと護衛しますっ！」

「……うん。頑張ってるね」

「任せてくださいっ!!」

~~~~~

とまあこんな感じのやり取りがあったんだけど……。
大丈夫かな？

オレはすっかり見慣れた高月家の天井を見上げながらため息まじりに眠りにつくのだった。

s i d e o u t

s i d e タマモ

という訳でここからはアタクシ、良妻賢母の玉藻御前ことタマモが初のメインを務めさせて頂きます！

まあやっている事は、魔術で作り上げた幻影で自分の姿を隠して監視しているだけなんですけどね。

さてさて、早速土琵琶に来た科学部の皆さんは何やら分担して作業を行うみたいですね。

樋口という殿方は監視カメラ……でしょうか？

大量の監視カメラを一人で取り付ける作業を行うようですね。

なんと言いますか、お疲れ様です。

そして智春に関してはお使い……ですか。

何だかのんびりしてますね。

水中にその未確認生物がいるのなら、さっさと潜り込んで捻り殺しちゃえばいいのに……キャッ！ アタシったら何て大胆な発言！もう少し品を持った発言をしないと。

うーん、捻り殺すじゃなくて……ぶち殺す？ ブツ殺す？

どっちが正しいんでしょう？

「あれ？」

アタシがそんな事を考えながらもちゃんと監視していると、樋口、でしたよね。

ぎゃあああああああつ！！！！　つと、悲鳴を上げながらぬかるんだ斜面を転げ落ちていきました。

何だかあの殿方は間抜けで可愛そうな方ですね。

あれぐらいなら死なないでしょうが……まあここはご主人様マスターの護衛の命令もある事ですし、助けてさしあげましょうか。

「よつとー！」

アタシはその無様に転げ落ちていく樋口を華麗にキャッチして、転げ落ちた場所まで運んであげる。

「つつつ……き、君……は……？」

運んであげている最中、アタシに疑問の声を投げかけてくる樋口は……うん。

半分意識が飛んじやってますね。

そんな樋口をアタシはそつと抱きしめ……

「とつつ」

手とつで完全に意識を奪ってあげました。

「これでご主人様マスターに褒めてもらえますかね。いや、ナデナデしてもらつのもいいですね。」

アタシは自分のちつちやくて可愛い、だけど格好いい所もあるご主人様マスターがしてくれるであろうご褒美を考え、顔がニヤけてしまう。

「えへへ、えへへへへ」

何はともあれ、ご主人様はアタシの事を妻として迎えてくれるでしょう。

そう考えるとこの、ぶっちゃけどうでもいいほど冴えない見えて可愛そうな殿方を助けたのは無駄ではなかったということでしょうか。

あれ？ 皆さん少し勘違いしていましたか？

アタシがこの殿方に向けたのは好意ではなく同情ですよ？

ご主人様以外の殿方にアタシが好意を寄せるわけないじゃないですか。

「はい、とうちゃく〜く〜！」

元居た場所まで運んであげたアタシは樋口をその場に放り投げ、代わりに置いてあった監視カメラに目を向ける。

「ふむふむ。これを全部終わらせればいいんですかね？」

アタシはそのカメラをすべて抱え、一気に空中に放り投げました。

「さて、ちゃっちゃと終わらせちゃいましょうか〜！」

そして、その空中に放り投げたカメラの一つ一つを神力で操作的確な場所へと設置していきます。

この微妙なコントロールはアタシだから出来るので皆さんは調子に乗って真似なんかしないでくださいね

「よおっし！ これで完璧ですね！ あとは〜」

さっき放り投げたこの殿方を見る。

そこには意識を完全に失いながら表情を歪めている樋口の顔がありました。

……宿泊する貸別荘のドア前にも置いといてあげましょう。

「もう運ぶのはマジ面倒なので転移！」

殿方の額に触れ、力を放出。

すると、その場からは殿方は一瞬で消えました。

「まあ貸別荘に転移させといたので後はもういいでしょう。はあ、早くこんなご主人様マスターの所に帰りたいまあ………あっ………」

ご主人様マスターの所に帰りたい、この願いがアタシにある閃きを与えてくれる。

「アタシがとつととその未確認生物を成敗しちやえばいいんですよ〜」

そうと決まれば、夜にでも仕掛けましょうか。
待っていてください、ご主人様マスター！

「ついにきましたね……この時が……！」

何やら智春が樋口に巻き込まれて風呂を覗いていましたが……アタシには関係ないので無視です。

お風呂描写がなくて残念でしたね

「でもまあ、そしたらアタシとご主人様マスターの幸せなストーリーが見れるんですから我慢してください」

いったい誰に向けてのセリフなのか分かりませんが、とりあえず言っておきました。

「でもどうでしょうか。あまりこの湖には入りたくないですね」
だってお肌に悪そうだし、何よりこのふわふわな毛が痛んでしまうかもしれません。
湖に入らないで湖の中の未確認生物を退治………

「とりあえず、湖を蒸発させましょうか！」

胸元から十枚ほどの呪符を取り出し、神力を通します。

そしてそれらを湖の中に飛ばし、一気に神力を解放させました。

「呪相・炎天………スペシャルエディション」

瞬間、湖がどつと炎上しました。

これでその未確認生物とやらがあぶり出されるでしょう。

「~~~~」

「……でもこれって……いつになったら終わるんですかね……？」

かれこれ30分間くらい続けていますが、終わりが見えないんですけど……。

「はああ……おや、この気配は？」

何やら複数人……いや、人間が一人、悪魔が一人。これは巨乳娘オナモミだとして、あとは……人造人間？なんですかね？
それと幽霊が一人。
とにかく一斉にやってきましたね。

「それにしても、これはさらに面倒くさい事になってしまいましたね。どのくらい面倒くさいかっていうと、エロトぐらい面倒くさいです」

ふう、とりあえずこの炎は消しましょうか。

神力を解除して、今も湖を蒸発している炎を鎮火させ、煙も風を起こして飛ばす。

「この手際の良さだったらマスターご主人様も絶対にアタシを妻にしてくれ

ますよね!」

「あれ? た、タマモさん?」

つと、ご主人様との未来を考えていたら巨乳娘……奏ちゃんが来ちゃってみたいですね。

「どもども〜! こんな所で会うなんて奇遇ですね〜」

「えっ、あ、はい。あ、あの……どうしてここに……?」

「アタシですか? え〜つと、それはご主人様の……こ、コホン。散歩です」

「さ、散歩……ですか」

アタシは何とかご主人様の命令という事だけは伏せて、この娘に違う話題を振る。

「それで巨乳、じゃなかった。奏ちゃんは どうしてここに?」

「あ、えーつと、私はここから火が見えたので、皆さんと来たんですけど……」

「ふむふむ」

「それで、ここに来ながら近くに犯人がいるんじゃないかって話になって手分けして探しながらここに合流しようって……」

「なるほどっ。まあその犯人はアタシが成敗したので何の問題もありませんっ!」

……あれ? なんかすっごいジト目で見られてませんか?

この娘がこんな顔するなんて……!

「あ、あの、さっきの炎つてタマモさんのですよね……?」

そう言いながらアタシに疑問の視線を向けてくる奏ちゃん。

あちゃーさすがに分かつちやいますかね？

「え、えーっと……あ、あぁっ！！ あそこに例の未確認生物があつ……！」

「えっ！？」

気を逸らす為に、今この娘たちが欲している未確認生物の話題を無理やり出そうと、背後の湖を適当に指差すアタシ。これでアタシから目を離れた隙に一気に離脱を……

「あ、あぁっ！ 本当に……土琵琶湖怪物が！」

「はい……？」

何故かアタシの背後を指差し、驚愕の眼差しを向けている奏ちゃん。いったい何が？
そう思ったアタシもその指先を追うように背後へと視線を向ける。

「……………あ」

そこには……………湖には火傷を負っている竜？のような生物が浮いていました……………。

「……………テヘッ」

アタシはその場から神速で離脱した。

side out

side 劉

「はい？ もう一回言ってる？」

「えつとお、何で帰ってきたのかといいますと、ご主人様マスターが恋しくなったからで、いたっ！ わ、わかりましたっ！ ちゃんと申しますっ！！」

いきなり帰ってきたタマモがオレに向かって耳を疑うような事を言ってきた……。

「えつとですね、ちゃんと護衛していたんですけど、未確認生物をアタシが退治したら早いと思ひまして、焼いちゃいました」

な、ななな……

「何言っちゃってるのーっ!？」

オレはタマモにもう一度デコピンをして、いそいで携帯を手にとった。

連絡先は

「も、もしもし、智春!？」

『あ、劉? 風邪は大丈夫? 高月に聞いたんだけど、まだ』

「え? ああいや風邪は……って違う! UMAは!? ドビュッ

シーは!？」

『あーその事なんだけどね。なんか僕たちが行った頃にはドビュッシーの姿が無くなってたんだ』

「は、はあ?」

なんでだ?

タマモが焼き殺したんじゃないのか?

『高月がもう現場に辿り着いてたんだけど、ドビュッシーはすぐに目を覚まして湖の中に引き返したらしいよ』

「ひ、引き返した!? ……生きてるの?」

『みただよ。でも何で劉がこの話を? ……って、うわあ!!』

ごめん劉! 今から徹夜で搜索なんだ。じゃあね!』

智春からの通話が切れると一気に体から力が抜け、膝を着くオレ。

「……はあああ。い、生きてたのかあ」

それに今の電話の様子だと、奏はタマモの事は何も言ってないみたいだし……。

「ご主人様?」

「……なにさ?」

「え、え〜つと……」

オレからすうつと目線を外すタマモ。

第86話：アタシの定番（後書き）

マ「感想コーナー！！光闇雪様、紅 幽鹿様、空言天狐様、たまご様、畏無様、黒龍様、龍賀様、夜神様、感想ありがとうございます！」

ゼ「お土産は、光闇雪様からは、千羽鶴

紅 幽鹿様からは、マーボーにIS白式、劉に雷公鞭らいこうべん、瑠璃ちゃんと雫ちゃんにIS学園の制服

空言天狐様からは、フィオネに「病気になるにくい人に病気に似た症状を引き起こす薬」、劉に薬膳粥と普通のお茶。

龍賀様からは、タマモとフィオネに劉の写真（女装版＋普通版をアルバム2冊分）、劉にスペカ（鬼巫女の）を頂いた！ ありがとう！」

瑠「うっ……今回はここまでです」

マ「短くてすいません！ それとあとがきゲスト募集です！！」

キャ「まあその日の作者次第なんでいつ呼ばれるかは……」

マ「ではでは感想のほうもどしどしください！」

瑠「じ、次回もよろしくね！」

第87話：（キヤ）アタシの責任ですか？（劉）うん、そうかもねっ！！（前

今回はあとがきにゲスト様をお呼びしました！

そして、次回からのゲスト様は予約を頂いた順に招待させていただこうと思いますので、よろしくお願いします！

ちなみに予約は今のところ、七名様から頂いています。

皆様、たくさんのご予約ありがとうございました！

まだまだ募集は行っておりますので、お声をかけてください！

では本編、第87話はじまります。

第87話：（キヤ）アタシの責任ですか？ （劉）うん、そうかもねっ！！

「ああん、ご主人様マスター！ アタシも行きたいですう！！」

「え？ 本気で言ってるの？」

「はいっ！ ご主人様マスターと離れ離れなんて嫌です！」

「アンタ……土琵琶湖で自分が何をやったのか忘れたの？」

「うるさいですね、覚えていきますとも！ それよりも、貴方こそマスター主人様とイチャイチャしてたじゃないですかっ！」

「な、なんでそれを！？」

「アタシは、何ですか？」

「くっ……無駄にそんな力使えるんだからっ」

え〜つと、明日はいよいよオリ合宿。

結局あの後、土琵琶湖怪物が姿を現すことはなかったそうだ。

なんだかあの一件で警戒されちゃったみたいだ。

それと、湖からは原作通り機巧魔神の腕の残骸が見つかったらしい。アスラムキナ土琵琶湖怪物の力を知り、さらには警戒態勢をとっている事を考えた朱湮さんはオレに正式な依頼として力を貸してほしいと頭を下げてきた。

まあオレとしても、こっそりタマモの責任を取ろうと思っていたので快く承諾。

もちろん朱湮さんにはタマモの事は伏せといたけど……。

そんな事があって、一応戦力としてフィオネも連れて行くことと考えていたんだけど、そこにタマモも加わりたいたってきて、冒頭の会話が繰り広げられていた。

まあタマモがいれば無敵なんだろうけど……。

「でもさ、タマモの炎って朱湮さんに見られたんでしょ？ だったらタマモがまた炎天を使ったらバレるんじゃないかな？」

だって朱淫さんだよ？
ありえそうだから怖い……。

「心配しないでくださいマスターご主人様！ アタシにはほかにも術ありま
すからっ！！」

「そ、そうなんだけど……うん、まあ姿を隠してこく事を条件な
ら……いいかな？」

「や、やったああ！！！！ さっすがマスターご主人様！ ありがとっござい
ますっ！！！」

「んあっ？ うわああっ！！！」

同行を許可され、嬉しさのあまり舞い上がるタマモ。

いや、文字通り舞い上がっているタマモはオレにそのまま抱きつい
てきた。

「ああ、愛してますよ、マスターご主人様〜！！！」

「た、タマモ！？ む、胸！ 胸がっ！！！」

「え〜？ おっぱいが何ですかあ？」

顔に押し付けられる柔らかくも弾力のあるタマモの胸。

オレは慌ててタマモから離れようとするけど、何という事でしょう
……。

タマモさんは相変わらずの力の持ち主でした。

「む、胸！ 胸なんだよお、ぶがっ」

「だってわざとですもん！ さあさあ、思う存分堪能しちゃってく
ださいっ」

嬉々とした声色のタマモはオレを離そうとは微塵も考えていないら

しい。

そこでそれを見ていたフィオネが立ち上がる。

「ちよつとっ！ 何考えているのよー!!」

「それは貴方もですよ。アタシがない間に幸せな時間を過ごしちやつて！ 本当なら……お仕置き殺しちやつてますよ?ですよ？」

途端に部屋中を埋め尽くす、突き刺すように痛い殺気。

オレですら体の震えが止まらないほどのその殺気に、フィオネは冷や汗を流しながら乾いた笑いを浮かべる。

「あ、あはは………ごめんなさい」

「べつつにい、いいですよ？」

そして笑顔と共に殺気を引っ込めたタマモは更にオレを抱きしめる力を込めてくる。

「うぐ〜っ!!」

今のオレは完全にタマモの胸の谷間に埋まっている。

そしてそこは桃のようなイイ香りがして、気持ちもいいんだけど、酸素がどんどんなくなっていく。

あゝオレ、死ぬのかな？

「た、タマモ!! 劉ちゃんがつ!!」

「ん？ っマスターて、ご主人様!? マスターご主人様!!」

オレはその夢のような心地よさを感じながら、意識を失った。最後にフィオネとタマモの悲鳴を聞きながら……。

「ん、ん〜っ！ つはあ……朝？」

見知った天井。

まず目を覚ますと見る光景に、オレは半分起き上がり頭を描く。
昨日はタマモに……あーあれで気を失ったのか。

「はああ……ううっ」

その時の感触を思い出し、顔が赤くなるオレ。
こんだけ顔が熱いのは昨日のせいだ。
熱自体はすっかりと引いている。

「あれ……？」

そしてある事に気がつく。

いつもならオレの布団にいるはずのフィオネとタマモがない。

「なんで今日はいないんだらう？」

もう起きたのだらうか？

毎朝オレが起きるまでいるはずなのに……。

けれど、今朝に限っていない二人。

「うーん……あれ？」

そこでまた気がつく。

フィオネとタマモの二人はいないはずなのに、妙に膨らみを感じる隣の毛布。

あれ？　なんでオレ一人なのに毛布が二枚？

それに、枕も……二つ？

「……じくん」

オレは生唾を飲み込みながら震える手でその毛布を恐る恐る捲りあげた。

「んなっ！！　か、奏！？」

そこにはシルクの薄水色をしたパジャマに身を包み、気持ちよさそうにリズムよく寝息を立てている奏の姿があった。

触り心地がよさそうなシルクのパジャマを押し返そうとしているボリウムある胸が静かに上下に揺れ、見ていてるこっちにも眠気を誘ってくる。

普段は白く透き通るような奏の頬は、毛布を頭から被っていたせいか、ほんのりと紅潮していた。

「な、なんでここに……？」

夏に差し掛かるこの季節。

オレの額には次々と嫌な汗が浮き上がる。

が、これは季節のせいではなく、焦りから生まれた汗だろう。

夏といってもまだそこまで暑いわけではない。

「か、かなで〜?」

ゆっくりと、奏の肩をさすり起こそうとするオレ。

普段から寝起きの良さそうな奏はその動作だけで目を覚ます。

「あ……劉君、おはようございます……」

未だに眠そうに瞼を擦っている所を見ると、若干オレの中で罪悪感が生まれた。

「ご、ごめんね、起こしちゃって。それで……なんでここにいます?」

「え? ……え?」

オレの顔を凝視し、意識を覚醒させた奏は目を瞬かせながら自分の状況を確認している。

な、なんで? もしかして覚えてないのかな?

「あ……わ、私……つい……」

そして状況を確認し終えた奏の顔は見る見る赤くなっていき、同時に何か焦げるような匂いが部屋中に広がる。

「……って、奏!? 布団! 布団が焦げちゃってるよ!?!」

「私……私……!!」

「かなで……っ……!!」

オリ合宿当日の朝はオレの部屋で起きた軽いボヤ騒ぎから始まった

のだった。

「なるほど。昨夜、オレが気を失って騒いでいた二人の所に奏が駆けつけ、オレの事を介抱&二人を追い出した、ということ？」

「はい……」

登校中の車の中、いつもなら歩いて登校するはずなのだが、今朝は荷物が多いため車に無理やり乗せられたオレと奏とフィオネとタマモは、昨夜の出来事について話していた。

ちなみに二人は自ら与えられていた部屋で反省文を朝まで書いていたらしく、目の下には隈が出来上がっていた。

つか、自分の部屋で寝ればいいのにさ……って、これも毎度言っているが、返ってくる答えは決まっている為もはや何も言わない。

「それにしてもさ、なんで奏がオレと一緒に寝ていたの？」

「え……そ、それは……」

曰く、介抱してくれた奏は眠っているオレを見てると睡魔に襲われたらしく、自分の部屋から毛布と枕を持ってきて一緒に眠ってしまったそうだ。

一度自分の部屋に戻ったんならそのまま部屋で眠っちゃえばよかつ

たのに。
その事を伝えたら奏は真っ赤になり、自動車事故が起きそうになっ
たのは……言うまでもない。
でも……どうして真っ赤に？

「はああ。バスってどうしてこんなにも眠くなるんだろう……」

「うー、そうだねー」

「……大丈夫？」

土琵琶に向かっているバスの中、座席が隣である智春は目の下に隈
を作り、体中に傷がある状態で今にも眠りそうな欠伸をしながら答
えてくる。

どうやら探索調査ではかなりこき使われたらしい。

きつと中途半端に土琵琶怪物が目撃されたからだろう。

なんか……ごめん、智春。

眠そうな智春の頭をゆっくりと撫で、オレも寝る体勢を取ろうとす
る。

けど……

「あーっ！ 劉ちゃんが智春の頭を撫でてる！！ か、彼女、みた

い……！」

「なんでっ！？」

寝ようと思ったがオレは体を起こし、前の席に座っている杏に抗議
する。

なんでオレが彼女!?

「だって、劉ちゃん可愛いじゃんっ!」

可愛いって……。

でも、そんなオレにさらに追撃がやってくる。

「天道、貴方はもう少し自覚しなさい。このままじゃ夏目の彼女になるわよ?」

佐伯 玲士郎の妹、佐伯 玲子だ。

杏の席と隣だったのか、ひょこつと出す顔の仕草はとても可愛らしかったが、言っている言葉はどことなく呆れている感じがする。

「佐伯妹、それはどういう意味?」

「夏目もそうだけど、なんで貴方たちは私の事をそういう呼び方するのかしら?」

うつ……額に何やらお怒りマークが……。

「ねえ! どうしてかしら!」

「ぐ、ぐ、ぐごめんな、さい……」

もうこの世界線やだ……なんでこんなにも皆怖いのか?
隣の智春に視線を向けると……

「……ZZZZ」

こいつ、寝ているよ……!
いやまで。

きつとこれは狸寝入りかもしれない。

さっきまでは眠そうといっても起きていたんだ。

この殺気に近い禍々しいオーラを受けて寝れるわけない。

オレは智春の体を軽く攪る。

「くくぶつ。くくくつ」

お？

もう少し攪ってみるか。

「くくつ、くくくくつ……」

段々と震え始める智春の体。

オレはすっかり調子に乗って智春への攪りに力を入れる。

「あ、貴方たち……、私の話の最中に何をやっているのかしらあ？」

「ひいっ！」「ひいっ！」

……「うう、うう、ごめんなさい……って、最近のオレ、謝り過ぎ？」

「……疲れた」

合宿所の二階、二二二号室。

オレたちがこの合宿の間に過ごす部屋。
重い荷物を部屋に放り投げると、オレは中にある二段ベッドの上に
体を沈めた。

今日はこの後、写生大会が行われるため同室の智春と樋口、それに
根岸……だっけ？

三人ともジャージに着替えていた。

「劉も早く着替えないと遅刻しちゃうよ？」

「うん。面倒くさいから着替えさせて〜」

「な、なな何言ってるんだよ!？」

顔を赤くさせ、何故か慌てる智春を横目にため息をついたオレは着
ている制服の上着を脱ぎ捨て、ワイシャツのボタンに手をかける。

「お、おお!! 劉ちゃんの着替え……ドキドキするなあ!」

「だ、だよなあ! なんだか緊張するよなあ!」

うるさいよ、樋口と根岸。

それと智春もいい加減に戻って来い。

オレは嘆息しながらもワイシャツを脱ぎ捨て、ジャージの下に着る
体操着をカバンから取り出す。

「夏目、天道! いつまで私を待たせる気!？」

その時だ。

佐伯妹がオレ達の部屋に入ってきたのは。

すごい怒声を撒き散らしながら入ってきた佐伯妹はオレの事を見る
と目を見開き、顔を赤くさせた。

「な、何でこの部屋で着替えているのよ！　って、樋口！　貴方も何、カメラを構えているのよ！？」

「か、カメラ！？」

樋口……コロス。

「　　と、今はそれどころじゃなかったわね。夏目、それに天道早く来なさい！」

「えっ！？」

佐伯妹に無理やり引つ張られるオレたち。
つか、オレはまだ着替え終わってない！！

「あ、ああそうだったわね。早く着替えなさい！　私たちは先に行ってるから。」

そう言いながら智春を引つ張っていく佐伯妹。
それに続くように後ろを歩いていく『神聖防衛隊』の方々と操緒。

操緒さん、いたんですね……。

「はあ。あの二人、どこいったんだよ？」

智春のやつ、携帯部屋に置いて行ってるしさ。
画板を持って外を歩いているオレ。
一応二人を探しているけど……ダメだ。見当たらない。

「ご主人様！」^{マスター}

「ん？」

いきなり背後からの聞きなれた声。

タマモだ。

「ご主人様、例の未確認生物が出現しました」^{マスター}

「なっ……！！！」

未確認生物って事は、土琵琶湖怪物がか！？^{トビコウシ}

「ちっ」

原作の事を忘れていた。

たしかにこのタイミングで現れたっけか。
だとすると、そこに智春たちもいるな。

「フィオネ！」

「場所は掴んでるわ。すぐに転移するわね！」

タマモの幻術で一緒に隠れていたフィオネが姿を現しながら魔方陣を展開させた。

こういう時は対応が早くて助かる。

オレはその魔方陣に入り、フィオネに身を委ね、現場へと転移した。

「 一般の生徒を巻き込んでしまいかも この距離じゃ
「は!?!」

転移すると、最初に暴れるドビュッシーが目に入り、その横で智春と佐伯妹が言い合っている姿を見つけた。

何をしているんだ、あいつ等は。
オレが二人に近づこうとすると、佐伯妹が手に持っていたライフルの安全装置を解除して走り出した。

「本当に何をやってるんだよ……!!」

「 兇役のつもりだろうか?」

魔力を足に集中させ、身体強化をしたオレはドビュッシーに近づく佐伯妹に接近する。

「天道!?!」

オレに気がついた佐伯妹を無視して、佐伯妹の腰を抱きかかえる。

「ちよつ、天道!?!」

「劉!?!」

オレはその抱きかかえた佐伯妹を智春に投げつけた。

「智春! キャッチ!?!」

「えっ!?! うわっ!?!」

智春が佐伯妹をしつかりとキャッチしたのを尻目に確認したオレは、そのままドビュッシーへの接近を続ける。

「トレスオン」
「投影開始！ 血塗られた歴史！」

手に一つの禍々しいオーラを放つかつての裏切りの剣を投影し、ドビュッシーに跳びかかる。

オレの接近に気がついたドビュッシーは背中との接触を一斉にオレへと攻撃的に伸ばしてきた。

その独特な動きと速さにオレは一瞬動きを封じられるが、すぐに向かってくる幾つもの触手の中から突破口になる道を導き出す。

「ダブルアクセルターン」
「二重超加速！」

更に加速したオレは数ある触手の攻撃を避け、受け流し、薙ぎ払っていく。

その事に更に威圧的に睨んでくるドビュッシーは尻尾でオレを叩き落そうと、轟音を響かせながら攻撃してくる。

「なっ！！」

それをアロンドイトで防いだオレは、その圧倒的な力に負け、木々の中に吹っ飛ばされた。

「ぐっ……！！」
「劉ちゃん！！」
「ご主人様！！」

二人の叫ぶ声を聞きながら木々に叩きつけられるオレ。

そこに追撃するようにドビュッシーはもう一度尻尾を振り上げてく

る。

「　　ッ！　クリスッ！！」

魔力を通し、デバイスを起動させた。

瞬時に起動したクリスは剣の姿を形成し、アロンドイトとは違った威圧を放つ。

たしかな質量を感じさせるほどの轟音を鳴らしながらやってくるその尻尾を一閃。

するとその尻尾はまるで元々ついていなかったように簡単に斬れ落ちた。

痛みを感じているからなのか、その場を震撼させるほどの咆哮を放つドビュッシーの目には明らかかな殺意が見て取れる。

オレはその咆哮と殺意に負けじとクリスを手に接近。

「もう喰らわないよッ！！」

再びオレを薙ぎ払おうとする触手に向かって炎の魔力を纏わせたクリスで斬りつける。

炎を見たドビュッシーに動揺からなのか、一瞬の隙が生まれた。

そのまま炎でクリスの刃先を纏い、大きさを倍増させたその剣でドビュッシーを突き刺す。

悲鳴を上げるドビュッシーにオレは空いている左手を向け、魔力を圧縮させる。

「オレの魔力は悪魔なんかとは比べ物にはならないぜ、ロストチャイルドはぐれ眷属
！！」

そしてその魔力を唯ぶつけるだけ魔法とは言えない魔法を発動した。

「 エンドレス・ワルツツツ！！！！」

ぶつめた魔力は爆発し、瞬間、ドビュツシーは湖のほうへ弾き飛ばす。ドビュツシーは木々をバキバキと音を鳴らしながら吹き飛び

「はあ、はあ………」

そして、湖へと大きな水飛沫を上げて沈んでいった。

「ふう、とりあえず……大丈夫？」

「りゅ、劉！！ 体は大丈夫なのか？」

『劉ちゃんすごいね〜！ ……それに比べ智春は……』

オレに駆け寄ってくる智春と操緒。

心配返し？をされたオレは操緒にジト目で見られる智春に苦笑しながら返す。

「オレの方は平気だよ。ただ……佐伯妹は？」

「気絶しちゃってるよ。神聖防衛隊がもう連れてった」

「気絶？ まあいつか。それより早く湖のほうへ行かないと」

今のでドビュツシーは戦闘不能になっているはず。

だったら早く捕獲した方がいいだろう。

智春を促したオレは湖に向かおうとする。

「ちょっと待ちなさい！」

「……誰 ツ！！」

が、それはプロレスのマスクらしき物を被った一人の女性に阻まれてしまった。

これって……

「由璃子さん、ですよね」

「ち、違う。アタシは土琵琶湖の平和を守るために遣わされた正義の使者！」
ドリンマスク

「やっぱり本物を見ると……アホっぽいね」

由璃子さんに確認をとっていた智春はア、アハハと乾いた笑いを漏らす。

まあそういう反応になるか。

オレは再び由璃子さんに視線を戻すと、当の由璃子さんは智春の事をさっきまでとは違った視線で睨んでいた。

「ねえ。その娘……だれ？ この前のFの娘はどうしたの？」

そして何か勝手に誤解をし始める由璃子さん。

もしかしてまた女の子と間違われてるのかな、オレ？

「い、いや。劉はそういうのじゃなくてですね！」

由璃子さんから只ならぬ気配を感じた智春が汗を掻きながら否定しようとする。

けど、その否定の仕方は余計に誤解を与えようと思っなあ。

『トモ智春、その言い方は逆に誤解を招くよ？』

ああ、やっぱり操緒もそう考えていたんだ。

オレはその横ですっかりと傍観者として二人の事を見守る　と見せかけて、二人の事を見ながらゆっくりと湖へ向かおうとする。

「 させないわよッ! 」

その声とともにオレに向かってくる青白い稲妻。
オレに気がついた由璃子さんが飛ばしてきた物だ。
いきなり悪魔の力って……。

「 まあ別にいいんだけどさ 」

「 はい? え、ちょっと!? 」

その稲妻を難なくクリスで叩き斬ったオレに対して絶句する由璃子
さん。

そんな彼女を無視してオレは湖へと向かった。

第87話：（キヤ）アタシの責任ですか？（劉）うん、そうかもねっ！！（後

マ「さっそく感謝コーナー！」

キヤ「え〜つと、メガネ様、光闇雪様、毬藻様、畏無様、夜神様、
Arishia様、紅 幽鹿様、月光閃火様、黒龍様、龍賀様、空
言天狐様、感想ありがとうございます！」

劉「続きまして、お土産コーナーです」

ゼ「光闇雪様からは、タマモにお灸セット。

紅 幽鹿様からは、マーボーに賊刀「鎧」（ゾクトウ・ヨロイ）、
劉に斬刀「鈍」（ザントウ・ナマクラ）、瑠璃に【否定姫】のコス
プレセット、雫に【鑢七実】のコスプレセット（レプリカの悪刀「
鏢」（アクトウ・ビタ）もある）、タマモに炎刀「銃」（エントウ・
ジユウ）を頂いた。ありがとうございます！」

フィ「さてさて、今回はゲスト様がいらっしやいます！」

マ「この度は皆様からのお声があつて、大変嬉しく思っております
！」

ク「まあ順番通り呼ぶから来なさいよ」

キヤ「な、なんて態度でしょうか……！」

雫「えつと、ではゲスト様の紹介です。メガネ様の作品『魔法少女
リリカルなのは〜ある転生者の新たな世界〜』から、コダイさん
と、レイさんが来てくださいました」

コ「久しぶりだな」

レ「お邪魔します！」

劉「いらっしや　って、ええッ!？」

マ「こりやまたずいぶんと……女性らしくなったなあ」

コ「ん？　今回は大人しめの服装にしてみた」

フィ「まあ女装だけどね」

キャ「もう女性じゃだめなんですか？」

コ「あくまでオシヤレだからな」

劉「なんでそんなに割り切れるの？」

コ「ん？　そうだ。今回は劉に俺が直接弁当を食べさせにきたんだ」

フィ「あ、そうだったの？」

レ「早起きして作ったんだよね！」

劉「あれ？　なんか流された……？」

ク「本当に女性……いや、お嫁さんみたいね。　　ってもしかして、

敵!？」

ゼ『今頃気がついたのか』

雫「????」

コ「ほら、あーん」

劉「え？ あれ？ た、食べるの？」

コ「劉は最近大変そうだからな」

マ「ああそうなんだよ……」

レ「頑張つて！」

劉「それとこれは関係ないでしょ!？」

雫「ど、どきどき」

劉「雫はなんでそんなに顔を赤くさせてるの!？」

雫「あ、あう……」「ごめんなさい……」

劉「い、いや、そんな責めているわけじゃないから……」

コ「あーん」

劉「こ、コダイ君はまだやってたの!？」

フィ「もう食べちゃいなさいよ」

レ「ほーらっ！」

劉「う、うう……あ、あーん」

コ「どうだ？」

劉「もぐ、もぐ……ん。お、おいしいよ」

コ「そうか。じゃあ、こっちも」

劉「ま、まだあるの！？」

レ「さあどんどんお食べー！」

ゼ『レイが食べさせているわけではないだろう……』

ク『関係ないわよ』

キヤ「照れてるご主人様マスターもイケメン&可愛いですねっ！」

コ「ほら、あーん」

劉「あ、あーん……もぐっ……おいしいよ」

コ「だったら作ってきてよかった」

劉「うう……コダイ君ってさ、男の子だよね？」

コ「ああ男の娘だぞ」

レ「男の娘だよな」

フィ「劉ちゃんもだよな？」

劉「ん？ そうだよ、オレも男の子だよ？」

ク「……………」

マ「んー。この不思議空間は……放っておこう」

ゼ「で、では今回はこの辺で」

キャ「感想どしどしくださいね」

マ「メガネ様、コダイ達にはタマモが作ったチョコケーキを持たせますんで！」

雫「皆さんでお食べください」

マ「じゃ、次回も『どうしてこうなった？！神による転生者の輪廻物語』をよろしくお願いします！！」

コ「まだまだあるからな」

劉「う、うう…………コダイ君、笑顔は、反則だよお…………」

「可愛いね」

「ママ、もうお前ら全員可愛いよー！ー！ー！ー！」

「フィ、作者がこの不思議空間にやられたわね……」

第88話：最終決戦！？ VS 土琵琶湖怪物（ドビュッシー）！（前書き）

長らくお待たせしました！

今回は自分の我が儘でゲスト様の招待は行いません。

次回、絶対に招待させていただきますので、その際はよろしくお願
いします！

では、第88話はじまります。

第88話：最終決戦！？ VS 土琵琶湖怪物（ドビュッシー）！

「……ま、また逃した……」

夜。

オレはフィオネとタマモ、智春と操緒で集まって、今日の事を話していた。

あの後オレが湖に向かうと、土琵琶湖怪物ドビュッシーはまたもや見つからず、取り逃がしてしまう。

ホント、なんて生命力だろう……。

殺す気はないけど、あの状態で逃げるとか考えられない。

オレはベンチに座っている智春の事を見下ろす。

「ん？ どうしたの、劉？」

オレの視線に気がついた智春が首を傾げてくる。

その様子におレはため息をつきながら背後にある湖へと振り返った。この湖の中のどこかに土琵琶湖怪物ドビュッシーはいる。

明日には一般生徒も湖でレクリエーションを行うはずだから、明朝までが退治可能な実質のタイムリミットとなる。

たぶん、今回の智春たちは正直役には立たないかもしれない。

朱湮さんもきつと……。

だとしたら、オレが本気を出すしかないのかな。

「劉……！」

と、オレが考え事をしていると、智春が呼びかけてくる。

ん？ と返事しながら振り返るオレに智春は立ち上がって、両肩を

掴んできた。

そしてオレの目を真剣な眼差しで覗き込んでくる。

「ぼ、僕も頑張るからっ！」

「……………え？」

いきなり大声で宣言してくる智春。

フィオネとタマモが目を丸くして呆気に取られてるのが尻目に分かり、頭上では操緒が苦笑していた。

「あ、あの……………な、何が……………？」

「土琵琶湖怪私物の事だよ！ い、いつも僕は劉に助けられてばかりで、きよ、今日だって助けてもらって……………」

「う、うん。まあ、そうだね……………」

顔を近づけながらオレに必死に伝えてくる智春。

その気迫に押され、オレの頬には一筋の冷や汗が伝う。

ちらつと操緒を見るが、両手を合わせて合掌してくるだけ。

何？ オレは智春の話に付き合えばいいわけ？

「だ、だからねっ！ ぼ、僕も……………僕も今度は劉を護れるように、頑張るから……………！」

「そ、そっかあ！ じゃあ次は……………よ、よろしくね？」

「う、うんっ！」

智春はオレの返答に納得したのか、肩を掴んでいた手を離してくる。

まあオレの事を思ってたの事だから悪いことは言えないけど、今回はさっさと終わらせよか……………って、フィオネとタマモが智春の死角から……………。

夜の土琵琶湖に智春の悲鳴が響いたのはお約束だ。

「で……なんでオレまでこんな所に……？」

ただいま智春と操緒とオレ、実質男二人で反省室に入られている。原因は担任の柱谷先生が何者かに襲われたのが原因らしい。まあ犯人は既に分かっているんだけど……。それでも柱谷先生が気絶している今は、オレ達が何を言っても意味がない。

『しょうがないよ。フィオネさんや、タマモさんが先生に見つかるのはまずいでしょ？』

「いや、そういう意味で言ったわけじゃないんだけど……」

狭い空間で男が二人って……もう少し配慮してくれてもいいんじゃないかな？

思わずため息が漏れるオレに、智春が明るい口調で、

「まあ一緒に入るのが劉でよかったよ」

「え？ それ本気で言ってるの？」

なんか最近、智春と一緒に居ると悪寒が走るんだけど……気のせいかな？

オレが背筋を走る悪寒に疑問を抱いている間、智春は笑顔でオレの事を見てくる。

……き、気のせいだよな？

『それで、これからどうするの？』

「そんなの？ 鐵で」

「こんな狭い所で出すの？ オレ達潰れちゃうよ？」

そう。

今、オレ達が入られている反省室。

部屋とは名ばかりで、実際は本当に狭い牢獄のような所だった。豊何豊かの部屋で周りはレンガでコーティングされている。

「あつ……」

智春はようやく気がついたようで、自分の作戦がどれだけ考えなしだったのかと嘆きながらオレに謝ってくる。

「まあしばらくはここに居る事になるかもね。でも朱涅さんかフィオネ達が助けに来ると思うからさ、もう少しの辛抱だよ」

オレは原作の事を思い出しながら智春に告げると、目蓋を閉じる。

『あれ？ オちちゃん寝ちやうの？』

「そうだよ。たぶんここから脱出したら土琵琶湖怪物ドレコッシューと最後の対決が待っているからね。それに備えて体力を温存しとかないと」

『あーなるほどね』

「え？ 最後の対決？」

操緒は一発で理解したようだが……理解していない智春がオレに聞いてきた。

オレは微かに目蓋を開け、智春に

「だってそうでしょ？ 明日、一般生徒が湖を使っただよ？ とう事は、タイムリミットは明朝。チャンスはあと一回」
「あ、ああ！ なるほど！」

理解した智春が感心したような眼差しをオレに向けてくる。

いや、普通に考えたら分かるでしょ……。
心の中で智春でツツコミをいれたオレは、土琵琶湖怪物との対決に備えて、今度こそ眠りについた。

オレは夢を見ていた……。

いや 見ている。

不思議な事に、これが自分の夢の中だと自覚が出来る。

普通なら自覚なんてする暇もなく、目を覚ましたりするもんだけど。何故かその日だけは、自分の夢の中で意識を保っている。

「それに、ここは……」

そして目の前に広がる光景は

「なんだよ……これ……」

見た事もない真紅の機巧魔神。

それと戦うオレは防戦一方で……。オレの攻撃はすべて見破られていた。

相手から発せられる声。

顔はぼやけていてよく見えないが、ソイツが発する声がオレの鼓膜を刺激する。

「あ、あいつは……」

「それで、何でここに集結しているの？」

オレが目覚ますと、狭い部屋の中に朱湮さんと奏、フィオネ、タマモが加わっていた。

「なによ。せつかく助けにきてあげたんじゃない。それとも劉ちやんには不要だったかしら？」

朱湮さんがオレに妖しく囁いてくる。

「別に不要とは言っていない。ただ、態々入ってこなくても良かったんじゃないかって話だよ」

「それじゃあご主人様マスターの寝顔が見れないじゃないですかあ！」

「そっちが目的なのかよ!？」

『まあ私は、劉ちゃんの寝顔は録画済だけどね』

そのデータは後で消去だな。

今更始まったわけじゃないクリスの奇行は放っておき、今見ていた夢を思い出す。

「『実際はこんなものか』かぁ。……オレの事を知っているヤツだよな……」

顔は見えなかったが、声の感じから相手が男性だという事は分かった。

それに見た事もない機巧魔神を使役していたって事は十中八九転生者だろう。

ただ問題が一つ。

なんでああも簡単にオレの攻撃が全部よまれていたんだ？

「……劉?」

「ん? ああごめん。これからの作戦だったね」

智春に呼ばれ、気を取り直したオレは朱湮さんの作戦に耳を傾ける。

「で、作戦なんだけど……劉ちゃん!」

「は、はいっ!」

朱湮さんが獲物を見つけた獣のような鋭い眼光でオレに指を指してくる。

つか、オレの事をちゃん付けですか……。

「敵の捕獲は貴女に一任するわ！」

「全部オレまかせかよっ！！ それに貴女じゃなくて貴方だろ！？」

「あらあ。よく分かったわね」

「何故だろうね。自分でも分かりたくなかったって思うよ！」

もちろん援護はするわ、と朱涅さんが付け足す横で、操緒が口元を押さえてプルプルと身体を震わせている。

さっきの貴方と貴女の違いの事だろう。

何も笑うことないじゃんか。

「じゃあ、そういう事だから後は頼んだわよ」

朱涅さんがオレの頭を撫でながらウィンクしてくる。

たしかに、今回はオレが頑張らなきゃとか思ってたけど、改めて考えると……

「なんか納得いかない……」

まあある程度の援護はしてくれるみたいだから、それに期待しようか。

「それと、華島 由璃子の件だけど」

「本名は柱谷由璃子、柱谷先生の奥さんよね？」

朱涅さんの言葉を遮って得意げに話すフィオネ。

いつのまに調べ上げたのか、フィオネはそのまま話し出す。

「貴方たちが前調査で見つけ出した機巧魔神の腕は、洛芦和高校第一生徒会の前会長が使役していた藍銅という機巧魔神の物。その藍

銅は前にこの土琵琶湖である一人の悪魔と戦った記録があった。その時の戦った悪魔ってというのが、当時の柱谷 由璃子……でしょ？」
フィオネの挑発めいた視線を受けた朱湮さんはむっと頬を膨らませると、拗ねたように顔を横に向けながら肯定する。

「そうよ。貴女がいつたいたいという経路で情報を得たのかは後にして。柱谷 由璃子、旧名は華島 由璃子。華島は悪魔の一族の中でも高月家と並ぶくらいの名家で、後継者の事で少し争いがあったの。その時の抗争に巻き込まれた華島 由璃子は柱谷の実家に養女として預けられた」

朱湮さんはそこで一拍置き、また口を開く。

「その時には既に洛芦和高校の教師をやっていた柱谷先生はやってきた由璃子の事を公私共に面倒を見てあげた」

「あとはドラマみたいな感じですね 教師と生徒、義兄と義妹の関係であつても、二人の間に愛情が生まれ、結ばれた。」

朱湮さんの話の途中でタマモが割って入る。

その事に、朱湮さんはまたもや拗ねてしまった。
この人は本当にこういう所が子供っぽいと思う。

「それで今回の話とはどう繋がるの？」

智春が首を傾げながら疑問を口にする。

「うん。今回のターゲット、土琵琶湖怪物の正体ははぐれ眷属ラストチャイルドなんだ」

「戦っている時に劉が言ってた……でも、それってどういう意味な

の？」

オレが智春の疑問に答えてやる。

しかし、智春はそのはぐれ眷属自体が分かっているため、一層困惑し始めた。

「えっと、契約者である人間と悪魔の間で生まれた子供はドクターっていうんだけど、親から見離されたドクターの事をはぐれ眷属って呼ぶんだ」

オレの言葉にうんうんと頷く智春。

「だから今回の土琵琶湖怪物は悪魔である由璃子さんと契約者の柱谷先生との間のドクター。それが何らかの理由で見放されて、はぐれ眷属になってしまったわけ」

「な、なるほど！」

やっと理解したのか、智春はポンと手の平に拳を乗せて理解を示す。

「それで土琵琶湖怪物の事はオレに任せるとは言ってたけど、その土琵琶湖怪物をどうやっておびき出すんだ？」

オレは朱湮さんに目を細めながら聞いてみる。

そのオレの挑発のような視線に朱湮さんは笑みを零しながら、樋口を呼ぶ。

すると、朱湮さんたちがこの部屋に侵入してきた入り口から何故かポロポロになっている樋口が顔を出した。

「ひ、樋口……どうしたのさ？」

「あ、ああ劉ちゃん……それがよお、女性連中がこの狭い通路で暴

れやがって……」

直後、フィオネとタマモが樋口に軽く人を殺せそうな眼差しを向ける。

「私たちが暴れた？」

「それは違いますよね？ 貴方が私たちの体に触れたのが原因じゃないですか！」

「それこそ誤解だ！ だいたい、こんな狭い通路なんだぞ！ わざとじゃないっ！ 劉ちゃんも何とか言っつけてやってくれえっ！」

樋口が涙目でオレに助けを求めてくる。

そっか……わざとじゃないのなら………いやまて。

「ほら、樋口はこういうヤツだから、仕方ないだろう？」

オレは自分出来る限りの笑顔でフィオネとタマモに言い聞かせる。その二人はオレの顔を見た瞬間、頬を紅潮させて俯いた。

「りゅ、劉ちゃん……その誤解の解き方は……」

「ん？ 何かな？ オレが授業に遅刻した事を女の子の日だからとか言ってくれた人」

「あー」

樋口が額に玉のような汗を浮かべながらオレから視線を外す。

オレはそんな樋口の様子がおかしくて、「まあ今はもういいから」と笑いを堪えながら付け足し、土琵琶湖怪物をおびき出す作戦を聞き出した。

「は、はあつ？ 土琵琶怪物は巨乳好き！？」

智春が樋口の話に心底呆れたような言葉を漏す。周りを見てみれば、朱湮さん以外は皆呆れていた。奏だけは顔を真っ赤にして狼狽えていたけど。

「そんなのお前の趣味だろ？」

『ま、まあまあトモ落ち着いて』

操緒が必死に智春を宥める。

まあ智春の気持ちも分からないでもないけどね。でもこのままじゃ話が進まない。

そんな樋口に代わって、オレがその場を仕切る事にした。

「智春落ち着いてよ。オレだって信じられなかったけど、この事はデータが証明してるんだ」

「あれ？ 劉ちゃんにこのデータって見せたっけ？」

オレに横やりを入れてくる樋口に「黙れ」と視線で射貫く。まったく。せつかく人が話を進めようとしているんだからおとなしくしていてほしい。

「今まで土琵琶怪物に襲われた班。覚えている？」

「えっと、あの時劉が助けに来てくれた時の事だよね？ たしか男女混合の班だったような……」

智春が必死に頭の中でその時の事を思い出している。その頭上で、操緒が「分かった！」と声を上げた。

『たしかあの班の中には胸が大きい娘がいたよね！』

「そ、そだったか？」

操緒と智春のやりとりに、オレは「そうだ」と続ける。

「あの襲われた班の中で共通していた、女子生徒がみんな巨乳だったって事。胸が控えめな」

「そうっ！ 何を隠そう貧乳の女子生徒がいる班は見向きもされていなかったんだっ！」

そこでまたもやオレの話に、復活した樋口が割って入ってくる。しかも言い方が最悪だ。

『…………樋口、サイテー』

操緒が樋口の頭上で祟ろうとハンドパワー？とか言いながら手をワキワキとさせる。

「ま、まあ言い方はアレだけど。土琵琶湖怪物は、その胸が控えめな生徒がいた班には興味がなかったみたいなんだ」

オレが何とか取り繕うようにして話を進める。

「じゃ、じゃあ、誘き出すのって…………」

「うん。智春が考えている事は概ね合っていると思うよ」

そこで一端口を閉じ、奏と智春に交互に視線を向ける。

「智春と奏に土琵琶湖怪物の囿役をやってほしい。イチヤイチャしているカップルに偽装してね！」

「はい」

痺れを切らしたのか、クリスが口を挟んでくる。

「わ、分かったよ。囧はオレと奏。智春は？鐵の召還準備を頼むね」
「はいはい！」

元気に返事をする操緒の傍ら、

「はあ。僕と一緒になのはそんなに嫌だったのか……」

体育座りで涙を流している智春がいた。

「劉君、あそこのベンチに座りませんか？」

「あ、ああそうだね」

オレは忘れない。

あれから作戦を執行する際に、この部屋を空にするのはまずいと気づいた面々が、樋口をフルボッコにして部屋に置き去りにしてきた事を。

その時の女性連中は、さっきの樋口の発言に怒りを覚えていたのか、相当力を入れていたような……。

「どうかしましたか？」

奏がベンチの前で突っ立っているオレの顔を心配そうに覗き込んでく

る。

「いや、何でもないよ」

「も、もしかして……劉君の作戦を聞かなかった事……怒ってますか……？」

奏がまたもや涙目でオレに聞いてくる。

だからその顔はやめろって。

「その事じゃないよ。ただ……樋口が可哀想だったなって……」

「あー」

奏がその時の事を思い出したのか、少しばつが悪そうにする。

何を隠そう、この奏さんも樋口フルボッコに参加していたお方である。

「ごめんなさい……」

「まあ、あんまり気にしなくてもいいや。元はと言えば、アイツが悪いんだし」

『そうね。あの坊やのせいなんだから気にしてもしょうがないわ』
「はい、クリスさん」

クリスの言うことに素直に従う奏。

奏にとってはクリスは小さい頃から面倒を見て貰っていた存在で、お姉さんみたいだと言っていた。

まあその事は別にいいのだけど、その立場を利用して変な事を吹き込むのはやめてほしい。

『それで、こうしてアンタと劉ちゃんがイチャラブしていればあの怪物は現れるのかしら？』

「はぐれ眷属ロストチャイルドな。……まあそのはずだよ」

原作ではね……と心の中で付け足すオレ。

『でも、イチャラブとは具体的にどうするんだ?』

ゼロがオレ達に聞いてくる。

「ん、何をすればいいんだろうね」

『あらあ? 劉ちゃんならナニをすればいいのかわかってるんじゃないの?』

「う、うるさいっ」

「な、ナニ……ですか?」

『奏、女性がそこで反応をするんじゃない』

こっちがわざと考えないようにしていたのに。

これだと意識しちゃうじゃないか。

「こ、こほん!」

オレが頭の中で生まれかけた煩惱を追い出そうとしていると、奏が咳払いをする。

「あ、あの……膝枕………しませんか?」

「はへ……?」

奏の急な申し出にオレは間抜けな声を出してしまっただが、奏は慌てて理由を言い出した。

「え、えっと、これもはぐれ眷属ロストチャイルドを捕獲するために……ですっ!

……ハツ……はぐれ眷属……」

ロストチャイルド

理由を言い切ったと思ったら、今度は落ち込み始める奏。
きつとはぐれ眷属ロストチャイルドの事を気にしているんだろう。

奏は悪魔ということには敏感だ。

もしかしたら、何でドーターを見放したのか？ どうしてそんな無責任な事をするのか？

なんかを考えているのかもしれない。

「奏……そ、そうだ！ 膝枕、してくれるんでしょ？」

「え？ は、はい」

奏の返事を聞きながら、オレは太ももの上に頭をのせる。
何でだろう……すっごい落ち着く。

「ふふつ。劉君、子供みたい」

奏はオレの頭をそつと撫でてくれる。

その奏の手つきは、更にオレの事を安心させてくれた。

さて、この作戦で土琵琶湖怪物トビウバコは釣れるかな？

第88話：最終決戦！？ VS土琵琶湖怪物（ドビュッシー）！（後書き）

マ「どうも〜！ おまたせ？しましたあ！ 88話ですー！」

キャ「まあ誰も待つてはいないですけどね」

瑠「ええ、そうなの？」

雫「悲しいですね」

マ「だよなあ」

フィ「ほら、二人ともこんな作者にのらないの」

瑠・雫「はい」

マ「ひどい……」

フィ「じゃ、感謝コーナー行くわよ〜」

ク「神夜 晶様、光閻雪様、畏無様、メガネ様、紅 幽鹿様、Ar
isha様、夜神様、黒龍様、地海月様、毬藻様、感想ありがと
うございました」

ゼ「お土産は、光閻雪様からは、劉が未だに女の子と間違われる件
についてレポートを100枚。

紅 幽鹿様からは、マーボーに絶刀「鉋」（ゼットウ・カンナ）、
千刀「？」（セントウ・ツルギ）、微刀「釵」（ビットウ・カンザ
シ）、劉に宝具・串刺城塞、瑠璃に【カスイクル・ベイありす】のコスプレセット、

雫に【アリス】のコスプレセットを頂いた。ありがとう!」

マ「さて、本来ならゲスト様をお呼びするはずでしたが……」

キヤ「この駄作者が限界みたいなので、今回はお呼びしませんでした」

フィ「皆様、ゲスト様、申し訳ございませんでした」

瑠「残念……」

雫「本当です……」

マ「うっ……!」

フィ「まあこんな作者は放っておいて」

ゼ『感想の方をよろしくな!』

ク『どんな感想でもいいから頂戴ね!』

マ「そうですね。アドバイスなんかも随時募集していますので!」

瑠「よろしくお願いします!」

雫「では、次回の『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』もどうぞよろしくお願いしますね!」

マ「お願いします!……!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6011o/>

どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語

2011年11月10日00時54分発行